THE KAIZO

改造

十一月号

1923



改造　十一月號　目次



(十一月號)

國務進行と國務鑑識

國務の進行に對して我國民の鑑識力のないことは世界中で第一番であることは、誰でも認識して居る處だ。

たとへば、今回の復興計畫に對しても、その資金を外債によるべきか、內債によるべきか、ただしは非常增税によるか、此點に對しても我國民の多くは政府の施爲に放任して顧みず自已が當然負擔すべき重大なる責任であることさへも知らぬ顏なるは呆れて物の云ひやうもない。

從つて大震災による失業問題の如き分科的徑路に這入つたものに對しては國民多數の智識は殆ど零であることは、我が國民が國務の鑑識力が全然零であることを示す寒心すべき事實ではあるまいか。帝都及橫濱、その他に於て約十六萬の同胞が職を失し、飢餓に迫れる家族數十萬を擁して帝都の冬に泣いておるのも知らぬ顏である。政府は總理大臣の諭告に責任を感じて保險會社に一割見當の支拂を慫慂して當面の急を糊塗せんとの意嚮なるやに見らるゝも、失業者が之によりてどの程度に救濟さるるか、ただしは、その支拂によりて一般金融が緩和され、一般民心がどれだけ落ちつくかは疑問とせねばならぬ。

政府當局が當面緊須の本問題にどれだけの根本諒解があるか、その諒解にして缺くる所あれば、いかに事業資金を融通し保險支拂に或種の保障を與へたればとて、罹災者を幸福への道に導き得ないであろう、殊にその復興資金の負擔發日に於て一歩を誤らんか、多數の農民は鼓を鳴らして一齊に政府に當るであろうことを豫測せなくてはならぬ。只今では空前の天災に對し、そして生死の淵に當面せる數百萬の人々を直前して萬事が控へ目なるを思はなくてはならぬ。

しかしながら、罹災者でない多數の國民はその自已の與らざる負擔なりとして、增税その他に對する或種の增加率を忌避せんとするの心あらばそは以ての外の心得違ひである。國民として同じ苦酸刻苦を經てこそ偉大なる國民、異常なる國家としての進展も期し得るものであることをも知らればならぬ。

普選問題でも、無政府主義、社會主義者等の暗殺でも當然國民の總てが關與すべき重大事であるに拘らず人ごとのやうに看過し、成行に一任しておるのは一面、自已の權利、自已の利益を無視する行爲であり、矧いては社會國家の成敗をも顧みぬものである。

國務の進行に關して國民の批判力が正當であり、合理的になるに依つて國家としての進歩を見らるるそして我々が合理的、道德的合法的に行爲するによりてのみ人類としての幸福なる世界を現前し得るのである。然るに現在の如く當局のなすままに、世評の傳ふるままに無意識に、無批判的に動いて居ては當面の復興も、建設も、普選も、人權蹂躙も永遠に合理的解決が出來ないであろう。それが爲めに蒙る國民の不祥事其總ての責は國民自身が當然負ふべきものである。



復興經濟の第一原理

福田德三

(一)

此度の大災による損失は、八十億、百億、或は二百億などゝ稱せられて居る。統計局に於いては、嘗て國際聯盟からの要求に應じて作成した『戰前戰後に於ける國富統計』(大正十年十月刊行)(日本全體の富の總額を大正八年に於いて八百六十億圓と計上したもの)を基礎とし、其の推算方法に準據し、各項に就て火災による損害高を推算す可く、目下其調査を急行中なりと聞く。新聞紙に散見する所では、大藏省は、逸早くも其調査なるものを公表して、損害總額約百一億圓なりとしたそうである。即ち十月九日夕刊の時事紙の記する處左の如し。

大震火災の損害見積總額約百一億圓　(大藏省の調査)

今回の大震災に伴ふ損害額の正確なる見積りは極めて至難のことであつて殆ど幾百十億圓に達するか見當がつかぬ爲め英米等の各市場に於ては今回日本の蒙つた損害を或は二百億圓と傳へ或は三百億圓と傳へ種々我國に不利な宣傳も行はれて居るので大藏省に於ては過般來信憑し得べき損害額の見積調査を始めてゐたが最近漸く確定數を得るに至つた。卽ち大藏省の調査に依ると今回の震災に伴ふ官民損害高見積概數は約百一億圓であつて其の内容は左の如くである。(單位千圓)

表の

區分	戸數	家屋	家財	商品	計
東京市	六三八、五二五	三、八三一、一五〇	九五七、七八七	二、〇〇〇、〇〇〇	八、一五八、九三七
東京府	三四四、五六六	六八九、一三二	八六、一四一	五、〇〇〇	七八〇、二七三
橫濱市	九三、五一〇	四六七、五五〇	一一六、八八七	二〇〇、〇〇〇	七八四、四三七
橫須賀市	一五、七四一	四七、二二三	一一、八〇五	三、〇〇〇	六二、〇二八
神奈川縣	一四二、五八六	一四二、五八六	三五、六四六	三、〇〇〇	一八一、二三二
埼玉縣	一七一、七三二	八五、八六六	八、五八六	二、〇〇〇	九六、四五二
山梨縣	四四、七二五	二二、三六〇	二、二三六	一、〇〇〇	二五、五九六
千葉縣	一一八、三五八	五九、一七九	五、九一七	二、〇〇〇　全區	六七、〇九六
計	一、五六九、七三四	五、三四五、〇四六	一、二二五、〇〇五	二、二一六、〇〇〇　一、三七〇、〇〇〇	一〇、一五六、〇五一

右は震火に伴ふ經濟機關の破滅金融の梗塞其他の事由に依り回收の見込立たざるに至れる債權關係の損害を含まず物的損害の大體に就き概數を算出したるに過ぎず尙ほ正確なる計數に就ては後日再調査に着手する筈であると云ふ。

右の調査なるものは、何を根據としたものであるか、又た其推算の方法は如何、何れも、示されて居ないのであつて我々は輕々しく之を受入るゝに躊躇するものである。思ふに　大藏省としては、外國に對する日本の財政的信用を成る

可く毀けぬ様、震火災による日本の損害高を成る可く大きく見せしめないことに苦心する必要があらうし、又た成る可く早く損害の餘り大きくならざることを海外に知らせたいと欲するであらう。之れは財政責任者としては無理もないことではあらうが、併し事の實際と餘り違つた數字を公けにすると、他日的確な材料に基いた調査額が、之れと大差を示さないとも限らない。(其爲めに統計局を掣肘する様な愚なことは爲すまいとは思ふが)然るときは、却つて信用を害することとならう。例へば東京市の家屋損害高は三十八億圓となつて居るが、東京市調と稱するものによれば、其れは十四億六千三百萬圓(十月十三日時事新報)とされて居る。前者は後者の二倍半強に當るのである。されば我々は統計局の調査も亦不完全なる可きを覺悟しつゝも、少くとも、專門的推計に基く其調査の完了するまでは、損害額其ものに就ては、妄りに臆測を逞うすることを避けねばならぬ。此點から云へば大藏省の發表は、早計の嫌なしとは云へぬのである。從つて、一定の數字に基いて、被害の程度を考察することは今は見合はさねばならぬ。乍去私は決して之を悲觀せざるものである。何となれば、私の立場から見た經濟上の損失(エコノミック・ロッス)なるものは、地震の爲めに倒され、火事の爲めに燒かれた富ではないからである。

此度の大災の爲めに滅亡に歸せられたものは、之れを金額に見積れば莫大なものであらう。然し乍ら、日本の國民經濟の立場から、眞の損失と目す可きものは、實は此等の破壞せられ燒却せられたものゝ凡てではなく、其一部に過ぎないのである。假りに、此度の火災が東京、横濱の代りに、京都や奈良を襲つたものとするときは、我々は、永久に恢復し能はざる損失を多大に被るであらう。然るに東京殊に横濱に於ては、永久に恢復し能はざる損失となる可きものは、實は寧ろ甚だ尠いのであつて(國寶の燒かれたものは何れ程あつたか知らぬが、恐らく大したものではあるまい)大々部分は、向後に於ける我々の努力次第で、晩かれ早かれ、恢復せらる可きものに屬するのである。語を換へて云へば、

東京、横濱に於ける損害は、貨幣價値としては、實に莫大なもので或は二百億圓にも達するかも知れないが、我々の努力によつて、其の二百億圓を産み出しさへすれば、其れで十分に恢復せられたことになるのである。之れを經濟學の術語で云へば、此度の火災の滅ぼしたものゝ大々部分は、何れも再生産物（レプロヂユシブル・グーヅ）に屬するのであつて、非再生産物（ノン・レプロヂユーシブル・グーヅ）に屬するものは、單に其の一部分にしか過ぎないのである。殊に横濱に於いては、金に換ふることと能はざるもの、即ち將來の我々の經濟的努力によつて恢復し得られざるものは、殆んど（横濱市史資料とか古美術品とかを除いては）絶無と云つても大過ないのである。東京に於ては必ずしも左樣ではない。近い例が帝大の圖書館の如き、其大々部分は金で買ひ得る再生産物に屬するであらうが、若干部分は、到底再生産し得られないものである。其他本所の安田氏の文庫を始め多くの學者、藏書家の手にあつた稀覯の古本、又は諸家珍藏の古美術品（但し中には如何はしいものを有難つて居たものも尠くはあるまいが）の如き、湯島の聖堂を始め恢復に甚だ困難なる歷史的諸建造物の如き、何れも非再生産物に屬する。鎌倉に於いても若干此種のものが失はれた。此等は、向後我々が如何に努力するとも到底再び得る能はざるものである。然し淺草の觀音堂に於いて一例を見るが如く、此種のものゝ不思議にも救ひ出されたものもある。差引いて金に換へ得る損害の莫大であつた割合には、其然らざるものゝ損失は輕微であつたと云ひ得るかと思ふ。從つて此度の火災による有形的の損害は眞に永久に損失となるべきものは、世人の思ふが如く大なるものではない。建築物でも横濱は更なり東京にだつて、金に換へ得難い、眞に惜しい永久的損失たるものは尠く、何れも金さへあれば直ちに再建し得られるものであつたかと思ふ。唯到底取り返しの附かぬ重大な損失は貴重なる人命の多くを各地に於いて失つたことである。其一人をも失ふことは惜しむ可きである人命を何萬と云ふ數に於いて失つたことは、此度の損失中の最大なものであつた。殊に地震や火事ばかりでなく、途方もない宣傳流說

の爲めに、又た人心の激動の爲めに、若くは一部の奇妙な『國士』とか稱する人々の暴行の爲めに、無辜な人命の失はれたことは、幾度之れを慨いても、猶且つ及ばざる大損失である。然し、此れは、私が今考へんとする經濟上の事項に屬しないから問題外とせねばならぬ。

私は敢へて斷言する。此度の火災の齎した大損失は、其過去に屬する部分、即ち地震、火事によりて眼前に滅ぼされた部分は寧ろ小である。何となれば、大部分は回復し得られるものに屬するから。眞正なる回復し得られざる損失の大部分は此等過去のものに存せずして、却つて將來に存する。之れを言換へて見れば復興日本が、其の順當の經濟生活に復興するに就いて要す可き所の將來の犧牲か、復興によりて得る所のものを償はざる部分が、眞の損失となるのである。將來は、我々の經營如何によつて左右せらるるものであつて、固定不動のものではない。從つて、此損失は、決して固定不動のものではない、否將來に於ける我々の努力如何によつて、之を著しく增すこともあらうし、又た其の反對に之を減することも出來るものである。我々の努力にしても正しき道を踏み行くならば、或は此損失を殆んど皆無にもなし得るものである。玆に言葉の用ひ方によつて、右の區別を表はさうとすれば、震火災によつて直接に我々が被つたものは、material harm マテリアル・ハーム（物的被害）である。其或ものは damage ダメーヂ（損害）となるであらう、が、ダメーヂは必ずしも loss ロッス（玆ではエコノミック、ロッス）損失、經濟損失たるものではない。ロッスとは恢復の絕對に出來ない永久に失はれたものゝ謂である。

（二）

以上の道理は、私が今事新しく申すまでもなく、經濟上殊に流通經濟の原理を少し進んで學んだ人ならば、直ちに心付

く可きことであつて、歐洲の大戰後の經濟に就いても、彼國々の卓越した學者達が、繰返しく其國民に說き聞かせた所である。今一般讀者の爲めに、極く簡單に其說明を試みて見よう。普通我々が物を賣買するときには、一方に利用、他方に費用が必ず伴ふものである。私が帽子一個を金五圓で買ふときには、私に取つては、其の帽子の費用は金五圓であつて、其の帽子を買ふことによつて獲得する利益は、之を貨幣額に見積つては、金五圓以上の或額であるのである。然らざる場合には、金五圓の費用を投じて、其の帽子を買ふのは愚である。買手たる私に取つては、其帽子が何程で生產せられたかと云ふ過去の事項は直接には何の關係もないことである。私に取つては、現に金五圓を投ぜざれば、其帽子を買ひ得ないと云ふことのみが意味を持つのである。トコロが、不幸にして、私は此度の火事の爲めに、其帽子を燒いて仕舞つたとする。ソコデ私は新たに一個の帽子を買はねばならぬ、幸にも政府の暴利取締令が帽子にまでも及ぶものと假定して、私が今新たに前と全く同じい帽子を、燒跡のバラツク店で金四圓五十錢で買ひ得たとする。然るときは、火事によつて被つた私の損失は、五圓でなくして四圓五十錢である。言直して見れば、災前に私の支拂つた額は、私の損失を示めすものでなく、災後に新たに私が支拂ふ可き額丈けが、私の損失を言顯して居るのである。私に帽子を賣る洋品商の立場から云つても同じことである。彼は從來四圓に仕入れた帽子を五圓に賣つて居つた。然るに彼は火事の爲めに其帽子五十個を灰にして仕舞つた。彼の損失は二百圓であつたかのやうに考へられる。然るに、災後帽子の卸値が下つて一個三圓五十錢で仕入れ得ることゝなつたと假定せよ、彼の損失は、實は二百圓ではなく金百七十五圓に過ぎないのである。

以上の道理を經濟學では『再生產費の法則』と云ふ。曰く、物の價格を支配するものは、再生產物に就ては、其の生產費ではなく、其の再生產費であると。尤も此の再生產費の法則から、如上の例に至るまでは、多少込入つた說明を要

するのであるが、其れは、本論に直接の關係のないことであるから略して置く。

私が玆に復興經濟の原理と名くるものは、實は新しい考案に成るものでも何んでもない。必竟は、此の再生產費の法則の適用の一を指して云ふに外ならないのである。曰く、復興經濟の立場から見ての眞の經濟的損失（リアル・エコノミック、ロッス）とは、復興によつて得らるゝ利用に超過する向後の費用の總計に外ならないこと。故に其の利用が費用に超過すれば、結局は、何の損失を被らないことになる。復興の利用小なるか、其の費用大なるかにより、後者前者に超過することに於いて、始めて我々は眞の損失を指摘し得るのである。モ一つ言換へて見れば、日本國民經濟全體として又た罹災地の經濟全體として、向後復興し行く間に於いて、我々の經濟生活を支へて行つて享受する一切の經濟的利用が、災前の其れよりも小なるか、之を得るが爲めに我々の捧ぐる犧牲卽ち費用が大なるか、並に其二つとも事實である場合に於いて、我々は眞の損失者となるのである。從つて、我々が眞正の意味に於いて、結極損失者たるか否かは、獨り將來のみが決定する所の事項であつて、今の處では、實は分らないのである。今に於て分り得るものは（其れも實は適確には到底分るまいが）、唯だ如何れ丈けの有形財が火災の爲めに滅ぼされたかの一事（卽ちマテリアル、ハーム）のみである。而して其れは、我々の損害其ものとも、損失其ものとも決して同一物ではないのである。

（三）

地震並に火事の爲めに財物を失つたと云ふこと、其事が我々の生存に對して直ちに損害（ダメーヂ）たるのではない。燒け出された何萬の人々は恐らく、其燒いたものゝ中には、燒いても惜しくないものを必ず若干持つて居たらう。或は心持としては、惜しいかも知れないが、生存を營んで行く事實の上からは、何等の損害と云ふ能はざるもあつたらう。

殊に日本の家庭には、隨分無用な家財家具、衣服、日用品が何時の間にか堆積して居るのを常とする。屑屋に賣らうと思つても買つても呉れず、さればとて、態々捨てに行くのも面倒だから、其儘に仕舞ひ込んであるものもあらう。多く物を持つ人ほど、通例は、此種の無用の物品を多く持つて居る。又全く無用と云ふこと能はず、屑屋は喜んで買つて行く樣なものでも、燒かれた人其人に取つては、永年の間一度も使用したことのない物品、年に一遍被るか被らないか分らない衣類（女で云へば裾模樣だの、男で云へば燕尾服、大禮服だの）もあらう。若しくは其れ程でなく從來は用のあつたものでも向後の生活上、殊に罹災當時の緊張した嚴肅な氣分の衰へざる限りは、其れがなくとも少しも生存上不利不便を感ぜぬものなども必ずあらう。其等のものを合せた高は、一家庭毎に相應の高に上つて居つたかも知れない。更に又一歩を進めて、向後著しく質素な（乍併實質上充實した）生活振に改めるならば、なくとも事足る種類のものを之れに加算したならば、其れは、場合によつては著しい高に上るかも知れないと思ふ。此等のものが燒かれたことは、物の消滅破壞には、相違ないが、向後將來の我々の經濟生活の立場から云へば、何等の損失とならないものである。百億圓とか二百億圓とか云ふ中其等が何割を占めるかは、向後の復興經濟の立て方如何、向後の我々各自の生活振り如何によつて決定せられることで、今日の處其れは如何にしても知り能はざるのである。知り能はぬ筈である。即ち大災によつて我々が被つた損失は、今日に於ては未知數である。其れを大なる數とするも、小なる數とするも、何れも向後將來に於ける我々のやり方一つによるのである。官公署、學校、其他の團體、銀行會社、商店工場等に就ても亦全く同じ事である。

大震災の損害何億と云ふけれども、實は其の我々の現實の生存に對する價値は之れによつて言表はされては居らぬ。到底貨幣額を以つて表示し得られない程莫大な眞正の價値の損失たるものもある他方には、之れを作つたとき、買入れ

たとき何千圓とか何萬圓とかを要したと云ふ廉を以つて、其れ丈けに計上せられては居るが、現實には其の半分の價値もないもの、若くは價値皆無のものなども、其の中に含まれて居るのである。從つて過去存在物の消滅と云ふ眼から見ても今何億圓と稱せられて居る所謂損害（ダメーヂ）額なるものは、我々の現實の生活とは直接には沒交渉なものである。況んや、眞の損失（リアル・ロッス）と、過去存在物の消滅とは、全く別の事であるに於いてをや。眞の損失は、我々が向後の生存に於いて、大震災なかりしならば、我々が享受し得可かりし利用の享受し得られなくなることの謂に外ならないのである。反對に大震災ありし爲に、殊に罹災後の緊張肅正せられた經濟の立て方により直接間接に新たに享受し得る樣になつた一切の利用便宜は、其の得られざる利用便益から差引かれなければならぬのである。少し見方をかへて費用の上から云へば、向後の我々の生活の爲めに我々が提供せねばならぬ費用中、火災がなかつたならば、當然提供せずして濟む可かりし費用丈けが、眞の意味にての損失となるのである。從つて復興費何十億と稱するも、其の一切が眞正の意味にての費用たるのではない。火災がなくとも、我々が支出せなければならぬ費用は、決して復興の費用でなく、唯一の費用項目が他の項目に轉還流用せられたに過ぎないのである。例へば救護費の重な項目たる食料品衣料品の如きは、火災なくとも消費せらるゝを要するものである。否其費用の節約せられたものである。從つて其れは新しい費用ではなく、必ず不可免人生の費用である。唯だ消費みする他方に徒手遊食して何等の富を作り出さないことが眞の損失眞の費用となるのである。換言すれば復興と云ふことがなかつたならば、提供することを全く必要としないであらう所のもののみが、眞正に復興の費用と目せらる可きものであるのである。

（四）

以上言ふ所を要約すれば、復興によつて得る一切の利用と、復興の爲めに其れがなかつたなれば提供せずして濟むべきものを支出する一切の費用と、此兩者を對照して、後者が前者に超過する額丈けが、我々が火災の爲めに被つた損失額となるわけである。此の道理は。流通經濟の第一原理から見れば、極めて簡單明瞭な事柄であつて、特に國際貿易の理論に於いて、今から百餘年前に、英國の學者デヴキツド・リカルドが說き始めた所謂『比較的生產費の理論』なるものは、此の第一原理を最も明白に展示して居るのである。私はリカルド並に後年に於いてジョン・スチュアート・ミルが、力を用ゐて說いた此理論は、又た直ちに、此度の大災後の日本の復興經濟の第一原理たるものと信ずるのである。

一つの例をあげて見れば、東京市の調では東京市內の建物の被害額は、十四億六千三百萬圓である。(前揭國富統計では日本全體の建物價格を四十九億三千萬圓としてあるから、其の三割強となるわけであるが、是れは無論過大に失すると思ふ。國富統計では東京府全體の建物數は七十三萬戶で、其價格は五億三千六百萬圓となつて居る。此割で行くと東京の燒失戶數三十七萬戶とすれば二億七千萬圓斗りの被害となるに過ぎない。是れは又過少に失すると思ふ。況んや、前揭大藏省調査の三十八億萬圓は過大に失するに相違ない。)此數字は、住宅は坪當り二百五十圓、其の他の建物は坪當り三百五十圓を單價として、其れ〳〵の燒失坪數に乘じたものである(十月十三日時事新報)此推算は、所謂被害調としては、信を措くに足るものであらうが、坪當り二百五十圓の三百五十圓のと云ふ平均額に就ては疑を挾む餘地がある。加之、燒失總坪數五百三十萬七千四百二坪、內住宅三百九十三萬七千九百五坪、官衙公署三十一萬五千八百八十六坪、官公舍一萬七千二坪、學校圖書館十四萬千百七十八坪、神社寺院會堂廿萬二千七坪、銀行會社二十五萬千二十五坪、工場倉庫五十五萬七千九十一坪、劇場娛樂場三萬三百八十五坪、其他八萬四千九百十九坪などの內、向後復興經濟に於いて、眞になくてならぬもの、之れなくば、我々が文明の生活を營むに事缺くものが何れ丈けあるかは、右の調丈けでは分らない

のである。多くの建物の中には、三年、五年、十年の内には、改築又は修繕を加ふるに非れば、使用に堪へなくなる可きものも、必ず尠らず存して居たらう。其等を二百五十圓の三百五十圓のと見積ることは、過大に失するは云ふ迄もなからう。或は又其れあるが爲めに、却つて不便不自由を感じ、改築したくとも、其れが兎に角存する爲めに、生活の改善を斷行することが出來なかつたものもあらう。從つて其坪當り價値は或は零であつたかも知れぬ、又或は、向後全く其種のものを建設する必要の存せざるに至る可きもの、寧ろ其の消滅が、健全なる生活の運營の爲めに希はしいもの等もあつたことゝ思はれる。此等の坪當り價値は、寧ろマイナスであつたかも知れぬ。其等のものゝ消滅したことは、決して丸々損害とは云へないのである。或ものは、少しも損害とはならないものもあるであらう。或ものは、損害には相違ないが、坪當り二百五十圓、若くは三百五十圓などと云ふ金額によつて表すべき損失とはならないものもあらう。現に建物として存在すればこそ之れに住ひ之れを使用して居るものゝ、其れは極めて無駄に使用せられて居たものもあらう。我々の小さな生活に於ても、ツヒ買込んだ帽子が二つも三つもあつたり、靴が三足も四足もあつたりすることがある。二つも三つもあるから、時々取かへて被るけれども、一個の帽子しかなければとて、別に不便不自由を感ぜぬものがある。紳士が本宅の外に別宅の別莊のと何軒も住宅を有して居るときは、時々は居を移しても見るが、丸燒けの今日一軒の家しかないとなつても、其人の生活便益の享受は、三軒も四軒も家を有して居たときと少しも異らぬこともあらう。或は妾宅などが燒けて之を復興しない爲め、却つて家内が圓滿になると云ふ積極的利益のある場合もあらう。之を大きく東京市、横濱市などの自治體の上に就て見ても、若くは日本國家全體の上に就いて見ても、亦同じ樣なことが云ひ得るのである。官廳、公衙、官舍、官邸などの類、又は學校などの類にも、其樣云ふものが必ずあらうと思ふ。一般社會の立場から見れば、猶更らに然りと云ふ可きかと思ふ。思付いた一例をあぐれば、東京には大學と云ふ名を冠したものが十

斗許りもある。日本の社會から見、日本の學問、敎育の上から見るときは、此れは確かに無駄なことであつた。火災の爲め私立大學の中には、維持困難に陷つて、頻りに政府の補助金を要請しつゝありとか云ふことであるが、十幾つかの大學がタトヘ維持可能であつても、其の凡てを復興さすべき必要はない。何處の文明國に一都會に十幾つの大學がある所があるか。十幾つの大學の中二つか三つかが燒け殘つた丈けで、跡は皆全半燒したと云ふ、其の燒けたものを坪當り三百五十圓と見て、之を損害額と稱することは出來ない。極端に云へば、燒けた方が寧ろ勝れりと云ふ可き額が其中に含まれて居るに相違ない。然るに若し、政府が其等十幾つの大學を悉く補助して、何れも災前の狀態を復舊させるとなるときは、我が社會の蒙むる損害は燒失額と同額或は其以上にも及ぶであらう。反對に、維持の困難な車代先生、掛け持ち敎授の變則大學の幾つかを合併して、玆に名實相副ふ眞の大學を復興することにするならば、我々の損害額は或は甚少額否却つて利益の高の方が多いことゝなるかも知れないのである。燒殘つた大學と燒失した大學とを合併し、圖書館を合併增大し、研究室とか運動場とか寄宿舍とか、學生集會所とかの設備を充實し、或は郊外の空氣の良い處に移して、玆に緊張し充實した大學生活を營ましむるやうにすれば、敎師全體としても學生全體としても、又社會全體としても享受する利用は非常に增大するによつて、其れに要する費用は多大であるとしても、優に其れを償つて餘あつて、大學の燒失は（帝大圖書館藏書中の或ものゝ燒失丈けは、永久に免れ得ざる眞の損失たるには相違ないが）日本の社會、日本の學問に取つて、實は何の損害損失をも意味しないことになり得るかも知れないのである。卽ち其れが損失となるか否、其損失の高はどれ程となるかは、火災が之を決定するものでなく、我々人間の努力、我々の將來に對する向背が之れを決定するのである。

(五)

右の一例で明かなる如く、損失を最大ならしめる方法は、災前の狀態を其儘恢復する復舊と云ふ方法是れである。何となれば、復舊、舊狀其儘の恢復は、火災による物の破壞の全部其儘を眞の損失に換償せしむる所以であつて、其小なり大なりの部分を免れることを許さない方法であるから。故に他の點は姑く措き、經濟上の費用、經濟上の損失と云ふ一點からのみ見るときは、最惡最拙の經濟は復舊經濟是れであると云はねばならぬのである。更らに又た經濟以外の考慮から云つても、復舊は禍の全部を永久の禍とする所以であつて、俗に所謂禍を轉じて福と爲すことが出來ない、燒け太りでなく、燒細りの外ないのである。

此道理は、單に有形物のみに止るのではない、否利害の岐るゝこと最も大なるは、寧ろ無形の上に存するのである。從來行政整理と云ふと、必ず二割天引とか三割天引とか云ふことをやるが、之れは、最惡の經濟法である。行政機關の組み立て方を其儘にして置いて、單に役人の數を減じ、勤務時間を長くし、甚しきは暑休、半休を廢し、物件費を切り詰めたりして、能率を著しく減じ、唯金の費用を節した丈けで、之れを整理と名くるのは、迂濶も亦甚しいことである。今日の行政には、其組立て方の上に於て、其の運營の上に於て、實に名狀す可らざる程澤山の無駄をやつて居る。其れが一朝非常の事起るときは、誰人の目にも付くやうになるが、平生は、多くは無意識の間に過して居る。芝浦の滯貨は實は芝浦のみのことでなく、今日の官廳公衙には、實に芝浦に數倍した停滯人件、事件、物件が山の如くに存して居るのである、詰らぬ訴訟事件が三年も四年もかゝつて判決が下らないなどとはよく聞くことであるが、其れは決して獨り裁判所のみに限られたことではない。私は屢々區役所の罹災者配給を目擊して居るが、朝私共が學校に登るときに見た同

じ人が、晩歸途につくときに、未だ風呂敷やバケツをブラ下げて長い列を作つて、役所の前に立つて居るのを見受ける事がある。之れが日本の自治體、政府、否銀行會社を通じて一般に見る實際の事實である。此頃やかましい火災保險の事でも、保險に加入して保險料を拂つてから一ケ月たつても、未だ契約書を送つて來ぬ。而して其契約書には、被保險者が夢にも見たことのない、地震其他の免責特約條項が記載してあるのである。私の知つて居る人で幸ひ火事を免れたからとて、災後數日直ちに火災保險を付けたが、私が執筆して居る今日迄まだ契約書の送附を受けぬとこぼして居た人がある。又他の一知人は昨年十二月横濱の某汽船で起つた火災の保險金をやつと十月十五六日頃受取つたと云ふことを聞いてゐる。こんな例は、實に箒で掃くほど澤山あるのである。災後の郵便、電信、電話の恢復の遲鈍さなどは實に馬鹿らしくて之を口にするだも面倒な次第である。九月二日の官報が大阪に配達せられたのは七日か八日のことであつたと云ふ其れなら、日本は凡て此調子かと云ふと、決して左樣でない。大阪では東京の火災を二日か晩くも三日には、號外にして發行した新聞が幾つかあつたと云ふではないか。否郵便局では新聞の郵送を拒みつゝある間に丸燒けの東京の諸新聞は、殆んど一の除外例なく、皆殆んど全く恢復せられた紙面の新聞を發行するに至つたではないか。是れは殆んど皮肉的に、遲鈍、敏活の兩極端を我々に例示して呉れたものと云ふ可きである。但し餘り敏活すぎて鮮人云々の浮說を大けさに自働車何十臺を飛して宣傳したり、一頁大の號外を發行した新聞のあつたと噂あるのは、誠に閉口千萬の事で、而も同じ新聞が東京市民の輕擧盲動を今になつて盛んに筆誅しつゝあるのは敏活過敏終ひに健忘性に陷つたものであらう。

整理を要するものは、決して單に政府の行政のみではない、官となく私となく、遲鈍經濟網が甚だ手廣く張られてある。其の網を根本的に掃蕩するのでなければならぬ。然るに若し、復舊を以つて方針とするときは、此の遲鈍網は再び蜘蛛の巢の如くに張り渡されることとなり、大災の破壞の全部が永久に我々の實損となるより外はないのである。故に

私は云ふ、復興經濟の最惡の方法は復舊と云ふことであると。

(六)

行政機關の組み立てに就て、私共が痛切に感じて居ることは、今の府縣の數の餘りに多いことである。殊に此度の罹災地たる東京と神奈川とが別々の府縣である爲めに、何の位、災後救濟の事業を妨げたか分らぬ。恐らく復興に就て最大の障碍となるものは、東京府、神奈川縣の分立之れであらう。此の一府一縣は、此度の火災によつて全く一つとなつて仕舞つた。殊に横濱が全滅した今日、神奈川縣廳などの今に存して居る事は、殆んど滑稽に近い。教育機關なども左樣である。專門學校や大學などの分合す可きもの、左樣した方が、遙かに、教育の效果を増し得可きものが澤山にある。政府は燒失諸學校を唯復舊一天張りで八千萬圓とか九千萬圓とかの復舊費を計上して居ると云ふことであるが、之んな算盤を彈く前に、何故官公私立諸學校の根本的整理を大方針とさせる分合を斷行しないのか。東大移轉論に對して經費が無い一天張りで對抗する前に、根本的整理上、東大移轉が可なりや否や、而して其れに要する費用が辨ぜらる可きや否やを考一考しないのか。一方には、復舊一天張り、而して他方には、義務教育延長も、昇格の實行も、封の儘之れを高閣に束ねて仕舞ふなどとは、無精無責任にも程がある。私共の見る所では、復興日本の立場に立つときは、昇格の實行す可きものは、既定の年限などは一掃して即時に之れを昇格し、單に情實から昇格の仲間入りをさせたものは、永久に之を打切ることこそ損害を最少ならしむる方法である。義務教育の延長は、普通選擧の斷行と同時に決行す可き、賢き正しき教育經濟法であるのである。濫設（私は敢て云ふ）專門學校を根本的、系統的に整理し、諸學校に累々たる老朽無能の輩を淘汰するときは、教員の數に於いて著しい節約の出來る事は請合である。

極端に云へば（私は極端とは思はないが）高工を昇格して帝大工學部と合併し、商大を帝大の一學部とし、高師が昇格す可きものなら之を帝大文理科に合併するとすれば、帝大を郊外の地に移し、理想的の綜合大學を作ることは、左までの難事ではあるまい。神戸高商も即日昇格して京大の一學部とするに何の不都合も見出し得ない。元より各校其れぐ歴史あり傳統あるに相違ないが、其んなことを云つて居れば、結局は一切萬事復舊の惡經濟に墮して仕舞ふ外はない。（私は今商大出身者などと云ふ立場から立言して居るのでないことを茲に斷つて置く。變態大學の一たる中央大學の學長たりし又は現に然る現文相岡野氏こそ先づ率先して、中央大學を他の幾つかの車代大學と合併することを主張せねばならぬ。然らざる限り商大帝大合併には私は無論反對する。自分は中央變態大學に立てこもりつゝ帝大商大合併論を以つて商大に臨んだ故奥田氏の考案には、私共は極力反對して、終ひに廢案せしめたのは當然と思ふ）。

復興によつて、火災の損害を最小ならしめようと云ふには、災前の行きがゝりや感情や其んなものは一切水に流して眞に復興日本の大規模の上に立つて、新しい經濟を編み出すのでなければならない。官廳でも鐵道省と遞信省、內務省と農商務省、陸軍省と海軍省などの分立は、甚で無駄なことである。合併したとて、何の不都合はない。否緊張充實した行政は却つて其の合併整理によつて、確かに實現し得ると信ずる。私は決して縮少、節約の消極經濟を主張するのではない。能率增進を標的として、單なる傳統、行きがゝりから產れ出でたる機關の重複、錯雜を單純化し、組織化し、其代りに官吏、公吏、教員等の待遇をズツと引上げ、人數を少くする代り、各人により大なる効程を責む可しとするのである。かくするにあらざれば、百億、二百億の物の損は眞の損となるのみならず、其れに復利が加はつて、莫大なものとなることを免れないのである。天引整理は最惡な整理である。節約整理は最拙な整理である。復舊的復興は最惡最拙の復興である。

（七）

今日現に行はれて居る救護事業は、以上の復興經濟の原理から見るときは、一生懸命に大災の損失を大ならしむ可く努力しつゝあるチヤムピオンと云はなければならぬ。此點は『報知』所掲『營生機會の復興を急げ』其他の拙文に於いて少し論じて置いたから、管々しく繰返すことは已めるが、今の救護とは、强制的に何萬と云ふ惰民を作りつゝ、他方には眞に救護を要するものに救護が甚だ行渡つて居らぬのである。私の實驗した一例をあぐれば、或る罹災者は、災前相當の店を經營して居たのだが、銀行通帳も、郵便貯金帳も印形も皆燒失して燒トタン小屋に露命をつないで居たが、生れ落ちの東京子で、如何しても、配給米に生きて居るのが殘念で堪らず、一日も早く自分でバラツクを立てゝ商賣をしたいと思つて居たが、役所では指定のバラツクへ行けと云ふ、マア少し考へさせて吳れと云ふ押問答、其中幸ひに若干金を融通して吳れる人があつて若干坪のバラツクを建てゝ、從前の商賣の外に雜貨品や食料品を信用借りにして來て店にならべたら、其日から相應の商賣があつて、翌日からは、配給米一切を貰はず、商賣の上り高で一家十數口を兎に角養つて行ける樣になつたと云ふ。而して其人の云ふ樣には、自分の仲間内には、バラツクさへ建て得られゝば、何かしらの商賣は出來、自分のバラツクがある爲に、問屋でも信用して品物を渡して吳れるが、共同バラツクに這入つて居ては其道はトント付かず、さりとて、配給米を貰ひに行くのは、身を切られるやうにつらいと歎じて居る人が尠からずあるとのことであつた。此は左樣あらうと思ふ。復興は決して復興院のみの仕事ではない、否眞の復興者は罹災者自らを措いて外にない。自ら生きんとする强い衝動、人らしく、又獨立獨歩の人間らしく、慈善によらず救護に賴らず、自らの働きを以つて生きて行かんとする堅い決意を以つて居る人が復興の最根本動力であるのである。配給を受けることを絕大な

耻辱と感ずる意氣ある人によつてのみ、眞の復興が成し遂げ得られるのである。然るに今日迄の救護は、災後數日のやり方を其儘継續して居るに過ぎない。罹災者に復興營生の機會を與ふると云ふことに就ては何をも爲して居らぬ。有形物の物質的被害の大なるに驚かされて、大災の爲めに人民の營生の機會が滅ぼされたと云ふ無形の損害の甚大なることに氣が付かず、物の恢復計りを念として、此の無形なる損害を恢復し、一日も早く人々皆生産活動を始め、各人に自らの營生機會を獲得せしむることの急務なるを知らないのである。火災保險問題の處理も失業者の處理も此立場から急施せられねばならぬのであるのに、混沌として一向見當が付いて居ない。(大阪每日掲載拙文『失業及火災保險問題』參考)而して何十萬と云ふ强制的惰民を持餘して居るのである。實に馬鹿々々しい極である。私が他の文に於て(實業の世界掲載『誰か復興の經濟計畫者たる』)論じたやうに、自らの力でバラックを建てゝ、營業並に生活の本據を作らうとする人々は、最も歡迎す可き復興の實行者であるのに、燒跡建築問題に對する根本的の發令なく、唯幸ひに東京裁判所長の驚異す可き大英斷による巡回裁判所の活動によつて、一條の活路が開かれたのに放任してあるのみである。私は時々其前を通る此の巡廻判事詰の小さやかなバラックを見る毎に、熱き〳〵感謝の念に驅られ不思敬禮せずしては通過し能はぬのである。今の民法商法などゝ云ふ狹い束縛の下に立つ司法官でさへ其人にして人間の眞意義に目ざめて居れば此れ丈けの事は出來るのである。政府たるもの何んぞ其有する絶大なる權力を適當に行使して、復興の大恩人たる此等罹災者の自主自立的活動に、磐石の如き安心の基礎を與ふることを圖らざる。政府の救護事業と云ふものゝ見當違ひなること、凡そ此の類であるのである。

　何十萬の强制的惰民は、其れ丈け、日本國民經濟の復興豫算の借方を增すものである。彼等が何もせずして配給米に露命をつなぐ一日は、永久に失はれたる一日であつて、之れ丈けは、如何にするも恢復し能はざるものである。彼等に

して適當なる營生の機會だに與へられるれば、まさに作り出したる可き富は、彼等が徒手遊食するによりて、永久に天地の間に其姿を顯はさゞることになつて仕舞ふのである。彼等が向後如何に勉强するとも、此く失はれたる何日かは、とこしなへに消え去つたものとして、之を取返すことの出來ざるものである。否徒手遊食の習慣が身に染み込むによつて、向後業に就くとき、彼等の生産力は却つて減じたるものとなるとも、決して增したるものとはならない。爲す可かりしことの永久に失はるゝのみでなく、向後爲す事の高も減ぜられることなきを保し得ないのである。思へば、思へば實に拙劣なる經濟が救護の名の下に於いて營まれつゝあることよ。同じ事が精神的活動に就いても考へられ得る。帝大を始め諸所の珍書稀本は燒かれ、又た諸家所藏の古美術品は失はれたけれども、帝大の學者が勇猛一番して、向後盛んに學術の研究に勉め十年一日の古ノートを繰返すことを已めれば、所謂稀書珍本はなくとも、學問は大に進んで、災害は、事實上最少の損失にて濟むのである。災後間もなく帝大教授の數人者が諸方に奔走して書物の買集めに勉めたと云ふことが新聞にあつたが、之れは自らの力を以つてバラックを建て、配給米を辭して、獨立獨行、營生の機會を作り出した眞の東京つ子の健氣なる意氣に劣らざる眞の復興行動である。私は右の事を新紙上に見て不思落涙せざるを得ざるほど愉快に感じた。美術家、文士の間にも同樣の話は必ずあるであらうと思ふ。是れ我々の恢復し得られざる眞の損失を最小化する最有力の努力でなくて何であらう。之れに反し書物が燒けて仕舞つたからとて落膽して學を廢したり又は之れを好口實に更らに古ノートを其儘にする人は、何時迄も配給米に甘んずる惰民に比す可きものである。

（八）

復興經濟の第一原理は次の一事である。曰く、復興の實現行程並びに實現の効果に於いて、大災による眞の損害を最

小化し、災後の日本國民經濟全體、殊に罹災地の經濟の運營が産み出す可き生活享受の利用便益を最大化することが是れである。

此の立場に立ちて觀るときは、私は新聞紙上に顯はれた政府の復興に關する諸々の計畫が、其規模餘りに小に失することを責めざるを得ないのである。然るに世上の論客の大多數は、政府を責むるに其の規模の大に過ぐるを以つてして大風呂敷の何のと云ふ。私は實に之を怪らざるを得ないのである。

第一、復興院と云ふ尨大な機關が設けられたけれども、其掌る所を聞けば、要するに、都市計畫の一事を出でない。經濟復興のことに關しては、何の機關、何の施設あることをも聞かないのである。是れは、又た、實に驚き入つたケチな立案である。又た社會政策的の復興に關しても、何の新施設、何の新抱負あるとも預り聞くを得ない。否、却つて復興事業の爲めに、健康保險法　實施を無期延引すと傳へらるゝに至つては、其膽玉のケチボケなること實に呆れ返らざるを得ない。健康保險の實施は日本全體に取りて一日も延引するを許さゞる根本的要求であること、義務教育の延長にも勝るものである。我議會は既に健康保障法を可決し、政府は之れを法律として公布し、其施行に要する法規　類は悉く準備を終り、今や只實行の日來るを待つのみである。然るに政府は、九月一日關東一地方の地震の爲めに、政府は之れを拋り出して逃げ出すこと、大藏省、內務省、文部省の役人諸君が、重要書類の一切を打捨てゝ身一つにて逃げ出したこと、同一態度に出でんとしつゝあるのである。三十間堀の稅務署では、役人數名決死の努力を以つて重要書類をヅツク包として河中に投入して後逃げ出したと傳へられる。德富氏の遭難記によれば、大森の或る商店の主婦は、天プラ鍋に厚き蒲團を被らせ其上にバケツ一杯の水を置いて後、倒れ家から這ひ出でたと云ふ。此の如き例は私は澤山之れを聞いた。私の家に避難して來た一少年は倒れ家の中から祖母が平生大事にして居た書き付け類を取り出し、身重なる其義姉に風

呂敷包一つを持たせて隣家からの出火を辛くも逃れ出つゝ、猶は近隣の倒れ家から一婦人を掘り出して後逃げ出して來た。政府が今取らんとする態度は、三十間堀の判任官、大森の天プラ屋のおかみさんに對して恥づ可き臆病、小膽にして卑怯なる態度と云ふ可きではあるまいか。まさに爲す可きことは、義務教育の延長でも健康保險の實施でも、皆十把一束的にオッポリ出し、而して其大聲に呼號する所謂復興機關は、一切の社會的施設を除外すとは。而も之れを評して規模大に過ぐの、大風呂敷のと云ふ。私は疑ふ。日本の國家は地震の爲めに、俄然として、十分の一にも、二十分の一にも縮少したのではあるまいかと。地質學者は房總海岸の陷落、隆起を報じて居るが、日本國家其ものゝ此の大縮少は、何人あつてか之を測量し、何人あつてか之を記錄して呉れるのか。

（九）

更らに、單に都市計畫丈けに就いて見るも五年間十億圓を以て復興一切請負云々と傳へらる。一體日本の富は何程あり、日本國民の全所得は幾らあるとして、之れを大規模なりと云ふのか。大と云ひ、小と云ふ、何れも比較的の言葉に過ぎない。其大規模と云ふは、抑も何に比較して大なりと云ふのか。私は之を諒解することが到底出來ないのである。私の最も畏敬する壯年統計學者汐見法學士は此頃獨逸文を以つて、日本の國民所得に關する精緻なる研究報告を獨逸の學界に於いて發表せられた。學士の研究の結果によると、日本國民の所得の發展は一九〇三年より一九一九年間に於いて實に左の如くであつた。(Shiomi, Entwickelung vom Volkseinkommen in Japan. 1903—1919. Heidelberger Seminarreferat. 1923.)

一九〇三年　四九二、五六二、二九七円

一九〇四	五一九、九七九、一三〇
一九〇五	五六九、一〇九、四四〇
一九〇六	六二五、七四八、〇六六
一九〇七	七一〇、六二七、九六九
一九〇八	八四二、二四三、五五三
一九〇九	八九一、五五五、五〇七
一九一〇	九二四、二三二、〇八六
一九一一	一、〇一二、七二三、四六九
一九一二	九六三、八六七、〇八一
一九一三	九九五、八九二、七五二
一九一四	九九五、一一七、六八一
一九一五	一、一九七、四〇二、六五三
一九一六	一、八〇九、七八一、六四〇
一九一七	一、八〇九、七八一、六四〇
一九一八	二、〇四〇、五八四、二七六
一九一九	三、一一一、四九三、一五三

汐見學士は一九二〇年以後に就ては、基礎が異るとして之を省いて居られるから、同氏の嚴密な研究方法による最近數年の數字は之れを得ることは出來ないが、兎に角大正八年度に於いて我が國民所得の總額は三十一億圓餘あつたのである。十億と云へば其三分の一である。

五十年(否德川時代を合して三百餘年)かゝつて築き上げた東京の災後の新都市計畫の骨組み丈けではあるが其れが國民年所得の三分の一で出來ると云ふ計畫が、如何して大に過ぐる計畫の、過當の經費の、大風呂敷のと云はれ得るか。實に解し難いことである。而も此十億圓は、其全部が損失に歸するのではない、此れは單に復興の一費用である。而して其の費用たる復興經濟の依つて營まる可き日本全國の首腦たる東京の經濟網の道具立ての作り出しの爲めの費用であつて、此の經濟網の道具立てなくしては、復興經濟を立てる事は出來ないのである、十億圓は何十億圓か何百億圓かの將來長い期間に渉る日本國民經濟の產み出す可き富の生產原費の一部であるのである。復興經濟が幾干の大なる富を產み出す可きかは、此の根本網が適當の大さに於いて、適當の規模に於いて張らるることを必要とする。十億圓は將來何百億かを產み出す爲めの元資であり投下資本である。若しも其產み出す富が、災前の規模による經濟網の產み出した富に超過するならば、此の生產費は一の損失ともならないのである。問題は生產費の大小でなく、生產高の大小である。生產費小なりとも、生產高小なれば、其事業は缺損となる。反對に、生產費大なりとも、生產高更らにより大なれば、却つて餘剩利益を擧ぐることになるのである。此餘剩利益なくば、災害による損失を最小化し、災後に於ける厚生的利用を最大化することは絕對に不可能なのである。費用を節することが經濟ではない。餘剩を大にし損失を皆無にすることが經濟である。復興經濟も亦た此一般經濟の道理以外に立つものではない。復興經濟の第一原理は、一般經濟の其れと同じく、費用の取扱に終始す可きものでなく、效果、利用の最大化を以つて其の最終の標的と爲すべきものである。此の

第一原理から見るときは、私は今日までに公けにせられた現政府の復興計畫は、其の規模一般的にも亦た特殊的にも餘りに小に過ぐるを憾まざるを得ない。之れに對して過大呼りをする人は、抑も國民經濟の依つて活動する本體を全く度外視するものと斷ぜざるを得ないのである。私は世人が徒らに震災による損害額の大小を論ずる暇に、先づ節を屈して、歐洲大戰後に於ける各國の改造事業の經過を熟察せんことを切望せざるを得ぬ。大戰後の改造は、日本の復興を何十倍した大事業である。世人は先づ此の大事業に處した英米其他の態度を考究して、而して後日本の復興經濟に及ぶときは私が大災損害の最小化の可能性を主張し、政府の復興事業の規模の小に過ぐるを咎むるの決して樂觀に偏するものでないことを發見するであらう。(十二・十・廿一稿)

追記。

稿し了つた處へ東朝の本日の夕刊が來た。其れに左の記事がある。

燒跡へ燒跡へと罹災者歸る

好天氣つゞきに元氣づいた避難民は漸く燒跡に戻つてゆく、假小屋の數は現在八萬一千八百八十戸居住員は三十六萬三千四百五十名を算へられてゐる、警視廳十月十八日の調査によれば、最も數が淺草區で、以下本所區下谷區と言ふ順である。

淺草	一九、四八〇戸	一〇三、一〇〇人	南千住	二、三七〇	一四、二〇〇
本所	一一、〇〇〇	五一、七〇〇	本郷	一、四〇〇	七、六〇〇
深川	九、四五〇	四四、八〇〇	麹町	一、二〇〇	七、二〇〇
下谷	八、七四〇	四二、二〇〇	龜戸	八二〇	四、六〇〇
神田	六、三〇〇	三三、三〇〇	赤坂	三八〇	二、二〇〇
京橋	四、一〇〇	二〇、三〇〇	小石川	二六〇	一、五〇〇

芝	三、三〇〇	一五、〇〇〇
四谷	一八〇	八五〇
日本橋	二、九〇〇	一五、二〇〇

之れは如何にも其通り、而して左樣なくては復興は不可能である。私は去十月五日來訪の毎夕記者に同じ事を語つた。曰く、復興の意氣あるものは、一旦は田舍へ落延びても決して其處で營生の機會を見出しはせぬ。必ず元の燒跡へ歸つて來る。今暫く見て居玉へ、東京人心理の上に立てられた此豫言は事實となるであらう。政府當局がムヤミに罹災民追拂ひ策を取るのは、東京人の心を知らないイナカ役人の大勘違ひであること。モ一つ序に記して置く。

帝大經濟學部教師獨逸人ベルリーナー氏は、近頃復興經濟何大原則と云ふ一短文に於いて復興の費用は恐く不生産的支出と看做す可きものなりとの意見を公表せられた由、今夜渡邊復興評議員から傳聞した。此れは驚く可き謬論である。其然る所以は私の本論文を通讀すれば明白であらう。ベ氏の說を聞いて、私は此の復興經濟の第一原理論を草したことの無駄骨折でなかつたことを感ずるものである。何となれば此議論に基いて氏は復興費の公債支辨を一切排斥し增稅支辨一天張り論を主張し、又た暴利取締、輸出制限を以て經濟の根本理法に叛逆する處爲であると斷言して居る。ベ氏は商業學者、私經濟學者として甚だ有爲な人である丈け、凡て物の見方が、商人的、私經濟的で廣汎な國民經濟の問題には、例へば英國のピグー氏が『戰爭の經濟學』其の他に於いて示した程の理解を持たないのであらう。獨逸の戰後經濟の經驗を其儘移して、災後の日本の復興經濟の標準とするのは、大なる間違である。兩者とも苦痛たることは共通ではあるが、其性質には著しい相違があるのである。私は切にベルリーナー教授の再考を希ふものである。猶『我觀』揭載拙文『倒ることの過大觀』併讀を乞ふ。

震災後の金融並に金融政策

堀江歸一

暗黒裡に陥つた經濟社會―現金に對する需要の增加―支拂猶豫令の是非―一個月を期限とする支拂猶豫―支拂猶豫と企業の壓迫―支拂猶豫に代る可き金融政策―歐洲戰時に於ける金融政策――所謂日本銀行の開放政策―日本銀行の市場救濟に對する限度―小銀行の地位―小銀行合併の問題―銀行營業上の缺陷―市中諸銀行の實力如何―通貨の膨脹―通貨膨脹の弊―通貨回收の方法―金利の引上と公債の發行―外國貿易、國際貸借と內地金融市場―公債と金融市場―公債募集の便宜手段―小額面公債の無限發行―公債利子の引上―外資輸入の自由―國家經費の削減―私人經濟に於ける節約―外債論の起る所以―二種の外債利用法―對外支拂決濟の方便とするもの―內國に於て外債收入を利用するもの―我國の有する正貨―之を利用する限度―外債の利子と內國金融との關係―民間の計畫する外資輸入―金利歩合を不自然に低くするの效果如何―金融政策を圓滑ならしめる妨害物―銀行の外觀と內容―共に脆弱の嫌なきか―日本銀行の損失する所如何―小商工業者に對する金融の便如何―小商工業者存續の必要―彼等に對する保護策―金融機關亦非常の處置を要す。

一

震災火難の爲めに、東京市の大部分が灰燼焦土と化し、殊に商業の中樞、金融の眼目を以つて目されて居つた場所が倒壞滅失したことは、我國の金融市場を一時暗黒裡に陥らしめた。其後政府の措置と當業者の努力とに依つて、一道の

光明に接するを得たやうなものゝ、今後果して如何なる局面を現出するに至るであらうかと云ふことは、一個の問題に屬するのみならず、變災當時政府に依つて行はれた措置にせよ、當業者の爲した努力にせよ、總て萬全のものであつて何等非難を容れる餘地を存しなかつたかと云ふことも研究の資料と爲るのである。

九月一日の震災、續いて同日から二日に至る火災は市民に容易ならざる脅威を及ぼし、彼等をして惶惑せしめること少なからざる次第であつたが、其間に於て私共は何を考へたかと云へば、第一は出來るだけ食糧其他生活の必需品を買入れて、當座の用を充すことであり、第二は是等の必需品を買入れるに必要なる現金を調達することであつた。當時は前月末の諸拂を終つて、僅々一夜半日を過したに止まるから、各自の家庭に若干の現金は備へられて居つたかも知れないが、信用取引の發達した今日に於ては、其現金の額は大概知れ切つた位の高であつて、上記の目的を達するには、固より足れりとするを得ない。斯くて市民は此必要に應ずる爲め、總ての債權を回收して、之を現金とする手段を取る可き道理であつて、銀行に就ては預金を取付けるであらうし、一般債務者に就ては、貸付金を取立てるであらう。随つて銀行も亦債權の回收を嚴重にし、一般債務者にして他に債權を有する者も亦其取立を假借しないであらう。斯る狀態と爲つたならば、我國の經濟社會は求めずして恐慌の危機に際會し、地震火災以外に、更に大なる災厄を蒙らざるを得ざることは、免がれ難き所である。斯くて政府に依つて案出された當面の政策は支拂猶豫令の制定であつて、總て震災以前に於ける貸借關係は其履行を一個月間猶豫し、銀行の預金亦一日の引出高を百圓に限つたのである。若しも變災當時銀行が何等特殊の保護に浴せずして、營業を開始したならば、銀行の有する債權の回收の殆ど不可能であるに拘はらず、預金の取付は店前に殺到し、銀行をして支拂停止の已むを得ざるに至らしめたかも知れず、一般の債務者が破產の窮狀に陷つたかも、測られない。斯る場合に臨んで、政府が支拂猶豫令を制定したことは、機宜の處置であつたと認められ

よう。然も其機宜の處置であつたと云ふことは、極めて短期間を限つて施行される一事を條件として、始めて之を見るを得るのである。換言すれば震災火難の爲めに、罹災地方に於ける經濟社會の組織は全然破壞され、信用取引の如きも氷結して、一所に固着したと同じ形に爲つたものと見られる。隨つて之を融解し、流動せしめるには、國家に於て相當の施設を講じなければならず、其之を講ずるだけの成案を得るには、數日なり、一週日なりを要するであらうから、其間債務を有する者に支拂猶豫の便宜を與へることは、已むを得ざることゝ考へられる。或る程歐洲戰爭當時に於ては、支拂猶豫法が交戰諸國の殆ど總てのものに依つて施行され、當初の施行期限が滿了したに拘はらず、延期に延期を重ねて、存外の永きに及んだ事例がないではないが、是れは歐洲諸國が總て戰亂の渦中に陷り、經濟組織の根柢に動搖を來した爲めであつて、今回の我國の如く、震災火難を蒙つたものは、帝都とは云ひながら、一の東京並に附近の二三地方に止まり、他に何等の災禍に累されない都市や郡村の並立して居るのとは、自ら選を異にする。隨つて我國に於て經濟社會の安定を謀る方策を決定するに、或る日時を要するから、數日間なり、一週間なりを限つて、支拂猶豫令を適用すると云ふならば、其意の存する所を諒とするを得るが、漫然一個月の久しきに亘つて、債權債務の關係を固着せしめたに至つては、之を以つて財政當局者の緩怠であるとしなければならない。

二

斯の如く一個月の久しきに亘つて、支拂猶豫令の施行された爲めに、債權を他人に有する者があつても、之を回收することが出來ず、銀行に預金を有する者も賃銀給料等の支拂に必要なるものを除き、一日百圓以上の引出しをするを得ないことゝ爲つた結果、社會の表面には支拂を停止する銀行も、破産を暴露する債務者も出さゞるを得たが、一方に金融

取引は殆ご絶滅の狀に陷つた。兎に角半日一夜の間に東京の中心地方が燒き拂はれ、物資に大なる消耗の生じたからには、結局之を補給する道を付けなければならない。卽ち資金を有する者が之を運用し、東京以外の地方に就て、物資を調達し、一日も早く之を東京の市場に齎し、市民をして之を購はしめることは、震災火難に依つて、停廢された東京の商業取引を復興する第一の道であつたのであるが、支拂猶豫令の施行は總て是等の活動を不可能のものたらしめた。卽ち支拂猶豫令は債務を他人に負ふことの多き當業者例へば銀行業者の如きものに多くの便宜を與へたに相違ないが、利益は唯、是れだけであつて、却つて震災後最も必要事と目された企業の復興を頓挫せしめた嫌なきを得なかつたのである。

故に私をして忌憚なく言はしめれば、政府が一個月の久しきに亘つて、支拂猶豫令を施行したことは、無策の然らしめた結果とせざるを得ない。極めて短期間を限つて、支拂猶豫令を施行することは、已むを得ざる所であるとしても、其間に於て、確乎たる金融政策を決定し、之をして支拂猶豫令に代らしめる、斯くて一旦凍結した金融を融解せしめることが必要であつた。然らば如何にして此事を成就せしめるかと云へば、其れには日本銀行をして力を金融市場の援助に致さしめる一事を以つて、最も適切でありとするのである。現に支拂猶豫令の期限が到來し、施行後一個月を以つて其撤廢を告げると同時に、政府の爲した所は要するに日本銀行をして金融市場を援助せしめることに外ならなかつた。斯くて凍結した金融を融解せしめる過渡的時期に處するに大過なきを得たのであつて、苟も日本銀行が國家銀行として存立する以上は、非常時の金融市場に對して、此位の任務を爲すのが當然であると考へられる。卽ち日本銀行にして金融市場の安定を謀る目的を以つて、市中諸銀行に對し、寛大なる條件の下に、貸出割引を行ふことゝしたならば、一方に通貨の膨脹は勢の免がれ難き所であるとしても、他の一方に於ては、市中銀行をして其所有する資産の或る部分を現金に代らしめることが出來、斯く現金の增加した諸銀行は之を基礎として、取引先に向つて、信用を膨脹するを得る次

第であるから、此狀態の下に於て、始めて金融市場に於ける資金の流動を自由ならしめるに至るのである。

現に之を歐洲諸國に行はれた戰時の金融政策に徴しても、英國は一方に支拂猶豫令を施行したが、他の一方に於ては通貨銀行券法に據る政府紙幣の增發に依つて、市中諸銀行の支拂準備金の容易に增加され得る道を講じ、續いて諸銀行の所有する手形を現金化することに就て、政府と英蘭銀行と相協力し、斯くて市場の爲めに、資金を流動させることに全力を傾注した趣きがあり、更に獨逸に於ては、支拂猶豫法に依賴しなかつた代りに、開戰の當初から、帝國銀行をして銀行券を增發させ、以つて非常の要求に應ずることゝした。即ち非常の時機に際會して、金融市場の平定を求めようとするには、通貨の膨脹に依賴する外に何等の道はないのである。故に我國に於て震災後直に支拂猶豫令を制定し、其れだけで金融市場を安定せしめるを得たならば、或は一個の行き方として見るに値したかも知れないが、猶豫令を一個月に亘つて施行しながら、愈々之を撤廢する曉に爲ると、所謂日本銀行開放方針の下に、日本銀行をして擔保價格の引上、再割引手形に關する取扱の緩和、取引先の擴張等を行はしめ、手形再割引の爲めに、日本銀行の蒙つた損失に對しては、一億圓まで政府に於て保證することゝ爲つたのである。斯くて日本銀行が如何なる方法に依り、又如何なる程度まで、金融市場に援助を與へるかと云ふことの大體が判明し、支拂猶豫令撤廢後に於ける市中諸銀行の地位を安からしめた次第であるが、此程度の救濟策であれば、何故に十月一日の來るを待たず、其れより以前に、早く之を確定し、支拂猶豫令の施行期間を短縮するを得なかつたのであらうか。政府が當初から支拂猶豫令の下に延期される支拂を一個月とし、隨つて悠々金融上の對策を工風して、其間に於ける金融を梗塞せしめたことは、何としても敏活を要する非常時の施設と云ふ點から見て、至當とするを得ない。其間銀行業者をして一時の小康を貪らしめるを得たらうが、企業者を苦しめた弊害は頗る大なりと考へられるのである。

三

兎に角支拂猶豫令は豫期の如く撤廢され、之に代つて日本銀行の金融援助策が行はれるに至つたと云ふことは、金融市場をして變態から常態に移らしめる所以と解されるが、之を以て我國の銀行が其營業の安全を維持し、進んで帝都復興の事業を助けるを得るに至つたものと考へたならば、速斷の甚だしきものであつて、我國の銀行業は今や震災火難に依つて、一大試練に會し、前途の安否、測り知る可からざる地位に居ると云へる。即ち日本銀行は所謂開放方針の下に市中諸銀行に對する援助の方法を決定したが、如何なる程度まで、銀行の援助に當るを得るかと云へば、決して其無限大であることを望み得ない。蓋し日本銀行は國家銀行として兌換制度擁護の責任を荷つて居るものであつて、常に銀行券の發行回收を按配し、其流通價値の確定を期しなければならない。隨つて日本銀行が開放方針を實現すると云つた所で、固より或る限度の下に、其營業を律し、又其取引先を限ることは、至當の處置であつて、如何なる證券に對しても又如何なる取引先に向つても、援助の手を伸すが如き、到底實行し得べからざる所である。即ち如何なる銀行が如何なる手形の再割引に依つて、日本銀行から資金の融通を受けるを得るか、日本銀行が斯る再割引から損失を蒙つた場合に政府に依つて補償される金額は一億圓に限られて居り、日本銀行にして其損失を此金額の範圍内に止めようとする以上は、取引銀行や、手形の種類に就て自ら嚴重なる差別を設ける必要を生じ、銀行の小なるもの、不生營業上の方針に愼重を缺いたものは、如何に日本銀行が開放方針を聲明しても、其れに依つて援助を受けるを得ない地位に陷るやも測り知るを得ない。震災前に於ても、金融市場の動搖に伴ひ、世人が小銀行に對して疑惧の念を懷いて居つたことは、爭ふ可からざる事實であつて、其一端は預金が小銀行から大銀行に預け替へられることに依つて現はれて居つた。今後同樣の疑

惑に促されて、同様の事實が相次いで發生したならば、小銀行の地位は甚だしき危險に接するものと認めざるを得ない。

玆に於てか小銀行同志の合併を行はせ、其規模を大ならしめると共に、其基礎を鞏固ならしめ、以つて今後の金融市場に殺到する幾多の危險に處せしめようと云ふ說がある。銀行合併の必要は變災以前から、我國に於て唱道され來つた問題であつて、我國銀行業の基礎を鞏固ならしめるには、此問題に適當の解決を下すことの急務なるは論を俟たない所であるが、變災後の今日に於て、遽に此說を唱へるが如き、聊か盜賊を捕へて、繩を綯ふの愚に類するのみならず、銀行の有する資産の價格は今日甚だしく不定であつて、殆ど之を評價するを得ない、商品に對し、家屋に對し、宅地に對して資金を貸出した場合に於ても、有價證券を擔保として、貸出を爲した場合に於ても、其擔保物の如何に依つて、資金回收の難易に相違があり、又擔保物の價格に變動を來した以上は、如何にして一の銀行と他の銀行との間に圓滑に合併計畫の進行を見るを得るであらうか、殆ど其望みなしと考へられる。斯くて小銀行にして其安全を謀らうとする以上は、從來の親銀行に依賴し、親銀行をして其日本銀行から融通して貰つた資金の一部を子銀行に與へる方針に出でしめる外に、適當の道の存せざる次第と爲るのであるが、親銀行たる大銀行に斯く子銀行たる小銀行に援助を與へるだけの餘裕があるかどうか、一個の疑問たらざるを得ない。

四

固より今日の諸銀行が窮狀に陷つた原因の一部は天災に存するのであつて、隨つて不可抗力に虐げられたものと云へるかも知れない、卽ち貸付に對する擔保品が燒失した、手形支拂人が財産を燒かれ、營業を奪はれて、支拂不能と爲つたと云ふが如きは、銀行自身の責任に屬しない所であるが、同時に銀行の平生に於ける營業の宜しきを得ない爲めに特

に今日の窮厄を大ならしめつゝある一事は世人の看過す可からざる所である。即ち平生預金に對する支拂準備金の薄弱である結果、今回の如き經濟上の事變に臨んで、銀行自立の力に乏しいことの如き、常に取引先に對して無謀なる資金の融通を敢てし、取引先や擔保品の精選を怠る爲め、事變に際して、特に危險を覺えるの大なることの如き、積立金の内容甚だ鞏固を缺き、地震の爲めに倒壞し、火事の爲めに煙と爲るやうなもの存するが如き、要するに我國銀行の營業上に於ける缺陷であり、更に之に加ふるに小銀行簇生して、其間に互に無理な競爭を試みると云ふ組織上の缺陷を以つてする有樣であつては、到底事變に處して、銀行業の活動は之を望むを得ない。日本銀行が自ら犧牲を荷ふ覺悟を以て、大小の銀行盡く擧げて、之を保護するか、其れとも自立の能力に乏しき銀行は之を見殺しにして、以つて銀行業界に自然淘汰の行はれることを期するか、今後の重大問題であると認められる。

然しながら日本銀行が震災の爲めに影響を蒙つた九月一日以前の手形を再割引し、又新に割引した手形であつても、共に其終局の支拂期限を大正十四年九月三十日限りとし、債務者をして自己の業務を整理せしめる餘裕を與へた以上は、銀行も手形支拂人も當面の困難は之を免がれるを得た譯であつて、此以上には銀行自身が斯る日本銀行の援助に依つて營業上に收め得た餘裕を以つて、新なる取引を行ひ、以つて變災役の經濟的復興を助成しなければならない道理であるが、市中諸銀行が此任務を爲さうとするに當つて、銀行の實力を控制し、又之を萎縮せしめる事情がある。第一は銀行の所有する公債其他有價證券の市價の著しく低落して居ることであり、第二は是等の有價證券や、商業證券を擔保とした貸出が回收不可能の狀態に陷り、或は全然之を切棄てなければならないことであつて、是等の事情は相重なつて、今後銀行の貸出能力を減退せしめざるを得ない。而して有價證券を擔保に充てゝ、日本銀行に就て、資金の融通を仰ぐに當つては、日本銀行は特別の便宜手段として、國債の擔保價格に就てこそ、短期の場合には、發行價格を以つてし、長

財の場合には、震災前の時價に據らしめることゝしたが、地方債や、社債、株式等に就ては、何れも時價を標準として之に對する幾掛けを以つて、擔保價格を定めることゝした。此事たる、銀行の營業に於て當然爲す可き所であり、日本銀行としては、餘程寬大の處置に出でたものと思はれるが、一方に震災以後有價證券の市價が著しく低落して居ることを考へたならば、如何なる結果と爲るであらうか。斯る證券の市價低落は其所有者の之を擔保として、銀行に就て資金の融通を受けようとする便宜を製肘することゝ爲るであらう。隨つて今後日本銀行が市中諸銀行を援助するとした所で諸銀行をして多く其現狀を維持せしめるに止まり、其以上に銀行の活躍を促すに幾何の資するものがあるか、自ら疑なきを得ざる次第であつて、銀行が全然震災の齎した打擊から恢復して、新なる活動を爲すには、少なくとも二三年の時期を要し、其期間は單に現狀の維持、破綻の囘避を以つて、滿足するの外なきことゝ思はれる。斯る程度の救助であるとしても、兎に角日本銀行が手形の再割引と擔保付貸出とに依つて、市場に資金を供給するからには、其資金は必ず銀行券の形で、世間に現はれ、斯くて通貨膨脹の事相を生ぜざれば已まないであらう。現に日本銀行が十月初旬以來、市中諸銀行の救助を目的とする取引を行つてから、旬日を經ない內に、銀行券の發行高の著しく增加したことを考へたならば、將來に於て惹起さる可き通貨膨脹の勢の如何に大なる可きかは、想像するに難しとしない。今や東京市を始め、東京市を中心とする附近三四縣の生產組織は著しく破壞され、商品の市場に出現する數量甚だしく減少し、假令ひ一時の事相に止まるとしても、各地方から寄贈された配給品の如き、全然商業取引の圈外に立つ物資もあつて、通貨に對する需要の減縮しつゝある際、殊更に通貨の膨脹を謀つたならば、其結果は知る可きではないか。マルクやルーブル程の極端に至らないとしても、或る程度まで、通貨の流通價値は必ず低落し、此點から物價の騰貴を惹起し、金融市場を不安定ならしめることは、何としても免かれ難き所に屬する。故に政府が日本銀行と協力し、上記の如き政策を以つて、金融市

場を救濟することに關聯して、通貨を膨脹せしめるからには、一方に斯く一旦膨脹した通貨を囘收する道が存しなければならない。何を以つて通貨の囘收法とするかと云へば、其一は金利步合の引上であり、他の一は公債の發行である。

五

私は過般支拂猶豫令制定の際、同令の下に延期される貸借に對しては、普通世間に行はれるよりも、遙に高率の利子の賦課されることが必要であり、又合理的であること、同令に於て利子に關する何等の規定の存せざることを以つて、一の缺點であるとした。而して之に次いで金融市場救濟の政策の發表されるや、日本銀行は擔保付貸出の利率を定めて、國債擔保貸に於て、二錢二厘を、其他に於て二錢四厘を以つてする旨を公にした。異常の時機に際會して異常の取引が行はれる。而して其異常の取引には多くの危險が伴ふとすれば、之に對する金利の高いのは當然である。而して斯く金利步合の引上げられることに依つて、第一救助を受けるに當つて、眞實高利の負擔に堪へ得る者だけが資金の融通を求めることゝ爲り、第二一旦資金の融通を仰いだ者も金利の高いことに制されて、成る可く早く資金を決濟する手段に出で、斯くて一度び膨脹した通貨も久しからずして、舊狀に復する道理である。然も政府は世間の希望に背くことを恐れる爲めか、其れとも低率の金利を以つてする必要ありと信ずる爲めか、今日に至るまで依然として金利步合を變災以前と略ぼ同等の程度に置かうとする。斯の如くしたならば、通貨の膨脹を惹起するのは當然の勢ひであり、通貨價値の低落によつて惹起された物價の騰貴は更に通貨の膨脹を餘儀なくするに至るであらう。其結果として金融市場の趨勢の攪亂されることは、吾人の何としても忍ぶ能はざる所である。

公債の發行に依つて、通貨の膨脹を制すると云ふ策は從來我國に於て屢々試みられた所である。固より公債の發行に

依つて、其拂込代金として國庫に囘收された通貨が其儘直に經費として民間市場に向つて撒布されたならば、通貨の囘收に何等の效果を奏しない譯であるが、通例兩種の手續の行はれる間には或る時期の隔りがあり、其隔りのあるだけ通貨の一時的縮小を生ずることゝ爲る。一時的縮小であるとしても、其手段の簡便である故を以て行はれ易いのである。今や我國に於ては復興事業が如何なる輪廓や、如何なる內容を以て實行の緒に就くを問はず、其財源として公債を發行する必要の目睫の間に迫つて居る以上は、今通貨縮小の手段として公債を發行することも、最も行ひ易き所である。然も此手段すら行はれない事實を以てすれば、政府は一方に通貨を膨脹せしめる手段を講じながら、他の一方に之を縮小する政策を遺忘したものと見える。斯の如き一方に偏して事の中正を失した政策は私の斷じて不可なりとする所である。

六

今後經濟社會の形勢の推移するに隨つて、金融市場の安定に重大なる關係を有するものは、外國貿易の狀況である。從來と雖も、我國の貿易は輸入超過の方嚮に居ることを免かれなかつた。畢竟近年我國に於て諸物價の相次いで騰貴したこと、製造業者殊に輸出品の製造業者が外國に於て輸出品の市價を餘りに高からざらしめる爲めに、粗製品の濫造に勉めたこと、歐洲戰爭並に戰爭直後の混亂時代に於て、世界到る所の市場に擴張された我國輸出品の販路が平和の克復、歐米諸國の經濟整頓と共に、次第に諸國の商品に依つて、蠶食されるに至つたことの諸事實は擧つて我國の輸出貿易を不振の狀態に陷らしめ、貿易に逆勢を生ぜしめた有力なる原因と見られるが、變災後の貿易は如何に變動するものと考へられるであらうか。震災火難を蒙ることの最も甚だしかつた東京橫濱が生産地でなくて消費地であつた一事は、物資の生産に及ぼす打擊を寡小ならしめるを得たと云へるが、尙ほ東京では本所深川兩區に於ける生産業、橫濱では市の郊

外に於ける工業、京濱兩市の中間に位する川崎鶴見附近の工業が根本的に潰滅したことは、生産業の衰頽を惹起す直接の原因と爲るし、更に横濱が生絲輸出市場として金融、運送、取引の能力を一時喪失し、其後に於ても、十分に之を恢復するに至らない一事は輸出貿易に對する重大なる打撃たらざれば已まないであらう。而して一方に輸入の方は如何と云へば、今後帝都の復興に要する物資の多くは外國の供給に俟たざるを得ない、殊に復興に要する年限を短縮し、短期間に之を完成しようとする場合には、勢ひ外國に就て供給を仰ぐ可き物資の數量の増加することを以つて當然とするのである。現に政府が外國物資の輸入を必要とし、之を容易ならしめる爲めに、在外正貨の拂下を寛大なる條件の下に行ひつゝある一事に徴しても、輸入の増進、斯くて生ずる輸入の超過は已むを得ざる事相に屬する。而して貿易外の關係に於て、從來日本の受取勘定に屬したものゝ内、外國人來遊消費金の如きは、當分減少するであらうし、火災保險金問題は如何に解決されるか之を知るを得ないが、解決の道宜しきを失し、會社の基礎を薄弱ならしめるに至つたならば、爾來外國保險會社に契約を締結する者續出して、保險料として我國から外國に支拂ふ可き金額増加し、輸入超過に加ふるに、國際貸借の全體をして我國に取つて、不利のものたらしめることを免かれないであらう。斯の如く輸入超過の免がれ難き勢に屬する一方に、對外債權の收入減少し、輸入超過に對する決濟の行はれる度毎に、我國の政府又は日本銀行の内外に所有する正貨に著しき取付を來す狀態と爲つたならば、其結果として内國の金融市場を不安ならしめざるを得ないであらう。

七

次に一考す可きは公債と金融市場との關係である。從來我國に於て、公債政策が濫妄であり、民間の應募力を超過す

る公債が頻に發行され、其發行に就て、民間の應募引受を强要する爲めに、金融市場を壓迫する弊の著しかつたことは明白の事實であつた。現に在來の計畫に據れば、公債を財源とする經費は本年度に於て、一億五千九百萬圓に、明年度に於て、一億六千二百萬圓に上り、然も年々償還期限の到來する公債は數億圓を數へ、之に對して借換公債を發行する必要あるに於ては、公債政策に行詰つたものと云はなければならず、强いて之を進捗せしめれば、其れだけ金融市場を壓迫する結果を生じたのである。今回變災後の財政方針を定めるに當つて、政府が第一に公債政策の打切りを聲明し、之に副うやうに財政全般に亘つて、緊縮を加へることゝしたのは、頗る機宜に適した處置であると考へられる。然しながら一難過ぎて、他の一難に接するが如く、東京市の復興に要する財源として、今後何としても多額の公債の發行される一事は世人の覺悟しなければならない所であつて、其發行の爲めに金融市場に及ぼす關係は頗る重大なるものと爲るのである。復興事業に要する經費は或は十五億圓に上ると云ひ、或は二十億圓を超えると云ひ、正確なる數字は如何にするも、之を確めるを得ないが、其金額の莫大であることは論を俟たない。從來一會計年度を通じて、二三億圓の公債の發行される場合に於ても、尙ほ其應募の容易なるを得なかつたことを考へたならば、之に數倍する公債の發行の殆ど絕望であることは、何人の腦裡にも浮ぶ所であらう。然も公債の發行に依つて相當の財源の調達されない限り、復興事業は一歩だも進めるを得ないとすれば、私は一方に公債の發行を容易ならしめる工風を講ずると共に、他の一方に於ては、公債の募集し得られる金額の多寡、其募集し得られる期間の長短に依つて、復興事業の規模又は其完成される年限を伸縮する必要を生ずるものと考へる。

然らば此際公債の發行を容易ならしめる爲めに、萬全の方策を凝らさなければならない次第であるが、其方策として如何なるものがあるか、私は左に其要項を擧げて順次說明を試み、殊に金融に對する關係を明にしたいと思ふ。

第一、小額面公債の無限發行を行ひ、全國に散在する郵便局をして應募の事務に當らしめること。

公債の無限發行は歐洲戰爭に際し、交戰諸國に依つて、行はれた所であつて、要するに應募者の方に應募の財力の出來るに隨つて、之を爲さしめる趣意に外ならない。殊に公債の額面を小にするなり、拂込の回數を數多の時期に分割するなりしたならば、零砕の資金を有する者も公債に應募するを得ること〻爲る。震災以來一箇月餘を經過した今日に至るまで、政府が震災救助の爲めに支出した經費は早くも勞働者其他の階級に撒布され、彼等の消費力を增大したこと著しきものありとされる。今後復興事業が進行したならば、斯る勢の益々大なる可きは疑を容れざる所であるから、下層階級の消費力增加に依る物價騰貴の傾向を制する點から云つても、國庫に相當の財源を收める點から考へても、小額面公債の無限發行を爲すことは、最も必要の處置であるとしなければならない。

第二、公債の利率に關する從來の標準を打破し、適宜之を高からしめること。

我國は公債の利率に關して、或る場合には四分利を標準としたことがあり、近年其維持され難きに至つて、五分利を標準とすること〻爲つたが、震災前に於ても、五分利標準を以つて、公債を發行することは困難であつて、其發行される度每に、日本銀行の背負込みと爲るもの少なしとしなかつた。震災後信用取引に圓滿を缺くこと甚だしく、資金の供給亦著しく減少した以上は、金利步合の上進したことは勿論であつて、隨つて公債の五分利標準を維持するが如き、到底行ふ可からざる所に屬する。公債の期限が短かく、又は其据置年限が短かい以上は、一時金融上の狀況に依つて、利子步合が高率に置かれても、遠からず低利公債に借換へられるのであるから、永く財政に向つて不利の影響を及ぼすものではない。

第三、民間の事業會社の行ふ外資輸入を自由にし、寧ろ其盛に行はれるを期すること。

國家の行ふ外資輸入に就ては、別に之を論ずる。從來我國に於ては經濟財政上に國家中心、國家至上の主義が無遠慮に行はれ、國家自ら外資を利用する必要を生ずる場合には、民間事業家の外資を利用することを制限し、斯くて國家自ら外資を輸入するに當つて、有利の條件を以つてしようとした。然しながら今日の我國に於て必要であることは官民の協力に依り、或は官民其れぐの志す所に據つて、復興事業を進める一事である。民間に於て復興事業を行ふ爲めに、外資を必要とし、其輸入を計畫するに當り、政府が自己の都合に着眼して、之を妨碍するが如き、國家全體として復興事業の進行を速かならしめる所以とするを得ない。斯る場合には政府は民間事業家に依つて、外資の輸入されることを自由にし、或は之に相當の援助を與へ、其結果として民間の財力の涵養されたならば、之を利用して、內國債發行の財源に充てることを以つて、得策とするのである。

第四、國家自ら經費を節約し、民間の財力を增殖するに資すること。

今回の震災に依つて、東京其他の震災地は勿論是等の諸地と經濟上の關係の厚かつた全體の地方の財力に減縮を來したことは、蔽ふ可からざる事實であつて、今後幾年を通じて、各種の租稅を始め、官業や專賣事業の收入に減少を來すことは、之を免かれない。或は此際奢侈品なり、奢侈的行爲に對して課稅する說もあるが、是等の租稅たる奢侈禁遏の意味を有するものであつて、隨つて是等を通じて、多大の收入を得ることは、到底望み得ない所である。隨つて是等以外に眞實國庫に增收を與へるが如き租稅を增徵する說もあるが、財力疲弊し、又今後の復興事業に就て、民間の資本家自ら資金を必要とする場合に殊更に國民の負擔を重くするが如きは、當らざるの甚だしきものである。寧ろ國庫收入の減少した以上に、國家の經費を節減し、國民經濟に餘裕を生ぜしめることを以つて、內國債に對する應募を盛ならしめる所以とするのである。

政府が財政の規模を縮小する一端として、非募債主義を勵行し、公債財源の事業費を節約して、或は之を後年に繰延べ、或は之を削減したのは、時局に行はれた政策として、最も可なるものであつて、其金融上に及ぼす效果亦少なしとしないであらう。唯此點に就ては、地方民の間に積極政策に依る利益を奪はれたことから、自ら苦情を生ずる一方に政友會の如き、地方民心に迎合する卑劣なる黨派的根性から、積極政策の廢棄に反對するかも知れないが、此政策の如き本來實行不可能のものと爲つて居つたのであつて、地震を機會として、之を打切るが如き、當然の處置であり、政友會の異論の如き何等重きを置くことを要しない。

第五、私人經濟に於ても亦節約を旨とし、貯蓄金の增加に依つて、財力を涵養すること。

私は從來節約論なるものを好まなかつた。蓋し節約の爲めに、私人に勤勞に對する刺戟を薄からしめることを恐れたからである。然しながら今日の如き非常時に際會しては、節約は財力涵養の爲めに、已むを得ざる手段であつて、各人とも其生活に於て冗費を省約し、生活を簡素にし、一方に其業に勉勵して、始めて財力を豐かならしめるを得るのである。

八

右の如く幾多の方面に亘つて、施設したならば、或は内國債に依つて、若干額の收入は之を求め得られるであらう。然しながら利率の高き内國債を以つて、金融市場に臨むことは、自ら財政を通じて金融を壓迫し、一般金利步合を高からしめる所以である。金利の高きことは、國民の貯蓄を奬勵し、總て資本の增殖を來す效果を齎すものであつて、私の是認するを辭せざる所であるが、世間には之を以つて經濟的復興の大妨害であると考へ、此點に立脚して、内國金融市場

を壓迫するが如き內國債の發行は出來るだけ之を囘避し、內國債に代つて、外國債を募集するの必要を唱道するのである。震災以來一方に復興計畫の議せらるると同時に、他の一方に外債募集論の世間に出現し來つた所以は卽ち右の事情に胚胎するものであらう。私は今英米兩國の現下に於ける金融事情が果して我國の復興事業に於て必要とするが如き大なる募債の行はれることを許すや否やの問題は之を論じない。假に英米兩國に於て、或は其孰れかに於て、相當金額の募集が成立したものとして、其內地金融市場に及ぼす影響に就て考へると、本來外國に於ける募債には其收入金を支辨する方法から考へて、二樣の別がある。第一は外債の收入を以つて、我國の對外債務を決濟する用に充てようとするものであつて、通例對外債務の加重した場合に行はれて、效果ありとする。我國の如き今後の貿易趨勢を案ずると、輸入超過と爲ることは、必至の事實である。輸出貿易の減退が此事實を齎すこともあるが、此重なる原因は復興事業に關聯して物資の輸入の盛に行はれることに依する。而して此支拂が我國の財力に依つて、容易に爲されるかと云へば、大なる不安が伴ふ。我國の內外に亘つて有する正貨は近時多少減少しつゝありと云ひながら、尚ほ相當の巨額に上つて居り、隨つて一部の支拂は在外正貨を以つて、之に充てるを得るであらうが、我國財政の信用を海外に維持する爲めには、此正貨は濫に、又遽に之を減少せしめることを許さない。正貨の現在高に於ける增減と財政の信用に於ける高低とを相繫聯せしめることは、甚だ愚なる事相であつて、私の與ばざる所であるが、我國財政當局者の多年に亘る財政方針が斯る狀勢を馴致して了したのであるから、今日に至つて、之を如何ともするを得ない。在外正貨に就ては、或る程度まで其拂下げの行はれることに依つて、輸入貿易決濟の資金と爲り、事實輸入貿易を促進するに至るであらうが、政府としては決して永く在外正貨に依賴せず、別に外債を募集するの擧に出るであらう。此場合に外債を輸入品の支拂に必要なる部分に限る、換言すれば外債の收入金を物資の形態で、內地に囘收するならば、內國金融なり、經濟社會の全體に及ぼ

す影響は寡小である。然しながら外債を右の程度に止めず、外國市場の應募力の大である場合に、其大なるに乘じて、輸入品の代金決濟に必要であるより以上に、之を募集し、在外正貨を其儘正貨準備に繰入れたり、又は其一部分を内地に囘收したりして、之に對して銀行券を增發したならば、一時内國の金融を緩和する效果は之を齎すを得るとしても、次いで來るものは物價の騰貴であり、不景氣の到來であり、金利の上進であつて、經濟社會を攪亂する危險大ならざるを得ない。政府は斯る危險を覺悟してまで、尚ほ多額の財源を外債に求めようとするものであるか、外國の應募力は姑く別問題として、我國の外債を募集する程度の如何は内國經濟社會に及ぼす影響の如何を決定する一要素と爲るものであつて、私は大なる外債の募集、其收入の國内利用に依つて生ずる影響の容易ならざるを知るが故に、復興事業に要する財源を調達する場合の方針としては、第一、外國に供給を仰いだ物資の代金決濟の爲めに、外國債に依賴すること、第二、右以外の財源は總て内國債に依賴すること、第三、隨つて内國債の募集を要する金額大と爲り、到底國民現在の資力を以つて應募に堪へないとか、短かき期間に募集を完うするを得ないとか云ふやうな場合には、或は復興事業の規模を縮小したり、或は其完成の年限を延長したりすることの必要を生ずるものと考へるのである。

世間に外債募集論の頻に唱道される一の理由は内國債に比較して、外債の利子の低廉である可き一事に存するのであらう。然し事實は果して此豫想を裏切るが如きことなしとするを得るであらうか。歐洲諸國の金利步合の低廉であり、資金の供給豐富であつたことは、今日と爲つては或は戰爭前の舊夢に類しはしないであらうか。英國の如き最近一兩年間經濟上の狀態は次第に舊に復しつゝあるが、其一年間に行はれる對外放資の金額は戰前の半ばにも達しない。國内金利の標準も亦高く、以前發行された日本の外債も市價に著しき下落を示して居る一方に、合衆國も戰爭中に生じた對歐債權の囘收意の如く爲らざる爲めに、一國を擧げて對外放資に不安の趣きがあり、經濟社會の復興亦豫期の如く爲るを

得ない。隨つて斯る場合に日本の豫期するが如き巨額の外債が果して英米兩國に募集されるかどうかに就ては、自ら疑なきを得ないばかりでなく、兩國の資本家が自國の製造工藝品を日本に輸出する便宜を得る爲に、募債の成立に努力した所で、其利子は必ず高からざるを得ない。外債の利子の高いと云ふ其事は内國の金融を壓迫するに十分の力を持つのみならず、斯く外債の利子の高い以上は、民間諸會社が外資を輸入する場合に當つても、此高い外債の利子を以つて標準利率とする爲めに、自然高利を負擔せざる可からざることゝ爲り、此事が更に内國の金融市場に不利の影響を及ぼすに至るであらう。然らば政府が震災以後今日に至るまで、不自然に金利步合を低廉ならしめよう、少なくとも其高騰することを回避しようとする努力に何の價値が認められるであらうか。不自然に金利步合の低い間、國民の警戒的思慮を薄弱にし、貯蓄の行はれることを妨げるだけであつて、結局金利は其騰貴す可き所まで騰貴する必然の運命に居るのである。

九

今後我國の金融政策が如何なる方嚮に向つて動くかは、私の豫想に苦む所であるが、其遂行上に、種々の困難の存することは、豫め覺悟を要する點である。而して其困難たる、多くは平時の不用意の齎した結果であると云へる。銀行の如き今日までの經過に徵すれば、其多くのものは開業し、引續き休業の已むを得ざるものは少數に止まるやうであるが、開業した銀行盡く堅實なる基礎の上に居ると見られるかどうかは一個の疑問であつて、今後金融市場の波瀾の漸く大なるに隨つて、如何なる失態を演出するものあるやも、測り知るを得ない。一旦開業して、營業上に失態を暴露し、爲めに相當の地步を占める銀行にまで、公衆の不安を懷かしめるよりも、怪し氣な銀行は始めから休業を續けて居る方が却

つて銀行業界の全體を保持する所以であるとも稱される。斯の如く我國銀行業の基礎が堅實を缺き、大小の銀行盡く直接なり、間接なり日本銀行の保護に浴しなければ如何ともするを得ない。今後の復興に就て、如何に民間に資金の需要が増進しても、銀行自ら信用を膨脹して、之に應ずるを得るか、一般に疑の眼を以つて、眺められて居ると云ふのは、要するに平常銀行が一の市場に於て規模の大なるものと、其小なるものとを問はず、餘りに數多く對立して、劇烈なる競爭を試み、營業に幾多の危險を冐して、其所有する資產の堅實を求めない一方に、過度の信用膨脹を爲す爲めに、銀行の預金に對する支拂準備金比率の薄弱であるの致す所である。市中の諸銀行は近年頻に建物を改築又は新築し、輪奐の美、外觀の壯は共に人目を眩惑せしめるものがあつた。然も今回の震災火難に際會して、能く其安全を保ち得たものは三菱銀行位のものであつて、他は盡く原形を失ふ程の損傷を蒙り、甚だしきに至つては、何れに何銀行の跡を求む可きか知る由のないものすらある。世間公衆の資金を預託される故を以つて、建物の堅牢を要するは、銀行經營の第一義であつて、銀行の資本金の如き其多くは建物を代表するとも見らる可き次第であるのに、其建物が斯の如く脆弱であつて地震や火災に一溜りもなきものを以つてして、何として銀行の信用を公衆に及ぼすを得るであらうか。然も我國銀行に憂ふる所は斯る外觀の脆弱であるばかりでなく、外觀と共に其內容の堅實を缺く點ではあるまいか。今日まで我國に行はれた金融政策は何處までも政府と日本銀行との協力に依り、銀行に出來るだけの援助を與へ、斯くして一の銀行にも瑕疵を生ぜざらしめることを期するものゝ如くに見えた。斯る保護政策の優渥なるもの亦不可なりとしないが、然も國家の力は能く斯る廣大なる邊にまで及ぶを得るであらうか。日本銀行の手形再割引に依つて蒙つた損失に對して、政府の補償する金額を一億圓に限つたのは、國家の金融政策に或る限度の存することを示した顯著なる事例とするに足りる。而して日本銀行は其國家銀行たる本質に顧みて、政府から補償される一億圓の限度を超過する損失を賭して、再割引に依つ

て、金融の便を謀るか、又は他の方面に於ける營業に依つて、損失を致てする覺悟があるか。日本銀行が積年莫大なる利益金を獲得し、而して其利益金の生ずる源泉が專ら國家に依つて與へられた特典に基くものである以上は、今日の如き非常の秋に當つて、自ら覺悟するものと考へられるが、本來の組織の株式會社であり、營利機關であることが之を許すかどうか、明なるを得ないのである。

十

右の如き次第であつて、銀行中其規模の大なるもの、取引の範圍の廣大なるもの、平生日本銀行に對する關係の密接なるものは先づ營業を開始して、其任務を盡すを得るとしても、他の小銀行に至つては、今後の運命に於て、其活動に於て豫想するに苦しむ點があり、隨つて是等小銀行と平生取引することを常とした小規模の商工業者に對して、如何にして金融の便を與へるかと云ふ問題を生ずる。帝都の經濟的復興には種々の意義が存するであらうが、社會の組織を堅實にして、其全體の發達に資すると云ふことが眼目でなければならず、此點から考へれば、小規模の商工業者の立脚地は之を重要視する必要がある。若しも小商工業者に對する保護にして閑却されたならば、彼等の從來經濟組織に於て占め得た地位は大資本家の襲ふ所と爲つて、資本主義の跋扈を助長する一方に、社會には資本家と其れに隷屬する被傭者とが對立し、獨立の地歩を擁する小商工業者の存立する餘地なからしめるであらう。斯の如きは社會組織として、極めて不健全なるものであつて、隨つて私は何處までも彼等の存立を援助する爲め、彼等の間に適當なる地域を區劃として、組合を組織せしめ、組合全體の信用を基礎として、日本勸業銀行の如き、將た又日本興業銀行の如き機關に於て、店舖工場の建築に、商品原料の仕入に其れ〴〵資金を融通することを以つて、必要とするものである。

固より今日の如き非常の時期に際會しては、非常の處置を要することは勿論であつて、平常爲すが如き所に拘泥したり、又變災前に定められた規律に束縛されたりして居つては、到底非常時に處して、萬全の效果を望み得ない。而して金融機關が非常の處置を爲して、損失を蒙つた場合に、其非常の處置にして公共の利益を擧げる爲めに必要のものであつた以上は、國家自ら之を負擔することも亦道理ある處置であると認められるのである。

大正震火災誌

豫約募集

千古を通じての悲慘事として今回の凶災が我國民へ與へた影響は寧ろ余りに巨大に過ぎた。震災と火災との挾擊によりて東京市民はもとより、關東一帶の人心は恟恟として其爲す所を知らなかつた。

そして此の大震火災を記念すべく數百の雜誌、書籍が刊行されたが、それは此凶災を記念するには餘りに雜駁であり、粗造であり、淺薄であり、非學術的であり、人力の精粹を集中した權威あるものではなかつた。

本社は今回の凶災を千古に傳ふべく、各方面の權威たちに依囑して完全なる震災誌刊行を企劃した。其執筆者の顏觸れよりするも、取材の範圍、內容の正確よりするも類書に卓然として一頭地を拔くものであることは一目瞭然である。我社は本誌に於ても我社の標語たる權威を失はざらんことを讀者に誓つて恥ぢざるものである。千古に生命を有する本書が幸に我誌愛讀者の坐右に備へらるる所とならんことを希望します。

豫約規定

（一）頒布方法

本書は非賣品にして豫約申込者のみに頒つものとす。

（二）體裁

洋裝、四六倍大版、脊皮兩面クロース、金文字天金函入、全壹冊、寫眞百頁、本文八百頁內外、他に挿入寫眞百數十、新型縱組。

（三）刊行

大正十三年二月申込順により配本。

（四）申込金及期日

豫約申込希望者は、申込金五圓を添へ、來る十二月三十一日迄に申込まれたし。

（五）拂込金及期日

（甲）分拂

第一回分は申込金として五圓申受く

第二回拂込金五圓は大正十三年一月二十日限り

第三回拂込金五圓は大年十三年二月十五日限り

（乙）一時拂

金拾參圓五拾錢とす。

（六）送本料

凡て拂込金の外に左の送本料を要す

市內	十二錢
地方	五十四錢
朝鮮、滿洲、南洋、樺太、臺灣	八十五錢
支那	九十錢

（七）注意

大取次店小賣店を經て申込まれたる分も十二月三十一日迄に申込金を本社に於て受領するに非ざれば豫約の效を生ぜず。

（**非賣品** 本書は非賣品なれば豫約者以外は絕對に購ふこと能はず）

刊行所 東京芝區愛宕下町 振替長野三二八〇 改造社

見よ←大正大震火災誌の偉觀を→見よ

大正大震火災誌内容一般

■裝幀……平福百穗

■雲煙遠望……理學博士 長岡半太郎

地圖

△震災區域及震源地（震度 震幅挿入）……帝國大學調査

△東京、横濱火災圖（火災系統、燒死者數挿入）……帝國大學調査

△地質變動圖……帝國大學調査

■寫眞……百頁

地震誌

理學博士 今村明恒……理學博士 寺田寅彦

理學博士 中村左衞門太郎……地質調査所長 井上禧之助

理學博士 石原純……理學博士 長岡半太郎

△地震日誌……帝國大學地震學敎室

火災誌

△東京横濱……警視廳消防署調査

△房總地方

△鎌倉及湘南地方……内務省調査

△火災日誌……帝國大學物理學室

△火災と藥物……理學博士 越智主一

△震火災と風測……理學博士 岡田武松

△火災時に於ける旋風……理學博士 寺田寅彦

災害誌

△宮廷……宮内次官 關屋貞三郎

△都市……東京市長 永田秀次郎……横濱市長 渡邊勝三郎

△地方……内務省地方局長 潮惠之輔

△鐵道……鐵道省書記官 鶴見祐輔

△港灣……海軍省水路部

△漁港及漁場……水産講習所

△通信……遞信省通信局長 米田奈良吉

△官公衙（外國大、公使館）……外務省歐米局長 廣田弘毅

△學校……文部次官 赤司鷹一郎

△史蹟、名勝、天然記念物……文學博士 柴田常惠

幸田露伴……理學博士 三好學

△火災と樹木……林學博士 白澤保美

△社寺（神社、佛閣保護建築物）……中川忠順

△建築……早大敎授 岡田信一郎……工學博士 伊東忠太

△書籍及新聞雜誌……内田魯庵……工學博士 武田五一……千葉龜雄

△美術……今泉雄作……中川忠順

■政治誌

■戒嚴令……地圖……警備……救護

■敎育及學藝……文學博士 松本亦太郎

■災害と思潮、人生觀の變動……法學博士 末弘嚴太郎……長谷川如是閑

衞生

△脚氣……醫學博士 稻田龍吉

△眼科……醫學博士 石原忍

△傳染病……醫學博士 二木謙三

△精神病……醫學博士 杉田直樹

■災害と法律及犯罪……法學博士 穗積重遠

■演劇及民衆娛樂……中村吉藏……河竹繁俊……權田保之助

■藝術……久米正雄……早大敎授 片上伸

■商工業……東京商業會議所書記長 服部文四郎

■財政金融及保險……法學博士 堀江歸一……大藏省國債課長 青木得三……法學博士 森莊三郎

救護誌

△宮廷の御救恤……宮内省書記官 大谷正男

△外國の同情と義捐……外務省歐米局長 廣田弘毅

△物資（食糧、被服）……收容設備

△醫療……交通（通信及航空）……臨時震災救護事務局事務官 稗方弘毅

△全國青年團及在鄉軍人會の活動……震災救護事務局

△社會團體の活動……生江孝之

△帝國大學情報局の活動……法學博士 穗積重遠

△勞働總同盟の活動……鈴木文治

△婦人團體の活動……日本女子大學校家政部長 井上秀子

△失業及職業紹介（智識階級）……（熟練工）……（自由勞働者）……生江孝之

■バラック問題……社會現象

■鮮人問題……法學博士 吉野作造

■自警團

■社會主義者問題……法學博士 吉野作造

遭難記

△遭難名士誌（實際に遭難したる者文壇名士二十餘名）

久米正雄　室生犀星　芥川龍之介　德田秋聲

里見弴　有馬生馬　宇野浩二　久保田万太郎

谷崎潤一郎　與謝野晶子　正宗白鳥　島崎藤村

山本有三　藤森成吉　秋田雨雀　其他文壇諸家を網羅す

■社會現象心理學的觀察……文學博士 桑田芳藏

■流言、蜚語、大杉問題、横領掠奪

■復興計畫……復興計畫の最初より決定に至るまでの經過と其完成方法を錄す

■詩歌俗謠

■自由畫、漫畫

■スケッチ

帝都の建設と創造的精神

帝都の建設と創造的精神

安部磯雄

總論

帝都の新設は必ずしも帝都の復興以上に經費を要するものとは限らない。徹底的に都市計畫を行ふても遣り方如何によつては比較的低廉に其目的を達することが出來る。此際私共の最も虞れる所は帝都復興の局に當る所の人々が經濟的理由から根本的都市計畫を斷念し、結局姑息なる復舊案を贊成するに至りはせぬかといふことである。都市計畫の細目は後廻しにして、單に其根本方針を定むることにすれば、其れに要する費用は必ずしも多額でなくてよい。姑息的に帝都の復興を計畫すれば、其後に至り絶えず市區改正の必要を感ずることになるから、結局多大の經費を要することになる。

假に或論者の言ふが如く、帝都を他の適當なる場處に移すとする。これは全く帝都の新設であつて、其の復興ではないけれども、新設費が復興費よりも必然多額であるとは限らない。若し單に經濟上の立場からのみ見るとすれば、新設費の方が遙に少額であると信ずべき理由がある。

暫く遷都といふことは論外にしても、現在の帝都の位置を今少し北方に移し、其處に新なる都市を築き、下町方面の土地は一切建築地として用ひないと假定したならば、比較的僅なる經費を以て理想的都市を建築することが容易でないかと思ふ。第一に東京市は多くの困難なくして郡部の土地を廉價に買收することが出來る。從つて道路や公園を新設するにも多額の經費を要するといふ心配がない。本所深川は言ふまでもなく、下町全體の地盤は極めて脆弱であるため、建築物の基礎工事に多くの無駄な經費を要することになる。故に此際帝都の位置を少しく北方或は西北方に移すといふことだけでも、大事業であるが如く見えて、其實經濟的には大なる利益である。

以上は單に假定に過ぎないけれども、これによりても根本的改造が必ずしも多額の費用、即ち姑息的復興事業よりも多くの經費を要するものでないことが判る。

都市の生活には三つの重要なる條件がある。第一に私共は都市が完全に衞生的であることを要求する。あらゆる傳染病を撲滅することは勿論、田舍の人々と同樣若くは其以上に健康を增進する設備を有したいと思ふ。第二は生活上の便利であつて、水道、瓦斯、電氣は言ふまでもなく、立派なる道路の外に電車自動車の如き運輸機關の供給されることを希望する。私共は更に美術心を滿足せしむるといふ欲求を有して居るから、都市の美觀といふことが第三の必要條件となつて來る。然し私共は此三要求を滿足せしむるにも其間に自ら緩急の差があることを考へなければならぬ。私共は如何に貧乏の狀態に居ても完全なる衞生設備の必要は痛感するに相違ない。然し特別の場合に際しては何人も多少の不便をも忍ぶ位であるから、豐富なる資產を有する者の外は美觀などといふ贅澤なる欲求をなす者があらうとは考へられぬ。此際私共が當局者に勸告したいと思ふのは、都市の美觀を將來の問題として殘し置き、先づ衞生設備に關して徹底的改造を行ひ、尚ほ餘力あらば生活の便利といふことに就ても思ひ切つた計劃を立てるといふことである。これは決して多額の經費なくては實行不可能といふが如き性質のものではない。

多額の經費を投じないで歐米にも見ることの出來ないやうな理想的都市を新設するといふところに創造的精神の發現があると言はねばならぬ。東京市を復活せしむるのなら凡人にでも出來る藝當である。少しだけ道路の幅を廣げたり、新道路を開いたり、公園の數を增加したり、防火線を設けたりするのでは全く以てお話にならぬ。此際歐米の都市を模倣するやうなことは斷然中止してもらひたい。彼と我とは富の程度に於て少からぬ差異があるのだから、此點で競爭することは馬鹿げたことである。然し歐米の諸都市でも多年の積弊に苦められて一刀兩斷の處置に出ることの出來ぬやうな問題を澤山有つて居る。一坪四五萬圓にも地價が騰貴して居る部分に於ては市區改正の實行は殆んど不可能である。世界の大都市は土地問題だけにでもどの位頭を惱まして居るか知れない。ロンドン市でもニューヨーク市でも自動車の往復の劇しき街路に於ては人も車も十字街に來る每に立往生を餘儀なくされる。將來の大都市はこんな問題をも考慮の中に置いて設計さるべき筈ではないか。

歐米の都市に比すれば東京市は全く白紙のやうな立場に立つて居る。市民の覺悟次第で如何なる都市でも新設することが出

[illegible]ふ點に於て恰も革命の渦中に投ぜられて居るやうな氣がする。衆人が此心を失はずに進んだならば、歐米に見ることの出來ぬやうな新都市を建設することは決して困難でない。前に述べた如く私は歐米の都市よりも一層立派な都市を造らねばならぬと言ふのではない。唯衛生上、便利上優勢なものを造り得れば其れで私は滿足する。尚ほ土地問題を適當に解決さへすれば十數年若くは數十年後に至り、美觀といふ點に於ても歐米の諸都市を凌駕することは決して困難でないと信ずる。

郡部の支配權

震災以前の東京市には常に困難なる問題が伴ふて居た。市の隣接町村が驚くべき速力を以て膨脹しつゝあつたに拘はらず、市はこれに對して十分なる管理權を行ふことが出來なかつた。其結果若し隣接町村が將來東京市に編入される曉には當然市との聯絡を保つために大々的市區改正を行はねばならなかつたのである。然しこれは決して過去の問題ではなく、震災後の今日に於ても尚ほ一層重要なる事件となつて殘つて居る。東京市は自治體となつてからも常に東京府、警視廳、內務省の監督を受けて居たから、大東京市を造らねばならぬといふ今日に於ても[illegible]のためにはどの位大なる障害であつたかも知れない。

帝都の復興事業は中央政府の手で實行することになつた。これがため東京市は當分東京府や警視廳の干渉を受くる心配がなくなつた譯である。然し復興事業が終りを告げた後再び東京市が東京府の下に立つことになつたならば、東京市の困難が茲に復活して來るのは明である。如何に整然たる新東京市が再現するとしても、隣接町村が今日の如く不規律に發達するやうでは其處にも亦市區改正の必要が起り、將來莫大なる經費を要するに相違ない。故に中央政府は此際帝都復興事業を自分の手で行ふと同時に、郡部に對しても大體の計畫を立てることが必要ではないかと思ふ。若し自らこれを行ふことが適當でないとすれば、此際特別の法律を制定して東京市に郡部の管理權を與へるのが得策ではないか。

私が後に述べんとする種々なる計畫は單に東京市のみではなく、當然郡部にも適用さるべきものである。都市といふ自治團體から見れば市部と隣接郡部との間に何等相違のあるべき筈はない。強いて相違があるとするならば、私は寧ろ市部よりも先づ郡部のために市區改正や其他の改良事業を行ひたいと思ふ。何となれば郡部の改善は地價の低廉なるだけそれだけ經費を要

することが少ないからである。

土地問題

都市の建物及び其發達といふことを考へる時私は其根本條件として先づ土地問題を解決する必要を感ぜざるを得ないのである。然るに歐米の都市すら此問題を閑却して居るやうに思はれる。殊に我國に於ても土地問題が如何に重要なるものであるかといふことすら考へられて居ないのである。元來土地は私共の私有すべきものでないといふこと、及び都市に於ける土地から私共が利益を收得すべきでないといふことは何人も理論としてこれを認めて居るに相違ないけれども、此簡單明瞭なる眞理が歐米の都市に於てすら實行されて居ないといふことは如何に說明すべきであらうか。

私は何れの國に於ても地主階級が偉大なる勢力を有して居ることを認める。今日は資本家全盛の時代であるといふが、資本家の多數が同時に地主である事實をも認めねばならぬ。私は個人として見たる地主に對し何等の怨恨もなく愛憎もないのであるから、聊にても彼等を非難攻擊する考へはないけれども、一たび地主制度といふことを思ふ時私はこれに對して不快の感を懐かざるを得ない。都會地が一坪に付き數千圓乃至數萬圓の價値を有するに至るのは全く都會膨脹の結果であつて、地主の勤勞に因るものではない。故に地價の騰貴によりて生ずる利益は市民全體が收得すべきもので、これを地主に横取されるのは恰も私共の身體が吸收すべき營養分を蛔蟲に奪はれるのと同一である。地主を寄生蟲に比較することは餘りに殘酷過ぎるやうであるけれども、事實は正に此の通りであることを私は斷言する。

都市は人口の增加する每に地價の騰貴によりて自らの財源を造つて居る筈である。若し東京市が土地の所有者であり、これを現在の相場によりて私人に貸付けたとしたならば、今日でも確實に每年七千萬圓の地代を得ることが出來る。都市膨脹の結果地價が十倍すれば、市の收入は其割合で增加することになる。斯くして市は永久に都市改善の資源を土地によりて得ることが出來るのである。これに反し東京市が今日の如く二萬人の地主に存存を許すことゝなれば、都市の生命たるべき財源は全く寄生蟲の腹を肥すに過ぎないことゝなる。

今や地主階級は寄生蟲どころか、殆んど都市を支配する大勢力となつて居る。歐米の諸都市は言ふまでもなく、我國に於ても、市町村の自治體を實際に支配して居るものは地主階級である。彼等は直接自己の利益になる事業には賛成するけれども、

如何に必要なる事業でも、若し其れがため自己の負擔が増加することになれば、必ずこれに反對する。殊に土地の公有といふが如きは地主階級の命の綱を切斷することになるのだから、彼等が極力これに反對するのは決して怪むに足らない。歐米の諸都市が土地公有の利益を知りつゝ、尙ほこれを斷行し得ないのは、上記の理由が主なる原因となつて居るからである。

東京市が此際全市及び隣接町村の土地を買收する策を立て、二萬有餘の地主が市の將來を思ふて快よく其土地を讓渡することになれば、我國民は歐米の諸都市に對して先鞭を着けたといふ榮譽を擔ふことが出來る。言ふまでもなく地主は此非常なる機會に際して大なる犧牲を拂ふ覺悟がなくてはならぬ。彼等の所有する土地が、よし一坪數百圓といふ價値を有して居るにせよ、若しこれを東京といふ大都市から引離して見たならば、其所に幾何の價値が殘るであらうか。假りに帝都が他の土地に移されるとせよ、或は現在の位地より少しく北方若くは西北方に移されるとせよ。下町方面の土地は其價値の大部分を失ふに相違ない。斯く考へ來れば二萬有餘の地主も東京市に對する謝恩の記念として廉價に其土地を提供することが適當のことではないかと思ふ。

若し地主が廉價にて其土地を提供しないといふ場合には、此際相當代價を以て買收することにより、市は尙ほ多大の利益を得ることが出來ると信ずる。何となれば市は將來に於ける地價の騰貴により相當の財源を得ることが出來るからである。

私は東京市が比較的低廉に土地を買收し得るため次の如き手段を取るに至らんことを切望する。現在の法定地價と實際の賣買價との間には大なる差異がある。法定地價は普通賣買價の十分の一と見て間違がないと思はれるのであるが、政府が今日までこれを知らず顏に看過して來たといふことは大なる怠慢であると言はなければならぬ。今日は實に此過失を改むべき最上の好機會である。國家の力を以て帝都の新設を企つる以上、此際法令を以て東京市及び接續町村の地價修正を斷行することを公にすべきであると思ふ。私は地租が早晩地方に委讓せらるべきものであることを信ずる。殊に都市のため絕對の財源となるべきものは地租の外にないのであるから、私共は東京市が先づ其豫備行爲として地價修正を行ふことを勸告する。帝都の建設は決して數年の後に終るべきものではない。よし建設事業は十數年後に一段落を告げるとしても、諸種の改良事業は都市の生命と共に永久に繼續すべきものである。これを見ても地租が都市の主たる財源たるべきこと、地租の增徵をなすためには先づ地價の修正を爲す必要あることが何人にも了解されるであらうと

思ふ。

中央政府が東京市に對して早晩地價修正を行ふべきことを發表したならば、これによりて土地買收上大なる便宜を得ることになる。即ち政府が評價した買收價額と地主の要求額とが合致しない場合でも、これを解決するには大なる面倒がない、若し地主が不當なる要求を爲す時には政府は買收を見合はせることになるかも知れないと同時に、地主の要求額は直に修正地價として公認せられ、其に對して相當なる地租を拂はねばならぬことになる。斯の如く不當なる買收額を要求することは結局地主のために利益でないから、彼等は相當代價を以て買收に應ずることゝなるに相違ない。

地主が此際比較低廉なる價を以て買收に應ずれば此上もないことであるけれども、若し彼等が相當の報酬額を要求するとしても、政府は尚は之を買收するに何等躊躇すべき理由はない。東京市の中心に於てすら一坪千五百圓以上の價格を有する土地は極めて稀であると思ふ。然しロンドンやニューヨークに於て一坪四五萬圓の價格を有する土地があることを思へば、東京市の地價が將來二三十倍の增加を來すといふことは決して空想ではないのである。

貸與して地代を徵收することが出來る。今日ですら一年の地代總額は約七千萬圓に達して居るのであるから、十年二十年と經過する中には漸次これを二倍三倍と增加することは決して不當でない。斯くして東京市は將來容易に土地のみで二億圓乃至三億圓の收入を得ることになる。從つて諸種の改善事業も思ひ切つて行ふことが出來る。

右の如き次第だから土地の市有を斷行するには今日の如き好機會はない。東京市の地價はこれを歐米の其れに比して遙に低廉であるから、これを斷行するのは比較的容易である。歐米の諸都市が地主といふ寄生蟲のために其發達を妨げられ、然も其痼疾を根治するだけの勇氣がない時に當り、我東京市が一刀兩斷此寄生蟲を滅絶せしむることが出來たならば、其他の都市問題は恰も快刀亂麻を斷つが如く容易にこれを解決することが出來ると信ずる。

然し當局者が果して土地問題を重要視して居るか否かは疑問である。よし彼等が土地市有の必要を痛感して居るにしても、果して地主階級の意志に反し、これを斷行する決心があるか否かは更に疑問である。歐米諸都市の狀況を見ても推測されるやうに、我當局者が地主階級の利益を無視して土地の市有を斷行することは容易であるまい。多數の地主は言ふまでもなく、土

地の所有に反對するのみでなく、彼等の所有なる土地を市區改正のために收用されることをも好まないのである。假に銀座の道路を廢して他に新しきものを開設することせんか、舊銀座の兩側に土地を所有する地主は極力此の如き道路の變更に反對するに相違ない。要するに徹底的市區改正は新道路に沿へる土地の價を增加するに反し、舊道路に沿へる土地の價を激減せしむる結果となるから、地主階級は概して現狀維持を主張することになる。當局者が如何なる程度にまで都市計畫を進め得るかは容易に豫言すべきことではないけれども、近頃新聞紙に發表せられる所の意見を綜合して見れば、當局者が確に地主の壓迫に遇うて居ることは疑ひないやうである。東京市の都市計畫案が實現されるさへ容易なことではないから、まして此際百年の大計畫を立てるといふが如き一の空想に過ぎないかも知れぬ。完全に土地の管理權を得ずして徹底的都市計畫を行はんとするは恰も木によりて魚を求むるが如きであつて、其失敗に終るべきは火を睹るよりも明である。

若し土地買收が容易に行はれぬといふことに當局者の意見が一致したといふことにならば、私は更に第二案として次の如きことを當局者に進言したいと思ふ。其は現在の地主が有する既得權を犯さずして、將來土地から生ずる所の利益を全部東京市に收得するといふことである。

私は茲に繰返して斷言して置きたい。都會地の價格が騰貴するのは全く都市膨脹の結果であるから、其利益は都市全體が收得すべきものであつて、地主のみが獨占すべきものではない。これは何人も是認すべき學說であつて、正面からこれに反對し得る者は地主以外に一人もあるまいと思ふ。私は經濟學者も社會學者も倫理學者も此學說を擁護するためには決して努力を惜まないといふことを確信する。

然し地主が土地を所有することにより今日まで多くの利益を得て居るのは彼等の既得權である。政府が相當の代償を拂はずして土地を買收せんとするのは所謂既得權の侵害である。これは當然法律家の側から起る所の反對論であるが、私は此場合強いて此駁論に答へることを避ける。何となれば私の意見を徹底せしむるには暫らく既得權の存在を是認することが便利と考へられるからである。既得權とは過去に得た所の權利であるから今後に於ても其まゝに存在せしめて置けば足れりであつて、更に其權利を伸張せしむる必要はない。これを具體的に言へば、或地主が一坪につき一圓で買つた土地が今日十圓の價格を有し彼は其によりて每年六十錢の地代を得て居るとする。言ふまでもなく彼は都市膨脹の結果一坪に付き九圓の利益を得、同時に

地代として若干の增收を得て居る。此等の利益は所謂不勞增收であつて彼の獨占し得べきものではないけれども、現社會に於ける私有財産制度の下に在りては、確に既得權であると言ひ得る。然し玆に既得權といふのは今後に於ても地主は其九圓の利益を保留し得るといふことを意味するのであつて、更に其後に於ても地價騰貴より生ずる利益を收得し得るといふことではない。若し地價が將來十圓から二十圓に騰貴した場合地主の既得權が彼をして更に此十圓の利益を得せしむるのであると言はゞ何人が其不道理に驚かないであらうか。

現在地主が得て居る不勞增收は既得權としてこれを不問に置くことも賢き方法であるかも知れぬ。然し法律を以て今後新に生じて來る不勞增收を禁止することは決して既得權の侵害ではない。即ち過去に於て一圓の土地が十圓に騰貴したならば、九圓の利益はこれを地主に與へて置くとしても、今後其土地が十圓以上に騰貴した場合、其增加額を全部都市の手に收得することは當然の事として是認すべきである。若し土地の買收が行はれない場合には、是非共此第二策を採用することを當局者に勸告したい。

地價の騰貴から生ずる利益を都市の手に收得するには二つの方法に賴らねばならぬ。

第一は地主の收得する地代の中から既得權に關する部分を控除し、其殘餘を全部地租として徵收すること、第二は地主が所有地を賣却する場合、其收得金の中から既得權に關する部分を控除し、其殘餘を土地讓渡稅として徵收することである。此二つの方法を實行するには新法令の發行と共に地價修正を行ふこと、都市の各部に於て精密に地代額を調査することが必要である。

個人が收益の目的を以て都會地を使用することは絕對に禁止すべしといふのが意見の主眼であるから、地主が地代を徵收することは原則としてこれを廢止すべきである。然し今日まで地主が得つゝあつた所の地代は既得權としてこれを認めねばならぬとすれば、今後も尙ほ地代の存在は許さなければならぬ。但し今後に增加する地代は地租として都市が徵收することになるから、事實上地代の大部分は廢止されたも同樣である。これと同時に私共は地主が若干の土地を自分のために使用しつゝあることを記憶せねばならぬ。而して此等の土地は地代を生じないが故に一切地租を免除されるのではないかといふ疑問が當然生じて來る。勿論地主が自ら其所有地を使用して居る場合には、これを他人に貸して地代を納めつゝある場合と幾分か取扱を異にすべきであるけれども、其地租を全然免除すべきもので

ないことは言ふまでもない。何となれば土地によりて地代を收得するのも、自ら其土地を使用して効用を享樂するのも、其地主に幸福を與ふるといふ點に於ては大差がないからである。然し二者の間に多少の相違あることは簡單にこれを述べて置く必要があると思ふ。

自らの使用のために(例へば住宅商店等のため)土地を所有するのと、他人に貸すために土地を所有するのとは決して同一に見なすべきものではない。前者は必要のため、後者は地代收得のための所有であるから、都市が地租を課するに當りては後者に對して地代の全部(既得權に屬する分を除く)を納付せしめ前者に對しては其半額若くは三分の一を地租として徴收することが適當である。然し宏大なる宅地若くは商店の敷地に對して上記の特典を與へることは不公平であるから、住宅に對しては五百坪といふが如き最大限を定めて置くことが必要であると信ずる。商店若くは工場の敷地に制限を設くることは比較的困難であつて、容易に其標準を示すことは出來ないけれども、建築物の坪數の一倍半乃至二倍を最大限とするのが適當であるかも知れぬ。若し個人使用地の面積が最大限を超ゆる場合には其坪數の增加する每に累進稅を課し、最大限の一倍半乃至二倍に達する場合には、借地によりて生ずる地代(既得權の分を控除す)に等しき地租を徴收することにすれば、土地私有の弊を最小限度に減縮し得るは明である。

過去の地代は地主の既得權として之を認めると同時に、將來に生ずべき地代の增加は全部これを東京市に收得すべしといふのが私の所謂第一の方法であるが、私は更に第二の方法に就き簡單に説明したいと思ふ。

年々增加する地代を全部東京市に收得することになれば地價の增加は今日の如く甚しくはないかも知れぬが、或有利なる場所を獲得せんとする競爭の絶えない限り、地價は今後も倘ほ騰貴するに相違ない。而して地代の增加が東京市の收得となるが如く、地價の騰貴が同一の結果となるべきは言ふまでもなきことである。私は地代の場合と同じく、地主が今日まで地價の騰貴によりて得た所の利益は、既得權としてこれを地主に收得せしむることに必ずしも反對するものではない。然し地主をして永久に斯の如き不勞增收をなさしむることは、全く社會的正義(Social justice)の觀念に反することであるから、東京市は此好機會に乘じて斷然將來に增加すべき地價を市に收得する方策を決定すべきである。地主の既得權に屬すべき地價と將來市の所得となるべき地價との境界線を定むるがために、政府は特別法令により此際東京市に於て嚴密なる地價修正に行はなければな

らぬ。而して此修正地價はあらゆる土地問題の基準となるべきものであるから、私は假にこれを標準地價と名づけて置く。

標準地價の決定は普通の場合に於ける地價修正よりも遙に簡單に行はれ得るに相違ない。何となれば政府は土地の評價を殆んど全く土地所有者に放任して置いても差支がないからである。若し地主が自分の土地を高く評價すれば、これを賣却する場合買得權に應ずる分として多額を請求し得るといふ利益はあるけれども、將來課せらるべき重き地租は標準地價と地代を參酌して決定されるのであるから、地主が自分の土地を高く評價することは果して利益であるか否か疑問である。

標準地價以上に騰貴したものは全部市の所得となるといふ原則が定まれば、將來土地の賣買が行はれる時市は何時でも賣買價から標準價を控除したる分を土地讓渡税といふやうな名義の下に收得することが出來る。東京市の地價が十倍し若くは二十倍しても、これは地主の懐を肥さないで、市の金庫を充實することになる。

上記の意見が行はれることになれば、他年一日土地市有を實行することも極めて容易ある。私は都市經營の根本問題として土地市有の必要なること、及び今日が實に稀有の好機會であることを痛切に感じて居るけれども、當局者も市民全體もまだ此問題を左様に重要視して居ないやうだ。十年二十年の後に其必要を感じても時は既に遲い。地價は十倍二十倍に增加し、從つて地主の勢力も擴大して居ると見なければならぬ。其時如何に後悔しても手の着けようがない。現在の歐米の諸都市が煩悶して居るのは全くこれがためだ。

然し今日市有を斷行することの出來ぬ事情があるならば、第二策として標準地價を定め、將來に於ける地價增加額を市に收得することを斷行すべきである。市はこれよりして大なる財源を得るのみでなく、將來必要を認めたる場合には何時でも容易に市有を實現することが出來る。即ち十年若くは二十年後に於ても尚ほ現在の價格を以て市全體の土地を買收し得るのである。市にして土地買收の希望を有せんか、必ずしも一度に十五億乃至二十億の買收費を支出することを要しない。若し市が毎年若干の資本を買收費として支出することが出來れば、二三十年の後には大なる財政上の苦痛なくして土地全部の買收を成就することが出來る。

道路問題

都市計畫として第一に起るべき問題は道路を如何に配置すべきかといふことである。從來の如く規則正しき碁盤形を採用す

るか、或は歐羅巴の諸都市に行はれて居る放射道路、即ち蛇の目形を摸倣するかは可なり重要なる問題と見なされて居る。若し東京市が土地市有を斷行し得るならば、此際理想的に道路の配置を行ふことが得策であると思ふ。即ち宮城を中心にして八方に大なる放射路を設くると同時に、ワシントン市の如く第二の中心點を市の北方に定め、これに新放射路を配置して將來新市街の發展を誘致することにしてはどうかと思ふ。然し私が前に述べたる如く土地の市有を斷行しないで、徹底的に都市計畫を行はんとするのは殆んど不可能であるから、今日の場合道路の配置に就きて多く論ずるのは全く徒勞に屬するのではないかと思ふ。故に私は土地市有が行はるれば碁盤形若くは蛇の目形の道路配置法を採り、さもなければ大體に於て舊時の道路を其まゝにし、これに多少の變更を加へるより外あるまいと考へる此好機會を利用して道路の配置を一新することは東京市のために百年の大計であるけれども、斯る大變更が地主の猛烈なる反對に遇ふべきことは火を睹るより明である。政府が地主の自我主義を抑壓することの出來ない間は、到底放射道路や碁盤道路の出現を期待することの出來ぬものと諦めねばならぬ。私は此の問題よりも寧ろ道路其自身の建設に就て意見を述べて見たい。

東京市當局者の意見は今後一等道路の幅を四十間以上にするといふことにあるらしいが私共は當局者が、此際道路の建設に一新機軸を出さんことを切望する。從來の道路は單に交通といふことのみを目的とする觀があつたが、道路の幅を廣くして防火の用にも供したいといふ考へは從來何人の心にも浮び、殊に今度の震災によりて其必要が一層痛切に感ぜられるやうになつた。若し道路をして防火線を兼ねしむることになれば、四五十間の道幅だけでよく其目的を達することが出來るであらうか。私の見る所では防火線として道路には六十間乃至百間の幅が必要であるやうに思ふ。若し道路をして防火線たらしむると同時に公園即ち散歩道たらしむるならば、百間幅の道路は決して贅澤ではないのである。

大道路の中に散歩道を設けるといふことは既にブルヴアードとして歐米の諸都市にも行はれて居るのだから、これを獨創の意見といふことは出來ない。然し市の縱横に七八十間乃至百間の大道路を二三條宛貫通せしめ、此等をして交通、公園防火の三目的を達せしむることは實に天下の偉觀たるを失はないのである。大道路の兩側には各幅四間の人道を設け、其次には各幅十五間の車馬道を設け、電車も自働車も此處を通行することにする。中央には公園を設け、其幅は大道路が百間である場合に

は六十二間、道路が七十間である場合には三十二間である。防火線としての道路がどの位の道幅を必要とするかは専門家の意見に頼るべきことで、私は此處に正確なる數字を示すことは出來ない。唯私が主張せんとするのは車馬道の幅を充分廣くすることゝ、大道路には必ず公園即ち散歩道を設くることである。

車馬道は左右二個であつて、各十五間の道幅を有せしむる計畫である。電車は車馬道の何れにか設くるのであるか、若し電車の輸送力が乘客の全部を取扱ひ切れない程に混雜を來す場合には兩方の車馬道に電車を敷設することにすればよい。電車に要する道幅を約二間半乃至三間とし、乘客の昇降を便利するため幅一間半の安全地帶を設くるとしても、自動車自轉車、其他の車馬に對しては、尙ほ十間以上の餘裕がある。若し將來交通が頻繁になり、十間の道路も尙ほ不足を感ずることになれば、中央に設けらるべき散歩道を割いてこれを補ふことも出來る。斯くして散歩道は車馬道の豫備地としても大なる任務を盡すことになる。東京市百年後のことまで考ふれば今日思ひ切つて道路の幅を廣くし、一方に防火の目的を達すると共に、他方に於て容易に車馬道を擴張し得るが如き計畫を立てゝ置くのは最も適當なることではないかと思ふ。

散歩道を含んだ大道路を建設するといふことは非常な贅澤であると批評する人があるかも知れぬ。然し東京市が計畫して居るやうな大規模の新公園を建設することを思へば私の散歩道案は決して實行不可能なる空想ではない。新聞紙の傳ふる所に據れば東京市は現在の公園以外に次の如き大公園を新設せんとの考へを有して居るらしい。即ち坂本公園を中心とする三萬坪の公園、萬世橋和泉橋間五萬坪、士官學校幼年學校の全部、砲兵工廠跡、戸山ケ原一帶(射的場を含む)、大塚火藥庫跡より護國寺附近に至る一帶、深川猿江町御料地、芝離宮、向島より水神の森まで一帶、代々木練兵場全部、白金志田町より丹波町に至る一帶等である。これが果して實行可能であるか否かは私の知る所ではないが、若し假にこれが可能であるとするならば、私は當局者が寧ろ散歩道案を採用するやうに進言したい。私は平素公園の增設には熱心に贊成して居たけれども、其は震災前の東京市に對する私の希望に過ぎなかつた。今日は帝都の新設といふ好機會に際して居るのであるから、私は散歩道を以て公園以上の任務を盡し得るといふ理由の下に其建設を主張したいのである。

都市の理想は多くの公園を設くるよりも全市を公園化するといふことでなければならぬ。この理想を實現するには大道路に散歩道を設くるといふことが其第一歩である。若しあらゆる道

更を公園化することが出來れば實に理想的であるけれども、これは土地市有の行はれざる限り實行不可能のことであると思ふ。散歩道と言ふけれども、三十間乃至六十間の道幅を有する堂々たる道路であるから、これに公園通有の設備をなすことは決して困難でない。但し散歩道を美化することは急を要することでないから、これは市の財政に餘裕を生ずる時を待つて行ふべきである。

公園は民衆的であるが如く見えて其實さうでない。公園附近の人は朝夕これを利用することが出來るけれども、其他の人々は電車代まで拂つてこれを利用しようとは考へない。公園の數が増加するに從ひ、此缺點は大に減ぜられるとしても、公園に行くに尙ほ五分乃至十分を要するのでは、決して廣く人々に利用されることはないのである。これに反して散歩道は單に沿道の人々に利用されるのみでなく、散歩者にも、用事のための歩行者にも愉快なる歩道を提供するのである。

都市の兒童は危險なる交通機關のため唯一の遊場なる道路をも奪はれることになつた。然し散歩道が出來さへすれば、兒童のためには以前のものに比してより安全なる、より愉快なる遊戯場が復活することになる。都市の道路は概して不愉快なるものであつた。役所や會社に出勤する人々が多く電車を利用するのは單に時間の關係のみではなく、街路を歩行するといふことが一種の苦痛であるが如く感ぜられたからであつた。然し公園化された散歩道を歩行することは大なる愉快であつて苦痛ではない。役所や會社の往復に二三哩の散歩をなすことは多くの人人にとりて殆んど日課の如くなりはせぬかと思ふ。私は市民の保健といふ立場からも散歩道案を主張したいのである。

今回の震災に當り公園が市民の避難所として大なる任務を果したことは何人の心にも強き印象を殘したことゝ思ふ。市の當局者が大公園の新設を計畫して居るのも、市民が公園を恰も神佛の如く渇仰して居るのも、私には充分其心が了解される。私は少しでも公園の價値を輕視するやうなことを考へて居ないけれども、今日以上に大公園を増加することは決して得策でないと信じて居る。大道路の中央に散歩道を設けさへすれば、而も出來得るだけ其道幅を廣くさへすれば、沿道の人々は其散歩道に於て臨時の避難所を見出すことが出來るではないか。

電燈事業と瓦斯事業

此機會を利用して是非實行せねばならぬことは電信線、電燈線及び電話線を地下に埋設することである。これは單に都市の美觀といふ立場から起る要求であるのみならず、此等の有用な

る線を火災若くは其他の災害に對して保護するといふ意味からも必要である。これは何等議論の生ずべき問題でないから、私は此以上說明を試みる必要を認めない。

然し東京市にとりて可なり重要なる問題は此際電燈事業と瓦斯事業とを買收する可否如何といふことである。東京市は既に電車を市有にして居る。若しこれに就て何等後悔すべき點がなく寧ろ市有の斷行が市にとりて有利であつたとしたならば、市は電燈及び瓦斯事業の買收に躊躇する筈はないではないか。今日は實に市有を斷行するに絕好の機會である。電燈會社も瓦斯會社も今度の震災によりて大打擊を蒙つて居る。若し東京市が新しき道路の配置をなせば、電燈線も瓦斯管も從つて其位置を換へなければならぬ。殊に電燈線の如きはこれを地下に埋設するのだから、全然其裝置を新にする必要がある。痛手を負へる會社が果して市の要求に應じ得るか否かは疑問であるが、强ひて其要求を容れしむるとすれば、會社は其結果として電燈料や瓦斯料を引上ぐるに相違ない。平常でも無遠慮に市民を苦めて居る所の會社だから、都合よき口實を得たことを幸にして益々橫暴を極むるのは疑なき事實である。

獨占事業會社に對しては市が特別の監督をなすことになつて居るが、然し[illegible]の都市に於ける經驗[illegible]如く、市の監督といふことは市政の腐敗を意味するのである。數千萬圓の資本を擁する大會社の前には市の當局者も市會議員も充分に監督權を執行する力がない。强ひて嚴重なる監督を行はんとすれば、會社は種々なる手段を以て誘惑を試みんとする。私共は電車會社時代に於て幾多の實例を見たのであるが、最近に於て瓦斯會社に關する大疑獄の起つたことは今尙ほ私共の記憶に新である。私は市政の腐敗を防止するといふだけの理由でも獨占事業を市有にする價値があると信ずる。

電燈及瓦斯の買收をなすには莫大の資金を要するけれども、これは都市計畫に要する資本とは全く其性質を異にするものであることを記憶せねばならぬ。道路の配置及び擴張、公園の新設、公館の建設等に投ずる資本は間接に都市の富を增進するに相違ないけれども、直接に市の收入を增加するものではないこれに反して電燈事業や瓦斯事業の買收に投ずる資本は直接市の金庫に返り來るべきものであるから、よし其れが巨額であつても恐れるに足らない。殊に現在悲境に陷つて居る會社のことであるから、折衝宜しきを得れば、市は比較的有利なる條件を以て買收を實行することが出來ると信ずる。要は此好機會を捕へるにある。

地域の設定

都市生活を便利ならしめ、且つ愉快ならしむるには住宅區、商業區、工業區、公館區といふが如き地域の區別を設けることが必要である。震災前の東京市にも大體其區別はあつたけれども、此機會を利用して一層これを明確にすることは得策である。住宅區、公館區、商業區の區域を定むることは比較的困難の少ない問題であるけれども、工業區の地域を如何に定むべきかは決して容易のことでない。元來都市の多數は自然に發達したものであるから、今更これを如何ともすることは出來ないけれども、若し新に都市を設計するとしたならば、地域の區別といふよりも、寧ろ其目的に從つて別個の都市を建設するのが適當ではないかと思はれる。東京市の如きは政治の中心であると同時に教育の中心となつて居る。これに加ふるに商業都市及び工業都市たる資格をも備へて居るがため、自然に尨大なる都市となつたのである。私は都市計畫の上から若くは社會政策の上から見て東京市やロンドン、ニューヨークの如きが決して理想的都市であるとは考へない。

遷都論の中にも傾聽すべき點があると思ふ。若し東京市を商業都市として存置し、政治の中心たる帝都を他に遷すとすれば東京市は從來以上の如き大都市たる必要なく、[illegible]大なる都市となる虞れはない。望に教育の大中心を設けずして、これを各地方に分散せしむることにすれば、これによりて大都市の發生を或程度まで防止することが出來る。政治、經濟、教育、藝術といふやうな分子が雜然として存立することは必ずしも都市生活の必要條件ではない。若し此等の分子が分解作用を始めて各別個の都市を形成することになれば、これは寧ろ都市のため喜ぶべきことであるかも知れぬ。

此見地から言へば東京市が工業區を如何にすべきかといふ問題も自ら解決されることになる。工業區は都市の一部として存在するよりも市に近き或地域に獨立區を設けることが都市のためにも工業區自身のためにも利益ではないかと思ふ。工業は私共の生活に必要缺ぐべからざるものであるけれども、これを市内若くは市の隣接地に於て行はしむることは都市生活の愉快を減殺するものである。運輸交通の便さへあれば市の二三里以外に工業都市を新設し、新に建設せらるべき東京市には一切工場の設立を許さぬことにしたいものだ。これは勿論根本的解決法であつて、其實行は容易でないかも知れないか、都市生活を理想的ならしむるには、是非共これを實現させねばならぬと思ふ。工場の周圍には勞働者が自然に密集することになる。其結果

貧民窟の發生を促すことにもなる。都會に於ける地價が增加するに從ひ、地代や家賃の關係上勞働者の生活は益々困難に陷らざるを得ない。言ふまでもなく勞働者の生活から見れば、田舍に住むことが最も有利であるけれども、斯くては工場に通勤するために多くの時間と少からぬ電車賃とを要することになる。若し急速力の交通機關を設け、廉價を以てこれを運轉することが出來るならば、勞働階級の郡部移住も實行可能となるであらうが、現時の東京市に於てこれだけの設備をなし得るや否やが疑問である。然し工業都市を獨立せしめ、東京市の二三里以外にこれを新設することになれば、上記の問題は容易に解決が出來ることになる。東京市と工業都市との間に勞働者のための住宅を建設したならば、彼等は工場に通勤することが容易であると同時に、時には都會の中心に至りて文明の歡樂に醉ふことも出來る。且つ住宅の周圍には多少の餘地もあるから、休日にはこれを利用して蔬菜は或果樹の栽培をなし、妻子も亦これに對して相當の助力を惜まぬことであらう。斯くて斯等は多少家計を補ひ得ると共に、健康を增進し、娛樂の途を得ることになる勞働階級の住居としては都會は餘りに高價過ぎる。さらばとて田園生活は都會の味を知つて居る彼等に取りては餘りに無味乾燥である。然るに工業都市の獨立は勞動者をして、健全なる田舍生活と愉快なる都會生活とを兼ねしむることになる。私は此理由あるがために、此際東京市が工業區を全然遠く市外に移轉せしむることを切望する。

更に東京市其れ自身の立場から言へば、工業區の市外移轉は最も望ましきことである。工業區の吐き出す煤煙が如何に都市生活を不愉快ならしむるものであるかは多く論ずる必要はあるまいと思ふ。私共は大阪市やシカゴ市の如き所に住居することを人生の一大不幸と考へる。私は嘗てシカゴ市の富豪が煤煙のため其所藏品を汚損されることを恐れて多くニューヨーク市に移住するといふことを聞いたことがある。又ロンドン市の住民の肺臟が解剖の結果紫色を呈して居たといふことを或雜誌で讀んだことがある。私がロンドン市に一ヶ月許り滯在して居たのは夏季であつたが、數時間市街を散歩する毎にカラーが眞黑に汚れたことを今でもよく記憶して居る。ロンドン市は其煤煙のために汚れた都會であつた。大阪市やシカゴ市は晴天の日でさへ何時もどんよりと曇つて居るやうに見える程煤煙に蔽はれてゐる。大阪市民が漸次郊外に住宅を移さんとするのは決して無理ではない。要するに私共は煤煙を避けて郊外に移住するか。若くは工業區を市外に移轉せしむるか二者の中其一を擇ばねばならぬのである。工業の如何に重んずべきであるかは言ふまで

もなきことである。けれどもこれがため私共は始終工業區の中に起臥せねばならぬといふ理由はない。直接工業に從事する勞働者ですら、勞働時間外はなるべく工場を離れた場所に生活することが望ましいことである。まして勞働者の家族及び直接工業に關係なき人々が出來得るだけ工業區に遠ざからんとするのは當然の要求であるやうに思はれる。

家屋問題

家屋の建築に就て先づ考へねばならぬことは衛生といふことである。新しき東京市は何を差措いても先づ此點に重きを置いて建設されなければならぬ。ベルリン市は建築用地の三分の一を必ず空地として殘さねばならぬことを規定して居る。震災前に於ける東京市の住宅地は割合に空地が少ないやうに見えて居たけれども、其實は左様でもなかつた。京橋區のみは住宅地の面積に對する建築物の面積は殆んど八割五分に及んで居たけれども、其他に於てはベルリン市の規定通り住宅地の三分の一が空地として殘されて居た。然し私共は決してこれを以て滿足すべきではない。出來ることなら二分の一の空地を存することにしたいと思ふ。

衛生といふことには清潔といふことが第一要件である。美觀といふが如きは第二義であつて、此際私共の最も要求するのは我東京市をして清潔なる都會たらしむることである。歐米の諸都市には貧民窟といふ厄介物が今尚ほ存して居るけれども、多くは一局部に限られて居る。然し東京市の貧民窟は下谷の萬年町、四谷の鮫ヶ橋、芝の新網町といふが如き有名なるもの丶外に市内至る所何所にも存在して居るといふ有様である。堂々たる商店が軒を並べて居る大通りでも、其小路を辿つて内部に入れば、其處には幾多の貧民が不衛生なる矮屋を構へて居る。幸か不幸か過般の大火は此等の貧民窟をも淨化し去つた。都市計畫の半面には嚴重に此等貧民窟の發生を防止する方法が案出されねばならぬ。これがためには適當なる家屋建築法令の制定が必要である。家主が安價なる借家を建築するに對しても嚴重なる取締法を設くべきであるが、尚ほ家主が修繕を怠り、或は不衛生なる設備に對して何等の改善をも加へない場合には相當の科料に處することが當然ではないかと思ふ。要するに東京市は此際最小限度の清潔とは如何なるものであるかといふ標準を示し、これを市民に遵守せしむるよう充分に努力する所がなくてはならぬ。

次に家屋問題として考へねばならぬのは如何にせば最も善く耐火的耐震的家屋を建築することが出來るかといふことである

これは專門家の研究すべきことであるから、私はこれに對して何等意見を述べることは出來ないけれども、如何なる程度まで法律の力を以て家屋の建築に干涉すべきかといふことは都市計畫を研究する者の見逃すべからざる問題である。東京市全體の建築を煉瓦造若くは鐵筋コンクリートにすることは實行不可能ではあるが、私が前に述べた防火線としての百間道路は勿論のこと、其他の大道路に沿へる家屋は法律を以て嚴重に耐火的且つ耐震的たるべきことを規定する必要があると思ふ。其他の部分に於ては尙ほ木造の建築を許すとしても、三十年後には必ず煉瓦又は鐵筋コンクリートに改築すべきこと、及び十年後火災に罹りたる時にも同樣の規定に從ふべきことを強制的に要求したいものだ。若し墺都ヴヰーンに於て經驗された如く、規定の年限前に改築する者には其賞與として家屋稅を免除するといふような奬勵法を設くることになれば、比較的短年月の間に其目的を遂することが出來るかも知れない。

家屋につき第三に考ふべき事は美觀といふ問題である。美觀といへば直に贅澤といふ事を聯想するけれども、美觀は必ずしも多額の費用を意味するものでない。ベルリン市の家屋が比較的廉價で出來て居るに反し何人にも淸くして美であるといふ感じを與へるのは何故であるか。あれは家並が殆んど全部同じ型によりて建築され、高さに於て、形に於て、色彩に於て窓の附方に於て同一であるがためだ。カーキー色の服を着けた兵士が一人立つて居るのでは何等美といふ感は起らないけれども、數百人の兵士が整然として列を造れば其處に一種の美觀が現出する調和は美の本質である。同一型の家屋が市街の兩側に並立する時何人も其調和を感ぜざるを得ない。其れが見る人の目に美と映ずるのは當然のことである。私は地震國たる我國に於てニユーヨーク市に於けるが如き摩天樓の建築される筈がないと信ずる。將來の東京市は家屋の高さを四階位に制限することが適當ではないかと思ふ。更に進んで家屋の型を一定し、大通りの兩側に建築せらるべき家屋を全部法令によりて取締ることにすれば、市の美觀はこれによりてどんなに增進されるかも知れない。

大概の都市は商業區を特別扱ひにして居る。住宅區や公館區に於ては建物との間に幾分の距離を置き、其間に在る芝生には樹木を植ゑたり花壇を造つたりして居るけれども、商業區には殆んど此等の設備がない。店と店とは互に密集して、石や煉瓦の連續若くは塊と見るのが適當であるやうに思はれる。飾窓の陳列品で人目を喜ばせて居るけれども、建物其自身に就て見れば、商業區は實に殺風景極まるものである。現在の商業區が此の如き狀態に在るのは都會地の高價なるため尺寸の空地をも利

が單に古來の習慣を墨守するに在るといふことは明である。商店に限り軒を比べて營業せねばならぬといふ必要は少しもない私の所謂百間道路の兩側には僅かの距離を置いて商店を建築したいものである。店と店との間に芝生があれば其に面した方に窓を造ることが出來、從つて衛生上にも利益がある。都市を公園化することが私共の理想であるとすれば、現時の商業區には早晩大變化が來らなければならぬ。

河岸の設備

隅田川は交通路としてのみでなく、市の美觀を増すものとして重要なる役目を勤めて居る。其點に於ては恰もロンドン市に於けるテームス河の如く、パリ市にセーヌ河の如きである、然し隅田川の兩岸は大部分家屋に占領され、散歩道として殘つて居るのは僅かに其一部に過ぎない。私は帝都改造の一項目として隅田川の兩岸（鐘ケ淵紡績工場の邊より河口に至るまで）に各三四十間幅のブルヴアードを設けることを提案したいのである。更に兩岸に櫻樹を植ゆることしたならば、帝都の春はこれによりて幾倍の賑ひを増すことであらう。

然し隅田川の美觀は單に櫻のみで發揮されるのではない。將來建されるだらうと思ふ。テームス河にはウエストミンスター、エムバンクメントとかヴヰクトリヤ、エムバンクメントと稱する堤防があつて、絵葉書に載せられて居る程立派なものである私はこんな贅澤な工事を今日直に開始せよと言ふのではない。唯三四十間幅の散歩道さへ造つておけば、堤防の如きはこれを十數年後に築造するも敢て差支ないのである。今回の火災によりて見るも火は隅田川を越えて對岸にまで移つたといふのであるから、防火線としての隅田川は未だ安全なるものと認めることは出來ない。故に河の兩岸に各三四十間幅のブルヴアードを設けることは贅澤でなくて必要である。

永田市長の案に據れば東京市に現存せる運河を改浚し若くは擴張する外に多くの新運河を開鑿するらしい。私は防火線としての運河は同一目的を有する百間道路よりも多くの費用を要するといふ理由で贊成し兼ねるのであるけれども、若し運河說が採用されることにならば、私は隅田川の場合と同じく其兩岸に散歩道の設けられんことを切望する。

食料品市場

都市計畫は單に市區改正のみでなく、貧民窟の撲滅といふが

如き方面のことをも含んで居るとするならば、市民のため低廉なる食料品を供給することも亦都市計畫の一部であらねばならぬと信ずる。少くとも食料問題は都市問題の重要なる一項として研究さるべきものである。都市計畫は主として市民に理想的住所を供給することを目的として居るのであつて、衣服や食料の問題には餘り多く觸れる必要はないと言ふ説があるかも知れないが、これは都市計畫を狹義に解して居る人の僻論である。勿論歐米の諸都市か未だ此方面に於て充分成功して居ないのは事實であるけれども、私共は帝都の復興に當り食料問題に就ても新機軸を出す好機會に際會して居るのではないかと思ふ。

現在の賣買制度程馬鹿らしいものはない。生産者と消費者との間には仲買人、卸賣商、小賣商といふが如き多くの仲介者が居る。而も其人數が必要以上幾倍乃至幾十倍に達して居る。これがため市民は常に必用品のため法外なる價を拂はねばならぬのである。從つて物價を低廉ならしむるには現在の賣買制度に根本的改革を行ふことが必要になつて來る。

之に加ふるに都市の運輸機關が未だ完全の域に達して居ないため、私共は比較的高き價を運賃として拂うて居る。ビャード博士はこれに關して次のやうなことを其講演中に述べた。バッフヘロー市からニューヨーク市まで（約四百哩）麥一噸を運ぶ送料はニューヨーク市内に於て同量の麥を一哩運ぶ送料と同一である。又ニューヨーク市からリバプール市（約二千八百哩）に運ぶ送料も略ぼ同一である。これによりて見るも都市に於ける運輸が決して組織的に且つ大規模に行はれて居ないといふことが了解出來るではないか。

日本橋の魚市場、京橋及び神田の青物市場は明治二十二年市區改正の布告と共に移轉を命ぜられたのであるが、今日に至るも尚ほ其運びに至らなかつた。然し過般の震災は遂に三十年以來の懸案を一刀斷に解決することになるらしい。勿論これは市區改正の立場から見て喜ぶべきであるけれども、市場の移轉と賣買制度の改革は全然別物であるから、私共は此際移轉以上の要求をなす必要を感ずるのである。

魚河岸や青物市場の組織は實に原始的であつて、殆んど全く歐米諸國に於て其類例を見ることが出來ない。單に魚河岸に就て言はんか、十年前に於ける問屋の數は六百六十、仲買人の數は百九十と稱せられて居た。然るに最近新聞紙の報ずる所に據れば、現在の魚河岸は千三百人の組合員を有して居るといふことだ。而して震災前に於ける東京市の魚商は約五千人であるから、二百三十萬の市民に魚類を供給するため約六千三百の商人が存在して居る譯だ。兎に角千三百人の卸賣商を有して居ると

いふ組織は我國獨得のもので、私共は先づ此點に於て根本的改造を要求する。

東京市が此際市費を以て現代的食料品市場を新設することは衛生上若くは經濟上から見て適當のことであると信ずる。歐洲諸國に於て行はれて居るが如く此市場を個人に貸與して相當の使用料を徴收することも一方法であるに相違ない。然し千三百の組合員の要求を滿足せしむることは不可能であるから、其中から單に三四十人を選擇し、他の組合員には轉業せしむる外はあるまい。若しこれが出來ぬとすれば、結局現狀維持といふことになるだらうと思はれる。

然し現狀維持といふことは徳川幕府創始以來の馬鹿らしき舊慣を墨守することになるので、新帝都を建設するといふ主張に對しても耻かしき次第である。私は新市場の建設を斷行するためには千三百名の組合員に對して市が多少の賠償金を拂ふことも敢て差支なきことゝ信ずる。萬一組合員が不當の要求を爲すこともあらば、市は斷然自ら新市場を開設してこれを經營しても宜いではないか。震災後政府が自ら質屋を經營することが個人の營業を侵害することにならぬとすれば、魚市場の市營も個人經營の市場と兩立し得るではないかと思ふ。

市の運輸機關に就て私は次の樣に考へて居る。市があらゆる食料品を自分の市場で賣ることになれば、食料品の配給は全部夜間電車によりて行ふことにしたい。夜間電車は夜中から午前五時まで運轉するもので、これがため特に製造された貨車を用ふることにする。市は電車の便利ある所に百五十個乃至二百個の小賣公設市場を設け、而して全國の食料品の集注する品川、田端、池袋の如き所から、其食料品を必要に應じて小賣公設市場に配送することになれば、運輸費は著しく減ぜられ、且つ仲介者の手を經ることがないから、市民は容易に低廉なる食料品を得ることが出來る。言ふまでもなく市は個人の要求に應じて市内輸送を行ふが故に個人的實業家も亦其恩惠に浴することになる。

夜間電車の貨物輸送が行はるれば馬を利用する荷車の必要は殆どなくなるに相違ない。私は市内に牛馬を存在せしむることは道路を不潔ならしむる所以であるから、我新帝都に於ては全然其使用を禁止することにしたいと思ふ。若し夜間電車の働きが不充分であらば、これを補ふに自動車を以てすることも出來るではないか。

保險事業官營問題

火災保險問題は直接都市計畫には緣の遠いものであるけれど

も帝都復興といふことには重大なる關係があるから、私は最後の研究項目として此問題に論及したいと思ふ。

保險事業の官營は二十有餘年前から私が主張して居る所のものであつたが、大震災のため急に官營論が人々の注意を惹くやうになつたことは甚だ喜ばしきことである。保險事業官營論の要點は大略左の二點に盡きて居る。保險は相互扶助であるから其規模の大なれば大なる程其効果も多くなるといふことゝ及び保險の競爭には事務費を要することが多いが、一たび獨占事業となれば其れが著しく減少するといふことである。

若し我國家が十數年前に生命、火災、海上、其他の保險事業を統一して居たと假定したならば、過般の大震災に生じた損害に對しても容易に賠償の責任を果すことが出來るであらうと信ずる。何となれば大規模の事業には其れだけ多くの支拂能力あると同時に、若し又拂金に不足を生ずる場合には臨時借入をなし、其後保險掛金率を引上げて增收を謀り、これを以て負債の償却を爲し得るからである。

全體保險の効用は如何なる場合にも保險金を拂ひ得るといふことにある。震災に因る火災に對しては賠償の責に任ずることが出來ぬと主張する位ならば、其れは既に保險會社なる資格なく、相互扶助の精神を原則として居るのであるから、すべての規定は出來得るだけ被保險者のために有利に解釋し、喜んで保險金の支拂をなすといふ態度に出なければならぬ。歐米の保險會社がよく此原則を遵守して居るに拘はらず、我國の會社は平時に於てすら、如何にせば保險金の支拂を拒絕し得るかといふことを考へて居る。私は此意味からも保險事業の官營を力說したい。

政府は此際保險會社を買收して過般の火災に家屋を失うた者に保險金の全部を支拂ふ計畫を案出すべきである。或人はこれを以て全然不可能であるが如く考へて居るかも知れぬが、若し政府に決心さへあれば之を實行することは決して困難でないと思はれる。實業家野澤源治郎氏が最近發表した意見の如きは慥に傾聽に値する。私は左に其大略を紹介して見よう。

大正九年の統計に據れば、我國に於ける保險事業全部の收益は年額約七千萬圓である。若しこれを官營にすれば先づ事業費に於て約三割五分卽ち約二千四百五十萬圓を節約することが出來ると同時に、火災及海上兩保險料に於て約三割の引上げを行へば約二千三百萬圓を增收することになる。斯くして政府は每年保險業の擴張による增收を併せて優に一億二千萬圓の收益を

期公債を發行し五年間にこれを償却する。一方被保險者には保險金の二割を現金にて支拂ひ、殘餘は五ヶ年間据置無利子公債を交付する。而して五ヶ年据置後は毎年の保險料收益一億二千萬圓の中其の十分の二を利子支拂ひとし、殘り十分の八を抽籤により年々償却することにすれば二十ヶ年内外を以て完濟することが出來る。而して會社買收價格約二億圓と二十二億圓の火災損害に對する現金拂約四億圓、合計六億圓は毎年の收益一億二千萬圓の五ヶ年分を以て支拂ふことが出來るから、保險事業は全く自立自營の原則に從ひ毫も國庫の補助を受くる必要がないと言ふのである。

以上は其大綱を示したゞけであるが、詳細なる點に就ては種種なる反對意見も生ずることであらう。然し野澤氏の具體案に據らば保險事業の官營に決して空想でないことが充分に了解される。私は帝都復興の最も重要なる條件として保險官營の實現されんことを切望するのである。

軍法會議廢止論

末弘嚴太郎

—軍人たらむものは常に能く義理を辨へ能く膽力を練り思慮を殫して事を謀るべし。小敵たりとも侮らず大敵たりとも懼れず己が武職を盡さむこそ誠の大勇にはあれ。されば武勇を尚ぶものは常々人に接るには温和を第一とし諸人の愛敬を得むことを心掛けよ。由なき勇を好みて猛威を振ひたらば果は世人も忌嫌ひて豺狼などの如く思ひなむ。心すべきことにこそ。——軍人訓戒の勅諭の一節—

一

徳川幕府が仆れてより此方我國には最早「武士」なる特別の特權階級は存在しない譯である。唯其の過去の事實が「士族」なる名目の下に單なる族稱としてのみ殘され記念せられて居るに過ぎない。

軍人も亦吾々一般の人民と全然同一の法律の下に立たねばならぬ。彼等は一般の官吏と同じく軍務に服する限り其の職務に關する特別の法律規則の下に立たねばならぬのは勿論である。而も其以外の一般生活に於ては一國民として一私人として法律上すべて他の一般國民と全く同等の取扱ひを受けねばならぬ。單に軍人なるの故を以て全く軍事に關係なき事柄に付いてまで特別の待遇を要求すべき權利は全然ないのである。

それは實に明治此方樹立せられたる吾國法制の根本精神であつて、後人の濫りに之を紛更すべき限りではない。然るに、過去數次の武勳に心驕れる軍人は稍ともすれば自らを以て特別の國民特殊の階級なりと考へ、自己のみを以て眞の國民愛國心の權化なりと考ふるに至つた。而して、單に軍政のみならず一般政治にまでも干涉してすべてを軍事的立場から考慮し且處理せむとするに至つた。併しながら其弊の漸を追ふて甚しきに至るを見るや、忽にして吾々は軍國主義の非難を聽き二重外交の攻擊を聞くに至つた。而して、其の非難攻擊の聲はワシントン會議を機會として起つた軍備縮小の要求に依つて正に其頂點に達したのである。

此の聲に驚きたる軍閥者流は一方に於て軍備の必要を一般國民の間に宣傳せむが爲めに、或は某々大國を假想の敵國として近き將來に勃發すべき戰爭を豫言聲若し、又或は軍備縮小を唱導する人々に向つてしきりに非國民なり國を危くするもの也との誹謗を放ちつゝ暗に之に向つて幾多の脅迫を試みた。而かも同時に彼等自らも、亦進んで國民に近付かむとするの風ありしことは之を看逃すことは出來ぬ。彼等はかくの如くにして極力國民と彼等との間に穿たれたる溝渠を除去せんと努力したのである。

けれども、事實上は素より法制上に於ても彼等の間には今尚一般國民のそれと異なつた幾多の法令が行はれて居る。一例を引くならば、例へば――事柄はたとへ些事なりとは謂へ――全く理由なきものとして吾々の屢々批議したる軍人結婚例の如きものがある。此の法律は大正十年十二月を以て新に多少の變更を加へられたけれども（大正十年勅令四八一號陸軍現役軍人の婚姻に關する事件、大正十年勅令四八三號海軍現役士官現役特務士官候補生及現役準士官の婚姻に關する件等）、今日尚陸海軍人の結婚に向つて特別の制限を加へ、其の等級に應じて或は勅許を仰がしめ、或は陸海軍大臣其他の所屬長官の許可を受けしめ、更に或る種のものに付いては全然婚姻を禁止して居る。而して民法第七百七十六

條に依るこ「戸籍吏ハ婚姻ガ（中略）其他ノ法令に違反セザルコトヲ認メタル後ニ非ザレバ其屆出ヲ處理スルコトヲ得ズ」こ云ふことになつて居る結果、軍人は右勅令の要件を充さざる限り、婚姻の屆出をすることが出來ないのである。

右の勅令は其昔武士はすべて君公の許可なしには結婚其他身分上の行爲を爲し得なかつた時代の遺物である。而して此の舊制は維新後尙持續されて明治三年十一月四日の緣組規則こなつたが、今日では尙華族に付いては華族令第十四條の制限こして殘り、軍人に付いては又右に說明したるが特別の規定こなつて存續して居るのである。併しながら單に軍人なるの故を以て何故に全く軍務に關係なき婚姻を制限する必要があるのか？　若しもそれが單に軍紀上の理由に基くのであれば、事實軍務に差支あるが如き不當の結婚を爲したるものある場合に於て、之に職務罰こしての懲戒を加ふるを以て足るではないか？　殊に、例へば買淫の如き全然不正式なる男女關係、乃至は又事實上の婚姻たる內緣關係は全然之を放置するの外なきに拘らず、單なる手續形式に過ぎない婚姻——其の屆出——を制限し之を勅許及び上官の許可にかゝらしむることに依つて軍紀を維持せむこ考ふるが如きが極めて滑稽であつて、かくの如きは畢竟軍人を以て一般人民こは異なかつ特別の階級なりこ妄想することから生まれた變態的制度に外ならないのである。

併しながら、右に述べたるが如き婚姻制限に關する特則の如きは單なる一小事に過ぎない。それよりは遙かに重要にして一般國民の利害こ至大の關係あるものは、軍法會議の制度である。此制度に依れば、軍人は單に軍人たるの故を以て、軍事に關する特別刑法卽ち陸海軍刑法に定めた以外の——一般刑法の適用を受くべき——犯罪を犯した場合でさへも軍法會議なる特別裁判所の裁判を受くべき特權を有し、一般人民の如くに普通刑事裁判所の裁判を受くることがないのである。それは丁度其昔武士の犯罪が一般平民のそれこは全く異なつた法則及び手續に依つて制裁されたのこ軌を一にするものであつて、明治此方軍人を以て特別の特權階級なりこする制度が全廢せられたる今日、此種特則の依然こし

て存續することを許すが如きは事夫れ自身極めて奇なりと言はねばならぬのみならず、事實に於ても亦甚しき不合理不公平の結果を生み出すの虞れ極めて大なりと謂はねばならぬ。

而して、其の短所を最も顯著に暴露したるものは、實に今回の甘粕憲兵大尉殺人事件であつて、世人稍ともすれば其の裁判の公正を疑ふものあるは、正に其の制度の罪と云はねばならぬ。以下項を分ちて此の制度の概要を説明すると共に、其の短所を明かにして速かに之を廢止せざるべからざる所以を論述したいと考へる。

二

抑も軍法會議は、軍人は單に軍人たるの故を以て、軍人乃至其の勢力下に立てる人々のみによつて構成された特別裁判所の裁判を受くるの特權ありとする制度である。

軍人に非行ありたるときは、陸軍將校分限令海軍將校分限令等に依つて其官を奪はれる。又彼等に軍人たるの本分に背き又は軍事の定則に違ひ其の他軍紀を害し風紀を紊るが如き行爲あるときは、處犯重きものは陸海軍刑法に依つて之を罰し、輕きものは陸軍懲罰令海軍懲罰令等に依つて懲罰處分を受くること、尚一般官吏が職務上の非行に付いて懲戒處分を受けるのと同樣である。

陸海軍刑法は軍事に關する犯罪の鎭壓を目的とする特別刑法であつて、主として軍人の之を犯す場合を豫想して居るけれども、一般人民と雖も或は哨兵に對して暴行脅迫を加へ或は軍用物を損壞する等軍事の妨害となるべき罪を犯したるときは、本法に依つて處罰を受けるのである。併し、一般人民の犯罪は縱令それが陸軍刑法の規定に該當するものであつても、戒嚴令所定の場合、「戰時事變ニ際シ軍ノ安寧ヲ保持スル爲必要アルトキ」等特別の場合を除くの外、すべて

普通刑事裁判所の審理裁判を受けるのであつて、全く軍法會議の管轄外である。之に反し、苟も軍人の犯罪でさへあれば、獨り陸海軍刑法に反する場合のみならず、一般刑法其他の刑罰法令に違反した場合と雖も、すべて軍法會議の裁判を受けるのであつて、言はゞ軍人は單に軍人たるの故を以て軍法會議なる特別裁判所の審理裁判を受ける特權を有するのである。それは犯行が強竊盜其他破廉恥の罪なると殺傷暴行等の罪なるとを問はずすべて同じである。

而して、軍法會議法は――主として被告人の保護を目的として制定された――去る大正十年の改正法此方從來に比べれば遙かに一般の刑事訴訟法に近くなつたけれども、其の要點に於て二者の間には尚著しき差異が殘されて居る。而して其中最も顯著なるものは軍法會議の構成である。普通の刑事裁判所は裁判所構成法に依つて獨立の地位を保護せられたる判事に依つて構成されて居る。從つて、其の審理裁判が立法乃至行政系統の勢力に依つて影響せられ干渉せらるゝ所が少い。之に反し、「軍法會議ハ――法典の明文上――審判ヲ爲スニ付他ノ干渉ヲ受クルコトナシ」(陸軍軍法會議法第四六條、海軍同法第四六條)と規定してはあるものゝ、之を構成する五人の裁判官中法律に關する特別の知識と經驗とを有し、且普通裁判官と同様に其地位の獨立を保障されて居るものは、僅かに法務官一人のみであつて、例へば陸軍軍法會議法に依れば、現に甘粕事件に關聯して問題になつて居るやうな師團軍法會議に於ては「判士四人及法務官一人ヲ以テ裁判官トス」(第四九條)ることになつて居り、而して判士はすべて一般の將校中から長官が之を選定することになつて居る。將校が法律裁判に關して何等の專門的知識と經驗とを有せざるの點は尚之を恕すべしとするも、彼等が上官に對する關係上毫も其の地位の獨立を保障されて居ないことは、到底看逃がすべからざる特異の點である。而して何人をして特定事件の裁判官たらしむるかゞすべて上官の決定に放任されて居ることは、益々以て知られざる暗き手の壓迫干渉に依つて裁判官殊に判士の決心が影響を受くることを可能且容易ならしめて居る。

裁判所構成法は普通の裁判所に關して極力判事の獨立を確保せんが爲めに各種の規定を設けて居る。之れに依つて裁判の公正を期し以て三權分立主義の精神を發揚せんとして居る。事や實に法治國立憲制下の當然事と謂はねばならぬ。然るに、裁判所の一種に外ならない軍法會議にあつては、判事と同樣に地位の保障を與へられたものは法務官一人のみであつて、他の四人の判士は單なる將校に過ぎない。而して裁判はすべて多數決を以て爲さるゝことになつて居る。吾々は果してかくの如き裁判所より眞に公正なる裁判を期待することが出來るであらうか？ 若しもそれが出來得るものであるならば、吾々は普通の判事に付いても同じことが期待出來なければならないのである。然るに、彼にあつては制度上極めて嚴格なる地位の保障が與へられつゝあるに拘らず、此れにあつては何等其の同じことが規定されて居ない。事や極めて不均衡且不合理なりと謂はねばならぬ。

現行法の下に於ける軍法會議は實にかくの如きものである。而して、軍人は單に軍人なるの故を以て、全く軍事に關係なき一般刑法の罪を犯した場合でさへも、かくの如き特別の裁判所に依つて裁判せらるゝの特權を有するのである。それは彼等にとつて不利益となることもあるであらう。又利益となることもあるであらう。しかしいづれにするもそれが彼等の特權であることは疑ひなき事實である。軍人を以て特別の特權階級なりとするの制度は既に遠き昔に葬り去られた。それにも拘らず刑事裁判に關する限り彼等は今尙かくの如き特別の取扱を受けて居る。それは果して制度上是認せらるべき事柄であらうか？

三

現在の吾國は法治國である。現行の刑法は罪刑法定主義の基礎の上に立つて居る。「法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲ト

雖モ之ヲ罰スルコトヲ得ズ」（舊刑法第二條）、從つて、何人をして裁判官たらしむるも、刑法の規定を無視してまで擅斷の裁判をすることは事實不可能であるけれども、今日と雖、裁判官は決して單に機械的に裁判を製出する器械ではない。法律さへ確定して居れば何人をして之を適用せしめても全然同じ結論を得ることの出來るのではない。何人が裁判官たるか？ それは實に裁判制度上最も重要なる事柄でなければならぬ。以下聊か其の理由を説明するであらう。

裁判は實に裁判官全人格の現はれである。裁判官は制度と法律に依つて裁判することを命ぜられて居る。併しながら裁判官も亦血もあり涙もある普通の「人間」に外ならぬ。彼が其面前に展開せられたる具體的の事件に對して與ふる裁判は彼の「人間」としての全人格が之を與ふるのであつて、單なる法條の知識のみに依つて與へらるゝものではない。此事は、が嘗て「小智慧に捉はれたる現代の法律學」（「嘘の效用」一九九頁以下、殊に一七〇頁以下）中に於て詳述した所である。從つて、何人をして或る具體的事件の裁判官たらしむるかは、今日の法治國に於ても又罪刑法定主義の刑法の下に於ても極めて重要な事柄であつて、其の決定の如何は事實上裁判の上に極めて顯著なる差異を示すことゝなるのである。

殊に、同じく罪刑法定主義の刑法と雖も、現行刑法と舊刑法との間には極めて重要なる差異がある。舊刑法の根本主義は嘗て裁判官の擅斷に依つて裁判甚しく公正を缺き人權稍ともすればそれが爲めに蹂躙せられたる時代を背景として生まれ出たものである。從つて、裁判官の自由に裁量し得る範圍を成るべく狹隘ならしむることに依つて專ら彼等の擅斷を防止せむことを念として居る。之に反し、現行の刑法は刑法學の新思潮に從ひ主として犯人の改善と犯罪の豫防とを目的として立法されて居る。裁判官の擅斷を恐れねばならなかつた。フランス大革命以前の時代は既に遠く百數十年の昔に過ぎ去つた。今や吾々は裁判官の擅斷を恐れんよりは、寧ろ彼等に信賴し之に出來る限りの自由裁量を許して、

犯人の改善と犯罪の豫防とに專念せしむることを欲するに至つた。刑法學の新主義は卽ちこれであつて、吾が現行刑法は專ら其の主義に依つて制定されたのである。從つて、裁判官に許されたる自由裁量の範圍は極めて廣汎であつて、例へば同じ一殺人罪に付いてすら上は死刑より下三年の懲役に至るまで自由量定が許されて居り、若し夫れ裁判官に於て「犯罪ノ情狀憫諒ス可キモノ」と認むるときは更に之を酌量して刑期を半減することが出來る。而して、裁判官適當と認むるときは刑の執行をすら猶豫することが出來るのである。

かくの如く、刑法が裁判官に向つて廣汎なる自由裁量を許して居る以上、裁判官が單なる裁判製造の肉挽器械にあらざることは愈々以て顯著なりと謂はねばならぬ。從つて、極端なる場合を想像すれば縱令同一の具體的殺人事件なりと雖も或る裁判官は之に向つて死刑を宣告すべし、又或る裁判官は一年半の懲役を宣告するであらう。而して更に第三の裁判官は執行猶豫の恩典をすら許すことがあり得るであらう。それが實に新刑法の主義なのである。果して然りとせば裁判が裁判官の全人格に由つて生まれ、其の思想識見性格に依つて著しき影響を受くるの事實は、刑事の裁判に付いて殊に極めて可能なりと言はねばならぬ。

しかのみならず、裁判官は法の解釋適用乃至は刑の量定に付いてかくの如き自由の裁量を許されて居るのみならず、裁判の基礎たる事實の認定に關して更に廣汎なる自由を許されて居る。甚しき場合を想像すれば、犯罪の事實の存在顯著なるものも裁判官に於て或は之を證據不充分と認むることがあり得るであらう。又之と反對に、證據の未だ充分ならざるものと雖も裁判官に依つて或は犯罪の事實顯著なるものと認定せらるゝことがあり得るであらう。裁判官は法に依つて裁判をせねばならぬ。而も、法の規定嚴格にして多く自由裁量の餘地を殘さゞるとき、裁判官は其の「人間」としての所信と法の命ずる所との間に多大の距離の存在することを發見する場合があり得るであらう。而して、其の距離餘り

に甚しき場合の如き、裁判官は――特に悪意にあらずと雖も――或は事實存在せる事實を存在せずとなし、或は反對に存在せざる事實を存在すと認定することに依つて、自己の「人間」としての所信を裁判の上に披瀝することがあり得るのであつて、かくの如き事例は「大岡裁判」の昔に於てのみならず、今日も尚あり得べきことと余の嘗て屢々詳説したる所である(殊に「嘘の効用」一頁以下參照)。

裁判は本質上かくの如きものである。果して然らば、何人をして具體的事件の裁判官たらしむるかは、裁判の上に多大の差異を示すものと謂はねばならぬ。殊に、現代の吾國に於けるが如く、人々の思想甚しく混亂し、同一事件に關する善悪是非の判斷すら人により男女老若に依つて甚しき差異を示して居る以上、右の事實は愈々著しく實現し得るの可能性ありと謂はねばならぬ。而して吾々は現在問題となりつゝある甘粕事件に付いて其の最も顯著なる實例を發見するのである。

今若し、無政府主義を理解し之に向つて賛意と同情とを有する裁判官をして事に當らしむるならば、彼は恐らく死刑又は之に近き極刑を以て被告人に臨むであらう。之に反し、無政府主義を理解せず其の他すべての新思想を以て國家將來の爲めに大害ありとする人々、其他盲目なる軍國主義者狹隘なる國家萬能主義者をして裁判官たらしむるならば、彼は恐らく遙かに寛大なる態度を以て其の同じ事件に對するであらう。何故なれば、彼は恐らく被告人を以て「平素より社會主義者の行動を國家に有害なりと思惟しありたる折柄今回の大震災に際し無政府主義者の巨頭なる大杉榮等が震災後秩序未だ整はざるに乘じ如何なる不逞行爲に出づるやも測り難きを憂ひ自ら國家の蠢毒を芟除せんとしたるに在るものゝ如し」と考へ、之に向つて多大の同情を拂ふことを惜まないに違ひないからである。而して、更に第三の自由主義を信ずる國法尊重論者をして事を裁かしむるならば、裁判の結果は更に甚しく異なりたるものとして現はるゝに違ひな

いのである。

かくの如く、同一事件に對する裁判が裁判官の思想如何に依つて甚しき差異を示すことは、決して喜ぶべき現象ではない。無論苟も人間をして裁判を爲さしむる以上、或る程度までは此種の弊も尙之を忍ばねばならぬ。けれども、それは何所までも喜ぶべき現象ではなく、從つて出來るだけ避けねばならぬ事柄である。然るに、今日吾國の軍法會議は此種弊害の發生を制度として是認して居る。同じ一犯罪が單に軍人によつて爲されたるの故を以て、軍人なる特殊階級の人々のみをして之を裁判せしめて居る。かくの如きは、軍人をして單に軍人なるの故を以て全く軍事に關係なき一般生活についてまでも一般國民と異なりたる立場に立たしむるものであつて、決して正當公平の制度なりと云ふことが出來ないのである。

四

裁判は「公平」を以て其の生命とする。裁判公平を缺くときは以て其の威信をつなぐに足らず、法治國の基礎も亦自ら崩壞せざるを得ない。

刑法學の新主義は刑罰の個別化 individualisation de la peine を以て其の基調とする。刑事責任の基本は犯人の行爲に在らずして其性格に在る。刑法の目的は既に發生したる實害若くは危險に對する報復に在らずして、其反覆を豫防せんとするに在るが故に、責任の基本及輕重は犯行反覆のプロバビリチー即ち犯人の惡性に依つて之を斷ぜざるべからずとするのが刑法學新派の根本的主張である。此故にフランス大革命を基點として、確立したるが如き罪刑法定主義は今日に於ては最早何等の重き價値を與へられざるに至つたこと既に一言した通りである。けれども、本來法の價値は準繩

たるの點にある。而して準繩はすべて公平を以て生命とする。法を以て裁判官を束縛せねばならぬ。さうして其の裁判を標準化せねばならぬ。之によつて公平の要求に應へむとするもの、是れ卽ち法の目的である。此の故に、刑罰の個別論を主張し犯人の惡性に應じて其刑を二三にせむとする論者と雖も、公平の保障裁判の準繩としての法は遂に之を無視することが出來ないのである。

現行刑法は同種の犯罪に付いても、其の刑罰量定の範圍を極めて廣汎ならしめて居る。それは實に刑罰個別論の主張を容れて制定された新立法である。けれども、かくの如き立法に於ても公平は依然として裁判の基調でなければならぬ。同種同等の犯罪は略同等に罰せられねばならぬ。唯、舊來の嚴格なる罪刑法定主義は其の同等に處罰すべき基準を狹隘にして不動なる法の規定に求めたるに反し、新派の刑法學は別に合理的に伸縮する準繩を求めて之を犯罪防遏の爲めにする犯人の個別的觀察の上に置いたのである。彼は法の中に客觀不動の基準を求めんとしたるに反し、此は裁判官の合理性の中に主觀可動の準繩を求めんとするものである。外形異別なれども而も其の公平を求むるの精神は一である。

從つて、同一の犯罪が若しも甲に依つて裁判せらるゝときは重く處罰せらるべし、乙に依つて裁判せらるゝときは反つて輕く罰せらるゝと云ふが如きは、裁判の制度上最も忌むべき事柄でなければならぬ。無論、世の中に多數の裁判官があり、而して其の思想も亦自ら區々なる以上、或る程度に於てかくの如き輕重の差等を生ずることは蓋し已むを得ない。けれども、制度上或る種の人々の犯罪は常に或る人々に依つてのみ裁判せらるゝことになつて居り、而して其の或る人々は他の一般人と遙にかけ離れた思想を有する結果、若しも其の犯罪が他の一般人に依つて裁判せらるゝならば常に必ず或る重さを以て處罰せらるべきに拘らず、會々制度上或る特殊の人々に依つてのみ裁判せらるゝ結果として、常に比較的輕微に處罰せらるゝと云ふやうなことがあれば、どうしてか能く法の威信を保つことが出來るか？　公平を要

求する世の人々は遂にかくの如き制度を堪へ忍ぶことが出來ないのである。

現在、我國の軍人が一般國民とかけ離れた特殊の思想——狹隘なる國家思想——を有することは極めて顯著なる事實である。彼等はすべて其の狹隘なる國家思想を基準として是非を斷ぜむとする。彼等は彼等のすべてに向つて此の思想を強制し一般國民に向つても亦專ら之を宣布せむと力めて居る。其の結果、彼等の中の或るものが其の國家思想より見て特に罪重しとするの行爲を敢てしたるとき、若しも普通の裁判官をして事を扱はしむるならば、其の罰比較的輕かるべきに拘らず、彼等軍人をして之を裁判せしむるならば其の罰や極めて重からざるを得ない場合がある。之に反し、軍人中の或るものが其の狹隘なる國家思想より出發して或る犯罪を犯したるとき、一般普通の裁判官は一般の基準に從つて之を重く罰すべきに拘らず、若しも其の同じく狹隘なる國家思想を抱懐する軍人をして之を裁判せしむるならば、彼等の之に向つて課する罰は常に必ずや輕きを致すに違ひない。かくの如きは決して公平ではない。殊に、軍人と雖も最早決して特別なる特權階級にあらざること明白な今日、單に軍人なるの故を以て軍人に依つて裁判せらるゝの特權を保有し、而して其の結果此種の不公平を生ずることは制度として到底之を許すことが出來ないのである。

殊に、此種の弊は軍法會議の特殊なる構成によつて特に其の甚しきを致すものと見ねばならぬ。先に一言したるが如く、例へば佛國軍法會議は一人の專門的法律家たる法務官と四人の素人たる判士より構成されて居る。元來專門的法律家たる裁判官は其の專門家的特殊性の爲めに稍ともすれば一般國民と分離するの嫌がある。其の意味に於て裁判官は屢ば化石せりと非難せられ、其の Weltfremdheit を笑はれて居る。けれども、同時に彼等の專門家的特殊性は一種の「型」として別に或る意味の効果を有する。公平を維持する法の目的は或る意味に於て實に此の專門家的特殊性によつて達成されて居る。此故に若しも軍法會議がすべて專門的法律家たる法務官のみより構成されて居たならば、比較的其の弊は

少ないであらう。之に反して、判士は全然法律の素人である。而して被告人と同じ職業を有し同じ思想の下に養成せられたる人々である。彼等四人法務官一人を以て構成せられ而して其の多數決を以て事を決する軍法會議が極めて「軍人的」であり、其の裁判も亦「軍人的」なるべきは素より當然である。

此の意味に於て、現行法の下に於ける軍法會議は陪審制度的であるとも云ふことが出來る。元來陪審制度は被告人と同じく國民である所の「素人」――陪審官――をして專門法律家にして同時に官僚たる裁判官を牽制せしめんとする制度である。國民普通の輿論により常識に依つて專門家的特殊性官僚的特殊性を緩和せむとするのが此制度の精神である。果して然らば、一人の法律家と四人の――被告人と職業並に思想を同じくする――素人とを以て構成する軍法會議は極めて陪審制度に類似して居ると云はねばならぬ。のみならず、此種陪審制度に於ける素人的分子が普通の――殊に今春吾が帝國議會を通過したるが如き――陪審制度のそれに比して更に遙かに大なることは殊に注目すべき事柄であつて、法に據らんよりは寧ろ軍人間の輿論並に常識によつて裁判せんとするの精神は極めて顯著である。

抑も陪審制度は職業的裁判官が思想上稍ともすれば一般庶民と分離し易き傾向を救はむとして生まれた制度である。社會人としての陪審官をして直接裁判の上に社會的意見を述べしむることに依つて國家の裁判を社會化せんとする制度である。嘗て封建的君主の專制に對抗する意味に於て一個の統一的陣營を成して居た國民は、議會制度の確立によつて立法行政の權を其の手に收めた。又陪審制度の採用によつて司法權を牽制し得るに至つた。其の意味に於て陪審制度はデモクラシー國家の至寶である。けれども、封建的君主の專制亡びたりてより以來既に長年月を經過したる今日、嘗て專制君主と其官僚とに對抗する意味に於て統一的陣營を爲したる國民も最早既に其の統一を失つた。法律學者出で哲學者現はれて如何に極力國家の有機的一體たる所以を論證せんと努力しても、抑壓者被抑壓者の對立狀態としての現實的

社會は遂に之を覆ひ隱すことが出來ないのである。其の昔國民が君主と其官僚と對立して統一的一陣營を成したる當時にあつては、國民中其の或るものが特に選ばれて裁判に參與することによつて國民の利權を保全することが出來た。けれども、今日は既に其の時期ではない。若しも、陪審官が國民中或種の利益と思想とを代表する者のみの中から選ばれるならば、會々其の同じ利益と思想とを有する被告人は之に依つて利益を擁護せらるゝことも少なくないであらう。けれども、之と反對に、被告人にしても若しも彼等陪審官と反對の利益と思想とを有するならば、彼は單に陪審の爲め何等自ら益する所なきのみならず、反つて不利益を受ける虞がある。之に反して反對階級の陪審官は法律を離れたる素人的憎惡を以て無遠慮にも被告人を壓迫することがあり得るのである。

私は曾て「無産者の立場より見たる陪審制度」と題して右の缺點を指摘したことがある（「嘘の效用 四一一頁以下參照）。さうして例へば甲の階級に屬する者が之と對立せる乙の階級に屬する者を殺害したるが如き場合に於て、若しも陪審官全部乃至多數が甲階級の中から出て居るやうなことがあれば、其の結果犯人は遂に無罪の判決をすら受け得ることの可能なる所以を實例について說明したのである。然るに、今其の同じ缺點が吾國現在の軍法會議に於て實現せんとして居る。事實上特殊階級である軍人中の或る者――例へば甘粕大尉――が會々彼等と全然思想を異にする者――例へば無政府主義者たる大杉榮氏――を殺した。而して、甘粕大尉は今一人の――判事に相當する――法務官と四人の――陪審官に相當する――判士との裁判を受けやうとして居る。彼等に依つて與へらるゝ裁判の何物たるべきかは蓋し想像に難くないのである。

私は必ずしも軍人たる判士が自ら良心に耻づるが如き不公正の裁判をすべきことを恐れるのではない。彼等が自ら良

心の命令に從ひ誠心誠意を以て與ふる所の裁判が實は一般國民の目より見て不公正に終るべきことを恐るゝのである。判士にして若しも世評と輿論とを恐るゝならば——司法制度そのものとしては兎も角——結果は寧ろよろしいものと豫想される。之に反して彼等が誠心誠意其の——軍人に特有なる——良心の命令を遵奉したるとき、吾々は實に反つて其の結果を恐るゝのである。此言一見極めて奇なりと雖も、其罪や實に制度に在りと謂はねばならない。

五

軍隊は陛下の軍隊でなければならぬ。併し、其の同じ意味に於て國民の軍隊でなければならぬ。

明治維新此方特權階級としての軍人は法制上既に存在しない。彼等も亦すべて同じ國民である。然るに彼等は事實上自らを以て特に忠良なる臣民と考へ其の特に偏隘なる國家思想を以て一般國民を强ひんと考へて居る。さうして、制度上も尙自己に獨特なる刑事裁判權を有し、軍人の犯罪は單に軍人なるの故を以て特に——一般國民の基準に據らしめずして——特別なる軍人固有の尺度を以て之を裁判せんとして居る。かくの如きは、獨り明治維新の根本精神たる四民平等の原則を無視するものたるのみならず、今後益々軍人と一般國民との間の溝渠を深からしむる所以である。

今や甘粕大尉殺人事件に關して、右の短所はまざ〳〵と暴露された。健全なる一般國民はすべて或る判斷を以て正當なりと考へて居る。然るに軍人のみは一般にしかく考へて居ない。さうして事件の裁判は全く一般國民の手より奪はれて軍人の手中に一任されて居る。軍人は必ずや之に依り彼等獨特の尺度に依つて彼等仲間の秩序と其の獨特なる正義とを維持することが出來るに違ひない。しかしながら、若しも彼等の與ふる裁判にして一般國民の信念を裏切るものあるとき、一般國民は果して如何なる感想を抱くであらうか？　而も、其の事たる人の罪にあらずして寧ろ制度の罪なるを

思ふこと、私は一日も速かに此の制度の改廢されんことを希望して已まないのである。

卽ち、軍人は軍務に關する限り——他の一般文官と同樣——彼等に特有なる懲戒制度を有し得べし、又戰時軍の行動に必要なる限り之に特別なる刑法と其の運用機關を有することを妨げざるべし。之に反し、軍人が庶民と同じく一般刑法の罪を犯したるとき、單に軍人たるの故を以て、軍人のみより構成せられたる特別裁判所をして之を裁判せしむるの制度を廢止すべし。私は國家の將來の爲めに又軍人の爲めに此の必要の極めて緊急なることを主張したいのである。

(九二三・一〇・二八)

大杉君と最後に會ふた時

山川均

□

「ヤア、どうだい」

「ウン、相變らずだ」

十幾年かの間くり返して來たこのお定まりの挨拶を、大杉君と最後に取り交はしたのは、はつきりとは覺えぬが、昨年の春先き(それとも一昨年の暮ころ?)だつたと思ふ。何でもまだ寒い頃だつた。大杉君はバンドのついた茶色の外套を着し、バスケットを提げ、珍らしく子供もつれずに、朝早く大森の私の家に訪ねて來た。

「この節は獨りなのかい?」

「ナニ、今日は奥山さん(お醫者)にお詣りだ。」

「菊榮君には隨分逢はぬな。この前も居なかつたよ。ほうら、何時か鎌倉からの歸りに、近藤と和田久とでやつて來た時さ」

「そう〳〵、燒豚御持參で夕飯を食ひに寄つた時だな。そうだ、あれ以來逢はなんだ譯だ。もう至る一年にもなるぜ。」

全くこの頃は、大杉君とも滅多に逢はなかつた。大正七年の秋から、毎日東京に勤める必要がなくなつたのと、ひどく健康を損じたので、私は稀れにしか外出しなくなつた。それで大杉君とも、落ち合ふ機會が稀れになつたゐた。八年の冬には、大杉君は茅ヶ崎の轉地先きを見舞うて吳れた。九年の春には、偶然、山崎伯爵の事務所で落ち合ふた。その次が燒豚の晩だつた。この頃は菊榮が病氣で轉地してゐたので、私は獨りで自炊をやつてゐた。

「さすがに山川さんは、獨りでもきれいに掃除をし、明窓淨机のもとに定めしきちんとして原稿でも書いてゐるだらうと思ふたら、雨戸が一枚しか明いてゐなかつたので驚いた。」

近藤君は不思議そうに斯う云つた。

「一大發見だな。由來、君なんか山川を買ひ被つてるよ。おい、そうだらう」

斯う云つたあとで、大杉君は何時ものヒ、ヒ、ヒといふ罪の

ない笑ひ方をした。

四人の談は、何時のまにかロシヤ革命の批評になつてゐた。談ご燒豚の談きた頃、大杉君は思ひ出したやうに斯う云つた。

『一たい、クロポトキンがパンの略取の中に描いたやうなあんな理想的の社會が、革命後にすぐ實現するものだらうか？ 君はごう思ふ？ するご思はれるかい。』

『無論、しないに極まつてゐるよ。』

『ウン、僕にもそんな氣がするんだ。然し……。』

この『然し』をきつかけに、もう一度談に花が咲いた。生產者のディクテートル・シツプごいふ思想は、早くからアナキストのうちにも唱へた者がある。地方々々に於けるソヴイエットの執政はよい。然し地方のソヴイエットの權力を集中して、中央政府を造つたのが惡るい。ボリセヰキは秩序の恢復を急いだために、もつご進展する筈の革命を縊ひり殺したのだ。外國の武力干涉に對抗するためには、バルチザンで澤山だ。赤軍の必要はない。要するにロシヤを革命狀態のうちにおいたまゝ、もつご攪きまぜてをれば、クロポトキンの理想通りの社會が實現せぬまでも、もつご善い社會が其中から生まれてゐたに相違ない。これが大杉君の結論であつた。

四人は暫らく默つてゐた。

その時からもう一年以上も大杉君こは逢はなかつた。今度も、談は何時のまにかロシヤ革命に移つてゐた。

『今日はこれから仙臺まで往くんだ。』

斯う云つて大杉君は立ち上つた。

『しかし僕等がロシアにゐたら、大體に於て、まああの通りをやつたらうな。』

大杉君は外套のボタンを掛けながら斯う云つた。

『そうさ、君が彼の時、彼の人たちの代りロシアにゐたら、精密に同じ事をやつたらう。』

『ナニ、精密に同じ事はやらぬさ。プリンシプルが違ふから。』

『そのプリンシプルご云ふ奴が、滅多に當てにならぬ奴でね。』

『滅多に當てにならぬ奴でね』ご大杉君は口眞似のやうに繰返した。そして直ぐそのあごから、何時もの通りの如何にも罪のない、面白そうな、ヒ、ヒ、ヒごいふ笑聲を殘して、バスケットを提げて出て往つた。

□

大杉君ご初めて知つたのは、明治三十九年の暮か、四十年の春だつたご思ふ。何時ごんな機會で初めて會ふたのか、もう記憶がない。四十年の春、日刊平民新聞が沒落してから、私は神田の下宿屋を引揚げ、守田有秋君の居候になつて柏木に引越した。

その頃は幸德、堺、大杉、深尾韶などゝいふ社會主義の諸先輩が、多く柏木に集まつてゐた。大杉君と親しくなつたのは、それからであつた。

年の上からは、私は大杉君の先輩であつた。しかし此の時分には大杉君は相當に本も讀み、考へも練れてゐた。そして年齢以外のすべての點で、私よりも大杉君の方が、遙かにおとなであり先輩であつた。早い話が、私は國の母親が送つてくれる手織木綿のツンツルテンの着物をきたほんの子供であつたが、その頃やつと二十一か二の大杉君は、木綿でない着物をき、黑の山高帽子を被ぶつて歩るいてゐた。そしてこの山高帽子に包まれた大杉君の思想は、それよりももつと成熟して居つた。私はアナキストとしての大杉君の思想は、此時既に、幸德君よりも完成せられてゐたやうに思ふ。だから色々の點から、私にはどうしても、大杉君が遙かに年上の人のやうに思はれてゐた。

□

大杉君は、最もよい意味での才人であつた。筆を持つてもやはり其の通りで、立派な論文を書く、玄人はだしの小說を書く、詩も作る、藝術論でも文藝批評でも何でも來い、所謂ゆる往くとして可ならざるは無しといふ趣きがあつた。大杉君は決して淺つぺらな意味での器用のみの人ではなかつたが、然しやらせれば何でも出來る——しかも何でも器用に出來る人だつた。その大杉君にも、たつた一つ不器用なことがあつた。

四十年の春だつたか、私は守田有秋君と上州の佐野町に往つた。飯田町から汽車に乘ると、圖らず大杉君と一緒になつた。翌日は大雨の中を、一行五六名で、佐野から數里のところにある××村に往くことになつた。この村には、今では知らぬものゝないほど不思議によく行き亘つたあの『革命歌』の作者、築比地仲助といふ青年がゐた。それで一行は築比地君につれられて其の村の機織工女の有樣を見に往つた。その頃東京では『ゼイゼイ節』といふ俗歌がむやみにはやつてゐた。そして一行のうちには有名な添田啞蟬坊氏の配下で、讀賣りをしてゐたSといふ苦學生がゐた。そこでこの專門家を樂長にして、一同「ゼイゼイ節」の稽古をしようと云ふことになつた。雨の田圃道を半日の間『くの字なりした白髮の婆が、納豆々々となんぎなもんだネ、嗚！ 壓制、しやがれ聲、增したかゼイ〳〵』と怒鳴りつゞけたのだから堪らない、夕方××村についた時分には、最も熱心な生徒だつた大杉君などは、もうしやがれ聲すらも出なくなつてゐた。

歸つて來ると、この隱し藝で一つアツと云はせようといふので、早速、二人で堺家に押しかけた。そして堺夫婦を並べてお

いて二人で合唱を初めたが『增したかぜイ〳〵』といふ折返しのところの外は、二人とも、すつかり節を忘れてゐた、大杉君は非常に吃つた。殊にカキクケコの發音をする時には、あの大きな眼をパチクリさせ、金魚が麩を吸ふやうな口つきをした。それでゐて非常な話好きであり、且話上手であつた。しかし有ゆる方面に非凡な才能をもつてゐた流石の大杉君も、歌を歌ふことだけは非凡に下手だつた。

□

大杉君ほど遠目に見て居る者からは恐わがられ、近づいた人から親まれた人はない。大杉君には、強い性格のどこかに、大きな魅力があつた。そして一度びこの力に觸れた人々は、時には大杉君に不平や不滿を云ひつゝも、結局は大杉君を離れまいとした。先頃ある新聞の記事に、大杉君は借り倒しの名人だつたといふやうなことがあつた。なるほど大杉君は、よく原稿料や印税のさき借りをして居つた。しかし大杉君に借り倒された人で、ほんとに大杉君を恨んでゐる人は無いだらう。一度大杉君に借り倒された人は、ぶつ〳〵云ひながらも、その實もつと借り倒されたい氣持がしたらしい。大杉君には一種の德が備はつてゐた。大杉君の性格には、それほど人を惹きつけ、それほど人を親ませるところがあつた。あれほどの剛情張りで、あれほど人を人とも思はぬ態度で、あれほど言ひたい放題を云ひ仕たい放題をし、あれほど我を押し通して、しかもあれほど人を怒らせず、あれほど人から親まれた人はない。

『君、子供といふものは、犬のやうに可愛いものかしらん』荒畑寒村君は何時か斯ういふ質問を出した。しかし大杉君が子供を可愛がつたことは、荒畑君が犬を可愛がる以上であつても以下ではなかつた。そして犬が可愛がる人を嗅ぎ分けるやうに、子供はよく大杉君になついた。多くのおとなは、ギョロリとした大杉君の眼に『不穩』の光りしか見ることが出來なかつた。しかし無邪氣な子供は却つて大杉君の眼に、穩やかな光を見た。

大杉君は『多數決』が大嫌ひであつた。これは大杉君の理論から來たやうに、恐らく大杉君の性格から來て居つた。大杉君は色々の意味に於て『非凡』であつた。大杉君自身が、平凡な『多數決』の拘束を欲しなかつたやうに、ほんとに大杉君を知る者には、大杉君を『多數決』に從はせ、大杉君を『多數決』で拘束するのは惜しかつた。

大杉君の周圍には、大杉君の『說』を讃美する者よりも、『人』を讃美する者をよく惹きつけた。大杉君の力強い性格は、自づとその周圍に、よし少數ではあつても、大杉君の人物に傾倒する全心的なテイサイブルスの一團を造らせた。地球がその雰圍

氣に包まれてゐるやうに、大杉君は何時でも其の周圍に、大杉君自身のやうな、自分自身の雰圍氣を造つてそれに取卷かれてゐた。之は大杉君を大きくし、その光を強くした。大杉君は燦然として輝やいた。と同時に、それはまた大杉君をして、自分自身の軌道をのみ走る彗星たらしめた。

大杉君の行動は花やかであつた。人々が大杉君の姿に氣がついて仰ぎ見る時には、大杉君は何時でも必ず問題の中心に立つてゐた。「私は大杉君を思ふごとに、常にフェルヂナンド・ラッサールを聯想する。

□

私の記憶には、十幾年の間見たあの屈托のない、何かすることを求めてゐる大きな眼と、罪のない如何にものんきそうな大杉君の笑聲がこびりついて居る。私にはうなだれた、心配顔をした大杉君などは、想像に描くことすらも出來ぬ。私は幾度びも目を瞑むつて、青ざめて齒をくひしばつた大杉君を心に描いて見やうとした。けれども陰慘な一室のドアの中からも、矢張りあの罪のないのんきそうな、ヒ、ヒ、ヒといふ笑ひ聲が洩れて來るやうに思はれる。(十月十二日)

ドン底時代の彼

村木源次郎

「葉山事件」を最後とした大杉の戀愛問題があつた後ち、野枝さんと二人で巣鴨宮仲に家を持つた頃には、もう、親しくして居た同志の者すら全るで尋ねて來ないやうになつて了つてゐたのです。

この大杉のドン底時代ともいふべき巣鴨の家は、後ろにだゞつ廣い庭があつて、そこには芥だの新聞紙だのが一杯に打ち捨てられてゐました。でも、流石、季節です。境界の破れ垣に添つた處へは瘦せこけたコスモスが一杯に咲いて、洗濯ものゝオシメなどを上から蔽されながらも、秋らしい彩りを見せてくれてゐました。

此の荒れ庭に面した十疊の間の、日當りのいゝ所に布團を敷いて、生れたばかりの赤ん坊（眞子）を抱いた野枝さんが寢だるさうに寢てゐました。

もう、朝夕はかなり肌寒う覺ゆる頃だといふのに、大杉も僕も、まだ中柄の浴衣の洗ひ晒し一枚きりです。それでも野枝さんだけは産婦だからと云ふので浴衣の上に一張羅の銘紗――だつて勿論はけつちよの、垢じんだのが引つ掛つて居やうといふ一寸痛快な體たらくでした。あの戀人同志は、隨分な見え坊でしたからねえ――。

臺所の様子、また押して知るべしです。赤とんぼがヒヨイと裏口から覗き込んで、

『ほい、これはお寒むい。』

といふり得よろしく、ついと歸つて了つた後を、流しの上で、ちよん切られた大根の尻っぽが、ひよいと逆立ちでもしさうな氣配を見せてゐましたつけ。

大杉はいゝ體格の男でした。が、監獄で肺を悪くしてからは薄ら寒むい風など、大の禁物だつたのです。おまけに僕は又、至つて病弱な男なんでせう。それだもの、秋の白地はかなり身に堪えましたよ。で、二人とも餘り大きくもない産婦の布團の裾の方からそつと潜ぐり込んで、絶えず身を温めてゐなければなりませんでした。

『さア食はうぢやないか、甘さうな芋だ。』

米櫃に少しばかり殘つてゐるお米は、産婦のために取つて置いて晝と晩のお粥にせねばならない。そこで二人は、芋を五錢で買つて來てフカシて食べる――。こんな事はよくありました。

その頃です。

日比谷の服部濱次（洋服屋さんで古い同志）君の娘で、お清さんといふ愛くるしいのが、ちよつと臺所の手傳ひに來た事があります。處がそのお清さん、三日ばかり立つて逃げるやうにして日比谷の自宅へ歸つて了ひました。

『まあ、どうしたのさ』

と、其時母親が訊ねますと、

『だつてねえお母さん、あすこの家ぢやお米を買つてくれないから御飯が炊けないぢやないの、臺所を手傳ふたつて私も困るわ――』

と、眼を丸くしながら、呆れたやうに話したさうです。無理はありません。

あのころ大杉はよく洗濯なんかもやつたものです。

『おい村木、ちよつと起きて野枝の粥を煮てくれないか――、

俺はまた洗濯だ。』
　お天氣の日だと、あの天神髯を生やした大杉が變な腰付で、赤ン坊のオシメから野枝さんの汚れ物迄、きれいに洗ひました。
　しかし、流石に大杉は大杉でした。産婦の布團の裾に潜りこんでフカシ芋で腹を滿たしながら、もう、其の時、後に出した『文明批評』といふ雜誌發行の計畫を起てゝゐました。米が買へなくなつて五錢の芋をフカシて食つてゐる時、しかも眼の前には收入の何んの希望もない時に、平氣で、さも當然なことのやうにそんな計畫をする彼には、ちよつと人の眞似られない處があつたと思ひます。
　二人で産婦の裾に潜り込みながら、大杉の雜誌計畫の自惚れを笑ひながら聞いてゐました私の耳に、
『ごめん下さい――』
　と云ふ、しはがれ聲の、低いが、しかし何處か太いところのある女の聲が聞えました。で、私はごそ〳〵と這ひ出して玄關の處へ出て見ますと、其處に、背の低い變なお婆さんが、しよんぼりとイんで居ました。
『あの、大杉さんはいらつしやいませうか、野澤でございますが……』
　うら枯れたやうな短い髪が、びんの處だの前の方だのにばさばさと亂れてゐて、垢ずんだ顔に思ひ切つて大きな眼がギヨロギヨロしてゐますし、どうせ生活の疲れからでせうが、その大きな眼はドロンと濁つてゐるやうにも見えて、ちよつと氣味の悪いお婆さんなのです。
『大杉君、野澤といふお婆さんが會ひたいつて來てゐるんだが――』
『うん、さうか。』
　と、大杉は直ぐ起き上つて、あの見え坊な男が、濟まアして如何にもその浴衣姿が自然なんだと思はせるやうな格構で玄關へ出て行きました。
『誰れなの……』
　いま迄うと〳〵として居たらしい野枝さんが、その時ちよつと首をもたげました。
『野澤といふお婆さん――貴女は知つてゐる？』
『あら、野澤のお婆さんなの、ぢやあお金をこさえて呉れつて云ふのかも知れなくつてよ。でも、いま困るはねえ――。』
『どんな人？』
『村木さんは知つてるでせう。ほら先ん達つて死んだ野澤重吉といふ俥夫さんがあるぢあないの。あの人のおかみさんよ。野

澤さんの寫眞が『勞働運動の哲學』の初めに載つてゐるぢやありませんか。」

「さう〳〵、野澤！　あの『築地の親爺』こか云ふ――、さうですか。」

私は餘り行き合はなかつた人なんです。が、話しにはよく聞いてゐました。この野澤重吉こいふ同志は、何んでも日本に社會主義運動が起つた最初からの、最も熱烈な、不斷な、戰士だつたさうです。銀座尾張町の角の『尾川組』駐車場に出てゐた俥夫さんで、仲間の俥夫さんだの緣日商人などゝ云ふ人々の間では『築地の親爺』こさへ云へば誰れ知らぬ者もなかつたこ云ひます。野澤君の寫眞の載つてゐる『勞働運動の哲學』こいふ本の大杉の自序には、『殊に、東京に於ける勞働運動史の殆んど總ても其の生涯こアイデンティフアイーした故野澤重吉君は、僕自身の中に此の飜譯的『勞働運動の哲學』を生かしてくれた最も重要なる一人物であつた。』こ、書いてあります。

私は臺所へ行つて、野枝さんのお粥を煮ながら、玄關の次の四疊で、お婆さんが何かくど〳〵こ話してゐる底太い聲を聞いてゐました。

こ、聲がふこ止んで、大杉の奥へ行つた音がしたこ思ふこ間もなく、彼はニヤリ〳〵笑ひ乍ら臺所へ顔を現はしました。

「おい、また一つ行つてくれないか」

見るこ、彼の手には今まで野枝さんの着て居た羽織が摑まれてゐます。私は彼れのニヤリ〳〵を一種の苦笑で迎へながら、默つてそれを受こりました。そして、フト奥の方へ眼をやりましたが、直ぐ傍にあつた古新聞に羽織をくるむこ、そのまゝ裏口からそつこ出て行きました。

外は、見事に澄み渡つた秋晴でした。質屋の暖簾をくゞる時まだ新らしい紺の香が匂ひました。中庭に大きな松があつて、キ、キ、こ身を裂くやうな百舌鳥の聲も聞えました。

その羽織で、案外にも五圓貸してくれました。で、私はこれを細かいのにわざ〳〵くづして貰つて、さて、歸り途を急ぎながら種々こ考へました。

「お産が濟んだばかりの野枝さんには氣の毒だけれど、これで野澤のお婆さんも喜ばせるし、この內の幾分かを殘して明日の米も買へるこいふものだ――」

歸つてくるこ、私は、臺所から聲をかけました。

「大杉君、ちよつこ――」

彼はすぐ出て來ました。

「五圓貸したよ」

「さうか、ご苦勞だつた。」

大杉はその金を無表情で受取ると、さつさとお婆さんの方へ引つ返して行きました。そして、

『甚だ尠いが、ぢやあ今日はこれだけ――』

と云ひながら、無造作にお婆さんに渡して了ひました。私は一寸ぽかんとしましたね。まさか皆んなは渡すまい、せめて二三日間の米代は殘すだらうと思つてゐたのでした。

が、しかし私は、お婆さんを送り出してゐる大杉の後ろ姿を呆れたやうに眺めてゐるうちに、何んとも云へない氣持――と云ふよりは溫い血潮のやうなものが、何んだか斯う腹の底の方から湧き上つて來るやうに感じて來ました。そして、大杉のよくやるニヤリとした笑ひが、私の顏にも現れました。

マコよ

ゲンニイ

マコよ、獨りで泣くのはおよし、
僕も一緒に泣かしておくれ、
パヽに、好く似た大きなお目に、
露を宿して歔欷く時は、
僕も一緒に泣かしておくれ、

パヽと、マヽと、が歸らぬ事を、
僕が寢床で話したをりも、
マコよ、お前は頷くばかり、
涙見せない可憐しさまに、
僕は腸絕つ思ひ、

パヽの、よく云つた戯言に、
俺が死んでも
ゲンニイ、居れば
マコは、安心、
大きくなる、と、
マコよ、今日から好い叔父樣が、
パヽの、代りにお前と遊ぶ、

マコよ、獨りで泣くのはおよし、
小さいお胸に大きな悩み、
秘めて[illegible]ひの子にならぬよう、
僕も一緒に泣かしておくれ。

かたみの灰皿を前に

安成二郎

西洋の煙草盆とでも言ふのか、灰皿と、巻煙草を立てゝ置く容器と、それらを載せる盆と、チユーリツプの模様のある硬質陶器の三つ揃ひを、私は彼のかたみとして貰つた。十月六日の夜、勤め先きから歸つて、机の上にそれを見出した時、『これは好いな、一番好いものだなア』とさう妻に言つたが、急に胸の疼くやうな堪らない氣がして、私はそれを目の前から取り除いた。

この煙草盆は彼の鎌倉の家には無かつた。逗子へ移つてから、洋館の籐のテーブルの上に置かれてゐた。それから駒込の勞働運動社、柏木の最後の家と移るたびに、籐のテーブルの上にこの煙草盆は何時でも載つてゐた。

『あれは逗子で買つたんだね』或る朝、村木源次郎君に會つた時、さう言ふと、村木君はさうだと言つた。大杉は煙草が好きで、よくマドロスパイプを啣へてゐたが、然し餘り味覺の鋭い方では無かつたらしく、金口でも朝日でも手當り次第に吸つてゐた。

野枝さんのかたみの支那扇は妻が貰つた。支那の芝居の繪らしい繪のある扇だ。いつか野枝さんが私の家へ遊びに來たとき、『逆輸入ぢやありませんか』と、それをとつて見ながら言ふと誰とかゞ買つて來たのだから、本物だと言つたが、多分大杉がフランスからの歸りのお土産でもあらうか。その時野枝さんの言つた買つて來た人の名前は私の耳に殘らなかつた。

珈琲をつぶす器具が、も一つ私の家にかたみに贈られた。彼等は自分の家庭の珈琲が自慢であつた。

『こんな美味いやつはどこへ行つたつて飲めないだらう』と大杉が言つた

地震で銀座無がくなつてからも、彼が一度さういふので、『銀座が無いからね』と私が言ふと『ナニ、銀座があつたつて飲めはしないよ』と彼は言つた。が、彼等の珈琲は私には味が少しうすかつた。

九月の十一日か二日の夜、まだ省線電車の動かない時で、私

は新宿から歩いて來て大杉の家に立ち寄つた。何を話したか記憶にも無いが、その夜も野枝さんが珈琲を入れて呉れた。一時間程して私は自宅へ歸つたが、それつきり彼等に會ふことが出來なくなつたのだ。

大杉の最後に住んだ家は、私の家から三丁足らずの近くであつた。フランスから歸つた歡迎會の夜、野枝さんが私に、近所に家が無いかといふので、ボツ／＼あるやうだから探しにおいでなさいと言ふと、約束通り翌日の夕方やつて來た。それで私は野枝さんを案内して探し當てたのが其の家で、それが七月の二十九日で、八月の一日には越して來ると言つて歸つたが、一日には來なかつた。どうしたのだらうと思ひながら、私は二日の午後に立つて白馬山へ登りに出かけた。七日の早朝に旅から歸ると、私の子供達は皆なまだ寢てゐたが、それと一緒の床に魔子ちやんも眠つてゐた。大杉は五日に引越して來たが、四日に家の掃除に來た野枝さんに連れて來られて、それからずつと魔子ちやんは泊つてゐるといふのであつた。ちよい／＼歸つたやうだが九月一日の地震の日まで、魔子ちやんは殆んど私の家で暮した。あの子はさつぱりした子で、私の向ひの家のM氏がある日、私の家へ來てゐたが『魔子ちやん、をぢさんの家へ泊りに來ないか』と言ふと『行くわ』と言つてゐた。その夕方、大杉と野枝さんが迎ひに來ると『いやだよ』と言つてゐたが、晩飯が濟むとひとりでさつさと向ひの家へ行つて仕舞つた。地震の時は、恰ど皆んなで食事の最中であつたが、最初の震動が來ると、魔子ちやんと私の二人の子とが、わーッと泣き聲を上げて洗足で外へ驅け出した。それで私は驚いて直ぐにその後を追つかけ、三四十間程のところでやつと三人を引き止めたが、おかげで私は二度目の大ゆれといふやつをちつとも見ずに仕舞つた。それ以來、魔子ちやんは私の家に來なかつた。『どうして來ないの』といふと『をぢさんのところは地震があるから』と言つてゐた。

その日、地震がやゝ鎭まつてから、私はコダツクを下げて出かけて行つた。内田（魯庵氏）さんの家の前に、内田さんの家族の人達と一緒に大杉も立つてゐた。内田さんは讀賣に大杉のことを書いて『大杉に何處かソコラの木の下に立つて貰つて、アナーキストの避難は面白からう』と言つたが、私がさうしなかつたので『安成が此寫眞を撮つたら好い記念だつたらうに、惜い事をした』といふやうに書いてゐられるが、實はそれから内田さんに別れて、大杉と二人で彼の避難所へ行つて、そこに椅子を持ち出して腰をかけてゐる大杉と野枝さんを寫したのだ。之が二人の最後の寫眞にならうとは、彼等も私も元より思ひも

寄らないことであつた。

柏木に移つてから僅か四十日ばかりで『物質非不滅論』の譯者は滅んで仕舞つたが、その四十日ばかりは、彼の生涯のうちでも靜かな日であつたらしい。野枝さんの叔母さんが福岡へ連れて行つてゐた三番目の子のエマちやんも彼等の懐ろに歸つて來てゐた。兒煩惱な大杉はその子と四番目のルイズちやんと、二人を乳母車に乘せては、夕方になるとそこらを歩いてゐた。そして何時も私の門口から聲をかけた。

私の家と同じ番地の大久保百人町二百十二番地に大杉は嘗て住んでゐた。その家には今松永といふ本所の方で燒け出された人が住んでゐるが、恐らくそれは保子さんと住んだ最初の家であつたらう。恰ど私の家と狭い路次を隔てゝ斜めに裏合せになつてゐる家で、私はそこにも彼を訪ねたことがある、もう十二三年も前になるだらう。それから大杉は、中央線を東に越した百人町三百五十二番地に移つて、雜誌『近代思想』もそこで發行した。佐藤緑葉、土岐哀果、和氣律次郎の諸君がよくその家にやつて來た。社會主義研究の會も毎週その家で開かれ、神近市子君もその會に顔を見せた。さういふ色々の思ひ出のある家の附近を、大杉は毎日のやうに乳母車を押して歩いてゐたのだ。(そこで私は、そんなことで大杉がいくらか感傷的な氣分でも味つたのではないかと思ふ。誰れでも感傷的な氣分になつてゐる時には、よく死神にとつつかれるものだから――)

擔ぐやうだが、大杉は今度が三度目であつた。日蔭の茶屋で刺された時、私は千葉町に住んでゐたが、東京の友人から『オホスギカミチカニササル』といふ電報が來た。私は葉山の病院に出かけて行つた。誰かゞ大杉の枕頭に坐つてゐて、『俺ならもつとうまく刺すんだが、惜いことをしたなア』と言ふと、彼も苦笑しながら『全くだよ』とか何んとか言つてゐた。その時は笑つても居れたが、二度目のチブスでは、とても駄目だらうといふところまで行つた。その時には、腦貧血で何時も卒倒する程つとめた一人の看護婦と、お産後一週間目で鎌倉からやつて來た野枝さんの注意で助かつたのであつた。

野枝さんはお産は何時も輕く濟んださうだが、今度のネストル君は少し早産で、いつもよりは重いと言つてゐた。それでも普通の女に比べてはずつと輕かつたらしい。慶應に入院してゐる私の妻を見舞ひに來て呉れたのが、お産後十四五日目であつた。お産が八月九日であつたから、普通なら九月の十六日にあの混雜する電車で遠い鶴見まで出かけはしなかつたらう。早産をしたのは、その二日程前の晩に、縁側でルイズちやんにお湯を使はせて、その盥の湯を庭へ捨てる時、

『屛と一緒に庭に落ちて、ドシンと尻もちをついちやつたんだもの』と、野枝さんがあとで笑つて話した。

鶴見へ出かけたのは、不思議に色々の條件が二人をその日に誘ひ出したのであつた。横濱に住んで、川崎の東京電氣に勤めてゐた大杉の弟の勇君の安否を二人は非常に心配してゐた。横濱も東京電氣も地震で全滅したので、どつちにゐても、こんなに消息の無いのは十中八九駄目なのだらうと言つてゐた。處へ五日に出した勇君からの無事のたよりが十五日についたのだ。それと、も一つは、大杉はその頃ひどく貧乏してゐたのだが、十五日に野枝さんが出かけて二十圓拵へて來たのだ。若しどつちかゞ喰ひ違へば、十六日には勇君が、腫物が癒つたので、柏木へ來る都合であつたのだ。(が、あんなに覘はれてゐたのでは何れはあんな運命をのがれなかつたのかも知れない)

大杉の實際運動の方面に、私は殆んど接しなかつたが、彼の性格は私にとつて一つの驚きであつた。で、私の乏しい創作の中に、彼を主人公にしたものが三つある。そのうち一つしか、私はまだ發表することが出來ずにゐるが、その發表した一つは『冷笑』と題する三十枚ほどのもので、この主人公は、自分の理想を實現するために、自分が不合理とする社會に許されてゐる總てを、利用されるだけ利用する。そして自ら不合理と認める社會組織を自ら利用する態度を責める相手を冷笑し去るのだ。一つは、日蔭の茶屋の事件を描いたもので、主人公を殺さうとして出かけた女が、主人公の強い性格にうたれて殺すことが出來ず、却つて自ら死ぬ徑路を描いたものだ。

山川君と荒畑が雜誌『青服』の出版法違反の下獄から出て來たとき、出迎ひに行つた私は、久しぶりで大杉に出逢つた。そして私達は連れ立つて、上駒込の彼の家に出かけた それは田端で火事に遭つて引越した家であつた。大杉は道々その火事の話をした。彼はその晩、變な友人と銀座で逢つて、一緒に吉原へ遊びに行つたのであつた。銀座へ行くとき尾行をまいて仕舞つたので、途中淺草の黒瀬春吉君のところへ行つて、そこの尾行に吉原の何とかいふ家に案内をして貰つたのだが、夜中になつて、搖り起された。象潟署の高等視察がやつて來たのである大杉は取次ぎから其の名刺を受とると、わざとびつくりしたやうにぶる〳〵顫えながら女に抱きついて、實は俺は大泥棒だがいよ〳〵年貢の納め時が來て仕舞つたとか何とか、でたらめを言つて女をおどかしたのである。すると、そこへ高等視察が上つて來ると、大杉は、こんなところへ遣つ來てるやつがあるかと怒鳴りつけたところが、役人は、御愉快のところを誠にすまないが、實は田端のあんたの家が丸燒けになつたと言ふ電話が

田端の方の署から象潟署にかゝつたと言ふのである。その話を私は「丸燒け」といふ短篇にしたのである。

ある人は大杉の死は「吾々の運動途上の一出來事である」その死骸を踏み越えて進まなければならぬといふやうに言つた。が實際運動に遠い私にして見れば、大杉の死は償ふもの無き寂寥である。今は、とても彼の死骸を踏み越えて進む勇氣が無い。これまでも、隨分長い間彼に逢はずにゐたことがある。が、彼が何處かに生きてゐるといふことが、友人の乏しい私には心賴みであつた。今はもう大杉はゐないのだ。私はこれから色々の形式で、彼を自分の創作に生かして行かうと思つてゐる。(十月十三日午前六時、夜警から歸つて)

外二名及大杉君の思出

山崎今朝彌

一

この表題で一度原稿を書き終つたは十月七日の夜であつた。其原稿では先づ大杉家の系圖を掲げ、榮と榮の妻伊藤野枝と、榮の末妹あやめの一子宗一(七歳)とが、大正十二年九月十六日夜、麹町區大手町一丁目一番地で死んだこと、榮等兄弟と陸軍中將山田保永とは三親等の姻族、陸軍中將現京都師團長前憲兵司令官山田良之輔とは四親等の血族であること、幼兒宗一は米國人でもあること、其他色々のことを明かにし、以て其筋があくまでも秘 さんとした處を意地悪くバラさんと試みた。

然るに九月一日の激震は事咄嗟に起り其の震動極めて峻烈にして家屋の潰倒男女の慘死幾萬なるを知らず、剩へ火災四方に起りて災焰天に沖り京濱其の他の市邑一夜にして焦土に化したが、十月八日の解禁は事止むなきに出で、其の範圍極めて案外にして、折角の苦心屁の足しにもならず、剩へ今判の結果は疑實四方に起りて新聞天下に普く、系圖其他の逸話一朝に て陳腐

に腐した。で復た茲に表題を鷄肋する外稿を更めるの止むなきに至つた。

が、大杉君には詳しく詳しい自叙傳もある、長い長い間、其日々の生活は新聞雜誌の種になつたり又は生活の種にしたりして居た。特に最近の最後では、問屋と雖も其の倉庫を空にさせられた傾きがある。で、ウマ味カラ味は到底及びもないが、でも永い間の間柄であつたを栖に、なるべく珍味の處を盛れるだけ澤山盛つてみる。言ひ後れたが僕の受けた注文は、大杉君の逸話又は思出を十枚許りと云ふにあつた。

二

大杉君等は確かに殺されたに相違ない、がイクラ考へて見てもホントに死んだとは思へない。大杉君の柔道の先生で、坂本何とか云ふ宮内省の御役人が、大杉の腕前ならイクラ欺し討でも手を縛られたでない限り、三人や四人では到底ノドを締めきれるものでない、と杉浦翁に話したときいてからは、一層益々、あの男のことだから人騒せに、今に又々ヒョックリ生きて出るかも知れない、などとも考へて見たが、今に出て來ない。

大杉君は倨傲狷介縱論横議といふが通り相場だつた。又其點は其通りに相違なかつたが、現に目をツブつて靜かに往時を思出すと、出て來るものは何時も、野枝さんとマコと揃うて、輕い惡口を叩きながら、紅茶を啜つて上手に世間話をする、洋服姿のニコ〳〵顔で、どうしても、目を瞋らし腕を振り聲を張り、不意に飛び付く大小幾十の猛獸を相手に縱横無盡に荒れ狂ひ、血を吐く如く泣き叫ぶ女子供を庇ふ、妖怪でもなければ、衣類は剝がれ寶物は取られ血身泥になつて奧底深く井戸の中より顯はれ出でたる、足のない化物でもない。又吃々として、優も美も血も涙もない、全く鬼畜に均しい殘虐無道の行爲、歴々として榮達利慾を念とし、判然として無慮信念を缺く無智陋劣の行爲とう〳〵バレル迄逃げ通しかくし通した其上で、尚責任を上下左右に轉嫁し、道連まで拵へる卑怯未練の行爲、入智恵にせよ一旦引受けながら、惜しくなり怖くなり、只もう輕くなりたいばかりに、一層大きな泥を塗り恥をかき男を下げる行爲を、怨めししや怖めしやと責め詰りかき口説く幽靈でもない。

更に再び目をツブれば、今度は保子さんと二人りで金借に來て、苦勞性の世話女房にのみ物言はせ、自分はニードの廣告よろしくのドス黑いズルさうな顏で默つて目を光らしてゐる和服姿が出て來た

三

大杉君と最後に別れたのは八月末機械聯合の大會が協調會にあつた際であつた。其時は珍らしく一人で來て二人で飯を食うて大勢で柔和しく歸つた。別に覺えてる程の話はなかつた。でホントの最後の會合は、佛國を追放されて歸ると間もなく、例の三人でやつて來た時である。妻の居る間は、佛蘭西の話、浮世の話、子供の話で、菓子を平げながら時間を殺したが、妻が下へ降りると、洋行の用向、秘くして行つたわけ、旅費調達の苦心、今後の運動方法などを語り出した。其の間マコと堅公（僕の獨り子で、もし僕と共に之れを殺しでもする者があれば、少しでも之れに關係ある其の者の九族は、其老幼たると男女たるとを問はず、立所に必らず之れを亡ぼし盡して見せるといふ程僕が可愛がつてる九歲の子）とは歌つたり踊つたり泣いたり笑つたり喧嘩したりバカにハシヤギ廻つてゐた。

三角問題では服部濱次君が野枝黨、宮島資夫君が神近黨の旗頭で、僕は保子派と目されて居た、でも僕は何時頃からか、とうの昔に神近さんとも野枝さんとも氣持よい仲になつてゐた。僕の妻は保子さんへの義理立許りでなく、どうも野枝さんと相許す間柄と云ふ程にはならなかつた。大杉君も野枝さんも素振りで之れを知つてる、で野枝さんは僕からみると氣の毒な程、僕の妻に下た手に出てゐた。此日も野枝さんはくるなり堅公にマコを謝罪らせうとした。去年僕と妻とで堅公を連れて鎌倉へ行つたとき、歸りを送つて來たマコと堅公とが停車場で大喧嘩をし、双方の兩親と尾行とが總出で漸く引分けた。其後二人は久しく正義を主張して相讓らなかつたが、今年の初め頃からマコが惡かつたから堅チヤンにあやまりに行くと、言つてると云ふ野枝さんの話であつた。マコは今日初めて其機會を得た譯なんだが、野枝さんが色々の心盡しも其効なくマコはどうしてもあやまらなかつた。

四

大杉君にも多少因緣話がある、先日朝日で志賀重昂翁が、恰度百年前の九月十六日に、モルモン宗の始祖モルモンが、同じく「××××××××××××××××、×××××××××××××」と暗に、或は明かに甘粕某を惡罵したと記憶する。大杉君はコンナ事は知らなかつたらうが、何の因緣かモルモン宗や其宗祖の話をよくした。軍隊に殺されると憲兵に殺されるとも既に多少の緣があるのに、三人で殺されるとは一層緣が深い。マコと宗一君、男と女の相違はあつても七歲の幼兒たることは同じだつた。

曾て大杉君が警視廳に狙はれ、檢擧に繼ぐの檢擧で、續いて

七回も檢事局に送られたがイツカなヒツかゝらず、何れも不起訴で一つも物にならなかつた。ソコで警視廳では二三年前に餘所で捨てゝあつた屁のやうな事件を新に千葉から拾つてきて、とう〳〵物にした。この辛辣執拗の行爲に忽ち義憤を發し敢然起て大杉君のために、其人格の高潔と其識見の非凡とを極力高調辯護した塚崎直義君が、今や遙かに幽明境を異にし、却て天職と營業とのため、其人格と識見とを云爲せざるを得ざることとも又塚崎君努力と信仰との結果が調書及公判に表はれざる、共犯範圍と命令範圍とを、漸々世間に明確ならしめ、別に犯人の不誠不純不男不士不道不人と、寄つて集かつての打合せが不充分であつたことゝを暴露し、以て塚崎君の所謂人格高潔識見非凡なる大杉君をして聊か瞑するに足る處あらしめたのも何かの因緣であらう。

大杉君の裁判官が、大杉君の妹の亭主の兄の妻の妹の夫の祖父の從兄弟の養家先の兄の孫であることも多少の因緣がないとは云へまい、其の又裁判官が仲間割れの結果止めることにでもなれば尙更因緣といふものだ。

序に僕にも因緣がある、宗一君の母のあやめさんが未成年の時、父少佐の遺族扶助料を取るためだつたか、又は遺產相續拋棄のためだつたか、大杉君はあやめさんの後見人、堺君と保子さんと誰かは親族會員、僕は其後見監督人であつた。

僕が茅ヶ崎で地震軍人火事海嘯の厄災を免れ、燒跡見物に歸京して事務所の丸殘りを知り、腰も拔けん計りに驚いたが、何もかも一切天佑と諦め、早速人無事家安全　知人の消息早く知りたし、の新聞廣告を出したら、イの一番に和田久太郎君から勞運社の消息と共に大杉一家無事安全の報告があつたが、其手紙の日付が九月十六日午後八時で、着いたのが大杉君と野枝さんと子供一人が確かに一昨夜憲兵隊內で將校多數立會の上慘殺されたと報告してくれに新聞記者が來た時と同時であつた事も何かの因緣か。

五

あと僅かで制限に達するから今から驅足だ。大杉君があの最中殺されるすぐ前荒畑君と吉川守邦君との留守宅を見舞ふたを蟲が知らせたのだと云ふ者もあるが、大杉君でも堺君でも公私は決して混淆しなかつた。犬猿啻ならぬ兩君の間でも、運動上の事や天變地異の挨拶にはよく往來をした。チブスの見舞には僕と堺君とでセントルカへ行た。盲腸炎の時には僕と大杉君とで森ヶ崎へ行た。共產黨事件がなかつたら今度も堺君が眞ッ先に奔走してくれたらう、が双方何れも申分は御尤ながら、兎に

角あの間柄で永遠に仲直りの出來なかつたのは双方の爲に何より惜しい事であつた。

大杉君にもアレで中々人間らしい――と云へば人間が惡いが――シホらしい處がある。あの當時はアレで保子さんを避けて歩行いてゐた。一度賣文社で保子さんに遭遇して退ッ引ならなかつた時、隠してくれ／＼とばかりに人の後に隠れた事がある。貧乏で花の咲いた當時、飯は今食つてきたなどウソをいうて遠慮した事もある、僕にかくして――野枝さんにかくしたか否かは知らぬ――其後一、二回保子さんに金を送つたらしい形跡がある(保子さんと大杉君との間は、馬場孤蝶さんや堺君が脱退後僕が解決係となり、濟んだ其後も總て僕を通して交渉談判する事になつてゐた)返す積りの氣でもあつたのか、月賦にしてくれの待つてくれのと初めの中は借金の言譯をした事もある、餘り只の客が多く行くので布施辯護士と奥山醫師に氣の毒でたまらないなどいふた事もある(其くせ夫子自分はどの組だつたらう)。

大杉君が尾行の遺族から死亡の通知を受けた話、餘り賞揚られて塚崎君を忌避した話、スパイを放つてスパイを押へた話などは何れ自叙傳に出るか出たかだらう。遊里へ足を入れても決して身を入れなかつた話は、其發見者たる和田久さんでも暫くだらう。

手紙判斷演説判斷、サテは又被告ツプリ交際ツプリ喧嘩ツプリ、十八番話に御兇話、强情我慢意地ツ張り、自慢高慢稚氣自惚、失意時代の逸話や得意時代の失敗談、ズルイ話圖々しい話負け嫌ひで食はず嫌の話等は到底今日の埒には明かない。(十月十三日)。

無鐵砲、強情

和田久太郎

大杉君は偉きな體の持主だつた。從つて精力家だつた。機に臨み變に處して、後から後からといろんな計畫を起てゝゆく點は、實に驚嘆に價した。吾々の運動の先頭に、中心に、或は背後に盛んに活躍した。よく讀み、よく書きもした。

しかもそれ等の萬事のやり方が如何にも無鐵砲で、性質が至つて强情で、我儘で、おまけに放縱だつた。自分から『俺は道德よりも放縱を尊む』と云つてゐた程だ。

僕等にとつては大杉君は偉い男だつた。しかし、『偉人』なんて呼ばれるやうな嫌やな男では決してなかつた。彼をさう呼ぶやうな人が若しあるとすれば、それは餘りに大杉君が可愛想だ。『偉人』なんて漢語には、あの黴臭い道德の匂ひがプンプンしてゐる。大杉君はあの臭ひが大嫌ひだつたのだ。彼はもつと人間味のたつぷりしてゐた男だ。

『大杉は餘りに傲慢で强情だから、どうも始末にいけない――』

『大杉の無鐵砲、上つ調子にも困つたものだ――』

堺利彦、山川均といふやうな人々から、彼はよく斯う云はれて膨つ面をされてゐた。實際また、大杉君の傲慢な强情な態度に苦しかつた。よくその點を理解して居るつもりの僕等でさへ時々は癪に觸るやうなこともあつた位だ。

だからと云つて、大杉君の體からあの强情と我儘をとり去つたなら、恐らく其時は、同時に大杉君の有つ全てのものが零になつただらう。敵に對してごしん〳〵とぶつかつて行くあの勇姿も、日夜、書き、叫び、畫策も、飛び廻つて倦まなかつたあの精力も、皆んな同時に消え去つて了つただらう。

さう完全な人間なんてあるものぢやない。あつたら嘘だ。問題は、その人間の缺點を何處まで許せるかだ。その缺點を蔽ひかくして猶ほ光り輝く他の美點を何處まで買つてやるかだ。

『何あに、駄目な事があるものか、やつて見ろ、力かぎり押し通して見ろ、必つとやれるものだから――。物事は半分ごと迄の見込がつけばそれで充分だ。二三分の見込さへあれば半ば處まではやり通せるものだ。やつて見ろ！　ぶつかつて見ろ！』

これが大杉君のやり方だつた。その哲學だつた。

確かに無鐵砲だ。が、彼はその無鐵砲で立派にやり遂げる經驗を積んでゐた。勿論、無鐵砲の失敗も多くやつたが、大杉君は自分でそれを決して失敗とは云はなかつた。しかも、それが單なる負け惜しみではなく、心からさう信じてゐる人だつた。

『何に、失敗だと？　馬鹿な奴等だな。俺達ちがどんなに大きな收穫をしたか、腕組してゐて何うして知れるんだッ』

無鐵砲の失敗を笑ふ輩に對しては、斯う豪語しながら、せつせと彼は次の計畫を進めて行つた。

大杉の無鐵砲な行爲、强情な態度――。それ等に依つて僕達ちは、何れほど敎へられる處があつたか知れやしない。

僕は元來ごく貧乏な家に育つたので、その境遇が僕をして隨分な卑屈者にして了つてゐた。妙にねぢくれた、ケチな强情者に出來上つてゐた。そして、そのねぢくれた强情からだん／＼と社會主義者の仲間に近附いて來たのだつた。大杉君は、僕の此の妙にねぢくれた强情に見處でもあつたものか、僕の卑屈な處を除かせやうとして、隨分努めてくれたやうに思ふ。

その中に僕も、見やう見眞似の無鐵砲な行爲の中から、辛うじて己れの力を掴んで行けるやうになつて來た。敵にぶつかつては多少の傷を受けるが、しかしその尊い經驗によつて身の內から更に新しい力の湧いてくる愉快さを悟るやうになり、敵から受ける多少の傷の痛みにも一種の痛快味が味へるやうに成つて來た。有難いたまものだ。

『君は餘りに亂讀しすぎるよ。そんなに頭の中へゴミを詰め込むのは止すがいゝ。餘りいろんな本に迷はされると引つ込み思案になるものだ。』

それから、之れはよく誰れでも言ふことだが、本に讀まれちや駄目だよ。厚い本だつて肝心な處はほんの滴ほどだ。その滴だけをしぼり出して飲んで自分の滋養に役立たせばいゝんだ』

以前、こんな事もよく言つてくれた。

『おい和田久、僕は近くこんな論文を一つ書いて見やうと思ふんだ。

それはね、人の議論を讀むなり聞くなりして見てだ、其の議論が如何にも尤もらしく書かれてゐたり聞えたりしたなら、その議論の中には必つと「まやかしもの」が含まれてゐるといふ主張なんだ。何うだ、面白いだらう。』

ニタ／＼笑ひながら、極く最近こんな事も言つてゐた。

大杉君は、遠慮深い人間だとか、謙遜家などは大嫌ひだつた。さう云ふ事を有難いものゝやうに云ふ人達ちに對しては、殊更に自分を無遠慮、我儘に振舞ふやうな癖があつた。

又、吾々の集會や研究會の空氣をして、自由な、無遠慮な、愉快な空氣の漲るやうに努めた彼の功績は著しい。彼はさうした場所の固苦るしい空氣を破るために、わざ／＼帽子を冠つたまゝ、そして煙草を吸ひながら、坐談的に講演した事がよくあつた。或る人々はさうした行爲を見聞きして、『實に大杉は上つ調子でいけない』と、苦り切つてゐた。

大杉君は我儘者だつたが、又、他の我儘も嬉んで受入れる男

だつた。

『お互ひがウンと我儘になればいゝんだ。そして、その上でお互ひが腹の底をぶちまけて自由に話し合へば、眞當に正しい理解を皆んなが持つやうになるんだ。そこから自由で愉快な社會が出來上るんだ』

これが大杉君の持論だつた。

『クロポトキンといふ爺さんの人格には敬服もするが、僕には奴の謹嚴然とした處が何うも氣に喰はないんだよ。僕はもつと放縱な處のある人間の方が好きさ。

そこへ行くとバクウニンだねえ、あ奴は隨分やりつぱなしな無鐵砲な人間だつたと見えて、友達といふ友達には借金のしつ放し、迷惑の掛けつ放しで各國を飛び廻り、煽動をし歩いて居たんだね。だからツルゲネーフなんかは、バクウニンは下劣な奴だ、怪しからん奴だなどゝ、盛んに他の友達へ惡口の手紙を出したやうだ。

しかし、そのツルゲネーフや其の他の友達が、ブンブン怒つたり毒づいたりしながらもやはりバクウニンの死ぬ迄運動費や其他の援助をしてゐたのだからなあ『バクウニン遺稿』の序文に書いてゐる友達は、兎に角彼は不思議な男だつた、平氣で吾吾に隨分ひどい迷惑を掛けたが、何處かしらに眞面目な偉大な魅力を持つてゐて、癪に觸りながらも憎めない男だつた。と、言つてゐる』

食べたまゝのお膳も片づけないで、大杉君は愉快さうに話し出した。

『なる程、君が好きさうだなあ――』

と、その時ふと口から出かけたが、止めて了つた。そして、彼の大眼玉が嬉しさうに輝くのを眺めながら、僕は腹の中で獨りで笑つてゐた。

あの圖々しく、太てぶてしい大杉君が、不思議にも全で、小兒のやうな羞かみを時折見せる事があつた。それは、稻妻のやうにさつと來て直ぐ消えて了ふ類の、ほんの一寸したものではあつたが、しかし見逃して了ふには餘りに鮮やかな羞みやうだつた。

子供時代の腕白自慢をするときだの、女の話しだのをする時に、どうかした加減であのドス黑く脂切つた顏の上を美妙な色彩がさつと走る――。オヤツと思ひながら、僕はぢつと彼の顏を見守るやうな事がよくあつた。

其の大杉君が『獄中記』の中で斯んな事をも書いてゐる。

「僕は元來極く弱い人間だ。若し強さうに見える事があれば、それは僕の見え坊から出る強がりからだ。自分の弱味を見せつけられる程自分の見え坊を傷つけられる事はない。傷つけられたとなると默つちやゐられない。腕力があらうとあるまいと、とにかくあるやうに他人にも自分にも見せたい。強がりたい。時とすると此の見え坊が僕自身の全部であるやうな氣もする。――」

見え坊から出る強がり、痩せ我慢――と云へば、こんな話しもある。

或る年の夏、彼は東京監獄に入れられてゐたが、一日非常に南京蟲の多い監房へ移されて了つた。初めのうちは一疋二疋とひねり殺しては見たが、とても殺し切れない。敵は後と後からと襲つて來る。

「よし、今度は一つ俺の體を南京蟲に任せて、これだけ我慢出來るものか試してやらう。こりやいゝ修業だ」

フト斯う考へついた彼は、わざ〳〵起き上つて素つ裸になり看手に氣を配りながらさうと元のせんべい布團にくるまつた。

『やつて見給へ、ちよつとオツな氣持ちがするよ、最初、蟲がむづ〳〵這ひ廻ると、ぞつとしたやうになつて體中が粟立つて來るし、それに又、あいつに嚙まれた痕は骨の中までも痒さが透るやうに感じるからな。自然と手が其所へ行かうとするやつを、糞ッと思つて、ウンと下つ腹に力を入れてぢつと堪えるんだ。さうして朝迄堪え通した時には、ちよつと痛快だつたね。』

こう云ふ風の強がり、痩我慢の鍛練は、軍人の家に生れた大杉君が、小兒の時からよくやつた方法だつたらう。

可愛い男大杉榮

――惡口云はれても惡い氣はしない――

賀川豐彦

私が最初大杉君と會つたのは、大正九年の秋であつたが、改造社主催の厨川白村氏と私の歡迎會が銀座のパウリスタの二階

で開かれた時であつた。

大杉君はその日の朝、監獄から出たばかりで、カラーもネクタイも無く、白いハンカチを頸に卷いてカラーの代用にしてゐた。あの可愛い吃りの口付で『入獄者の手引を教へてやらねばならぬ。俺はそれを書く』と云うて居たが、その後、望月桂氏とそれを實現した。

恰度そこに堺枯川君も、その他社會運動界の猛者連が澤山集つてゐたので、監獄生活に色々と花を咲かせた。大杉君は、出獄後女と食物を愼まねばならぬと云ひ、堺君は獄内で色情があまり猛烈に起らないと云ふことを話してゐた。

大杉君は第一印象から「可愛い」人だと思つた。その顔は淋しい濁つた輪廓が無いでもなかつたが、少しも憎らしいところを發見しなかつた。快活で、明け放しで、(自分の性慾生活までも少しも隱し立てしない)賢い人だと思つた。

その翌晩私は神田の青年會館で演說することになつてゐた。話が中ば頃になつて頻りに彌次る男がある。それで私に同情ある聽衆は『彼奴を擲れ』と總立ちになつた。すると、その男はつか〳〵と演壇に近く、進み出て來た。よく見れば大杉君だ！昨夜は仲よく話した大杉君が、今日は私の演說會を彌次りに來て居るのである。それで、私は大杉君をさし招いて『僕の話が濟むまで待つてくれ給へ、話は後でせうや』と云ふと、『いやだ此處で、話したい』と云ふ。『それでは、話し給へ僕の演壇を君に明け渡すから』と云ふやうな意味のことを述べて、私は引き下つた。

聽衆は吃驚してゐる。大杉君は、なんでも數年來、その時のやうな聽衆に話するのは始めてだつたとかで、十數分も話してゐたやうだつた。そして云ひたいことを云ふた後に、臨監の警官が『辯士中止』を命じて、大杉君は、辯士室に這入つて來た。そして大杉君は、フランスの議會の例を引いて、演說も會話的でなくてはいかぬ、一人か一時間も、二時間も一本調子で喋るのは專制的だ、聽衆と講演者が合議的に話するのが眞のデモクラチツクな遣り方だ』と教へてくれた。私はそれに感心した。たゞ、私は『それが小集會には適するが、大衆の場合には混亂に陷る恐れがある』と云ふた。大杉君は風習までにアナキズムを注入することに努力してゐるのだとはその時に私の感付いたことであつた。それで、大杉君の一派が裁判官の前で起立しないこと位はあたりまへだと知つたことであつた。

その後大杉君は『勞働運動』紙上で、二三回も、私の評論を書いた。その評論が『正義を求むる心』の中に這入つてゐる。大杉君は僕を『カガワ』と呼ば無いで、『バ

カガワ』といたづら呼びをしたり、(この種の大杉のいたづらは望月君の合作に最もよく出てゐる。)私の無抵抗主義を罵り、私に『偉大なる馬鹿』と形容詞を奉らせた。

然し大杉の馬鹿呼はりは、私には少しも惡感を催させなかつた。なぜなら、大杉は人を馬鹿と云ふ代りに、人の善いこころも善く知つて居るからであつた。僕を襤褸囊に云ふて置いて、ひよつくり神戸の私の宅へ大杉君は尋ねて來る。大杉君は一度は一人で、一度は魔子ちやんをつれて私の宅へ來てくれた。

その時の對話などを今考へ出してみても大杉君が、人を害するやうな人物で無いことを私は考へる。

大杉君と僕が話することは大抵いつも生物學のことであつた大杉君はダアウヰンの『種の起原』の飜譯者であり、ファブルの『昆蟲記』の飜譯者であら。ファブルは私の家から英譯を持つて歸つて、英佛對照で飜譯したらしい。大杉君は、日本の生物學の知識の發達に就て色々話してゐた。ド・フリースの『變異(ミユーテーシヨン)說(セオリー)』を飜譯したいと云ふてゐた。

その時だつた。『大杉君、君の學說は何と云ふて定義すれば善いのだね?』と私の質問したことのあつたのは。

それに對する大杉君の答は簡單であつた。曰く、『個人主義(インディヴヰヂユアリスチック)的(チック)サンヂカリスチツク・アナキズム。

大杉君が「個人主義」と「サンヂカリズム」とを並行せしめるところに彼の面目がある。その後私は大杉君と屢々會ふ場合を持つてゐた。然し、うちで話をした時のやうに悠然話の出來なかつたことを殘念に思ふ。

彼が、子供思ひであつたことは、魔子ちやんを彼の旅行に連れ廻つてゐることであつた。二度目に大杉君が魔子ちやんを宅につれて來てくれた時に、魔子ちやんは、私と妻の前で『革命歌』を歌つてくれた。

大杉君が日本脫出記の中に、魔子ちやんのことを思ひ出して書いてあるが、私は彼の愛兒本能を想うて涙の眼に泌むのを覺えた。

主義としては、大杉君はクロポトキンの直弟子であつたらしい。別に大杉特有の學說と云ふのも無かつたやうだ。經濟學說としても新しい說も出して居らぬ。そのあたりはバクニンによく似てゐる。

然し彼は常に理想主義的で、反マルクスであつたことは疑ふことが出來ない。彼が理想主義的であつたところは彼がレニンに楯つく勇氣を持ち、常に少數でありながら、彼の理想に突進する勇氣を持つてゐたことを見てもわかる。そこいらは私と大杉君との近似値のあるところかも知れない。たゞ大杉君と私の

大きな差は、私が暴力の無能を徹底的に主張するに對して、大杉君は暴力の効用をあまりに強く信じ過ぎてゐる點である。否或は賢い大杉君のことだから、暴力の効用を信じてゐないかも知れないが、その表象的意味をソレル的に信じてゐたかも知れぬ。

然しソレル的暴力の意味は實にスコラ學者のみの理解し得る者であつて、私は絶對にソレルのやうな暴力表象說を信じない。

私はバクニンの失敗の跡を鑑みて、恐怖主義に向つて警戒してゐた。然し數年前、日本の一部の主義者の間にはテロリズムが流行したことがある。私はそれを嗤つた。今もそれを嗤つてゐる。暴力主義は主義運動には惡い歷史を持つてゐる。そして、大杉君が、今その反動的暴力主義者の手によつて倒れなければならぬことになつたことを悲しむ。

然し、大杉はその主義の爲めに倒れたことを喜んで居やう。私も大杉の爲めに喜ぶ。

たゞ、かくして、わが日本が混亂の中に何の光をも見出し得ないとすれば、私は愛する日本の爲めに悲しまざるを得ない。

主義として、大杉君の思想は××××××××。然し、私は勞働組合の實際運動に關係してゐて、無秩序に陷り易い傾向ある群衆を對手にして、個人主義的アナキズムは餘程の危險を伴ふものであることを思ふ。道德が本能化したる場合に大杉君の思想が實現する。道德の本能化と云ふのは暴力が凡て忘れられ、人々が盜まず、貪らず（餘剩價値を求めず）殺さず、姦せざる日に大杉君の云ふ世界は可能である。此點から云へば、私は漸進的に歩むことの必要を常に考へた。

私はマルクスの學說の眞理を考へ、マルクスとバクニンの衝突の歷史を考へて、ボルセヴヰキ派とアナキスト派の對立を悲しんだが、私は實行手段に於て何れにも贊成しないが、たゞ一つアナヰトス派があまりに理想に走り過ぎて、組織の必要を忘れたことを悲しむ。されば云ふて、ボルセヴヰキの一黨派專制の執政官制度に私は贊成し難い。私としては、質實なる勞働組合が社會の中核となり、その組合の自由を基礎として、新社會を建設せらる可きものだと思うてゐる。その爲めにはあまり專制であつても困るし、あまりに無組織であつてもならぬと思ふ。私はやはりギルド中心主義を主張する。そして、ギルドがサンヂカリズムに似てゐる點はその理想主義にあるだけそれだけ、大杉君の暴力說を否定し乍らも私が、彼と自らを親しきもののやうに感ずる點である。

大杉は殺されて井戸の中に投げ入れられた。然し彼の人なつかしい、親しみのある社會改造の理想はそんなに易く葬られ去るものでは無い。彼の大きな眼は永遠に我等の行道を見守つて

居やう。××××××××××××××××××××。眞××××××××××××。（一九二三・一〇・一七・長
×ル×××××××。×××××××××××××××××崎丸甲板にて）

『飯の喰へない奴』

岩佐作太郎

『叔父さん、大杉さんが殺されたと云ふ號外を見てよ』と、去月二十日の朝使ひから歸つた姪はあわたゞしく言ふ。亦た例の噂さかと思ふ。

『何處で見た？』『下澁谷の電柱に張つてあつた』『それは書いた張紙か、それとも印刷したものか』と聞くと『時事新報の號外で印刷したものだ。そして自宅の二階で親子四人が何人とも知れず、銃殺されたのだ』と云ふにあつた。

自宅二階！　然かも加害者不明！　そんな馬鹿なことがありやうない。けれども時事新報とても萬更ないことは書くまい、僕等は思はず顏を合はせた。

多年一日のやうについてゐた尾行は震災と同時にバッタリと來なくなつた。それに日に少くなくも二囘、多い時は四五囘も必ず姿を見せた制服も來なくなつた。それ故彼等にたゞす詮べもない。『今度つかまれば何うされるか分らない。私共の方では如何んとも手の出しやうがないのだから、外出は斷じてしないやう』と。其筋の役人がわざ〳〵來ての忠告だ。こう云ふ時こそ『尾行があれば』と思ふ。

すぐ妻を見にやつた。妻は青くなつて歸つて來た『大杉さんはほんとうにやられたんですと、野枝さんとあやめさんの子供の宗一さんも一緒だと。それに加藤一夫さんと、平澤計七さんもやられたらしい』と、云ふのであつた。

大杉がやられた、加藤も？　僕は頭をガンとやられた。彼等元より疊の上で往生しようとは思うて居まい。だが今やられては！　大杉ばかりか、加藤も？　茫然自失した。

『今朝の新聞に重大事件の爲め戒嚴司令官抔がやめられたのはその爲めらしい。皆さんは勿論私達も助かつて居るまいと思ふて居た』と、妻はつけ足した。

× × × × ×

彼れが佛蘭西から歸つてから、彼れ是れ一週間目位の、僕は大杉を駒込の勞働運動社に訪ねた。二階だと云ふので上つて行くと、其所に大きな椅子が雑然と置いてある間に、床の上に、野枝さんの膝から彼れはムク／＼と頭を上げた。黑い上に倚ほも黑くなつた彼れを見て悦んだのみでなく『あゝ、大杉は幸福な奴だ！』とこう思ふた。

大杉には常に會うて居たが、併し、その時位ゐ、彼等の幸福そうな、樂しそうなシーンははじめてゞあつた。愛人野枝は多くもあらぬ彼れの白毛を拔いてゐた。細君に白毛を拔いて貰ふ男は天下に澤山あらう。けれども、その時の場面はそれと違ふ。暖かい、樂しい、樂しい、幸福さが部室一パイにハチ切れそうであつた。所謂瑞雲たなびくとはこんなことかと思ふ！

× × × × ×

あとに殘されたものには氣の毒で堪らぬが二人で一緒に揃ふて死んだ彼等は蓋し至幸なものである。

× × × × ×

とは云ふものゝ、彼れを失ふたは如何にも惜しい、僅かに三十九で散らしたは、何んと云つても惜しい。

××××××××。××××××××××××××××××××。彼れは日本の病氣を色々と見立てたそして是非を世間に問ふたのだ。『お前さんの病氣は是れ、是れだ』と云ふた其醫者を、病人が怒つて殺せばとて、其病氣が癒ゆるものでない。そう思ふのは太いした間違ひだ。

大杉をして日本の病氣をもつと／＼完全に見立てさせて欲しかつた。今はそれも愚痴となつた。

× × × × ×

それにしても彼れは能く名を賣つた、賣つたと云ふが語弊があれば、能く名を舉げた――善にもあれ、惡にもあれ！　大杉を殺させたのは實にこの名が與かつて力があつたと思ふ。

然らば其名を舉げさせた抑もの責任者は果して誰か？

大杉彼れ自身か？　それとも世間であらうか？』

大杉も人間だ、自分の名の宣傳せらるゝのを意に介しないことはあるまい。けれども彼れをして今日あらしめたのは、其責の大部分は世間が負はねばなるまい。

『火のない所には烟が立たぬ』と能く云ふ。けれども世間には隨分火のけもない所から烟を立てたがる、そして次ぎから次ぎ

と大きな傷にして了ふ、之れは一體世間が病氣であるからだ、神經が過敏になつて居るからだ。幽靈などはある筈のものでない、けれども病人の眼には物の影などが幽靈と見える。臆病者には薬鑵が天狗に見え、ほうきが大蛇に見える。

そして世間には臆病者の通る路に薬鑵を出したり、箒木を立てたりする。又た病人の眼の前に物の影を現はしたりする惡戯者がある、間違ひは其所から起る。

× × × × ×

人間と云ふ動物は思ふまゝ、考へたまゝを云つたり、行つたりするには非常に卑怯であり、臆病であるものだ。それを言行に現すには所謂右顧左眄する、そしてつまり思考した所よりは二割も三割も割引したもの、乃至は全然其姿を失つた言行さへするものだ。

之れは速製の日本、僅々五十有餘年間に際物的に出來た日本の文明、牛の歩みもよし遲くとも、一歩づゝ確つかりと築き上げたものでなく、博覽會の建物のやうに外觀は堂々たるものであり、出來上らぬ中から雨はもり、風には倒されそうになる、乃至は近來の貸家のふすまのやうに見かけは立派でも、中は新聞紙で張つた、一寸觸つても破れる、精神的にも、物質的にも僞はりて製造された模擬的な日本の文明では殊に甚だしい。人生の大切な結婚でさへ、媒口でなくてはまとまらぬ國、眞實を言つてはめしの食へぬ國、嘘も方便な國では、思ふまゝ、考へたまゝを言行に現はすこと抔は以ての外の曲事である。

所がこの日本に生れた大杉は思ふまゝ、考へたまゝを振舞つた——比較的ではあらうが、之れが他の出來ない藝當であつたこれ實に大杉をして大杉たらしめた所以であつた。

だと云つて、彼れ大杉は我儘者、横紙破りかと云ふに決しそうでない。彼れは讓るべき所は讓り、控へべき所は隨分と控へた。けれども世間は却つて彼れを裏切つた、裏切られた彼れは奮然として、それに楯ついた。

× × × × ×

社會主義同盟の出來た當時でも、假令それが出來べき氣運であつたとは云へ、大杉等が之れを促進させたものだ。だが出來上ればすぐに彼れは裏切られた。

勞農ロシアと修好を結ばんとする時も、大杉は之れを堺、山川に相談した、彼等が躊躇して決しないから彼れは獨りでそれを決行した。彼れが好結果を得ないまでも、危險でないと見た、堺、山川等は、彼れを出し拔いた、否寧ろ彼れを排除した。大杉は其所で彼等を胡廐の蠅だと罵つた。

× × × × ×

協同戰線と能く云ふ。だが彼等にして大杉を裏切らなかつたならば、大杉から協同戰線を破ることなどは斷じてない。

× × × × × ×

私が昨年牢屋に行く時、堺の配下の高瀬君は「あなたが歸る時分には、あなたの立場はなくなる」と云つた。同じやうなことを高津君も言つた。

歸つた時には、例の大阪に於ける勞働組合の總聯合の相談の決裂なるものがあつた。協同戰線などと言ひくさる者共は、久しい以前から大杉の排除を企てゝゐたのだ。それを知つた彼れは勘忍袋の緒を切つて彼等に喰つて掛つた。そして世間は大杉等が協同戰線を破つたかのやうに思ふた。

だが併し、大杉はこんなことで兵古たれたり、又はそれを氣にしたりする男でない。彼れは大にやらんとしてゐたのだ。

× × × × ×

彼れの思想！ 嘘のやうだが、僕は大杉の思想を知らぬ。だが私は大杉が好きだつた。僕は無能である。常にめしが食へなくなる、けれども、大杉は他の人々のするやうに、めしの食へない、働きのない奴だと云つた、やうな態度は示さなかつた。

小兒のやうな男

堀　保　子

大杉はとう／＼殺られてしまつた。

私は今度の大震後大杉についていろ／＼不思議な夢をみた。全身血だらけになつて其くせあの色の黒い男が其時ばかりは綺麗な色艶をして私のそばに横はつてゐるのを二晩もつゞけてみた、夢は逆ゆめとかいふ俗説はあるけれど、どうも何かのいやな暗示を受けたやうな氣がして心持ちのわるい日がつゞいた、けれども、まさか目に見えたやうな慘たらしい事がと打消しながらも、何んだか變な夢だと、うたがつてゐた事がつひに事實となつたのだから、私はます／＼不思議の闇に鎖されてゐる。

私は大杉と別れて七年、その間に彼と顔を合せたことは四五度しかない、私には何んだか彼を輕蔑むやうな一種の誇りらしいやうな氣がしたが、彼はいつも餘事にまぎらせてコソ／＼と逃げだすのが例であつた。『天下に怖いものなしの大杉君もアナタだけは本當にこわいとみえる。』と、そばにゐる人は皆笑つたほどである、私は彼に對して非常なうらみを持つてゐた、と同時に道ばたの石ころのやうにも思はれなかつた、何かの噂のある場合にも、第一に氣になるのは彼の事であつた、そして無事を祈らないではゐられなかつた、『お互ひの最後の時には、誰が後れても、先きだつたものゝ枕の前に坐わることは遠慮すまい、そして思ふまゝ昔の事をくり返へそうぢやないか、別れても別れないのと同じことだ』などゝ言ひ合つたこともあつた私がとう／＼彼の前に坐る時が來た。

私は靜かに彼に告別をしたく思つて、二十六日の朝早く大久保へ行つた、二三人の昔なじみの人達からお悔みをうけたりして、安成二郎さんのお宅の前まで來た、安成さんには事件以來いろ／＼お世話になつてゐたやうであつたから、御挨拶を申す

ため一寸およりした、奥さんは『まあよく御出下さつた、安成も私もアナタがいらつしやるこ思つて居ました』こ仰りながらも、お心の底には意外だこいふ御樣子もほの見えた、火葬場の都合で今日が骨上げで安成さんもその方へお出かけだこいふ事であつた。そして甘粕の當時の自白なぞコマ〳〵こ知らせて下さつた、果して甘粕が自ら手を下したか、部下に命つけて殺したか知らないが、隣室の女の叫びを聞いて驚いて泣きだした小兒に對し甘粕は菓子をやるこいつて引よせたさうだ、何も知らぬ小兒は『おぢさん御覧なさい美しいお月さんがでゝゐますよ』こいつたこいふ事です、私は平和こか博愛こかいふ今日の時代にもこんなむごたらしい事があらうかこ泣いた。

私は安成の奥さんこ一所に淀橋の大杉家へ行つた、八疊の座敷の床の間には畫家望月桂氏の筆になつた大杉が裸體で机に向かつてゐる一幅がかけてあつた。その前に皆さんから贈られたお花白木の机なぞ遺骨を迎へる準備ができてある、そのそばで村木さんや和田さんが四五人の來客に殺害當時のお話しの最中であつた。次ぎの六疊の座敷には二十日ばかり前に生れたこいふ男の赤ん坊が蠅になやまされてうるさそうに寢てゐる、私は安成の奥さんこほろ蚊帳をさがしだしてつゝてやつたりした、それから持つて行つた花を床に飾つたりして骨の來るのを待つた。そんな間にも大杉がきまりの悪るそうな顔をして『ヤア』こいつてそこらから出てくるやうな氣がしてならなかつた、間もなく大勢の人に護られた三つの小さな白い箱は大杉の中にそれぞれ白木の机の上に並べられた。

大杉のすべてはこの箱の中に納められてゐるのだこ思へば氣が變になるまで胸がワク〳〵した、次ぎから次ぎへこいろ〳〵な思ひ出やら想像やらが車の輪のやうに急轉した。

一座はしんこして聲を出すものもなかつた、それ〴〵の思ひ出にふけつてゐるらしい。

子供達はついぞ見た事もないおばさんだこいふ樣な顔をして私を珍らしさうに見てゐたが、親戚のおぢさんの注意で一番上の子が私にお辭儀をした、そしてお骨に向かつておじぎをする、そんな事を繰返し〳〵幾度もやる、それをみた外の妹達も同じ樣にやるので、一座の人々が涙の中に笑はせた、私はかうした子供達の頑是ない無邪氣さに打たれて、人がゐなかつたら引よせて思ふ存分泣いてみたかつた。

大杉の弟達にも久しぶりで逢つた、話しは後になつたり前になつたりいろ〳〵な事をくり返へされた、死體は何分日數もたつてゐるのでほこんご見分けがつかない、係りの人も『どんな風に殺されたのか分らない、甘粕の白状はこれ〳〵だ、どうか

そう思つて三人の死體を引とつて貰ひたい』といつて衞戍病院の解剖の報告といふやうなものをくれたそうだ、死體は棺の中に全身繃帶を捲いた、そして石灰でつめてあつたさうで其まゝ火葬に附してしまつた、私は非常に物足らなく思つた。

そんな話をしてゐるうちに、子供達は思ひだしてか、折々『パパア……』といつてあたりをさがす、皆が『無理もない大杉は隨分と子供を可愛いがつたしよく面倒をみたからね』といふ、實際大杉は以前から子供は好きであつた、よく『アナタが子供を生めば僕は家にゐて守をする』といつてゐたことまで思ひだされた。

目がギヨロツとして精悍の氣が滿面に溢れてゐるやうな彼は本統に心の強い氣の確かな男であつた、彼は心にもないお世辭などおくびにもだしたことがない、名は言はぬが今日でも尙文壇に時めいて新思想家で通つてゐる或る人々などは彼の一喝に逢つては一と縮みに縮み上つたものだつた、意見が違へば飽まで追究してやつつけてしまはなければ氣が濟まぬといふ氣象であつた、けれども一面には極めて無邪氣な小供のやうなやさしみがあつて、親類の子供などを可愛がること一通りでなかつた私の兄の家にその頃五つか六つの女の子があつた、其子は極めて無口で容易に他人には馴付かなかつたが、いつか彼と大の仲よしになつてしまつた、兄や私も不思議に思つたくらゐであつた『僕はあの子を手馴付るのに半年かゝつたよ』と人の子にさへこんな風だつたから、自分の子に對しては尙更の事だつたと思ふ、着物をきせるのもおむつを取かへるのも彼の手であつたそうだ、彼は全く見かけによらぬ子煩惱であつたのだ。

大杉はめつたに家の者に小言を云はなかつた、女中などの朝の挨拶とか玄關の送り迎へとかいふ事は非常にきらつたものであつた、或る田舍から出たての女中は、大杉が外から歸つて來たのをお客と思つて玄關へ出むかへた、すると大杉であつたので、あわてゝ『ナンダ旦那樣か』といつてイキなり障子をピタリとしめてしまつた、大杉もこれには一寸面喰つて『少々酷いたね痛快にやるね』といつて笑つた、けれど私にはそれを許さなかつた、私が迎へにでるまで必らず玄關に腰をかけてまつてゐた、彼もよく玄關まで送り迎へしてくれた。

私達も折々喧嘩をやつた、喧嘩のあとは、おたがひにだまつてしまふのが私達のくせであつた、その無言の行も私は半日や一日は平氣だけれど、彼にはつゞかない、どうかして私に口をきかせやうといろ〳〵に苦心をするけれど、私はそれに乘らない、すると、私の可愛がつてゐる猫を風呂敷につゝんで天井にぶら下げる、猫は苦しがつて踠いたり鳴いたりする、私は意地

になつてしばらくは默つてゐるが、猫が餘り可愛さうなので殘念だけれど解いてくれと頼む、よく此の手を用ひられたものだ、彼は『僕の家ではこの人をいぢめるにはこれより外に方法はない』といつてゐた、私の我まゝは通りものだつた、それを大杉はゆるしてくれてゐたのだ。彼は堺さんに時々『どうも剛情でね』とこぼす、堺さんは『まあ仕方がない、濟しくづしの借金拂ひをするやうなものさ』と例のアッサリと片づける、私は『利息にも足りない』といつて大笑ひしたものだ。

彼は常に『僕は女房の爲に特に着物をこしらへてやるやうな金を作るのは厭だ、けれど僕の働いた金のうちでなら何をしたつてかまはない』といつて、氣にむいた仕事でなければ働かない、そのくせ彼はなか／＼の贅澤やだ、食べものなぞも手輕な簡單なものよりも、成るだけ手數のかゝつたものでないと喜ばない、少し機嫌の惡るい時には御飯の上にざぶりと醤油をかけてたべる、酒は少しも呑まない、煙草と甘い物が大好きで、原稿を書くにも、煙草かお菓子かを口にしてゐなければ承知しない、煙草は殊に上等なのが好きで、金があると外國製の高價のをスパリ／＼と籐椅子の上で『どうだいこの煙の色は』なんて本當にたわいもなかつた。

彼は常に變化を好んだ、氣に入つた家でも目につくと、きまつて『僕が來月からたばこをやめるからあの家に引越さうぢやないか』といつてきかない、一旦言ひだすと後へ引かない彼の事だから、私もケンノンだと思ひながらも彼の望み通りにする、果して煙草はやまない。其頃(最後までも)私達の生活に少々不相應で收入と支出との權衡が取れなかつた、が、いつ何時どんな事があるかも知れん、マア出來る時に美味いものでもたべて置く方がいゝといふ調子であつた。

或る時私と彼の弟が殆んど同時に病氣になつて、どうしても入院しなければならぬやうになつた、丁度その時或る大官からフランス物の反譯をたのまれた、はじめは二の足を踏んだが、とう／＼引受けた、そして氣の毒なほど働いた、先方では買收でもしたつもりであつたかも知れぬが、一枚いくらと定めた料金を貰ふのだから私達は當然の報酬だと思つてゐた、その代り餘計な金はもらはない、原稿の少ない月は隨分苦しい生活をした。

著へなぞのない生活は何か入用の事があると、すぐ質屋へかけつけなければならない、さる家に不幸があつて挨拶に行かなければならない、あづけた物がほしいので、二人で夏もの全部をかゝへて品入替に出かけた、差引少し餘る勘定になる、何か食べやうぢやないかと天金でお腹をこしらへて、こん度は日

比谷公園を散步する事になつた、音樂堂のところまで來た、彼は歩くのは好きだけれど獨りあるきは嫌だ、いつも散步の時には『廻り道、遠道、一切苦情なしといふのでつき合つてくれ』といつて先きから先きへと歩るかせられた、その時には受け出した荷物はあるし、私は病後で疲れてしまつたので、電車で歸ろうといふと彼はもう少し歩るくといふ、乘る、イヤ乘らないで果しがない、私はとう／＼腹を立てゝ、いきなり抱へてゐた風呂敷包をほふりだしていそいで電車に乘つてしまつた、荷物を捨てゝみたものゝ少々惜しくもなり、人に拾はれて通帳でもみられたら恥かしいとも思つた、それに彼は懷中一文も持つてゐない、大久保まで大變だらうと心配はしたものゝ、今更どうするわけにもいかず、家へ歸へつて寢てしまつた、彼はやゝ暫らくして歸つて來た、次ぎの朝目をさましてみるとゆうべの包がちやんと私の枕元に置いてある、おゝよかつたとは思つたけれど、叉むか／＼して腹だちまぎれに飛び起きたはづみに枕に足を引かけて踏み破つたのだから私もなか／＼の大力だ、五六升も入つてゐたそば殼を座敷中へふり卷いてしまつた、私は重ね重ねの失敗に、今更それを片づけるのも氣が利かないと思つてそのまゝにして置いた、すると彼はイヤな顏もせずそれをキレイに片づけてくれた、私はそれ以來彼の前で我儘を言つたり怒つたりすることをつゝしんだ。

彼の入獄で一番心配させられたのは赤旗事件で千葉監獄の二年半であつた、面會に行くたびに、受つけはきつと私にかう言ふのが常であつた『叉減食でやられてゐるよ、あれでは第一體がつゞくまいからアナタからよく本人に注意してくれ』と何をしたのか困つたものだと思つてたづねると『居ねむりをやつて一週間の減食さ』と平氣でゐる、或るいやな噂のあつた敎誨師が寒い／＼日にぬつと彼の室に入つて來た、幾枚かの重ね着して暖かそうに襟卷してそしてふところ手をしながら『どうだね今日は少し暖いやうだ』といひやがるのさ、だから俺が『馬鹿』とどなつてやつたらソコ／＼に逃げ出してしまつた、それが二週間の減食さ。しかし其れからあいつの面を見ないので大變氣持がいゝ、一々心配するな、うまくもない飯を少しぐらゐ減らされたつて困るものか、と例の調子で威張つてゐた。

彼は可なりヒドイどもりだつた、いつも出獄後一ヶ月ぐらゐは殆んど筆談で用事をすましたものだ、だから折々來たての支那人とまちがへられたりした、しかし外國語で話す時は少しもどもらなかつた。

或る時電車の中で中佐ぐらゐの軍人の爲めに私は拍車で足の先きをひどく踏まれてゐる／＼血が滲みだした、私は隨分ヒド

ク其不作法を責めてやつた、先きも恐縮してあやまつた、仕方がないから私は無言で許してやつた、すると其の軍人は『何分服裝が服裝だから』といふ樣な事をいつた、初めからの行きさつをだまつてみてゐた彼は、忽ち血相を變へて『服裝が服裝とは何の事だ、軍人の服裝なら人が踏んでも殺しても仕方がないといふのか』と大變に怒り出した、軍人もその見幕に驚いて途中で姿を消してしまつた、私の足はなかなか痛む、彼は餘憤尙やまずといつた顏付きで『人もあらうにあんな奴に傷つけられて其まゝ逃がすといふ事があるものか、意氣地なし』といつて私にまで當り散らして其日一日プリプリしてゐた。

　僕は四十まで生きないね、太く短く送るかね、けれど監獄の病監では死にたくないと、つねづね言つてゐた、彼は病監では死なゝかつたが平生惡んでゐた軍人のために殺さてしまつた、そして其殺された時も殺された場所も、人の記憶からは容易に去りにくい『時』と『場所』とであるだけ其死に方もマアマア華々しかつた、殊に子役が一枚加つてゐたため舞臺も一層引き立て見物をアツといはせた、彼の短い一生は芝居のやうに變化が多く活動寫眞のやうに目まぐるしかつた、ことは私からいふまでもないから書かぬことにする。

私は彼と別れた後も彼の仕方を恨んでゐたかも知れぬが決して憎んではゐなかつた、彼は彼の道を行くのに對して、私は私の行くべき道を歩んで、どちらが心の滿足を得るといふことを競爭してみたいやうな氣がしてゐた、それが私の生活の全部だと思つてイライラしたこともあつた、實際私はそれを張合にしてゐたかも知れない、そして今は肝心の競爭の相手がなくなつたので、何んだか淋しくなつて心細いやうな氣がしてならないそれが今の私の心持だ。

第三者から見た大杉

魯庵生

大杉が私に憶出を書かれやうとは夢にも思はなかつたらう。渠から見れば私はヨソの世界のストレンジャーである、住馴れた大久保を去つて七八年、四人の兒供の父親となつて再び舊地に隣接する私の同番地に舞戻つて來て久濶を叙した時は鄕に歸つて父老を見るに等しかつたらう。古い顏馴染といふだけで命に賭けての主義の同感者とも理解者とも思はない私に憶出を書かれるのは門徒の信者が法華坊主に引導を渡されるやうなもので迚も浮ばれないだらう。が、最後の十日あまり、運命の黑い手が背後に迫つてるとも知らないで日に何度となく兒供の乳母車を押して恐怖の巷を運動する渠と度々邂逅し、其の當日の朝死出の旅とも知らずに夫婦して睦まじく出掛ける後姿を見送つた私には忘られない印象がある。大杉と私とは丸きり路人で無かつたにしろ少くも障子一枚隔てゝ語り合つた仲である。其の淡い交際の私に憶出を書かれるのは門違ひのやうに思つて苦の下で苦笑もし變な顏もするだらう。が、一と月前に蕎麥を貰つた因みのある私は淋しく逝つた此の薄倖の革命家に樒を手向けるツモリで憶出を書く。

○

此頃一二の新聞に、警視廳は主義者の內情を通信して與れる便宜を與へた大杉を殺されたので狼狽してゐると左も大杉をスパイであるかのやうに臭はした記事が載つてをる。大杉をスパイだといふ噂は曾て或る方面の主義者間にも有つたさうだ。

大杉が果してスパイであるや否や、然ういふ機微の消息に通じない私には知らない。が、若しスパイなら化け方が餘りウマ過ぎる。佛蘭西へ行つてまでも危險な路傍演說をして監獄へ投込まれるナンテ化け方は餘り念入り過ぎる。且始終尾行を附けられ何度も監獄入りの苦勞をして同主義者を化かして眞筋に忠勤を盡してゐたとすると夫こそ甘粕以上の愛國者で招魂社へ祀つてもイヽ位なものだ。夫を知らずに殺した甘粕は減刑どころの沙汰ぢや無い。

公判廷に於ける甘粕の陳述に由ると、大杉の背後に藤原といふ人間があつて藤原の又背後に或る巨人が控へてゐる。佛蘭西へ行つた旅費は其の巨人が出したのださうだ。ソンナ事實があるか無いか、夫は知らない。が、假に誰かゞ旅費を出して吳れた處で其人が大杉を手先きに使つてアナーキズムを宣傳させたてけでもあるまい。然ういふ機密は政治界には珍らしくないので、假に此風説が幾分か形跡があるとしても那んな事は餘り問題にならない。但し大杉や野枝が爆彈を自働車に載せて鮮人を指揮してゐるといふやうなウソッ八の情報を信ずる甘粕の色盲的觀察では之も當るまい。

大杉が同番地へ引越して來て久し振でヤッテ來た時、佛蘭西へはドコから旅費を工面して行つたと第一番に訊いた。『方々の本屋へ出鱈目の約束をして七所借りをして漸とこさと算段したのだ。』と大杉は云つた。

本屋の借金ばかりで洋行費が作れるか知らんと疑つた。世の中には相撲や藝人ばかりで無くて大杉のやうな男に金を出す氣紛れ者もあるから何れドコからか貰つたのだらうと推測した。が、此頃聞くと、大杉の本屋からの借金は一萬五千圓からあるさうだ。して見ると佛蘭西行きの旅費も、全部で無くとも大部分は矢張大杉の云つた通り本屋から借金したのかも解らん。

大杉は著述家としては流行兒の一人であつた。隨て原稿料も印税も高かつた。前借の融通も或る程度までは出來たらう。一體世間は操觚者の生活には案外昧くて『あの人はドウして喰つてるだらう』と疑ひ『貧乏してゐるんだらう』と勝手に見縊てゐる。大臣級の收入のあるものがゐるのを那んな人は無論知るまい。

そこで大杉はドコから金を取つて贅澤をしてゐるだらうと疑ふ。大杉は元來貴族的の男で、平民主義も貴族的でなければ駄目だと矛盾のやうな主張をしてゐた。が、大杉の贅澤なんて知れたもんだが、世間は著述家ナンテものは貧乏人で日傭稼ぎと隣り合せをしてゐるやうに思つてるから少しばかり贅澤らしい眞似をすると直ぐ目を附ける。大杉の子分らしいものが段々大杉に背くやうになつたのは自分ばかりブルジョア生活をしながら金の切れ目が惡るかつたからださうだが、大杉は取れば直ぐ使ふ、取らない中から取れる金の胸算用をして使ふ文人通有の浪費家だつたから金は常に持つてゐなかつたらう。と云つて自分の肉を割いても子分の面倒を見るといふほどの大きい處を持つてなかつたから、子分は段々離れて了つて終に孤立して了つた。其實、大杉は子分に糧を分けたくつても分けるほど懷ろに餘裕を持つてゐなかつたらう。恐らくドコからも金を取りやアしまい。矢張タダの原稿稼ぎをしてゐたんだらう。

が、左も非常な贅澤をしてゐるやうに誤解されてゐたので、子分からは切れ離れが悪いので離反され、官憲からは外國の危險思想團から巨額の金を取つて運動してゐるやうに睨まれた。大杉が上海から金を取つて來たのは事實で、之も佛蘭西行きの旅費の出場を尋ねた時の話の序に大杉の口づから聞いた。が、此金は『勞働運動』の發行に使ひ切つて了つて、マダ呉れる筈なのを一度きりしか呉れなかつたから雜誌の方も自然休刊になつたと云つた。千や二千の端多金は何の役にも立たないので、云はば棄て金だ。尤も棄て金にしろ運動を名目として外國の思想團から金を取るといふは決して穩當では無いが、一度ぐらゐ那んな金を使つてゐたつて大目に見のがしても宜からう。

　大杉と私とは可成長い知り合ひだが、六七年來トンと顏を見せなかつたから、八月初めに同番地へ引越してからの新知己同樣で、懐ろ合ひを喞し合ふほどの親密な關係では無かつた。であるから大杉の財政狀態は一向知らないが、警視廳から金を貰つてるとも又外國から金を取つてるとも思はれない。矢張印税や原稿料のフロリ・ハンド・ツー・マウスだつたらう。現に地震からコッチ金の融通が留つて餘程窮してゐたらしかつた。

　大杉は曾て——伊藤野枝との關係が出來る以前——警視廳だが内務省だかの飜譯仕事をしてゐた事があつた。其は大杉のやうな人間にパン代を與へる爲めの高等政策で、幸徳秋水なぞも矢張或る官廳の飜譯をした事があつたさうだ。其の引受けた飜譯が振つてゐたのは佛譯からの法華經の逆譯であつた。大杉の法華經飜譯も笑止しいが、内務省だか警視廳だかと法華經を飜譯させて何にするツモリだ。無論大杉にパン代を與へる名目なのは大杉も知つてゐて無茶なイヽ加減な仕事をしてゐた。『何でも書いたもの持つてけば金を呉れるといふのだから難有いわけで、當分は先ア神妙にお庇を蒙むつて猫を冠つてるのサ、』と誰にも秘さず吹聽した。

　だが、こんな興味の無い仕事をイツマデ神妙にしてゐられるもんで無いから、其中ソロ／＼倦きが來て怠け出した。虎や狼を飼ふツモリでパン代を呉れるお役所の方でも法華經の飜譯が要るわけで無いからドッチが止めたともなく中止した。

『ナニ糞、あんなお經なんぞ馬鹿々々しくてやつてゐられるもんか、法華經がイヤなら外のものをしろといふが、ドダイ役人が棄扶持でも呉れるやうに横柄なツラをするのが癪に觸る。』と啖呵を切つた事があつた。

　矢張其頃の事だ。内務省が危險思想家の虎の卷とする本を取上げて了ふのが最良策だといふので或人の書齋を全部買上げて呉れたといふ噂をして、『僕も一つお買上げを願はうかと思ふ。

お上に買つて戴いて直ぐ外國へ注文すれば二三ヶ月も經てば元この通り揃つて烏渡儲かる。』と笑つた。

『夫から復たお買上げを願うかネ。』と云ふと、『然し約束が極れば本屋の取次ぎに商賣換へをする。法華經の飜譯よりは樂でイイ。』と重ねて笑つた事があつた。

大杉と警視廳だか内務省だかの關係は夫より外に知らないが此の法華經飜譯の事は誰れも知つてる。大杉は少しも秘しやアしなかつた。御用を勤めてゐたならヲンナ嫌疑を買ひさうな關係は誰にも話さずに秘密にしてゐさうなもんだ。

大杉は佛蘭西の巡査や監獄を痛く惡るく云つてゐた。路傍演說をして捕縛された時打つたり蹴られたり踏まれたり痛い目に會つたさうだ。『日本の警察では僕らはモウ決して打たれたり蹴られたりはしない。佛蘭西ぢや新顏だからお目見えの御祝儀に散三な目に會つた。ドコでも巡査は無知で亂暴だからネ。』と笑止しさうに笑つた。

○

大杉は眼のギヨロリとした、人を馬鹿にするやうな笑ひ方をする一種凄味のある顏であつた。私は能く人に噺すが、バクーニンでもステツプニヤツクでも今のトロツキーでも共通な物騷な眼を持つてゐる。此眼を私は自分で「ナイヒリスチツク・アイス』と稱してゐるが、大杉も此眼を持つてゐた。

『君の眼は物騷だよ。』と或時云ふと、

『此眼はネ監獄へ行くたんびに光を增すんだよ』と笑つてゐた。

ロンブロゾでは無いが、泥棒には泥棒のタイプがあり殺人者には殺人者の型がある。留岡幸助君と曾て其噺をした時、『夫は今日の監獄の制度が惡いからだ。』と留岡君は云つた。『同じ部屋に同じ着物を着せて同じ食事をさせて頭まで同じ五分刈にして置けばドンナ物だつて皆似た顏になる。監獄の制度が惡いから監獄に長くゐたものは皆同じ監獄面になる。罪人のタイプなぞが初めから有るもんか』と。

然うかも知れない。赤ん坊の時は大抵ブヨ／＼した可愛らしい顏をしてゐる。夫が頭の糧や環境で段々變化して坊さんらしい顏や先生らしい顏や腰辨らしい顏や山師らしい顏になる。其中でも監獄と兵營とが一番同じ鑄型の顏を作る。

大杉は眼ばかりでなく頭の恰好から顏の輪廓までが露西亞の革命家とドコか似通つてゐる。最近上海で撮つた寫眞の如き露西亞革命史の挿畫としても笑止しくない。アレに露西亞のラツコ帽を被せたら大杉榮で無くてイワン・サカエウヰチ・オウスギーだ。

少年時代の寫眞を見ると多少イタヅラらしいが一見柔和な

「よかちご」だつた。名古屋の幼年學校にゐたさうだが、名古屋ぢやァ薩摩ッぽうも餘りゐなかつたらうが、東京の軍人學校なら賤の小田卷嶽に祝はれる美少年だつた。其の柔和な「よかちご」が不幸にして聰明であつた爲めに時代に率先した新らしい思想を抱き、幼年學校時代の威壓的な軍隊教育に反撥した頭を搊ちくらせ、學窓から離れて街頭を立つと直ぐ官憲にガンと頭を撲られて監獄へブチ込まれ、出獄するとモウ尾行つきの危險人物と札をつけられて了つた。然うして世間を狭くされ壓迫の上に壓迫を加へられては段々眼もギョロつけば人相も險しくなる。昔しの柔和な「よかちご」はイツの間にかイソン・サカエウヰチ・オウスギーとなつて了つた。

が、大杉はハタで思ふやうなクロース・ハーテッドでなかつた。誰とでも容易に打解けたから、一見何となく無氣味で近づき難いやうに見えたが附合つて見ると案外親しい柔しい處があつた。親切で思ひやりがあつて、始終貧乏してゐたから金の世話は出來なかつたらうが、能く人の面倒を見てやつたさうだ。

私とは同主義者で無かつたから雜誌の論文や小説の批評の外は思想や主義の噺は餘り仕なかつた。文壇人の噂や世間噺ばかりしたが、批評は頗る手厳しく觀察は却々穿つてゐた。岩野泡鳴を評して「偉大なる馬鹿」と云つたは大杉が何かの雜誌に書いたが、あの穿ち方は或る晩私の二階で泡鳴論をした時偶然出た言葉であつた。『馬鹿でも偉大なら岩野は喜ぶよ』と私が云ふと『では偉大がるとしようか、』と云つたが、矢張「なる」の方が語呂もイヽし響きも鋭いと「なる」に賛成した事があつた。

大杉が上目を使ひ白眼をし顔をシャクリ乍ら少し吶つてポツり〳〵話す噺振は頗る魅力があた。大杉が若い女の心を掴むのは此噺振であつたらう。ドチラかと云ふと餘り能辯では無かつたが、何となく人を牽付けるエキスプレッシーヴな辯舌を持てゐた。

大杉は肝癪持ちで、どうかすると人を毆る事があつたさうだ。賣文社にゐた頃、一夕賣社文の同人とドコかへ飲みに行つた時大杉はフダン餘り飲まんから醉つた紛れの酒の上かも知れぬが肝癪を起し、眼の色變へて堺に突掛つて猪口を投付けた事があつたさうだ。委しいは噺知らないが其頃から堺の一派と段々離れて了つたらしい。荒畑や堺との間が面白くなかつたのはボルとアナとの主張の相違ばかりでは無くて何かイキサツがあつたやうだ。其邊の消息は主義者仲間で無い私たちは能く知らない。

が、私とは主義の上の同志で無く、云はゞ近所づくの通り一遍の交際だからであらうが、大對の肝癪持ちらしい處は少しも見えなかつた。隨分露骨に腹の立ちさうな事を云つた事もあつたが、大杉はイツモ調子を合はして笑つてばかりゐた。（事に由

ると時代錯誤の無理解者と對手にしなかつたのかも知れぬが。）ドウかすると意外な性の問題を持出し、隨分突込んだ閨房の咄までした事もあつた。そんな時には（大杉に限らんかも知れぬが）少しも危險思想家らしくなかつた。

○

家庭の人として見ると、大杉は溫和な良人であり柔しい慈父であつた。前妻堀保子さんは大杉の雜誌の廣告取りをして働いてゐたので其用事で度々私の家に見えた。保子さんを通じて大杉の家庭の容子も知つてゐた。

保子さんは大杉より年上だつたが能く大杉に仕へ大杉も亦相當の敬愛を酬うてゐた。其頃大杉は家政の全部を保子さんに委ねて小遣ひも持たないで、外出する時は電車賃を保子さんにネダツテゐたさうだ。若い賣出しの危險思想家も細君の前では小さくなつてゐて、時々細君の御用の白粉や香水を下町へ買出しに行つたので友人間にはサイノロジストとして笑はれてゐた。芝居へ行くにも音樂會へ行くにもイツデモ保子さん同道であつた。小倉清三郎の『相對』の會の講演や踊にも保子さんと一緒に出席した。表で出會ふ時の大杉は大抵細君同伴で單りぼつちの事は滅多に無かつた。

其のドコへでも鴛鴦の番ひの二人連れで出掛け白粉の買入れのお使ひまで神妙に承はつた大杉が保子さんと別れたのはイヤであつたからでは無かつた。世話女房としては申分の無い女だと別れ咄の初まる頃に大杉自身の口から私に咄した事もあつたが、其の申分の無い世話女房の保子さんに缺けてゐた思想の理解ある女友を他に發見したのが二人の破緣の基となつた。

大杉のやうな官憲からも睨まれ世間からも誤解され或は呪はれる思想の持主が常に思想上の孤獨に堪へられないのは當然である。切めては家庭の中だけなりとも共鳴し合つて思ふ存分に思想の飽滿を樂みたかつたらう。が、爐側の團欒の溫か味は保子さんに由て滿足されてもいざ思想の問題となると孤獨の淋しさに堪へられなかつたので、此の缺乏を充たすの女友を偶々發見したのは大杉に取つては恰も初戀に等しいものであつた。

保子さんとの別れ咄の顚末は、其頃のタシカ『女の世界』か何かに載つたと思ふが、保子さんの理解の無いといふ困り話は夫より以前度々聞かされた。私は勿論大杉が思想的融合の女友を得た事を少しも知らないから、夫までツイぞソンナ家庭の不滿を洩らした事の無い大杉がドウして此頃のやうに細君の不平咄をするのか呑込めなかつたが、其都度々々女てものは誰でも然ういふもんだよとばかり夫となく不滿を和めてゐた。

丁度其頃岩野と遠藤清子の別れ咄も持上つてゐたので、或晩

大杉は來て岩野は是れ〳〵だと話した。私は夫より二週間ほど前に岩野夫婦や田中王堂等と玉川へ遊びに行つた事があつて、ソンナごたくさが岩野夫婦の間に持上つてゐやうとは大杉から聞くまでは少しも知らなかつた。どんな理窟があつても事情があつても放縱な戀愛には私は同感出來ないから、個人としては遠藤清子は岩野よりもヨリ以上嫌ひであつたが、清子に同情して『岩野も困つた男だ』と云つた。

其頃大杉は既に意中の他の女友を得て保子さんと別れようとする時だつたことも後に知つたが、其時は何にも知らなかつたので口を極めて放縱な戀愛の非を鳴らして戀愛の美名を借りて罪なき女を苦める男の虐待を殺人以上の罪惡とまで痛罵した。大杉は格別反駁もしなかつたが、夫が大杉自身の間接射撃となつたとは其時は知らなかつた。

大杉と野枝との關係が世間に暴露されて後、大杉はヒヨツコリやつて來た。野枝との戀愛の成立と逐一細かい內事まで打明けて噺した。何しに那んな噺をしにわざ〳〵來たものか知らぬが、多分岩野の一條に就て放縱な戀愛の罪惡を痛罵したから或は了解を求めに來たのかも解らんが、私は殆ど無言で聞いて何にも云はずに噺を外らして了つた。夫から以後一つは家が遠くなつたからでもあらうが大杉はバツタリ來なくなつて了つた。

其間は六七年も經つたらう。ツイこないだの八月の初めに同番地へ引越して來たと云つて野枝さん同伴で兒供をゾロ〳〵連れて來た。野枝さんとは數年前に一度途中で會つた事があつたが、口を利いたのは其時が初めてゞあつた。

其以後の一と月許りの憶出は『讀賣』に書いたが大杉が一と通りでない兒煩惱で野枝さんよりも以上に兒供の面倒を見る慈父としての美くしい一面を知つた。野枝さんとの夫婦の間柄は疎隔してゐたから夫迄全く知らなかたが前妻の保子さんに對すると同樣或は夫以上親切な柔しい良人であつたといふ噂を聞いた

○

最後の大杉は私が『讀賣』に書いた通り、朝から晩まで何度となく子供の乳母車を押しては近所を運動してゐた。夜るはステツキを持つて町內の夜所に出てゐた。野枝さんは産後でマダ健康が復さなかつたので大杉は一人で三人の兒供の面倒を見てゐた。危險思想家であれ行であれ、現在は溫かい家庭の溫厚なる主人であり、四人の兒供の柔しい慈父であり、町內の夜警に出る善良な市民であつた大杉は同志を集めて放火を敎唆し自ら爆彈を載せた自働車を乘廻して不逞の鮮人を號令指揮した兇徒と報告されて、國士甘粕の手に掛つて貞淑な妻と可憐な七歲の愛甥と三人一緒に古井戸の中に埋められて了つた。

殺さるゝ前日の大杉君夫妻

松下芳男

九月十五日親しい友人として大杉君を柏木の寓居に訪ねた私は、其二十七日に落合の火葬場で、骨となつた大杉君を見たのである。

其間は僅かに十日餘りであり、又思へば十五日は大杉君の殺された前日であつた。様々の兩極端の複雑を身に負つた一世の革命児も、死んでは只一握りの骨である。ぼんやりした初秋の朝晴のさ中で竈からとりだされた骨を一つづゝ、肉近者や友人の手で骨壷に移さるゝのを見た時、總ては夢の様であつた。殊に長女のマコちゃんが、無邪氣に

『パヽちゃんの足よ』

などゝいつたり、次女のエマちゃんがどうしても恐しがつて箸で骨を上げる事を肯んじないのに逢つては、惻隠の氣胸一杯になつて了つた。

けに其間は僅かに十日である。そして談笑した日が殺された前日である。私に其日の『平和の家庭』が今まざ／＼と想ひ出される。

＊　＊　＊　＊　＊

私は其日の午後新宿よりの歸途丁度其附近を通つたので、大杉君を見舞つた。日比谷の洋服屋服部濱次君夫妻は、丸焼けに焼け出されて此所に避難して來てゐたが、縁側で煙草を吸ひながらボンヤリして坐つてゐた。

『大杉さんは居ますか』

といつたら服部君は

『アヽ居るよ、這入り給へ』

そうするこ其側に遊んでゐたマコちゃんが突然大聲で、

『パヽ！　パヽ！　御客様！』

こ二階を見上げて呼んでくれた。大杉君は原稿書きに疲れて晝寢してゐたそうだが、暫くして下りて來て、庭の籐椅子に掛

けた。

『大杉さん、貴方はまだ生きてゐましたネ、僕は方々で、大杉榮の暗殺を聞きましたよ』と私が云ふと、充血した樣な目をむき出して笑ひながら、

『僕は此通りさ、僕も訪ねて來る人から「大杉榮の暗殺」を聞かされるけれども、何所かの大杉はやられても、此大杉は此くの如くに健在さ、アハヽヽヽ』

と事もなげに言ひ放つて、香の強い煙草を例の如くスパ／＼やつてゐた。

『近頃の流言やら騷ぎやらで、何か推し寄せては來なかつたですか』

『いやさつぱり……此邊は比較的靜かなものさ』

『何所へか出ましたか』

『燒跡を見たいと思つてゐるが、何しろ君、歩くんだらう、たまらんから家にばかり居るよ。でも、此間の晩、一寸散歩と思つて提灯つけて此附近を廻つたら、夜警して居た連中が、「大杉の旦那が夜警して下されば、主義者も鮮人も大丈夫だ」と喜んで居たよ』

其所へ野枝さんも出て來た。野枝さんは八月の初め長男ネストル君を産んでから、まだ一ヶ月そこ／＼の身體で、無論其日迄外出はしてなかつた相で、外の話は殊に興がつてゐた。燒け出されてから幾夜か日比谷公園に寢た服部君はこんな事をいつた。

『何しろ丸燒けになると、燒けない家が癪に障るのは、どうも共通の心理らしいね。避難者中に隨分こんな意味の事をいつた不屆者があつたぜ』

『そんな奴が放火する氣になるのかな』

『さうかも知れないね』

『今度の地震でそんなに澤山放火した奴があつたのかね』

私は此間を受けとつてこんな事をいつた。

『僕が七日頃、お茶の水附近を通つた時、僕の後ろから鐵道省の制服を着けた二人連の男がやつて來て、鎌倉の地震の時の慘狀を話してゐましたが、其一人がこんな事を云つてましたつけ。「何しろ鎌倉には大杉榮といふ社會主義の親分が住んでゐたので、乾分二三十人を指揮して、隨分あばれたさうだよ」と。澤山放火したと傳へらるゝのも、大概はこんな類ぢあないんですかね』

みんな一緒に哄笑した。

『兎に角今度の流言蜚語は大したものさ。宇都宮師團の參謀長の如きは公然と、東京の騷亂を社會主義者と朝鮮人と露國過激派との三角關係に依るのだと明言し、其地方の新聞は三段抜きで大々的に書いてゐるのだから助からんよ』

『一時主義者の放火といふが、どの連中がやつたのかね』

大杉君は不思議さうに云つた。

『さあ分らんね。どうも郵便はきかず、電車はなし、同志の消息などちつとも分らんので困るよ』

服部君は困つた樣な顔して云つた

『分らんといへば、僕の弟の勇ね、あの川崎にゐる。どうもあれの家も無論つぶれたと思つてゐるが、音信がないので其生死さへ懸念してゐた處、今朝漸く無事だといふハガキに接して安心したわけさ。隨分ヒドクやられたらしい。明日にでも見舞に行かうと思つてをる所さ』

大杉君は非常に弟妹に厚い男であつた。其主義の爲、其運動の爲に色々の不運の弟妹に來ることを、常に苦慮してゐた。そして其時も勇君の事をしきりに心配してゐたのである。

私共は地震以來の樣々の珍談を談り合つた。そして玄米食には誰も弱つた事などには等しく笑つた。

『僕は玄米飯は餘り厭でもないよ』

大杉君はさういつた。

『でも子供が食べないので氣の毒ですよ』

野枝さんはさういつた。

『此間の新聞にあつたぢあないか、一晝夜米を水にひたして、十何時間とか煮ればいゝつて……』

『ひたすのはいゝとしても、十何時間側に居て炊く人が大變ですわね』

更に野枝さんは言葉を繼いだ。

『オートミルの樣にしてやつたら、子供も食べるでせう。私、明日さうしませうかしら』

其中にマコちやんが、蒸し甘藷を滿たした鍋を抱いて來て、座敷中を持ち廻り、俗謠の「何所までも」の節で、

『おいもの蒸かしたのはいりませんか、蒸かしたおいもはいりませんか』

など歌つたら、大杉君は

『マコ！　おいもをお呉れ、みんなに一つ宛上げなさい』

マコちやんは其言葉の通りにして、尙も持ち廻りを初めたら野枝さんから、

『マコちやん！　止めなさい！』

と強く云はれたら、鍋を放り出した。甘藷は一面に散つた。

『マコ！　仕方のない兒だね』

野枝さんは叱りながら甘藷を拾ひ集めて、私共の前に置いた。

私共は尙暫く談り合つた後私が辭さうとした時野枝さんは、いつた。

「お宅はこの邊？　あの火葬場の附近ですか」

「エヽ、火葬場と小瀧橋との中間附近です、どうぞ御閑の時御出で下さい」

「有り難う、私、火葬場附近ならよく存じてゐますわ」

私は辭し去つた。――そしてそれは大杉夫妻と最後の別になつたのである。

* * * * *

越えて十八日報知新聞は『大杉榮夫妻初め百餘名を檢束、憲兵隊の主義者檢擧』と題して、大杉夫妻及び長女が十六日夜、憲兵本部に拉致された事を報じた。私は「あゝあの翌日であつたな」と獨り其訪問の日を想ひ出して居つたが、何たる事であらう、其『檢束の夜』は即ち『殺害の夜』であつたのである。あの平和なる家庭の父も母も、そして其手に抱かれて嬉々として連れられて來た甥の宗一君も、無慘に殺されて了つたのである。平和の家に今暴風が吹き荒んでゐる。

事もなげに笑つた「大杉榮の暗殺」は、其翌日事實となつて現はれたのであつた。愛弟の健全を初めて知つた喜びの翌日は、此世の暇乞に行つたのであつた。そして其朝は野枝さんは、子供の爲に「玄米のオートミル」を作つて食べさせたのだらうか、又野枝さんは「落合火葬場附近はよく知つてゐます」といつたのが、十日ならずして其火葬場の灰にならうといふ因縁があつたのだらうか。

私には總てが夢の樣な氣がしてならない。それから數日の中に所謂「甘粕事件」が發表されて、事の眞相は次第に明瞭になつた。併し私にはそれでも夢の樣な氣がする。あの平和の家の夫婦が「國賊」として殺されたといふ事は、どうしても本當と思へない。といふのは私は大杉夫妻を「國賊」であるないと辯ずるのではない。其前日子供を中心として樂しんでゐた平和の家庭の夫婦が、翌日は忽ち「國賊」に變つたのであるが、私にはどうしてもそれが別人の樣に思はれてならない。甘粕事件の調書に表はれた數々の事柄、例へば社會主義者（其巨頭は大杉君を意味するのだらう）が、鮮人を煽動したとか、野枝さんが震災當時爆彈を抱いて活動したといふ樣な事柄は、本當に事實であらうか。私には何が何やらさつぱり分らない。

併し大杉榮君夫妻の殺されたのだけは、何所までも事實に相違ない。

* * * *

大杉君は私にとつては、生涯を通じて忘れ難い先輩である。私は郷里新發田に於いて大杉君の家と背合せに住んでゐて、同君の死んだ弟伸君とは、文字通りの竹馬の友であり、又妹の松

枝さん(榮君の子の一人を養子にしてゐる)とは、小學校では同級生であつた。そして大杉君が幼年學校に這入つて、劍をもつて歸つて來た事は、私共軍人の子弟には非常の羨望の的であつたものだ。かくして遲れて數年、私も亦其羨望通りに仙臺の幼年學校に這入ることが出來た。併し此時大杉君は既に名古屋幼年學校を退校されて、外國語學校に學んでゐた頃だつたと思ふ。

私は幼年學校を終へ、士官學校に來た大正元年に、端なくも何年振りかで大杉君に出逢つた。其時大杉君は出獄したばかりで荒畑寒村氏と『近代思想』をやり出した時であつた。家は大久保百人町で、今度殺された宗一君の母のやめさんは、まだ十二三歳の小娘で、兄の家に世話になつてゐた。私は『近代思想』に依つて初めて『社會』を見た。そして私の思想は此時を轉機として、全く變つた方に進み、遂に後九年目に、大杉君と交際したとか何とかの名で陸軍を放逐されて了つた。其後私は不幸にして大杉君の主義と運動とに共鳴する所少く、同志としては全く交はらなかつたけれども、個人としては私は最後まで、非常に親しい懷しい又尊敬する先輩として交つてゐた。

陸軍將校の子と生れて、軍人になりかゝつた大杉君は、偶然にも軍人から殺された。而も殺した甘粕大尉は名古屋幼年學校の第九期生で、實に大杉君の六年の後輩であるのだ。「國士」も「國賊」も共に、陸軍の學校から出たといふことも一奇である。

過日私の同期生で今は軍職を辭した水島周平君が、東京日々新聞の「角笛」にこんな投書をした。

『……まだ志操もかたまらない十五六歳の少年を、嚴格な軍隊的規律のもとに教育する方針で收容する幼年學校は、塀一重を境に全く社會との交渉を絶ち、……人間味の乏しいつめたい空氣の中にあつて、只管軍國主義的國家觀が注入され、……ともすればかれ等の心に、獨尊、偏狹、狷介等の性質が芽ばえてくる。乃公出でずんば天下國家をいかんせんと自惚れ、東洋豪傑を氣取り、世界征服を夢みるやうになる。……誰でもみな自ら所謂『國士』を以て任ずるやうになるのだ。

『今度の事件でもその通り、猿芝居の猿が教へられた通りに踊つたまでだ』

私は今何も評論を加へる氣が起らない。私は大杉君の死に當面して人世の樣々の奇縁を思つてゐる。人の運命が明日にどうなるか分らないものだと思ふ。私が尚歩兵の將校の時、何故か憲兵になりたくて、熱心に志願したが、不幸にして選拔から漏れて落膽した事があつたが、若しも其時憲兵になつてゐたら、或は今――操觚界の名もなき木ッ葉武者となる代りに――「國賊」大杉榮を殺害する「國士」となつてゐるのであらうか。

印象二三

土岐善麿

大杉はよく筒袖の着物をきてゐた。これは一時、社會主義の人達の間にはやつたものらしい。おれは長袖者流とは違ふぞといふやうな一種の誇りもあつたらう。また恰度一般の苦學生が頭髪をボヤ〳〵に延ばし、黒のネクタイを修多羅なく結びばなしにしてゐることが、清貧に甘んじて藝術にいそしむ、といふ特異さをみせてゐると同様な心理もあつたらう。然るに、大杉の筒袖は、さういふ窮迫した木綿のゴツ〳〵の、油じみたり垢づいたりしたのとは違つて、いつも堂々たる大島の、着物と羽織と上下揃つたやつなのである。『社會革命家』とか『勞働運動者』とかいふものゝ服裝としては、たしかにオゴリ過ぎてゐた。筒袖でない時は、八端のドテラをゆつたりとひつかけて、それで町なかをおし歩いてゐた。この服裝の贅澤さは、一種の着道樂は、大杉の性情の一面をあらはしてゐたと思ふ。アナキズムとかサンヂカリズムとか、大杉の思想傾向としては、よごれた菜葉色の勞働服でもブツリときて、埃まみれの爭議の中を飛び廻はる、といふやうなのであらうが、その生活氣分、その趣味としては、大杉はよほど貴族的で、その素質の上に多分に詩人的なところがあつたやうである。中肉中背で、からだ全體のポーズもよく、顔色は淺黒く、健康さうで、肺のよわさなどを外見、想像もさせなかつた。澤澤しい頭髪をキザでない程度のクシヤ〳〵に撫であげて、鼻の下のひげのほかに顎の下にもフランス風の短いひげをはやしてゐた。――このあごひげは、巴里から歸つたとき、却つてそりおとしてゐたやうにおぼえてゐるが――。すこし反身になつてマドロス・パイプをくはえて、大島の筒袖をきて、ステツキをついて、のつそりと立つた風は、いかにも貴族的で、しかも一種の威壓と人懷しさと、不遠慮な中にも含羞があり、強さと圖太さの中に、また臆病さと愛嬌があつた。そ　男振りは　女惚れさせたと共に、男惚れもさせたに違ひない。大杉が、その周圍に、たとへ主義や環境の上から[illegible]へも集散離合の事實はあつた

にしろ、幾多の『同志』をあつめて、その人達の推重敬愛の中心になつてゐたと共に、謂ゆる『社會主義者の巨頭』として、艶つぽ過ぎるほどの戀愛事件などをひき起したその原因の一つは、こゝにも在つたのではないか。

しかし大杉自身も、その思想傾向と生活氣分と、相容れ相反する性情の苦惱には、隨分その不徹底さを口借しくもおもつてゐたらしい。人類生活の理想としてのアナキズムへ、社會革命を主義として說きながらもさてその詩人的な情感は現在の社會制度の根づよさ、現實生活の斷ちがたさに對して、自己の力の不甲斐なさと執着と、享樂的な生活氣分の悲しみ、自己を憐れむこころをおさへかねてゐたやうである。これに就ては、ずつと以前、友達の新しい詩集の批評に托して『籐椅子の上で』といふ文章に告白したことがある。大杉の內面生活の本統のところはその熱意のある論文などよりも寧ろこの文章のなかに最もよくあらはれてゐたと思ふ。

大杉の詩人的な素質が、かれをアナキストにしたとも云へる。大杉が初めて獄中生活を送ることになつたのは、クロポトキンの『青年に愬へる』といふパンフレットを紹介したゝめであつたかと思ふが、このパンフレットは、詩人的な素質のものを特に社會意識の上に湧ぐましくゆり動かさずにはおかない。それはまだ十八か十九の少年であつたらしが、それからしめ殺される最期迄、その思想の『危險』であるか無いかは別問題として相互扶助や自傳その他、クロポトキンの思想、生活の祖述につくした大杉の努力は、記念していゝ、この記念していゝことが一面からみると、あゝいふむごたらしい死への努力であつたかも知れない。

クロポトキンの生立ちや境遇や事業とは多くの相違點があつたにして、その素質や氣魄には、大杉がクロポトキンと一脈相通ずるところがあつたかと思ふ。第一、貴族的な、といふところもそれであるが、科學に對する十分の理解もあり、詩人的情思のゆたかであつたことなど、大小の差異こそあれ、兩者相一致してゐないか。實際運動の方面において、大杉もモウだめだと或る一部に云はれるやうになつてゐた半面は、かれの晩年にますます際やかに發揮されたかれの詩人的天分のためではなかつたか。クロポトキンが英京郊外の閑居に亡命客としての靜な生活を送つてゐたとき、こんな境涯に在つてピもアノは欲しくてと云つて、それを樂器店から月賦で買ひ込み、つゝましい老夫人と、やさしい娘と一緒に、研究や著作の餘暇をその彈奏に樂しんだ、といふやうな逸話を聞いたが、大杉にもこんなところがある。大杉が憲兵や刑事につかまへられた時、洋裝の妻と甥

と並んであるきながら、果物店でいくつかの梨子を買ひ求め、それをバスケットに入れて持つたまゝ留置されたといふがやがて不意の暴力に逢ふ前、憲兵からナイフを借りて、梨子をむいて喰つたといふ事實の傳へられたのも大杉らしい。あゝいふ時變に、あゝいふところへ連れこまれることなどは、大杉はすつかりなれてゐたのであらうが、いかにナンでも後ろからしめ殺されやうとは思ひも設けなかつたであらう。社會思想家としての大杉の最後の場面に、この梨子の點出されたことは、たまたまかれの性情や生活氣分の表徴のやうな氣がしてならない。

大杉が『革命思想家』として、どの程度の實行力を持つてゐたか、この方面に就て僕は殆んど全く知られないが、何かと隨分忙しく、よけいな時間も潰されてゐたやうに想察される。それにも拘らず、かれの四十歳にも達せぬ生涯に、文筆勞働者としても相當に多くの仕事を殘してゐる。その信念が、あれだけの仕事を殘してゐる。その信念が、あれだけの仕事の統一さをもたせたものと云つていゝ。譯書に、論文に、創作に、感想に、もし全集の出版が計畫され、そして發行を許可されたらば、それはたゞ單なる一般文學者達の相當な努力よりも更に餘ほど大部なものになるに違ひない。先頃巴里へ着いて間もなく、フランス官憲の手につかまつたと云ふが、そのメーデーの大道演說は大杉が初めてフランス語で、警察の前にしやべつたものであつたと云ふ。日本へ歸つてから友達に『いきなり立つたのだが、案外うまかつたぜ』と得意得に話したといふが、それを眼のあたり聞いたものは日本の友達に一人もゐなかつたから、うまさの程度はわからない。然しフランス語はよほどよく讀めたらしい。イギリス語はもとよりであるが、ロシア語も讀めたし、ドイツ語もいけた、スペイン語もやれたと云ふことである。何でも大杉は、監獄へブチ込まれると、その機會に新しく一國語を獨習することにしてゐたらしい。大杉の監獄へブチ込まれた度數は、かれのおぼえた語學の國數でわかると云つていゝのかも知れない、大杉にとつて監獄は一種の語學校であり、また書齋でもあつたか。然し晩年、その愛人と同棲して、かはいゝ子供達までいくたりか產れてからは、モウさすがの大杉にとつても、監獄は『監獄』であつたに違ひない。それだけかれの實際運動における力は段々と缺けて來たのではなかつたか『革命家』としての大杉の晩年は、チト著作がよく賣れ過ぎ、印税があまりはいり過ぎたやうである。

あの大杉の『眼』も今ではつぶつてしまつたか。大杉はいゝ眼をもつてゐた。かれを『巨頭』らしくみせた顏つきは、その眼が與つてよほど力がある。大きく圓く、ぢつと見つめられたとき

戀の女性は未練の短刀を懐中に忍ばせなくてはゐられなかつたらう、憲兵の大尉は眞正面から向はずに、うしろから忍び寄らなければならなかつたらう。神近市子に葉山の日蔭の茶屋で刺されたとき大杉はびつくりはね起きて、人殺しと叫んで廊下へ驅け込んだとかいふが、あゝいふ事件では大杉も死に切れなかつたに違ひない。不思議なことに、あのとき咽喉を突かれてからドモリがいくらか癒つたといふことであつたが、それでもどもつてゐた。この時々發音に故障を感じるとき、大杉は大きな圓い眼をギロ〳〵としばだゝいて、投げ出すやうにしやべつた。それが却つて鈍重な、悲壯な顔つきにもした。絶命迄の五分、大杉は默々として一語も發しなかつたといふ。人殺し！ などと叫んでジタバタしなかつたところは大杉としていゝ最期であつたといつていい。大杉はあのドサクサ紛れの中に、默々として死んだが、事件發覺と共に輿論の聲は左からも右からも隨分大きくなりつゝある。以て瞑するか、瞑しないか。

（をはり）

大杉君の半面

近藤憲二

大杉君は吃の癖になかなかのおしやべりだつた。ちよつと見たところは、とつ着きの悪い、いかにも一癖ありさうな面ら構へであつたが、そして實際、氣に喰はぬ奴と話す時などは、あの大きな眼玉で睨みつけて、投げつけるやうな、詰問するやうなもの云ひ方をする男だつたが、どうしてなかなかの愛嬌者だつた。宿屋やカフエの女などにも隨分うまい戯談やからかひを云つたものだ。

『大杉君にあんな藝當があらうとは知らなかつた。』

大杉君をよく知らない大概の人は、かう云つて驚いたものだ

大杉君が如才のない愛嬌者だつたのは、たゞかうした種類の女にだけではなかつた。誰れにでも、少くとも彼に敵意や蟠りをもたない者には誰れにでも、ごく愛想のいゝ面白い男だつた。殊に最近は、先日の『讀賣新聞』に内田魯庵氏が書いてゐられたやうに、角がとれた、如何にも子福者らしい圓滿ぶりを見せてゐた。

『大杉も近頃大ぶ變つて來たねえ。』僕等はよくかう云ひ合つたものだ。

全く最近大杉君は、四五年以前ほどの亂暴ぶりは餘り見せなかつた。電車に飛び乗つた後を、まかれまいと思つて一生懸命に驅けつけてやうやく噛りつかうとする尾行を、彼がよく好んで穿いたあの巾廣い駒下駄で蹴落すと云つたやうな亂暴ぶりは餘り見せなかつた。

大杉君はひどく子供好きだつた。殊に魔子にとつては本當にいゝパパだつた。少し仕事の暇な時なぞは、魔子と二人で半日でも一日中でも遊び暮してゐた。先頃フランスへ行つた時に途途寄越したどの手紙にも、魔子のことが書いてない事は殆んどなかつた。殊に上海からであつたかフランスからであつたかよ

くは覺えないが、『どうして園子も一緒に連れて來なかつたかとこんな馬鹿なことも考へたりする。』と書いて來たり、パリのラ・サンテの牢屋で自作の園子の唄を歌つてゐると、ちつとも悲しくはないのだが、なぜか涙が流れて來た。と云ふやうな事を書いてゐるのを見た時には、僕は妙な氣持になつた。そして一體フランス行きは、彼が勝手に自分で決意して行つたのには相違なかつたが、横から大いに贊成した事が何だか氣の毒な事をしたやうな、『馬鹿なこと』さへ考へられた位ゐであつた。

大杉君の子供好きは、たゞ自分の子供達だけではなかつた。電車や汽車の中でつい座りあつた子供なぞにもよく相手になつた。

『將を射んとするものはまづ馬を何とやら云ふぢやないか。』

僕はこんな事を云つて冷かした事もあつたが、大杉君は全く野心なしにどんな子供でも好きだつた。子供も初めのうちこそ驚いた顔つきをしてゐるが、直ぐによく懐いた。

野枝さんに對しても大杉君はいゝ亭主だつた。獨り者ばかりの若い連中がゐる勞働運動社にゐた時は、少しは遠慮してゐたやうだが、それでも時々、あの面ら構へにも似合はないやさしさで話し合つてゐる事があつた。そしてこれは野枝さんの少し御機嫌の惡い時によく使ふ聲であつたが、まるで駄々つ子に云ふやうな一種特別な甘い聲を出して御機嫌を直してゐる事もあつた。

『大杉の奴いゝ年をしやがつて、あの聲つたら何んだ。』

僕等はこんな陰口をきいた事もあつた。決して妬いたのではないが、二人は全く仲のいゝ夫婦だつた。

大杉君は女から無論よく惚れられた男には相違なからうが、そんな意味でなくまたよく女に好かれた。それは彼の豪放な謂ゆる『男らしい』半面に、前に云つたやうな優しさと、愛嬌と、そしてさばけた輕口が、容易に彼を親しませたのだと思はれる。

『君のやうな調子では駄目だよ、女といふ奴は少し隙を見せてやらなきや近寄つて來るものぢやない。』

大杉君はよくかう云つて、彼の謂ゆる女を作る祕訣を教へて呉れたものだ。しかしこの祕訣は、僕に教へたものではなくて、彼自身の經驗を告白したものであつたらうと思ふ。

何しろ、大杉君は女はきらひではなかつた。從つてこの方面のことをも少し書けばいゝのだが、そして村木君や和田君が切りにそれを横から煽動してゐるのだが、女の話はもうこれ以上煽動に乘らないことにする。

大杉君は社會運動者としては人一倍多くの敵を持つてゐた。たゞ官憲や反動思想の所持者からだけではない、同じ社會運動者の間にでも人一倍多くの敵を持つてゐた。しかし少くとも、少しでも彼の性質を理解してゐるものには、それが官憲や反動思想の所持者でない限り、腹のどん底から彼を憎むことは出來なかつたやうだ。迷惑を感じながらも、攻撃しられながらもやはり捨て難い男であつたやうだ。そこに彼れの人間としての甘味と面白味とがあつたのだ。

『借金にはよく來るが仕事の方は一向やつて呉れないので、いつそのこと喧嘩しようかと思つた事は幾度あるか知れないんだが、どうも逢つて見ると何分氣持のいゝ男なのでねえ。』

ある出版屋の主人なぞは、よく僕にさう云つた事があつた。そしてさう云ふ口の下から、やはり大杉君の無理を聞き容れてゐた。

借金のことにかけても隨分ひどいやりつ放しで、『なに其の内にどうにかするさ』といふ調子であつたが、この『どうにかするさ』といふ遣り口は運動の上にもよく見られた。

『要するに理窟は理窟さ、尤もらしい理窟ほど嘘だよ。』

よくこんなことを云つた。そして自分でもよく理窟を書いたり云つたりする癖に、

『理窟はさうさ、しかし實際はどうなるか分らないよ。』

と云つた調子であつた。これは僕のやうな理窟ぎらひな男にも親しむ隙を見せて呉れたのであつたかも知らぬが、決してさうばかりではなかつた。やはり彼は本氣でさう云つてゐたのだ。

僕は大杉君のこの遣りつぱなしな、一種の臨機應變的な所にそしても一つには實に賭博根性を多分に持つてゐた所に、最もよく彼の叛逆人らしい所が現はれてゐたと思ふ。賭博根性と云つても骰子を轉がす賭博が好きだつたのではない。運動のやり口に、乘るかそるかだやつて見ようといふ冒險心を多分に持つてゐたのだ。で、ほんの少しでもやり通せる見込がつけば、遮二無二無鐵砲にやつてのける性分であつた。そして失敗つても少しも悔いなかつた。更らに新しい冒險を計畫してゐた。冒險から得た經驗を、そしてそれに伴ふ恐怖のまじつた快樂を、得難い獲物として喜んでゐたのだ。

こんな風に、やり始めると臨機應變的になり、賭博根性を出す彼であつたが、何かやり始める最初は實に驚くべき細心の注意と、事詳細な献立表を作り上げてから取りかゝるのが常であつた。尾行一つまくにしても『どうだ、うまくまけたかなあ』と云つて、完全にまけた筈のを三度も四度も振り返り振り返りし

た。

大杉君はちよつと見たところ、隨分飲めさうな顔をしてゐたが、酒は殆んどまるで飲めなかつた。奈良漬の三切れ四切れで顔をほてらせる位ゐの本當の下戸黨だつた。パリの牢屋で飲み覺えて、フランスから歸つてからは少々飲むには飲んだが、それも文字通りほんの少々であつた。

或る時、誰れだつたかと一緒に夕飯を食つた事があつた。その誰れだつたかは隨分いける口であつた。大杉君が煙草ばかりぱくぱく喫つてゐるのを少し氣の毒に思つたのか、しかし飲みはじめると直ぐとは止せないので、

『酒といふ奴は狂人水でいけないのですが、やり始めると病みつきになつて了ひまして。』

と遠慮しいしい飲んでゐた。大杉君は例の戯談まじりに

『いや結構ですよ、僕等は生れつき正氣の狂人なんだから始末にいけません。』

といふやうな事を云つて笑つた事がある。

全く大杉君は『正氣の狂人』であつた。この頃大ぶ角がこれて圓滿になつたとは云ふものゝ、生れつきの『正氣の狂人』はやはり大杉君のからだから少しも拔けなかつた。しかし僕等にとつては本當に心強い『狂人』であつた。

僕はどんなにこの『狂人』から教へられる所が多かつたか知れない。

善き人なりし大杉君

馬場孤蝶

一

大杉榮君と伊藤野枝君が、官憲の手で慘殺されたといふことは、何だかまだ本當の事ではないやうな氣がしてし方がない。國法執行の職にある官吏が、國法を無視して、殘虐を行つた今回の如き例は、官民の軋轢甚しかつた明治十五六年頃にさへなかつたことであるので、文明の世での事件としては、それが眞實の出來事であるとは一寸首肯し兼ねるやうな氣がするのだ。

國法を犯さゞる者は、國法の前では何人も平等に無辜であるといふ原理は、吾々は神聖なものであると思うのであるし、又人命の何處までも尊重すべきものであることを確信する吾々は國法擁護、人命保護の任を托された官吏が、私見に由つて公の機關を動かして、その職任に全く背反した殘虐を敢てして置てそれは唯個人としてなした行爲であると揚言し、更に又國家あつての國法であるのだから、國家の爲めには國法を蹂躪するも已むを得ないといふ考を公表するを見ては、その人の餘りに沒分曉なるに啞然たらざるを得ない。

吾々は、國家は國法に依つて維持されて居るものと考へて居る。國にして國法なくば、それは國ではなくして、人間の唯烏合して居る集團に過ぎないのだと考へて居る。吾等は國家と國法とは不可分のものだと考へて居るのだ。國法はその國に住む總ての人々の間の公の約束であつて、これがなければ、人民は據るところがないので、名々勝手なことをする譯になるので、國といふ如き組織的な團體は成り立ちやうはない。

吾々は司法權が天皇の御名によつて執行されるものであることを教えられると共に、總ての國法が天皇の御名によつて執行されるものであることを推定せざるを得ない。

陸軍の法務官に對して虛僞の陳述をすることが、恐怖すべきことであるならば、私見によつて、自己の職分に背いて、國法を蹂躪することは尚一層恐怖すべきことである。

かゝる見易き道理を解し得なかつた甘粕某の頭は餘程何うかして居るものと思はざるを得ない。

大杉君夫妻がさういふ頑冥な考の爲めに犧牲にされてしまつたことは、殊に悼むに餘りあることである。

大杉君夫妻の死によつて、世間の正義の考が喚起されて、軍憲などの間に潜んでゐる頑冥な考が一掃される機緣を作ることいふことになるのならば大杉君夫妻の死も全然犬死とは云へぬことになるのであらうが大杉君夫妻を善く知つて居つた吾々に取つてはそれにしても餘りに大なる犧牲であるやうに思はれる

然しながら、何と云つても、大杉君夫妻はもう此の世には居無い。あのぶつきらばうのやうで、何處からか溫情の溢れて來るやうな感のする大杉君にも。如何にも優しみのある、何時までも娘らしい可愛らしい笑顔を失はかつた野枝君にも、もうふたゝびその聲を聞き、その風貌に接することはできないのだ。僕は先づ大杉君のことを思ひ出づるまゝに左に記して、大杉君を悼むの意を表したいと思ふ。

二

大杉君の所謂る主義に就ては、僕は多く言ふことを持つてゐない。僕は大杉君の主義を論評するに足る知識を持つてゐないのだ。大杉君が如何なる主義を持ち、如何なる終極の目的に向つて活動してゐたにしたところで、その主義の行はれるのは、その終極の目的に達するのは決して早急のことだとは思つてゐなかつたであらう。ところで、吾々は、幾くら主義がよくつても、目的が立派であつても、それに達するまでのその人の行動が無意義であつては、何の價値もないことだと思ふのであるから、大杉君の一生を見る時には、君が既往十四五年程の間に、實際成したことの大體に注目すべきであると思ふ。

運動者としての大杉君の價値は、××××××××××××××××、×××××××××××した點にあると思ふ。勞働者に對する待遇に就ての世間一般の考が進んで來たことは、×××××××××何時の間にか輿論を喚起するに至つた結果であると思ふ。言論の自由の範圍が數年前から大に擴張さるゝに至つたのも、確に×××××なる言論の賜ものであると認めざるを得ない。これ等は、大杉君及びその同志の人々の功勞の重なるものであるのだが、その他にも、大杉君等の捨て身××××××、×××××××××××××××××××××。

吾々から見た大杉君は、如何にも善き人であつた。情の厚い憐れみの深い人であつた、所謂るものの道理のよく解つてゐる人であつて、何にしろ、優れた才人であつたので、自分の行動に就ては、楯の兩面を見るだけの自省は確に持つて居つた。思慮あり、理解力の鋭い人であることは、一寸とした對話のなかにも直ぐ表はれるのであつた。一見しては、朴訥な倨傲な風に

見えたのだが、あの凄い眼をパチ〳〵やりながら、秩序整然と話す言葉には、人間としての溫味が何處からともなくしみ出て來るやうな氣がして、人を引きつけてやまざるところがあつた。大杉君は女子供とも話のできる人であつた。僕は或る時大杉君に向つて。

『甚だ失禮たが、僕は此の頃貴下がだん〳〵齋藤綠雨に似て來られたやうに思はれてし方がないのだが』

と、云うと、大杉君は同行の若い人――或は五十里君ではなかつたかと思うのだが――を顧みて、

『大に光榮だね』

と、微笑を含んで云つた。

大杉君自身からは、

『私は餘り廣く人とつきあうのではなし、世間をさう廣く知つてはゐませんが、私が人情といふやうなものを解することのできるやうになつたのは、監獄にはひつたお蔭だと思つてゐます』

といふ言葉を聞いたことがある。僕は其外にも監獄に關する面白い話を幾つか大杉君から聞いたので、葉山事件の少し後かと思うのだが大杉君が大分金を要する狀態であつたので、新聞へ交渉して『獄中記』を書いてみたら何うだと勸めたことを覺えてゐる。『獄中記』が出たのは、それより何うしても二三年程たつてからであつたらう。

三

大杉君は憐みの心の深い人であつた。僕のうちの猫が生んだ二番仔が一番仔に頭を手玉にされて、眼を爪で引つ掻かれて盲になつてしまつた。その盲の仔猫が見えぬ眼を上向けて見張るやうにして、二階の僕の部屋へ這入つて來ると、來合せてゐた大杉君は、仔猫の傍へ顏を寄せて、

『貴樣は可愛いさうだなア』

と、云つてから、直ぐ、

『さア、來い、來い』

と、お召の着物の膝を叩いた。

身寄りも、さしての友だちもない江連沙村が病氣になつた時に、大杉君は刑事に賴んで、直ぐ施療院に入れて吳れた。江連の最後の病氣の時にも、大杉君が同じやうに世話して、施療院へ入れて、其所で生を終はらして吳れたやうに聞いてゐる。江連は知人間にいろ〳〵世話をかけた男であつたので、餘り親しくない大杉君にさへ世話をかけたことが可なりあつたらうと思はれるに拘らず、大杉君はそれ等のことに就ては、吾々には殆ど一言も云はなかつた。江連に就ては、知人が皆非難の言葉を洩したけれども、大杉君からは、江連に對する非難を一言も聞

かなかつたと思ふ。

大杉君の夫人保子君のお里にゆかりのあつた或る老婦の如きは、大杉君の親切にひどく感激してゐた。

大杉君の憐れみ深い人であつた智識を持つてゐる人は、君の知人のなかには必らず多からうと思ふ、

大杉君の心に、虐げられたるものに對する慈悲心が燃えて居るやうなのを、吾々は貴しとしてゐた。

大杉君は如何にもさつぱりした男らしい心持ちの人であつた堺君との意見の相違に就ても、

「堺は吾々の大先輩ですが、これに閉口してゐるやうでは駄目だと思つて、此の頃では、強て一々突つかゝつて行くやうにしてゐるんです。」

と、笑ひながら云つた。それは大正元年の秋で、大杉君と心安くなつてから間もなくであつたと思ふのである、

それから葉山事件の少し前位であつたかと思うのだが、大杉君が或る雜誌社の社長に對して憤るところがあつたので、堺君荒畑君、安成君などが仲へ立つて、その社長と融和する爲めの宴會を築地か何處かで催したところが、大杉君が又その社長の或る言葉に感情を害しておこり出したので、堺君が傍から輕い言葉で取りなさうとすると、大杉君は、

「君のさういふ言葉が氣に入らん」

と怒鳴つて、堺君の顔へコップを叩きつけたので、堺君の方もさすがに憤然として盃か何かを投げつけたといふのでつあたが、その事件があつてから少したつて大君杉がやつて來たので、

「此の間はひどく憤激したさうですね　堀保子君が來られて、女ができると氣が折れるといふことは、世間でよくいふのですが、大杉のは、女ができて氣が荒くなるのですから」と云つて、笑つてゐましたぜ」

と、云うと、大杉君は苦笑してゐたが、やがて、

「堺には、これまでは、何うかつかゝつて行つても、何時も相手になつて呉れないので、弱つてゐたのですが、今度ばかりは、本氣で相手になつてくれたので、餘程心持ちがいゝのです」と云つてくすくす笑つた。」

それまで、にさまざまなことで感情は疎隔して行きつゝあるにも拘らず、大杉君の胸には、共に水火のなかを潜つた昔の先輩に對する暖い心持は消えてはゐないのだと思つて、僕は大君杉のその言葉を決して惡るい心持ちでは聞かなかつた。

遠藤無水君の『社會主義者になつた漱石の猫』が出た時にもその小説に取り扱はれてゐる堺君のことに就ても、

「あゝ誤解されてゐては、氣の毒ですよ」

と、大杉君は云つてゐた。

四

葉山事件に至らぬうちの、戀愛の錯綜時期には、その渦中へ少し足を踏み入れざるを得なくなつたので、大杉君に面談する機會が多くなつたのだが、大杉君は、

『とにかく、損な位置を自ら選んだといふことに重々承知してゐますが、行き詰つた境地から何等かの活路を打開する爲めには、斯んな方面へ出るより外はなかたのです』

と、少し憂ひを帶びたやうな顏で云つた。

大杉君は思慮の深い人であつた。可なり話好きであつたやうに思はれるに拘らず、他人の惡る口などは餘り云はなかつたし不必要な話は殆どしなかつた。何んなことを話しても、如何にも要領を得てゐた。大逆事件などのことは、僕の方からも聞かうとはしなかつた、大杉君の方からも、殆ど何も云はなかつた或る時に、ゾラの『ジャアミナル』のなかの罷工鑛夫の群へ兵士が發砲する條下の話をすると、

『私どもはあゝいふのを見ると、ひどく悽慘なる心持ちがします。あゝいふのを見ると、大罷工などは濫りに起すべきものではないと思ひます』

と大杉君は沈んだ聲で云つた。

原敬氏が刺された時分、大杉君は鵠沼の東屋にゐたさうのなだが、同じ旅屋にゐた若い知人の部屋へ來て、

『原首相が暗殺されたといふ話だから、今尾行を號外を買ひに藤澤へやつた。號外が來たら見せよう』

と、云ひ、それから少したつて、

『斯ういふんだ』

と云つて、號外を見せに來たのみで何一言も云はなかつた。

『自分の氣のせえかも知れぬが、大杉は確に憂色を帶びてゐたやうであつた』

と、その若い知人は云つてゐる。

思慮のある、且憐愍の心の深い大杉君は、今度の變災を見て天譴だなどゝは、思ひはしなかつたらう、富が平均して面白いなどゝは思ひはしなかつたらう。

內田魯庵氏の書かれたところによると、大杉君は大震後は毎日末の幼兒を乳母車に乘せて、子守りばかりをしてゐたといふ知らず、斯の溫情の好漢の胸には、變災に死ねる、變災に苦める幾十萬の犧牲者に對する堪えがたき憐れみの念が往來してゐたのではなからうか。

大杉君に始めて逢つたのは明治四十五年の二月頃かと思うのだが、大正元年の秋から、二三年の間は可なり度々、僕の市ケ谷田町の僑居へ尋ねて來た。本村町へ越してからも、十囘位は

來てくれたと思ふ。が、何時の間にか、疎濶になつてしまつて彼れこれもう二年程は會ふ機會がなかつた。九月の七日頃に見舞ひに來てくれたさうなのだが、僕のうちは屋根が破れたでの雨漏りを避けて婿のうちへ行つてゐたので會ひ得ずに了つた。

五

大杉君の生家の門地に就ては、何も聞く機會がなかつたが、相當の紳士の家庭に育つたのであらうと思はるゝ。大杉君はなか〳〵趣味の廣い人であつた。あゝいふ才人であつたのだから頓智とか、當意卽妙とかいふやうなことは、ひどく面白がつてゐたやうである。從つて言葉の綾とか、匂ひとかいふやうなものに對する反應力も可なり强く持つてゐたと思ふ。大杉君の言動は何時も率直を極めたものであつたに拘はらず、他人のことゝしては謂はゞ廻りくどいやうな事柄にも十分理解を持ち、趣味を覺えたのは、面白いことだと思ふ。

大杉君の如き境遇のファイタアとしては、强情もヒガミもあるやうになるのは自然已むを得ぬことだと思ふのだが、吾々の接した大杉君は、唯の强味一方の人ではなかつた。相當の意義あり趣味ある話なら、善くその要領を摑み得る人であつた。優れた讀書家の常であるやうに、一見しては下らぬことのやうな斷片的な知識をも頭から輕んじはしなかつた。

何と云つても、死は吾々に取つては嚴肅な事實である。何でもない知人であつても、死んだと聞いては、その人の善かつたところが、いろ〳〵と思ひださるゝものである。まして、吾々の如く、大杉君の人としての善き部分にのみ接するを得たと思はるゝものに取つては、大杉君今や亡き今日、追惜の情のみ胸に湧くのは當然である。

嘗て、所謂赤旗事件の當時、神田の警察署内での、拘束者に對する所置が苛酷であつたことを傳聞してゐたので、ある時、大杉君にそのことを聞いて見た。

「それはし方がありません、此方も思ふ存分荒れたのですから」

と、大杉君は洒然として笑つてゐた。

今度の事件でも、大杉君だけの問題としてならば、

「それは敵を仆す手段としては、當然のことでせう」

と、何處かで笑つてゐる樣な氣がする。

大杉君の人爲だけしきや知るを得なかつた我々にとつてさへ大杉君について書きたいことは決してこの短い追懷だけで盡きはしないが、課せられた枚數の都合もあるので、先づ一たんこれで擱筆する。

追憶斷片

宮島資夫

もう八九年ばかり前のことだ。その時分大久保に住んでゐた大杉君の家で、死んだ荒川義英君と荒畑寒村君と落合つたことがあつた。そのとき何かの話の末に、荒川君が、

『然しこんなに皆なを邪魔にして、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、』と才氣走つた眼をキヨロ〳〵させて云ひ出した。

『それは本當に僕も不思議だと思ふんだ。向ふにはあらゆる便利があるんだからね、何か甘い方法を考へてやられたら、それつきりだと思ふことがあるよ』と荒畑君が答へた。そして、米國に於ける資本家の、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、IWWの鬪士のそれに對する報復の方法　を色々と委しく話してくれた。階級鬪爭が、激烈になればなるほど、双方の態度は眞剣になり、殘虐性を帶びてくる。

いつの會合に出ても最年長者であつた齋藤兼次郎老は、

『なんでも好いから、大杉さんや荒畑さんは出來るだけ身體を大切にして下さい。あなた方が生きてゐると云ふだけで、それでもう一種の示威しなつてゐるんですから』と老人らしい口調で心配らしく云ふのも幾度か聞いたことだつた。その頃は、サンデイカリズム研究會などと云ふものも、ほんのまだ微々たるものであつただけて、壓迫に對する對抗手段にも力がなかつたが、それだけに、大杉君等の身體も心配するほどのこともなかつたのであつたが、——

大杉君は話をしてゐるときによく、

『、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、』と云ひながら、あの大きな眼玉をキヨロッかせて、唇を突き出して頬べたをふくらませて滑稽な顔をしながら　叩つて見せることがよくあつた。そうしてこう〳〵、甘粕某の爲に、柔道の手とか云ふやつで絞め殺されてしまつたと云ふのだが、

死ぬるときにやつぱりあんな顏をしたかどうか、絞殺されたと云ふ新聞の記事を讀だときに、先づ第一に記憶を再現させたのは、あの頬つぺたをふくらませた顏だつた。大杉君の身邊を、齋藤老人が、憂へた頃には、彼の勢力も敵をして憂ふるに足らしめるほど大きくなかつた爲に、彼の身體は安全に過せたが、敵をして戰慄すべき手段に出でしめた今日は、果してかく偉大な勢力を張つてゐたか、そしてまた、彼一人の死によつて、その勢力に頓挫を來たすかどうであるか、それは今論ずべき問題でもないからやめにしよう。

アルテバーセフの作品、勞働者セイリオフが、初めて飜譯されたとき、近代思想に寄贈されたその書物を讀んでしまふと、『面白い本だ、讀んで見給へ』と云つてその本を僕に貸してくれたそして僕がまたそれを讀了して返して行つたとき、『どうだい君痛快な書物だらう、セイリオフの最後は全く談しいね』と云つてにこりと笑つた 劇場の中まで追いつめられて、反逆の血の燃え切つたセイリオフは、携へてゐたピストルを亂射した揚句に、遂に警官の手に捕えられた。そのときに彼の眼の中で光つた冷かな、無関心にも似た眼なざしの姿は長く僕の心の中にいりついてゐた。セイリオフの死を喜んだ大杉君は、大地震の災害を背景に、乾燥無味な落窟とした憲兵司令部の一室で、ピストルを亂射する隙もなく、甘粕の腕で咽喉を絞められてしまつたのだ。その時の彼の眼は、どんな光を放つたことであらうか、色々な事を僕は想像する。

思ひ切つて大膽な行動に出るとともに、女のようなハニカミや臆病さを持つてゐたり、鋼鐵のような堅さも鋭さを示すと思ふと、恐ろしく纖細な神經質ぶりを示すことが、大杉君の特質であつたとも云はれるだらう。然し人間の性格が、薪ザッポーのように單純でない限り、こんなことは誰にでもあることである。が、たゞ大杉君の場合には、その兩つの要素が恐ろしく際立つて、ハッキリと他人の眼に映つて來た。大杉君の文章を見ても、この二つの要素は明らかに窺ふことが、出來てゐた。

學問に對しては、恐ろしく忠實であり、思索の方法も極めて嚴密だつた。が、然し、それが一度行動に移つて來ると妙に、芝居氣澤山に見られるようなことがないでもなかつた。社會主義同盟の大會當時、毛布を被つて會場に潛り込みながら、檢束される時になると、『俺は大杉榮だ』と大聲叱呼しながら、引張られて行つたのなどもその一例だ。

この頃になつては、尾行巡査などゝ對しても、大して脅しつけるような事はなくなつたらしいが、以前は隨分烈しい方だつた。小石川の武島町にゐた時分、二階で何か話してゐる中に、

大杉君は便所へ下りて行つたこ思ふこ、下の方から大きな聲で怒鳴り立てるのが聞えて來た。何事が、起つたのかこ思つて僕もあはてゝ降りて見るこ、往來に向つた窓のそこに、○署のSこ云ふ高等視察が、間の悪しさうな顔をして立つてゐる。大杉君は例のごもりにも似合はず、盛んに大きな聲で面罵してゐるのだ。僕はその部屋でいつも暮してゐたYこ云ふ青年に、

『ごうしたんだ君、』こ訊ねるこ、Yは

『なに、こいつがこゝの窓からそうつこ中を覗いてゐるので、僕が怒つてゐる所へ大杉君が降りて來たのだ』こ話したが、その時。

『いやだ、俺は貴様達こ違ふ人間なんだ、貴様みたいな犬こ、誰が口をきくもんか、歸れ』

こ怒鳴るこ同時に、、、、、、、、、、、、、、、、、、障子をぴしやりこしめてしまつた。僕は何だか變な氣がして、默つてじつこ立つてゐた。大杉君のやうに長い間官憲から虐待され、その絶大な權力こ鬪つて來た人間ならば、あゝ云ふ實感を持つようになるかも知れない、こも考へた。その方が本當であり、或ひは正しいのだこも考へた。さうして實感のそこまで行かない僕に之れほご勇敢に怒鳴ることが、出來ないのを恥るような心持になることもあつた。けれごも然し、そこまでいつも些少の隙間が殘つてゐた。恐らく僕が、意氣地のない弱さこいつも思つてゐる。

ほかの人から聞いた話だが、大杉君は若い時から監獄に入つても、看守のことを、いつも『看守、看守』こ呼びつけにして暮したさうだ。これは恐らく、少年時代から軍隊的教育が、彼れをしてこの威嚴的態度に出さしめたものこ僕は思つてゐる。さうしてこの態度は凡ゆる場合に失はれず、殊に官廳この懸合事になるこ、いつも功を奏してゐた。雜誌を出して、郵便物の第三種認可を受ける時なごでも、ほかの者が行つても中々ラチが明かない時分に大杉君自身で出かけて行つて、課長に會つて談判する。ドモリな彼は話が面倒になつて來るこ、いきなり突立ち上つて、卓子に兩手をかけて、

『それでは君の方は飽までやつてくれんこ云ふのかつ』こ破れるような聲を出して怒鳴りつける。するこ課長は驚いて、吝くなつて

『まあさう怒らんで下さい』こなだめなだめ遂ひこちらの要求を入れてしまふようになつた。大杉君はいつもよく。

『あんな者こ、まこもに理窟を云つたつて判りやしない、飽までこつちの要求を通すようにしさへすれば好いのだ』こ云つてゐた。さうして、大抵の場合はそれで通つて來た 一方に於て

官憲から虐待され迫害されて來たと共に、その一面では、非常に恐れられ且つ、優遇されて來た。それが、今度の場合などでも向ふに乘ずる隙を與えるような結果になつてしまつたのではないかとさへ僕には思はれる、

大杉君は因習嫌ひな人だつた、と云つた所でそれは不思議でも何でもなく寧ろ當然すぎるほどのことに違ひない。それだから、あの新しい婦人の運動が、起つた時分などでも、その奇矯な行動に對する世間の攻撃をいつでも笑つてゐた。そして『どうせ新しく起らうつて云ふんだもの、ちつとは變な事位あるかも知れないが、その位の事はどうでも好いぢやないか、そこからやがて何か生れて來るんだから』とスタール夫人の例か何かを引いて盛んに辯護してゐたものだつた。

その大杉君が、下谷の觀月亭でサンデイカリズム研究會を開いた時に、つまらない事の間違の爲に、皆と一緒に引張られた事があつた。其時に警察の方では何か恐ろしい重大事件でも始まるもの丶ように、恐ろしい嚴重な警戒をやつてゐた。廣くもない觀月亭の家の圍りはいつの間にか警官に包圍されてしまつてゐた。中にゐた人間は、そんなことが、あらうとも知らず、講演も終り、相談も濟んで面白さうに雜談に耽つてゐる所へ、警部補と巡査部長が入り込んで來て、會合の臨檢をすると云ふのである。

『臨檢をしたければするが、好いさ、俺達は俺達の話をする』と云つて、大杉君はさつきからの無駄話をつゞてゐた。しかもその話は愚にもつかない馬鹿馬鹿しい話だつた。警部補はまだ若い男だけに、こちらの話が下らなければ下らないほど、馬鹿にされたものと思ひ込んでゐたらしく、顔面筋肉をピリ〳〵ふるはせて、口惜しさうに座中を睨め廻してゐた。すると大杉君は『どうだ、丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶、こつちの人は感心だから、家の中へ入つて來ると帽子を脫いでちやんと座つてゐるぢやないか、それなのに貴樣は、帽子を被つてアグラをかいてゐやがる。バカな奴だ、何だ、こんなことを云はれると矢張り口惜しいと見えて、淚をためてゐやがるな、あはゝゝゝ』と愉快らしく笑ひ出した。そんな時の彼の態度はまるで、やんちやんを云ふ駄々つ子そつくりと云ふ風だつた。警部補の顔は益々蒼くなつて行き、眼の中は血走つて、淚が益々たまつて行くばかりだつた。

が、結局、會が終つて一同がそこに出ると、待ち構えてゐた警官は、會衆を片つ端から引張つて行つてしまつた。僕もごたぶんに洩れず二人の巡査に腕をつかまれて、下谷警察の中に引

張り込まれて、そこで何かごたごたしてゐる所へ、大杉君がまたやつて來た。彼は警察の中へ入ると同時に、

『何だ勝手に引張つて來やがつて、怪しからん奴だ、署長をすぐに連れて來い』と刑事部屋の中に入つてまで怒號しつゞけてゐた。やがて、當直の警部が出て來て、二た口三口云ひ合ふ中に、

『貴樣なんかには判らんから、署長を連れて來いと云ふのだ』

奮然として怒鳴りつけたので、警部は蒼皇として、奥の部屋に引込んで行つてしまつたか。

『何だ人をこんな部屋に押し込めやがつて、默つて行くと云ふ奴があるか、無禮者めつ』と、警部の後姿に浴せかけるように怒鳴りつけた。僕は思はず可笑くなつて吹き出した。

　そして二人ぎりになつたとき、

『何しろ君は禮儀正しいから』と云ふと、さすがに彼も可笑くなつたと見えた、

『ウフヽヽ』と笑ひながら。なあに、向ふに禮儀がないと云ふだけさ』と云つてゐた。

　どうかした場合に

『何しろ大杉君は禮儀正しいからな』と云ふと、いつも可笑さしに笑つてゐた。

こんな友人か知己に會つても、『やあ』と云つて頭を一つ下げる以外には、何一つ挨拶らしい事を云つた事がない人だつたがいつか例の三角事件當時に、僕の家に來て泊つた事かあつた。そして、その翌朝、顔を洗いに、下の座敷へ下りて行つたとき、丁度そこに僕のお袋が來合せてゐた。昔氣質の彼の女は、大杉君の顔を見ると、

『お早うございます』と丁寧な挨拶をし始めたので彼は恐ろしくドギマギして、あはてゝ疊の上に手をつくと、尻を持ちあげて、口をもぐもぐさせながら、長い髮の毛をぼさぼさせて、頭を下げては持ち上げて見、また下げては上げて見て、母親の挨拶が終ると、子供のように顔を赤くして、ほつとしたように立上つた。さうして顔を洗つてしまふと、急いでばたばたと二階に上つて終つた。僕はその恰好が餘り滑稽だつたので、二階へ行つてその顔を見ると同時に笑ひ出してしまつたのだ。すると大杉君はまだ口をもぐもぐさせながら、

『いや、あゝ云ふ挨拶にはほんとに弱るね』

　と柄にもない弱音を吹いて、心から弱つたような顔をしてゐた。

　書物は隨分讀むけれど、讀むと同時に、なるべく忘れるように努めるのか、自分の方針だとよく話した。それだけに、人の

名前とか歌の文句とか云ふものは、可なり頑張りと忘れてゐた。料理屋へ行つても、『アワビのフクラ煮と云ふことが出來ないで、いつでも『ほら　あのかう云ふ風に切つて、ほら　あのこんな風に煮た奴さ』と女中に注文すると云つて、いつも保子さんに笑はれてゐた。

革命の歌の文句でも、どうしても覺え切れないで、ヽヽヽヽヽヽヽヽ、ヽヽヽヽヽヽヽヽ――と云ふ一節だけを歌ふ事が出來んだけだつた。いつか近く思想以後に出した平民新聞の、漸や發賣禁止にならなかつた四號だけを示威的に東京市中へ撒布して廻つたことがあつた。大杉君も荒畑君も僕達も、サンドウキチをブラサゲて、ノソ〳〵と京橋から神田日本橋、本郷から下谷へ出て、須田町の停留場まで來た時に、新聞は漸くなくなつてしまつてゐた。すると大杉君は荒畑君に、

『おい君こゝで一つやれな』と云つたので　荒畑君は路上演説をやり始めた。巡査が一人一寸やつて來たが、文句を云つたつて仕方がないと云つた風な顔をして、行つてしまつた。演説が終つて、皆なが揃つて歌をうたふ時になつても、彼は前後の文句の時は沈默してゐて、森も野山もと云ふ所へ來ると、突然と聲を張り上げて歌つてゐた。それからやがて、×××××××、須田町から小川町まで、殆んど彼一人で怒鳴りつゞけて愉快らしく歩いてゐた。

どちらかと云へば、その本質は人懐かしい人であつた。たゞあれだけに何か仕事をしたいと云ふ要求が強かつた爲に　仕事の爲にそれ等の感情が邪魔になつて捨てよう捨てようと努めてゐたようにも思はれる。これは大杉君ばかりでなく、僕の周圍の友人の多くに見受ける現象である。が、いつか保子さんと別れ、皆なが獨立した生活を送ると云ひ出したその理想を實現させる爲か、麴町の第一福四萬館に來てゐた時に　或る夕方、尋ねて行くと、丁度大杉君は不在だつたので、僕は家に歸つてしまつた。するとすぐとそのあとから、――何故待つてゐてくれなかつたか、此頃は一人ぎりで仕事をしてゐるので淋しくつて仕方がない――といやに涙つぽい端書を寄越した。その時分に大杉君は、

『自分は酒を吞まないから、惡友と云ふ者がない。お互ひに弱點を許し合つた惡友でなければしみ〴〵とした話は出來ない。どうかしてもう少し酒が吞めるようになりたい』と云つて、僕が行くと、無理に少しづゝでも酒を吞む事を努めてゐた。その頃は一合以上飲めるようになつたようだが、それから以後は、また段々吞まなくなつて、もとの默阿彌になつてゐたらしい。

葉山で僕が野枝君を彼の枕頭で擲つた時も、大杉君自身を罵

倒してゐる間も、大杉君は默つてじつと眼をつぶつてゐた。その後本郷の菊富士ホテルで逢つた時は、そうした感情は一掃されてしまつたように思はれた。が、またそれから後に、色々な些末な感情のイキサツから、遂にしみ／＼と交際た事はなくなつてゐたが、僕自身も、心からの好意は持つてゐたし、向ふも常に好意を持つてくれてゐたようだつた。――死んでしまつたから云ふのではない――それで去年の十一月に、久しぶりで勞運社に尋ねて行つた時、大杉君は何か忙しさうにしてゐたが。

『一寸出て來るが、一時間計りすると歸つて來るから待つてゝくれいと云ふので、僕はぢつと待つてゐた。やがて歸つて來たので、村木君と三人で、南天堂の二階へ出かけて行つた。久しぶりで議論もしたし、可なり長いこと話しもした。その時大杉君は珍らしくウヰスキーをコップに三杯ばかり呑んで、鏡を見て。

『ほう隨分赫くなつてしまつだ。こんなに飲んだのは初めてだよ』と云つては、また鏡を覗き込んでゐた。そして、仕事の事で話をしたら。

『僕は一寸旅行をして來るから、そう云ふ事はM君に云つておくから、あの人に云つてくれないか』と云つてゐた。少時、どつかへ行くのだな、と思つて、その晩別れたのが、大杉君との最後の會見になつてしまつた。

大杉君が日本にゐなくなつた、と云ふのを聞いた時、僕はきつとフランスからドイツへ行つたのだな、と思つてゐた。向ふへ行つてからの樣子も薄々は聞いてゐた。パリでつかまつて、愈々日本へ送還されると云ふ新聞記事を見た時に、歸つて來たら、フランスの事情や何かも聞ける事と思つて樂しみにしてゐた。八月一杯暑い盛りを房州で過して歸京したりすぐと逢つて見たいとも思つてゐたが、その中に大杉君から、一二度端書をくれて、フランス土産に、ゴルキーのアン、ガーニヤン、モン、ペイン、を一册、サインして送つてくれた。それが、遂に形見となつてしまつたわけである。

ロシアへ行つた高尾君が歸つて來てからも、一度逢ひたい逢ひたいと思いながら、逢はない中に死んでしまつた。そして今また大杉君とも歸朝後逢はずに別れてしまつた。大杉君の家で荒川君が『どうして殺してしまはないのかと云ふ疑問を發した時にも僕は、日露戰後に、何んとか隊の依囑によつて、露探を殺した、今村某と云ふ人が、裁判では八年の刑を宣告されてその後一年も經たない中に、肺患が重いと云ふ名目で釋放され然もその本人は、肺病どころか、健康らしい顏をして兜町に來

て相場をしてゐる實例を見た事を、話もすれば考へさせられもしたのである。

その後も何々會とか何々團とか云ふ反動團體が出來た度毎に、大杉君の身邊の事も氣づかつてゐた。大杉君自身も恐らくそれ等については考へてゐた事と思はれる「改造」に出てゐる獄中記などを讀んで見ても、もし間違つたら仕方がないとあきらめるよりほかに仕方がなかつた」と云つて、之れ等に對する覺悟を示してゐる、そしてフランスからは無事に歸り、震災も事なく過して、憲兵の手にかゝつて思ひがけない時に、思ひがけなく仕方がなくなつてしまつた。が然し、大杉君の死によつて捲き起された波瀾や、世人に與えた印象は、敵味方共に、深刻に銘じてゐる。罪九族に及ぶと云ふ事は封建時代の遺物と考へてゐた我々は、妻を持つと、自らいつとはなしに穩和に似た狀態に退嬰した。父となつてからの大杉君にも、さうした影響がないとは云へなかつた。そして意氣地のない僕のような人間は只管に獨身者の勇氣をのみ感歎しながら眺めてゐた次第であつたが、事實は決してさうでなく、××××、××××××××××××今日となつては更に深く考へて、更に強い覺悟を持たなければならなくなつたのだ。

犧牲となつて斃れた、大杉君には、色んな點に感謝しなければならない事が多いが、今に頭が混亂してゐて斷片的な追憶しか書けないのだ。

回顧

有島生馬

いつか大杉君と話し合つた事だつたが、吾々は語學校時代同窓だつたのではないかと思はれる節がある。互に顔は覺えてゐなかつたが、目の圓い、色の大變黒い、吃つて無口な特色のある或る一青年がどうも大杉その人ではなかつたかと思出してみるのである。尤も大杉君とは科を異にしてゐたのだから自然交遊する機會はなかつた譯である。

初めて君と識つたのは大正五年頃明治大學で馬場大杉氏等と一緒に講演をやつた時からである。その時大杉君の講演を聞いたが大變に面白く感じた。別に組織だつた話でなく、座談的な感想だつたが、よくその間に君の風格が窺はれた。勿論私は君の書いたものなどは一つも讀んでゐなかつたから、君の存在を認めたのもその時からである。

その演舌の冒頭に、今日は何も話題を考へずにやつて來たがこゝに來て馬場君の顔を見たら急に思ひ出した事がある。それは馬場君の兄さんの辰猪さんが病氣の時か何かに人傳にお前も男と生れた甲斐にはせめて牢屋に這入れる位の人物にはなつて見れ」と云はれた相だ。馬場君は不肖の弟で未だに牢にも這入れずにゐる。その點では自分は遙かに馬場君の先輩であると云つて、例の得意な獄屋の話から初めた。吃りながら話すその緩々した話振りには、人を引付ける愛嬌と同時に、人を威壓し命令する底の自信の強い凄い所があつた。君の特質のうちにはどうもこの命令するとか、獨裁するとかいふ性格の力が多量に含まれてゐたやうに思はれる。その性格は自ら君の容貌風彩にも出てゐた。堂々として男らしく、少しも感傷的な所がなく仲々立派だつた。どうしたつて商人や役人には見えなかつた。政治家とすれば既に一方の首領位、重味があつたが、然しそれよりも革命家と見立てればやはり一番適當だつた。生來か修養か知らないが、兎も角君はどこから見たつて革命家になり切つてゐて十分その資格を風彩の上にも備えてゐた。

目は大きくよく動いて恐ろしい所と美しい所があつた。先づ

ベトウヴエン型の目で、ナポレオン型のやうに靜かにぢつと見詰める透明さはなかつた。どちらかと云へば幾分の野蠻性を表示してゐた。人を引付けたり、愛嬌のあつたりしたのは君の口だつた　その笑ふ時や、吃る時には非常に親み易いものがあつでた眞に無邪氣な所が表はれた。

話は大てい自己中眞で、自ら自分を偶像視してゐるやうな風があつた。もしくはさう見せてゐるやうな所があつた。自己宣傳はやがて主義宣傳なりとでも信じてゐるかのやうに見えた、主義なり主張なりを直接語る事は少くも私には努めて避けてゐたやうに見えた。話題は大てい牢屋の事か、刑事を操縦する事か、文學か、語學か、科學の事に限られてゐた。時事問題には餘り興味がないやうだつた。

講演會の後で吾々が構内の一室で夕飯の御馳走になつてゐるとドアの蔭や、窓硝子の外からちよい／＼刑事の顔がのぞいて頻りに食卓の樣子を窺ふ、そのちよこ／＼してまるで狐か鼠のやうな仕草が無下に卑しい感を自分に與へた。刑事といふものは大杉君を一生苦めたに相違なかつたが、然しそれと同時に大杉君の生涯を飾つた裝飾品の一種であつたとも云へる。時にはそれによつて君が豪くも見られ、人の興味や同情を惹いたやうな趣もある。

その後の私と大杉君の疎い交際を保つ楔になつてゐたものは畫家の林倭衛君である。今君は巴里に行つてゐるが、君の處女作が初めて二科會に送られた抑々の時から私は君の材能の非凡なのを直ぐ認めた。その後君の藝術は私の期待を裏切らず發達して行つた。君が樗牛賞金を受取に私の處へやつて來た時から親しく話をするやうになつた。

君はもと筋肉勞働をやつた事もあり、性來の藝術的自由と人道的正義觀のため赤色を帶びた人として大杉君にも近づいてゐた。大杉君の方から云へば大に子分の一人のつもりでもゐた。然し君は段々社會運動の方面から離れて藝術に沒頭するやうになつて來た。殊に歐洲大戰後、社會主義の梗概が流行するやうになり、猫も杓子も勞働問題を云々し、それを賣物にするやうになつてからは十年の苦節にも拘らず、それに反感を抱くやうにさえ見へた。實際吾々の目から見ても十年前の社會主義者中には志士的な立派な人物がゐたが、今日の多くは皆な齒の浮くやうな輕薄な人物になつて、大に品下つた氣がする。

私がまだ林君に逢はない前君の作風を批評した一文があつたそれを大杉君が讀んで後で私に云つた、あの一文は林の畫評だから僕にはその方面のことはよく分らないが、あれをあのまゝ林の人物評として見ると實によく穿つてゐるので非常に面白く

思つたと。

大杉君は世間でも認めてゐるやうに文學者として優れた才能を持つてゐた人だ。文學上の批評眼も決して平凡ではなかつた。私も君の書いたものは何によらず愛讀したものゝ一人だ。それは文章がうまいからで、君の學識とか主張とかいふものに就ては門外漢の私には餘り興味がなかつた。然し、君の文章はいつでも藝術的でない事はなかつたやうだ。同種類の論客で福田河上兩博士も隠れない名文家だが、前者は匂を藏し過ぎ、後者は匂を放ち過ぎる、大杉君の文章に藝術的香氣の過不足はなかつた。思想とか主張とか知識とかいふものは實際古び易いものだ。音樂上の言葉を借りれば、メロデイみたいなものだ。直ぐ解る代りに直ぐ倦まれる。所が文章そのものはハアモニみた樣なものだ。容易には古びないで、繰返される度に味を增して來るのだ大杉君の文章は後世にも繰返し讀まれていゝ素質を十分備へてゐる。

大杉君の文學上の理解が疑はない人でも、繪畫に一双眼を具へてゐた事は餘り知られてゐまい。原來君は感能的にも仲々よく發達した人だつた。君の語學に堪能だつたのは君の聽覺の正確さを示してゐるが、どちらかと云へば君は視覺人だつた。その文章でも分るが、耳よりも目の方が餘計に働いた。音よりも色の方に引付けられた。音樂よりも繪畫の方に興味があつた。君は獨特の見方で名畫の氣韻に觸れる呼吸を知つてゐた。少くも感能的で藝術上の皮相に低徊したり、繪畫の中に文學的意味を探したりするほどの幼稚さは持たなかつた。その點では世間の堂々たる半專門的批評家連よりも遙かに氣持よく話が出來た。

そのうち大杉肖像畫事件といふものが起つた。それは確か第四回の二科會の時だつた。林が出獄した許りの大杉の顏を十號位にかいて展覽會に出品した。今それがどこにあるか知らないがあれは好個の記念品だから大切にしたいものだ、今度の火災に逢はなければよいがと思ふのである。

この〇氏の肖像なるものが檢査官の忌憚に觸れて撤回を命じられたのが抑々の起りである。實に亂棒極る話で、當局が果して奈何なる條文いかなる權利口實でこの撤回を命じたか更らに譯が解らないのである。

翌朝私が會場へ行つてみると、兎も角事務官の取扱ひでその肖像畫は下ろしてあつたが、私等は再びそれを掲げさせた。そのうち作者の林が來て恐ろしく憤慨した尤至極な話である。亦大杉も來て面白半分に警視廳に反對抗議することを主張した。そんなこんなで新聞記者の耳に這入ると尾鰭をつけて記事にしようとした。大杉が一味の人々を集めて來て示威運動を初めるといふやうな噂が麗々しく紙上に表はれたりした。慌てたのは

下谷警察と警視廳とで自分達の命令がまるで理窟に合つてゐないことを悟り、いかに泣く子と地頭の資格でも之を強制することの無理なのに氣が付いて二科會に泣を入れ、仲裁を頼んで來た。命令ではないが問題になるのが困るから何んとか作者から穩便に出品を見合せて貰ふように取計つて吳れといふ依頼だつた。もう少しいぢめればいぢめられた事件だつたが、そんなことをすることきつと江戸の仇を長崎で打たれる恐があつたのと、石井の如き穩健派や、大杉に反感を抱いてゐる人々があつたので、林、大杉に承諾して貰つて氏の肖像は撤回することになつた。然し今考えてみるとやはりあれは撤回すべからざるものだつたに相違ない。

大杉君の一枚の肖像が公開を禁じられたといふ滑稽極まる事實は警視廳の横暴を證明し、大杉君迫害の有樣を後世に傳へる面白い逸話と云はねばならない。

大杉君が鎌倉逗子に住ふやうになつてから、自分も鎌倉に住居してゐた關係上よく汽車の中で會つたり、時には往來したりした。君が急に姿をくらまして上海に逃げて行つた時など刑事がうるさく探しに來て困つた事がある。

一度大杉君は鎌倉の大谷氏の妾の借家から追立を喰つて家を探してゐた。私は古い西洋館を買つて大修繕をやつてゐる最中の事だつた。普新場に恰度君がやつて來て「僕は家のことなど一向心配はしないよ、××××××××××××××××××××××××××」と負け惜みを云つた。「さうか。然しこの家は僕の氣に入つてゐるのだから君には奪らせないよ」と云つて大笑ひした。大杉君にはそんな子供らしい事を云つて氣の弱い人間をおどかしてみようとする稚氣があつた。

巴里に行つてから三四回通信を貰つた。その中に私の家の娘のためにファブルの幼年讀本を今度こそは探して送るからといふことも書いてあつた。忙しい外國の旅で小さい娘のために約束してあつた本のことを憶出したりする所は大杉君のいかにも美しい點だつた。昆蟲記の飜譯が出た時野枝さんから送られて少し文章がむづかしいだらうから註釋を加へながら朗讀して聞かせて吳れろといふ手紙を貰つた。それが最後に貰つた手紙となつた。

最後に會つたのは外國から歸つて、パウリスタで歡迎會のあつた時だ。勿論そんな席だつたからゆつくり話す機會もなかつた近日中鎌倉の方へごうせ行くからその時と云つて別れた切りになつて終つた。

大杉君は兄の死を上海を出て間もない船の中で無線電報で知

つたと云つて、甘粕に向けて弔電を打つてくれた。パウリスタで會つた時、「兄さんのことを話したり、聞いたりするのは一番嫌だらうね」と云つて呉れた。全くそれに相違なかつた。この弔詞は簡單ではあつたが、君の頭のいゝ事を思はせた。（それだのに食卓で私が亡兄のことに就いて酒と女がどうのかうのと云つたと、時事新報記者が事實無根なことをさも誠らしく翌朝の紙上に寫眞と共に掲げてゐた。あの記者は馬鹿か惡者だ今日まで未だに一言の謝罪さえ申込んで來ない所を見ると禮儀をも辨へない厚顏無恥の人間である。）

回想はこんなことにして、今度の殺害事件に就いて一言しよう。甘粕大尉の無智無謀と當局の辯明書とは實に國家の一大汚辱なりとは、略ぼ識者の論じ盡した所であるから今更らそれを云ふ必要はあるまい。ある個人が將來にこんな惡事をするであらうからといふ豫想のもとに憲兵大尉が之を司令部内で死刑に處するといふことになれば東京市民全體に對する一大恐怖と云はねばならない。×× ×××××××××××××××××××××××××××××××。

然しこの違法犯罪よりも、無智よりも、更らに私の憎みに堪えないものは彼等の慘忍性である。人間らしい憐愍の情の露ほどもない獸性の表はれである。何等の用意もない大杉を、不意に絞殺し、その同じ屍で再び野枝を殺し、頑是ない宗一を殺させた事を聞くと、吾々とは異つた一種の劣等人種があるのでないかといふ感がする。自衞團その他の出來事でも皆な同じくこの想像出來ない獸性が吾々同胞の間にも隱されてゐるといふ事に氣付いて嫌な心持になる。

強盜などよりもつと惡い。なぜなら強盜などにはどこか冷かでない幾分自衞上止むなくとか意識の曇つたやうな所がある。然るにこの殺人者等の行爲は恰も當然の事を名譽をもつて行ふといふ風な非人情的な、天眞の缺乏した全く、誤つた心狀にあるからである。いかなる場合でも憐愍の情なく人を殺すことは最も恐るべき且つ許すべからざる行爲である。強盜の殺人よりも憎むべき野蠻人の行爲心狀だからである。

太古から情操の少しく訓練されたものは人間のみならず、動物の生命に對してすら敏感であつた。釋迦や聖フランチエスコは鳥や蟲や草木の生命に對してすら戰くやうな心を持つてゐた彼等に決して甘粕の眞似は出來ないのである。戰爭の罪惡の中最も大きなものは人類からこの慈悲心を失はせるからである。

又戰爭の起る種々雜多な原因が學者によつて擧げられてゐるが、眞因は人間にこの慘虐心血を見て喜ぶ本能が未だに滅びずにゐるからである。戰爭の眞因を爭闘本能にありといふ私の主

張は大正四年大戰勃發當時神田青年會館で明白に述べた所。ある。大戰後デツセル等の主張する所と暗合するものがあつて私は滿足に思つたのである。）人類いかなる場合でもこの本能を滅ぼすことを努めねばならないのである。私がその例として引用したミケランヂエロ、ミレエ、セザンヌ等の高貴な人々が××××××たつたこいふ事實は大きな暗示を吾々人類の將來に光明として與へてゐる。甘粕事件は徃々高等教育なるものゝ間にもこんな野蠻人が隱れてゐることを示したものである。私としてみれば戒嚴令であらうが革命であらうが、戰爭であらうが、人が人の血を流して善とすることは絶對にない、人を殺さねばならぬ場合に個性の尊嚴を維持するため、×××××からこてそれは當然立派な行爲である。

大杉君夫妻は實に之野蠻人的行爲の犧牲になつたのであるさうしてさうざらにはない所の材能と人格とが永遠に消えて終つたのである。現日本にとつて一損失といふべきであらう。私としては善良な二人の友人を失つた者として哀惜の情に堪えない。

尚ほ氏の思想影響の功罪について言及すべきであるが、時がないので筆を擱く。

一等俳優

久米正雄

初め大杉君の死を聞いた時は、其如何にも生々しい慘虐さに憤慨ばかりしか感じなかつた、が、日を經るに從つて、彼の死は、何だか益々美しいものになつて來て、今では、如何にも大杉君は、大杉君らしい死所を得たとしか思へなくなつて來た。これは少しも、皮肉やパラドツクスではない、僕のほんとうの感じである。

さう思つて來ると、野枝さんと宗一と云ふ子が、道伴れになつた事も、僕に取つては大變殘酷だと云ふよりは、殉死者と云ふやうな美しい感じを與へられてならない。そしてあの殺された子が、マコちやんでなくして、宗一と云ふ子だつたことも。宗一といふ子には氣の毒だが、ほんとの親子三人といふよりも生々しくない感傷に誘ひ入れて、丁度いゝと云つてもいゝ。

今、僕の心の奥にだけある、アナルシスのお宮には、あの、淺黑い額に巨きな眼を剝いた、併し訥る時こ笑ふ時こは、眠るやうに善良さを示す、ずつこ以前のやうに頤髯は矢つ張り在る筒つぽ襦袍の像の左右に、髮を無雜作に束ねた婦人こ、可哀ざかりの小供こが、使徒こか供奉神こ云つた形で、安置せられてある。

そして、吾が親愛なる和田久君を、誰よりもその堂守にしてやらう。

私は恐らく日夕、此のお宮の扉を開いて、拜んだり、賽錢を上げたりする事は、なか〳〵しないであらう。が、そのお宮の在處だけは、吾らが桂の杜蔭の何處かにあるのを知つてゐる。

頃日芥川龍之介が來て云つた。君、大杉は相手を、はつきり云へば軍人を、誰よりも尊敬してゐた爲に殺されたのだね。こ——まさか、自分を殺すやうな事は、如何に何でも爲し得る所でない、こ、甘く見縊つてゐたこ云ふよりは、相手を尊敬して殺す氣づかひはないこ思つてゐたので、ムザ〳〵あゝ云ふ目に會つたこ云ふのである。——決して一理ない譯ではない。

相手を尊敬するこ云ふのは、云ふ迄もなく美德である。こ、同時に、相手に廻すならば、相手の底の底までを知つて、警戒するのは道德以上に必要である。大杉君は其必要事を忘れたのだ。是は無政府主義者の場合のみを云つてゐるのではない。が一面大杉はほんこに飛んで火に入る夏の蟲、こ云ふ古い文句を思ひ出させないでもない。

私は、彼の書いたものに依つて、如何に冷酷に、今の露西亞のソヴィエット政府が、無政府主義者たちを、所謂「壁に押しつけた」かを聞かされた。そして如何にかのマノフ無政府主義將軍が、今其名を忘れたが、立會演說（？）の相手の領袖を演壇から射殺したかさう云ふ殘酷な場面を度々聞かされた。そして今は、彼自身にさう云ふ魔手の追つてゐるのを知らないこは。

殺された責の一半は、どうも大杉君の方にもある。

私は、此處に大杉君この、たゞ私交的な追憶を、鵠沼東屋に於けるたゞ何でもない、主義も藝術もない交りの、慕しい追憶を書かうこ思つて筆を取つだ。が、それを書き出す前に、何だかついこんな事を書き出して了つた。そして何だかもうチクハグで、此追憶は書かず又の日に取つて置かうこ思ふ。

思想の上では、私は昔、松岡こ一緒に居た時分、彼れの「近代思想」の愛讀者だつたに過ぎない。そしてその昔の第一項「近

代思想」を、殆んど逐號綴めた合本を、押入の奥に藏してゐたそして又更に彼らが、兩三年前に出した時の合本は、朝鮮人某から五圓で賣りつけられて持つてゐた。その話をいつか江口が彼にした。と大杉君はいたく珍しがつて、彼の許には一册もないからと云つて、強ゐて所望して持ち去つた。あの「近代思想はどうしただらう。此の「ブルヂョア文士」の手から、幸ひにも元の古巣へ戻つた、あの「近代思想」はどうなつたであらう

もう一つ。結論ではないが、大杉君の存在は、善惡とも、彼の一等俳優な所にある。一芝居打つところにある。大見得を切る事そこが惡いところでもあり、いゝ所でもあつた。大見得を切つて幼年校を飛出し、大見得を切つて神近氏に刺され、大見得を切つて佛蘭西に行き、最後に大見得を切つて、井戸の中へ放り込まれた形である。

人々は彼の芝居の、最後の幕の下りたのを、劇場が火事だつた爲に知らずにゐた。が、彼は矢つ張り其間にも、一等俳優たるの貫目を以て、ぐつと首つ玉を抑へられる、其見得よろしく演技を終了してゐたのだ。

其代りどうだ、それと知つた後の賞否の喝采は、

[illegible]

が、芝居としても近來面白いものゝ一つに違ひなからうと、歸る途々考へた事だ。

終始、大杉君は一等俳優に違ひなかつた。

返事を書く郵便局

―學生連の罹災者情報事業―

穗積重遠

一　東京罹災者情報局の成立

私の名で此事業の報告をするのは僭越と思ふ。此事業を考案し組織し統率したのは末弘君。其考案を實現し、其組織を活躍させ、流石は末弘君の統率だと云はせたのは學生達。私は唯だ一個の手傳人に過ぎなかつたのだが、其手傳の最終部分として此報告を執筆した。大震災史の一頁として誰かに書いて置いて貰ひたい事柄故、誰彼と云はずに記錄係を勸めたのである。

此事業――『東京罹災者情報局』の仕事――は、東京帝大の學生有志を中心とした罹災救護事業の一部である。今回の大事變に面しての帝大學生團の活動については、末弘君が「改造」の十月號に書いて居り、情報局の成り立ちもそこに明かにされて居る故、重ねて詳しくは繰返さぬが、地方と東京との交通困難通信杜絕の際東京在住者の情報を地方の關係者に通達する機關が必要だと云ふことを末弘君が政府の救護事務局に建議し、成程必要だらうがこちらでも手廻り兼ねる、それでは學生連で引受けませうと云ふいきさつで、「東京罹災者情報局」と云ふ役所だか役所でないかエタイの知れないものゝ看板が、學生本部――實は運動場の角の巡視詰所――に掲げられたのである。

二　回答の準備

情報局の設置が決定されたのは九月十一日だつた。十二日には其設置を全國各地方の新聞に廣告し停車場其他に掲示すべく飛行機が飛んだ。十五日にはもう問合せの第一便が到着した。そこで愈々情報局の活動が開始された。

併し學生達は問合せの手紙が來るまで手を空しくして安閑と

待つては居なかつた。何千何萬と豫期される問合せの一つ一つについて、それが來てから個別的に捜し廻ることは到底出來さうもない。出來るだけは個別的捜索をする積りだが、それにしても其基礎たるべき一般的調査を要する。そこで學生達は既に情報局設置の決定前から、餘燼まだをさまらぬ燒野原を、或は日頃鍛へた鐵脚で、或は得意の――又は俄仕込のあぶなかしい――自轉車で、或はボロ自動車に山盛りになつて、縱横無盡に驅け廻つた。

驅け廻つて彼等は何を求めたか。先づ第一には火災に罹つた場所と免かれた場所との境界を明確にすることである。市中で賣つて居る地圖などは固より當にならない。警察の調査も發表されて居るが、何區何町何番地燒失と云ふ樣な文字上の表示では、充分正確な所は分らない。全區燒失と云はれる區でも、完全に燒け殘つた建物がないではない。例へば日本橋區では土州橋際のモスリン會社のビルディングが完全に殘つた。あの樣な鐵筋コンクリートの大建築が殘つたのは或は寧ろ當然かも知れず、又誰にも氣の附くことだが、更に又木造家屋の孤立的燒殘りがないとは云へぬ 例へば外濠電車で水道橋元町間を通る人は、小此木病院の燒跡の奥の崖下に木造の一軒家が燒け殘つて居る奇蹟を見る。それ故先づ燒野原の中のオアシスを見附け出して地圖に記號(しるし)を附けねばならぬ。更にもう少し大きな燒殘りの場所がある。例へば淺草十二階下の新谷町十六、十七兩番地が殘つて居る。又向柳原一丁目二番地内（松浦邸附近）の約九十戸が殘つて居る。これ等については燒殘つた一軒々々の名前まで調べて來た。所が問合せ中に丁度此二つの場所に關するものがあつたので、當然燒けたものと思つて居たらしい問合せ人に對して、人は勿論家までも無事と云ふ吉報をすることが出來たのは、驅廻り甲斐のあることであつた。次に面倒だつたのが燒け止り線」の實地踏査である。丁度海岸線の測量と云つた樣な具合に、燒失區域と殘存區域との境界に沿つて、數組の實地踏査隊が全部實測した。其ラインが想像以上にジグザグだつたので其延長凡そ何里かの見當も附かない。斯した實測の結果は、一方では一萬分一の地圖に精密に彩色して示され、他方では文字による詳細な記錄になつた。此地圖と記錄とはやがて何かの方法で公表したいものと思つて居る。これで何區何町何番地の何某宅はと云ふ問合せの來た場合に、燒失せり又は燒失せずと云ふ返事を書ける準備が出來た。尤もこれが實際想像以上にむづかしい調査だつたので、場所によつては數回の踏査を繰返して段々と正確に近づいた次第故、最初の中の回答には遺憾ながら多少の間違があつたかも知れない。右の燒跡調べに從事した學

生中特に熱心なA君B君兩人があつて、あつぱれ「地圖君」と呼ばれる程の燒跡通になり濟まし、「オイ君何區何町は」と尋ねると「あすこは何丁目何番地まで燒けたがネ、燒け止りの何番地は二軒あつて、紙屋が燒けて金物屋が殘つたぜ」などと、聲に應じて答へ得る樣になつた。

第二には燒けない場所の潰家調べである、これは燒失區域の踏査より更に困難で結局十分な事は出來なかつたが、それでも下谷本所兩區の燒殘り區域などは詳細に實地踏査が行はれた。

第三には死傷者調べである。學生達は先づ各區役所隣接町村役場及び各警察署を廻つて、各管內の死亡者の氏名原住所を調べ、それを又何回も繰返して追補した。更にあらゆる病院及び收容所を歷訪して、收容されて居る傷病者の氏名住所を書取り、これ亦數回繰返して增加と移動とを補正した。この死傷者の氏名は當然に萬を以て算へることになつたが、此氏名と死傷病の別と死んだ場所又は收容されて居る場所とを細長く薄いカードに取り、其原住所に從つて先づ十五區と市外とに大別し、更にそれを町村名によつて分類して番地順に排列し、其町村名のABC順に貼り込んで、十六組(多くの區及び市外の分は各數册)の死傷者名簿が出來た。而して其各町村の項に前記燒失番地及び倒潰家屋が書き込まれたものが、我々の回答用原簿になつたのである。此君等を芸名の眼にせずに百名手を跨畢にしたのが成功だつたことは、實際使つて見て明白になつた。なほ死傷者については前記區役所や警察署の調べの外に、警視廳鐵道省其他の諸官廳・砲兵工廠、東京電氣、博文館等の大工場、女子職業學校其他の學校等の職員從業者生徒等の死傷を直接に問合せてそれぞれのリストを作つた。これで地方から何區何町何番地の何某又は何工場の誰と云つて問合せて來たときに死亡したとか傷病の爲めに何處に收容されて居るとか、又は今まで判明した死傷者中にないと云ふ返事の出來る準備が出來た。尤も傷病者については一通り遺漏のないことを期し得るが、死亡者に至つては今だに全部は判明しない——即ち死體が分らず又は死體の氏名が分らないものが多數ある——こと故、死傷者名簿中にないと云ふことが必しも生きて居ると云ふことにならないのは後にも述べる通りであるが、其點に於て最も不安心な本所區の死亡者氏名も段々と追加され、又新吉原の死亡者などはこんなにも死んだのかと驚く計り澤山に記錄された。

第四には迷子である。これは警視廳及び市役所の調べを基礎として各收容所を歷訪し、「迷子カード」が作成された。こゝにも亦迷子捜しに特に熱心なO君があつて、前記「地圖君」と並んで「迷子係」と呼ばれ、「花チヤン」は福田會、「キーチヤン」は青山女

學院と詳しいものだ。

第五は立退先である。立退先と云ふにも二種類ある。一つは當座の避難所で、例へば上野山内へ小屋掛したとか、大學の建物内に收容されたと云ふ類である。此方の調査は最初から著手されて居た所で、大學構内は勿論上野を始め下谷本郷兩區内田端飛鳥山千住方面までの學校寺院等の收容者を詳細に書き上げた。他の各區は市政調査會で調査され、其カードを後にはこちらに引繼いだ故、其方の調べは先づ完全に附いたと云つてよいが、これは當座の話なのだから、それだけでは勿論足りない。そこで第二段としては半永久的落着き場所の意味の立退先を調べねばならぬ。卽ち最初から親類友人等の家に立退いたのもあらう。一旦收容所にはいつてそれから移つたのもあらう。新たに郊外等に居を定めたのもあらう。地方を指して退京してしまつたのもあらう。或は燒跡に舞ひ戻つてバラツク住居してゐるのもあらう。これ等を充分に調べなくては地方からの問合せに滿足を與へることが出來ないのだが、此調べが又頗るむつかしい。燒跡へ行つて立札を見たらと云ふ人もあらうが、個々の場合の其手數は厭はないとしても、一般的にそれを調べることは四十萬戸と云ふ燒失家屋に對して我々の方では第一人手が足りず、又平生此邊の地理家並を熟知して居る人でなくては出來ない仕事だ。それ故これは郵便局の調査を待つことにしたが、各郵便局で集配人諸君の骨折で段々と立退先名簿が出來たのでそれを借りて寫し取つた。借りると云つてもこつちへ持つて來る譯に行かぬのみならず、晝間は向ふが使ふ故、夜間に出掛けて行つて寫すのである。日本橋區擔任の學生達の如きは、四五人で連夜出かけ六晩徹夜して約二萬の立退先をＡＢＣ順に直しつゝ寫し取り、劇務に慣れた郵便局員をして其ガンバリさ加減を驚歎させたと云ふ。更に又市外杉並村の好意で、同村へ立退いた人々のリストを送つて呉れた故、それをも原簿に繰入れたこれでまだまだ不完全ながら立退先についての材料も出來た譯だが、なほ其外に知名人士、銀行會社、新聞社出版業者、辯護士、公證人、醫師等のそれぞれの立退先リストが揃へられた。知名の士の安否や銀行會社の立退先などは、新聞にも出るから宜からうではないか、と云ふ人もあつたが、それが實はさうでなかつた。所謂知名の人の家の女中書生、銀行會社の給仕職工等について地方の親兄弟達が心配しての問合せが多數にあつたので、これ等のリストが中々役に立つた。

扨て以上が「調査係」と「整理係」との仕事で、これで兎も角も回答準備が出來た。サーこれから回答、と云ふことになりさうだが、併し實際はさうではなかつたので、一方で豫備的調査を

最終まで續けつゝ他方では早速に回答に取かゝらざるを得なかつた故、初期の回答は拙速、後期の分は巧遲、と云ふことになる傾きは免がれなかつた。

三　返事を書く郵便局

地方からの問合せが初めて來たのは前記の通り九月十五日であつた。其日はタッタ四十三通だつたが、其翌日から忽ち一日何百何千と云ふ問合せ狀が殺到したことは、後に掲げる統計に示す通りである。當時地方では東京行の郵便物を受附けなかつたのであるが、情報局宛の郵便は別册じ急送したのである。それが本郷局から一日二回三回と大束で擔ぎ込まれるのであるから、學生本部は忽ち正月の郵便局見た樣な騷ぎになつてしまつた。正月の郵便局は郵便物の數はモット多からうが、仕事は比較的簡單かも知れない。我々のは「返事を書く郵便局」なのだから大騷ぎである。セッセと働きながら學生達が語り合つた。『此經驗で此正月は「年賀狀回答株式會社」つて奴を遣らうぜ。尤も儲け仕事となつちやあみんな嘸ぞサボルだらうな。』

郵便が着くと、「仕分係」が先づ其數を算へて「統計係」に報告し、次に其內容を一讀しつゝ問合せの目的地に應じて十五區及び市外に區分し、「仕分け箱」に入れる。「仕分け箱」實は巡視諸君の整理を完成したのである。其仕分け箱から「回答係」がそれぞれ自分達の相當の區域の分を持ち出して行つて、原簿其他の資料と首引しつゝ返事を書く。特に其以上の個別調査が望ましく且可能な場合には、「回答係」忽ち「調査係」と早變りして外へ驅け出す。出來上つた返書は問合せ狀と離さずに「檢閱係」の机上に積まれ、問合せに對して洩れなく且適當に答へられて居るか否か、宛名が落ちては居ぬか等が檢査された上で、問合せと返事とが分離され、返事の內容によつて後述の四種類に分類される。(檢閱係を勤めたD君の此事業についての感想に曰く、『往復はがきを引裂くのが頗る技巧を要するつてことを初めて知つた。』) 最後に「統計係」が各分類の數を計算記錄し、情報局のスタンプを捺して「發信函」に入れる。それを本鄉郵便局の集配人が來ては持つて行つて、即座に地方に發送する。ザット斯う云ふ順序だつた。

私は此機會に、さなきだに忙がしかつたであらう此際餘計な負擔をおかけしたことを御氣の毒に思ひつゝ、本鄉郵便局に感謝したい。殊に重い郵便物を折返し持ち運んだ集配人諸君に感謝したい。其中最も頻繁に往來した一人は朝鮮人であつた。私は此鮮人集配人君が來る每に何となく顏向けがならない樣な氣持がした。そして情報局を利用した人々に、諸君からの又諸君

への通信が誰の手で、取次がれたかを知つて貰ひたいと思つた。

四　役所らしくない役所

前項の様に順序立てゝ云ふと馬鹿に體裁が好いが、實はそんなに秩序整然たるものではなかつた。全體情報局其ものが要領を得ないものだ。『東京罹災者情報局の性質如何』と云ふ試驗問題を出したら、如何な行政法の大家も生も參るであらう。官に非ず公に非ず私に非ず、要するにエタイが知れない。局と云ふからマア役所だらうと云ふ位の所だが、役所にしても隨分役所らしからぬ役所だ。局長は誰か。勿論私ではない。末弘君かと思つたら、御當人がさうぢやない受附兼庶務係だと云ふ。結局命令者はないのだ。それなら共和政治かと云ふと、最初から會議なんて云ふ閑事業は一度も遣つたことがない。前項の様に調査係整理係仕分係回答係檢閲係統計係などゝ並べると、如何にも計畫的組織的な様だが、實は初めからそれぞれの分課を立てゝ係長係員を任命した譯ではないので、仕事の進行と共に自然とさう云ふ分業が發達し、各人の分擔がいつとはなしにきまつたのだ。回答係の中では更に十五區及び市外の分擔者が出來て、是れに各區と市外とには各數人づゝかゝつたが、其中の一人づゝが自然に「區長さん」と立てられ、本所區長E君下谷區長F君などは特に命名があつた。併し斯う分擔がきまつたと云つた所でこれ亦確定ではないので、『アーすわりくたびれた、少し外勤でもして來るかな』などゝ勝手に自己辭令を出す。職務の性質上十年一日の如くならざるを得ざらしめられたのは、統計係のG君位なものだ。更に遡つては、局員が何人でそれが誰々かと云ふことすらが分つて居ない。局員の名簿なぞは態と作らなかつた。出勤を拘束する氣味になるといけないからである。皆勤者も一日だけ來た人も同じ事だ。否來なかつた學友達も同じだ。これは我々皆の仕事だ、と學生達は云つた。此報告書に今までA君B君C君など、書いたのも、單に符號に過ぎないので、其人の姓の頭字ではない。併し兎も角實際働いた人が學生本部全體で二百名、情報局が百人位と思ふ。其中には工學部の佐々木助教授其他學士諸君も數名あり、帝大生が過半數であることも勿論だが、一高生が約四十名加はつた。一高連は殊に情報局で働いたが、よく食ふので食糧係の脅威であつた。一高諸君に云はせると、『食らはざる者は働かず』ださうである。更に東洋大學から五六名、外國語學校から一名の來援があつたのを感謝する。一高連は固より兄弟分だが、他校の諸君も帝大生とスッカリまざつてしまつて、どれがどれやら分らなくなつたなどは愉

快なことであつた。

執務時間が又不規則だ。大體八時から五時までと云ふことになつて居たが、八時前から來て居る人もあれば、十時十一時に「お早う」などゝ出て來る人もある。さうかと思ふと自分の擔當が濟めばサッサツと歸つてしまうが、片附かとなつたらいつまででもガン張つて居る。中には三食共炊出し飯を食つて巡視詰所に泊り込んだ連中も毎夜少くも五六人づゝあつた。學生の中には燒出されの人もあつた。それには拘らずと月並に感心した所、立退先に居候をして居るよりのんきでいゝのださうだ。

五　受信發信數と回答の種類

こゝで一つ受信發信の日次統計を掲げやう。

	受信	發信
九月十五日	四三	一六
十六日	五七五	九九
十七日	一四〇七	四三三
十八日	三六四二	四九一
十九日	六六三六	一五八〇
二十日	一六七二	二一五七
二十一日	二二五〇	二一三七
二十二日	一九六七	二八六二
二十三日	一八一〇	一八四三
二十四日	二〇〇八	二一一八
二十五日	九〇八	一九三七
二十六日	一一四四	二一一九
二十七日	二五九四	二四三六
二十八日	五八一	一六二五
二十九日	一〇三七	二四二二
三十日	六二八	二六一五
十月一日	二四九	一七五四
二日	二九五	二七三一
三日	二七五	七四〇
四日	九一五	五八四
五日	四六七	五九六
六日	四四二	五三〇
七日	一七六	五〇六
八日	三一八	二八〇
九日	一一八	三六〇
十日	一五三	三五〇
十一日	二一六	五一八
十二日	四一	一二六
十三日	八一	一七一
十四日	四五	一四八
十五日	一二九	六七
十六日	一四〇	一二五
十七日	三二	一一三
十八日	五二	二三八

十九日	四二	九五
合計	三五〇八八	三六九三一

即ち受信總數三萬五千八十八通、發信總數三萬六千九百三十一通、一日の受信數のレコードが九月十九日の六千六百三十六通、發信數のレコードが九月二十二日の二千八百六十二通であつた。先づ此邊が頂上で、十月になつてからグツト減つた。此報告書の執筆は九月十九日で、統計はそこで打切つてある。まだボツボツ來るだらうがもう大した增加はあるまい。而して此統計について一つ說明を要するのは、受信數よりも發信數 方が遙かに多いことである。これは一封の手紙で數名乃至數十名の安否を問合せて來たのに對して、こちらでは別々のはがき等で返事をしたのがかなり澤山あつたからである。併し又數名乃至數十名を一封の手紙で返事したのもあり、一つのはがきに二名三名は澤山あつた故、取扱件數は發信數よりも更に多い勘定であるが、其數は計算する暇がなかつた。

この三萬五千の問合せはどの地方から來たらうか。最初は其統計を取つて見る考へだつたが、どうしてそんな悠長な眞似をして居る所ではなかつた。併し大阪からが一番多かつたことは確かで、其他は臺灣から樺太まで、全く日本全國から來たと云つてよい。朝鮮からも澤山來たが、其中には在京朝鮮人の安否を問合せたのも多かつた。これは我々の頗る心を傷ましめた所で、特に精査して囘答することを努めた更に外國からも來た。シベリア內地からも來たし香港からも來たが、特に居留民團で取纏めた多數の問合をよこしたのはハルピンと天津、又サンフランシスコからは在留邦人代表慰問使が尋ね先のリストを持つて、來て我々が調べて上げた結果を直ぐに打電した。

然らばこちらから發信の內容は如何。囘答の種類別にして算へて見ると左の如くになる。

積極囘答	一六六一七
消極囘答	一八七〇三
取次	一三九五
不能囘答	一〇五六

此分類の意味は說明を要する。「積極囘答」と云ふのは、正確又は正確に近い返事をした分である。一番正確なのは其一つの問合せについて特に實地に行つて調べて來たり又は更に心當りに問合せて返事を得たもので、これは間違ひつこがない。地方の人々はすべての問合せに對してさう云ふ方法が採られるものと誤解したらしい。それは至極尤もなことで、出來ることならさうしたかつたのだが、何分にもこの大東京に散點する幾萬の尋ね先を全部驅廻ることは、百や二百の局員では不可能であつ

た。併し出來るだけは此方法を採つたのであつた。骨折甲斐ある結果を擧げたこと屢々であつた。例へば郷里では殆ど死んだものと信じて居た人が實は地震前に名古屋に移つて居たのを確かめたり、老人夫婦が置いてけぼりにされて燒跡にさまよつて居たのを探し出したり、迷子を見附け出して知らせたり、以前からの病人が地震後却つて快方に向つてもうあるける樣になつたのを見て來て報告したりした。次には問題の人又は其家族が死亡したこと又は負傷或は病氣で病院等に收容されて居ることが前述の原簿で分つた場合がある。更に又燒出された人の立退先が分つた場合も、立派な積極回答である。最後に家が火災に罹らぬ場所に在つて、其人の名が死傷者名簿中になければ、十の九まで大丈夫と云つてよからうから、其場合をも積極回答中に算へた。通信杜絶と地方新聞の誇大な報道との爲めに、地方の人々は東京の山手方面乃至市外まで全滅した樣に考へて非常な心配をした樣であるから、此種の回答も相當の效果があつたと思ふ。其他人や家の安否以外の問合せ例へば諸學校の開講期などは平凡な方で、内縁の妻を入籍させたいが戸籍簿燒失の際どうしたらよいか、今月質屋に入れる筈の金が拂へぬが質物が流れはせぬか、などゝ云ふ色々の奇問があつたが、これ等も管轄違ひだなどゝ云はずに出來るだけの答をした。その答の出來

たものも積極回答中に加へた。

「消極回答」と云ふのは、其場所は燒けて居るが其人の名は死傷者名簿中にない、と云ふだけの返事をした分がある。問合せの過半に對して斯う云ふ返事をせねばならなかつたことは、兼て豫期したことであり又已むを得なかつたことながら、私達の如何にも心苦しく思つた所である。死傷者名簿なるものが網羅的なものならば、此答が其儘「積極回答」なのだが、網羅的な死傷者名簿を作ることは今の所誰にも不能である。殊に本所深川に住んで居た人々については、死傷者名簿にないからと云つて安心ならないことは勿論である。それ故此所謂「消極回答」は結局問合せ人の心配を延長するだけのことになつてしまつたが、併しまだまだ斷念なさるなと云ふ慰めにもなつたかも知れぬ。問合せ人中には、一方に此回答に對する不滿を云つてよこされた人があると同時に、此回答を無事の吉報と取つて大喜びで禮をよこされた人もあつて、そのいづれに對しても我々心から恐縮して居る。而して我々が已むを得ずにした「死傷者名簿中になし」と云ふすべての回答がやがて來るべき無事の吉報の前觸れであらんことを祈つて已まぬ。

なほ「此消極回答」には「試みに元の番地宛で手紙を出してごらんなさい」など云ふ意味を附け加へた。地方では初めから燒

跡へ手紙を出しても駄目だと極め込んで居た人もあるらしく、こちらからの注意に對しても其意味を云つて來られた人がある。至極尤もなことであるが、こちらの考へでは、現在立退先が分らずとも其中段々立退先が分つて來れば郵便局で回送して吳れるだらうし、或は本人が燒跡へ歸つて來てバラック住居でも始めるかも知れないから、此際あらゆる手段を採るがよいと云ふ積りであつた。此勸告に從つて出された手紙が「立退先不明」の附箋で戻されたのも固より澤山あらうが、成程元番地に手紙を出したら先方に屆いて返事があつたと云ふ禮狀も來た。

「取次」と云ふのは豫期しなかつた仕事である。地方の郵便局が東京行の郵便物を受附けなかつたことが如何に地方人を焦慮させたかは、今度の仕事をして見てよく分つたが、其中に頭の好い人達があつて、情報局を手紙の取次に利用することを發明した。卽ち情報局宛の封筒にも一つ手紙を封入して來て、これを東京で投函して吳れ又は屆けて吳れと云ふのである。我々は勿論其依賴に應じた 又安否問合せの序にもし無事で居たら早く歸京する樣に云つて吳れと云ふ樣な傳言もあつて、出來得る限りそれを果した。其數積つて一千四百となつたのである。

「回答不能」と云ふのは、前記の所謂「消極回答」も出來なかつた分である。併し其大部分は橫濱市其他神奈川縣下在住者の安否問合せであつて、これは當方の力及ばぬ處で、鎌倉橫須賀の死亡者だけは調べて來たから其範圍の回答はしたが、其以外は氣の毒ながら回答不能ならざるを得なかつた。橫濱にも情報局が出來ればよかつたと遺憾に思ふ。東京市及び隣接町村在住者については、前記の通り少くも消極回答は出來た筈だが、唯だ其人の地震當時の住所が書いてなかつた爲めに調査の手がゝりが附かなかつたのがある。一つ氣の毒だつたのは、折角電報で尋ねて來たのに、發信人が「コオ ハ、」（高知母）とあるので返信出來なかつた。

回答の分類的計數は以上の通りであるが、こゝに再び言ひ譯をせねばならぬのは、此數が返書の數で取扱事件の數でないことである。前記の通り一通の返書中に二件以上數十件の回答を書いたのがある故、實際の回答數は積極消極共遙に前記の數以上なのである。而して一通の中に一つでも積極回答があつたものは積極と分類した故、積極消極の實際の割合は前記よりも少し積極の方が低からうと思ふ。實は件數統計を取らなくては本當でなかつたのだが、統計を取るのが、目的でないのだから知りつゝ便宜に從つた。それ故正確な事は云へないが、全數の少くも四割は正確な回答が出來たと見て間違なからう。

なほ情報局設置前から働いて居た「尋ね人係」は、「情報局口頭

親族友人を捜索する人々が直接に受附けてこちらの材料で調査し、それで分らなければ更に捜索の手がゝりを助言援助するのであつて、銘々が散々捜して分らないのを持つて來るのだから地方からの問合せに答へるよりも更に困難な仕事で、赤兒をおぶつて御亭主を捜して居るおかみさんこゝまで來て分らない樣ではと泣き出されて貰ひ泣きする樣なことも度々あつたが、時には又『ア、確かにこれだぞ。トテモ素敵だ。』と係の學生が我が事の樣に飛上つて喜ぶ快事もあつた。父親に娘の行方を敎へた處、數日たつて其父親が禮に來て、今少しで女工に賣られさうになつて居たのを取止めたと喜んで話したときには、これ一つだけでも澤山だと皆が喜んだ。勿論好成績はこれ一つだけではなかつたのであつて、幾件受附けて其中いくつ見附かつたと云ふ統計を取つて置くとよかつたのだが、十月初めまでの約三十日間は毎日八時頃から五時頃まで引切りなしに詰め掛けられた忙がしさに、統計を取るなどゝ云ふ考も出なかつた。

六　口語體の力強さ

問合せの書面中には其性質上痛切なものが多かつた。不眞面目な書面が澤山來て學生達が悩まされて居ると某新聞に出て居たのは二通だけであつた。反對に夫婦親子兄弟姉妹相思ひ相哀しむ至情の溢れた名文が多かつた。私は敢て名文と云ふ。當字も多い、テニヲハも合はぬ、文法は固より滅茶、然かも云はんと欲する所を悉して惻々として人を動かすのであるから、名文に相違ない。形式的名文でない實質的名文である。殊に私は今度の仕事で、口語體の力強さを更に深く味つた。『右及御依賴候也』と字格正しく書いて御役所の印の据はつて居るのよりも――さう云ふのをも決して粗末に扱つた譯ではないが――『どうぞ〳〵おねがひ申ます』と書いたのゝ方が餘計に學生達の心を動かした。問合せの字と文章とがたどたどしければたどたどしい程一生懸命になつたのも、學生らしい所と微笑んで頂きたい。假名書のが三通あつた。いづれも發信人は大人名前だが、小學生に口授して書かせたらしい。細かに句讀が附けてあつて少しも讀み惡くゝない。ローマ字や假名書きが讀み惡くいなどゝ云ふ反對論は、畢竟文章と書き方とを硏究しないでの話と思ふ。

假名書き問合せ狀の一つは斯う云ふのであつた。

サツソクノコトデアリマスガ〇本年七月七日ニ〇ワガ〇トチヲ〇タチ〇同月九日ニ〇ツキ〇ソノゴサイサイ〇テガミヲ〇クレマシタガ〇九月一日ノ災害ニ〇カヽリイマニ〇ナンノ〇

ヘンジモ○アリマセン○イキテオルヤラ○シンデオルヤラ○ワカリマセン○イク○トコロワ○東京市深川區西町三十六番地×××××様ノ○レンヅ會社內ニ居リマシタ○ソノ小供○ウマレタ○明治四十四年四月三日生父×××××ノ倅××ト云フ者デアリマス
ナニトゾ○ハハワ○シンパイシテ○イマワ○ランシンシテ○チチワ○バンニ○コマリテ○オリマス○ワカルコトナラ○一日モ○ハヤクタノミマス○ナニトゾ○イチド○カヘシテクダサレ○オネガイ○イタシマス

『こいつはどうしても捜すぞ』と、學生達は此手紙を握つて深川の燒跡指して驅け出した。そしてとう／＼其少年の無事を突止めて來た。も一つのは固有名詞以外全部假名で、警官の母の手紙だつたが、これも其警官に遇つて其手紙を示し、こんなに心配して居られるのだから直ぐ電報でも打ち給へと勸めた。

此二つの例の樣に、親が子を探すのに殊に哀切なのが多かつた。『親故に迷うては出ぬ物狂ひ』と云ふ古川柳に對して、我々息子連苦笑一番せざるを得ない。殊に氣の毒だつたのは、娘を吉原洲崎等に沈めて居る親達からの問合せであつた。其中に、早速樓主に問合せた處そつちに逃歸つて居るのだらうから告訴すると云ふ無情な返事が來たと歎いて來たのがあつた。

一つ困つたのは、支那から在留中華民國人の安否問合せの時文の書面が來たことで、文章規範が讀めて現在の支那新聞が讀めない我國漢學教育の皮肉をスッカリ味はせられた。併しどうやら判讀に及んで回答係が返事を漢文で書いたが、其漢文たるや到底中華民國諸君に御判讀を願へさうもない迷文だつた故、檢閲係が私に日本口語文に飜譯して出した。

更に閉口したのは盲人から點字で問合せが來たことである。これには一通來たロシア語の手紙でさへどうやら片附けた流石の博言學者連も忽ち兜を脫いで、盲學校に廻して返事をして貰つた。

こちらからの返事も、勿論書く人によつて色々だつたが、大部分口語體だつた。而し同じ死亡通知や回答不能の斷りでも『何々氏御夫婦は不幸にも死亡されました。局員一同心から御悔み申上ます』『御心痛御察し致しますが、何分横濱方面までは手廻り兼ます故、御氣の毒樣ながら御答が出來ません』など〻「御役所らし可らず」書く樣に心がけた。否特に心がけるまでもなくさうせざるを得なかつたのである。死亡の通知を書かねばならぬときなどは『此はがきが向うへ着いた時の光景が想像されるナー』と云ひ合つて、元氣な學生達が面を曇らせた。

四　律氣な人々

今回の大事變によつて人間の弱點も澤山に暴露されたが、さう云ふ醜方面に目と耳とを汚す暇もない程、哀れにも美しい人情の眞實裡に此五十日を沒頭し得た我々は仕合せであつた。何萬何千の問合せいづれも人間相愛のあらはれならざるはなしと云つてよいが、其中には又親を思ひ子を哀しむ普通の事例と趣を異にした問合せで、『世の中には律氣な人もあるものだナー』と感心させられたのがある、例へば或地方の商人が東京から或機械を買つた。所が丁度地震間際に附屬品だけが到着して本機械はまだ屆かない。併し全部發送したことゝ思ふし、此際定めし金に不自由して居ることだらうと思ふから、早速代金全部を支拂ひたい故、賣主の立退先を調べて呉れと云ふのがあつた。又關係者の名は出さぬが、斯う云ふ問合せが來た。

私五年前重病の際赤貧洗ふ如き折柄左記の者の爲に莫大な同情金を受けて居ます此の際利息を十分に附けて返金致し度御座いますごをか所在御捜査を願上ます

其相手は深川の人なので、學生達が直ぐに出かけて行つて方方捜索したが、とう／＼安否及び立退先が分らなかつた。どうか其人が無事で問合せ人の美しい志が遂げられる樣にと祈つて居る。最後に少し長いが小宮うたと云ふ人の手紙の全文を掲げたい。其人の律氣さの爲めのみならず、其文章が私の所謂「實質的名文」で、一篇の遭難記錄としても値打があると思ふからである。此手紙は元來東京日々新聞社へ宛てたもの故、其積りで讀んで頂きたい。

拜啓此度は大へんニ御いそがしき折からか樣なる義お願申上まして何共相濟ませぬ何卒お聞屆被下度願上候私は深川門前仲町六番地ニ住居致居り候者ニ候得共一日ノ地しんおこりました節八月廿七日夜中より急性モウテウ炎ニかゝりました當年九才ニなります子供なうごかせバモウテウハレツスルト醫師より申され候間宅之ツブレマセヌな幸ニ宅之中に居りました處洲崎より火事始まり夫より東仲町なる伊勢半よりもゝへ出し八幡宮不動樣と段々やけて參りますので宅ニも居りかね病人の子供なふとんでにないまして越中島へかゝつて居ります黑舟橋へにげて參りまして主人捨二郎ハ子供兩人之衣がへ少々佛だんトふとん四五枚よう／＼持出し候節ハ最早ト書館もやけまして橋ニも居られませず石川島の手前なる商船學校へにげ入申ました處風上故少し斗安心致しまして病人な芝原の上へねかせ居ります內夜になりまして永代橋方ニ當り大きなおとが致ますと驚て居ります內學校之向がハナルリウマツショウより火が出まして其時は風が西風にかはりましたので學校へ火の子がふつて參りますのでこゝにも居られず據なく相生橋之中へにげて參りました其時はせつかくだしましたふとんも子供之衣がえも持てませぬので十二才ニなります娘ニ二三枚と先祖之おいはいなせなはせ私ハ病人之子供なおぶい氷袋と氷まくらと子供のひとへ物五六まい持まして捨二郎は病人ニ困ると存小さきかやかいまきな持ましてよ

うく中の島へ參りますと京橋區の火事より石川島の造舟所へもへうつりまして川の中ニありました三本マストノ舟三ゾウヤケました其ため先之方月島よりノ大なる相生橋へうつりましたので大そうどうニなりまして大勢の人々が右左り火事前後搆で據なく川へは入る人も大勢ありました私親子四人ハ此場で一所ニ死すると覺悟ハ致候得共親として子供だけハたすけたくとても九才之男子をおぶいましては年老いました私ニはとてもにげられませぬのでこんざつの中で病人な主人がおぶいましてかいまきとつゝみな私が持まして親子よびあいくましてようく小なる橋の中程まで參り候時足之下ニはこりやらつゝみやらいろくの物がおちておりますのでなんたびころびまして參ります時衣物ハやぶれるまでもまれましたのではだがぬけてしまいまして夫でもかいまきをはなさすかゝへて居ります內かいまきを大きな男ニふまれましていくらひつぱりましてもとれませぬので困り居候內せなかにおひました子供之衣がへはおちてしまいましたので兩方おとしてしまいますと一枚も衣がへハなしと一生けんめい二人ニふまれながらさがしましてつゝみをしろいようく娘をよび子供をよびまして親子四人橋より商船學校ノやけました入口へ參りました時夜があけかゝりましてようく安心致まして居りますとこんどはリウマツショウノヤケアトヨリ牛が廿も出て參りましたので又々大ソウどう致ましてようく學校之奥の方ニにげ入り中持つて居りますつゝみを見ますと前之とハちがつて居りましたので驚きまして中を見ましたら外とうノ被ましたのと職人の手間帳がありましたのでおとした人ハさぞ困る事と察しまして病人な主人ニ任せかいまきや衣がへノつゝみをさがしに又も相生橋へ參りましてこのつゝみをおとしたお方ハなきかとたづねましてもおとし主は居りませず私之おとしましたかいまきもなく衣がへのつゝみもありませず據なく商舟學校へ歸つて參りまして學校之玄關先之間へ二ばん野宿致しまして居ります處へ私之甥なる者尋ねて參りました夫につれられ舟に二ばん居りまして永代之渡舟之出來ました時ようよう日本橋より上野を廻りまして千住ノ親せきニ參りまして病人の子供を德島縣よりわざく御出張被下ましたお醫師ニかゝりましてようよう全快ニ向ひました處學校ニて悪しき水をのみましたので一家四人みんな病人ニなりましたのでしろいましたつゝみお屆致事が出來ませんので日々心配のみ致して居りました處私も今日ハようくよくなりました上南千住へ參りすれば自動車があるときゝましたので洲崎之警察へお屆ニ參りますつもりで宅を出まして千住元宿交番でお屆致ます日限が病氣のためニおそくなりました五日より千住ニ居ります御證明を願たしと申ました時巡査之申ますニは夫は洲さき迄行ニ及ばぬ千住之警察へ行ざよくはなして屆ける樣親切ニお教へ被下ましたのですぐ千住の警察へ參りました當夜之有樣をよく申上ましてお屆致しました處只今之こんざつ故よく知べる事は出來ぬかも知れぬがケイシテウへ廻して置トお請取被下ました其屆ました外トウハ表が下ふりヲシヤうらハ黑色シユステ二枚分が裁てありまして餘ほど高價の品物と存ますので此品合どうでしておとし主ニかへして遣したく存ます故御紙なり廣告してと存ますがおはづかしけれ共金子がありませぬ故おせはしき處相濟ませぬが日限之おくれました事情お請取被下まして新聞之すみへなりお書入願上度つゝみにありました帳面は大正八年に出來ました物でうらに原と一字有之中の末之紙に深川區東六間堀堀川として有之候故何卒此事情御察し被下ましておとし主へ知れます樣御書入之ほど幾重にも願上候私なり主人なり東六間堀へさがしに參りたくは存ますれど子供兩人は居り其上病後之身とても度々六間堀までは參られませず幸に御紙にておとしぬしが分りますれば此上之お嬉しき事は御座いませぬ故幾重にも御願申上候

九月二十六日

此手紙が日々新聞社からこちらへ廻されて來ると、感激性に富む學生達はソラ行けと許り又も深川指して飛出したが、やがて東六間堀に堀川市太郎と云ふ人のあることと其現在の居所とを突止めて歸つて來た。そこで其堀川氏に來て貰つて遺失品の有無を尋ねた處　勿論色々荷物を捨てたがシツカリした覺がないと云ふ。念の爲め警視廳とも行つて貰ひ、小宮さんにも會はせたが、とう〳〵堀川氏の遺失品ではないと云ふことになつて、小宮さんも我々も失望した。それならば原と云ふ人の遺失品だらうと思ふが、此方は今の所少しの手掛りも附かず、唯だ此記事が緣になつて落し主が分る樣にと祈るのみである。

斯くして學生達は五十日間一心不亂に働いた。何の爲めか、どう云ふ役に立つたか、など〻云ふことを考へるさへ、もう殆ど問合せの來なくなつた今日相變らず火災區域調べや死亡者名簿の補完に熱中して居る彼等に對して失敬かも知れない彼等は此際せずに居られなかつた學生らしい行動に出たのみである。末弘君は「第一義的の活動」だと云つた、私は「人間らしさの發揮」だと評した。すると學生は寧ろ不滿だつた。第一義だの人間的だのと名前を附けるのが既に不純だと云ふ。成程『道ノ常ナルハ名無シ』『無名ハ天地ノ始』である。私は新天地の始とも見るべき此時期に當つて、學生達が勇敢に無名の常道を履んだことを喜ぶ。（十月十九日）



乾坤一新の露西亞文壇

アクメイズム──詩學派──オボヤーズ──左翼未來派──レフ──コンスツルクチウイズム

昇曙夢

今回ロシヤを覗いて、最も驚かされた點は、最近に於けるロシヤ文壇の激變と現在の活動とである。文壇に於ける新しい傾向や流派の勃興とその猛烈な藝術的運動、新しい文學者の輩出とその活動、文藝上の新發見と新研究の發表、出版界の飛躍と文學書の賣行、凡てが豫想以上であつた。然し今日のこの隆盛を見るに至るまでには、革命後僅かな間に非常に深刻な變遷と波瀾とを經なければならなかつた。ロシヤ文學の現勢を語るに當り、先づその直接の導因を爲した過去の情勢に就いて一瞥する必要がある。

ロシヤ文壇は革命後間もなく戰時共產主義の時代(一九一八年――一九二一年)を通過しなければならなかつた。この時代はロシヤ文學に取つては鐵と血の時代であつた。文壇はこの間殆んど痲痺狀態にあつたと言つていゝ、印刷機械の荒廢、自由書籍市場の廢滅 政治的事件の旋風――是等は何人にも落着いて書物のページをめくつて居る餘裕を與へなかつた。凡ての人の注意は生きんがための努力――食糧給與券と給與順番と日常生活の些事とに集中された。特に文壇は哀れにも慘めな存在を續けて行く外に仕樣がなかつた。作家や詩人は作をしても之を印刷する紙も無ければインクも無かつた。クーズミン、ウオロシン、其他の詩人は包み紙に詩を書いて、その肉筆の詩集を愛讀者に賣つて漸やく口を糊してゐた。正しく文壇の中世紀時代であつた。その結果極めて特色的な現象として、ペトログラードでは凡ての文學者が『文學者の家』に集合して、其所で作家は自分の新しい作品を口頭で發表した。モスクヴアでも各種の文

藝カフエーで同じことが行はれた。

この間(一九一九年――一九二〇年)にモスクヷアではセルセニエーウイチ、クシコフ、マリエンゴフ、エセーニンを中心とするイマジニストの一派が盛んに飛躍を試みたが、今ではこの派は既に世間から半ば忘れられて、何等新しいものを與へてゐない。ペトログラードでは詩人グミリヨフとアレクサンドル・ブローグとの努力が目立つて優れてゐた。特にグミリヨフの藝術は驚くべき形式を攝取して、殆んど技巧の極致に達してゐたが、悲しいことには一九二一年帝政派の陰謀に加はつたといふ嫌疑の下に銃殺されて了つた。晩年グミリヨフはアクメイズムの標語の下に殆んど凡ての若い天才的な詩人を自己の身邊に集めて、詩壇の中心勢力を形造つてゐた。グミリヨフの死後是等の弟子達は師の遺志を繼いで、アクメイズムの地盤に立つて、盛んな活動を續けて居る。

アクメイズム(質感派)はシムボリズム(象徴派)に對抗して現れた詩壇の新しい傾向で、その端を帝政時代の末期に發する。既にその當時この派の代表的詩人には、グミリヨフの外、ゴロデーツキイ、ゲオルギイ、イヴアーノフ、アダモーウイチ、マンデリシユタム、アンナ・アフマートヴア、ナルブート等が現れてゐた。その中でもマンデリシユタムとアフマートヴア女史とは忽に頭角を現はして、今日ロシヤ詩壇の二大柱石となつてゐる。アクメイストは新しいアダムのやうに、男性的な强い明るい觀察と若々しい感覺とを以て世界に人生に接觸しようとするもので、その藝術上標榜するプリンシツプは、鑄物のやうに堅いがつしりとした詩、彫刻のやうな、くつきりとした形、嚴密に、きちんと引きしまつた詩の建築術等がその基點になつてゐる。それ故に彼等の詩を讀むと、輪廓の正しい精嚴な鑄像のやうな若くは大理石石像のやうな冷たい感じがする。マンデリシユタムの詩集に『石』又は『新しい石』と題したものがあるが、是れは直接詩其物の特徴を現はした標題である。ゴロデーツキイは言ふた。『今日より詩は音樂的創造と比較さるべきものでなく、建築的創造と比較されなければならぬ。何故なら、詩は建築であるからだ』と。けれどもアクメイストは決して戰鬪的團體ではない。彼等は物の矛盾を無くして平衡を保つことを根本の使命としてゐる。アクメイズムの根柢となつてゐる平衡、堅實、圓熟の觀念は、運動の創始者の標榜といふよりは、寧ろその完成者の標榜すべきものである。彼等は事實トラヂーションを換へない。寧ろトラヂーションの意識的維持者となつてゐる。マンデリシユタムの如きはクラツシツク線を固持して、『クラツシツ

ク文學は革命文學である』と、表明してゐる。が、何にしてもアクメイズムはモダーニズムの最後の言葉には相違ない。文藝上アクメイズムの意義は、何等かの新しいトラヂーションを確立したといふよりも、彼等自身の詩作をシムボリズムの桎梏から救ひ出したといふ點にある。

アフマートヴァ女史とマンデリシユタムとは、前にも言つた通りアクメイズムの到達した最後の理想を代表する二大天才である。彼等はトラヂーションの維持者として、今後新らしい詩人の目標となり教育者となるであらうが、その過程は隱密に行はれるであらう。マンデリシユタムは堅實に自己の道を辿つて居る詩人として、その作品は今の所廣い讀書界を征服して居るマヤコーフスキイの作に比べて、一般の理解とは可なり距離があるやうである。アフマートヴァ女史の名聲は必ずしも新しい大きな運動の創始を意味するものではないが、アクメイストが最初から目指してゐた調和と平衡の理想が、彼女によつて完全に表現されたことを證明してゐる。詩と言葉との調和、リズムと言葉との平衡、是れが彼女の藝術である。將來如何なるエヴオリユーションがアフマートヴァ女史に運命づけられてゐやうと、彼女の詩は最早完成したスタイルのやうに思はれる。之を模することは出來るが之を發達させることは不可能である。要するにアクメイズムは今日の藝術であつて明日の藝術でない。明日の藝術は更に他の傾向に待たなければならぬ。

アクメイズムよりずつと後に現れて、而も今日非常な勢力を以てロシヤ文壇、特に文藝批評界を支配して居る新しい傾向にオポヤーズ（修辭派）がある。然しこの派のことを述べるには、少し遡つてその先驅を爲した詩學派のことを一言しなければならぬ。

まだ世界大戰前のこと、ブリユーソフ、ベールイ、ボブロフ、チユドーフスキイ、グミリヨフ等一團の詩人は、詩のテクニツクに關する研究に沒頭し始めた。リズム、節奏、音律等、つまり詩學（科學的詩學）の科學的研究である。そしてこの一派は從來の教科書式な文學論を非科學的のものとして、速かに撲滅すべきものであると宣告した。この派の急先鋒は言ふまでもなくベールイ（『象徴主義論』）と、ブリユーソフ（論文集）とである。ベールイは、ロシヤの詩の特色的な形式であり、またプーシキンが最も好んで用ゐた所のヤンブ（短長格）の性質を熱心に研究した。特に彼が注意を向けた點は所謂抑揚であつて、之がプーシキンのヤンブに於ては極めて正則的に交代してゐる。で、ベールイはプーシキンの詩に於ける抑揚を仔細に勘定して、その結

果概してロシャのヤンブに關する極めて興味ある研究を發表した。ウアレリアン・チュドーフスキイにも眞面目な研究の發表がある。彼は詩の文法的解剖の理論家で、プーシキンの『ルサルカ』(人魚)のアクセントを勘定して、そのリズムの法則を極めて面白く說明した。

オボヤーズはこの詩學派の影響を受けて現れた文藝批評の新しい傾向である。オボヤーズといふ語はロシャ語のオーブシチエスツウオ・イズウチエーニヤ・ボエチーチエスカヴオ・ヤズイカ(詞藻研究會)の頭字だけを取つて連ねた略語で、こゝでは假りに修辭派と譯しておく。この派は一九一六年から『詞藻論集』なる標題の下に評論集を出し始めたが、それにはウイクトル・シユクローフスキイを中心とするオボヤーズ會員が執筆してゐる。彼等は彼等の目的が詞藻の性質を研究するにあること表明して、その主張を大要次のやうに纒めて居る。『今後文學史の主なるヒーローは言葉でなければならぬ。言葉の組織、味、色、言葉の配合でなければならぬ。詩的技術の取扱ひ方の研究が必要である。興味の中心は、詩人や作家がその作を何故に書いたかといふことでなく、彼等が如何に書いて居るか、如何にその作を綴つて居るかといふ點にある。或作家の政治的見解や哲學的見解がどうの、彼がどんな靴を穿いて居るの、彼の少年時代の乳母がどうであつたのといふことは、批評家に取つて全く興味の無いことである。作家の心理や經歷を深く穿鑿するが如きは全然無用である。先づ第一に詩的生産の法則を研究しなければならぬ』と、是れがオボヤーズ一派の主張の大要である。

評論集の第一輯と第二輯とは聲音學上の問題に献げられ、第三輯からオボヤーズ一派は小說や短篇の學說の研究に着手し、題材構成の問題に沒頭した。その中で、シユクローフスキイは『小說及び物語の學說』、『筋の運び方』を書いて、小說の構成法、題材の取扱ひ方、筋の發展等に就いてあらゆる典型を示してゐる。其他シユクローフスキイの作には『ドン・キホーテは如何に作られたか』、『筋の運び方とスタイルとの關係』等がある。エイヘンバウム敎授も『ゴーゴリの「外套」は如何に作られたか』、『アンナ・アフマートヴア論』を出してゐる。

革命後オボヤーズ團體は依然としてその活動を續けてゐるが、彼等の攻究法は時として餘りに形式の末(例へば或詩に就いて或語の數を勘定するが如き)に趨る所から、フオルマリズム(形式派)とも名けられてゐる。この傾向には今日ロシャで最も著明な批評家や文學史家が加はつて、評壇に非常な勢力を占めてゐる。その代表者にはシユクローフスキイ、エイヘンバウムの外、ジルムンスキイ、ツイニヤーノフ、ウイノグラドラ、

ブリーク、トマセーフスキイ、ヤコブソン等が名高い。

玆にはシユクローフスキイの『小說の構成』に關する學說の大要を紹介して、彼等の研究が如何なるものであるかを示すことにする。シユクローフスキイの說に據れば、小說は事件の單純な形態や單純な平行若くは單純な描寫だけでは小說としての感じを與へない。小說としての定義に副はんが爲には、先づ如何なる性質によつて基調を保持すべきか、また筋を一貫するがためには如何に基調を組み立てねばならぬかを究めなければならない。そこで筋の組立方とスタイルの一般的取扱ひ方との關係を明かにする必要が生じて來るのである。斯う言つてシユクローフスキイは先づ基調の階段式發展のタイプに就いて說いてゐる。斯うしたタイプはその本質から言つて無限であつて、特に冒險小說などに多い。であるから數多い續き物が出たり、或は『十年ほど經つてから』とか、『二十年ほど經つてから』とかいふ文句で連續するので、この樣な小說には自然エピローグが必要になつて來る譯である。つまり小說の時間の尺度を變更して始めて結末を告げるのである。けれども通常小說の組立方は或る一定した枠に嵌つてゐるもので、冒險小說などでは屢々掠奪や探偵の外に、小說の特徵として、困難裡に成立した結婚の基調を取つてゐる。マーク・トウウエンが『トム・ソイエル』を書いた時、彼は斯う言つて居る。『自分は何所らで自分の書いてゐる物語を終結してよいか分らない。何故なら成人のことを描いた小說は大抵結婚を以て結末を告げるものであるが、自分の主人公たる少年の生涯には結婚が無いからである。それで自分はたゞよいと思つたところで自分の創作を終了する』と、斯う言つて彼はその小說を演繹的手法で第三編まで續けてゐる。然らば小說が完結したものとさるゝが爲には何が必要であるか。それは分解法によつて容易に解決される。卽ち階段式タイプの組立法の外に、まだ循環式若くは輪索式タイプの構成法がある。之に就いてシユクローフスキイは次のやうに說いてゐる。

幸福な二人の愛の描寫は小說を成立てないものである。若し成立てるとすれば、それはたゞ傳統的背景の上に、何等かの障碍を持つた愛が描寫せられる時に限る。小說のためには必ず戀愛に障碍がなければならぬ。例へば

AはBを愛してゐるが、BはAを愛してゐない。BがAを愛し始めた時にはもうAはBを愛してゐなかつた。

小說には斯うした障碍が必要である。プーシキンの『エヴゲニイ・オニエーギン』のオニエーギンとタチヤナとの關係はこの形式の上に作られてゐる。それと同時に相互の愛が同時でなかつたといふ原因が複雜な心理的基調となつて現れてゐる。斯樣

に小説を成立させるためには單なる行動ばかりでなく、何うしても和合することの出來ない反對行動が必要である。これが抑も寓意と諧謔とを含む基調の裝飾である。

性慾小説の筋は展開された隱喩のやうな觀を呈する。例へばボッカチオの物語では、男女の生殖器が臼と杵とに比較されてゐる。この比較は歴史を通じて性慾小説の基調となつてゐる。また多くの小説は諧謔の展開であつて、殊に名稱の出生なぞは斯種のタイプに屬する。例へばピョートル大帝が、オフ！タ！と叫んだ所からオフタといふ地名が生れたやうなものである。けれども基調は言語の對象の展開でない場合もある。同時に基調の特質には風俗の矛盾から來たものもある。例へば、電氣のことを燻らない火と名けてゐる地方の或兵舍で、兵卒達が煙草を喫つてゐると、將校が入つて來たので、兵卒達は『ランプが燻つた』と説明したといふ話の如きそれである。

小説が終結を告げなければ、筋の感じをも失つて了ふものである。小説で終結を告げてゐないやうな感じのするものに、所謂『虛僞の終結』を附加したものがある。通常『虛僞の終結』は自然や天候の描寫をする。例へばクリスマスの小説やお伽噺に見受けるやうに、『寒さが增して來た』とか、『天は冷たかつた』とかいふやうなものである。ゴーゴリの『イワン・イワーヌイチとイワン・ニキホローウイチとは如何に喧嘩したかの話』の中にある『皆さん、この世の中に生きてるのが厭です！』の如きは、虛僞の終結として最も著しい例である。けれども若し此の新しい基調が本來の題材と平行線的に形成されれば、小説も終了したものと見做される。

小説の特殊な形態に『消極的終結』を有つたものがある。斯種の形式は屢々見受ける所であるが、特にモーパッサンの小説に多い。或る小説に、『母が、田舍にあづけてある自分の私生兒を見たさに村へ行つて、哀愁のあまり駈け出すと、河の中へ落込んで了つた。息子は母とは知らず、棒で河底を探し廻つたが、仕舞にやつと衣物を引つかけて持ち上げた』と、小説は此所で終つてゐるが、この小説などは『終結』を持つた慣習的小説の地盤に形成されてゐる。

通常の小説は循環式發展と階段式發展との結合によつて構成されたものが多い。所がも一つ小説の特殊な構成法に平行式といふのがある。シユクローフスキイの説に據ると、或事實を藝術の對象とするがためには、先づそれを實生活の多くの事實の中から引離さなければならぬ。それには先づイヴアン雷帝が人物を選擇したやうに事物を動かすことが必要である。事物が存在する慣習的結合の列からそれを引離さなければならぬ。それ

がため詩人はよく轉用、比較の形を使用する。火を赤色に譬へたり、古い言葉に新しい性質形容詞を附加へたりする。つまり成概念を同じやうな概念の列から摑み出して、轉用の作用によつてそれを他の概念の列に混入させるのである。その結果我々は新しい列のうちに事物の新しい存在を感ずるやうになる。言ひかへれば、事物は古い衣を脱ぎ棄てゝ、新しい言葉を着て、新しい姿で現れるのである。

斯うした研究法で、オボヤーズ一派は古今の作家、詩人、作品に對して研究の歩を進め、その結果各詩人、各作品に就いて一定した法則と一貫した形式とを發見して、文藝研究の上に一大革命を齎らしてゐる。トルストイでも、ドストエーフスキイでもセクスピヤでも乃至は「ドン・キホーテ」でも、この派の鋭い解剖の刃にかゝつては木葉微塵に等しい。近くは我が日本文學に對してもこの研究法を應用して、源氏物語、伊勢物語、萬葉集、古今集等の飜譯や研究に沒頭して居る。百人一首の如きは既にその形式方面からの新しい研究が行はれて、近く發表することになつてゐたから、是等が發表の曉は新しい意味に於て大に日本文學を刺戟するだらうと思はれる。

アクメイストとオボヤーズとが概してクラッシシズム復興の傾向を帶びて居るのに對して、文壇の傳統を撲滅し從來のブルジュア文學を否定して、之に代ふるに新しい革命的内容の文學とコンスツルチウイズム(構成主義)の藝術とを猛烈に主張する一派にレフがある。レフとはロシヤ語のレーヴイ・フロント・イスクースツフ(藝術の左翼戰線)の頭字を連ねた略語で、こゝでは單に左翼派と稱しておく。その代表者は、セルセニエーウイチ、エシエーニン、マヤコーフスキイ、アシエーエフ、トレチヤコフ、カメンスキイ、クルチヨーヌイフ、パステルナク、フレブニコフ、ブリーク、ウイットホーゲリ等主として元の未來派の聯盟で、それに劇壇の奇才メイエルホリドなども加はつて今日革命文壇に非常な勢力を持つてゐる。機關雜誌にはレフと題する可なり大きな雜誌がマヤコーフスキイの主幹の下に國立出版所から發行されてゐる。革命文壇を背景として、今日及び明日のロシヤ文學を研究せんとする者に取つて、この派の運動は見逃がすべからざる一大事實である。けれどもこの派が今日の地位と勢力とを得るに至るまでには、矢張り幾多の波瀾と變遷とを經て來て居る。それがまた最近、革命文壇の消息を窺ふ重要な過程となつて居るから、少々長くはなるが、この派が因て以て起つた經過に就いて一應述べなければならぬ。

一九〇五年の第一次革命の後に起つた反動は獨裁政治と商工階級側からの熾烈な壓迫となつて現れた。そしてこの反動はそ

れ自身の趣味と嗜好とによつて特殊の藝術と生活とを創つた。それが象徴主義（ベールイ、バリモント）、神秘主義（チュルコフ、ギッピウス）、變態性慾主義（ローザノフ）の藝術であり、階級制度の生活であつた。そこで革命黨は生活を打破すべく藝術は一般の趣味を打破すべく蹶起した。それが印象派の發火で、この派は一九〇九年『サードク・スデイ』といふ叢書を發行してゐる。發火狀態は滿三年も續いてゐたが、最後に未來派となつていよ／＼その爆音を高めるに至つた。未來派合同の第一刊行物は『社會的趣味の横面を毆れ』（一九一四年）と題する物騷な書物で、それにはブルリユク、カメンスキイ、クルチヨーヌイフ、マヤコーフスキイ、フレブニコフ等が執筆してゐる。

古い生活組織は爆發者に對してあらゆる手段を盡して罵詈讒謗を浴せかけ、政府は彼等を嚴重に取締つて刊行物の禁止など始めた。資本家は勿論彼等の笞や刺の味を知らずに過した。この頃舊美學に感染してゐたアカデミツク派の數名（カンデインスキイ、グブノ及び其他）が未來派から脫退した。が、それと同時にセルセニエーウイチ其他の同士が新たに未來派に加はつた。從來政治の研究に沒頭したことのない人々によつて支配されてゐた藝術の未來主義的運動は、やゝもすれば無政府主義に傾くやうな場合もあつた。

一九一四年の戰爭はロシヤの社會組織に一大變化を來さしむる動機を與へた。未來派同志は好機逸すべからずとして、帝國主義者と徹底的に戰かつた。自から最高唯一のロシヤ藝術の創造者を以て自任してゐる未來派は當時戰爭謳歌者であつたゴロデーツキイやグミリヨフを向ふに廻して頻りに戰爭を呪ひ、之に對して藝術のあらゆる手段を以て反抗したのである（マヤコーフスキイ作『戰爭と平和』）。そして結局戰爭は革命を誘起するに至つた（同人作『ズボンの中の雲』）。所が一九一七年の二月革命は未來派を「右」と「左」に分割し、右翼派は民主々義者の共鳴者となつた。が、十月革命を待構へてゐた左翼派は時機到ると共にボリシエウイキイ藝術の洗禮を受けた（マヤコーフスキイ、カメンスキイ、クルチヨーヌイフ等）。この左翼未來派の團體には將來この派の實行家となつたブリーク、アルヴアトフ、構成派のロデチエンコ、ラウインスキイ等も加つた。そこで左翼未來派は、ニコライ二世の寵妾であつたクシエシンスカヤの宮殿に於て、勞働文學者（將來のプロレトカルト）の團體と協議を遂げた。所が勞働文學者は革命の本質が單に宣傳的內容を以てのみ實效を奏することが出來るものと思惟し、その主義を頑強に主張したので兩者の提携は遂に破れ、勞働文學者の團體は依然として純然たる反動派の境界に立止まることゝなつた。で、左翼未來派

は十月革命後編成替を行つて、新らしい藝術の左翼戰線を固守すべき左翼隊を作つて、早くも十月二十五日には活動に入つたのである。是れがレフ（左翼派）の起りである。

斯くてレフの一派は組織編成の傍ら十月革命の第一作品集を出したが、それは何れも革命を切望する藝術的宣傳を主眼にしたものである。同時に彼等は『共產藝術』なる新聞を發行して革命的理想の宣傳に努め、工場や勞働者の住宅を訪問して講演や遊說をしながら步き廻つた結果、勞働者の間に夥しい味方を得て、到る所に共產黨未來派（レフの別名）の機關が編成さるゝに至つた。この機を利用してレフの一派は全く全ロシヤに向つて一齊に左翼戰線の具體的活動を始めたのである。極東のウラヂウオストックに於て、極東共產黨の機關雜誌『創造』社同志が活躍したのもこの頃のことである。

然るに一方歐羅巴に於けるアカデミック派は早くもソウエート政權の基礎の確實なことを悟つて、その門戶を叩くに至つたので、ソウエート政府は彼等に『敎化の裏庭』と云ふ名稱を附し、敎化事業の最下級の事務を與へたのである。ところが、圖らずもこの裏庭から『共產藝術』を破壞すべく、左翼藝術に對する攻擊が始まり、その脅威の下に一時共產藝術は逆境に立つたことがある。戰爭と破壞に餘念のなかつた當時の政權もひたすら國內の擾亂を恐れて之に手を觸れることが出來なかつた。

軈て戰爭と饑餓が勃發したので、レフはその主張に基いて再度の活動を開始することになつた。卽ち露國社會主義聯邦ソウエート共和國の藝術としての計畫を立て、藝術パノラマの示威運動を起した。けれどもレフが所謂ソウエート露國の藝術として正式に除幕式を擧げたのは一九二三年二月一日（機關雜誌の發行）である。

その後この派の活動は隨分目覺ましいものであるが、その主張は要するに次の數點に歸着する。

『我黨の主義とする所は言ふまでもなく新しきプロレタリヤ革命藝術を根本から破壞する左傾力を一致團結せしめることが必要である。

『凡て藝術問題を議するに當つては今日まで單に左翼未來派の理想に過ぎなかつた不自然な多數決を排して、吾等本來の獨創的な團體的エネルギヤの實行によつて着實に左傾事業を完成しなければならない。

『レフは民衆の間に團結力を育成しつゝ民衆藝術の宣傳に努力する。

『レフの學理は最高勞働の機能に立脚し、實行的藝術によつて確立されなければならない。

「レフは「藝術卽生活」の建設のために戰ふのである。

『レフは藝術に於ける革命の專賣權を要求するものではなく、一切を競爭によつて解決せんとするものである。

『我等は我等の宣傳の正しいことを信ずる。我等が未來に對して確實な道程に立つて居ることを我等は實行の力によつて證明する。(アセーエフ、アルヷアートフ、ブリーク、クシネル、マヤコーフスキイ、トレチヤコフ、チユジヤク其他連署)

斯くて藝術の評價は一變した。

『現代生活の汽船中からプーシキン、ドストエーフスキイ、トルストイを放棄せよ。』是れがレフの標語である。

從來露國に於てはクラッシックは國民化した唯一無比の傳統として尊敬せられ、終には動かざる絶對的藝術となつて、各所にクラシックの記念牌や傳統的な學校の設立を見たのである。所がレフは今日新しい生ける藝術を建設するに當つて、クラッシシズムの傳統を打破し、今日まで國民を僞瞞しつゝあつた美學派やクラッシシズムの死せるブルジョア藝術の方式を打破しなければならんと主張する。

彼等は言ふ『生ける藝術は活動であつて、この活動こそは現在に屬するものである。故に斯の如き藝術を提げて進む吾人の前途には活動の計畫があると同時に、後方には活動の結果が在る。ブルジョア藝術の唯一の使命は生活を破壞することである。プロレタリヤ藝術の使命は破壞するのではなく創造するのである。古い藝術と古い「吾等」を聖め、新しい藝術と新しい「吾等」を生かさなければならぬ。』

斯樣に彼等は自からを藝術卽生活の創造者と稱してゐる。十月は彼等の誕生日であつて、この日に自由なる藝術を宣言し、それをプロレタリヤ革命藝術と名づけてゐる。要するにレフ一派はブルジョア藝術の墓掘人である。

從來の文學は詩と散文に區別され、何れも荒唐無稽な修辭に終始して、實生活の言葉とは隨分懸け離れてゐた。が、レフは詩と散文と實際的言葉との間に差別を設けることを好まない。彼等は言葉の實體を取つて直ちに用語としてゐる。そして言語發音の組立、韻律、調節、詞的構成の單一化、言語表現の確實さ及び新しいテーマの用方等に努力してゐる。是等は美學的な自己本位ではなく、現代生活を如何に表現すべきかに就て最善の方法を發見するための事業であると、彼等は稱してゐる。

彼等は藝術の祭司でなく、社會的註文を作る職工——生産者であることを自覺してゐる。

最後に紹介しなければならん一派はコンスツルクチウイズム(構成主義)である。構成主義は純然たるプロレタリヤ藝術の形

式として專らプロレトカルト一派によつて主張されてゐる。一面レフとも相通じて居るが、レフは主として文學方面に行はれ、構成主義は今の所美術乃至技術方面に限られて居るといふ違ひがある。

構成主義は一九二〇年に『群衆行動』と稱する左傾畫家の一團と理想論派(イデオローグ)との間にひろがつて漸次勢力を扶植した。そして傳統的藝術の擁護者に對して宣戰することを以てその使命としてゐる。

構成主義は產業的文化の生んだ子供であつて過去のカピタリズムによつて腐死の狀況に置かれてあつたが、プロレタリヤ革命は之に活氣を與へたのである。新しい紀元は矢張り一九一七年十月二十五日より始まる。新經濟的組織を條件としたる社會的生活は表現の新しい形式と方法とを要求した。而も勞働と智能によつて表現されるものは智能的物質的生產でなければならぬ。故に構成派は藝術的勞働に於ける投機的行爲を打破しなければならぬ。そこで彼等は藝術に對して徹底的戰爭を布告してゐる。

『藝術には死があれよ！』、是れがこの一派の標語である。

『現代は工業の世界である。彫刻術も事物の空間的解決に席を讓らなければならぬ。繪畫術は寫眞術と競爭することは出來ない。劇場は「群衆行動」の發火が現代の生產となつて現はれた時には滑稽なものとなる。建築術は發達しつゝある構成主義を抑止するには薄弱である。構成主義と群衆行動とは現代革命生活の勞働法式と不可分的に結合されてゐる。』と、此派の理論家アレクセイ・ガンは主張する。結局彼等は藝術の獨立性を認めず、何所までも之を產業の一部として見ようとするものである。

構成主義の目的は物質的建設の共產主義的表現を探求することである。構成主義は勞働、テクニク、オルガニゼーションを三位一體として、これを新しい藝術のシムボルとしてゐる。

構成派が新しい事業を建設するために採用する實際的勞働は先づ事物の物質的形體を成し立つるに當つて、藝術のプランに於ける美的調和(美學)を排斥して、完全な事物の形式に向ふ題目に基づいて作業しなければならぬ。然し既成事物の藝術的形式から着手するのではなく、形式は基本的題目の解決の結果として現はれてくるのである。卽ち事物の純然たる實利的意味の上に基礎づけられたものである。從來の藝術では、人間は外部世界の法則の活動の中間にあつて、その活動が偶然的な現象と思はるゝ無限の列にあるものとして、外部の要求する形式へと盲目的に自己の道を開拓して行つたのである。斯樣な態度は心理上から云つて抽象に落入つて行く。斯うした狀態と感情(藝

術）こを打破し、革命に基づく唯物主義こ實際的に働く勞働團體の生活に對する意識的關係を復活さするには從來の美學的組織による藝術では駄目である。ブルジョア藝術の生んだ盲目的な趣味や貴族的な我儘から來た「偶然的」な「不生産的」な文化は今では全く意義を失つて了つた。凡ての技術的に機械學的に力學的に意味づけられなければならぬ。

以上は構成派青年團長ロドチエンコの説の大要であるが、コンスツルクチウイズムの骨子は略之に盡されて居るこ思ふ。この派こそは全く現代ロシヤの生んだ最近の傾向である。けれごも構成派にせよ、レフにせよ、現在彼等が宣傳し努力してゐるほご彼等自身の主張を結晶した本當の藝術をまで生み出してゐない。その意味に於て彼等は明日の藝術である。

以上の傾向や流派を通じて認めらるゝ點は是等の傾向がそれぞれ異つた特色を有してゐるうちにも一つの一貫した大きな流れによつて動かされてゐる點である。それこ同時に是等の流派がソウエート政權の干渉以外に立つて自由に自己の道を辿りつつ活動して居る所を面白く思つた。

此のあと更に以上の傾向を特色づけるやうな現代文壇の代表的作家、詩人、作品に就いて一通り紹介してロシヤ革命文學の鳥瞰圖を作る考へであつたが、餘りに長くなつたから一先づ是れにて擱筆する。

帝都復興と民衆の娯樂

權田保之助

○

燒跡に、間もなく出たすいとんやゆであづきを賣る露店に『丸燒け屋』だの『ふら〳〵屋』だのといふ屋號が適切を感じさせた時期から、天幕張りのライスカレーや支那蕎麥を賣る露店の屋號に『此の際屋』といふのが、「考へたなー」と人を肯かせた時期を經て、今では『復興軒』といふ蕎麥屋、『復興燒』と銘打つた今川燒屋の時期に入つて、地震と火事の實際と、鮮人囚徒に關する浮說と、食糧缺乏の不安とにふら〳〵と過ぎた震災直後の狀態から、配給の玄米飯と鯨の罐詰とに露命をつなぐ樣になつた狀態を經て、今では『復興』といふことが考へられる時期となつたのである。方々の反物屋の店先きに「時局に際し特價提供」と筆太に書いた貼紙が出されたのは震災後十日頃からであつたが、もう今では小さな商店のバラック式假營業所の開店披露の葉書にも「今後一層の奮勵を以て幾分たりとも復興の運動に資せん存念に有之候間」といふ文句が刷り込まれる樣になつた。

復興なる哉、今や燒け出された市民は勿論、燒け殘つた市民も隣接町村の住民も復興の道に急いでゐる。焦土の上には日に日に急造のバラックが立てられて行く。一時關西に逃げ出した文士諸君も、屍體を燒く臭氣を聯想させる樣なクサヤの干物が戀しくてか、ぼつ〳〵と歸つて來る。美術家諸君も日頃慣れたカンバスを捨て、看板の亞鉛板にペンキをなすつても、帝都を美化しようとまで意氣捲いてゐる。此の時に當つて帝都復興に對して民衆の娯樂がどんな意味を有するかを考へて見るのもあながち無駄な事ではあるまい。

○

大震大火に續いて、鮮人暴行の風說、囚徒脫監の流言に脅かされ、食糧の缺乏に威かされた避難民と燒け殘つた區部郡部の住民は、丁度野蠻未開の種族のやうな刺戟反應の生活を送つて

昨日のことも又明日のことも全く考へず、唯現在の刹那の我にのみ生きてゐた。僅かに一箇の玄米の握飯に無限の感謝を捧げ「死なゝい樣にしよう」といふことが全我の要求であつた。さう云ふ樣な狀態に置かれて人間はどうして娯樂なぞが考へて居られやうか。娯樂といふやうなことを考へることが抑々罪惡に思はれた許りでなしに、始めから考へることさへ思ひ付かなかつた。娯樂、そんなものは全く此の世の中に存在し得べからざる夢のやうな物になつて居た。實際、娯樂どころではない、子守女が子守歌を歌つたといふことが已に近所の問題となり、「あの家はいやに落ち着いてゐるぢやないか」といふことが町内の非難の理由となつた。大震から十日位を經ても、蓄音機をかけて自警團から怒鳴り込まれた家が少くなかつた。全く蓄音機をかけることも命懸けであつたが、家に蓄音機や樂器があることと自身が、存在すべからざるものが存在してゐるといふ不埒を家人自身が感じたものである。燒け殘つた町に、地震で化粧壁を振り落された活動寫眞館が立つてゐると、此の際、何でこんな物が立つて居るのか不思議でならなく感じた位である。

一口に云へば、一時東京及び其附近一帶は食物封鎖と同時に娯樂封鎖を蒙つた譯である。食物の方は食べ度いと待ち設けてゐるのが十分に供給されなかつたのであるが、娯樂の方は供給が斷たれたといふよりも、其の需要が全然なかつた、娯樂といふことが頭から考へられなかつた爲めの封鎖で、更らに適切に云へば、娯樂死滅の狀態にあつたのである。今度は甚だ莫大の實驗料を支拂つて、「娯樂なき人生」、否な「頭から娯樂を考へない人生」といふものゝ大實驗をやつた譯である。

○

所が其の實驗の結果はどうだつたらう。曰く「人間は娯樂なしには生き得られないものである。少くとも人間が人間らしい思考感情を所有する爲めには、娯樂を一日も缺くことが出來得ない」といふ結論に到達したのである。緊急焦眉の生きるか死ぬかと云ふ瀨戸際には、無論娯樂どころの騷ぎではないが、其の急燥な焦慮の時期を通りすぎて、人間が人間らしく落着いて、物を考へたり、ものに感じたりする樣な心の平衡の狀態に移る爲めには、どうしても娯樂が必要である。いや寧ろ娯樂を思ふ樣になる時が、人間が獸的衝動主義から人間らしい平衡の心的狀態に復歸する轉機を與へるものである。卽ち人間の心に落着きが出來ると娯樂を要求する樣になるといふのではなくて、娯樂を要求する欲求が生じて來ると、其の時が人間の心に平衡の生じて來たことを示すのであるといふことが、私が今度の大實驗に接して發見した産物である。

世の中には能く、人心を穩かにする爲めに、民衆に娯樂を與へなくてはならぬと說いたり、その爲めに娯樂對策や娯樂施設を考へる人があるけれども、それは全く事柄の逆である。あの米屋といふ米屋、酒屋といふ酒屋が「賣切れ申候」といふ貼札を掲げ、蕎麥粉・うどん粉・素麵・干うどん……何でも腹になるものが賣切れて仕舞ひ、鮮人が暴行をすると襲擊して來るといふ噂でびく／＼してゐた際に、如何なる結構な娯樂を配給したとて、それで民衆の心が靜平になるものではない。其の時は實に娯樂を要求するの、しないのゝ問題ではなくて、娯樂と云ふことが全然考へ得られなかつた問題であつたのである。

　其の內に、人々の心の中に、娯樂を要求する熱望が起つて來た。この現象を人は或は、食糧の配給不完全ながら足り、住むべき所も不十分ながら定まつて、人の心が落着きかけて來たから、其處で初めて娯樂が欲しく成つたのだと說明するかも知れないが、それは物事を客觀的に傍觀する人の思索の結果であつて、實際の狀態はそれとは全く別である。實際は人の心が落着いたから娯樂の要求が第二次的に起つて來るのではなくて、人の心が落ち着き度いといふ其の機契として娯樂に對する熱望が生じて來るのである。卽ち娯樂に對する熱望といふものが本能的に生ずることが人の心に落着きが望ましくなつた事を示すバロメーターである、實に此の際に生じた娯樂に對する熱望は、食糧と住居との缺乏が僅かに足つて而して人の心が呑氣になつた爲めに生じたといふ樣なそんな氣紛れなものではなくて、異常に焦燥した變態的心的狀態の重荷に堪え兼ねて、人々が靜平なる心的常態に復歸せんと欣求する心の傾がそれを必然的に生み出したものである。

○

　大震後十日ならずして、日比谷公園のバラックにハモニカの響が聞え、日比谷公園の有樂門のあたり一帶に出並んだ露店の夜は、一升壜の底を拔いて其の中に點した蠟燭の灯の前に、冷酒をあふる男性の群が賑はつた。

　これは呑氣になつたから酒をあふるのではない、激動の後に心の靜平を一時も早く持ち來さんが爲めに酒を飮むのである。それは遊戲三昧の餘裕の產物ではなくて、止むに止まれぬ心の慾求の痛々しい產物であつた。呑氣に吹き鳴らすハモニカではなくて、亂れた心に調律を試みようとする切ない心の遣瀨ない流露であつたのである。

　燒け落ちて空しく廢墟に歸した都、人の膚の脂ばかりでなしに、心の脂までも吸ひ盡して仕舞ふかに思はれる陰慘な都の燒跡、帶を締めて下駄をはいた女性が不埒な位に目に立つ廢殘の

る大路、米俵と材木のみならず人間を滿載した貨物自働車が氣味悪い響をとどろかせて奔走し行く有りし昔の銀座通、風のまに〱聞える幾萬の屍體を焼く臭、見るもの聞くもの嗅ぐもの味ふもの、何れ陰鬱な悲調に立たざる無き單調な世界に、家を焼き財を失ひ、親に別れ子を失つた人の子が、一時に焦燥から漸く去つて、心の靜平を冀ふことは餘りに當然なことである。

罹災者でない人々にも、一時の異常なる興奮と激動とに擾亂された心の平衡を、一日も早く回復し度い熱望が湧いて來る。これが即ち娛樂を要求する契縁である。假令意識的に娛樂を要求しないまでも、ある偶然の機會に娛樂に遭遇すれば、自分に與へられた安息の地への道しるべに出會つた樣な心持になつて、焦立つた心が穩やかな心への轉機となる。

○

帝都復興の大事業は、決して帝都復古であつてはならぬ。それは甚だ莫大な犧牲を支拂つて體驗し得た尊き實驗の基礎の上に打ち立てられねばならぬものである。而して幸か不幸か今回の大震災によつて暴露された舊き社會狀態に伴ふ缺陷に對して十分の研討と、それが徹底的な排除とに努力して、始めて所期され得べきものである。

帝都の復興は大正十二年九月一日午後以後、貴きも賤きも、富みたるも貧しきも、位あるも位なきも、皆一様同等に玄米の握飯にまで生活の規準を引き下げられた其處に出發點を据ゑねばならぬ。自警團は其の副産物として餘りに忌はしい事件を惹出せしめたが、しかし一町一劃の住民が激動に疲れ切つた身體を徹夜して、互ひに相警め、互ひに相扶け合つたあの眞劒な精神を基底とせねばならぬものである。

けれどもあの玄米飯を食つた時期、あの自警の爲めに狂奔した時分のやうな異常に焦立つた心持では、何時までたつても、帝都の復興は望むべくもない。心の平衡が發見され、靜平になつた心の上に此の復興の事業は其の進路を發見し得るものである。而して今や人々は已に心の靜平を欣求してゐる。此の時に當つて娛樂は其の意義を發揚することが出來るのである。焦土の上を唯だふら〱と歩き廻る丈けならば、玄米飯を食つた時の異常の興奮で澤山であらう、然らずして苟且にも、此の焦土の間より亭々たる大樹の芽生えを期待せんとするならば、あの樣な變態心理的衝動運動は何等の効果が無いばかりか、却つて大きな妨害になる。靜平に復した心を持つて、玄米の握飯と自警團との苦い經驗によつて味得した教訓を土臺として出發すべきものである。

實に帝都復興の大事業には、民衆の心の靜平が第一要件であ

る。かるが故に民衆が心の靜平を欣求する機契となつてゐる娯樂は、此帝都復興に沒すべからざる重要なる意義を占むるものであることが解るであらう。茲に帝都の復興を考ふるに際して、民衆の娯樂てふことを忘るゝことの出來ぬ理由が存してゐる。

○

然しながら帝都復興と民衆娯樂の問題は唯だ單に以上の一點にのみ局限された問題ではない。其處には更らに更らに大きな問題が取り殘されてゐる。

元來、帝都復興と民衆娯樂の問題には、重要なる二方面がある。其の一つは帝都復興に對する民衆の元氣と平常なる思索との根底となるべき心の靜平を持ち來すべき使命を有する民衆娯樂の一側面であつて、卽ち帝都復興の一重要手段としての民衆娯樂の役割である。それは前に述べた所で明らかであると考へる。所が其の二は復興後の帝都といふものを考へた時の民衆娯樂の問題である。それは手段としての民衆娯樂でなくて、目的としての民衆娯樂である。今回の大震災とそれに隨伴した各種の社會現象によつて、人間が人間らしき思想感情を働かしめて生活する爲めには娯樂から絶縁することは出來得ないものであるといふ事が明確に證明された。復興後の帝都が唯だ單に物的にのみ整頓されて人間の生活が考へらるゝ必要が無いといふならば、乃ち止む、苟くも新たに興るべき帝都が天の試練の上に新しき意味を具へた帝都として發現するならば、其處には人間が人間らしい思想感情を働かしめ得る天地であらねばならぬのである。然らば復興後の帝都は其處に住むべき民衆の生活と娯樂との關係に於て十分の施設と遺漏なき融合とが發見されねばならぬのである。以前の帝都が此の娯樂と民衆生活との關係に於て幾多の缺陷の存したことは、茲に繰返すの煩に堪へない。問題は寧ろ來るべき帝都の民衆生活と娯樂との關係にある、ただ徒らに「淺草」を復活させることが此の問題を解く方法ではない。緊急の場合の必要から生じた日比谷公園の露店街を新興帝都の永遠の娯樂中心地とすることも、此の問題の解釋には全然無關係である。

帝都復興と民衆娯樂の問題は、日比谷公園で澤正一座に野外劇をやらせたり、或る避難民收容所で其の兒童の爲めに慰安童諸童話會を開いたり、活動寫眞の慰安慈善興行なぞで片付け得られる樣な、そんな御手輕な問題ではなくて、民衆娯樂には帝都復興の手段としての側面と、帝都復興の目的としての側面との兩面があつて、其の何れもが到底安價に御手輕に片付けて仕舞ひ得ない事柄であるといふことを注意して、私は復興院の人人が此の問題に對して如何なる對策と施設とを採り賜ふかを興味深く待ち望んでゐる。(一二・一〇・一〇夜稿)



新東京繁昌記

佐々木味津三

ふり出し中野

此一文ご覧のごとく新東京繁昌記なる命名は用ひてあるが、砕けて言へば新東京膝栗毛、あるは又新東京道中すご六とでも言ひうべき性質のものである。しかしこの新東京膝栗毛惜しむらくは彌次郎兵衛一人のみで喜多八にも相當すべきワキ師に不足である。止むをえずわれら影とふたりで時に彌次郎兵衛になりまた時に喜多八ともなる考へで罷り出でたのは十月初旬、ふり出しはむさし中野、朝からの雨もよひ、降りみ降らずみ秋の空、下手な歌にもなりかねるいやな日である。

燒け野の東京いまだに物騷と言ふ坊間の風說もつぱらであるから、わらじ脚絆、にぎりめしに檳榔樹のステツキ手帳鉛筆七ツ道具の一切を揃へて、水盃にも及ばうかと考へてゐたが、またひるがへつておもんみるにこの彌次郎兵衛自慢にもならない程の無精もの、道に迷つて行き暮れたら燒け野のバラックにでも一夜の宿を求める覺悟で、和服にマント鼻緒の切れかゝつた日和下駄と言ふ着流しのまゝぶらりと出たのは午前十時、道の序でにまづさしかゝつたのは新宿である。

新宿

青梅口で電車を棄てゝ、驛前なる煙草屋でバツト五箱キャラメル一個サンデイ毎日秋季特別號一册を購つたなぞはこの彌次郎兵衛どこまでも怪しからぬ了見である。酒樽の中に育つて酒の味をわきまへぬ性來の不調法者、キャラメルをしやぶり乍ら

退屈しのぎに道々サンデイ每日でも拾ひ讀まうと言ふ心掛けはわれ乍ら甚だ赤面の至りであるが、そこは燒けても潰れてもさすがは大東京の有難さである。われらを彌次郎兵衞と知る顏なじみのないごさくさの幸ひにそしらぬ顏で口を拭ぐつたが、劈頭第一先づ荒ぎもをひしがれたのは、驛から專賣局右横をガアドまでずつと細道にあふれ並んだ震災絵葉書屋の多いことであつた。どれもこれも絵葉書屋たちいつぱし罹災民らしい仔細顏を並べてはゐるが、あはよくば一日二合の給配米でもごまかしそうな不了見者としか見られないのは、絵葉書同様粗悪下等ちぐはぐな口上に依ても已に一目瞭然である。

就中面上刀眼を止めた怒り肩烱眼美髯の一壯漢が、出會ひ頭に面を合はしたわれらの姿をみるや否や、

「かの西暦は千九百六十年、桑港大地震に於きましては燒死せる者實に十有五萬、然るに今囘わが東京の大震火災に於きましては死せる者その倍に及んで實に六萬八千五十三人いかにその慘害が桑港以上に激しかつたか全く想像に餘りあるものである……」

腕を扼して堂々たる出鱈目をご披露に及ばれたのは、この彌次郎兵衞尠からず參らされた。淺慮無學の點に於てわれら甘粕なにがしにも劣るまじきおろか者ではあるが、その倍に及んで實に六萬八千五十三人云々の博引傍證に至つては、全く恐縮の至りである。

●素早く尾ツぽを卷いて匆々に大通へ赴くこの大通り評判程にも人氣立たざるは少しく不思議千萬である。三越白木高島屋松屋こぞつて新宿に開店なぞと新聞では逸早開店ずみのごとき評判であつたが、見たところ矮少汚穢の露店屋臺店が雜然混然と居並んでゐるだけで、新聞うそかわれらの粗忽か、いづれにしても思つたより人氣寥々である。

この大通り元來われらの繩張りであるが、露店屋臺店共にそのいにしへとさしたる變化繁昌の見えざるは宿場はやはり宿場に終るか、思ふに日頃のこころがけよろしからざるためである。

たつたひとつわれらの注意を新らしくひきつけたものは、役藤製飴所新宿賣場なる小店の前に黑山のごとき人だかりであつた。人氣荒んで黑山のごときこの人々一箇一文の飴でも買つてしやぶるのかと思ふにそうでもなく、飴屋の亭主と太りじしの女房が、チャッチキチャ、チャッチキチャ、チャキチャキチ、ヤッチ、チャッチキチャ、情意投合鉋丁をそろへたきざみぶりに、ぽかんと立ち止まつた黑山である。夫唱婦隨飴屋の川和し相依りが時節柄羨やましいのか、それとも立つてみてゐたら、

なにがし配給品にでもありつけるか、われら慾を先きにして同じくほかんと黒山の仲間入りしたが、立つてみればなる程この人だかり尤も千萬である。

つまりは鉋丁のちやツちきちやであつた。ちやツちきちや、ちやツちきちや、ちやツちきちやツち、ちやツちきちや、いつまでも飽くことなきそのちやツちきちやである。

大變以來日を閲みすること約一ヶ月、民心最も欲するものは眼を樂しますものである。耳を慰するたぐひである。このちやきちやきちやツち、ちやツちきちや、元より單純低劣下等、取るに足らざるちやきちやきちやツちには相違ないが、われら初め立つてみれば聞いてみれば、徘徊三度びそぞろに棄てがき諧律があつた。人心ここに倚つて去りがたく、民意ここに集んで樂しまんとす、儚き享樂乍らこの黒山の人だかり、思へば甚だうべなりである。

もひとつわれらの眼をそばだゝしめたものは、武藏野館前の殺到である。開館正十二時と言ふ禁札を前にして、一二時間前よりのこの殺到は、けだし帝都復興先づ活動寫眞より初まるのたぐひか、われら元より饑ゆること久し自ら顧みて一掬の同感なき能はずである。

それより焼け跡、焼け跡はすべてまなこを閉ぢて、折から來合せた京橋行に飛びのつた。車中より右眄左顧、焼け跡を除いてこのあたり大木戸に至る間平穏無事である。只一つ、その背軒を揃へて競ひ並んだ二軒の射的場が、はかなくも今はおでんやの看板に塗りかへた位が特筆すべきものである。お次は四谷。

四谷大通り

鹽町で電車を捨てた。此の邊り新宿より一そう閑散である。今や新東京目抜きの大通りになり乍ら宿場なる新宿風情に劣るとは不屆至極である。第一露店一つ屋臺店一つ姿を見せぬのも怪しからぬ話である。兩側の店頭白眼に構へ、就中銀座名物毛利のパンヂユウ店へ千客萬來の繁昌を示し乍ら、今逸早く吳服屋に早替りしたのは如何した譯か、猿智慧あつて兵法を知らざるたぐひである。それ以上怪しからざるものは、某佛教團救恤部なる旗指物をおつ立てた人品骨柄卑しからざる僧侶の一團が、体をつらぬ鳴り物入りで軒毎に手の内を強請しつゝある姿である。ここに至つて流石の彌次郎兵衛怒り心頭に發し、再び怜惶として京橋行に飛びのつた。目ざす所は元より日比谷丸の内である。

日比谷新食傷新道

此處の人氣評判以上である。又われらの想像以上であつた。公園横停留所界隈の雜閙、全く戰場騷ぎである。約二三十名にも及ぶべき新聞賣子が、一勢に鈴をならして、前後左右電車の降客目がけ乍ら殺到するのも驚きの種であるが、わけても感に堪えたるものは、所謂食傷新道の先陣をうけたまはつた露店の煙草屋が多いことである。門を這入つてとつつきが木村屋のパンと銘打つた用樂さしのジャミパン、お次がおでんや隣りが牛ごん、その又隣りは一皿十五錢の玄米ライスカレー、間にはさまつて絵葉書や、一軒おいててんぷらや、よつてらつしやい、召し上つてらつしやいの喧噪々囂々である。それがいにしへ十二階裏の魔窟通りよりも狹い位な細道へ、兩側ぎつしり軒を並べたテント張りの大繁昌だから、食傷新道商賣往來全くの永當永當大入りである。

物好きに數へた所、牛めし牛ごんやが二十八軒、おでんやが十九軒、少し下つててんぷらや十六軒、すしや七軒、洋食や十三軒、〆て八十三軒が食傷新道第一の通りで、第二の通りが同様三十二軒、合せて百十五軒迄は數へたが、文字通りついに食傷をおこして匙を投げた。

これら喰ひものの屋臺店にはさまつて、福興軒調髮所と銘打つた看板に御丁寧にも、カンイリハッドコロと捨がきをしたント床屋のあつたことは一興である、それが又千客萬來で、鏡一つない正眞正銘のカンイリハッドコロに、いが栗の髭むしやがビール箱へ斜に構へながら、極めて嚴肅な顏付でヂャイヂャイとやられてゐたのにはわれら尠からず意を强うするものがあつた。

も一つ不思議な繁昌は、三德脚絆と銘打つた新商賣往來である。地體日比谷のまん中で卷ゲートルの繁昌も第一の不思議であるが、東京文字通り燒野ヶ原に化せしものか、古タイヤ應用とかの此の卷ゲートル賣れること賣れること九時から正午迄でに十七圓とある。そう言ふ間にも、

「全くこれなぞ聖代のありがたさだね。」

言ひ乍ら件の脚絆を一着に及んで立ち去つた人品卑しからざる背廣の男があつた。聖代のありがたさはいかにもご尤も千萬である。

一の通り二の通り三の通りの食傷新道をはずれたところが、當今名にし負ふ日比谷バラック街である。さすがに秩序整然と言ひたいが、實は甚だ不秩序不整然、ふとんを干すもの傘を干すもの怪しからざる赤い切れまで雜然混然と表通りの軒先へつるした間に、タバコと言ふお手製の赤い看板はいかにも新興日比谷バラック大通りである。それに並んで八百吉、魚米、なん

とか屋の荒物屋、これを下町目貫きの大通りとすれば、山の手は差しあたり奥通りの軒並みであるが、その大通りにはさまつた救世軍出張所の表書に身の上相談も致します。手紙の代筆も致します。と言ふ添書のあるところから判斷すると、ここの下町山の手住人はたいてい想像にかたからざる種類のものである。それとも元來救世軍と言ふ代物、この期に及んで代書屋の苦手にしかなれない程のるうづものか、そのお隣りがまたけつかうなる共同便所であるが、そこの便所の貼紙が珍妙無類こんな時にでも生れてみねば二度とお目にかゝれない御制札である。

事少しく尾籠にわたるが、御制札の文に曰く、大小便は憚りへ、塵芥はごみ箱へなんとも嬉しい話しである、若しそれ御制札の文に添ゆるに、大きな袴は大人の袴、小さなシャツポは子供のシャツポ、犬が東向きや尾は西に向く、雨の降る日は天氣がわるい云々の祭文を以てせんか、文意初めて通ずと言ふべき制札愈々功多しと謂ふべきである。

半ば感に堪へつゝ、半ば憤り乍ら漫然と御制札を判じてゐるところへこのどさくさに人込みを縫つて、豆自働車を操つる不逞漢があつた。

明治神宮參拜歸途五大洲と言ふ貼紙の麗々しいところから判ずるに、車の主はその昔紳士と言はれし階級に屬せし一人である。明治神宮參拜歸途など自家廣告もど可嗤な話しであるが、美辭のあるじが車をとどめて自ら八百屋の店頭に降り立ち乍ら、子茗荷十錢せうが十錢青とうがらし十錢の買ひ出しをこころみたのは、これも亦ときよ時節である。

しかも參拜歸途先生の言ふことがたま感に堪へた。

「なあおい八百屋！　俺ら買ひッぷりよく買ふからな。お前もまけッぷりよくまけろよ！」

たかゞ三十錢の買ひ出しにこれが新東京の江戸ッ子である。

われらつひに怖れをなして、怱遽くびすを丸の内に向けた。

丸ビル内外

この界隈の雜閙なんと言つても今のところ東京一である。就中警視廳帝劇燒跡前の堀端に、一列一隊ズラリと繪端書屋煙草屋など露店の並んでゐたのは、われら三たび舌を卷かざるを得なかつた。

マスク召しませ、マスクは要りませんか埃りよけのマスク、道にろうたけなる聲にて叫ぶものあり、顧みれば女のマクス賣りである。忽ちにして惻隱の情を起し、奮發して二個を購ひとつた。一ヶは即ち彌次郎兵衛一ヶはまた喜多八、と言ふのは表向で、女なるが故に要りもしない分迄買つたと思へば腹も立た

ぬ道理である。

丸ビルは丸ビルだけあつて、表側沿道露店の中に喰ひもの屋一軒見當らないのは、さすが見あげたものである。人込みを縫つて行く程にたまたまわれらの記憶に上るものがあつた。春陽會新進洋畫家M君の發頭で、此頃店を張つたと言ふ大震大火藝術寫眞の露店である。M君來訪の砌りの直話に依ると、この澁指に簿記ダコの出來た他稱自稱文化人の多いせいか藝術寫眞なる四字に飛びつく程の殺到で、二つ切り一枚五十錢の代物おひるから三時間に純益九十圓の賣上と言ふ自慢話だつたから、なにがな一食いたしめる考へで血眼に探しまわつたが、惡運強くもわれらのまなこに止まらなかつたのは殘念である。

その腹立ちまぎれへもつて來て、罹災美術家後援會なる名のものに、髮の毛ばかりやゝこしい黑ネクタイの御仁體が一兩人怪しげなる肉筆畫を前にし乍ら、

「只の藝術品とは違ひます。中には帝展二科に入選した人たちのものまでが交つてゐます。どれもこれも實感と血をもつて描かれた眞の藝術品ばかりです。賣つて儲けようと言ふのではありません。またと得難い實感と血の藝術品を少しでも多くみなさんに共鳴して貰ひたいんです。」

云々の名演說で五枚一組一圓五十錢を鼻先へ突きつけられたのには、われら尠からず當てられざるをえなかつた。賣つて儲けたくないものに、罹災藝術家後援會もすさまじい話であるが、實感と血の藝術に共鳴しろ云々の口上に至つては全く自警團以上の物騷さである。

さて肝心の丸ビルそのものであるが、白狀するとわれら丸ビルはこれが初めての見參である。花月がどこにあるやら、森永がどこにあるやら、一向無智文盲のくせに、さも知つたかぶりでともかくも群集のあとに隨つた。

丸ビルのこの大通りなる程きゝしにまさる大繁昌である。いかにも新銀座大通りと言ひたいが、これを直ちに古への銀座通りに擬するに就てはわれら大いに異議ある一人である、店頭裝飾ことばかりは秩序整然いかにも銀座の模型には相違ないが、元よりこはこれ一個の屋內街である。いにしへ銀座の絢爛に比すべきものもなく、またその明るさ雄大さおちつきさに比すべきものなく單にいやしき一個のアメリカズムである。これを以ていにしへ榮華の銀座に擬することなさんか、銀座たるもの甚だ瞑しがたしである。

要らざる氣焰はこの位でぬきにして、われらも人並に地下室へ赴いた。丸ビルへ來て地下室を知らざるは今樣江戶ッ子でないそうだから、御意はわるいが腹はよし、ついでに一飯したた

めんためである。

こころでいざ地下室へ赴いてみて、忽ちわれらは癇癪玉を破裂させた。こしをかこ言ひ、吉野ずしこ言ひ、花月元より中央亭の食堂まで悉く押すな押すなの雑閙にはわれらいちじるしく肝を冷やしたからである。時節柄一應はならぬ勘辨もする氣になつて、一飯六十五錢のランチを求め乍ら辛じて席に着くここは着いたが、まつてもまつても對手にされず、つひに勘忍袋の緒を切つた。

「おいもうめしなんぞ要らないよ。」

珍らしく啖呵を切つて釋然こ飛び出したのはまさに十二時五十八分、もう一時間早ければ丁度地震の時間である。

「おいこら血あり涙ある國士はゐないかッ。」

そこへあいにくこの一喝であつた。

何人が叱咤したのかこにかくわれらの頭上めがけて忽ちこの霹靂一聲であつた。ちいさくなつて恐る恐る顔を擧げるこ、これはまたなんこ言ふご苦労さまなこごか、國士甘粕大尉助命歎願運動なるもののお歴々たちである。

聞くこもなしに聞いてみるこ、國を紊し國法を犯し、社會を毒した大杉榮を義に依つて誅戮あそばした天下の國士甘粕なんこやら憲兵大尉が今や獄裡の人こなり命旦夕に迫つてゐるので

その助命歎願なる大義名分の元に、忠勇なる臣民等の歎願連判狀を作製するについて、感ずべくもお歴々が朝から毎日こうやつて出張するんだそうであつた。

傍見するに、はげちよろなる二脚のテーブル、薄つぺらな野紙の連判狀、先のちびかゝつた毛筆數本、墨汁印肉いかにも忠勇なる臣民等には甚だふさはしい代物である。

然るになんこ言ふ不了見者が、相憎ここのあたり今様江戸ッ子ばかり多いこみえて、大義名分なる件の連判狀甚た寂寥々なので、はてはおいこらッ血あり涙ある國士はゐないか、こ言ふ霹靂の一聲に及んだわけである。

そうこ決ればわれらその覺悟をもつて初めから出直ほすべきであるが、相憎われら甚だ空腹に堪へかねた、不敢取敬意を表して直ちに出發、道を丸の内仲通りに選び、日日報知の幸運を祝し乍らそれより數寄屋橋、今は昔日の面影みるべきもなき銀座四丁目から淺草行の乘合自動車に身を投じたのである。

ここはまた全くの荒寥たる都、今にして猶ほさまよへる人影さへみこめえず或は戰禍の荒廢にも比すべきか　車中悉く口を緘して、元よりわれら話し掛くべき勇氣も起らず、ぽつねん唖然こ京橋日本橋をよぎり、やがて車は廢趾の道に濛々こ砂塵を捲き乍ら、本石町から南へ折れて、小傳馬町淺草橋、厩橋雷門、

一瞬にして同じ燒け址の淺草に着いた。

淺草寺

四邊寥々千里一望悉く廢址の中にひとり巍然と聳ゆるものはこれぞ靈驗あらたかなる金龍山淺草寺である。大變當時善男善女のいやちこなる巷說に依ると、當夜火焰が奥山に迫まつた時忽焉として境内の手洗鉢が瀧なす水を噴出して、辛くも淺草寺を火焰の下から救つたと言ふことであるが、そのため火難よけの御護札口に五百圓の賣上げに及んださうで、それもあとになつて詮策すれば、新門一家が必死になつてここを先途に防いだために辛くも火難を逃がれた得たとか、聞いてみれば甚だ有難からざる咄しである。

中店大半牛めし天ぷら一皿二十錢のにぎり鮨に變り乍ら、押すな押すなの大繁昌はやはり靈驗あらたかなるか、就中不思議なものは、このどさくさに洛驛として絶えざるお上りさんの一隊である。

東京大變と聞きつけて觀音さま大變と勘違ひしたか、いづれにしても御信心感服の至りであるが、われらついぞ今まで賽錢など思ひも寄らなかつたのに、この日ばかり烏目一錢の賽錢にあやかつた。

この次六十八年目の大震火災にも燒けたくないためではなくて、要はこのあたり殺氣立つた地巡りに張り倒されたくないためである。

然るに何ぞやこの雜閙に、進榮講なる旗押ッたてて年若き二三十名の一團が男女入りみだれて酒に狂ひ乍ら、白晝蹴出した捌いて練り歩くとは、われら聊かかッとしたが、元より膝栗毛の彌次郎兵衞である。大増の天ぷら鼻を衝くしきりなるを幸ひにたまりかねて駈け込んだ。ここの雜閙丸ビル地下室以上であるか、背に腹は替へられぬ。金一圓の食券を求めて、時計をみたら三時であつた。また時計をみたら三時半であつた。みたび時計をのぞいたら丁度かつきり四時であつた。一時間に垂んとして、われらの食卓は未だに空虚である。以て繁昌知るべしであるが、聞いてみれば食券だけの品物をめいめい勝手に持つて來て食べて下さいと言ふことであつた。無愛想冷過言語同斷であるが、それをしも怒り得ざるところがこの邊繁昌の實際である。

歸りが玄關脇往來に面しておやぢがせつせと海老の皮をむいてゐたので、

「親方日に何匹位むくかね。」

興あることに思ひ乍ら聲をかけた。

「なんですつて、何匹ですつて。笑談いつちやいけまんぜ！」

然るに大變な横暮である。

「ね。あツちやね、かうやつて朝八時から晩の六時まで海老ばかりむき通しなんですぜ。笑談ぢやありませんや。」

言ひ乍らもぶちりぶちりとむく手を休めなかつた。一萬匹か十萬匹か話半分にしても厖大なものであるが、隣りをみると一つ宛大鍋を抱へ乍ら、二人の若い衆がわき目もふらずにむいた海老を揚げてゐるので、

「親方たちも揚げづめですか。」

今度は敬意を拂つて遠くから聲をかけたが、勿論と言ひたげな顔つきでふり向きもしなかつた。

恐れ入つて逃げかけたうしろから、

「旦那旦那新聞に書くなら百萬匹ぐれえにしといて下さい。」

おやぢの聲であつた。われら新聞記者に見誤られたのはなんとも光榮の至りであるが、匆々に角を廻つて瓢簞池のほとりへ赴いた。

この邊り昔日榮華の歡樂境、今全く廢址に變り、滿目凡て寂寥々われらのまなこをおはしむるまた切である。

何館の燒け跡であるか、まだ煉瓦など完全に片づけやらぬ一隅に只一人蹲り乍ら、專念に腮髭をぬいてゐる法皮、もも引顔色憔悴の一老夫があつた。

みると毛ぬきに使用してゐる代物は五錢白銅らしいもの二枚であるが、このヂオゲネスそもいつたい何んの哲學を案ずるか廢址にひとり夕色を浴びたら、釋然と腮髭をむしるなぞは、甚だ見あげた度胸である。

遮莫、滿腹となればわれらも最早や覺悟はついた。この上は問題の辻君詮議である。このごさくさに辻君の詮議なぞ、不埒至極甚だ怪しからざる了見であるが、この界隈毎夜辻君の出没しきりなりと言ふ巷間の風說專らであるから、大正の辻君はどんな厥莫座を携帶に及んでゐるか孫子の代までの語り草に今宵要らざる詮議を思ひ立つたのである。

瓢簞池のほとりにかつこうな縁臺を發見して、われらは初めて尻をおちつけた。廢都の夕空次第次第に暮色たなびき、暗雲低迷今にも一雨まゐりさうな黄昏である。

時計をのぞくと五時少しまはつたところであつた。辻君いつでもござんなれ！　まさか正眼に構へたわけではないがわれら咽喉首を鳴らし乍らひたすらに待ちあぐんだ。五時半、六時、六時半と時計の進むに從つて廢墟の薄夜愈々晦迷である。

あまつさへ人通りも次第にへつた。雨氣を交へた半夜の風は颯々としてわれらの襟をかすめ、瓢簞池の水面ひとり颱の色にごよめき奥山一帶今や全く鬼氣肌に迫るものがあつた。

折から陰にこもつた木釣鐘の音ごうんと來れば、まさにお誂へ向きの辻君時間であるが、さう簡單に參らぬところが甚だ業腹である。時計をのぞくとまさに七時、七時とすれば、われら突然うろたへ上つた。こん朝中野をふり出す時は、もし道に行き暮れたならば、バラックになと一夜の宿を借りようものと神妙に覺悟とそつくつてゐたが、今宵しかし辻君に待ちぼけくつて、奥山の縁臺に一夜を明かしたとあつては、われら一世一代の耻辱であつた。

歸へるとすれば、省線は上野終發八時三十幾分である。尠くともこの土地を八時そこそこには立たねばならぬ。元より乘物は市街自動車一つであるが、それまで肝心のその自動車があるかないか不安であつた。

と言つて的を射らずに引きあげるので癪もあるが、心はふたつ身はひとつわれ身體兩難の野望に迷つて、にはかに氣を揉み出したのである。

もう十分、もう五分、もう三分と言つてゐるまに時計は遠慮なく七時半に近づいた。やがてまたその七時半をもよこぎり通つた。斷然決意、勇氣凜然として道心堅固なるわれらに還へりつひて果敢なき辻君の詮議をなげうつたのである。

遮二無二道を急いで日本館燒け跡とおぼしきあたりから道を右へ選みずつと田原町の大通りへ驅けぬけようとするとき、突然横合から

「モシ、モシ」

と言ふ聲であつた。まさしく陰にこもつた女の聲である。確めるまでもなく、殆んど全身の直感を以て、てツきりそれと想像すると、

「え？　あツ君は……君は辻君ですか？」

ふりかへりざま短刀直入にのぞき込んだのである。

「いいえ築地ぢやないんですやきもち坂までゆきたいんですが今から電車に間に合ひませうか？」

「あゝさうさう築地は燒けた筈ですね。さあやきもち坂ならどうですか。」

勢ひわれらも亦白ばくれざるをえなかつた。闇をすかしてよくみれば、大風呂敷を背負つた四十がらみの賢妻良母である。辻君の正體茲に初めて靑天白日となつたわけであるが、辻君がやきもち坂へ歸へるなどとは、下手な落語にもならぬ大失敗である。

滯りなく乘物で歸つたのは十時近くであつた。

上野公園

翌日は一昼の雨もよひ、日程は上野及び神樂坂である。新宿から省線で池袋をまはり上野下車は正に一時。この邊も早や七分通りバラックの軒なみはなんとも頼母しい眺である。山下から石段下まで兩側一面露店屋台店の行列は日比谷公園とほゞ同斷であるが、われらは例のごとくふところ手でぶらぶらと石段を一つ一つ拾つていつた。當てにしていつた西郷さんの銅像に尋ね人の貼紙を一枚も發見しえなかつたのは聊か心寂しかつた。

何新聞であつたかこの邊は已にお祭氣分と言ふ判定を下せしものさへ散見したが、一瞥するにこの判定甚だ當を得たものである。傍人悉く見物人らしいものはわれら初め同斷であるが、就中山上に五分間一金五錢也の双眼鏡屋が悠然と店を張つてゐたのは、公園第一の儲物である。

勸められるまゝに、われらも一金五錢也の田舍者になつた。遠くは深川淺野セメントの大煙突から僅かに燒け殘つて兩國橋國技館の丸天井、隅田川を向ふへ本所一圓、近くは神田日本橋三越附近、一望千里なる燒け跡はさることながら、眼の下廣小路を中心に神田下谷が已に半ば以上のバラック建には、再びおごろきの種である。

七轉び八起の江戸ッ子魂をまのあたり今實見に及んでみれば、ひとごと乍らわれらうれし涙に暮れざるえなかつた。大變當時射殺さるべき運命にあつたとか言ふわれら年來關見なる狂梟の安否がはしなくも今氣にかゝつたので、序でに訪ふ考へで道を動物園に選んだところ寛永寺手前でわれらは偶然にも一人の愉快なる緣日屋に打つかつた。

どう言ふ了見か新東京徹底地圖なるでかでかの看板も愉快であるが、彼の口上がまた頗る聞くに足るべきものである。

「おごろいてはいけないよ諸君。僕はこれでも最近歐米を漫遊して歸つた新歸朝者であるか、新歸朝すると今度の地震でこうこう僕もみぐるみ燒け出された。それまで淺草公園で法律の書籍を賣つてゐたが、燒けて了へば歐米迄いつて研究して來た法律の書籍も賣ることが出來んから今地圖屋になつてゐるが、すぐる大正十三年からはまた淺草で法律書籍を賣る考へであるが、僕の性分としてどうもこの法律の書籍とか地圖とか徹底的なものでなければ賣ることが出來ぬ。そこでかうやつて徹底的に新東京地圖を賣りに出してゐるが、こいつは只の地圖や昔の地圖ではない。東京中徹底的に書いてあるから少し高いが四十五錢である。さあ買ひたまへ買ひたまへ徹底的に書いた新東京地圖。」

全く愉快千萬である。東京が燒けたから古い地圖が不徹底と言ふのも愉快就中過ぐる大正十三年に至つては愈々出て愈々愉

快千萬である。

この上立ち止つてでもゐやうものなら今に徹底的な歐米漫遊談が出さうな形勢だつたから、殘念乍ら動物園は見おとしてわれらも徹底的に廣小路へ引ツかへした。

ひとたび電車には飛び乘つたか、廣小路四ツ辻の沿道にちらほら散見した俥屋の姿をみとめると、われら急に一つの念願を超こして蹌踉とし乍らまた電車を飛び降りた。

一つの念願とはいにしへ繁昌榮華の砌り、われら一度たりとも必要を感じなかつたいはゆる東京の人力車なるものをこの機會に用ひてみようと思ひついたからである。

醉狂と言ふか贅澤と言ふか或ははかなき懷古と言ふか、思へばうたゝ感慨無量であるがそれはさることゝ乍ら、われら心してなるべく罹災者らしい面體の者を選んだ。元より貧者の一燈であるが、こんなことにでも、かこつけてわれらの輕い財布からなにがしか彼等を霑ほしえたら、共に瞑しうると考へたからである。

梶棒をとつた者は四十がらみの憔悴した車夫であつた。

「君もやられた仲間ですか。」

なるべく腰を浮かすやうにして先づ第一番にそれを訪ねた。

「えいえいもう丸裸ですよ。」

しかし甚だ元氣であつた。

「俥まで？」

「勿論でさア。」

「大變だね。ぢや公園のバラックにでもゐるんだね」

「どうして、たとへ足一本になつたつて生れた土地が離れられますかあ。あッちなんだアもう四日目から燒け跡に小屋つくッたんですからね。こんなこッてへこたれたんぢや全くこんにちさまに申し譯ありませんやな。」

「さうとも、さうとも。」

言ひ乍らもわれら突然不覺にも眼がしらのうるむのを禁じえなかつた。

「却つてこの頃ぢや大當りでさあ。」

「うれしい咄しだね。」

言ふまも俥屋はホラヨッホラヨッとまさに意氣沖天である。

飴ん棒のごとくなくなに燒け落ちた萬世橋驛を右に見て、俥は須田町を左へ曲り今川小路を迂回して九段下から牛込見付へさしかかッた。

ホラヨッ、ホラヨッ、いまだに俥屋は意氣沖天である。

「おい大將もうすこし不景氣にやつてくれ。」

このあたり燒け跡にお手製しバラックをしつらへて侘びしく

佇まつてゐる程災氏の姿を見るとさすがにわれらは氣が引けた

「なあに旦那このぐれえな坂一息でさ。」

不景氣と言ふ內容を彼は彼並みに坂路に結びつけて考へたが俥屋は愈々意氣昂るものがあつた。

「あ、もう、降りるよ、降りるよ。」

われらはつひに堪りかねて坂の中途に梶棒をおろさせた。

二兩四貫と言ふところを三圓奮發して、ひそかに車夫先生の多幸を希ひ乍らこそこそと裏通りから見付際へさしかゝつた。

見付際壕ばたのやなぎ、さくら、僅かに秋色を垂れこめて、こゝばかり秋氣淸しの趣きがあつた。低徊なんとなく去るに忍びず、さまよふまゝに時計はやがて四時である。

神樂坂

この大通りわれら半月程前に菊池寬大人にいざなはれて、川原屋のビフテキを食るべく訪れたときは、野天に寄せ鍋のさらしおでん、艶めかしき女の水さんやなぞ、いまだに不思議な人氣であつたが、今はそれらも夢の跡、人氣あまり平日と變るところがなかつた。

丸ビルをもし新東京の銀座と誇稱するなら、こゝはまさに新東京のエッセンスである。兩側の店頭道行く人々の人氣、舊都の趣きを崩さずに傳へてなんとなく心ゆかしき落ちつきを見せてゐるのはうれしき惱みである。

一端こゝまで來た上は名物神樂坂の夜店も見ればならぬ。夜店にはまだ時間は早し、その一時を腰かけにと言つては失禮であるが舊友佐々木茂索の居をおそつたところ、生憎まだ歸つてゐなかつた。家人に聞けば、時間のところはいつ歸へるやら保證出來ませんよと茂索甚だ不評判である。失望してぶらぶらと歸路についたところ坂下なる名物屋の表先からはしなくもいようとわれらを呼びかくる者があつた。

見すかせばこれぞ即ち當の佐々木茂索である。座にあるもの澤正の紺だ皮着用に及んだグレざんこと坂本紅蓮洞氏、長崎渡來の詩人渡邊庫輔君、紅顏の美少年武川重太郎君、やがてまた入り來たつた古加爾視れ、甚だ多士濟々ある。首尾よくわれらも仲間うちに割り込んで一行は神樂坂をぞめき乍ら練り上つた。

神樂坂の夜店漸くにして華を加へ、耳かくしのわやめ黑繻子襟の女脂粉を引いて押し歩くあり、都の夕べ玆に至つて今や價千金である。

われら一端茂索道人の居に引きあげたところ、やがて偶然にも菊池寬大人久米三汀先生加能作次郎氏お歷の御入來があつた茂索とわれらの兩人を加へて一行は新たに五人、再び神樂坂を

練り下り田原屋に陣取つたのは九時近くである。
「おい君はいやに悠然と構へてるね。」
われらを顧みて菊池初段の叱責であつた。その舌の根の乾かぬ下から、
「しかし僕たち冗使ひの癖はなかなか直らないね。」
同じく菊池初段である。若し地下鱠公これを聞かば、ぢや直るまで揺ッてやらうかと言ふかどうか。
「なあに分相應に暮す方がいゝんだよ。一般が窮ほうからね。」
それを引き取つて久米三汀先生、分相應の暮らしとは蓋し穿ちえて最も妙である。より分相應に暮らさんために、より新鋭的に働かんこと、當今第一の緊急事である。儉約質素元より可ならんも、この際かゝしき退嬰泣きごとは大の禁物、分相應に暮らさんとの心意氣われら共感して止まざる言である。
これを要するに神樂坂と言ふところ、分相應の者つどひ、分相應に押し歩き分相應に繁昌する分相應のところならんか。ただ一つ分相應ならざるものは、この遊里の大繁昌である。仄聞すれば最早先月七八日頃から日に幾組も藝者のおひろ目があつたとか、人心未だ流言蜚語に恟々たるとき已に紅裙のおひろ目は、思ふに赤坂新橋葭町あたりの先覺者が期せずしてこの土地に遠征したためである。
「しいんと靜まりかへつて、恐ろしく繁昌してるんだね。」
これは茂索道人の評言であつた。この評言意味深長、これ以上の説明は聊か憚りあれば、われらも筆を曲げてお次へ取りかからう。

靑山墓地から道玄坂

三日目、この日初めて天高く秋氣清し、とでも書くことが出來たならばわれらも甚だ張合があるが前日同樣の雨もよひ、日程は靑山墓地から澁谷道玄坂である。こゝへ墓地を差加へたからとて、死人が多かつたからさぞお墓場も繁昌したらうなぞと早まつてはならぬ。すご六ならばもう一息と言ふ「上り」を前にして一囘休みと言ふところ、要は大變當時至るところの石碑が倒壞に及び、石塔直しなる新商賣が寺々墓地に大繁昌と言ふ風説を耳にしたので、道の序でに一寸詮議を思ひ立つたのである。
三聯隊前で電車を棄てた。前夜の雨にしッとりと心地よく濡れた坂道をわれらは喘ぎ喘ぎ登つていつた。地上の狼狽大變をよそにしてこゝばかり永劫不變の靜寂は思はずわれらも襟を正した。
八九分坂を登つたところで、一名の見習士官に引率された十二三名ばかりなる國家の干城が、折から斥候演習の眞最中であ

つた。われらの姿をいち早く認めた見習士官はにやりと恥づかしさうな一瞥を與へ乍ら、

「……只今突然敵の斥候が一名現れた……とした第一歩哨線の斥候はどう言ふ行動に出るかッ。」

その愛する干城達に當意即妙の問を發した。只今突然現れたと言ふ一名の敵斥候とは即ちマントを着流したわれらのことである。

秋日麗々この人達ばかりはまだ何んと言ふけつかうの御身分であることか。時節柄敵斥候が不逞斥候に變らないうちにわれらは二十日鼠のごとくこそこそと墓地中に落ち伸びた、

氣がつくとわれらはいつのまにか、烏島羅災記念碑なるものの前迄落ち伸びてゐたことを發見したのである。烏島とは豐葦原かアラスカか時理にうといわれらには初めての名前であるが羅災の二字が時節柄強くわれらの心に映つたのでいたく興あることに思ひ乍ら、裏へ巡つて碑文なるものに一應眼を通したその文に曰く、

烏島噴火居民皆死上下痛悼。
皇帝。
皇后
賜金恩恤四方悄者弔之者亦數萬人玉置半右衛門開拓本島者也將建碑以慰死者。
威仁親王特書烏島羅災記念碑七大字賜之嗚呼死者可以瞑矣海內有圖南之志者亦可以感興也云々と。

一讀一過、海内有圖南之志者亦可以感興也とはわれらも共に亦以て感興すべきである。若し將來東京羅災記念碑を建てる時があらば、同じく海内有東京病之者亦可以感興也と一喝されるかどうか、要らざる詮議立て乍らわれら甚だ氣にかゝらざるをえなかつた。

「お詣りですか。」

丁度そこへうしろから何人か男の聲であつた。ふりかへると着流しに半纏をまとつた屈強の男である。

「あゝさうだよ。」

一見直ちに例の石塔直しと判斷がつくや否やわれらもお詣り者らしく空とぼけた。

「お墓はどちらさまですかお供しませう。」

揉み手をし乍ら箆箒を携へてわれらを促した。

かうなる上は義理にもどれか一つ間に合せの墓表を見つけねばならぬ。

「この通りだと思つたがな。」

出たら目に歩き乍ら、あれかこれかと倒れた墓表をいちいち

讀みあけて、なるべく好きさうな戒名を、またなるべくつゝましくさゝやかなあまり人の注意をひかないやうなものをわざと選んであてずつぽうに探しまはつた。

　辛じて見つけたのは愁操院千鶴妙貞大姉碑と言ふ一基である戒名はさることゝ乍ら、俗名杉山千鶴子行年二十一歳のその二十一歳がいたく心を惹いたからであつた。

「これだがね。すツかり倒れちまつたね。」

　われらはもつともらしい顔つきでつかつかと中へ這入つた。

「なる程こりやひどく倒れましたな。ひとつ起しておけませう。」

　石塔直し屋も尤もらしいおくやみを言ひ乍ら、やがて軽るがると行年二十一歳を墓碑の上へ起し直した。

「お前は生きてゐなくて却つてしあはせだつたよ。」

　われらはさも行年二十一歳が有縁の者でゞもあるらしい口吻で、出たら目に墓表へ言葉をかけた。

「このなには旦那のなんですか……奥さんでゞも御座いますか？」

「あゝ家内だがね。若くて死んで、今ぢや却つてしあはせと言ふもんさ。」

　ふき出しさうなのをこらへこらへわれらは神妙なうそを吐いた。

　この邊でもういゝだらうと思つたから、

「お彼岸時分は石塔一本起し賃が一圓五十錢から三圓もしたさうだが、今でもそんなにむさぼるかね。」

　實際われらの耳にしたところに依れば、人品を見て三圓二圓一圓五十錢とだんだんに吹つかけると言ふ噂しだつたから、急に痛いところを一本あばいた。

「いゝえ。その……一圓でも八十錢でもほんのお志だけでいゝんですよ。」

　然るに石塔直し屋はなんと思つたかにわかにうろたへ出した。

「こんな商賣は鑑札もないんだらうからね。あんまりぼらない方がいゝね。」

　別にわれら刑事風情の聲色を使つたつもりではなかつた。が彼の狼狽があまりに甚だしかッたので、つひ相手からからかつた。

「えいえ、もう旦那方にやいつもお世話にならなきやなりませんから、そんなひどいことをしませんよ……どうも失禮しました、さいなら。」

　不意に石塔直し屋君は逃げ腰になつた。

「おい、一圓やるよやるよ。もつていきたまへ。」

聊か氣の毒に思つてわれら呼びとめ乍ら金をつかみ出したのに、

「いゝえけつこです。けつこです、旦那方のを頂いちや申し譯ありません。」

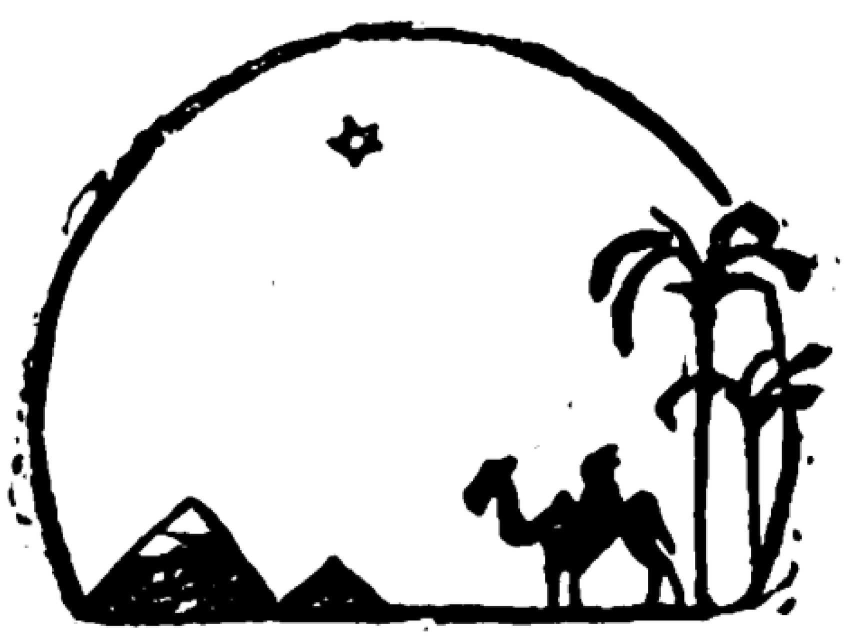
彼はすツかり逃げ腰でうけとらなかつた。

言ふまでもなくこの彌次郎兵衛こん日はからずも刑事と見誤られた次第である。

これも今は多少の緣とでも言ふべきか、改めてわれら行年二十一歳女史の墓表に向つて、心から目禮を施すと、いまにも降りさうな空合を氣にしながら、墓地中通りを青山へ向つて急いだ。

上り改造

われら最初の日程に依ればこの次澁谷道玄坂、翌日本郷白山通り、再び還つて新宿四谷の夜店、喜よしの寄席瞥見記、及び新宿遊廓のぞ記、等々順を追つて膝栗毛をすゝめる考へであつたが、急に話しの腰を折つて斯くのごとく「上り」を急いだ理由は、限りある約束の紙數已に多分に超過したのと、一つは改造「上り」をしきりに急いだためである。殘念と言へば殘念であるが、下手くそな長道中記この上だらだらとお目にかけて、諸子の御叱責に遭ふのも業腹だから、不敢取一端擱筆、續新東京繁昌記をわれら再び筆を執るとすれば、この次六十八年目大地震以後のことである。(十二年十月十二日)



自警團夢物語

岩谷四郎

第一夢

私の町内でもエスキモー人がいたづらをすると言ふ評判はなかく大變であつた。近所に電信隊があるから大丈夫だと言ふ說と、あるから危險だと言ふ說と兩方各々意見があつて、なかなかうまく纒まらなかつたが、とにかく有志だけで警戒しようと言ふことに決まつたのは確か二日目の晩からである。

柄はとにかく私なぞ少し力のあるエスキモー人にでも出合つたらひとたまりもない筈であるが、なにしろ怖い一方であるし精神も少し錯亂してゐたので、そんならばと言ふので相當身支度をとゝのへて紅林醫院四ツ角へ陣取ることになつた。

この紅林醫院四ツ角と言ふのは私の町内で言ふと丁度第一要塞である。中野三千三百番地と言ふ土地は言はゞ眞ツ四角な一廓で紅林醫院四ツ角はつまりそのうちの一角であるから、第一でなければ第二か第三か、とにかく目ぬきの要塞であることは事實であるが、私がそこを選んだのはほんの偶然であつた。別になにか腕に覺えのあるところからそんな重要な箇所をわざわざ選んだわけではなくて、本來ならば私達大尾を交へて船田齋藤なぞ文藝春秋社與太者六軒でもつて、門脇のところかなんかに威勢を張つてゐたらすむべきものを、つまりは向ふの要塞が第一人通りも多くて退屈をしないところから、もひとつ紅林田中なぞと言つた諸君が話し好きなところから、私の方でもちよいちよいと油を賣りに行くうちに、とう〳〵そこへ割り込んで了たわけである。

そうは言ふものゝ本當を言へば、第一要塞四ツ角から踏み切り一つ隔てゝすぐの向ふは電信隊の正門で、正門には勿論着劍

した歩哨も立つてゐられることだし、それにもひとつ田中氏がおもちやのピストルを用意してゐられたところから、私としてはそんな風になるべく武器らしいものゝ多いところを選んだわけで、幾分は臆病風が手傳つてゐたことも事實であつた。

　そこでこの私が初めに見た第一夢の話であるが、夢物語だから元より嘘半分であるが、四日か五日の晩である。

　十二時近い頃であつた。毎晩のことだから珍談奇談も種がつきて一同ひどく退屈してゐると、停車場大通りの方から電信隊正門に向つて、極く靜肅に靴音を鳴らし乍らやつて來たなにか只ごとならぬ十二三名の怪しげな一隊があつた。

「そらエスキモーだッ。」

と言ふので怖いもの見たさの私を初め、紅林田中と言つた連中がどや〳〵とやつていつたところ、果して七八名の着劍した兵隊に前後から護衛された四人連れのエスキモーである。

　三人は學生らしい大柄なエスキモー諸君で、一人は束髮に結つてちやんと袴をはいたまだうら若い女學生であつた。一體この邊で私などが耳にしたエスキモー人のいたづら騷ぎと言ふものは、現に中野の本町邊や淀橋柏木あたりで哀れな最期を遂げたとか言ふ目撃談に從ふと、なにか藥罐とか藥瓶とかまたは竹筒風のものを所持してゐたそうでいかにも一見いたづらをやりそうなエスキモーばかりであつたそうなが、ところがこの四人の諸君は一向そんな風な容子も見えず、就中女學生氏のごときは、極く靜肅にいさゝかも取りみだしたらしいところが見えなかつたので、實を言ふと最初暫くは私なぞすつかりその釋然とした態度に感服してゐたものであつた。

　するとその兵隊たちの最後の方に二人ばかりなにか職人らしい風の日本人がゐたので、

「どうしたんです。どこから連れて來たんです？」

とにかく彼等に容子をきいてやつたところ、

「いゝや仲間に一人おッちよこちよいがゐたんでね。」

ところが返事は實に意外である。彼がかいつまんで話したところを聞いてみると、話手はまだ二十七八で小柄なごく溫順らしい職人風であつたが、彼と一緒にやつて來たも一人の職人風がつまり仲間のおッちよこちよいと言はれた奴で、その奴が彼等自警團中で一番乘りの功名手柄を現はそうと言ふところから、つい近所の電信隊裏あたりに下宿してゐて、平生から幾分顏見知りで、ごく溫順善良と言ふことがわかり切つてゐた先程の四人連を、遮二無二引ッ張り出して來たんだそうであつた。なんでもその先程のエスキモー諸君は四人兄弟で二階借りをしてゐたんだそうなが、町内自警團の者たちでさへよせよせと止

てゐたのを、大分脅迫かましいおどし文句でそ奴一人が殺てゐたところを連れ出したそうで、四人兄弟のエスキモー諸君もつひに覺悟を決めたものか、

「僕たちエスキモー人として生れたのが不運でした。やむをえません。あなた方ご自由のおしおきに遡ひませう。」

流暢な日本語で覺悟の程を答へ乍ら、從容として兵隊の手に引き渡されたんだそうであつた。

聞いてみて今度は私が怒り心頭に發したのである。學生と言ふことも分つてゐて、平生から善良な氣心と言ふことまでちやんと諒解がついてゐたに不拘、それをおどし文句でしかも自分一人一番乘りの功名を建てようと言ふやうなボテふり根性から無理矢理引ッ張り出したなぞと言ふに至つては、それだから日本と言ふ國のプロレタリアと言ふ代物が一體全體氣に喰はなかつた。

「どうしました！どうしました！もう四人とも電信隊へ這入りましたか！」

うろ〳〵し乍ら探しまはつたが、もうあとの祭りであつた。口惜しいやら腹が立つやら、癪に障つて實際私は、畜生めッと怒鳴り乍ら、力なくその場にへたばつてしまつた位であつた。壓制、暴虐、大和民族の馬鹿野郎、私は最早八ッ當りであつた。人道上とか政略上とかそんなやかましい問題はぬきにしても、第一エスキモーであれば、全部袈裟まで憎いと言ふ考へがそも〳〵いけないのだ。エスキモーだからとて、芯から信賴尊敬するに足る諸君があるに違ひない。高がいち職人風情の獨斷で、それをまた默つて兵隊の手に渡す町内の自警團員も大馬鹿野郎の三太郎であるが、就中先程四人連れのエスキモー諸君が言つたとか言ふ僕たちエスキモー人として生れたのが不運でしたと云々の言葉を思ひ出すと、私は全くゐても立つてもゐられない氣になつた。

おそらく彼等は死を覺悟したに相違ない。異郷の空ではからざる天變からはからざる死を覺悟したに相違ない。又從容として縛にもついたに相違あるまい。そうでなければあれだけの落ち付は起きないに違ひないのだ。どうせ死ぬならぢたばたしたくないと覺悟がついた故に、女は髪も結ひ着物も着換へ袴もはいて、男達はまた制服に換へて、釋然として神妙に靜肅に曳かれて來たに違ひないのだ。と言ふ風に考へてゆくと、私は全く心の平靜を保ち得なかつた。とりわけ女學生の身になつて考へてみると、まだうら若いこれからと言ふ年頃で、それも前後を着劍したむくつけき兵隊たちに圍まれ乍ら、無智文盲狼狽することばかりしか知らないどこかの國の馬鹿野郎たちから、あれ

がエスキモーかと言ふやうな指彈を遂られてそれをしも猶ほ最後まで女一通りの身だしなみを忘れないで靜々と女分死なねばならぬであらう道に向つて急いだその心根を想つてみると、なんとしても私は惻隱の情を起こさないわけには行かなかつた。女とあれば至るところでみだりに惻隱の情を起こして面目次第もないが、實際その時の私の心持は笑ひごとでなかつた。

出來るものならなんとかして、どうにかして救ひ出してやりたかつた。それも全然不可能ならば取扱ひだけでもせめてお手柔らかに願ひたかつた。それも全く絶望ならでせめて私の衷情だけでも、なんとかして先方に通じさせたかつた。

そこへひよツくりやつて來たのは、同じ町内で私が年來の碁讐、親愛なる川大教授の太田黒君である。私はすぐに逐一を物語つた。また私が微衷の程も一通り申し述べた。

「そうですか！　そいつあ怪しからん。よし私が一つ骨折りませう！」

天下稀れに見る熱情家の太田黒君は自分のことのやうに憤つて即座に電信隊へ掛け合ひに出かけられたのである。

それと入違ひに、

「あのう、もう四人づれのなにはエスキモーのお方は電信隊へ連れ込まれたんでせうか。」

息せき切つて駈けつけた二人の自警團員があつた。

「這入りましたが……どうしたんです！」

私もすぐに問ひ返へした。

「そうですか。一足違ひで殘念でしたな。困りましたな。」

いかにも殘念そうな容子だつたので、委細を聞いてみると全く怪しからん話しである。駈けつけた二人と言ふのは先刻引致された四人兄弟に二階を貸してゐる家の主人とも一人近所の者だそうで、主人と言ふのは省線電車にでも勤めてゐるらしい車掌風の人で、その人の話に依ると、脅迫に來た職人はどこか魚屋のボテふりだそうなが、ひるま一度四人連を引き渡せと言つて怒鳴り込んだ時はどうにか主人が追ひ返へしたそうであるがまた夜の十一時頃に再び寢込へ怒鳴り込んで、善良な點溫順な點を極力主人が保證辯解につとめたところ、背後から初めにブツコロスと言ひ乍ら、やにはに懐へ忍ばしてゐた出刃庖丁を突ツさしたそうである。

「……なんしろ向ふは氣が立つてゝ、それに魚屋ぢやあるしね、ほんとにヅブリとやりかねない權幕でしたからな、止むをえず私もあの人達四人を引き渡したんですけれど、なんとかして身柄だけでも渡して貰へる方法はないでせうか！」

話し乍ら車掌風の主人も全く心配に堪へないと言ふ風であつ

た。

「そうですか。實ア私もさき程大體を聞いて實に憤慨に堪えないでゐるところなんですが、とにかく週番司令に掛け合つてみたらどうです。あなた方は私より直接關係も深いしまた證明する上でも好都合な位置にゐるんですから、逐一話して貰ひ下げたらいゝでせう！……それでも軍隊で釋放しないとあれば止むをえないんですが……これは私一個の考へですが、こう言ふ間違が動機になつて、今迄善良だつた者までが急に考へを一變させないとも限らないんですからな。私はそれを一番心配してゐるんです！　釋放しないならばまたその樣に軍隊の手で、四人の諸君によくそこのところを諒解するやうに言渡して貰ひたいんですがな。實は諸君の身邊が危險だから保護を加へたんで、決して蹂躙したんぢやないからつて事を先方の納得がいくやうにでゝな、諒解のつくやうに言渡して貰ひたいんですが、それさへ軍隊の方で肯んじなかつたら、あなたからでもそのところをよツく四人に話したらどうですか！　四人の諸君がそこを諒解してゐるかゐないか私も實はそれがなによりの心配なんです。逢つたらどうかその心持を先方へ話して下さい！　話して下さい！」

　私もすつかりむきになつて滔々と愚見を申し述べた。すると件の車掌君が、

「あツそうでしたかツ。あなたもそう言ふ御意見でしたか！　そうですか！　そうですか！　僕愉快です！　愉快です！　實アそう言ふ考へがあつたものですから駈けて來たんですが、よく申します！　よく傳へます！　きつと先方にそのお心持を納得するやうに申します！」

　殆ど私にだきつかんばかりに喜んでおいて、その中にもう電信隊の中へ駈け込んだ。

　それから約三十分程たつてからである。

「さツきのお方は居ませんか！　居ませんか！」

　遠くから歡聲を張りあげ乍ら車掌君がまつしぐらに私達の方へ飛んで來たので、

「貰へましたか！　助かりましたか！」

　私達も口々に叫び乍ら駈けつけた。

「はツ！　お蔭さまで釋放されましたツ。電信隊の證明書も貰ひました！　ありがとうございました！　ありがとうございました！」

　實際心から嬉しかつたとみえてすぐに車掌君も大聲に叫んだ

「そうですか！　そうですか！　なによりでした！　けつかうでした！」

私も亦實際心から喜ばざるをえなかつた。見ると四人のエスモキー人諸君も、眞實心からうれしかッたか、四人共突然不動の姿勢を執ると、感極まッたと言ひたげに吃り吃り、ありがたうございましたありがたうございましたと口々に言ひ乍ら、私達に對つていんぎん叮重な挨拶を加へられたのである。

「けつこでした！　なによりです！　お氣をつけなさいまし！　お大切になさいまし！　ごきげんよろしう！」

私もその時、もしあたりに誰も見る人がゐなかつたら、だきつきたい程に心そこ感極まつて、心から眞實の挨拶を送つた。

氣のせいか私は四人の諸君が特にうら若い束髮の女學生が眼にいつぱいうれし涙をためてゐたやうに思へてならなかつた。或はそれも私の方でこみあげて來たうれし涙を白ら制しかねてつひ淺はかに見誤つたためかも知れなかつた。

意氣揚々として大手をふりふり濶歩してゆく車掌君に伴はれて、なにか喜ばしそうに相顧み乍ら談笑を交はして行く四人のうしろ姿をいつまでもいつまでも見送り乍ら、やがて私は心にそつとこのエスモキー人四人の上に多幸なれ！　眞實心にそつと幸多かれんことを祈つたのである。

それから二十日ばかり過つて私は偶然にも驛前で四人の諸君に出合つた。

氣を揉んでゐられる向きもあらうから一寸言つておくが、私が惻隱の情を起したといふ女學生はせいぜい二十位で、ぬれば色の耳かくしに、あでやかな水色の半襟、白みがかつたセルの單衣に胸高に穿つた袴、かゝとの高いあみあげ靴に、日本の女など傍にも寄れない程な水々しい羽二重餅のやうな肌をもつた百二十點位の別嬪であつたと言ふことだけを附け加へておかう。

第二夢

そのあくる晩であつた。私はまた紅林醫院四ツ角の第一要塞へ警戒に出張つた。前夜の夢に味を占めたと言ふわけではないが、なにしろ毎晩のことだからやはりなにか獲物がないとお互に退屈するとみえて、田中紅林兩君初め丁度そこへ油を賣りにやつて來た齋藤並に私などが、よき獲物ござんなれと言はんばかりに手ぐすね引いて待つてゐると、確か宵のうちのまだ八時近くである。

停車場前の夜警帳場の方からどやどやと二三人で、誰か在鄕軍人風の一人をこちらへ追つかけて來たらしいあんばいであつた。

向ふの夜警帳場から私達の第一要塞までは道のりでほゞ二三

丁であるが、その眞ん中頃が府立農學校脇の暗闇で、丁度その暗闇の邊で連中がさかんになにか聲高に言ひ合を初めたらしいのである。

例に依つて物好きな私はすぐに風を切つて飛んでいつたものであつた。あとから紅林田中齋藤と言つたわが町内の自警團員諸君も馳けつけたが、大體の行きがかりを立聞すると、なんでも追ッかけられた在郷軍人が中は勿論竹光だらうが、とにかく一本長い奴を腰にぶッさし乍ら、丁度向ふの帳場の警戒網にさしかかつたさうで、居合はした町内の面々が、型通りどちらへおいでですかと訪ねたところ、件の在郷軍人やにはに開き直つて、きさまらそれを聞いてなにするかッ！　大喝を呉れたさうである。何條以てたまるべき、居合はせた町内の面々が覘ひかかつて、君のその腰の物はなに品だと詰つたところ、あゝこいつかと言ふやうな科白を言ひながら、がちやりと一つ光つたところをみんなの目先へ見せびらかしたさうであつた。

然るうへで件の在郷軍人氏町内の連中を尻目にかけ乍ら、悠悠とこちらへ引きあげて來たところへ、そのあとを二三名が追つかけて來て、行先をはッきり告げろとか、もう一度その長い奴の中味を改めさせろとかまたそんな風な言ひ合ひをここで初めたのである。

「なんだつて？　行先を告げろだッ！　人を見損なふな。お前たちちつぽけな奴そんに大勢で一體なにをしてゐるんだッ。俺はな淺草で燒け出されて來たんだかな。燒けもしないのにこの騷ぎは一體なんのざまだッ。」

聞いてゐると先生なか〳〵大變な見幕であつた。

「だいちな。きさまら宵のうちから提灯などぶらさげてなんにするんだ。夜警なら夜警らしく十二時以後にやれ。そんなきさまらのやうにどちらへ行くんですかとそいつあなんですかなんて生ぬるいやり方でなんになるんだ。怪しい奴だつたら默つてブスリとやつちまつたらいゝぢやないか。俺はなこうみえても淺草で三人やッつけたんだ。それもこんな腰の物でやつたんぢやないんだ。こいつはなさる大名から拜領した代物だが中味はこの通り立派に光つてるんだ。こんなものゝ力を借る程俺の腕がにぶつちやゐないんだからな。鐵の棒でガンとやつたら、もうそれッきりさ。第一きさまら素人にエスキモーかどうか見分けがつくのかッ。樺太にも北海道にも渡つたことのないくせに！」

腰の竹光をがちやがちや言はせ乍ら大變な見幕である。滑稽なことには切角こゝ迄あとを追つてなじりにやつて來た向ふ帳場の面々が、すッかり彼の見幕に怖ぢけ上つて、流石黑人だからな。とか本職だからそりやなる程ころりと飛ぶだらうな。な

ぞと咎めるどころか頭から感心して了つたことであつた。

それを最ッ先に咎め立てたのは、わが町内の紅林君である。

「なんですつて？　焼けもしないくせにこの騷ぎはなんのざまですッて？　焼けたくないから警戒もするんぢやないんですか一體君のその素人とは何です！　素人だから、素人だから見判けがつくまいとは何が何です！」

怒り心頭に發したかこみかみの邊を痙攣させ乍らにじり寄つたものであつた。

「さうぢやないか！　きさまら素人になにが出來るッ！　家一軒焼けもしないくせになにを騷ぐんだッ。」

ところが彼なかなか負けてゐなかつたのである。今度は向ッ氣の私が喧嘩を買つて出た。

「おい君要らざる喙呵は引ッこめろッ。君は鐵の棒でごうとかしたつて言ふやうなことを吹聽してゐるがそんなこと自慢になることと思ふか馬鹿ッ。君のやうな出過ぎたうろたへ者がゐるから一般に流言に脅えてんだ。僕等はな。なる程素人さ。また焼け出されてもゐないさ。しかしなるべく、そんな流言を囃し立てて女子供を騷がしたくないからこうやつて毎晩賴まれもしないに出ッ張つてゐるんぢやないか。勿論嘘ッぱちの話だらうが、君のその前言を取り消したまへ。またこの町内へ這入つた以上はつまらない自慢話の吹聽は以後愼みたまへ。」

私達町内の意嚮としては條理の立つたところを私も吐露したつもりであつた。

「なんだつて俺淺草から焼け出されてそんな演說聞きにやつて來たんぢやないんだ。こう見えたつて俺ら早稻田大學卒業生だぞ。立派な一年志願兵だぞ」

ところが彼決してひるまなかつたのである。あまつさへ腰の竹光をいやにぴかぴかと拔いたり差したりしてわれわれを威嚇するやうな態度さへとつた。

それを見て今度は町内の田中氏がひどく憤慨したのである。

「おい。お前のその腰の竹光は何品だ。何んのためにそんなものをぶら下げてゐるんだ。」

言ひ乍ら田中氏忍ばしてゐた例のおもちやのピストルを彼の鼻先へひらひらとつきつけたものであつた。

「なんだきさま俺にピストルをさしむけるのか！」

今度は田中氏に喰つてかゝつた。

「向けりやしないさ。君がその變な腰のものをみせびらかすからね、僕の方でも一寸お目にかけただけさ、とにかくこの町内は君なぞが考へる程馬鹿者はゐないからな、おとなしくさッさと通つちまひたまへ。僕等だから君に親切に忠告もするがこの

先には柔道三段四段つて言ふやうな君よりもつと氣の荒い連中が二三人ゐるからな。ろくでもない自慢話を威張つてすんな。」

田中氏の條理をつくした忠告に、とうとう先生尻ッぽを卷いてやがてしをしをどッかへ消えて亡くなつたのである。と思つたのが大變な間違であつた。

それから大凡二時間も經つてからである。そろ〱またみんな屁托を覺えたか、肝心の田中氏はどこか他の帳場へ油賣りに行つてるすのところへもつて來て、私、齋藤、紅林と言つた非力者ばかり二三人が欠伸をし乍ら第一要寨を固守してゐると、先き程の在郷軍人先生が、どこで飲んだか甚だしく酩酊して、着劍した歩哨を一人伴ひ乍ら、いきなり私達のところへやつて來て、

「おいこら、さつきピストルを突きつけたおやぢどこへいつたッ」

血相變へ乍ら私達三人に喰つてかゝつた。突然ではあるし仲間は少なし、それに着劍の歩哨を隨へてゐたので、なにか對軍人と言ふやうな面倒な問題でも惹起したんぢやなからうかと言ふ疑ひも手傳つて、先づ私が尠からず慄ひ上つた。

紅林君も多分同じやうな考へで幾分度膽を拔かれたものか默默として返事もせずにゐると、向ふはぢろりと紅林君の面貌を讀んで、

「貴樣もさつきの仲間だつたな。名前はなんて言ふんだ。ピストルのおやぢはどこへいつた。二人共用があるから一寸來いッ。」

矢庭に嵩にかゝつた物の言ひ方をしたのである。事件は一體どうなるものか私も内心びくびくであつた。單に喧嘩を賣るにしても先方は竹光乍ら腰の物も携へてゐるし、あまつさへ酩酊にも及んでゐるし、こちらは元より無手の上に非力と言ふ有樣だから、正直私なぞ多勢を賴まねば啖呵一つ切れない腰弱者には實際少々怖かつた。

丁度傍にわが黨の齋藤龍太郎君が蹲つてゐたからとにかくと思つて私は早速齋藤に肝心の田中氏を呼びにいつて貰つた。たとへ事件がどう發展するにしても、おもちやではあるが田中氏のモーゼル一挺でもあれば大いに心強いと考へついたからである。

「おいこら早くピストルのおやぢを連れて來い。どこへ逃げて行きやがつたんだ。」

彼は益々猛りたつた。

「慌てんな今來るから。」

私がやつとそれだけ辭をかけると

「うん貴樣もさツき文句言つた仲間だな。一緒に來い！」

愈々猛りたつて今度は私にまで喰つてかゝつてゐるところへ當の田中氏がやつて來たのである。

氣がつくといつのまにどこへいつたか着劍の歩哨はもうそこに居なかつた。これはあとになつて判つたことだが、酩酊した在郷軍人の樣子がどうも不審だつたので實は歩哨の方で一應調べに着いて來たんださうで、とにかく田中氏の六連發が來たとなれば頓に私も氣が強くなつて、

「話があるなら電信隊の中へはいつて片をつけろ。」

急に威丈高になつたものであつた。そこへどやどやと、向ふ帳場からも隣り帳場からも一騎當千の面々が馳けつけたので、もう大丈夫と思つたが事件がどう發展するにしろ安全地帶の電信隊衛門中ならば、どの道こちらの身は安全と考へたから、又一つには彼の身性を洗ひ立てる上にもその方が好都合にも思へたから、私としては當意卽妙の提案を持ち出したつもりであつた。

「電信隊なんぞに用はないッピストルのおやぢと話をすりやいいんだから君一寸こつちへ來てくれたまへ。」

對手が多勢と見て急に形勢非なりと悟つたのか今度は向ふで急に腰を折つた。

「よしどんな話しだか聞いてやらう」

釋然として田中氏が答へ乍ら先方の希望通りに一人で列を離れたので、そらッ田中の身邊を護衛しろッと言ふところから、此界隈二三十名の自警團員がぐるりと取り卷いたのである。誰も彼もなにがなんだか解らないまゝに、すつかりもう殺氣立つて、すわッと言へば手は見せん程の形勢であつた。

こうなれば私なぞ多勢を賴めばきつと氣の強くなる自警團員にはもうお手のものだつたのにで、

「一體こいつ脅迫がましい態度で喧嘩賣りに來やアがつて、謝まらせろ謝まらせろッ。」

大聲で怒鳴つたものである。すると私の身近くにゐた多分驛の轉轍夫らしい男であるが、腰には一本白鞘をぶッさして錆た鐵の棒の先ばかりピカピカと尖らした奴をかいこんだ小兵乍らも精悍無比の一人が、

「あいつならさつきから俺癪に障つてゐるんだ。やッつけろ。やッつけろ。」

叫び乍ら尖つた奴を突き出した。

「まてッ。まてッ。早まるなッ。俺の顔に免じてこらへてくれッ。手を引いてくれッ。」

突然田中氏が大手をひろげ乍ら、身を以てそれを遮ぎると、

やつちまへッ、謝まらせろッ、止せッ、やれッ、と殆んど煮えくりかへりそうな騒ぎになつたのである。三たび四たび身を以て遮ぎつた田中氏の制止で、元よりけが一つせずその場は事なきをえたが、丁度そこへ折よく通りかかッた週番司令が口を入れて、田中氏が代表として附き添ひ乍ら、とにかく本人を電信隊へ引き渡した。

一應隊の方で身性を洗つたところ、淺草で焼け出されたことも在郷軍人も事實であるが、早稻田出の一年志願兵などは眞赤な嘘で、なんでもこの近邊の某陸軍大佐のところの女中の見だそうなが、實は鐵の棒で三人やつた云々の事柄を自慢にしたかつたところへもつて來て、私達町内で彼のそのおろかしい天狗鼻をひとたまりもなくへし折ッたので、それが腹に堪へかねて喧嘩を賣りに來たんだそうなが、本人も今はすッかり醉の醒める程青くなつて冷や汗さへ流してゐる程前非を後悔してゐるから、何分本官の顏に免じて諸君の怒りを解いてほしいと言ふやうな週番司令の話であつた。

亢奮からさめてみれば元より私達に異存はなかつた。たゞ一つ彼がしか程に氣が強くなつたのも察するところ、酩酊してゐたと言ふことと、例のさる大名から拜領に及んだとかいふ腰の竹光がそんな風に物を言はするに違ひなかろうから、そいつが彼の手元にある以上、明晩酒の加減でまたあばれて來ないとも限らないから、隊の方でなんとか腰の物だけでも處分してほしいと言ふ條件だけ司令に對つて申し入れたのである。

腰の物を處分する以上は彼の一身も陸軍と言ふ名に於て責任を持つことになるから、いかにも御希望通り責任も負ひ處分も致しませうと言ふ返事であつた。

その翌朝果して無腰になつた當人が停車場附近をけろりとして徘徊してゐる姿を認めたが、私も忘れたやうに一向氣にも止めなかつた。

この他、謝まつて近所のお百姓が竹槍で胸さきを抉ぐられた太功記もどきの第三夢物語もないではないが、嘘から誠が出ても困るからこの邊で話の腰を折らう。以上。



大杉山の騒動

白柳秀湖

此物語は延享の頃、笹山侯青山因幡守忠朝に仕へた松崎堯臣の著『窓のすさみ』から材を得たもので、筆者が架空的に作つたものではない。堯臣は京都に在りし頃東涯に學び、江戸に出て徂徠の影響を受けたが、その最も親しく交つたのは太宰春臺である。寶暦三年七十二歳で江戸に身まかつた。

豐後國、竹田の城主で七萬四百石餘を領した中川修理大夫の家には、代々疱瘡の藥を作る秘法が傳へられて居た。

延寶年間のことであつた。當主、佐渡守久恒が、歸國の挨拶を兼ねて城中に伺候すると、將軍は殊の外機嫌よく、型のやうな一通りの辭令があつた後、打寛いだ調子で、

『時に修理、其方の家に傳はる疱瘡の妙藥、アレは如何致した?』

『近年は君御仁政の御蔭と致しまして世の中いと安らけく、去んぬる丑年(延寶元年)の凶變以後は國許も豐作つゞき、惡しき病も流行致しませぬ故、トント打絶え製造仕りませぬ。』

『シカとは記憶致さぬが、萬治の頃であつたか、父山城(山城守久清)から貰ひ受けたのを奥の者に服用致させたことがある。何樣妙藥で輕く相濟んだやうに覺え居る。』

『恐入り奉りまする。』

『アレは何を以て製するの。』

『私城下より程遠からぬ所に大杉山と申す靈地が御座ります。それにて狩獲りまする狐の生膽を以て製しまするのが、家傳の妙藥に御座りまする。』

『狐の生膽! シテその藥の製法は何方より傳はりしものか、又世に申す靈夢などの由緒にてゝあるか。』

『御意に御座りまする。年寄共の傳へ申しまするには、先祖秀成、文祿二年五月大友左兵衛督の跡を賜つて、播州三木の城より、只今の地に移りますると間もなく、疱瘡を患ひ、既に命も危しと見えたる折柄、一夜夢ともなく現ともなく、白衣の異人枕許に立ち、我はこれ大杉山の神靈なり、上つ世より領主の崇敬淺からず、百姓の齋き祀るもの絶えざりしを、大友義統無道にて神を崇ぶの心なく、高麗出役の後は社殿の荒るゝに任せ、森を擧けて惡狐の棲家となし、百姓の遂祭を顧ず、碧蹄館の戰に、明の大軍押寄せたりと聞いて鳳山の守りを捨て、顚沛狼狽して國威を汚し、太閤の怒に觸れて社稷を亡ぼせしも偏にこれ神慮の致す所、爾その國土を承けながら、尚ほ社殿の修理を疎かにし、野狐の穢れを除かざるは緩怠の至りなり、知らずや我社殿の床下に棲所なし、恣に祭壇を荒すものは豐國阿蘇の境より移り棲める千年の老狐にして、大杉山に蕃殖ひ、在々所々を惱ますものは其家來眷族なり。速に野狐の一族を退治なし、森を清め、社殿を修理して祭典を興さばよし、猶豫して決せざれば神罰立處に到るべし。尚ほ我爾に告げん、大杉山に蕃殖る野狐の生膽を取つて云々の如く製し用ふれば、如何なる重き疱瘡も立處に癒え、體力舊に倍して強健を加へん。努々疑ひあるべからずとの託宣に、秀成大に驚き、直に社殿を修理し、神苑を浄め、

宗が中川兵庫といへるものに命じて、野狐の生膽を取り、靈夢の中に授けられし如くして服用致しまするに、不思議やさしも難澁を極めたる疱瘡も立處に癒へ、文祿四年には兄秀政の志を繼いで高麗に押渡り、大明の兵と合戰して勇名を轟かし、慶長庚子の戰には德川當家の御味方して竹田より、臼杵の城に押寄せ太田飛驒守を攻亡ぼして神君の御感に與りましたのも、これ偏に神靈加護の致す所とて、代々の崇敬淺からず、それより野狐の狩獵と靈藥製造のことは兵庫が家の職となり、家傳として子子孫々に口授致し居りまする次第に御座りまする。」

『左様な由緒あるものであつたか。聞けば近頃府内に疱瘡流行の兆ある由、先君も御幼少の砌疱瘡に惱まされしことあり、三十六日付、天下の要害も疫病神は防ぎ兼ねる。其方國に歸りなば、早速に其藥を製し、使者を以て差届け呉れよ。」

『コハ勿體なき仰せ。家の面目、早速獻上致すやう取計らひまするで御座りまする。」

佐渡守は上々の首尾で盃など賜はり、大層な機嫌で歸邸したが、それから一ヶ月ほどしていよ／＼歸國となつた。

領に佐渡守が靈藥獻上の台命を蒙つて、歸國匆々狐狩りをするといふ噂は、早耳を以て國家老中川兵庫の許に達した。此報に接してハタと當惑したのは當代の兵庫であつた。近年は打絶

えて疱瘡の患がなく、久しい間狐狩りせぬので、本來ならば狐は殺生禁斷の大杉山に夥しくはびこつて居る筈である。處が何時の頃よりか、大杉山で獲れる狐の毛皮は、門司、長崎あたりの密貿易者の手によつて値よく買占められることゝなり、兵庫はそれによつて少からざる秘密の收入を得て居た。

領主歸國の際は、ちやうど兵庫が大杉山から國境に續く山々谷々を狩盡した後のことで、若し強て云はるれば、兵庫の家にとつては、食祿そのものともいふべき大切の種狐、それは兵庫が社殿のうしろの古木のうろに養つて置く老狐の一對を狩獲つて君前に捧げなければならなかつた。

併し、古木のうろに虎の子の如く養つて置く老狐の一對を絕したが最後、大杉山の狐の根が絕える。兵庫の手に扶持されて居る幾十人といふ狩獵の役人と人足とはその扶持に離れなければならぬ。さうして兵庫自身も重代の仕事を失ひ、剩さへその收入の上に夥しい狂ひが生ずる譯である。

兵庫の當惑したのも無理はない。

もと〳〵野狐の跋扈は神威を汚すといふのが事の起りで疱瘡の藥といふのは附たりであつた。處が疱瘡の藥が大切な家傳といふことになり、狩獵の司として每年上から少からぬ扶持米を受け、それ〴〵の下役や人足を養ふといふことになつて見ると狐が神威を汚し、百姓を惱ますといふ根本の問題は何時の間にか消えてなくなり、殘る所は如何にして程よく狐に惡戲をさせ、如何にして程よく狐を狩獵し、如何にして程よく狐の種を保存するかといふ問題のみとなつて居た。

尤も如何にして程よく狐に惡戲をさせ、如何にして程よく狐を狩獵し、如何にして程よく狐の種を保存するかといふことは、さしたる困難な問題でなかつた。中川家では何時の頃よりか、狐の狩獵を五年目に一度ときめて居た。それに社殿のうしろの古木のうろに巢くうた老狐の一族は、神の御使であるとして、宮司の下に二三人の宮守を附け、每日缺かさず廬の前に狐の好きそうな餌を供へて養つて居た。五年目に一度といへば、狐も相當に蕃殖する。蕃殖すれば百姓どもに惡戲もする。いよ〳〵狩りの催しとなつて、君侯の出馬といふことがあつても獲物は相當にある。勿論勢子どもに申附けて、根こそぎ狩出させるやうなことはせぬが、豫備には神の御使といふ名の下に、老狐の一對が養つてある。其儘にして行けば問題の起る餘地はなく家老の職も萬歲で、その懷台も福々といふ譯であつた。

處が人間慾には限りのないもので、中川兵庫は近年コツソリ狐を獲つて、其毛皮を長崎や、門司の商人に賣ることを覺えた。元老であり、且つは主獵局の長官である人自身の密獵であ

るから、こんな容易いことはない。自分の畑の大根を自分が抜くやうにして狩獲つた結果、狐は殆ど森にその影を絶つた。其處へ藩主の歸國、歸國匆々狐狩の催しがあるといふので、中川兵庫少からず當惑した。

藩主がモウ四五日ほどで入國されようといふ時に差迫つて、竹田の城下には恐ろしい流言蜚語が行はれた。此流言蜚語といふもの今日は知らぬが、昔はよく上役人の口から出たものである。何ういふ流言蜚語であつたかといふと、江戸では今公方樣が痘瘡を病んで居られるので、當御領主樣が老中の御頼みを受け、國に歸つて痘瘡の妙薬を御つくりになる。併し今度の妙薬は狐の生膽ではなく、御領内の百姓町人から十五歳以下の子供を召上げ、その生膽を取つて御つくりになるといふので、竹田の城下から村々にかけ沸返るやうな騒ぎが起つた。

臼杵の方に親戚又はしるべのあるものは、我も我もと子供を背負ひ、足弱の手をひいて大野川に沿ひ、領分を越えて落のびる。中には逃げまごつて阿蘇の境に入るもあり、九重山の谷に走るもあり、山賊夜盗の類がそれに乘じて手荷物を掠めたり、女を嬲つたりする。凡そ慶長の戰爭を覺えて居るほどのものは疾に世を去り、百姓町人はいづれも太平の世に人となつて亂世りなどゝいふことも知らぬ。それがフトした噂から騒ぎが大きくなり、城下のものは村方へ逃げ込む、村方は村方で山へ踰え、谷を渡り、夜に紛れて領分境を出ると云つたやうな譯で、沁々と亂世の人の苦しみを經驗した。

而もこれが藩主の入國に差迫つての出來事であるから手の附けようもない。かくして藩主が久し振りで國に歸つた時には城下と云はず、村方と云はず、火の消えたやうな寂しさ、殘つて居るのは老人と獨身者ばかりで、女といふ女、子供といふ子供はすべて何處かへ姿をかくして了つた。

以ての外の儀とあつて藩主の不興は一通りでない。他領に逃込んだ女子供は日を經てボツボツ歸つて來るやうにはなつたが流言蜚語の出所は明かでない。上の嚴命とあつて役人が出張して、それからそれへと熱心に取調べるやうであるけれども、疑問の緒は中途で煙のやうに消えて了ふ。

或る日の御前會議に中川兵庫は此流言蜚語の探索に段落をつける目的から、次のやうな臆說を持出した。

「何がさて君の御入國も間近とあつて、晉々一同萬端の用意に忙殺されて居りまする其虛に乘じて起つた奇怪の流言、アノ騒動の際とて、百姓町人どもの氣も顚倒いたして居り、申立てることが要を摑むやうで所詮は偏たる話樣を摑みかねまする。此上評議を厳しく致しますれば、所詮は罪なきものを罪に陷れる

やうなことにも相成りまする。私つく〴〵考へまするに大杉山に蕃殖る野狐の群は、もと隣國阿蘇の境より移り棲みし老狐の子孫とあれば、中には千年の齡を經て、通力自在のものもありませう。這回我君が台命を蒙つて、御入國匆々狐狩を遊ばれることを知り、變化の術を以て、在々所々にあらぬ噂を流布致したものではないかと愚考仕ります。何卒その邊御賢察あつて、流言御詮議の日は御取止めの儀願はしう存じまする。』

『ウム、兵庫の申す所一應は尤もである。然らば其方何を以てかの奇怪の流言を妖狐の業となすや。』

『其儀は斯樣に御座ります。若しかの奇怪の流言が、何ものかの口より出でましたものならば、甲の村より乙の村、乙の村より丙の村と、幾何かの時刻を置きまして、追々に傳はつた跡がなければなりませぬ。然るに此度の騷動、凡そ御領内といふ御領内は、皆同一日、同一刻に噂を生じて居りまする。これ人間業のよく致す所にあらず、全く以て妖狐のなせる業かと存じまする。』

『ウーム』と藩主久恒はしばらく沈吟の體であつたが、『皆のもの何うぢや、此度の流言領内は何處と云はず、同一日、同一刻に起つたものに相違ないか。』

國家老の一人に高山將監といふのがある。之は日頃から兵庫の黨であつたものか、直に進出て、

『恐れながら申上げます。私の調べました所も只今兵庫殿の申さるゝ所と同樣にて、城下の者村方へ身を潜めんとして遁れますれば、村方の者は國境の山々谷々へ遁れんとしてひしめく最中、又、村方のもの國境の山々谷々へ遁れますれば、此所には夜陰に乘じ國境を越えて他領へ遁出でんとする最中、全く以て同一日、同一刻の騷ぎにて、何處が元とも定め難く、兵庫殿の申さるゝ如く、或は妖狐のなせる業かとも存ぜられます。』

『若し妖狐のなせる業と致さば、如何致すべきであるか。』

兵庫は更に膝を乘出して云つた。

『通力自在の妖狐のことに御座りますれば、此度のこと、或は何か凶事の前兆かとも思はれます。我君御出馬あつて、如何なる大事に及ばんも計り知るべからず、さりとて台命はもだし難く之は一時狩くらの儀を御見合せあり、他領より狐の生膽を御調達あつてかの靈藥を製造し、御使者を以て公方樣へ献上の儀然るべきかと存じまする。』

兵庫の鼻息を窺ふ諸役人はいづれも御家老の仰せらるゝ所尤も至極と賛成をした。高山將監も無論賛成者の一人であつた。

處が、中川家に平素から兵庫と反の合はぬ重役の一人があつた。それは太田要人といひ、賤ヶ獄以來中川家に仕へた元勳の血筋

で、先祖は瀬兵衛清秀と共に餘語の湖のほとりで、佐久間玄蕃盛政の猛烈な襲撃を支へ、花々しい戰死を遂げて居る。

兵庫の家は主家と血筋の關係はあるが、戰場の功はない。小さい大名の家に妾腹の子が多いと一々分家をさせる譯にゆかぬので、大かたは臣籍に下し、家老の列に加へて、國政に參與させたものである。此血筋の關係から立てられた家老と、戰場の功によつて立てられた家老とは何處の藩へ行つても仲が惡かつたものである。一方は藩主の血筋といふのを鼻にきて威張る。他の一方は、祖先の功勞といふのを鼻の先にブラ下げて申を利かすといふので、家中に黨派の爭ひが起る。此黨派の爭ひをお家騒動といひ、講釋師に云はせると、（著者も講釋師の仲間たることを拒むのではないが）善玉と惡玉との爭ひ、結局負けた方は如何に小づけで、何から何まで惡玉のやうに解釋されて了ふ。中川家にも平素から此爭ひがあつた。中川兵庫の方は血筋で立てられた家老、太田要人の方は祖先の武功によつて立てられた家老、此二つは常に相對峙して政治上の意見を異にして居た。

この時太田要人は進出て云つた。

『恐れながら申上げます。或るほど兵庫殿の申さるゝ如く、かの奇怪の流言は同一日、同一刻に起つたものには相違御座いませぬが　されぱこそ妖狐のなせる業とのみは限りますまい。妖狐にひとしき多くの家來眷族……イヤサ多くの徒黨を持てる山賊夜盜の類があつて、或る不逞の申合せをなし、御領内一度に事を起したものとも解せられます。さすれば、此際妖狐の祟りを恐れて狩くらの御催しを御取止めになつたとあつては、我君の御威徳にも關はりまする。殊に狐狩の儀は文祿以來、御當家の御家例にもあり、只今まで何の障りもなかりしものを、急に御取止めはチト異なものかと存じまする。』

物頭の池田仙右衛門といふのが、要人の尾について、

『先達に太田殿の仰せらるゝ如く、野狐の祟りを恐れて、遂に狩くらの御催しを御取止めになつたとあつては、御當家に人なきが如く、隣國への聞えも如何、殊に公方樣へ献上の靈藥を他領より取寄せたる狐の生膽にて調製致すといふは、憚りながら、御家老の御詞とも覺えず、若し此事世間に洩れ、上聞に達しなば如何なる御咎めあらうも知れず、それこそ御家の浮沈に關はる一大事かと存じまする。』

と、臆する色なく申立てた。兵庫は之をきくと颯と顔色を變へ、

『默らつしやい。靈藥の製法は兵庫が家の秘傳にして其方如きの與り知る所でない。凡そ藥の用は病氣に適するか否かにある。又、藥の病氣に適するか否かは、その製法の如何によつて定ま

る。狐の生膽に二つはない。製法にして正しくば、効能に變りのあらう筈はない。之を公方樣に獻じたこて、何の仔細があらうや。御家の浮沈に關はる一大事など輕々しく口にすべきでない。以後はチト詞を愼まれたがよろしからう。』

『御家老に對し詞を返すは恐れあれど、今日は評議の席にて、何人にもあれ意見あらば遠慮なく申述べよとの上意もあれば重ねて申上げます。成る程藥のことは御先祖秀成樣より靈夢をそのまゝ兵庫樣の御家に御傳授ありしこと故、吾々如きの知る所にあらずとの仰せは御尤、去りながら、其藥といふも元は狐が靈山を汚すことあつて、神慮に觸れしより起りしこと。毎年少からぬ御入用を御構ひなく、多くの役人、人足どもを御扶持遊ばされるも狐狩の御用に宛て給はん思召に外ならず、然るを今台命を蒙つて靈藥を調へんといふ大事の場合、狐祟りを恐れて、狩くらを御取止めに相成ることあつては、係りの諸役人、人足ども何時の世にかは御用に相立ち申すべき。毎年の少からぬ御入費も憚りながら無駄なものかと存ぜられます。』

『要人殿といひ、其方までも、動ともすれば狐の祟り、狐の祟りと云はるゝが、兵庫曾て狐の祟りを恐れよとは申さぬ。狐の年經るものは通力自在と申す故、此度の事、如何なる凶事の前兆なるやも計られず、魯の申須は彗星を見て天象を察し、鄭、梓愼は融風を聽いて火兆を辨へたと申す、昔より物の先祥を知るは具眼の識者の致す所、我君の御出馬を御止め申したまでのことぢや、敢て狐の祟りを恐れよとは申さぬ。』

兵庫の例の辯舌で、武弁一途の仙右衛門を煙にまいてしまつた。かうなると事の行がゝり上、太田要人も默つては居られない。

『アイヤ御家老、要人はトント無學故、彼國の故事などは存じ申さぬが、狐の祟りを恐れぬと仰せある貴殿が、我君の御出馬を御止め申すのみか、狐の生膽を他領に求めよと仰せあるは心得ぬ。』

席上の議論は兵庫の最も得意とする所である。要人に挑まれて何條默止すべき、膝乘出して何事かを辯じ立てようとする時、藩主も馬鹿でない、咄嗟に之を制して、兩人を引分けた。

『アゝこれ双方控へよ。何れも家の大事を思ひ呉れる志、皆く相分つた。兵庫の申す所も尤もである。余は出馬を見合はすであらう。要人の申す所も尤もである。狐狩の儀は要人に申付ける。兵庫は當日城中に止まつて余の身邊を護り呉れよ。』

『ハヽッ!』

鶴の一聲、之で狐狩は家老の一人太田要人が采配を振ることになり、中川兵庫は當日城中に止まつて藩主の警護に任ずるこ

とに決つた。物頭の池田仙右衛門は雀躍して喜び、今に見よ、大杉山の狐といふ狐は鏖殺にして、彼等に神通力などの有るものか、無いのか、兵庫の面皮を引剝いてやらうと手ぐすね引いて待ちうけた。

間もなく狐狩の日が來た。

太田要人は小具足に身を固め、黑羅紗に金で五三の桐をかいた陣羽織を着なし、月毛の駒に白鞍置いて打跨がり、釆配をとつて朝まだき蹄の音も勇ましく大手前の廣場に乘つける。池田仙右衛門は之も、柿色の陣羽織、板金入の頭巾、くさり帷子、緞子の踏込み、白馬に黑鞍置いて打跨り、大身の槍を横へ、組下郎黨を引つれて橋詰に整列する。すべて戰場に臨むと同じ打扮である。之で當の對手が野狐とは全く馬鹿なやうな話であるが、昔の大名はかうした催しを好き機會にして武を練つたものである。

さて三百餘人の組下は弓矢　鐵砲と隊を分ち、別に足輕百餘人は銀杏の朱丸、口ぬりの陣笠に六尺棒又は錺棒を持つて整列する。藩主佐渡守久恆は、卜席家老中川兵庫を從へて天守閣から之を檢閱する。檢閱が濟むと、太田要人は天主の方に一禮して物頭に進發を命じた。總勢四百餘人、隊伍肅々と城下に向つて行進を始めた。

かくて此行列が城下を過ぎ、大杉山に到著して各組それ〲の持場につき、一發の狼煙を合圖に豫し見込みをつけて置いた要所々々を狩立てようといふ頃になつて、今まで穩かであつた空模樣が急にあやしくなつて來た。

吹き颪す阿蘇おろしにつれて、古綿に墨汁を潤ませたやうな雲が西の空から簇々と繰出し、それが見る〲に靑空を蔽うてゆく。やがて風は刻一刻と吹きすさび、果ては恐ろしい龍卷とさへなつて砂礫を飛ばし、煙塵を揚げ、大木の枝を吹折つて、人も馬も木の葉の如く空中に掀飜しようとする。天も地も黄昏の如く暗く、森の下など見交す人の顏が黑く見える。その恐ろしさ物凄さは世界も終末に近づいたかと思はれるほどである。

『唯の風ではないぞ。』

『これほどの暴れに雨の降らぬのも不思議だ。』

『ヤハリ狐の祟りではないか。』

大地に伏して組子どもははげしい不安と恐怖とに顫へながら口々につぶやいた。太田要人は、馬の鬣に面を伏せながら、狂氣の如く叫んだ。

『是しきの風に恐れてイザといふ時、物の役に立つか。戰の調練には好い機會ぢや、敵を前に控へて居るといふ心持で働け、敵の不意打は得てかういふ時にあり勝ちなものだ。起て！　起

つて力の限り狩立てよ。』

要人は今日若し此魔風に妨げられて手を空しく引揚げたならば、モウ再び生きて君侯に合はす顔はないと思ふから、焦りに焦つて號令するけれども、聲は空しくあらしの音に呑まれて、誰一人起つてその部署に著かうといふものがない。

兎角する中に風が少し吹き弱つたかと思ふと、今度は大粒な白い雨が、礫のやうに落ちかゝつて來た。

ちやうど其處へ組子の配置に行つて居た仙右衞門が裏山の方から馬を飛ばして駈付けた。

『仙右衞門か』

『御家老！　生憎な氣違風で……』

『オヽ兵庫の奴にはまた好い口實が出來たといふものぢや。』

『されば縱令一疋でも、半疋でも狐の姿を見るまでは此森一歩も退けませぬ。』

『勿論ぢや、手を空しくして歸るほどなら此森が最期の場所と覺悟せよ。』

此時雨はもう車軸を流すやうに降つて來た。組子どもは頭からビショぬれになつて草の中に顫へて居る。太田はあたりを見廻して馬廻りの者に眼くばせした。

『コレよ、其方どもは此所を少し距てゝ居よ。』

馬廻りの者はバタ／＼になつて五六間先の杉の木蔭に集まつた。

『雨は歇むけしきもない。此上は非常の手段によるより外に途はない。』

『非常の手段と申しまするとは？』

『社殿のうしろの古狐を退治するのぢや。』

『エツ！　あれは神の御使と申すことで……』

『其方までが左樣な馬鹿を申すか。狐を祀るのは兵庫の家の私事ぢや、御先祖秀成樣以來の君侯より神を崇めよとの仰付はあつても、狐を祀れとの仰付はない。縱令また御咎があつたにしても、狩場で仕とめましたと申せばそれだけのものぢや。幸ひ此風雨で宮守も出ては居まい。古狐を退治して國の費えを省くには又とない好い機會ぢや。』

『善く相分りました。御詞の通り今日の狩くらは君侯の仰付、狩場で仕留めたとあればそれが何の狐にもせよ彼是は申されませぬ道理……』

『萬事は要人が引うけて遣す。但だ此役目を果すものは其方を措いて他にない。』

『仰せまでも御座りませぬ。然らば屈强の者二三人を引つれまして。』

『此暴風雨の中に事を仕遂げよ。直に參れ!! 後の事は決して心にかけるな。キット此要人が引うけて遣す。』

『ハヽッ!』

仙右衛門の屈強の武士三人を引つれ、降りしきる雨にまぎれて社殿のうしろから玉垣の破れた所を乘越えて神苑に躍込み、かの大杉の洞に取詰めて、一方の口には煙硝を仕かけ、一方の口には、自ら得物をとつて二人のものと、狐の出て來るのを今や遲しと待ちかまへた。

導火から煙硝に火の移つた時は可なりに強い音はしたが、爆發といふではなく、はげしい雨風の音に消されて外には洩れなかつた。黑い毒々しい煙が老木の洞に籠るにつれて、眞先に土佐犬ほどの雄狐が飛出した。

流石に仙右衛門の技術は鮮やかなものであつた。郎等達がアッといふ間に電光石火、繰出した槍の穗先に、千年の齡を經て、通力自在といふ噂の雄狐は、音も立てずに突伏せられてしまつた。

千年の老狐といふ噂に何んな物凄い光景を見ることかと内心ひそかに恐れをなして居た三人のものは、仕留められた雄狐の脆さと、その相貌の尋常さとに力拔けがして、ウッカリ穴の口を怠つた時、鳩かなんぞの飛出すやうに噂の雌狐が跳出した。

這次は仙右衛門にも手許に狂ひがあつて、槍の穗先が後足をかすめたのみで雌狐は社殿の緣の下に潛込まうとしたが、煙硝の口から廻つた一人の武士に支へられて度を失ひ、玉垣の根に追つめられて之も仙右衛門に仕留められてしまつた。

それでも雌狐は斷末魔の苦しいうめきを揚げ、槍の千段卷に手をかけて、恨めしさうに仙右衛門の顏を睨めつけた。

續いて野兎ほどの子狐が三疋ウロ〳〵と迷出したのを三人のものが追かけ、取詰めて撲殺してしまつた。

『通力自在も呆れたものだ!』

『千年とは吹きも吹いたり、百年も怪しいものだ。』

『もう少し手應へがあるかと思つた。』

『これだから世間の噂といふものは當てにならんよ。』

『こんなものを崇め奉つて少からぬ人間を扶持し、毎日々々係りのものを見廻らせて、油揚を供へて居た御上席も甘いものだな。』

郎等どもは口々に罵つた。

仙右衛門の指揮で狐の死骸を取片付け、洞の口は證據の殘らぬやうにスッカリ始末をして、以前に這入つた玉垣の破れ目から密と引揚げる頃にはさしも烈しかつた風も止み、雨も小降りになつて西の空から明るくなりかゝつて居た。

風が止み、雲が霽れて見ると狐の祟りと云つたやうな恐怖と疑惑とは何時となく消失せて、濡れに濡れた組子どもと、何うやら元氣を恢復した。それでも最初の狼煙が揚り、東西一度に哄と鬨の聲の起つたのは、もう其日の未の刻に近かつた。

今日は此一度だけといふので、太田要人は馬を乘廻し乘廻し組子どもを勵まして歩いた。その元氣にみち〳〵た顔には强い自信の色が溢れて居た。

併し狐は何處の谷からも、何處の間からも姿を見せなかつた。組子の顔にはやがて倦怠の色が浮び、失望の囁きが口から口に傳へられた。

此時裏山の新田につゞく谷を受持つた仙右衛門直々の組子に勇ましい矢叫びの聲が起り、間もなく哄然と鬨の聲が起つた。さうしてそれが二度三度繰返されて、其處になにがしかの獲物のあつたことが明かとなつた。

間もなく合圖の銅羅が鳴渡り、各組定めの場所に引揚げて見ると、其處はもう獲物の噂で持切つて居た。

こうろ經た雌雄の老狐、それに可愛らしい子狐三疋！　いづれも仙右衛門の組下で仕留めた。

＊　＊　＊　＊

仙右衛門は先づ以て首尾よく今日の大役を果し、藩主の御機嫌も上々で盃まで賜はり、追つて恩賞の御沙汰もあらうといふので、申の下刻といふに意氣揚々と我邸に引揚げた。

仙右衛門は、今日親子の狐を仕留めた働き抜群といふので、かの三人の家に酒肴を屆けさせ、己れも家人どもに今日の物語などして思はず夜を更し、亥の刻近く臥床に入らうとする處へ、遽に門前が騒がしく、夜も更けてから何事であらうと燭をとつて出ようとする處へ、若黨が一人あわたゞしく駈けて來て、

『旦那様！　只今御上使の御入りで御座ります。』

『ナニ御上使が……』

仙右衛門はフト恩賞の御沙汰かと思つたが、それにしては此夜更けにと、やゝ不安の念に驅られながら、

『御上使には何人が立たれしか。』

『重役の高山將監様が御出で御座ります。』

之で事件の容易ならざることだけは分つた。

『夜中のことゝいひ、御先觸れもなければ御出迎ひは仕りませぬと申上げ、書院に御通し申せ。』

『ハヽッ！』

池田仙右衛門には今日の吟味があるので何となく胸騒ぎがする。武藝にかけては家中第一の手だれも、惡事を企むには餘り

にかゝで、物事の申開きなきは、その儀も不得意とする所である。仙右衛門はやがて禮服に着かへて書院に出た。

『これは〳〵御上使には火急の御用とは申せ、夜中の御入來御苦勞千萬に存じまする。』

『ウム、斯く深更に及んで參りしは餘の儀にあらず、今日の獲物につき容易ならざる御不審の廉あり、上意によつて時を移さず罷越した。只今より一々尋ねまするこそ、申開きあらば速に御答致してよろしからう。』

『委細承知仕りました。シテ御不審の儀は。』

『今日その方の組のもの三人にて仕留めしと申す雌雄の老狐、外に子狐三疋は、其方を始めとして組下三人、風雨に乘じ玉垣の破れより神苑に押入り、大杉の蔭に煙硝を仕かけ、無殘にも御禁制の靈狐を狩取つたものに相違あるまい。』

『是は思ひも寄らざる御尋ね、右は全く野狐の一族にして、奥山の新田につゞく谷の深みにて組下三人の仕留めましたものに相違御座りませぬ。』

『其方如何に白々しく申立てても、此方には確な證人がある。ソレかの宮守を庭先に呼入れよ。』

上使は附添のものに眼くばせする。やがて中庭の木戸口から訴人の宮守が這入つて來て緣脱の前に平伏する。

『障子を拂へ!』

上使の指揮に家人どもが早速庭に面した障子を外して了ふ。燭臺の火がゆら〳〵と搖れて、植込の葉にうす暗いあかりがさす。植込の奥はさみしい籔に面した土塀で、往來が籔に沿うて境端に走つて居る。

『コレ平助! 其方の見た所を逐一これなる仙右衛門に申聞けよ。』

宮守の訴へる所はかうであつた。

此日山の麓の一の鳥居際にある宮司の家では時ならぬ颶風に社殿の見廻りを平助といふ宮守の一人に命じた。平助は命ぜられるまでもなく此日の當番であつた。今日は狐に小豆飯を供へる日で、平助は折敷に載せた小豆飯をかゝへ込み、恐ろしい砂煙の吹まくる中を漸くのことで奥の社殿にたどりついた。拜殿から本殿、それから玉垣に沿つて、靈狐の廬まで一巡りし、玉垣の壞れた所や、拜殿の屋根の破損した所を見きはめて歸らうとすると、ポツリポツリと礫のやうな雨が落ち出した。之は困つたとしばらく躊躇つて居る中に雨は車軸を流すやうに降つて來た。その物凄さに居堪らず平助は拜殿の正面から上つて、奥にある宮司の控所に潜込み、小さくなつて息をこらして居た。

稍一刻(二時間)もしたと思ふ頃、雨が少し小降りになつて、

風も大きに靜まつて來た。すると雨風の間合に、本殿のうしろの方で人のけはひがする。初めは氣にも止めなかつたが、追々騒々しく、果ては忍びやかに話する聲も聞えるやうになつて來たので、何事であらうと恐る〳〵近寄り、板戸の隙から本殿の後の庭を密とのぞいて見ると、驚くべし、立派な裝束をつけた物頭の指揮で、三人の武士がいま仕留めたばかりの狐を棒にくくりつけて運び去らうとして居る所であつた。

平助は餘りのことに驚き呆れて、暫くは忙然たるばかりであつたが、四人の姿が暗い杉の木立に隠れてしまつたのを見て、本殿に通ずる渡殿から庭に飛下り、大杉の祠の前に來て見ると四邊はきれいに片付いて、證據となるものは何一つ殘つて居ない。小豆飯はいつもの如く一粒も殘らず片づいて、折敷もそのまゝ供物臺にも異狀がない。平助は轉ぶやうに走つて見たまゝを宮司に告げた。宮司も失神せんばかりに驚いて、直に平助を伴ひ、御城に驅付けて事の顛末を直々兵庫の耳に入れた。

『何うぢや平助の申す所に相違あるまい。最早遁れぬ所だ。命を知つて潔よく伏罪致せ。』

『恐れながら申上げます。這回狐狩の儀は御前に於いて御上席に詞を返しましたいきさつもあり、宮司と申し、又之なる平助と申し、孰々御上席の御家人も同然のもの、如何なる虚言を構へぬとも限りませぬ。又仕留のました狐が縱令神苑のものであるに致しましても、生物であれば、何時穴を出て山中に隠れ居らぬとも限りませぬ。今日の狩は君命に由りまする所、狩場に居合せましたのが彼等の不運、況んや靈狐と野狐と何を以て見分けまするや、之は却々の困難、此儀、御賢察を願はしう存じまする。』

此理窟は前以て要人に敎へられて居るので淀みなく述立てることが出來た。

『賢くも申した。其方は殘る所なく證跡をくらまし去つたと思ふ故に左樣なことを申すであらうが、神靈何とて汝等の無道を見遁し給はんや、最前城中にて君侯より御盃を賜はりしは汝の草鞋の裏を檢めんが爲の計略、此方には確な證據があるぞ!』

『何と仰せられる。』

『汝知らずや大杉神社の御苑に敷き詰めたる雲母交りの白き砂は、御先代久清樣の時、大野川の上流より運び來れる清淨無垢のもの、玉垣の外には一粒たりとも絕えて有るべき筈のものでない。』

『エッ!!』

『最前諸役人立會の上にて其方の脱捨てし草鞋の裏を檢めしに不思議なるかなかの清淨の白砂が、壁土などを塗つたる如く一

面に附著し居つたるぞ。』

『ウーム』

『それのみならず、靈狐の供物を取りしはその方ども不埒を働く直ぐ前のことなり、早速腹を割いて臓腑を檢めよとの御上席の仰せに、これまた諸役人立會の上にて、御藥方のもの、腹を割いて見るに、子狐の胃の腑より平助の申す小豆飯が夥しく現はれ出でたるワ。何うぢや、神罰は覿面じやあらう。恐れ入つたか。』

正直者の仙右衛門はグツと詰つて、眞青になり、一も二もなく恐入つてしまつた。

『申聞き相立たすば直様切腹申付けよとの上意である。實は重き罪科にも取行ふべき筈なれど、重代の忠義を思召され、せめて武士らしき最期を遂げさせよとの仰せ、有難く御受け致せ。』

『ハハッ！』

襖の蔭から様子如何にと窺つて居た妻子眷族どもは、此時ワツとばかりに伏し沈み、聲を忍んで悶え泣くさま眼もあてられぬ有様である。型の如く暫時の猶豫があり、沐浴を濟まし、衣服を更め、泣きくづほれる妻子に別離を告げて悲びれず定めの座に直つた。

上使の許可を得て、仙右衛門の弟、左門といふ若ものが介錯に立つた。

『今生に申殘すべきことあらば何にても聽取り得させる。心置きなく申してよからう。』

『此期に及び、今更何を申しませうや。たゞ組の者三人は頭の申付けるまゝに立働きましたもの、身分も輕きもの故、特別の思召を以て憐憫の御沙汰願はしう存じまする。』

『シカと承知致した。之は最前それ／＼の長屋より御手當になつた筈であるが、君前へよしなに取成し致すであらう。』

『要人様は如何遊ばされましたか。』

『之も最前上使を以て閉門仰付けられた筈ぢや。追つて何分の御沙汰があらう。』

『…………………』

仙右衛門は靜に潔く刃に伏した。流石一藩の物頭を承るものほどあつて、武士らしい最後であつた。介錯に立つた左門が泣く／＼刃を斂め、上使に向つて一禮しようとする時は、百目蠟燭の火も暗く、夜も子の刻に近かつた。

『アレ!! 塀の上に狐が!!』

次の間から若黨のけたたましい聲が聞えたので左門がキツと植込みの向ふを見ると淡暗い塀の上にズツと狐の面が並んで居る。それが何うやら上使の供廻りらしい様子である。

『己れ!!』といひさま、左門が起上る刹那、燭臺の火は一度に消えて、上使の顔も眞白い狐の顔に變つて居た。左門は夢中で斬付けたが、狐はヒラリ體をかはしてしたゝかに左門の脾腹のあたりを當てた。左門はウンと悶絶する。

上使の供のものも風のやうに消えて、跡には中庭の枝折戸が夜の風に煽られるのみであつた。

翌る朝、竹田の城中には何事もなく、明六つの太皷はいつもの如く穩かに鳴り渡つて町々の眠りを覺した。太田要人は常よりも元氣よく登城して、藩主の前に昨日の手柄話しなどして居た。

中川兵庫も何時になく機嫌よく要人の手柄を賞め立てゝ、早速靈藥の調製に取りかゝる旨の御屆けをした。

たゞ物頭の仙右衛門は病氣といふので其日は出仕しなかつたが、翌る朝になつて家人から頓死の屆出でがあつた。

仙右衛門の頓死は狐の祟りであるといひ、或は發狂して自殺したものであるといひ、町での噂は區々であつた。兵庫も要人も此事あつて後は何うしたものか申合せたやうに鋒ををさめて當分は爭ふ樣子も見えなかつた。

（大正十二年大震災の後）

龜戸事件の眞相

鈴木文治

一

平澤計七君、河合義虎君外七名の勞働運動者が、九月三日夜府下龜戸警察署内に於て、軍隊の手によつて刺殺されたといふ事實の發表は、大杉事件と相並んで、正しく天下の耳目を聳動した。

實は平澤君が檢束されたといふ噂は、右の時日と相前後して我々の耳に入つた。それと共に、行衞不明とも傳へられ、又行衞不明とは其實殺されたのだとも傳へられた。勞働組合側では事態容易ならずとし、密々に調査を行つて居た。而して九月中旬に至つて、大虐殺の事實なることが判明し、其氏名も分つて居た。併し此際どんな間違があらうかも知れず、迂濶に發表して、累を自他共に及ぼすやうなことがあつてはいけないといふ考慮の下に、發表を差控へて居た。然るに事實は結局事實であつた。恐るべき事實であつた。××××は今更取消すべからざる事實であるが、同君等が死に至るまでの經過は、果して警察側の發表通り、更に一點の相違もないであらうか。又その刺殺といふ處置が、警察官憲の言明の如く、果して『當然の處置』であらうか。『アノ際止むを得ない處置』であらうか。疑は玆に起る。

警察側の辯明によれば、同君等は恰も彼の天災の折を利用して、更に一層不穩の企てをなさんとしたものゝ如くである。或は當日屋根の上に上つて革命歌を歌つて居たといひ、又は不穩なる煽動演説を試みて居たといふ。而して警察署に引致された後に於ても、署内に於て革命歌を高唱して、喧騷し、警察官に向つて怒罵し、反抗し、手に終へなかつたものゝやうである。而して萬止むを得ずとして軍隊の手に引渡された後に於ても、軍隊に向つて反抗し、罵詈し、甚しきに至つては薪を振つて抵抗

し、これまた止むを得ずして刺殺したといふのである。

私は右の人々の中、個人的には二三の人だけしか知らない。けれども同君等の平素を知つて居る人々、又當日の模樣を知つて居る人々、同時に同所に居つた遺族の人々の言葉を綜合するに、到底警察側の發表を其儘に受取ることは出來ない。事實に於て多大のへだゝりがある。從つて日ならずして其眞相が判明せらるゝことゝ思はれるが、世は大正である、國は立憲法治國である。如何に大震災後の混亂時であるとはいへ、かくも手輕に人命が奪はるゝものとすれば、日本の勞働運動者は、生命身體に對して、不斷の危險を感ずることなしに、其運動を繼續することは不可能なりといふの外はない。

二

今試みに我々の疑問とするところ、我々の現在までの調査の結果、警察側の發表との事實相違の點を擧げて見よう。

第一、當人等の引致せられた當時の模樣を聞くに、何等不穩なる煽動行爲等はなかつた。當人等は或は自警團に加はり、或は救護會の如きものを組織せんとして居たやうである。殊に被殺害者の一人北島君の如きは、廣瀨自轉車工場の職工の一人であるが、一日午後工場附近に出火ありといふを聞くや、工場との間に爭議中であるにも拘らず、眞先に馳付けて消防に盡力し、大事に至らずして消し止めた。又工場の附近に避難民の蝟集する有樣を見るに見兼ねて、工場に交渉して炊出を行はしめ、自ら炊事もすれば、握飯も握るといふ風にして大活動をした。平澤君は自宅に於て當夜自警團の人名の調査を行つて居るところを引致されたといふのである。その他南葛勞働組合の幹部並に會員諸君は自宅が倒潰したので、二夜は自宅附近に野宿をしたが、三日に至つて、比較的被害の少ない、組合本部たる川合義虎君の自宅に引上げ、家族と共に寢に就いた寢込を襲はれたのだといふのである。いづれを見ても格別不穩な言動に渡つたといふ事實を認めない。警察では附近の者二名が、被害者等の革命歌を歌つて居るのを見て、駈込み訴へて來たといふ風に言つて居るといふことであるが、これは事實ではないやうである。且つ警察官自ら現認したのでもない。訴へ出て來たのを信じたといふやうである。それが果してそのまゝ信を措くに足るべきことであるかどうか、疑はれるのである。

第二、警察署に引致せられた後に、警察側の言ふ通り、反抗又は不穩な行動に出でたかどうか、これには屈強な證人がある。此者は名は此際特に秘するが、二日より六日まで龜戸署に檢束

され、同署二階の保護室に留置されて居たのである。警察側では、平澤君が檢束の後にも言語に絶した粗暴の扱ひがあつたやうに言ふが、右の者は皆署内に於て、革命歌も聞かず、怒罵喧騒の聲も聞かぬ。署内は一體に靜かで、夜は終夜銃聲を聞いて物凄かつた。四日の朝保護室前に立番してゐる巡査は、昨夜日本人七八名を刺殺した、併しおとなしくして居れば決して殺しはしないと言つた。それから五日の夕平澤君が便所に下りて行くと、便所の側に、無残にも手を縛られた様にされた日本人が二人便所の際に斃されて居るのを見たといふ話である。警察では當時署内には百人からの檢束者保護者が居つて身動きもならぬ有様である、平澤君等はそれ等を煽動し制止を肯んじないので、止むなく軍隊の手に渡したといつて居る。併しその二階に居つた人々は、別にそんな騒ぎを聞かないといふ。これも可笑しい相談話である。

三

第三、九月十六日に檢束せられた者に果君といふ人がある。これは本人がひどく役々を揃へて居るので、特に姓名を秘するが、これも龜戸署内に於て然るべき運命を夜むり、奇蹟的に生命を助かつた男である。これは所謂労働運動者といふ程の人間でなく、單に一労働組合員であるといふに過ぎないが、何かの間違であらう、同署に檢束された。そして同夜他の数名の者と留置場前に手錠をかけられたまゝ整列させられた。前には習志野騎兵聯隊の騎兵が銃剣を持つて立つて居る。そして軍曹らしいものが、時計を見ながら「××、××、××、××、××、××、××××××、××××、××××××××××××、、、、、、、××××××××××××××××××。××××××××。×××、××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××、×××××××××××××××××。×××××××××。然るに果君は一寸位置がぬかれたのか、夫れ以上突いて來なかつたと見え、危く一命を全うし、留置所内に十数日を過し、負傷のやゝ癒えるのを待つて釈放されたといふのである。一説に平澤君等も當時手錠をはめられて居たといふ。果して然らば群を揮つて軍隊に打つてかゝるなどいふことは、出來たこととは思はれない。當時の状態より察するに、その不意の引致の不法なのに憤慨して、口頭を以て抗議もし、或は怒罵も浴びせたであらう、併しそれが果して刺殺に値することであらうか。それも一説に軍隊では銃殺のつもりであつたといふ。併し龜戸

署で、それは外間に聞えるから、他の方法でやつてくれと注文したとも傳へられる。いづれにせよ、軍隊の刺殺行爲に關して龜戸署は、全然無關係ではないやうである。

第四、平澤君等の龜戸署引致は、檢束か拘引か不明である。檢束としても犯罪豫防の意味であつたか、それとも他の迫害より免れしめようとする保護の意味であつたか一切不明である。拘引とすれば何等かの罪狀がなければならぬ。然らば如何なる罪名の下に拘引したか、これも發表されてない。社會主義者や、勞働運動者に檢束處分は屢々行はれることであるが、平澤君等も恐らく普通の檢束と思つて同行したのであらう、殺されやうとは夢にも思つて居なかつたであらう。然るにその取扱の荒々しいのに恐らくは驚きもし憤りもしたであらう。その結果は遂に死に至つたのである。衞戍規則の第二條とかには、作爲不作爲共に軍隊の命令制止を聽かざるものに對しては、非常手段を行つてよいことになつて居るといふ。併しそれは常に死といふ結果を豫想しての規定であらうか。あの場合殺害以外に適當の手段はなかつたであらうか。當時の模樣を聞くに、平澤君等に兇暴の振舞があつたやうではない。殊には手錠をはめられて居たらしいといふ。場所は警察署の構内である、警官も居れば軍隊も居る、暴れるなら縛りも出來たであらう、騷ぐなら猿ぐつわでもはめられたであらう、何でも殺さなければ他に途はなかつたか、甚だ疑はしい。人が人の命を奪つていゝといふことはない。それは緊急非常萬止むを得ざる場合に限る。國家の權力といへどもさう人命を輕んずるものではない。當時の場合は果して眞の緊急非常の場合と見るべきであるか。我等の疑問は容易に解けない。從つて輕々に『當然の處置だ』と見ることは出來ない。事件はいづれ法曹團の人々の手で闡明されるであらう。私は本件裏面の消息について考へて見たい。

四

私の想像するところでは、平澤君等と龜戸署員とは、平素決して親善の間柄ではない。否、或は却つて犬猿も啻ならざる間柄ではなかつたか。さうした平素の事情が、アノ際あのドサクサの際かゝる結果に導いたのではないか。

龜戸の署長古森君は、以前警視廳の勞働係長を勤めた人で、勞働運動の實情には精通してゐる人である。そこで係の高等刑事等は勞働運動の取調や取締について、屢々その不成績を詰責されたと傳へられる。さらぬだに多くの場合、社會主義者や、勞働運動者と警官の間では決して圓滿でない。隨分怒罵の交換もし、毆合ひもやり兼ねない。尾行をしては捲くとか捲かれると

か、自宅を訪ねて來ては厄介扱ひにされ、勞働者の集會等に於ては「犬だ」と罵倒される。警察官も人間であるから時には遺恨骨髓に徹するものもあるであらう。況んや上官にまをり飛ばされるに於て、一層癪にさわるものがあつたであらう。隨つてこれ等警察官の立場から見れば、多少感情の問題も交つて平澤君等を以て、許すべからざる不都合な人間と思つて居たであらう。隨つて何か、他に中傷するものでもあれば、直ちにそれを信ずるといふ狀態にあつたのであらうかと想像される。これ即ち當日何人かゞ、革命歌をうたつてゐるとか、不穩な企てゞもあるといふものがあれば、それやつて仕まへといふ氣分になるであらう、彼等をこつちめるのは此時だといふ考へも起るであらう。平澤君等も決して馬鹿ではない、戒嚴令下に於て、萬一不穩の企みすれば結果がどうなるか位のことを考へない位の人々ではない。實際不穩な企てゞもあつたなら、それこそ飄を喰つてズラカル分別でもしたであらう。悠々自宅や組合事務所に於て自警團の相談でもあるまいと思はれる。

一體に當時の人心は昂奮を極めて居つた。警官と雖も逆上氣分は免れなかつたであらう。殊に龜戸署は交通通信機關の途絕と共に孤島の如き地位に立つた、警官等の氣分は一時大逆上に達したと思はれる。署長自ら死を覺悟したといふ程なので、平素の如き冷靜な判斷は出來なかつたのであらう、かゝるところへ頭を擡げ來つたものは、平生の憎惡怨恨でなかつたか「エ、マヽヨ、此際だ」といつたやうな一種の叫きが、天の一方に聞えなかつたか。軍隊の精神の異常に昂奮してゐたことも想像に難くない。非常の時であるにせよ、あらぬにせよ、憲法も停止されたのでない、法律も廢棄されたのでない、法治國たる日本國民の生命財產は、法律の命ずるところによつて、保護もされ、處理されねばならない。非常の際だといふ口實の下に、一切の不法行爲が許さるべきでない。死人に口なしだからといつていい加減に葬らるべきではない。我々は飽くまでも其眞相を明かにせんことを要求する。而して司法權の活動を要求する。又その責任はどこまでも糾明せなければならない。社會主義者であらうと、勞働運動者であらうと、法の適用に二三あるべきでない。若し然らざれば國民は據るべきところを失ひ、國民思想は結局大動搖を免れないであらう。

私は勞働運動擁護の立場に於て、飽くまでも眞相糾明を叫んで止まざるものである。

(事件の內容に於ては見聞したるところ少くないが、目下法曹團の手で調査進行中であるから、一切の事はその手で發表されるのを待つことにする。)

異常の豫感、傾向の分化

片上　伸

1

今度の震災火災と文學との交渉關係に就いては、これを二つの方面に分けて考へることが出來る。その一つは震災火災によつて、文學を印刷刊行し、普及傳播せしめる能力が激減したといふことである。今一つは、震災火災に伴つて、さまざまの方面から、さまざまの理由から、社會生活の氣分心持ちの上にあらはれて來る變動が、將來の文學に及ぼすところの刺戟影響である。震災火災の後の文學の復興といふ問題は、さしあたり先づその印刷刊行能力の恢復、文學の社會的普及力のよみがへりといふことを意味するものであらねばならぬ。震災火災が、直接目に見えて文學に及ぼした影響としては、文學が社會的に成立し、普及傳播せしめられるための機關乃至手段に、大きな故障が生じたといふことにほかならないからである。隨つて、この故障は、文學の本質に直ちに響くものではあり得ない。文學創造の根本力に、直接影響を及ぼし、それが何等かの持續的な結果を創造の上にあらはして來るといふやうなものではあり得ない。即ちこの意味では文學の刊行普及機關の恢復であつて文學そのものゝ創造力乃至表現力を立て直すとかどうするとかいふ問題とは全く別である。震災火災の後の文學の復興といふやうな言葉は、これ以外に說明のしやうのない言葉である。要するに震災火災が直ちに文學と交渉關係するところは一時的の機械的な專ら經濟力の故障であり、またそれの恢復である。この機械的な、經濟力の方面の故障が、文學の社會的成立乃至出現に、たゞ一時的にもせよ、どういふ影響を及ぼすであらうかといふ點に就いても、いろ〳〵の考へかたがないではない。元來文學を社會的に普及するために存在してゐる印刷刊行販賣の機關なり力なりが、近代の社會では、遂に用ひられてそれ等の機關を運用して利益を得ようために專ら用ひられ、その目的のために作られる文學（少くとも文學と稱するもの）が多くなつ

てゐたのは事實である。營利のためにする印刷刊行機關の濫用、惡用乃至誤用が可なり盛んに行はれてゐたのは事實である。今度の震災火災によつて、それ等の機關が激減したために、出版せられる文學にも已むを得ず何等かの選擇制限が行はれるであらうとは考へられるが、その制限なり選擇なりが、眞に生活に必要なものをのみ抽き取るといふ保證はついてゐない。却つてこの場合物質上の損失を償ふために、一層コムマーシャリズムの支配を強く受けるであらうといふことさへ、十分な理由で豫想せられるのである。また或ひはそれとは全く反對に、眞によき選擇の下に刊行せられるといふことも全くないではあるまい。

2

しかしながら、震災火災の後の問題として、文學に就いて考へられることの中で、眞に考へがひのあるのは、震災火災に伴つて生ずる經濟上、社會道德上乃至思想上の動搖變化と、文學との交渉である。この事實は、恐らく極めて緩慢に、徐々にしかあらはれて來ない。しかし、その二つの交渉が眞實な命のあるものであるかぎり、それは根柢的に、久しきに亘つてあらはれて來なければならない。震災火災と文學の本質内容とは、決してそれだけで直接に交渉を有すべき筈のものではない。しかし、震災火災に伴ふ個人乃至社會の生活の、少くとも一時的の激變、切迫、それはたまたまその個人乃至社會の生活全體に於ける文學の位置乃至意義といふやうな問題に想ひ到らしめる機會を提供した。少くとも、一時的に激變し切迫してゐた個人乃至社會の生活にとつて、文學とはそもそも何を意味するか、何を與へ得るかの問題が、今さらの如く考へられたでもあらう而して文學そのものゝ存在意義に關する疑ひもしくは否定的の考へがそれの結果であつた。文學の如きは、あの震災火災當時の逼迫せる場合に於いて、何等の力なき贅澤であるといふやうな考へかたがそれである。この考へは或ひはその當時の切迫せる場合に於ける實感でもあらう。しかし、この考へは、それによつて文學の價値を少しも增減するところのないものである。震災火災當時の切迫せる場合に、文學が直ちにそれによつて饑渴を醫し火力を減殺せしめるに役立たなかつたからと言つて、それは文學の無力を證據立てることにはならない。饑渴を充たし、火力を防ぎ消すに役立つものは、言ふまでもなく自のづから別に在る。その切迫せる場合に於いては、わづかに生命的生存を留保するために全力を傾倒して、文學の如きも、それどころではないものと考へられたといふ意味で、勿論その實感は眞

實として受け取られる。たゞ、それによつて、およそ文學の如きは所詮贅澤であるといふやうに極言すること、さまでに切迫せる場合を經過した後となつては、——即ち、わづかに生理的生存を留保するために全力をさゝげてゐるやうな時期を過ぎて後までも、文學ごころではないといふその當時の心持ちや判斷を持ち越して來ることになると、——その考へかたは、その當時の實感は、今日の眞實としては受け取られなくならざるを得ない。文學は贅澤だといふやうな言ひかたは、特定の非常時に於いてのみ眞實であり得るところの實感を、一般常時の眞實として持ち越さうとするものゝ如き嫌ひを有する。

およそ人間としての生活の要求に適應して、その全體としての生活力を持續し增進し强烈盛大ならしめるために役立つ以外の部分的な安寧便利愉樂を提供するものが贅澤であるとするなら、——而して結局全體としての生活力の減退乃至廢頽を招來する傾向を有するものが贅澤であると言へるなら、近い過去と現在の文學に、さういふ意味の贅澤な文學はいくらもある。さういふ種類の文學は、震災火災當時の特定非常時に於いて考へて見るまでもなく、一般常時に於いても餘計なものであるが、殊に、非常時に於いては、尚更贅澤な無用なものとして考へられるに十分値ひする。文學が贅澤だといふ場合、それはたとひ特定の非常時の實感ではあつたにせよ、その意識の中には、暗默のうちに上にあげたやうなものを含んでゐたかも知れない。或ひはまた含んでゐなかつたかも知れない。

3

前にも言つたやうに、震災火災と文學の本質內容とは、決してそれだけで直接に交渉を有すべき筈のものではない。震災火災があつたからと言つて、文學の內容が變るといふ約束はない隨つて文學の本體は震災火災のために微動もしないといふのも一應は尤もである。しかしそれは、震災火災そのものによつて直接に文學といふものゝ根本的な性質や價値が變つて行くことはないといふ意味である。文學の歷史的事實が、震災火災に伴ふ社會の道德生活の變動と沒交渉であり得るといふことを意味するものではない。また、それは、震災火災當時に於ける現存の作者の作風が變るとか變らないとかいふことにこだはるものでもない。震災火災に伴ふ社會的道德生活に動搖不安があらうとも、それ等とは沒交渉でゐる作者もあるであらう。しかし、その震災火震に伴ふ社會的動搖不安が、社會生活の心の底に波紋を描いて行くかぎり、後に來たるべき文學の歷史的事實の凡てが、全くこれと沒交渉に終らうとは考へられない。凡て問題

は未來の上にある。徐々に緩慢にあらはれて來るところの未來の上にある。何事が起らうとも、それが社會生活の心の上に波紋を描かうとも、文學は動かなくていゝのだ。これでいゝのだ。微動もするなといふやうな考へかたは、可なり自是的傾向の強いものである。その中には、自家の文學を以て凡そ文學の眞髓なりとする自負心もある。即ちその結果として art を Art と誤認する。誤認する丈けなら自惚と見てもよいが、その結果は自家の現在の文學に、即ち自家のartに立て籠つて、これを固守しようとする。現狀維持、保守、反動の氣分が自からも氣づかぬうちに濃厚になつてしまふ。自家の文學に立て籠つて固守しようとするから力む、やゝ固くなる、見えを切る。收まるといふやうな調子になる。そこにいつもつきまとふのは自家擁護意識である、そこから不用意無自覺の間に自家の未來（隨つていくらかは勿論現在）に對する不安の氣が滲み出て來る。恐く保守反動の心理の特色を具備して來る。文學はこんなこと位で變らないといつて力むのは、變らないといふよりも、その實變らせたくない、變らない方が都合がいゝといふ無意識の感じから來てゐるかも知れない。それは一つは自家の文學を高く見る自是自負の心からでもあるが、その裏は直ちに保守擁護の心持ちにつらなる。

文學の本質は變災のために急に變つたりするものではない、而して文學の本質の具體現せられたものは自家の文學である。それは變災のために急に變つたりはしないといふのは、一種の矜持と自負とを以て自家を守らうとするものゝ態度である。震災火災は、少なくとも、この態度を鮮明に表白せしめる機會を提供したと言つてよい。

4

震災火災に伴ふ社會的生活氣分の變動といふことも、寧ろ未來の問題に屬する。それが如何なるものであるかは、今日に於いては豫測に過ぎない。況んやその社會道德的生活氣分の變動と文學との交渉の問題の如きは、尚更さうである。しかしながら、震災火災の有無に拘らず、社會生活の氣分の上にも、文學の上にも、一種の不安動搖の色調のあらはれてゐたことは、既に事實であつた。震災火災は、それに伴ふところのさま〴〵の變動によつて、たま〴〵既にあらはれつゝあつたところの不安動搖の色調を、一層濃厚にし、一層鮮明にして、分裂すべきものをして分裂せしめ、爭鬪すべきものをして爭鬪せしめ、結局生活力の要求が志すところに促し進めて行く一つの刺戟となるであらう。

最近の文學は、いはゞ一種の都會的凡俗的傾向を著しく示してゐたところがある。中間階級的な、成金的な心理に基いて、小ぎれいで、氣らくで、おもしろくて新らしくて、驚きと刺戟とがあつて、奇古で、由緒ありげで、人道味受難味のうちに新センテイメンタリズムの憂鬱味が加へられてゐて、都會的に安全で、智巧的で、饒舌で、沖らず潛まず、精神的に眞の貴族でもなければ眞の民衆でもなく、要するに凡俗の現狀に逡巡しつつ何程かの安きよろこびを味はふものゝ姿があつた。よい意味の刺戟の少ない文學である。この平凡な安全な、よい意味の刺戟の乏しい傾向に對する無自覺の反抗不滿のあらはれとも見るべきものが、ある意味で冒險的な人道的殉難的な社會問題中心の物語(たとへば賀川氏のもの)、宗教的偉人の生涯を取り扱つた物語、空疎な誇大妄想的英雄主義氣分を表現した物語（島田氏のもの）などの出現とその流行である。性慾を露骨に取り扱つた刺戟的な讀みものゝ流行や、禁慾求道の托鉢生活を叙述したものゝ流行なども、やはり平凡な、安全なよい意味の刺戟の乏しい傾向に對する不滿のあらはれと見られるであらう。プロレタリヤ文學の主張の如きは、その出立點に於いて、動機に於いて、思想の根據に於いて、前記の流行的諸流派とは全く別途のものである如くに見えるが、その文學上の主張の歴史的關係は平凡な現狀に滿足するものに對する現狀打破の精神の勃發であつたといはねばならない。すべてそこには、何等かの新らしさ、何等かの非凡異常、乃至何等かの變化變動に對する、無意識無自覺が要求期待乃至豫感が、或ひは變態的ながらも、或ひはまた微薄ながらも動き且つあらはれしゐたものと見てよい。その間に、多少突飛な氣味のものや、多少極端、衒奇的な妄想狂的な傾きを有するものゝ出でたといふことも、時代の變調を暗示する豫兆であつたと見るべきであらう。とにかく、安全で上品で、智巧的で、都會人らしく平切な氣風のどことなく横溢してゐるのに對して、眞の力は及ばぬながらにも、形式なり題材なり意氣込なり事實の變化なり、一點なりとも何等かの意味で、非凡異常の特色を有するものが、(たとひ文學の本地に出でたものとして待遇せられなかつたにもせよ、ともかくも多數の間に)、一種の文學として流行したといふことは、何等かの突破と激動との必要を豫感してゐた結果の事象と見られるのである。

5

震災火災は自然のエレメンタルな力の爆發である。自然の要求乃至必要によるその力の勃發である。自然の力に對して不合

理な關係に立つてゐたところの一切の道徳建設は破壊せられ、物質的にも、精神的にも、人間の心を、そのエレメンタルなどん底へつきつめた。少くともあの震災火災の當時、切迫せる事情の下に於いて、人間の心は、極めてエレメンタルな力によつて單純明白に動いて行つた。自然のエレメンタルな力の發動が人間の心のエレメンタルな力を、痛切に刺戟し震撼せしめたといつてよい。それによつて、人はその心の根柢的な要求に目ざめしめられた。心の底の要求乃至必要が、灼きつくやうに痛感せしめられた。心の底のエレメンタルな力、その要求乃至必要が、大膽に、露骨に表現せられた。すべての表白が、曲折なしに、端的に、極端に出て來た。最低限度に於いて、生きるために必要なもののために、他の一切のものが犠牲にせられ、心の生地があらたに見え且つ動いた。心の底が、よくも悪くも、あけすけ見え、心の力が明白に分化した。方向と種類とは何であらうとも、あらはれるだけあらはれ切り、出るだけ出切らうとする傾向になつてゐた。強烈な外からの刺戟で、心が震駭せしめられ、一切のものがありたけ搖り出された形である。泥も、石も、火も、水も凡てがその力のかぎりを心中で發動せしめようとしたのである。最も根本的に心の底にこびりついてゐるものが出て來たのである。すべてが急激極端になり、暴力がしたゝかに用ひられ、憎悪も、恐怖も露骨に表白せられ、迷妄易信の風がその暗黒の力を揮ひ、自己の影におびえるやうな流言蜚語が心を衝き動かし、あらゆる極端な大げさな名義權威の妄信の下にあらゆる極端な無道な殘虐が行はれたりしたのである。

而して、一時の惑亂に際してあらはれて來たこれ等の凡てのエレメンタルな心の發動は、一時の非常の興奮によるのであるが、その一時の非常時の興奮が過ぎ去るとともに、尙且つ鎮靜することの出來ないほどの根深い心の要求は、更にねばり強くおの〱の傾向に向つて進んで行くであらう。これ等の心の興奮に伴ふエレメンタルな力の發動のすべてが、一時的のものとして過ぎ去つてしまふやうなことは必ずあるまい。とにかくそれ等の心の動搖の間を通じて見ることの出來る事實は、命がけで、本氣で、自己の心の要求を追及するといふことである。生死の切迫せる境に在つて、もしくはそれに伴ふ緊張せる雰圍氣の中にあつて、人々はすべてそれ〲の方法態度に於いて生き抜かうとした。生き抜くといふことの内容は極端に相反してゐることがあらうとも、自から生きるためには一切のことを顧りみないといふやうな、思ひつめた心持ちに於いては共通である。自衞のためには、もしくは國家のためといふ名の下には、一切の非道殘虐が行はれても差しつかへないであらうといふやうな考

へかたも、やはり命がけで生き抜くものゝ、少くとも一方の心のあらはれであると見ねばなるまい。恐らくは、この變災が機として、人間の命を脆く見、輕く見るものも、偶然の運命の力を信ずるものも、乃至人間の力を高唱し、生命の力の强さを信ずるものも、今まで以上に、そのおの〳〵の考へかたを明白にその傾向態度を進める結果となるであらう。反動保守の傾向も急激突進の傾向も、更にその往くべきところに進み、更にその固守すべきところに據つて、その對峙は一層その爭鬪は恐らく一層激甚となるであらう。どちらも命がけで生き抜かうとするからである。どちらも今までよりは眞劍に本氣になるからである。よい加減にはゐられなくなり、一かばちか、否定か肯定か、のるかそるかの極めをつけようとする心持が一層高まるであらう。心のエレメンタルな力が分化しようとするのである。分れるべきものが分れようとするのである。何等か極端なもの强烈なものを求めるやうにもなるであらう。調子の高い刺戟のつよい、生命に直接響くやうなものでなくては、もの足りない感じがするからである。凡俗的停滯の氣風に對して、無自覺的にもしくは無意識的に、不滿を感じてゐた人間の心は、この異常の大變災の突發によつて、とにかく一時的にもせよ、緊張し興奮することが出來た。あるかぎりの力の沸騰を感ずることが出來た。またあらゆる不安と恐怖との中をくゞつて來た。無自覺の倦怠から、何となく求め、何となく豫期してゐた異常事の出現は、その無自覺の倦怠の心に、ともかくも動き行くべき方向を與へ、少くとも疑ひと不安とを與へた。安全な平凡に停滯してゐられないだけの衝撃を與へたのである。

心のエレメンタルな力が分化して、往くべきところに往き、究むべきところを究めようとするやうな命がけの傾向が促進せしめられるとゝもに、その反動として、更に在來よりも一層多く安全に一層多く平凡な停滯を維持しようとする傾向も明白になつて來るであらう。一旦偶然の機會に於いて心の底の力の閃發を見たものが、更にその心火の炎上を期待して、眞に待ち望まれるところの異常を求めずば已むまいとし、互ひに死力をつくし相鬪はうとするに至れば至るほど、安全な平凡を固守しようとするものも亦一層自家の立場を明白にして來る筈である。思想の上で、生活の享受の上で、極端な力の對峙があらはれ、爭鬪が激しくなるとともに、中庸穩健といふやうな安全策を說く傾向も一層明白になつて來るであらう。これもまた、一つの分化である。分れるべきものが明白に分れて、おの〳〵の立場を守るに至る一つの事實である。非凡異常の創造のために、一切をさゝげるものと、保守安全を願ふために、一切を惜しまぬもの

とこれ等は社會生活の上にも當然にあらはれて來るであらうが、それがさま〴〵の形と名目との下に、文學の上にも明白にあらはれて來るであらうことは豫想せられる。已に存在してゐたところの、あらゆる相反對する力の爭鬪の萌芽は、今度の變災を機として、露骨に大膽にあらはれて來てゐる。思想と暴力との相打つ形も、そのテンポを急激にして來てゐる。この上何事が起るか分らないといふ感じもある。あらゆることが起こり得るといふ感じもある。時來らば、これ以上のこともあり得るといふ漠然たる豫感もないではない。不安の渦卷は一層濃くなり、急激になつてゐる。この二箇月の間に、時代の煩悶は露骨にあらはれて來てゐる。恐らくは凡てのものが自衞上已むを得ずか進んでか、それ〴〵の旗幟を鮮明にして來るであらう。自己の現在に立て籠つて、藝術至上の夢に自からを慰めるものも、部分的智巧的な巧技の彫琢に寂しさをやるものも、市井的凡俗道徳を是認することによつて生きるものも、放縱自恣の生活にせめても平凡に反抗するものも、またいつまでも人生の一角を寫す以外に心の動搖を感じ得ないものも、その他すべてのものがその生地をこの上出し切るやうになるであらう。その結果は、それ等に代るべきものゝ出現を多少とも容易ならしめるであらう。いかゞはしい怪しげなプロレタリヤ文學と稱するものも多く姿をかくして、眞に未來の新時代の苦悶を表現するものがあらはれて來るやうになるであらう。少くとも、さやうな結果に到達すべき第一歩として、あらゆるものは分化し、旗幟を明らかにするやうになるであらう。今度の變災に伴ふさしあたつての影響として、未來に亘る意義を有するのは、その方面にある。

演劇の今後

長與善郎

客　日本の演劇は行きづまつてゐるやうですね。

主人　何で行き詰まつてゐませう。行き詰まる處迄行つた事はないではありませんか。文壇にしろ、劇壇にしろ。尤も舊劇抔は別にです。なぜならそれは既う行く處迄行ききつてあれ以上進歩の餘地がなく思はれるほど完成した一つの演劇道ですから、併し今日の劇壇は行き詰つてゐるのではなく、反對に進み度い氣は大いに欝勃として動いてゐるのですが、只どつちへどう進んでよいかに迷つてゐるのです。

客　なぜ迷つてゐるのでせう。

主人　それは演劇に對する、即ち廣く一般藝術に對する概念解釋の立ち場が支離滅裂に紛糾して統一してゐないからです。舊劇が曾てあれ丈けに幾多の困難をきりぬけて進み得たのはその當時の演劇なるものゝ道が唯その道一つに統一一貫し、劇としてはその他の方面にどう進まうか、進むべきかと迷ふ事なく、又迷はせる種々の思想の要求がなかつたからです。觀者側に於ても、當事者側に於ても各種の要求は只その舊劇道の中に於ての所作物とか、世話物とか荒事とか、濡事とか云ふ部門的要求にすぎなかつたので、西洋でも演劇があれ丈けに進み得たのは演劇と歌劇とがはつきりわかれ、演劇に對する概念と要求とが統一一貫してゐたからと云へます。併しかくてそれは行く處迄進みきつて了つたので、さう／＼は天才の出現が常に續かず、殊に今日の如き藝術上にも廣義の社會主義思想、デモクラシーが浸入して來た時勢に於て、演劇外全體の傾向としては徒らに議論百出の無政府混沌狀態になつたのです。つまり行き惱みの形になつたのです。行き惱みの疲れた混沌狀態をまだ全で新劇に於ては三歳の童子である日本が新しがつて模倣でもしたら此位馬鹿な話はありません。

客　ところで――今迄のは質問の前置きとして伺つたのですが、其混沌狀態は今度のやうな大變災に際してどんな風に變化して、どんな傾向をとるでせう。

主人　僕は大した變化はあるまいと思ふのです。只形の上の變化は多少あるでせうが――つまり大きな劇場や、それに附屬した設備、大仕掛な一切の道具類が燒失して、それがすぐには復舊出來ない結果、今迄のやうな道具立ての立派さで人をおどかし、客を呼ぶと云つた事が出來なくなり、舞臺よりは劇そのものゝ面白み、興味が大事になり、從つて、いくらか實質主義が先んずる傾きになるでせう。但し、さう云つたとて劇の本當の實質がよくなると云ふ意味ではなく、劇がより實用向きになると云ふ意味です。さう云ふ實質の價値の問題になれば、それは文壇と等しく、格別從前より内容がよくもわるくも思へません。大地震大火災に逢つたからと云つて見物人も、作者も急に利口になると云ふものではありませんから、只さし當り應急の便宜上、換言すれば行政的の必要上、最初には活潑勇壯で面白い活動寫眞の如きものが最も時季に適し、歡迎される意味に於て、澤正風のものが迎へられるでせう。文壇の或る人々の深刻な豫想とは反對に、喜劇も迎へられるでせうが――なぜと云つて、生活が味氣なく、淋しく、陰慘で、苦しければ苦しいほど人は深刻な、顰めつ面をした藝術よりは呑氣な、明るい、純娛樂の爲めの娛樂を求めるのですから、――併し觀劇の結果、觀者の氣持ちがやゝ殺伐な意味で幼稚に緊張する事が必要ですから、餘り露骨に只他愛なくふざけたものや、單なる道化芝居、又はだらけた喜劇は當分向かないでせう。人々は面白可笑しく笑はせられて、充分娛樂の目的を達し乍ら、而も多少の道義的興奮とか、生活の爲めの刺戟劑とかとなるものをのぞむでせう。それを見る事によつて自分が元氣になり、一種の勇氣を刺戟され、絶望的境遇に堪えて、苦しい仕事をし易くなると云ふ辯解が自ら自身にも成り立ち得る事が必要でせう。簡單に云へば面白い刺戟劑、興奮劑である藝術？がよいので、活動寫眞で惡玉の旗色がわるくなり、善玉の景氣がよくなる處へ來て皆がやんやとはやすあの時の心理狀態に似た或る壯快、痛快な勇ましき興奮狀態と云つた風のものであればよいのです。

客　さうでせうかね。もう少し眞面目なものは迎へられないでせうかね。

主人　さあ、僕は豫言者でもなければ、興行主でもないからそんな形勢を觀望したり、豫言したりするのが仕事ではありませんが、從つてその邊の處　何とも云へませんが、とに角もう少し世間の狀態がこゝのい、おちつくに從つて、要求はどんどん變化し、今よりもう少し餘裕の出來た次の狀態になれば、もうちつと藝術らしいものを當ヶ鑑賞し度くなるでせう。藝術のバラック主義では段々滿足出來なくなるでせう。當分は何から

何迄バラック主義です。一體バラック主義と、藝術の要求とは一致し難いものですが、とに角今次の事をキッカケにして演劇は他の藝術と共に益々現實生活の爲めの功利主義、實用主義に壓迫される事になるでせう。それは藝術を利用する資本主義から遠ざかると同時に所謂藝術の爲めの藝術主義、藝術それ自身としての純粹評價からも、益々遠ざかつて行く事になるでせう當分の間にもせよ。

客　當分の間ですつて？

主人　勿論です。本當によいものゝ價値が當分でない以外には現象としては何でも當分ですからね。人間は何をもぢき忘れぢき慣れ、ぢき飽きるものです。且つ忘れてならぬ事は、生活の爲めの藝術、人生の爲めの藝術を生む心はやがて藝術の爲めの藝術を生む心迄行かずには人類の要求はすまないものです。そして藝術の爲めの藝術即人生の爲めの藝術である事は分りきつた事ですからね。民衆は劇場へ自分等の汗みどろ、泥くさい生活の再現を見に行くのではありません。華やかなもの、美しいもの、喜ばしいものを見に見くのです。そしてそれによつて自分等の生活の苦を忘れに行くのです。民衆の生活そのものゝ慘めさを書きさへすれば民衆のお氣に入る、民衆作家と云はれ、民衆のお仲間になれると思ふ者は民衆に媚びそこなつて愚人です。ゴルキーの「どん底」の如く立派な藝術品となれば又別です。況んや藝術の評價は、その他の專門道の評價と同じく、その專門における最深の識者の評價、或はそれよりもより高き自己内心の聲を審判者とすべきであつて、民衆の評價力に據るべきものでないにおいておやです。此意味に於て今後十年以後の日本の劇壇、劇場に於て演ぜられる處のものは今日の唯物主義的評論家、又は社會主義的作家達の豫想とは大いにちがふものがあるでせう。結局劇場とは如何なるものであるが、人々は劇場に何を見に行くか、それを今更に覺る時が來るでせう。

客　では結局、それは又全然元とのものに戻るだらうと被仰るのですか。從前通りの弊害を持つたあの舊狀に。

主人　さうとも思へません。演劇の實用化は演劇の簡易化で、演劇の簡易化の結果は、丁度無駄な金遣い許りしてゐた家がかう云ふ不自由をなめて、いろ〳〵わるい舊慣を改める如く、幾多の無駄な冗費を節約しつゝなほよき效果を擧げる術を學ぶでせう。次に又、簡易化の結果は小劇場が多少殖へもするでせう。相當に芝居を面白く見せて、觀客を滿足させるには、何も大仕掛けな資本主義の大道具を俟たないでも出來る事が分るでせうから。そして今日迄實に拂底であつた小劇場の勃興は、よかれあしかれ藝術を民衆に近よせ、又今迄延びんとして延び得ずに

ゐた劇團を産み出させるでせう。その中には勿論多くのアテ込み的、山師的な、よくない劇團も生れるでせうが、又眞面目なよき劇壇も一つや二つは生れるでせう。資本制度と、演劇の如きものとの關係は一得一失で一概に是非を論じ難いものですが、今迄のはとに角餘りに資本主義的でありすぎた事は事實です。

容　と云つてその資本主義を全く除いて了つたら劇場は立ち行くでせうか。

主人　無論立ち行かないでせう。そして演劇が資本制度に據る事は少しも演劇の爲ではありません。只最もよく最も正しく、その資本制度を利用する事です。强ゐて獻身的、又は義捐的な意味でなくとも藝術に純粹な愛を持つ資本家が相當のよき藝術上の識者に資本を托してその仕事をさせる事、又は國有の劇場——そこではいゝ加減な資本では迚も損でやつて行けないやうな芝居でも、純粹な藝術の爲めの立場からよき芝居を廉價に觀得る如き——の設立もよいであらう。徒らに理想的な要求をしても仕方がない。要するに藝術家がしつかりして、眞面目な目的の下に、組合なら組合を組織し、從來の資本主義の惡弊に對抗してそれを妨ぎ、一方又それを徒らに排斥せずに善用し、善導して、藝術の爲めに轉禍爲福とすべく戰ふ事が必要と思います。

震災後派の思想と文藝

千葉龜雄

一

九月一日の大震火災がわが國民の思想の上に、どういふ動搖と變化を持ち來すであらうかとならば、先づその變化を與へたと思はれる動因が、二つの立て場から眺められねばならない。一つは直接な刺激である。即ち地震といふ物質の破壞、火事といふ物質の燒滅。――そういふ盲目な諸自然力の發動が與へたこころの心理的な變態である。他の一つはやや間接なものである。即ち帝都と帝都市民の大半は、この災害の結果によつて、かつて所有したものの一切を失つた。そこから急激な社會的な混亂と、經濟的な生活鬪爭が生れる。そうした社會的經濟的壓迫から必然に生み出されるこころの、緊張、或は絕望、或は樂觀、悲觀といふ類の心理の一切が即ちそれである。

で、第一の場合で心理を支配するものは、何といつても、自然力に對する畏縮と恐怖の觀念が第一を占めるであらう。もとより現代にあつては、たとへ自然の暴虐の跡がいかに巨大であつたにしても、その原因を、地下に棲んで居る鯰があばれるものだといふやうな、元祿、安政時代民のやうな迷信に囚はれその底知れぬ神秘性と、すがり所のない恐怖感におびえる者は無いであらう。それが相模灘深海の、第三紀淺海沈澱層に俄然として起つたところの、陷落斷層地震であつたことは、小學校の子供だつても知つて居る。そこに德川期の江戶市民が感じたやうな恐怖感とは、よほど內容の違つた安心があるのではあるけれども、そしてまた、それだけ、あの時代にあつたやうな馬鹿々々しくて無稽をきわめた、多數の迷信を暗示するものは無いのであらうけれども、何にせよ、あの自然力の發動と、それに伴なう火焰の蹈舞とは、現代人間の、想像力のおそらく想像し得ないほど、それほど暴虐を極めたものであつたことは事實である。で、彼等の誰人もが第一にそこで享けとるべきものは、本能的反應としての、限りのない恐怖感でなければならぬ。彼

等は先づ自在の威力を測り知れないものと感じ、故に絶對にそれを不可抗なものと豫定して、無條件で自然の脚下にひれふしおののき、また禮讃するのである。

二

第二のものは、あの震動と猛火の下に逃げ廻るこころの、弱小で微弱な人間の姿を見出した刹那の、便りなさと不安の刺激である。または、昨日までは、ドオムを高く大空にさゝげて、金剛不壞をほこつて居た莊嚴な大建築が、いくぢもなく火の珊瑚樹となつて落下する凋落の姿を見た。または文化の渦じあつた帝都の美くしさが、わづか二日の短時間に、悉く原子に還元したさくばくたる變相を見た。または、つたない運命の下に生れて來た、生きながら焦熱地獄に燒かれて行くこころの、幾萬の無殘な死の相に直面した。それからかゝる生々しい諸對象の體驗は、その當事者の心態にどういふ心理を生み出すであらうか。第一のものには、人間といふものの微弱さ、人間の營なみの、かくも無力であるかといふことに對する悲觀が生れるであらう。これをAとする次ぎのものには、人間の生存の、賴みはかないことを痛感させるであらう。死と不幸の運命が、どこに潜んで居るのか知れないといふ不安と淋しさがそこに強く根を張るであらう。これをBとする。そしてこれらの心理から、絶望と闇黑の運命觀が描き出される。鴨長明の「方丈記」が、永遠にわたつて、わが國民の愛着をひくのは、つまりかゝる運命觀の一線に現はれるこころの、わが國民性の感情を、もつとも素直にまた如實に表現したことにある。そこで或る者は、この依りどころの無い絶望と空虛を、宗教にすがつて滿たさうとするであらう。これをCとする。また或る者は、現在 賴みがたない不安を痛感する故に、一切の未來を信ずることが出來ず、たゞ現在と刹那のみに、一切の力點を置かうとするのであらう。これをDとする。たゞ刹那を最高生命であると信ずる故に、彼等はおそらく滿たし得べき生の享樂の全額を、たゞその刹那々々において消盡して了はうとするであらう。さうした人生のなげやりな眺め方が、或る一時代を縱貫した爲に、その一時代を、恐ろしい白晝自棄の渦卷におとし込み、その結果が、あらゆる頽廢の氣分を到る所に飽滿さした例は、世界の歴史に決して珍らしくは無い。世界審判の最後の日が來ると、或る豫言者が或る日高く叫んだ。國中の男女が先づそれに恐怖された。次ぎに、生きる間のあらゆる享樂を、たゞこの刹那に最大限に滿たさうとしたために、未曾有な醜惡な世界をそこに演じ出したのは名高い話である。

この震火後のわが國にあつても、丁度大戰後ドイツのやうに或ひは近い將來に、この一種の絕望的な廢頽氣分が起り、一班を支配する緊張した復興的感激を、何ほどかでも弱めることはないか。といふ掛念が、時々わが思想家によつて採り上げられるのは、おそらくそれらの歷史的暗示から來る豫感の爲であらう。が、こゝに、も一つちがつた眺め方がある。それは彼もまた他の人々と同樣に一度はこの大災の前に本能的に刹那的に恐怖した。そして一たびは畏縮したのではあるけれども、彼はさらにその畏怖から立ち直つて、そもそもこの恐怖を與へた本態が、一體どこから來たかといふことをぢつと理知の上に反映して見たのである。かうしてその明確な凝視の眼が、自然の脅威が歩んで來た足跡をめんみつに、測定した結果、詮ずる所、自然力そのものもまた、物理的測定の外に一歩も出ることの出來ないものだといふ原理を確信するやうになつたのである。だから自然力は、決して不可抗力ではない。その歩んで來た規道の對角線に立つところの、組織的學理さへ精密に應用するならば、自然の持つ暴力を避け、或ひは征伏する位ゐのことは、何の苦もないことだといふ信仰を持つことが出來たのである。かくして彼等は、飽くまでも、合理的に自然に宣戰し、自然と鬪はうとするのである。これがEである。

三

次に、震火の大災が、未曾有の混亂と恐怖を、經濟的、社會的に惹き起した。民衆がその混亂と恐怖から影響された心理は、震火そのものに直面した場合の、本能的反應の直接の恐怖に比べれば、それは形式としてもつと間接なものであるのではあるが、が、一方それが、個人の生命よりももつと廣大な、生理的生活を脅威するものである故に、その打擊と刺激の質はもつと大きく、その色調がもつと複雜で多岐なものである。それだけ、またもつと倫理的、理知的である。たとへば、F、震後の經濟上の壓迫が、震前までの社會生活に大きな革命を促がして、そこに並々でない緊張した氣分と覺悟を社會に漲らすこともあるであらう。G或ひは震前に採り上げて居た市民の或る一部生活が、どんなに空虛でいまわしい、頽廢した情調を盛つて居たものであつたのに反省して、もつと内省的な生活に還らうとするものもあるであらう。H或ひはまたかつて押しも押されもしない資本階級者であつた者が、今は一介の無產者として地べたに叩きつけられて、今まで後生大事にもり立てて居たところの、所有精神のあやまりを、釋然として頓悟するものもあらう。I或はまた思ひもかけない下層階級に、あるひは違つた社會に、

眞珠のやうに尊とひ相互扶助の美くしい魂を發見して、この世に生きる生き甲斐を 今更のやうに深く感激することもあつたであらう。

まあ大抵こんなものであらうが、要するにこれ等の諸心理や諸傾向は、大災と時代とわが民衆生の一切をひきくるめた上に考察して、そこから性れ出るべき心狀態を數へて見たのである。が、それは、單に斯くあるだらうといふ、プロバビリチイの豫感を並べただけのものである。「かく在りたい」といふ希望を含んだものばかりでないのは言ふまでもないとして、また悉く「かく在る」現實相でないのも勿論の話なのである。なぜなら、われ等はおそらくこういふ事相から、かういふ理論がひき出せるといふことまではわかる。そしてペンを採り上げて、白紙の上に、2プラス2とまでは書いて見たものの、さてその積算した和が、必ずしも4とばかりあらわれるかどうかはわからない。或ひは意外にも5現はれ、或は9とさへもあらわれるかも知れない所に、また實人生の微妙な味ひや複雜さがあるとも云へるのである。

四

これも一つは、それをひき起すところの、本元の對象の本質にもよる。この大災についてもそれが考へられる、假令ば、それが現實にあたへるあの災害の損害か、或は同量であり、或はより過激であるにしても、戰爭と地震と火事では、それが與へる人心刺激の深刻さと本質において、莫大な差別が出て來るのである。そしてその點からは、世界戰爭の與へた分子が、今度の震火災が、日本國民に與へた心理的刺激よりも、もつと深刻で半永久性を含むと見られるのである。といつて、それは決して、國や、時間や、損害の程度や、または空間の廣さやの差別から云ふのではない。要は世界大戰が、人類の作り出した損害であるに比し、今囘の大震火災が、自然の暴力によるものだといふ點にかゝるのである。なぜならば、自然の暴力はいかに一時的に强激であつたにせよ。そこに意義も、目的もない。まだ彈力性も、永續性も持たない。また責任がない。單にほんの一刹那の物理力に過ぎないので、直接の思索的意義をもつて、人生の關心を要求するやうな何ものも無いのである。もしあるとしても、それは自然科學の奬勵を對策とせねばならぬといふ程度の、實際的な問題に過ぎないであらう。然るに戰爭はそれとは違う。それは對人關係であり、また對人道關係であり、また對社會的關係でもある。その對策としては、こゝでは一切の人間的な思索を集めねばならぬ。その例としては、デモクラシイの精神が、大戰を縱貫橫貫して來た結果でもわかる。この精

神が、大戰によつて、現代人類の自覺をゆりさまして、そこに無數の國際的、社會的鬪爭をかき起したために、好むにせよ、好まぬにせよ。世界の形勢は惡から最惡にまで陷み入つて、いつ、どこに光りある將來を見出し得るか、やういに見あてがつかないのである。それに比べれば、自然力の方はもつと單純である。また刹那的でもある。與へる慘害とその慘害から生ずる復興的對策の難義は、たとへいづれ劣らぬにしても、少くとも、慘害そのものの當體だけは、自然の方がづつと始末がしよいのである。

始末がしよいと共に、一方に自然の、刺激の一時的突發性であることが、その刺激と、感激をそのまゝ民衆の胸に永續させることに困難な理由ともなる。大災の記憶が、まざまざと記憶に新たな時にあつて、われ等が、當然に起るべき筈だと思惟した諸思想や或ひは傾向が、まだ今になつて一向現はれなかつたりすることいふやうなことも、一つはそうした、印象力の遞減律といふやうな理窟にもよるのである。

五

もつとも、時がたつと共に、あの恐怖すべき自然力も、忘れたやうに拭ひ去られるであらうから、あの當時の脅迫された心理を標準として、將來一切の計畫をそこから割り出すのは全くゆう通のきかない考へではあらう。が、自然力の直接の脅威が去つても、その脅威から間接にとり殘されたところの、生活苦の鬪爭のみは、ますます其の悽慘を極めて、半永久性に存在するであらう。そしてその艱苦な生活が、即ち自然力の犧牲として、諸種の新らしい、違つた思想を新生の日本がもたらすであらう。そしてそれこそは、自然力の單純な恐怖から生れ出るやうな原始的なものではもとよりない。それは眞に現代人の人生的、社會的苦惱を盛り上げたところの、眞劒な時代科學の叫びだらうと一應は考へられぬこともない。しかし、これもまたその民衆が生活といふものを、自體どう見るかの視野によつて違つて來るのである。なぜならわが國民の生活は、傳統的に、おそろしく安價な生存に慣れて居る。またそうした原始的な生存にどれほどでも堪え得られるのであるから、今日とても、少々位ゐの簡易な生活には、決して大した苦痛と刺激を感じないのだ。そこに驚嘆すべき鈍感と免疫性がある。だから、普通に見て、よほど苦しいだらうと考へられる生活の悩みでさへも、わが民衆にとつて、その悩みを、どれほど心的なものまでに引き込んで行くところの興味と必要を感ずるかそれがまた問題なのである。いな、そればかりではない。少くとも、普通に理解される帝都の復興とは、個人がどうにか生活し得る程度の、平行線に甘

んずる意味では決してない。それは專ぱら所有精神と資本蓄積の奬勵を意義するもののやうに見えるので、即ち市民が各自の復興につくすとは、さうした物質的方面の獲得に努力することを語ることになる。しかも彼等は、その所有を恢復し、もしくは蓄積する必要が、震災前に比べて、もつともつと急性でなければならぬものだといふ考へに浸潤されて居る上から、そこではまた多少の社會的合理性、或は社會的正義を勝手にふみにじつても、止むを得ないものだといふ信念を植え付ける所縁をも與へることがあるであらう。そしてそれは、彼は大震前以前にも增したこころの、傍若無人な心狀態を社會的、正義的人道的に敢てさするような傾きさへも起さぬとは斷言されない。

われ等は震災後におけるわが國の反動思想が、だんだんと大つぴらになりつゝある傾向を見て、つよくそういふ氣分を意識する。それは國家に對し、所有精神に對するこころの、一切の合理的思索と解剖を絕滅して、或る一部階級の利害のみに利益しやうとする意志の體現である。それはかれ等反動團體が、だれによつて、かくも大つぴらに行動し得る便宜を、物質的に、無形的に獲て居るかの眞相を考へれば直ぐ理解される。

一切の合理的なるものは、果して暴力によつて鎭あつし、絕めつされ得るか。そして反動團體は、向後においてイタリイのファスチスチや、アメリカの、クウ・クラックス・クランの地位を占め得ることになるか、それともまた。（以下四行欠）

六

その他のこの後の思想と傾向はどう變化するであらうか。たとへば前に云ふやうに、民衆か自然から撲たれた刺激がいかに大きかつたにしても、いろいろな事情から、それから醱酵する思想の變化が思ふほどに强烈なものにならぬであらうといふ事も想像されぬではない。そこで問題は、震災當時において或點まで必然に起るべく豫想されたこころの、前に擧げたやうな諸種の心理狀態が、どんな風に今日保持され、生育されて居るか、またそれが將來どの程度までに開展されるであらうかといふことに狹められて來るのである。まづA、B、Cの事情から來ると其の運命觀と信仰心の消長心はどうか。芭蕉は友人の盃死により、またゲイテは友人の雷擊される側にあつた爲に、佛に入り、もしくは運命と神を信ずるやうになつた。それは誰も知つて居る事實であるが、それと今日は時代が違ふ。今日は科學的常識が、どうにか時代人の皮下に達して居る一時の運命的感激に傷感して、急拵への運命論者に早變りするには、現代人はあまりに物質的になつて居る。現に過去の天災にあつては、專ら人心慰撫の役目をつとめて居た宗教家達が、今度のやうな

災害にあたつては、忽ち珠數と聖書をなげすてて、救助米の配給や、炊き出しに忙殺されたのである。天上に天國と極樂をきづくよりも、現世の靈魂をやしなうことが、そして地上に天國を建てる方が、第一の人道的奉仕たることを彼等もまた理解したからであらう。

更にかうした運命觀や信仰心は、「E」であるところの科學的信仰によつて支持され、覆へされ、もしくは悉く置き換へられるであらう。なぜなら、自然を征服するところの自然科學の發達は、人命にも、人生の營なみにも、または大都會の新生と將來にも、一括して誤まりのない高價な保險を附けるであらうから。たとへばバラックを一つ建てるにしても、井戸を一つ堀るにしても、科學に相談せずには何事も出來ないことが今度の大災によつてなほ明らかに公衆の前に教へられたのである。げにや現代にあつては、人類一切の物質生活に、科學がその脈搏とならずには、その安寧は決して保しがたいのである。こゝにおける今回の、科學が與へた教訓は無限に偉大である。そして恐らく科學的精神もしくは興味は、この後におけるわが民衆生活の基調と脊梁になるであらう。またならねばならぬ。またせねばならぬ、そしてこの傾向だけは確かに動いて居る。この後の責任は、たゞそれを導く人々の力にある、熱意にある。もしまたわが民衆が、これほどの教訓によつてすらも、なほその意義が享受されなかつたならばその家は遂に度しがたいものだ。

七

次にDの心理の動きはまだはつきりしない。またそれを輕卒に斷定するのは早計だ。また熱望して刹那主義に陷らねばならぬほどの興料は少しもない。さらばFからIにいたる諸心理の推移はどうであらうか。先づFとGについては、文壇と批評界に現はれてゐる現下の希求によつて要約されるであらう。それは地震前の藝術は、人生の享樂と停佪に行き詰つて居た、そこに頽廢の雰圍氣がよどむ。故に地震後派としてまさに現はれねばならぬものは、何等か人生の活力をふきこむところの、嚴肅であり、眞摯な精神を主としたものでなければならぬといふのである。地震前派は云はゞ藝術派である。地震後派として要求するものは、人生派である。地震前の文壇にあつては、藝術派であるブルジョア文壇と、時代派であるプロレタリア文壇とが對抗し、居た。それが偶然の機會によつて、時代をいろづけ、時代を背景とする階級鬪爭が後方に置きわすられると共に、唯一人生派の叫びが忽ち高くなつた。かういふことも、時代と社會を考へることから云へば多少の興味がないでもない。けれども既成作家にあつては、ブルジョア文化の浸潤がもう可なりの

海部までに入り込んでゐる。わづかに一時性の自然の脅威や生活の不自由ぐらゐの外面の刺戟で、急に内面生活がどうにか置き代へられるなどといふ事は、少なくとも多くの期待は掛けない。藝術家の魂は　それほど本質的なものだからである。だからもし文壇が多少でも變化するならば、それは地震が在つたからと否とによるものではない。それは前派の世界が概して停滯し、腐敗して居たからである。そしてその革命は、たゞ新生命をみなぎらしたところの、新作家の擡頭による外はないのであるが、さてまた差あたりそうした希望の光りもまだ見えては居ない。

さて文壇はそれでよいとする。次に民衆の間に、　うした嚴肅な氣分が動いて居るかどうかになると、これは容易に判斷されない問題である。またⅡにあてはまるやうな氣分においても、それがたとへあるにしても、それは個人的なロマンスであつて、誰にでもさういふ事實はあてはめられるものではない。

ただⅠの項目になることこれは餘程考察さるべき精神を含んで居る。それは外でもない、この大災によつて大仕掛けに見せつけられたところの、社會奉仕、相互扶助の觀念の生長である。これは一見して、前に擧げたところの富の獲得の精神や手段に附屬さるべき、個人主義の旺盛なばつこと正反對なものである

この二つの精神はとても相並んで發達することの出來ぬほど、それほど相剋するものであるから、にわかに樂觀をゆるさないものではあるが、それにしても、大災の突出にあたつて、あれほどはつきりと民衆を感銘さした人類魂が、決して一時的であることの名目の下に、そのまゝに消滅して了ふものではない。それが必ずや何等かの形をとつて、將來の新生の社會を營む血管となるべきことは、大して疑ふ必要ないものであらう。それにしては市内警察が　自分の手で治安が保たれなくなると、急に自警團に依頼して、その公安を維持して貰ひながら、後になると自警團の悉くを擧げて職業匪賊殺人者の團體そのもののやうに[illegible]稱し、折角分來上つた隣保相助ける自治精神の芽生えさえも、無殘に剪伐して了つたのである。その横暴はまことに救ひ難い。民衆に自治的心理を養成することは、特權をもつて民衆を驅使しやうとする專政政治家の、いかなる場合にも苦痛とするものでなければならぬ。自警團解放の心情態も、またこの傳統的法係の發現でなければ幸ひである。日比谷のバラツクにさへ自治體がある。人心擾亂の際には義警團があつた。平和の際においての自治團的精神は、將來の社會においてまた復興の帝都において、また復興すべき帝都にあつて、どうしても缺き得ない唯一の精神組織だ。

廢墟の心

吉江喬松

かつて銀座街の瓦の屋根の上に草が伸びて、白い、小さな花が風に搖れてゐるのを見掛けたことがあつた。日本橋通りの屋根の上にもそれが時々見られた。自然の力は、人間が築く繁華な都市の中にも常に暗默の破壞を働いてゐた。大火の舌が、一面に殘すところもなくなめ盡くしたでもあらうと思はるゝ下野の廣小路の歩道に沿ふた燒け煉瓦の累積の陰に、いかにして殘つてゐたのか、僅な草の根が、青い細い莖をのばし、葉をふるはせてゐるのが不圖目についた。碎くも、生きるも、みな同じ自然の力である。この自然力に倚存してゐる人間の生命も、やがて、この自然の破壞の跡に、力強き伸展の姿を見せることであらう。

けれど、この不意に現はれた自然の大發動の前に、一度びは何人も、けなげな、純良な覺悟をした子供のやうであつたにも係らず、間もなく卷き起つた酷い、慘しい、濁つた、大きな人爲の動波のために、せつかく目醒めた眞純性は、いたくも曇らされ、汚され傷つけられてしまつた。丁度、大海の底深く湧きいづる眞淸水のやうな、せつかく固い地殼を破つて、放たれた勢で湧き出て來たものが、すぐに大きな、鹹い、渦紋の中へまき込まれてしまつた。

我々はそれよりの日毎、制壓と、排他と、無智とのうづまく人爲の動亂の中に、樣々な有り得べからざる現象の織り出されるのを見聞きせずにはゐられなくなつた。

自然が廢滅した都市には復興の計畫が立てられる。人間が荒らした心の廢墟は如何にして再生せしむべきであらうか。

我々はいつまでも壓倒、排他、征服を傳統とし、無智を常態とした生活をつゞけて行かねばならぬであらうか。自然

の大發動は我々の生活の深淵の底までも照し出し、その底に眠つてゐた人々の深い意識を目醒ましたと同時に、驚いて飛び起きた人々の荒々しい常習の醜さをも照らさずには置かなかつた。この醜さは一時の取り亂した姿ともいへやう。併しこの醜さには人爲の誘引と無智の淺見とが加はつてゐないと何人が斷言し得るであらうか。

我々は都市の壞滅の跡に立つて、この心の廢墟の慘しい物語を讀まずにはゐられない。バラックの東京は、やがて宏大な建築物に飾られ、震災火災の記念は當代の藝術家等の表現となつて殘され、狹い泥路は廣大な鋪石路と代り、廣場を設けさへすれば、そして其處へ樹々を植ゑさへすれば、自然の線は、のびやかな呼吸をして、人々に休息の場所と避難の場所とを提供するでもあらう。それは復興でもあり、再生でもある。併しそれと共に、同じ心の常態を持續して行くならば、事あるごとに同じ醜さと、無智と短見とを繰り返さねばならぬ。それが耐へ得らるゝ事であらうか。堅牢なる都市とはこの醜さを覆ふための外廓をいふのであらうか。

自然が破壞した人間の文明――建築も、文獻も、藝術品も、さらに一般の所有も、それ等を愛惜するのもおのづからな心情であらう。けれど、その自然の破壞に伴つて日本人が暴露した一面の醜さに一層の留意をすることを忘れてはならぬ。このなかにこそ生きた日本人の生活が籠められてゐるのである。我々は常は氣づかずにゐる大きな缺陷に面接せしめられたのである。文化が廣まつたとか、文明が進んだとか言つてゐる一方に、殆ど固質的に存在してゐた習癖、いつも直ぐに敵を作り、敵を見出し、排他と壓倒と征服とに熱し、殺伐に走る性癖を不意に示し出されたのである。この缺陷より目を放してはならぬ。――何故に人々は一方に示した互助互救の涙ぐましき眞純性を持ちながら、他方にこの醜き酷き殺伐性を暴露せずにはゐられなかつたのであらうか。この二つのいづれが果して我々日本人の本質であらうか。

少くも我々は從來、この二つの傾向のいづれを伸ばし、いづれを開くやうに教養せられて來たのであらうか。日本の文化なるものは一般的に二者のいづれを基礎として築づかれてあつたのであらうか。そこに深い反省が要せらるゝ。從

來の教育を、政治を、廣く文化を的確に解剖して見るがよい。或偏見に囚はれ、或修養に壓せられ、多數の人々を偏行せしめ、不知不識に一種の習癖をつくるやうに强ふることはなかつたであらうか。大自然はその發動の力をもつて、日本に於ける物質文明の薄弱さを指摘したと同じく、我々日本人の性情の一端を形造つてゐるこの習癖を餘すところなく暴露せずには置かなかつた。

前者を呼んで人々は自然の破壞といひ、その無殘な姿に驚く。けれど、後者の自然の暴露こそ眞に憐むべき慘ましい姿である。

羅馬の廢墟の跡に、眞白なセザアルの姿を呼び出した北方の不思議な幻影が、若しこの東方の空へ飛び來ることが出來たとするならば、いかなる無數の慘ましい人々の姿をこの破壞の中から立たしむることであらう。――我々は自然が破壞した都市の跡に立つて、寧ろ自然が暴露した人間の心の廢墟をこそ思ふのである。この心の廢墟にこそは、醜い黑い、きたなき、そして荒い、酷い、時の力に累集せられた習癖がうづ高く盛り上げられて、奇怪に歪められてゐるのである。

我々が本質に持つ眞純性をして、深淵の底に沈めしめて置くな。廢墟の下に埋めてはならぬ。傳習の力で覆ふてはならぬ。自然がなした有ゆる暴露。――弱點も美醜も共に示めされたる中から、眞に共存の意義ある生活の芽を生長せしむるやうなさなければ、常に同一の悲慘な經驗をのみ繰り返さずばるないであらう。自然の試錬をたゞ單に都市の建設に於てのみ受けたものと思ふてはならぬ。日本人の生活、内外全部の上に來たつた試錬である。

廢墟に燒け殘つた草の根をして眞に生きるものたらしむることは、たゞ單に、日覆ひを與へ、圍ひを設けることではない。その根をして十分に伸びることの出來るか黑き大地を用意して、その生氣が勢ひよく空中に發生するやうになすべきである。

罹災女禮讚

野口米次郎

私の知つてゐる外國人の中に一人の昆蟲學者がある。私とは違つた專門の世界に住む人であるから、私はその人の學識を批評することが出來ないが、性質の極めて坦懷な男であることを知つてゐる。この昆蟲學者は九月一日の十一時前から、横濱から一二里離れた海岸で、一人の年若い學生と一所に、猿股一つで貝殼を拾つて居つた。所へ例の地震で、續いて起つた大きな波のために海岸に脱いて置いた着物を攫はれて仕舞つた。自分は連の學生と共に無事ではあつたが猿股一つで横濱へ歸らねばならなかつた。また其時、この兩人は横濱がぺしやんこに全滅して居ることをどうして知ることが出來よう。平日であつたなら、胸毛もじや〳〵させた巨大漢が素裸で歩くのであるから、確にポンチに一好材料を提供したに相違ない。然し横濱への道筋に一杯出て居る人はいづれも一分間に倒れた家から命からがら逃出した人だ。もとより裸體の西洋人を批評するやうな心の冷淡な人間でない。自分の苦しい間でも、外國人に同情し外國人を尊敬する善良な日本人だ。素裸で歩く氣の毒な西洋人を見るに見かねて、一人の男が自分の着てゐたシャツを脱いで彼に與へたさうだ。彼、昆蟲學者は喜んで與へられたシャツを着てはみたが、體の小さい日本人のシャツであるから臍を隱すことが出來なかつた、沿道の避難者は彼に水を與へ、握飯を與へ、相互に命拾ひした幸運を祝つた。彼が私に語つた言葉を用ひると『日本へ來てから隨分な年月になるが、未だ曾てこの時のやうに、單純で麗しい生命で輝いた日本人の顏を見たことが無い。これまで日本人の感情は私に取つて無關係のものであつた。また理解することが出來ないもので

あつた。然るにこの時始めて私は日本人、男より女に、一種壯嚴ともいふことが出來る喜ばしい顔のあることを發見した。陽氣といふ言葉を用ひたなら誤解されるかも知らないが、極めて元氣な、いそいそと苦痛を平氣で背負つてのける勇敢な微笑の漂ひを發見した。私は白状するが、これまで日本の女はさう美麗だとは思はなかつた。然し苦痛の場合に顯はれる西洋の女の醜さを思ふと、どんなに日本の女がかういふ非常時に麗しく見へるかに駭かざるを得ない。實際、私を迎へて吳れた沿道の女はチアフルス・マイル（陽氣の微笑）を以つてゐた。この時私はかういふ女の國に住むといふことを喜び、出來るなら一生を日本國のために捧げたいとも決心した——君笑つてはいけない、かういふ決心をした外國人に限つて、日本を間もなく去つて日本を罵倒し始める奴だと、君は例の皮肉をいふかも知れない。然し私は日本の女の美を始めて發見した——どうか私をしてこの新發見の甘い酒にしばらくの間醉はさしてもらいたい。』この昆蟲學者の言葉は眞實な告白であつた。私はこの言葉をどんなに喜んだでせう。澤山の外國人は神戸や長崎へ逃げたり、甚しいのになると上海までも逃げて自分の安全を謀つたのにも係らず、私の友人である昆蟲學者は東京に居止まり、帝國ホテルの地下室で汗みどろになつて、米國の救護班と共に力一杯骨を折つた。この事はいつぞやの新聞に彼の寫眞入りで出て居つた。

私は今再び所謂日本人の笑（ジャパニース・スマイル）といふことを考へる。この日本人の笑位西洋の文學者に興味を唆る問題はあるまい。小泉八雲も餘程以前に其を取扱つた文を書いて居る。日本人は男でも女でも、西洋人に對し不可解な謎の笑を以つてゐてこの秘密を到底知ることが出來ないとして居る。私の友人昆蟲學者もこの人生最も悲慘な場合に『喜ばしい笑』を發見したのであるが我々日本人自身の眼で見たならば『喜ばしい笑』と受取れないものであつたかも知れない。男でもさうであるが、日本の女の顔は、概していふとお能の面だ——消極的で、決して無表情ではないが表情を噛殺してゐる顔だ、泣く

と笑ふとの中間に起つてゐる顔だ。見ように依つては怒つてゐるとも見へるし又同情してゐるとも思はれる顔だ。一言でいふと原始的な顔だ。苦痛を樂に堪へ、喜樂を感激的に出さない所が原始的基調を捨てない文明人の長所だともいふことが出來る。若しこの大惨事に當つて、私の友人が發見したやうに『喜ばしい笑』を顯はしてゐるとすると、それは日本の女が原始人でしかも文明人であり、文明人であつて原始的素質を捨てないからであらう。確に日本の女は苦痛に堪へる、又感激的に喜樂を表現しない、否な表現する力を持たない。詰りそこが日本の女の强みでなくて何であらう。日本の女がその個性が西洋人のやうに外面的に明瞭となつて來て、悲哀と笑とを全く違つた感情として取扱ふやうになり言ひ替へると、平日は高い靴の踵を上げて舞踊し廻り、かういふ非常時に當つてはぎや〳〵泣き叫ぶやうになつたとしたら、私は日本國民の將來を悲しむものであるともいゝたい。小泉八雲は日本の偉大な點は日本の女にあると書いてゐるが、私もさうだと思はざるを得ない。言葉の上では消極積極と分れてはゐるが、實際では消極の方が所謂消極以上に力强い場合が澤山ある。日本の女の性質でも、一寸見ると消極的な弱いものゝやうに見へるが、いよ〳〵となると積極的に見へる西洋の女より遙に强力な効果を顯すものであることが知れる。

私は今回の慘事で日本の女の力に對し敬意を拂ふものである。私はまつたく日本の眞價を知つた、日本の女を見直した。

淺草厩橋附近に住む私の家の知人は見事に燒けだされ、文字通り裸一貫で上野の山へ避難した。その人は錺職の工場の主人で、七八人の小僧に仕事をさせ自分は溫泉廻りの道樂で日を暮した。その人の妻君も柔かい着物を着て暮した人だから、さぞかういふ酷い目に遇つて氣絶でもして居るだらうと思つて、五日の朝私は家内を連れて彼等を上野公園に

訪問した。彼等は咄嗟のことで名案も無いので一先づ身を美術院の展覧會場に寄せて居たが　行つて見ると私共は妻君の方が非常に元氣であるのに驚いた。前記の昆蟲學者が發見した『喜ばしい笑』こそ顔に持つてゐなかつたけれども、私共の豫期した悲嘆の涙を發見しなかつた。實際彼女の顔は勇氣で滿ち壯麗に輝く生命でいき〳〵して居つた。彼女は亭主以上に苦痛に堪へる實證をなげて居つた。この婦人ばかりでなく、私が戰場のやうに騒々しく推合ひ壓合ふ人込の中を車の後押をして行く女、小さい赤ん坊に乳房をふくませ乍ら足袋跣足で走る女、手拭頬かぶりで手に汚い藥罐をさげ乍ら行く娘達を見ても、如何にいざといふ場合に日本の女が元氣を出すかを知ることが出來る。この物凄い光景を見ると、少くも私は日本の女といふ全體に對して敬意を拂はざるを得なかつた。常日頃見て居る金紗の着物にお白粉附けた女より、どの位かういふ女の方が美麗に見へたか知れやしない。女性の美が眞珠の玉のやうに内面から光つて居つた。鎔分けてない黄金のやうに木地のまゝに輝いて居つた。私の友人はかういふ有様を『喜ばしい笑』と見て取つたのであらうが、古今未曾有の大慘事に遭遇して笑つてゐる女もあるまい。若し笑つて居らうと見へたとしたならば、それは苦痛を通りこしたにこ〳〵顔で、確に普通の『喜ばしい笑』の顔でない。その笑顔には毅然たる決心と前途を見屆ける希望とが潜んでゐるであらう。かういふ意味に於て、私は私の友人が發見したといふ『喜ばしい笑』を是認するものだ。

私共の知人の中で燒出されたものが澤山あつて、これもその一人だが、私共が中澁谷の避難所へ見舞つた時、私は私の家内が燒出された妻君と話合つた物語を側から聞いた。今囘の遭難談位身を嚙むやうな眞實で滿ちた話は無い。私は震災以來毎日〳〵聞いて來たけれども、私はそれに飽きない、私はいくらでも聞いてゐたく思ふ。私共の訪問した妻君は私の家内にかう語つた。

『後から考へると、あれを出せばよかつた又樂々と出されたものをと思ふのですけれど、火事といふ心配はまるで無か

つたのですよ。目の前に火を見ても、私の家は燒けはすまい燒ける筈が無いと思つたのですよ。私共銀座通りに住む人々は皆なさう思つたに相違ありません、さうして全財產をみす〳〵燒いて着のみ着のまゝで逃げたのですよ。考へると惜しいことをしましたが、一列一體の災難ですから諦らめ付きます。私共は店の重要書類だけ持ちだして、前の山崎といふ洋服屋へ附いた火を見て逃げたのですが、御覽のやうに着のみ着のまゝです。それでもこれで着替へたのですよ——どうせ丸燒になる位なら、もつと立派な着物で逃げなかつたかと思ふのですが、お恥づかしい話ですが、その瞬間にいゝ着物を着る心持になれなかつたのです——よ立派な着物をよごしてはと思つたのでせうが、女といふものは馬鹿げた人間ですわね。」

私は側で聞き乍ら極めて興味のある話と思つた。如何にも女の話らしい話だと頷いた。さうしてこの妻君が、『この詰らない銘仙がどんなに有難く思はれるか知れません』と附加へた時、私は心の中で、『あなたは貴い經驗を得ました』といつた。この婦人の如きは簞笥の五ツにも六ツにも餘る位着物は持つてゐたことであらうが、今着て居る一枚の銘仙のお蔭で着物に對する全きアプレシエーションを理解することが出來たのだ。この眞實のアプレシエーションが無いと、百枚の着物を持つて居ても無いと同樣だ。又このアプレシエーションがあれば、一枚の着物も百枚の着物に比敵するとも思つた。

今囘の震災は百萬以上の人に、物質上にも精神上にも新しい眞實な見方を敎へて、はれ〴〵と元氣な態度で新生命を開拓させたに相違ない。私共はこの年若い麗しい妻君の前途を祝して彼女の家を辭した。

私共郊外に住むものは東京市內の人々のやうに悲慘な經驗をせずに濟んだ。それでも震災の日から四五日の間といふ

ものは、夜は電燈が來ないので眞暗闇、その上人を脅す流言蜚語が横行したので女や子供はびく〳〵ものであつたであらう。それでも私の家内や下女はよく働いて呉れた。瓦斯が來ないので、庭に臨時の竈を拵へ、諸々方々で蠟燭を買ひあつめ、夜中男と一緒に不寢番さへして呉れた。又彼等は工風をこらして、木の下に蚊帳を釣つたり張物板や仕立物の板を持出してベッドを作つた。お米の心配を私以上にした上、「私の家内には手足纏ひの子供があつた。私の家内は必ずしも私を非難する積りでないだらうが、よく人にかう語つた、内の人はてんで子供のことなど考へやしません、地震ががた〳〵と來たやいなや自分丈けで庭へ飛出して仕舞ふのですもの、私は二人の小さい子供を抱いてどんなにびつくりしたか知れやしません——男は全く無責任ですわね。』私はこの言葉を聞く毎に冷汗をかいた。私は白狀するが、地震がゆすぶつた咄嗟の瞬間に私には子供といふ考は起らなかつた、さうして見ると、私の家内のいふやうに私は無責任であつた。然し恐らく私同樣に無責任の亭主はどの位有つたか知れないと思ふと、男といふものは先天的にエゴイストだといふ感が深い。

私の家内の妹の亭主なども私と同じ階級の男だ。淺草の本願寺附近に住んでゐたから立派に燒出されたが、女房や子供のもの何一つ持出さなかつたに係らず、自分のものは大概出したさうだ。氣の毒なのは私の義妹で、逃げる途中亭主と離ればなれになり、乳呑兒を年取つた夫の母親に背負はせ、自分は七ツ八ツの子供の手を引き乍ら三歳の子供を肩に載せて上野公園へ避難した。本所深川淺草の死人を見て來た人の話に、女で死んでゐるものは乳呑兒や子供を連れて居るのが多かつたさうだ。成程、さうありさうなことだ。考へれば考へるほど私は女性の尊さに身振をする。私の義妹は私の家内に、私の家へ避難した以來ひつくり返し同じ物語をして聞かせた。

『火の子が雨のやうに降つて來るのですもの、私は洗面器を冠つて逃げたのですよ。子供にも頬冠させて、火の子が附

く度にそれを拂つた。さうしても赤ん坊に無くてならないと思つて、ねんねこをお婆さんに持たせた所が、途中で捨て仕舞つたのですよ。上野の山へ來ると、人一杯で身動きも出來ない上に、火の子は降つて來る。喉が渇いて仕樣がないからサイダー一本買はうとすると、一本が五十錢で釣錢一文も出さないといふのでせう、買ひたくはなつても一圓遣る譯にはゆかず、到頭飲まず食はずで、子供と一緒に二日二晩山でうろついたのですよ。その上恐ろしいものを見ましたよ――だれがいふと無く××に注意せよとの言葉が傳つて、今にも遣つ來て公園を燒拂ふかしらんと思つてびく〳〵してゐました。すると一人の男が煙草を吸ふやうな樣子をしてマッチを擦り燃えてゐるまゝ積んである荷物の側へ捨てた。そら××だ山を燒こうとするのだと叫んで、澤山の人が總立ちになりその男を打つ敲く、××××××××××××××××××××××、×××××××××××××。恐ろしい凄い顏をして私の方を眺めた男の有樣を考へると身の毛も彌立つやうに思ひます。實際その男は鮮人だつたかそれとも日本人だつたか分らないが、その時の上野の山は戰爭でもこれ程ではあるまいと思はれる位でした。」

かういふ經驗をした女は私の義妹一人であるまい。その他幾萬と數へることが出來ようと思ふ。私は確にかう云へると思ふのは、かういふ悲慘な經驗をぢつと踏みこたへた女は、恐らくその亭主なる男の價値を十倍も二十倍もするであらう。いよ〳〵といふ場合になると、女は男以上の度胸と忍耐を出すものだ。この事は今囘の震災で明瞭に證據立てられた。

私は七日目か八日目の午後、二三百年も時代が逆戻りしたやうな氣分で百姓の大八車に乘つて、上野の方面から日本橋へと御成街道を通つた。兩側の燒跡を眺めると、頰冠して裾を端折つた女連が男の間に交つて燒跡の片附けをして居

つた。若しこの悲慘な燒跡に多少たりとも元氣附けるものがあるとすると、それは其等の女で無くて何であらう。私は罹災女に『喜ばしい笑』を發見した私の友人昆蟲學者に感謝する。日本の女は西洋人から隨分褒められて來たものだ。私も西洋人となつて、かういふ非常時に眞價を實證した日本の女を禮讃したい。『日の本は女ならでは夜が明けぬ』などゝ落語家の輕い口から聞いたことがあるが、今囘といふ今囘は私は日本の女に對して最大の敬意を拂ひたい。



爆音の彼方

白鳥省吾

ド、ド、ドン、ド、ド、ド、
秋晴の空にこだまして
ピリ、ピリと玻璃窓を慄はせる爆破作業の音。
おゝ人間の力を信じて虚無の上に微笑むもの
滿目の焦土の中に大建築の殘骸を碎いて
もこの原野に第一步よりの新しき文明の樓閣を夢みるもの、
その雄々しい皷動は遠くより
私の窓にまで明らかに傳はつてくる。

吾が子よ

あの音を怖れることはない。

『省ちやん
あれは地震ぢやないよ
兵隊ちやんの大砲よ』
とおびえてる可愛いらしい黒眼に私は微笑みながら言ひきかせる。
過ぎし日に赤く大火を映した空は夢のやうに美しく晴れて
小春日和の庭のほのかな木犀の匂ひ。

『東京よ！』と、
私はこの書齋から
丘に立つ者のごとく呼びかける。
見渡す限りの赤茶けた夢の破片よ
辛うじて殘るは燒け落ちた土藏
錆びた金庫、血のやうな殘壁、
大路小路はけぢめもなく荒れ果て

焦けた灰は風に舞ひ、天日は霞み
嘗て此處に生活した百餘萬の人々は
よごれた獸のやうに行き迷つてゐた。
あゝ嘗てその都市に倦怠と疲勞と反抗とを感じたこともあつたが
私の青春時代を哺ぐんだ思ひ出ふかい東京よ。
その東京は永久に無くなつた。

ド、ド、ドン、ド、ド、ド

秋晴の空にこだまして
ピリ、ピリと玻璃窓を慄はせる爆破作業の音。
ところどころ廢墟のごとく立てる殘骸を
もとの大地に立ち歸らせるために
碎けよ、碎けよ
壘々たる煉瓦と鐵筋も
破壞の電光に鞭たれて斬然と微塵に崩落する。

その音響の快感
自然の暴虐を冷笑する人間の凱歌！

私はまた焦土の中を行き迷ふ都の人々の群にまじつて歩いた日を思ひ出す。
その午後の空に黒雲が湧き風はざわめき
遠雷がこどろしく鳴り近づいて來た。
茫々たる燒野に殘る石灰色の高い高い煙突、
過ぎし日の災厄を語る十一時五十八分で止つてゐる時計臺、
近づく雷鳴と襲ひくる驟雨の空模様とに
驅け込む家もなく
落雷は私のほこりの煙突や時計臺を今にも粉碎しさうであつた、
それは餘りに荒寥たる恐怖であつたが、
自然は却つて人間のために仕事を殘して雷鳴は次第に遠ざかつた。

ド、ド、ドン、ド、ド、ド

秋晴の空にこだまして
ピリ、ピリと玻璃窓を慄はせる爆破作業の音。
吾が子よ
私はまたあれを聞くと
遠い少年時代の大演習の見物を思ひ出す。
軍隊のあとを三里ほども追ひかけて
田舍の賑やかな群衆にまじり
日に匂ふ秋草の中をかけめぐり
終日ものを食ふことをも忘れて狂喜したあの殷々たる大砲の音。
勇ましい遠野のきのがけの劒戟の光、雲に響く喇叭。
何と壯大な盛んな人生の遊戯として謳歌したであらう。

「省ちやん
あれは地震ぢやないよ
兵隊ちやんの大砲よ。」

こ私は幻想をもつて言ふ。
吾が子よ
あれは新しく生れくる時代の響だ
私のためであり
ここに汝のためである。
爽やかな大地は黒く
小春日和の庭のほのかな木屑の匂ひ。

妄問妄答

芥川龍之介

客　菊池寛氏の說によると、我我は今度の大地震のやうに命も危いと云ふ場合にも藝術も何もあつたものぢやない。まづ命あつての物種と尻端折りをするのに忙しいさうだ。しかし實際さう云ふものだらうか？

主人　そりや實際さう云ふものだよ。

客　藝術上の玄人もかね？　たとへば小說家とか、畫家とか云ふ、——

主人　玄人はまあ素人より藝術のことを考へさうだね。しかしそれも考へて見れば、實は五十步百步なんだらう。現在頭に火がついてゐるのに、この火焰をどう描寫しようなどと考へる豪傑はゐまいからね。

客　しかし昔の侍などは横腹を槍に貫かれながら、辭世の歌を讀んでゐるからね。

主人　あれは唯名譽の爲だね。意識した藝術的衝動などとは別のものだね。

客　ぢや我我の藝術的衝動はああ云ふ大變に出合つたが最後、全部なくなつてしまふと云ふのかね？

主人　そりや全部はなくならないね。現に遭難民の話を聞いて見給へ。思ひの外藝術的なものも澤山あるから。——元來藝術的に表現される爲にはまづ一應藝術的に印象されてゐなければならない筈だらう。するとさう云ふ連中は知らず識らず藝術的に心を働かせて來た譯だね。

客　（反語的に）しかしさう云ふ連中も頭に火でもついた日にや、やつぱり藝術的衝動を失ふことになるんだらうね？

主人　さあ、さうとも限らないね。無意識的藝術的衝動だけは案外生死の瀨戸際にも最期の飛躍をするものだからね辭世の歌で思ひ出したが、昔の侍の打ち死などは大抵戲曲的或は俳優的衝動の——つまり俗に云ふ芝居氣の表はれたものとも見られさうぢやないか？

客　ぢや藝術的衝動はどう云ふ時にもあり得ると云ふんだね？

主人　無意識の藝術的衝動はね、しかし意識した藝術的衝動はどうもあり得るとは思はれないね。現在頭に火がついてゐるのに、…………

客　それはもう前にも聞かされたよ。ぢや君も菊池寛氏に全然贊成してゐるのかね？

主人　あり得ないと云ふことだけはね。しかし菊地氏はあり得ないのを寂しいと云つてゐるのだらう？　僕は寂しいとも思はないね、當り前だとしか思はないね。

客　なぜ？

主人　なぜも何もありやしないさ。命あつての物種と云ふ時にや、何も彼も忘れてゐるんだからね、藝術も勿論忘れる筈ぢやないか？　僕などは大地震どころぢやないね。小便のつまつた時にさへレムブラントもゲエテも忘れてしまふがね。格別その爲に藝術を輕んじる氣などは起らないね。

客　ぢや藝術は人生にさ程痛切なものぢやないと云ふのかね？

主人　莫迦を云ひ給へ。藝術的衝動は無意識の裡にも我我を動かしてゐると云つたぢやないか？　さうすりや藝術は人生の底へ一面に深い根を張つてゐるんだ。——と云ふよりも寧ろ人生は藝術の芽に滿ちた苗床なんだ。

客　すると「玉は碎けず」かね？

主人　玉は――さうさね。玉は或は碎けるかも知れない。しかし石は碎けないね。藝術家は或は亡びるかも知れないしかしいつか知らず知らず藝術的衝動に支配される熊さんや八さんは亡びないね。

客　ぢや君は問題になつた里見氏の說にも菊池氏の說にも部分的には反對だと云ふのかね？

主人　部分的には賛成だと云ふことにしたいね。何しろ兩雄の挾み打ちを受けるのはいくら僕でも難澁だからね。ああ、それからまだ菊池氏の說には信用の出來ぬ部分もあるね。

客　信用の出來ぬ部分がある？

主人　菊池氏は今度大向うからやんやと喝采される爲には嘘が必要だと云ふことを痛感したと云つてゐるだらう。あれは餘り信用出來ないね。恐らくはちよつと感じた位だね。まあ、もう少し見てゐ給へ。今に又何かほんたうのことをムキになつて云ひ出すから。

甘粕事件批判

三種の虐殺事件

三宅雪嶺

明治維新後要路の人を殺したのが色々あるうち、誰れが殺したかゞ分らぬものは廣澤參議である。古莊嘉門が嫌疑で入獄したが遂に放免された。

古莊か、後に第一高等中學校長となり、人が當年の事件を尋ねるに答へて云ふ『あの事件は如何しても判るものぢやない』。自ら事件を知つて居るやうで誰にも話さないのだと察せられた。必ず他にも事件を知るものがあつたらう。世間で色々推察し誰が殺した彼が殺したと云ひ、顯官の名も出でゝ居つたがそのまゝ分らず仕舞ひになつた。

もし一部で疑つた如く、或る顯官の使嗾で殺害したものとすれば、由々しき事件と云はねばならぬ。理由を明にせず暗打ちにして葬らうとするのであつて、自ら國權を犯すの甚しいものに屬する。それは加害者の分らぬのがなく、大抵自首するか捕縛せられるか何れかになつて居り又たさうあらねばならぬ。

普通の强盜殺人は捕へられぬのもあるけれど私慾を離れた殺害事件は殆んど悉く裁判にかゝつて居る。森文相を殺した西野は其場に切り殺されたが、捕へられゝば法廷で理由を述べる覺悟であつたらう。自身に利益なく、それで人を殺すのは、多少公憤によりするのであつて、寧ろ法廷に出づるを誇りとするが、歷史上に虐殺事件と云ふは、私慾を離れつゝどさくさ紛れに人を殺し自らそ知らぬ顔をし若干關係者に賞められるのが多い。明治大正年間に斯る事のあるべくも思はれぬのに、帝都附近に未

會有の大災害があると共に、最初の虐殺事件を見るに至つた。一は鮮人關係、二は主義者關係 三は主義者中の特別關係である。

事件に先んじて全く、兆候なかつたでなく、警察署に往來するものは、往々公然に語つたりした。主として主義者の陰謀であり、或は露國共產黨と結託しての事とし或は猶太人の世界攪亂に關することして、事詳に運動の方法を述べ立てるのもあつた。學校騷動ある每に、必ず主義者の關係あるとし所々會合に某々がもぐり込んで煽動て上げたと說く。先には某大學、今は某大學、追つて某大學に移つて行く手筈と稱する。主義者の陰謀が次第に手廣く行はれる恐れあると同時に、一網打盡の噂さが出て、時として大頭、小頭が檢束され此度こそ大陰謀が暴露し大疑獄が起るかと見れば、間もなく大山鳴動し鼠一匹出ずと云ふ始末になる。その筋でも左樣云ふのがある。如何いふ事件かと訊けば、調べが濟まねば分らぬ、大山鳴動し鼠一匹かも知れぬと答へたりする。此度こそと云ひつゝ左樣なるのがしば〳〵であつて何程の事實あるか、人は之を確かめるに惑ふた。主義者として起つて居る以上、何かしさうであり、誰が何をするかと考へれば太したこともなささうであり、さりとて何もせずに居ると思ふわけにも行かぬ。或筋の人が主義者の連絡はかく〳〵であつて役割が定まつて居るとて、其表を示せば全く打消すことが出來ぬ。如何はしく思ふものゝ或は左樣いふことをしたとも疑はれる。語る人々相應に眞面目であり、何んとかせねばならぬ、早く一網打盡せねばならぬといふを憚らぬ。主義者側では警察の宣傳と做し、警察も困つたものと云ふが、それで靜かにして居るのも忌々しく、何か反抗してみたくなり殊更に爭ふのもある。主義者が或る機會に大陰謀を行ふと云ふのと、警察で主義者を一網打盡しようと云ふのと、相應に廣く人の耳に這入つて居つた。事實になりさうで事實にならず、全く跡形ないと思はれず半信半疑の狀態ですぎた。

所が、大震災に次いで大火災起り、鮮人が隊を組んで來るとか主義者が火を點けて步くとか、噂とり〴〵である。奇妙なことに、前には主義者の話しが出て居つて鮮人と云ふことを云はぬのに、俄かに鮮人幾百人來るとか、幾千人來るとか、瞬く間に報道せられ、震災火災に罹らずして逃げ出し遠くへ移つたのがある。騷ぎの起りと共に諸方で自警團を組織し、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、。
、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、。
、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、。如何にして鮮人を憎む聲が速にひろがつたか、今でも世間で不思議がり、原因が明になつてをらぬ。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、たま／＼震火災に乘じて運動したと云ふのは、幾分か事實ありとしてそれを確かめ得たかどうか。世間で、前に主義者のことを知り鮮人のことを知らず、震火災と共に何んでも鮮人に歸し主義者これに附屬するやうになつたのは、何所かで鮮人に目星を附けたによるでないか、或は豫て前内相水野氏、前警視總監赤池氏が朝鮮に在任してをつた結果、此邊に注意し警戒怠らなかつたためとも云ふが、これらのことは何時如何に明白にせられるであらうか。鮮人隊を組んで押寄せ日軍敗北との電報を地方新聞に掲げたのがあり、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。自警團が全く各自の發意で出來上つたか、他から奬勵したのが多く與つてをるとすれば、それは何の邊か、在郷軍人會か、警察と關係はないか。警察の手薄になつた所で自警團の必要を感ずるのが尤もであるとし、專ら警察の代りに盜賊火災等を取締るに止まるにあつたか、眞に鮮人の襲來を恐れこれを防ぐこ企てたか、、。

いくら殺されたものがあるか、種類分けをしたならばどうなるか、普通に鮮人及び主義者を葬るとするが、丸で關係ないものも少くなかつたらしい。一網打盡の網が擴がりすぎたといふもあるけれど、果してさうかどうか、鮮人及び主義者が非常の時に非常の事をしたか、其反對のことで非常な事をしたか、何んにしても何所で、非常な時に非常な事をしようとし、非常な事を齎らしたに相違ないことをしたか。

始め主義者が疑はれ鮮人が特別に疑はれず、後に鮮人が疑はれ主義者がこれに附屬する形になつたのは、聊か奇とすべきであるが、既に警察の力が足らず軍隊の力を藉らねばならぬとし、戒嚴令が行はれてから、多少方針が變つて來た。軍隊では鮮人に對して疑を容れず、鮮人が何千人隊を組んで來たる等斷じてあるべきでないと明言し、其に鮮人に對し警戒したものを騒か

した。軍隊側では、さう思ふのが當然であつて、何の事情があるこて鮮人が隊を組んで押寄せ得べきでない。軍隊の配置が取れて居り、何千の鮮人が押寄せたこて、これを打掃ふに何の苦もない。一度び軍隊が現はれゝば、立所に鎭壓してしまうべきであつて如何に氣狂ひじみたものこて神奈川から東京まで押寄せる等夢にも考へられぬのである。それを如何して世間の噂にしたか、軍隊側で鮮人に對する恐慌を一掃したのは時にこつてのよい處置こせねばならぬ。警察こ違つて力に餘裕があつたからでもあらうが、鮮人を虐めようこするものを遮ぎり鮮人も我等こ同じく　陛下の赤子で、猥りに之を殺す者は、嚴に處分するこて劍附銃の並んでをる中で云ひ渡したが爲めに、彼方此方で靜まるやうになつた。、、。當時軍隊は、主義者に對した。警察側では前に主義者に對し警戒したものゝ、いよ〱事が起つてから鮮人關係の取締に急がしく、軍隊より見て主義者の取締は緩慢に過ぎる嫌がある幾人を檢束したにせよ、無政府主義の巨頭こ見る者は檢束されず、軍隊が撤退した後何をするか計られぬこの心配がある。軍隊の何の部分で、最も其邊の心配したか確かめ難いこと乍ら、甘粕大尉が大杉夫妻及び甥の少年を殺したことは端なくも問題を惹起した。

甘粕が大杉に私怨あるこの說もあれご、矢張り國家に有害こして殺したのであらう。ごうして警察で棄てゝおくか、早く殺して火中に投じて仕舞へばよいのに、棄てゝおくこは緩慢に過ぎる。われは非常手段を以つて彼を葬つてやらうこしたのであらう。

軍隊で甘粕よりもよりよく大杉を知つたものは、何程あるか。警察では鮮人の取締に就いて狼狽し自警團がこんでもないことを仕出來したりしたが、主義者に就いては、豫て種々の關係あるだけ主義其者を解し得なくても人物を解するここ割合に詳しい毒を以つて毒を制するの術をも心得てをる。何故に大杉を檢束しなかつたか種々の事情あるこし、檢束しなくてもよいこ認めた所があらう。憲兵の方では、鮮人の事こそ恐るゝに足らぬを知るも、主義者を恐るゝこご警察より甚だしく、大杉が餘程の者に見えたらう。中には見縊つたものもあつても、甘粕は模範將校こか關係者も模範兵こか模範視せらるゝ者、兎角職務に一本調子で馬車馬的で左右の分らぬのがある。上官に聞いたか聞かぬか、何んにしても大杉の如きは殺して仕舞ふがよく、道伴れがあればあれで殺してよい、非常な時に非常な事をすべしこしたらう。

普通の人ならば國賊として殺す場合、自首するか自殺するか身を隠すかするのであるが、甘粕は被害者を分らぬやうにし、己れ自ら外知らぬ顔をしてをらうとした。震災火災で多くの人が死んだり殺したりし自警團が燒き殺したのも少くなく、大杉もさうしてしまへば世話がないとしたのであるが、其所で虐殺が成立つた。

大杉を有害と認めたならば何故にそれ相當の手續を踏んで裁判に持出さなかつたか、日本臣民は法律に依らずして逮捕監禁訊問せらるゝことなしと憲法に記載してあるのに、法律に依らずして職權を以つて殺害するなど驚ろくべき行爲とせねばならぬ。何も知らぬ子供まで絞殺すに至つては何んとも云ひやうがない。それで己れ自ら外知らぬ顔をしてをらうとは何事か、そこは警察と同じくどさくさ紛れに分らぬやうにしてしまへばよし、非常な場合に止むを得ぬ所としたのであらう。

震災火災で人が度を失ひ、幾ら死人があつても怪しむ所ないやうになつたので、それならばといふ了見がある人々の心に浮んだのである。

平生ならば憎くても忌々しくても、思慮分別し法律によらず手を下さうとしないけれど、目の邊り死屍の山を築くやうでは序でのことに叩込めといふやうになる。

甘粕の場合は、十數日も過ぎてのことであつて、最早どさくさ紛れといふほどのことでなく、それにも拘はらず、不法監をして殺したので、軍隊に泥を塗るやうになつた、警察の緩慢を疑ふよりも自ら警察署に行き、何故に檢束せぬかを尋ねたならば、幾らか事情を知り、殺さなくてもよいことを知つたでないか。警察で明白に云はず、謎で語つて諒解せず依然緩慢だとしたかも知れねど、一應尋ねるのが順序であつた。大杉を檢束せずにおく方が△になるやうなこころもあつたらう。

虐殺の甚だしいのは月の始め、所謂どさくさ紛れの眞最中に行はれたのであつて、既に時日の明かになつたのが幾つもある併し明かにならぬのが、尙ほ相應に多いと云はれてゐる。中には永遠に知られぬのもあらう。何の方面で最も虐殺が多く行はれたか、どさくさ紛れといふのは實に物騷千萬な時期及び場所である。

折角軍隊が鮮人の虐待を差止め他の虐殺をも制し、よく秩序を維持し、世間に有難がれたのに、憲兵の手で時候遲れに三人も絞殺したが爲めに、如何なる虐殺よりも大問題となつた。數の上で云へば、一男一女一童は何程の者でもなし、屈強な男を幾人も常に火に入れたり、水に投げたりするのと比べものにならず、それで最も恐るべきものゝやうにせられるのは、割に合はぬ

やうながら命乞ひをするものゝ多く出たのも是程のものはない。署名せぬものは國賊であるこ叫んで歩くのがあつた。子供を殺したのを聞いて何こ思ふたらうか、世間では樣々の人あるここを示してをる。

大體に於て虐殺が三通りに行はれ、憲察こ軍隊こ方面を異にしてをる。、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

震災火災中人々逃げ惑ひながら强いもの弱いもの扶けたこころ、誠に感心すべきであつたが、虐殺事件で其感心を取消すの餘儀ないここになつた。そこでその虐殺が如何にして始まつたかこ云ふに、秩序安寧を維持すべき職務ある者に疑あらうこは、何こも遺憾の次第こ云はねばならぬ。それでもこれが問題こなり、軍法會議を公開せられたのは、人の疑ひを解くに與るばかりでなく、日本文化の相應に發達しつゝあるを示す所なりこする、虐殺事件が起るなどゝは確に國の恥辱こすべくも、成る可く事實を有のまゝに知らすやうにするのは何よりである。もし現に疑のかゝつてゐる所を明にしたならば、いよ／＼よい。其所まで明にし得るかごうか。

甘粕の行爲も惡いが他により多く惡いのはないか。その何の程度まで明白せらるゝかで、文化の如何な擴張するここができる。

甘粕事件の論點

吉野作造

甘粕大尉の減刑運動及び之に應じた調印を犯罪行爲だと僕が云つたと或る新聞に出たとて、いろ〳〵の人から詰問を受けて閉口してゐる。此の機會を利用してこの點を簡單に辯明さして貰ひたい。

第一に減刑歎願書の調印は勿論罪とはならない。減刑運動そのものも單純なものは法の禁ずる所ではない。之等が一概に不法の所爲であるかの如くに傳へたのは全く誤りだ。が、減刑運動も若し公衆を會して甘粕大尉を稱揚する形で行なはるゝなら、そは明白に治安警察法に觸れる。その第九條第二項には、「集會ニ於テハ……犯罪人若ハ刑事被告人ヲ賞恤若ハ救護シ…………コトヲ得ズ」とあり、續いて第二十四條には「第九條ニ違背シ……タルモノハ三月以下ノ輕禁錮又ハ十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス」とあるからである。

して見れば甘粕大尉は尊敬すべき國士だ、此の人の爲めに減刑を願ふ書面に調印しないのが間違だなどといつて、公園あたりで通行人を要撃するが如きは、明白に治安警察法の適用を受くべき行爲である。之を爲すものゝ誠意の有無は固より、甘粕大尉が果して尊敬すべき國士なりや否やも問ふ所ではない。然し僕が斯く說明するは斯して減刑運動者の處罰を官憲に促すの意とするものあらば、是れ亦僕の眞意ではない。

元來治安警察法は全體として隨分批難の多い法律だ。前記第九條の如きも我々の仲間の定論としては、之れを不必要とするに一致して居るから、假令一部の減刑運動が法規に觸れるとしても、あまり矢釜しく云はないことを希望するのである。從つて當局が之等の減刑運動を看過したと云ふことに對して、吾々は毫もその怠慢を責めんとする考はない。それにも拘らず、此の點に關する當局の態度を吾々が全然不問に附することの出來ないのは、之に關聯して私かに當局の誠意を疑はねばならぬものがあるからである。

元來治安警察法第九條の規定の如きは、之が常に誠實に行なはるゝものとすれば、有つても妨げのない規定である。有るは無きに優るとも云へぬこともない。然るに之れが識者の間に廢止を叫ばれる所以のものは、そが動もすれば濫用さるる虞れがあり、又現にしば〱濫用されても居たからである。即ち當局者の好惡に依つて適用を二三にさるゝのである。現に此の規定で勞働運動者は頗る嚴重にやられた。判決文などを見ると如何なる種類の運動にしろ此の法規に觸るゝものは一歩も假借しないといふ樣な風が見えてゐる。而して此度の事件に對しては丸で相關知せざるものの如くである。この點その他いろ〱の事情とを綜合して我々は法の適用に偏頗なきやを當局に警告せんとするのである。之れ勞働運動などの將來の發達を念とするからで、差し當りの減刑運動等に特殊の罰を與へんと望む考ではない。

減刑運動を不問に附したといふ事を責むるのは、法の適用を二三にするといふ當局の不誠意を推定するからであつて、不問に附したといふ事それ自身を咎むる意でないとは、前述の通りである。然し乍ら僕の此の態度から輕卒な推論を下して、減刑運動の趣意を承認するものなるかの如くに見る者あらば、そは亦僕の甚だ迷惑とする所である。今迄の處僕は、減刑運動の趣意には不幸にして未だ一點の承認すべき理由を見出さない。他の言葉を以つて言へば、甘粕大尉の人物なり行動なりの上に減刑を乞ふに價する多くの事情を發見しないのである。それが若し上官の命令であつたのだといふのなら別だ。大尉が自己一人の責任でやつたとする以上、彼は何處までも平凡な一殺人犯人に過ぎない。然も狀情の可成り重い犯人と云はなければならない。

翻つて復當局の態度を問題にする。減刑運動を不問に附したといふことが、僕の推定の如く法の適用を二三にしたものだとすれば、即ち同じく刑事被告人の賞恤でも社會運動家なら問題にさる、然らざるものは放任するといふのでは、これ取りも直さず當局自から右傾的立場を採つて左傾的思想行動に挑戰するものではないか。當局がかく自ら近代の特徴たる社會的爭議の渦中に投ずるといふことは實に重大な問題である。

吾々の理想をいへば、當局としては何處迄も至公至平の超然的態度を執つて貰ひたかつたのだ。當局者が一個人として左右兩方の立場の何れかに同情するやは問はないが、國權の執行者としては何處迄も偏執の私念を去らなければならない。不幸にして我國の官憲は、獨り警察といはず、おしなべて此の點に就いては甚だ聰明を缺いて居る。現に見よ、社會運動家又は之に類

する立場にあるものが、震災直後の混亂裡に如何に無意義の壓迫を受けたかを。

之等の點に關しては枚擧に遑あらざる程の實例もあるが、今一々之を述べない。只疑なきは、平素でも社會運動に對して挑戰的態度に出で勝ちの官界が、變に乘じて一層その態度を鋭くしたと云ふことである。その結果更に一層嫌惡の風潮を將來に助長すべきは疑をいれない。之れ心あるものゝ等しく深く憂ふる所である。

單にこれ許りではない。斯うした挑戰的態度は、官界のそれに激せられて民間にも亦頗る著しくなつた樣だ。單に社會主義者たるの故のみを以つて自警團や靑年團の襲ふ所となつたものも、都鄙を通して少なくない。而かも官憲は多くの場合充分之れを取締り得なかつたといふに觀れば、社會運動に對する民間の壓迫も亦頗る猛烈であつたといはなければならない。之れ亦社會の將來の爲めに深く考えねばならぬ所である。

官民を通じて挑戰的態度の猛烈になつたといふことは、甘粕大尉の擁護論の中に、大杉の樣な惡る者を殺したつてかまはぬではないかといふ樣な考が強く現はれて居ることにも分かる。社會主義は惡い、就中大杉は國家を蠹毒する大逆人だ。之を殺したのだから甘粕は豪い、少なくとも甘粕に不都合なことをしたと責むる理由はないといふのだ。大杉が兇惡な人間であつたかどうかは知らない。只世間には、甘粕の行爲を赦すべからずとする者の間にさへ、大杉の殺されたことに一種の痛快を感ずるものもあるとか。これ或は大杉の德の至らざるの結果かも知れないが、然し兇惡な人間だから勝手に殺しても可いと云ふ理窟はない。その上、大杉の兇惡なる所以を左傾派の一方の闘將たる所以に歸し、社會主義だから惡い、無政府主義だから惡い、その惡る者を勝手に殺したつて何故惡いかといふに到つては、これ正に左傾派に對する私刑の社會的公認で、社會の秩序を壞り、階級的反感を激成する、之より甚だしきはない。要之、惡人だから殺していゝと云ふ理窟はない。況んや左傾的傾向にある總てのものを悉く兇惡と斷ずるに於ておや。

世上の甘粕辯護論の中には、その理由を甘粕の人物又はその心事に置くものもある。これならまだ好い。然し多くの辯護論は專ら重きを彼が大杉を殺したといふ點に置く。大杉を殺したといふ事に國民的感謝に價する大きな意味があるといふ者さへある。斯くてはその考への赴く所遂に社會運動に對する直接行動の推賞とならざるを得ないではないか。

直接行動は、如何なる場合にも、之を是認すべき道徳的根據はない。否、直接行動はそれ自身道徳に對する反逆なのである。之でも、例へば彼の無産階級者の場合の如く、強敵に對して戰ふべき何等の武器を持たないものが止むを得ずして直接行動に出づるは尚ほ恕すべしとするも、凡ゆる權力と凡ゆる方便とを有する官憲が、弱者に臨むに這の態度を以つてするは、必要以上の暴虐にして、その弊亦頗る怖るべきものがある。斯く社會的影響の重大なるを思ふ時、甘粕事件は決して輕々に附すべき問題ではない。

直接行動論に關聯して今一つ念頭に置かねばならぬことは、軍隊主義の横行といふことである。軍隊は元來非常の變に所すべく準備さるるものだ。故に敏活な統一的行動を必要とする所から、上下階級の命令服從關係は極めて嚴しい。腕力の對抗に萬一のソツがあつてはならないから、危險なもの、その疑ひあるものは、深く究めずして之れを艾除することが必要だ。此の流儀でいけば事も早く運び萬一を怖るゝ懸念もない。其處で軍人などは、平時の仕事にまで、之れでいけば譯はないと考へる樣になる。國家的生活を或る狹い特殊の目的に限り、國民の教育向上といふ樣なことを丸で、拔きにして考へれば、軍隊の流儀は常に之れを適用するも妨げないかも知れない。然し人間は生き物だ。生活の範圍は無限である。一時非常の變に處する軍隊主義を、吾々の生活の一切に適用されては困る。軍隊主義の標提襯切に隨喜する者は軍人以外にも案外に多いが、斯ういふ考へ方からも、甘粕大尉の行爲に一種の同情を表せしむるものゝ樣に見える。吾々から見れば之も軍隊主義横行の一弊と見ていゝ。

僕の論鋒は遂に飛んで軍隊共通の考へ方にまで向つた。此處に凡ゆる問題の起因があると考へるからである。現に甘粕事件についても、吾々の常識が承認する主たる被告は、甘粕大尉でなくして實は、軍界一般だ。稍々狹く限つて憲兵隊全部が責任を脱るゝことは出來ないと考へる。大杉殺害の犯罪を實行する爲に、憲兵隊の名も憲兵隊の有する幾多の公の機關も利用され、司令部内の一室で行なはれた犯罪が三日も放任された揚句外部から促されてやつと澁り乍ら事實の一部分を曖昧に發表するなどは、決して公明正大なやり方ではない。詳しいことは略する。とにかく假令法律上その責を免れ得るとしても、本事件の德義上の責任は、殆んど全部憲兵隊にありといつていゝ。

責任問題といふことに關聯して、政界の一隅に行はるゝ愚論

を序で乍ら辯駁しておく。そは斯くの如き不始末を出した以上は憲兵司令官や戒嚴司令官の更迭位でおさまるべきものではない、部下に斯かるものを出したといふ責任問題の歸着は、總理大臣以下の自決に待たなければならぬといふのである。政權に憧憬るゝ政黨者流の云ひさうなことであるが、國民は決して此の妄說に迷つてはいけない。

尤も本件に關して政治的責任問題の起る餘地が全くないとは云はない。政治上の問題としては、內閣の威力を充分に發揮して問題の眞相を明かにし、法規の正確なる適用によつて處分の確實を期せなければならない。之れだけで澤山だ。部下に不都合のものを出したからとて、その度每に辭職せねばならぬとあつては大變だ。若し此の問題に關して總理大臣などの辭職を必要とする時ありとせば、そは軍閥が部下を曲庇するに急にして事件を曖昧に葬らんとし、內閣はそれを非として大に抗爭せるも結局力及ばずして軍閥の意向が通つた場合に限る。之れを外にして、內閣に辭職を以て其の政治的責任を完ふするといふ樣な場合はあり得ないと思ふ。

然し我國に於て軍人の犯罪事件が極めて正確に處理さるゝといふ見込は遺憾ながら甚だ薄い。此の點に關し最も大きな禍を爲すものは軍法會議の制度である。之れも數年前改められて餘程よくなつたのであるが、それでも現に甘粕事件に見るが如く、裁判長は軍人で、その下の裁判官も法律專門家は只一人、外は皆素人の軍人ではないか。陪審制度に對してすらなか〳〵激しい反對論の唱えらるゝ我國に於て、判官そのものが殆んど全部素人にて組織さるゝを許すとは、驚く可きことである。步哨勤務を怠つたとか、上官の命令に背いたとか、純然たる軍事上の犯罪ならまだ好いとしよう。殺人窃盜といふ樣な普通の犯罪につき、單に犯人が軍人たるの故を以て特別の法廷を設ける必要が何處にあるか。軍法會議の管轄事項は、餘りに廣すぎる。而して又爲めに曲庇隱弊の弊なしとせぬ。要するに軍法會議の制度は更に大に改正を加ふるの必要を見る。

甘粕問題に關して僕の言はんとする論點は大抵盡した樣だが、最後に之れに關して氣付いた二つの點に觸れて筆を擱くことにする。

一つは此の事件に關して吾々は新聞雜誌に對する掲載禁止の理由がわからなくなつたことである。外交上に關することか、犯罪搜査の邪魔になることゝかの理由で一時掲載を禁止さるゝことはわかるが、甘粕事件が久しく掲載を禁止せられたのは

上のボロを人民に見せたくないといふことの外何物があつたかを怪しむものである。今一つは、大杉と共に殺された少年宗一の國籍に關する問題である。彼は亞米利加で生れて米國に籍があるといふので、外國人を殺したといふ問題と見るものあるが之れは少しく見當が違ふ。成程彼は亞米利加に生れて米國の國籍を有する。けれども日本人を親とするが故に、彼れはまた立派な日本臣民でもある。領事館に届出でたか否かは問ふ所でない。從つて彼れは日本に來て居る以上、日本の法律から見れば完全な日本人だ。日本人だから憲兵が殺すに妨げないといふ理窟は勿論ないが、之れに依つて米國の國權を侵害したといふ問題は絶對に起らない。純然たる米國人を殺したとは全然問題が違ふ。米國大使館が抗議を申し込んで來たといふのは、事實の説明を求めて來たといふ事の誤傳だらう。若し夫れ誤つて米國人を殺し之れが國際問題となつて日本官憲の狼狽する所に一種の快味を覺ゆるといふが如き者あるに至つては、僕の聊か不快を感ずる所である。

時評

火災保險金問題について

福田德三

火災保險金支拂問題は、如何解決せらるゝか、私が此稿執筆の際は何事も知ることが出來ない。然し何時まで此問題を曖昧に附して置くわけに行かぬは明かなことであるから、恐らく此稿をのせた『改造』公刊の頃には、何とか、曲りなりの解決がつけられて居るかも知れない。私は、曲りなりにと云ふ。何となれば、今の形勢では迚も其以上の解決の附きさうな樣子は見えぬから。即ち其解決は何人をも滿足せしめず、誰人をも首肯せしめ得ぬものたることは、殆んど逆睹し得ることである。せめてロイド、ヂョーヂ位な政治家が日本に居たならば、多少思切つた解決をするだらうかと思ふが、今の日本には、何とも致方ないことである。乍去私共は、決して失望せず、落膽せず、晩かれ、早かれ、日本も其の當然の使命に目さむる時が來ると樂觀して居るものである。此の樂觀なくば、閑寂な學窓から時事に關する意見などを出して、空論の暴言のと徒らに世人の嘲笑を招くに甘んずる勇氣は、迚も持ち能はぬのである。

火災保險金問題に關して、色々な議論を聞いたが、私が最も片腹痛く思ふ一の學究論は次のものである。曰く、火災保險の被保險者は、會社と契約を結んで保險を附けたのである。而して、其の契約には、地震による火災の損害は塡補せずと明記してある。然るに今地震による火災(放火によるものは、無論問題外)の損害の塡補を求むるは、謂れなきことで、會社は無論支拂の義務はない。而して國家が之れに支拂を爲す可きわけもない。何となれば被保險者は何れも有產者である。無產者も均しく負擔する國家の歲入の一部を割いて、有產者が、契約上何等權利なきものゝ支拂を受けんとするものを援助するのは、不當不法である。若し何分かの支拂を爲すに非んば、問題の納りが付かないと云ふのなら、唯一途あり、即ち會社の德義心と其の誠意とに訴へて幾割かの金を見舞金として支拂はしむる是れ

のみであること。此議論は、甚だ愼重、冷靜な而して情理兼備な立論を好む人々によつて唱へられて、利害關係なきか、よしあつても、其れが爲めに判斷を誤られることなき、公正な人々を首肯せしむるに足るかの樣に見える。

私も、現存の契約によつては、會社に支拂の義務なきことは之れを認めざるを得ずと信ずるものであつて、花岡博士等の主張せらるゝ商法四一九條解釋論は、法律解釋論として、殊に現存契約解釋論として、到底成立せぬものと考へる。よし成立するにしても、其れは長い訴訟の結果に待たねばならず、所謂理窟に勝つて、實行に負けることになる外はあるまいと信ずる。乍然、私は、以上の健全常識論者に問ひたい。若し、火災保險契約は儼として存するから、會社も國家も、道德上は兎に角道理上保險金を支拂ふ可きものでないとしたならば、今日の所謂勞働爭議を如何するつもりであるか。勞働も亦た雇傭契約と稱する一の契約によるものである。雇主が明かに契約違反のことをすれば、其れは契約違反として法廷に於いて爭へばいゝではないか。其以外に勞働爭議を起すのは、不當不法のことであると云はねばならぬわけとならうと。乍去、其んな馬鹿げた話はない。又、國家が勞働保護をするのも不當のことゝならう。勞働者は國民の一部に過ぎない。殊に主として勞働爭議の主人となる工業勞働者は、全日本人口の何分の一にしか當らない少數者である。然るに此の一部少數者の爲めに、全國民の負擔する國費中より經費を出して、種々なる社會政策的施設をするのは不都合なことであると云はねばならぬことであらうと。乍去世豈に此くの如き沒理の主張あらんや。

社會政策は、勞働者のみの爲めに、無産者のみの爲めにするものではない。社會政策とは、社會全體の幸福の爲めに必要なることを、其の(直接關係者が少數であらうとも、多數であらうとも)國家が施設することの謂である。殊に現在の勞働雇傭契約なるものは、契約の名あつて其實なきものであるから、私法の及ばざる所を、公法の手段によつて救濟するのである。契約と云ふ名がありさへすれば、而して、其の當事者が全くの無産者なるにあらざれば、國家は一切無干渉無關係たる可しと云ふ理は、果して那邊に存するのか。殊に、私を以つて見れば、實に馬鹿々々しくて、殆んど問題とする價値のない議論は、會社の德義心とか誠意とかに訴へて、何分の支拂をせしめよと云ふ論之れである。殊に、勞働問題に就いて、溫情主義とか主從關係とかを高唱する論を唱ふ人々から、今火災保險問題に就いて此の德義心論を聞くに至つては、笑止千萬なことである。如何に、御座なり論が無難無事であるとは云へ、此れは又た曲學阿

世も甚だしいのである。道理上一文も支拂ふ義務なしとする會社に、營利會社たる資本主義保險會社に、タトへ一分でも二分でも、道德的支拂をせよと要求することは、馬鹿らしいも程があるではないか。彼等會社は舌を出して云ふであらう。オオ道德的にして人道的なる學者諸君よ、諸君によつて、我々の支拂義務なきことが裏書せられることは、何たる不思議の因緣ぞや。乍去、諸君は知るであらう英人の諺を、曰く、ビジネス、イズ、ビジネス！　私は、花岡博士主張の商法四一九條論には、法律解釋論としては、無理があることを認める。乍去、其れと共に契約の實質から見るとき、之れを法律の狹い眼で見ず、廣く人間生存の立場から見るときは、博士の主張は其れとして牢乎として拔く可からざる鐵案なりと確信するものである。乍去、今日の低く狹い法律の天地には、其の鐵案は到底容れらる可くもないと認むる外はないのである。

(一)法律解釋上、會社に支拂を要求すること出來ず、(二)國家には、直接何等の義務のないこと明なる以上は、問題の解決は次の三の何れか一による外はない。

(一)問題全部の放擲。即ち今回の罹災者は(放火なること明かなるものは別として)一切一文も支拂ひを受けず、國家も亦何等措置するを要せずとすること。(二)會社側に於ける施設を國家が援助するによる解決、官民合同組織か、再保險會社設立何れも其れである。(三)火災保險官營。是れである。會社の德義心に訴へて何分か出させ、兼て國家が若干補修をすると云ふ案は、二つの不合理を合併することである。而して其れが恐らく、現に實行せられる解決法らしく思はれる。是れ私が極力非なりとして排斥する最不合理的最姑息的解決法である。(一)會社は義務なきものを支拂はしめられ、國家は、一般國民に負擔を課して國民の一部に過ぎざる被保者を特惠するの無理を敢てし、(二)而して、支拂を受けたる被保者は決して滿足せず、所謂八方塞りとは、此案の如きを指して云ふのであらう。若しも此れが實行せらるれば(而して十の七八、左樣であらう)私は其れを滅茶苦茶の跋扈として痛歎せずには措かれないのである。

合理的なる解決二案の中、會社側に於ける施設を國家が援助することは、資本主義の弊害を助長するのみで、其害は、其れが與ふる若干の利益に倍するものあることは、殆んど多言を要せざることである。福澤某氏の立案の如き、商業會議所の案なりと世上に傳へられるものゝ如き何れも然りである。但し以上は、今日まで世間に公けにせられたものに就いて言ふことで、別に新案あつて、會社側を發動者とし、其の德義とか誠意とか云ふやうな得體の知れない曖昧なものを賴りにせず、何處迄も營利

會社としての立場から合理的の立案を爲さしめ、國家がこれに適當にして合理合法的なる援助を爲すことによつて、此問題を解決し得る見込が確立するならば、私は暫行方法としては、必ずしも其れに反對するものではない。乍去、私は恐る、其れは殆んど不可能なことであらう。而して合理、合法の假面の下に、會社特惠、財産階級庇護が實行せられる結果に陷る外はあるまいと。

此くの如き懸念なき唯一の合理的解決法は、即時火災保險會社を收用して、其の營業を國營とする之れである。私は十月八日、十一日及び同十五日の『二十三日會』に於いて、此議を主張した。左は其の時の批評によつて第六項を修正した私の案の梗概である。

火災保險金支拂問題處理案（數字は凡て第四十一帝國統計年鑑大正九年度分）

(一)政府は即時四十二の火災保險會社を收用して、火災保險業を官營とす。

(二)現契約履行の義務は政府之れを承繼し、會社財産は一切之れを收用す。

(三)政府は收用せる四十二會社の財産約二億圓を基金とし、火災保險特別會計を立つ。

(四)右特別會計は基金を運用又は處理し、並に火災保險利益金を其收入とす。

(五)火災保險の經營は差當り現會社の經營を其儘承繼し社員は不必要のものを除くの外全部之れを任用す。

(六)政府は會社收用に對し四十二社通計

拂込資本額　六五、二四〇、〇〇〇圓

に對し、公債（三十箇年据置、但し隨時其以前の償還を保留す）を發行して、之れを各會社に交付して收用代金とす。

(七)右以外政府は會社に對して何等の賠償を交付せず。

(八)政府は今回の大震災の爲め燒失したる家屋動産の被保險者に保險金を支拂ふ。其方法左の如し。

政府支拂金總額　四六一、〇〇〇、〇〇〇圓

内

五千圓迄の保險金　全額支拂

五千一圓以上の保險金　遞減按分率による

但し右五千圓は之れを全國平均額三千二百八十三圓に止むるも一案ならん。

(九)右支拂は、五分利付公債を以て之れに充つ。

(十)右公債の元利償却案左の如し。

大正九年度末報告による四十二會社收支計算

收入

保險料	七三、八一一、八六九円
利息	五、一九四、〇三九
其他	二八、五一一、七三〇
合計	一〇七、五一七、六三八

支出

保險金	二二、六七四、一〇一円
保險金以外契約金	三、六九六、七三二
營業費	一九、四三四、五七〇
其他	四〇、〇七〇、八六〇
合計	八五、八七六、二七〇
差引總利益	二一、六四一、三六〇

右の内收入は當分其儘と假定し、支出に於て營業費及其他中より八百餘萬圓を節約することは易々たる可し。

仍て一箇年總利益高概算　三〇、〇〇〇、〇〇〇圓とし、此を以て三十箇年に元利を償還するものとす。

式左の如し

$$a = A\frac{r(1+r)^n}{(1+r)^n-1}$$

年限を三十箇年、利率を五分とするにより

$$30 = x\frac{0.05(1+0.05)^{30}}{(1+0.05)^{30}-1}$$

仍て三千萬圓を以て三十箇年間に五分利付公債の元利を償還し得可き金額は四億六千百萬圓となり保險金總額推定十二億五十萬圓(第十一項を見よ)に對し三割六分八厘八毛を支拂ひ得ることゝなる。

(十二)右支拂ふ可き保險金總額の推定は

A　二階堂氏推定額　一、〇三三、五一〇、〇〇〇圓

B　福田推定額　一、〇六四、〇七〇、〇〇〇圓

福田推定の方法左の如し。

1　日本全國世帶數　一一、二二二、〇五三戸

2　全國保險契約件數　三、七九〇、七〇一件

3　保險契約百分率　三三・七八%

4　東京市燒失家屋數　三一五、〇〇〇戸

5　東京市契約推定件數(4に3を乘ず)　一〇六、四〇七戸

6　一戸平均保險金額を一萬圓とするときは總契金高　一、〇六四、〇七〇、〇〇〇圓を得るなり

C　十月十二日發表火災保險協會調査の契約金額　一、〇一八、四〇〇、九六一圓

を仍て概數　一、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇圓とす。

東京以外の契約高を東京の二割五分と推定す　二五〇、〇〇〇、〇〇〇圓

通計　一、二五〇、〇〇〇、〇〇〇圓

十二億五千萬圓となる，火災保險協會は總額十八億九千萬圓と公表したれども、之は疑ふ可し。神奈川縣のみを東京の四割と見るが如き、常識上首肯し難し。

（十二）右火災保險收用並に官營案は、無論一切の保險業官營の第一着歩として考案せるものとす。

（十三）會社收用代金の元利償還は易々たる可し、此點別に考案す。外國火災保險會社の始末亦同じ。

大正十二年十月十三日　　福田德三

附、十月十八日萬朝報掲載二階堂氏の文によれば、同氏は橫濱の火災保險金總額を東京の二割、其他罹災地のを五分と推定せらる。是れ福田第十一項の推定總額二割五分と全く同じ。余は其の推定の同じきを見て滿足するものなり。

私は別に、一切の保險業の官營、貯蓄機關の官營を以て、復興資金の作り出しに緊要なりと信ずるものである。差し當り、火災保險と同時に生命保險をも官營とし、郵便貯金の最高額二千圓を引上げて五千圓若くは其以上とすることの急要なるを主張するものである。而して其等に就いては、何れ機を得て、卑見を陳述したいと思つて居る。（十二、十、十八稿）

猶火災保險問題に就ては、『我觀』『報知新聞』『實業の世界』『サンデー毎日』等にのせた拙文併讀を希ふ。

當面の失業問題

鈴木文治

一

空前の大震災は、精神的にも物質的にも、幾多の恢復し難き大損害を持ち來したる中に、失業者激增の問題の如きは、其最も打ち捨て置くべからざる重大問題である。さらぬだに此二三年來の不景氣は各方面に亘りて既に多くの失業者を出したるのみならず、日一日と其數を增しつゝあるの有樣であつた。然るに此度の大震災は、更に急激に其數を加へて、殆んど收拾すべからざる狀態に陷りつゝある。今に於て急速にこれが善後の策を講ずるにあらざれば前途の社會的不安測り知るべからざるものがある。

今試みに東京府下に於ける失業狀態を見るに、工業勞働者の失業せるもののみでも、約八萬に達する。更に工業事務員失業者一萬五千、商業從事員の失業者四萬五千を合算すれば無慮十四萬となるのである(社會局調査推定數)。而して別に警視廳に於て職工五十人以上を使用する工場四百五に就て調査(九月二十日現在)したるものを見るに、其内譯は左の如くである。

殘存工場	一七五
倒潰工場	一〇三
燒失工場	一二七

其使用職工數十一萬九百五十四人であるが、其中死者五百八十三人、傷者六百九十八人、即ち全體の約一歩強に當る譯である。右死傷者以外の職工の狀態を見るに

一、當該工場に於て引續き工場整理等に使用せらるゝ者
　二四、〇三三人(二割强)

二、歸國せる者(歸國手當を受け又は工場主に通告して)
　一五、八四三人(一割二分五厘)

三、手當を受け復舊を待ちつゝある者

一五、五四四人（一割二分五厘）

四、明かに解雇せられたる者

七、二二五人（六分強）

五、明かに解雇せられず一時他に職を求め復業を待たんとする者

八、一五四人（七分強）

六、行衛不明

二〇、四〇二人（一割七分）

であつて、差當り失業狀態にある者は、右の四、五に記載したる明かに解雇せられたる者七千二百二十五人、一時他に職業を求め復業を待ちつゝある者八千百五十四人、合計一萬五千三百七十九人である。即ち全職工の一割三分強は當ることゝなる。併し乍ら倒潰燒失せる工場等の復舊は餘程至難の事業と見なければならぬ。工業の種類によつてはバラック等の假建築によつて直ちに就業し得ざるものあるは勿論、機械の修理又は補給等も容易のことでなく、物によりては外國輸入を待たざるべからず、且つは金融等の關係上、會社の體面とか又熟練職工の引留策とか等の痩我慢もさう長く續かう道理はない。現に石川島造船所（職工約三千）の如きは解雇を宣言し、芝浦製作所（職工二千數百）の如きも十月一杯を以て補給打切となし、解雇を宣言すべしと傳へられる。故に右の（三）に掲げたる、現に手當を受け復舊を待ちつゝある一萬五千五百四十四人中の大半は將に失業に瀕しつゝあるものと見て差支へはない。假りに之を其實半分と見ても七千七百二十二人である。而してこれに右（六）に掲げたる行衛不明者二萬四百二人の半數一萬二百一人を失業者と見れば、その數一七、九七四人となり、現在の失業者一五、三七九人と合すれば總計三三、三五二人となり全職工の二割七分が失業狀態にある勘定になる。

然るに警視廳管下に於ける、大小工場の職工總數は二二五、二九八人（大正十一年十一月調）であつて、前掲五十人以上の工場職工一一九、九五四人以外、五十人以下の小工場に於ける職工、一〇五、三四四人ある譯である。然るにこれ等小工場は、經濟上の實力に於て到底既述の大工場の比ではないのであるから、其失業者は大工場のそれに比して遙かに多く、これを全職工の四割と見るは決して過當ではない。これを數字に表せば四二、一三七人となる。これを先の五十人以上の工場に於ける失業者三三、三五二人と合すれば正に七五、二一七人となり、社會局の推定數八萬人といふのが、相當の根據を有することゝなるのである。

二

右は單に東京府下の工場勞働者の失業推定數であるが、更に神奈川縣下に於ける失業狀態を見れば、これまた夥しき數に上

るのである。

神奈川縣下の震火災被害は、概して東京府下よりも激しかつたことは、諸般の情報によつて判斷し得るところで、從つて工場の被害の甚しかつたことも想像に難くない。同縣下に於ける工場地ともいふべきは横濱市、橘樹郡(鶴見川崎附近)、並に浦賀町の三地方を以て代表的のものと見て差支へなからうが、今右の工場數並に職工數を擧ぐれば左の如くである。

	工場數	職工數
横濱市	三〇七	一七、七七五
橘樹郡	四八	一六、七六七
浦賀町	三	四、〇二二
計	三五八	三八、五六四

而して右工場の被害狀態を見るに、職工百名以上使用工場にして被害なきもの一もこれあることなく、

	全燒	半燒	全潰	半潰	計
横濱市	一五	三	三	九	三〇
橘樹郡	|	|	七	一〇	一七
浦賀町	|	|	一	一	二
計	一五	三	一一	二〇	四九

といふ有樣である。

更に右の工場中復舊の見込の有無如何を見るに、全工場四十九中その見込あるもの三十八、全然見込なきもの三、閉鎖一、未定七といふことになる。そこで失業職工調査の結果を見るに、詳細を知ることは今のところ事實上不可能であるが、明かに解雇又は辭職したるもの、横濱市に於て五、九四八、橘樹郡に於て五四九、浦賀町に於て五〇〇、合計六、九九七人で、即ち全職工數の一割八分强に當る。然るに殘餘の三一、五六七人中現在多少の失業手當を受け復舊を待ちつゝある者並に一時他業に轉じつつ復業を待ちつゝあるもの果して幾許に達すべきか。東京府の例によれば此二者を合して全數の約二割に當るが、神奈川縣下の被害は東京府下より一層甚しいのであるから、假りに其數を三割と推定すれば、此人員一萬一千五百六十九人となる。これを前の明かに失業狀態にある者と合算すれば一萬八千五百六十六人である。即ち約二萬の工場勞働者が、現在失業狀態にあるものと見て大過なからうと考へる。

そこで、然らば、工場勞働者以外の失業狀態如何といふに、東京府の例に倣ひ、工場に於ける事務員技師技手等を職工數の約二割と見れば、此數四千人である、更に商業從業員の失業狀態如何といふに、これも東京の推定數より割出すとして、東京の失業者數は四萬五千人であるから、その一割と見れば四千五百人、一

割五分と見れば六千七百五十人である。假りにこれを六千五百人と見れば、工業勞働者二萬、技師事務員四千、商業從事員六千五百合計三萬五百人となる。而して東京府下の失業推定數十四萬と合算すれば十七萬五百人となる。更に以上の人々が各々家族二名を有すると見れば(世帶主並に獨身者を通算して)その三倍卽ち五十一萬九百五十人、又家族三名を有すると見ればその四倍卽ち六十八萬二千人といふ多數の人々が、當面の失業問題のために正に塗炭の苦みを嘗めつゝある勘定である。東京の罹災者概算百三十萬、神奈川同じく三十萬合計百六十萬と見當をつければ少くともその三分の一內外に相當する人口が、現在非常に苦んで居るのである。これは實に容易ならぬ問題である。バラツクとても十分には行亘らず、食糧の配給も不平均であるといふ。況んや天漸く寒うして衣袂の薄さを思ふ時、これら多數の同胞が、飢寒交々到來するに逢はゞ、果して如何なる狀態を現出すべき、洵に寒心に堪えざる次第である。

三

以上は單に工業勞働者、同工業事務員、技術員並に商業從事員のみを擧げたのであるが、此外に失業又は失業の危險に曝露されて居るものに、官公吏がある、各種學校敎員がある、新聞雜誌記者がある、文士著作家がある、俳優、辯護士、藝術家がある、法律家がある。所謂知識階級の人々は勿論、各種の屋外勞働者中にも失業者が少くはない。又來春各種大學專門學校卒業生のハケ口如何といふことを考へ來れば、これ又重大問題といはざるを得ない。思ひ來れば、失業問題の對策を決定することは正に帝都復興の基礎條件、喫緊至要の先決問題なりといふも、決して不可ではない。

官公立の各職業紹介所は大車輪で、其最大能率を發揮しつゝあるものゝ如くである。併し乍ら實際の結果は、求職あつて求人はない。每朝三四時頃より職業紹介所の門前は人の山である。けれども眞に職に就き得るものはその三分の一、四分の一に過ぎぬ。三日紹介所の前に立つて、一日職を得ればまづよい方である。然も災後、一旦地方に難を避けた人々も、追々物情の鎭靜するにつれて、續々と歸京する。併し此歸京した人々の始末が更に出來ぬのである。それもその筈である。職業紹介所は文字の示す如く職業を紹介するところであつて、職業を作るところではない。職業を與ふる源泉は殆んど悉く涸れ果てたのである。是に於て乎、如何に優秀なる技術を有する者も、如何に發明なる頭腦の所有者も、徒らに手を拱いて途方に暮るゝのみである。

然らば則ちこれが對策は如何。先づ第一に失業救濟の根本方針樹立のため、正確なる失業調査を實行するの必要がある。これがすべての計畫を樹てる上の標準となり土臺となるものである。次には、差當りての應急策を講じて、失業者に對して少くとも最低限度の衣食住の保障を與へなければならぬ。これは震災直後に於て、政府も公共團體も、民間の個人又は團體も、一齊に着手したところである。而して此點に於ては相當の成績を收めたといひ得るが、遺憾ながら、相互の間に組織的聯絡なく組織的計畫なく、且つこれが實施に當りて勞働者に組織なく、又組織ある勞働者の使用利用を極端に忌避したる結果、配給の厚薄、救護品の腐敗を來したるは心外に堪えない。

應急策の第二は、成るべく多數の人間を、差當りての仕事に就かしむることである。これは既に半ば着手したことであるが例へば救護品の配給運送に從事せしむること、倒潰家屋の修理取片付に從事せしむること、其他の勞役に從事せしむることである。日本勞働總同盟は此意味に於て、燒跡處分に關して案を具して建議するところがあつた。失業者救濟を意味することは勿論、組織訓練ある勞働者として事に當らしむることは、帝都復興の第一要件を、敏速に處理せしむる所以なりと信じたからである。其後東京市は道路掃除の費用として、七十餘萬圓を支出するに決したといふことを聞いた。政府も亦、市同樣の計畫あることを聞いた。併し夫れは各個人をして取片付に當らしめ市又は政府は、路上の堆積物を一定の場所に運搬する筈だといふのである。けれども燒出された個人は、復興計畫が具體的に定らぬために、折角取片付けても、自己の住所が道路其他に收用せらるゝことを慮りて、僅かに自用バラック建設のために一部の灰掻きをなすの外、一向に手を付けないで居る。思ふに政府は徐ろに大計畫を定めて、市民をして依るところを知らしめ後から〳〵と路上に堆積する瓦礫塵芥の類を反覆運搬する積りであらう。

四

將來の對策については、私は次の數項を擧げたい――

(一)　職業紹介所の增設及利用。これは現在東京市內に十二箇所の紹介所あり、更に二十箇所增設のことになつて居るが、多々益々辨ずである。而して出來得べくんば、此機會に於て在來の私設紹介所(桂庵)等を根絕したいものである。而してその作用は、獨り東京市內のみならず、各地方紹介機關とも聯絡を取り、內地移住の便を圖り、旅費の支給又は減額等をなさねばならぬ。紹介所の增設並に其活動は、職業そのものを作り出すも

のではないが、その需給を圓滑になし得れば、以て失業の苦痛を幾分緩和し得る効果がある。

（二）地方勞働者の罹災地移入を防遏すること。これも勿論單に消極的效果を有するに止まるもので、固より理想的方法と稱するに足らぬ。たゞさらぬだに失業者の多數に苦んでゐる罹災地に、更に他地方より勞働の移入あるときは、罹災地の失業問題をして益々複雜にし、その解決を困難ならしむるものであるから、少くとも或一定期間を限りて、その移入を制限する必要があると思ふ。

（三）勞働者住宅の急速建設。これは建設に當り勞働者を要すると共に、住宅の建設により勞働者を保護することの二重の效果がある。勞働者の住宅は此際に於て改良の必要がある。而して彼等を不衞生と風紀紊亂とより救濟せねばならぬ。官營又は公營を以て原則とし、民間有志の團體等に對して補助の途を講ずることもよろしからう。

（四）失業手當の支給。無爲の徒に對して手當を支給することは、最も愼重に考ふべき事柄であるが、救護品の給與にして長く續くべからず、さりとて職業を與ふるの途にして備らざれば、失業手當の支給は此際必要缺くべからざることである。失業保險の施設なき我國の現狀に於て止むなきことゝ思ふ。但しこれが支給は現金を以て交附すべしである。彼の職業紹介所を通じて食券の配付を行ふべしといふが如きは、失業者を乞食扱ひにするものである。而してその程度は少くとも、本人は勿論一家族の最低の生活を支ふるに足るものでなければならない。

（五）休業工場復舊の促進。これが何よりの大問題である。從來の工場が復活出來さへすれば、現在の失業者の八九分通りは救はれる。而してこれがためには火災保險等の問題の解決が急務である。それも一割や五分では問題になるまい。是非共政府に於て相當資金を低利に融通する途を開かねばならぬ。殊に小商工業者に於てその必要一層多いことである。而して政府が補助又は低資融通の工場等に對しては、同時に勞働者の生活に對して保障せしむることが必要である。然らば即ち事業の復興と、失業の救濟と一擧兩得といふべしである。金融の途を開くと共に、動力、燃料の供給、材料の供給等についても、出來得る限り便宜を與ふべきことはいふまでもない。

（六）速かに復興計畫を決定し且つ發表すること。これ即ち國民をして眞に依るべき目安を示す所以である。目下のところでは、復興方針が不明なので、どこから手をつけてよいか分らず、先づ樣子を見てゐるといふ有樣である。これでは事業の起り、失業の救濟さるゝ譯がない。我等は當局の態度を手ぬるし

と思ふ。

（七）海外移民の便宜を圖ること。國内に於て失業問題の解決を期し難いとすれば、勢ひ海外移出を圖るの外に途はない。但し我國の海外移民は甚だ心細い狀態であつて、いづれを向いても排日の聲を聞かざるはなく、いはゞ八方塞りである。僅かに南米に於て歡迎するの聲あるを聞くが、歡迎するところへはドシ／＼出してやるべしである。南米移民には今日種々の制限があるが、此制限は出來る限り縮小して、海外移出の途を講ずるを賢明とする。日本の人口問題は、各種の社會問題の根源となつてゐる。日本には事實人口が多過ぎる。此機會に於て幾分解決の端緒を得ば、僥倖といふべしである。

五

併し乍ら玆に等しく失業者といつても種々の種類あることを知らねばならぬ。一概に筋肉勞働者といつても、その中には熟練勞働者あり、不熟練勞働者がある。又知識階級の失業者もあり、自由職業者の失業者もあり、小商人、商店員等の失業者もある。これ等はいづれもその對策を異にするの必要あるを思ふ。

第一は熟練勞働者である。これは折角築き上げた熟練をムザムザ捨てゝ仕舞ふのは誠に惜しい。從つてこれには成るべく速かに其舊來の職業に復歸せしむる方法を取らねばならない。併しこれには先決問題として、火災保險問題、復興資金問題等のあるはいふまでもない。次には標準工場を設置して、大規模生産に取りかゝる段取をすることである。例へば建築材料を標準化して、鋼鐵窓枠を作製するといふが如きである。八幡製鐵所や、陸海軍工廠などは相當役立つことゝ思ふ。更に熟練勞働者に職を授ける一方法として公共建築物の速成を期するもよからう。いづれにしても熟練勞働者の救濟には、勞働團體等を利用すべしである。勞働組合の發達は、我國に於て尙甚だ幼稚であるが、それでも工場の實情に通じ、工場勞働者の實際に通じて居る點に於ては、官公立職業紹介所の吏員の比ではないから、適當にこれを利用することは、熟練勞働者をして就職に關して其所を得せしむる一手段である。たゞ問題は、果して當局者に此果斷ありや否やにある。

第二は不熟練勞働者に對する方策である。これは格別の技術又は熟練のある譯ではないから、どの方面にでも振り向け得られよう。けれども何等の熟練なき勞働は、其價値甚だ低いのであるから、成るべく或程度の熟練を賦與するやうに努めなければならぬ。それには復興事業の進捗に伴うて、多くの需要あるべき、大工、左官、家根屋、石工等の職業補導教育をすること

が急務であると思ふ。

第三には工場技師事務員、吏員、自由職業者等に對する方策である。これ等は所謂知識階級の失業者ともいふべく、これが救濟は極めて困難である。此階級の大部分は筋肉勞働の體驗なく、從つてどんな荒仕事でもやつて退けるといふ譯には行かない。これは復興事業の勃興を待つより外はないが、差當り官公衙等の燒失書類の整理、謄寫等の仕事に從事すれば一部の苦痛を緩和し得られやうと考へる。

第四には商店員、小商人の救濟策である。これ等の人々のためには公設市場等に使用するか、又は大規模の勸工場の如きものを設け、一區域を作興して、活路を見出さしむる方法を講じてはどうかと思ふ。

いづれにしても失業者の救濟には復興事業を急がなければ駄目である。事業が興れば職業はおのづから出來て來る。事業を興すことなくして、失業の救濟を計らうとしても、これは所謂木に緣つて魚を求むるに等しい。復興院や同審議會の出來てから可なりの時日を經て居るが、未だ何といふ大方針の決定せられたものを見ない。折角考慮中と見えるが、成るべく早く埒を明けて貰ひたい。天漸く寒くなる、秋風はそゞろに身に沁みる、食糧は不足勝である。衣は薄い、住む家はバラックである。而して定つた職業がなく、從つて定收入もない。果してこれ等の人々の心が荒まずに居られやうか。地震の大破壞は終つたであらうが、人心の破壞を如何にするか。常軌を逸した野獸的行動は、往々にして破壞の翌日に起る。局に當る人々、希くば見ざるに戒愼し、聞かざるに恐懼するの明察至誠のあらんことを。

普通選擧の問題

室伏高信

一

山本權兵衛といふ人は思つたよりも悧巧な人である。後藤新平といふ人も、思つたよりは芝居の上手な人である。權兵衛には、さうは思ふものゝ、どこかにまだぎごちないところがくつついてゐるが、後藤新平には政治家らしい何ものかが附着してゐるように思はれる。今のブルヂョア政治家のうちでは、面白味のある點からいつて、先づ後藤新平を押すべきであらう。

兎も角、普通選擧の斷行をきめてかゝつたことは近來の大出來である。どうせ普通選擧なぞは外國のものまねではあるが、立憲政治といふものが既に外國の物まねでもあり、否、一切の制度、文物みな外國の物眞似をしてゐる以上、その物眞似を徹底することも必要であらう。また今日の世の中では、どのようなボンクラな政治家が立つても、例へば高橋是淸といふような程度のものでない限り、先づ普通選擧はやらなくてはなるまい。

政友會といふ一團のボスがある。このボスの仲間で總裁がいいとか惡るいとかいふて騷いでゐる。世間から見れば誰れが政友會の總裁であつてもいゝ。政友會の總裁となるような人ならまた政友會員なぞになつて濟ましてゐられるような種類の人間なら、とても今後の世の中には緣はない。その政友會が多年權勢を恣まゝにしてきた。日本での最大の政黨である。議會に過半數の傭兵を控えてゐる。上院にはそれと相應ずる、そしてこれも丁度政友會を殿樣にした程度の人たちの集まりである。この二つの勢力が相携へて立ちながら二度も三度も機會を失つた。世間で同情するものもない。その大勢力が野にありながら普通選擧に反對してゐる。世間の人氣がどうであらうと、時代の動きがどうであらうと、有田ドラックと一緒になつて、普選反對で押しとほしてきた。今日になつても尚ほ看板の塗替へをするだけの智慧もなく、勇氣もない。

この時に當つて内閣を組織するものは、正に宜しく普選斷行をかゝげて、この一大舊勢力をそぐべきである、この舊勢力をたゝかなくては、政治はこれから先きへ一歩も動く筈はない。加藤友三郎が首相の名をもつてるたらうが、また岡野敬次郎が擔がれたにしようが、政友會の頭を叩くことのなしえないものは、今の政治家としての資格はない。その政友會の頭を叩くためには、一つの見事な鐵槌がある。普通選擧がそれなのだ。

山本内閣はこの鐵槌を振りあげた。閣員の中には、政友會を叩くことを喜ばないものもあつたらう。けれども今更らそうした考をもつてゐるようでは、自分が何のために山本内閣に入つたのかさへも分つてゐないのだ。大隈内閣がそうであつたごとくに、山本内閣は政友會を叩きつける使命のもとに生れたのだ。

山本内閣は地震のためにできたのではない。その非政友的作用からできあがつたのだ。常ならば、今ごろ閥族なぞが出られる筈がない。閥族なぞは日本のような時勢後れの國であつても、最早や晝間往來を歩ける動物ではないのだ。その怪物が天下をとり、そして常ならば反對すべきものも反對せず、言ひたきこともいはずにゐるのは、ただ地震のごさくさまぎれだからであるだけではない。非政友的政治作用の結果なのだ。

山本内閣の使命は政友會を叩くことにある。そして叩くこと共に自らも滅ぶべき内閣なのだ。

二

普通選擧は勿論實行される。政友會が反對してもしなくても、普通選擧は實現されるに違ひない。否、今日では、何人が反對しても實現はできる。普通選擧そのものが人の心を喰ひつゝある。政友會の反對なぞは何も恐るゝことはない。否、政友會が反對した方が、普通選擧にとつては一層に有りがたきことである。如何なる人氣役者も、その反對の憎まれ役がなくてよく引きたたないように、政友會がこの憎まれ役を引うけるところに普通選擧の人氣が引きたつのである。丁度チヤアチスト運動にはロオド・ジヨン・ラツセルがあつて憎まれ役を引うけたように、今の普通選擧には、故原敬の殘黨たる政友會があつて惡役を一手に專賣してゐるのである。こゝが政友會の使ひ道なのだ聊か氣の毒な感もないことはないが、多年の横暴は、何時か、如何なる方法によつてか返へされなくてはすむものではない。政友會の總決算の時がこの普選實行の時なのだ。政友會總決算のことが確實であるごとくに、普選の實行も今は確實なのだ。こゝ數箇月のうちに、普選は必ず實現されるのである。またさ

れなくてはならないのである。

私はこの普選運動が恐ろしいほどの勢で起されることを豫想してゐた。チヤアチスト運動ほどの犧牲はなくとも、それだけの熱烈さをもつて、今年暮から來春の政治期、總選擧まで續けられ、そして戰ひ勝つであらうことを疑はない。

私は無論今日の普選論なるものが眞面目なものだとは思はない。九割九分以上までも粗製濫造ものである。天ぷらである。鍍金である。見よ、どう贔負目に見ても普選に眞向から反對するであらうと思つてゐたような人たちが今日では普選論を唱へてゐるではないか。否、昨日までは普選反對で押しとほしてきた人が、今日は圖々しくも普選論ですましきつてゐるではないか、貴族院あたりの老骨連がそうであるばかりではない。山本内閣からしてそうではないか。一々の顏觸れを見るにも當るまいが、先づ山本權兵衞、後藤新平、田健次郎、田中義一、みなこれ閥族、官僚、軍閥でないものは一人もないではないか。普選どころではない。人權の壓迫、自由の阻止によつて、彼等は今日の地位にまで鰻登つてきた人々の群であるのではないか。犬養にしたつて同じことだ、犬養が普選に反對し、その黨友中の普選論者を異端として國民黨から除名したのはまだ五、六年前のことであつたではないか。それを生れつきの普選論者でもあるように振舞つてゐるなぞは寧ろ押が强すぎるのである。凡てがダイ・ハアヅなのだ。ビスマアクが普選をやつたと同じ意味で彼等が普選をやらうとしてゐるのだ。ヂスレリイがチヤアチストに秋波を送つてゐたと同じ意味で、普選に媚びを呈してゐるのだ。

だがそれでもいゝ。またそこに面白味もあるのだ。官僚、軍閥、長閥、薩閥の類ひが普選論を唱へなければならない程に、時代が普選のために熟したのだ。普選が狡猾な政治家にとつて最上の政略として役立つほどに時代が普選に向つて熟してゐるのだ。

時代はたしかに普選に向つて熟してゐる。私たちは先づこれを受取らなくてはならぬ。

三

だが受取には受取るにしても、盲滅法で受取りたくはない。普選の意義も價値も充分に味つてから、若しくは味はひつゝ受取りたいものだ。

普選は最早や理論の時期ではない。實行の時期だ！——無學な政治家がよくそういつてゐる。無學者にとつては大變に都合のいゝことなのだ。けれども私たちは、こうした簡單な目かく

しでもつて私たち自身を置き忘れて行くことができるであらうか。

議會でもその他の場所でも、普選についての議論は幾度かきかされた。だが單なる自然權說の引のばしでない限りは、例のごとく、「普選は最早や理論の時期でない！」で押しとほしてきた。それでは普選のためにあまりに氣の毒ではあるまいか。折角の普選――そはたしかに日本の政治界にとつては憲法發布以來の大事件なのだ。この大事件のうへに一つの原理が與へられなくて、私たちはすましてゐることができるであらうか。勿論私は世の中の學者のするように、「抑も普選の事たる」、「若し夫れ」云々といふ御面倒な議論がなくてはならないといふのではない。私たちを自身がそこに一つの意義を發し、そしてその價値を、高過ぎもせず、安過ぎもせぬように評價してかからねばならぬといふのである。

四

私は普選の萬能を信んずる世の一派の人々の群にありたくはない。それでゐて普選の實行には双手を擧げて贊成するものである。普選の斷行、政友會の撲滅！、みな双手を擧げて贊成する。これがためには從來の政治職業家のほかに純新な一つの團體が起るべきだとまで考へてゐる。そして私等自身がそのために犬馬の勞をとつてもいゝとさへ考へてゐる。私はこゝに一つの機會を捕え得ると思つてゐるからである。

五

普通選擧の實行とともに、政治熱は全國に大いなる勃興を見るに至るであらう。特に青年の間に政治運動の新らたなる氣運を導くに至るであらう。そして特に重要なことは、今日まで政治に冷淡であつた人々、若しくは政治を排斥してきた人々まで政治運動の新らたなる流れのうちに捲きこまれてゆくことであらう。

こゝに二つの重要な、結果が想像される。一つは今日までの政治勢力の均衡が忽ち打破されるであらうと云ふことである。政友會が差當り勢力を失墜するであらう。そして次の普選の實行者としての山本內閣、長閥、薩閥、官僚の類が忽ちその實行した普選の斧によつて誠らるゝに至るであらう。否、こゝに今日までの政治的勢力の根本關係が打破されるのである。

今日まで政治は封建的分子を伴つてきた。閥族と稱するものがこれなのである。貴族院、樞密院なるものもこの種類である、そは政黨と並んで倘わが日本の政界の一半に勢力を張つてきた

のである。それゆゑに日本の政界は數種のブルヂョア政黨こそれ等の封建の殘滓との間に微妙なる對峙若しくは提携の關係をもつて押し進んできたのである。普選の實行はこの形勢を根本に覆すべき約束のもとにある。卽ち政治を一つの階級的對立に導き、政治において階級鬪爭の道を開くに至るであらうからである。

こゝに政治に對する新らたなる希望が繋がれるに至るべき理由がある。卽ち勞働者、××××、若しくはその側にある人々が政治によつて勞働者の解放を行ひ、階級を撤廢して××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××、××××××××、××××××××××、××××××××××××しめることがこれである。Jeler Klassenkampf ist Ober ein Politischer Kampf ——マアクス派の若しくはフエイビアン派的政治運動が一段の勢を占めるに至るであらう。

そしてこれ等のものが悉く試めされた時に、××××××××××××××××××。×××××××××××××××××××××、また普通選擧への段取りに對してそして政治運動の一時的なる勃興に對して、何等の悲觀をも用ゐないのである。

感想文を募る

左の標題で感想文を募ります。新春にはそれにふさはしい情緒が動いて來ます。燒野の春にも若人の胸には美しい情調が恵ましく育つて行きます。過ぎこし方を振り返り、また來らんとする日を思ふとき、數知れぬなつかしい人生の愉悦や、心に泌みる哀愁が湧いてまゐります。その感じを思ひのまゝに、いつはりなく左の規定でかき送つて下さい。但し内容も表現も出來るだけ洗練されたものであつてほしい。原稿は新年號の本誌で發表します。十一月二十五日が締切りです。

1. 感想　**春宵戀を思ふ**（四百字十枚以内）
2. **新年にふさはしい小話**（四百字五枚以内）

尚ほ入選者は一枚一圓以上の薄謝を呈します。そして應募原稿は一切返却いたしません。

『女性改造』文藝係

女性改造十一月特別號

或る男の墮落（四十枚の遺稿で氏の生涯を通じての傑作と稱せらるる近來雜誌界の珍品である）　伊藤野枝

母の思ひ出　山川菊榮　藤森成吉　中川紀元　小川未明　茅野雅子

生と死の問題　柳宗悅　帆足理一郎

新東京繁昌記　近松秋江　高須梅溪　白鳥省吾　三宅やす　竹久夢二　藤澤清造　網野菊子

夫を憶ふ（鎌倉で凶災のために亡くなつた厨川白村への思出で）　厨川蝶子

厨川白村の事ども（恩師白村氏への思出である）　菊池寛

野枝さんの思ひ出（一字一句も忽にせぬ野上女史の思出は正に文壇の一珍品です）　野上彌生子

宗一のことにつき（自分の子を兇刄に斃された怨みを血で描く、切々として何人も泣かされる）　橘あやめ

創作
宇野浩二（人氣五人男）　加能作次郎（下町女の日記）
加藤一夫（休職看護長）　廣津和郎外三篇

戀文に現れた七年前の大杉夫妻　大杉榮　伊藤野枝

女性改造新

見よ新春號の大偉觀を

男女關係の新標的

長谷川如是閑　千葉龜雄
平塚らいてふ　鷹野つぎ
佐藤春夫　久米正雄

男女關係の問題は殆んど行詰まつて來ました。その標的を新らしく何處に求むるかは大正十三年初頭の第一問題でなければなりませぬ。藝術家の新らしき立場より、そして新らしき婦人の立場より性道德の目標を何れに求められたか。この六先覺者が各自の立場より徹底的論議を上下された一大讀物は皆さんの行かれる道を明かに敎へてゐます。新春

年號豫告

雜誌界の讀みものとして此上なきものです。

童貞聖母……和辻哲郎

「肉交に於て女の最も深い墮落がある、愛に於て女の最高なる昂揚がある、女が肉交を要求して、愛を要求しないことは、女が墮落を欲して高めらるゝを欲しないことを意味する。」と氏一流の哲學的立場から、一言一句滴るゝが如き名筆と眞實を以つて最も高い意味の婦人解散を絶叫された名文であります。

其他、創作欄には久米正雄、武者小路實篤、宇野浩二諸氏の雄篇が登載され、錦上更に花を添ゆるものがあります。

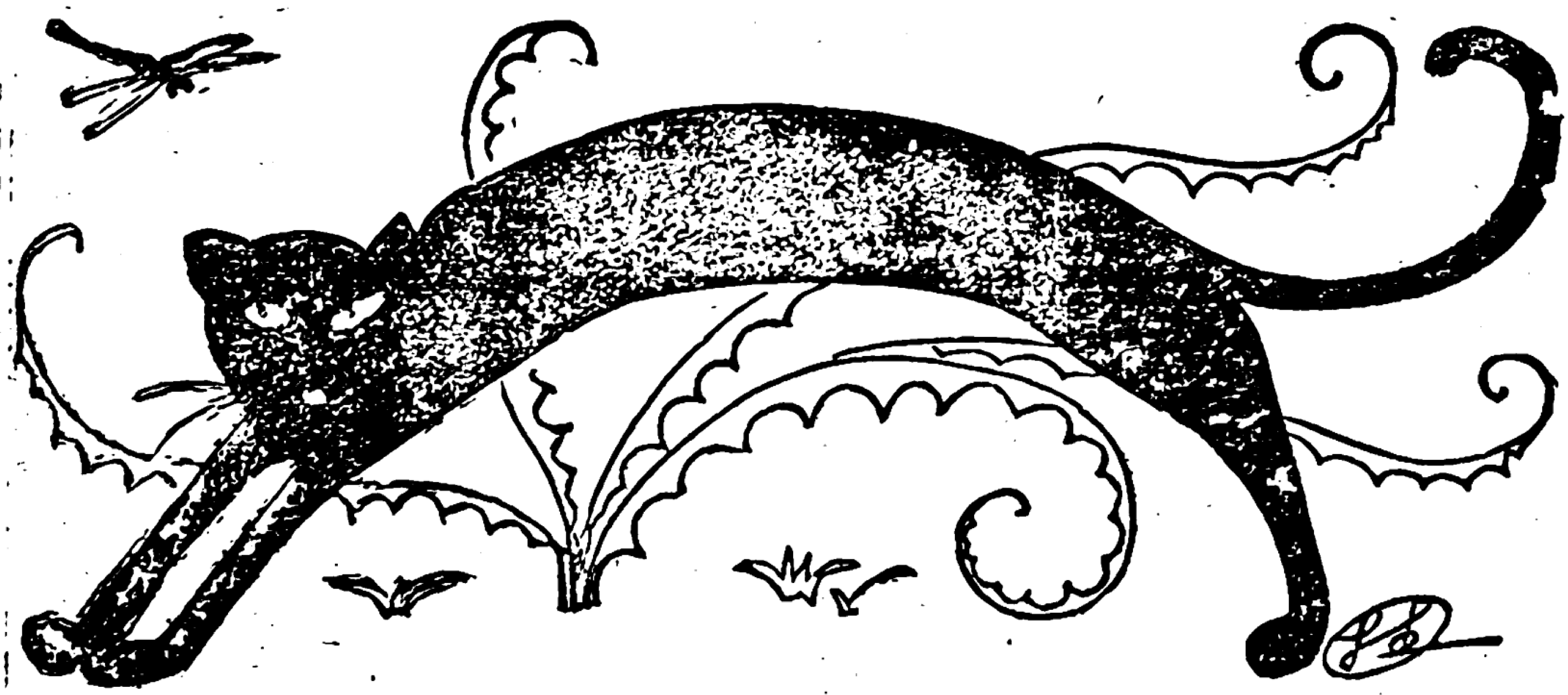
「女性改造」編輯部

創作

計らざる事　小川未明

或る男（完結）　武者小路實篤

椿　里見弴



計らざる事

小川未明

空に、雲の多い日だつた。

彼は、縁さきに坐つて、ぼんやりと狭い庭を眺めてゐた。くちなしの葉が、てら〳〵と光つてゐた。それに目をとめると、ちやうど若葉の出る時分であつて、柔らかな日の光りがそれに當つてゐるやうな感じがした。それ程、空と太陽の光りとくちなしの葉とが、Kに、初夏の頃のみづ〳〵しい感じを抱かせたのである。

彼は、ふと音がしたので、竹垣の方に顔を向けた。その隙間から、白い犬が、隣の家の芥箱の蓋を開けて、餌をあさつてゐる様子をちらと見たのであつた。

「人間は、かうして、いま地上で優勢ではゐるが、そして、あのやうに、他の動物は、小さくなつてゐるが、曾ては、人間の外の動物がこの地上を恣に征服してゐたこともあつたのだ」

こんな考へが、ふとして、彼の頭の中を掠めたのであつた。すると、いつになく

犬の姿が憐れなものになつて、見られたのである。

彼は、二たび、くちなしの葉の上に目を歸へした。その時は、異つたものを、そこから發見した。この柔らかな、つやつやしい葉がところ〲蟲ばまれてゐたことだ。

彼は、どこが、葉の裏に隱れて、折角延びようとする葉を片端から食つて行く、金光りの眼がついてゐる青蟲のゐることを想像せずにはゐられなかつた。

「今年は、花が咲かなかつたな」

Kは、こゝにも、生きようとする者の間に鬪爭が行はれてゐることを知つた。

次の瞬間に、彼は、壁板にかゝつてゐた、花鋏を取つて、庭へ下駄を穿いて出て、青蟲を一疋殘らず切つてしまはうと思つた。彼は、しばらく立つて、それをする前に、他の木にも、何か蟲が付いてゐはしないかと、一通り見まはした。

今年の春、求めたぶなの鉢植が、臺の上に乗つてゐた。もとこの木は、風の寒い高原に生えてゐるのであつた。それをこんな風通しの悪い、狹い庭さきに置いたので、やはりこれも、片隅のところに、狹苦しさを感じてゐる柘榴の木に、いつぱい付いて延びる紅い芽を一つ殘さず喰つてしまつた毛蟲が、いつの間にかこの木の枝にも鈴なりに下つてゐた。

彼は、これを見た時、すぐに害蟲は、殺してもいゝと思つた。

「害蟲とは、何を標準にして言ふのか? みんな生きようとしてゐるのだ。そして、さうすることの自由をば有してゐるのでないか?」

かう、自身に問うた時に、Kは、惑はざるを得なかつたが、兎に角、自分にとつて有害なものは除かなければならな

いと簡單に決めてしまつた。

彼は、簔蟲を一つ、一つ先づ殺して行つた。そして、それを殺し盡すと、こんどは、いよ〱くちなしの前に立つた。いくつかの、金光りのする眼を持つた、太い青蟲が、あちらにも、こちらにも、小さな音を立て柔らかな葉を撰つて端から食べてゐた。

この場合、眼をちよつと側に轉ずると忽ち見失ふやうに、その蟲の色は、葉の色とよく似てゐたのであつた。

Kは、鋏を鳴らした。そして、手近かな枝にとまつてゐるのから、葉といつしよに蟲の胴を二つに切り離つたのである。

いまゝで、葉を食つてゐた口先を上げながら、蟲は、葉の色と同じ青い腸を露出して、もう死んでしまつたのだ。多少びく〱と切り離された二つの部分が、別々になつてから微動はしてゐたけれど、もう生命は、全くなかつた。

かうした時に、彼は、深い憂愁に捉へられた。

「何ものも、生命を、創造する力のない人間が、その生命を、破壞していゝものだらうか？」

たとへ、このことは、人類の間では、罪を構成しないとしても、自然に對しては、犯し難い、罪を犯したやうにすら感じられた。彼は、それを感ずることによつて、眼に見えない恐怖に襲はれた。しかし、誰が、いまそれを咎めよう？

かう考へた時に、彼は、青蟲もまた一疋殘らず殺してしまつた。

午後も、大分經つてからの時刻である。

彼は、家の前に出た。すると、空地に子供等が集つて、がや〱いつてゐた。その傍へ行つて見ると、子供等は、蟻が群をなして、移動するのを珍らしさうに眺めてゐた。それ等の蟻は、みんな一つ、一つ卵を啣へてゐた。そして、異

様な眼が自分達を見下してゐるのを悟るには、あまりに小さかつた。
「みんな蟻を踏んで殺してしまはうか？」と、子供の中の一人が言つた。
Kは、きくと、それを制した。
「いゝ子だから、そんなことをするものでないよ」と、言つた。
子供等は、おとなしくしてゐたが、彼が、他の方を見てゐる間に、足を擧げて、トン、トンと土を踏んだ音がした。
「これ、そんなことをするんぢやない。蟻は一生懸命に、卵を運んでゐるのだから……」と、彼は、慌てゝ言つた。
子供の小さな一踏みですら、無數に、蟻の命は失はれたのである。
この時、俥屋の前で、近所の人達が話をしてゐた。
「今年は、蜂が、決して、下枝に巣を造らないで、高いところに造るさうですが、こんな年は、大水が出るといふことですね」
「また、二百十日時分に、大雨が降るのでせうかな」
「今年は、あまりいゝ年ではありませんね。何となく調子が、いつもと變つてゐますよ」
「作は、さう惡るくはないと言ひますね」
「あれで、土用になつて照りましたから、よかつたんでせう」
Kは、默つて、こちらの門のところに立つて、しばらく、彼等の話を聞いてゐた。
ちやうど、そこへ、Bがやつて來た。
「やあ、しばらく」

Kは、前に立つて、頭を下げたBを見るとなつかしげに、かう言つた。
「ごぶさたいたしました」
Bは、長い髮を撫で上げながら、丁寧に、つゞけて頭を下げた。二人は、門から、家の内に入つた。
「君は、痩せましたね」
Kは、しばらく、Bの樣子を凝視つてゐたが、何となく、その姿は、やつれて病氣あげ何でゞもあるやうに見られた。
「いや、別に體の方は、惡くはないんですが社の方を、やめて、いま浪人をしてゐます」と、Bは、口許に、さびしげな笑ひを漂はして答へた。
「いつ社をやめたのです」
Kは、驚いた風で、たづねた。
「もう、一月ばかり前にです。別に、私が惡いことをして、それでやめさせられたといふ譯でも何んでもないのです。少し、いつしよにゐる者と意見の衝突をすることがありまして、それで、やめたんです」
「それは、すぐに困りはしませんか」
「實は、困つてゐるのです」
「で、社をやめて、何か、いゝ考へでもあるのですか？」
Kは、失職者の多い時節に、自から勤め先をやめるなどといふ無謀なことを咎めずにゐられなかつた。いまの職を見付けた時の容易でなかつた苦るしみをBは、まだ忘れずによく知つてゐる筈だと思つたからだ。かう考へると、Kは、一種腹立しい感じすら抱かれたのであつた。

「いよ〳〵なければ、筋肉勞働をやる考へでゐますが、もしご迷惑でなかつたら、どこかへご紹介をしていたゞきたいと思つて上りました」と、Bは、言つた。

「君の體で、筋肉勞働がされるものでなし、また、紹介を書いたとて、どこでも人が餘つてゐるのだから、駄目と思はなければならない。友達と喧嘩をして、やめるなんて、この際、つまらんことをしたものだね」

Kは、自分のことのやうに、それを考へると困つてしまつた。

「いえ、容易に、口のないのはよく分つてゐます。もと筋肉勞働をした經驗も、少しはありますから、いよ〳〵なければ、勞働者になる決心でゐます」

Bは、低く、煙草の煙を吹きながら、言つた。

「しかし、考へると、不思議でなりません。私は、いつもかうなんです。苦しんで、苦しんでやつと職を見付けるのです。そして、そこにまた、いつまでも、ぢつとしてゐることができなくなつて、少し腰が暖まると自分で、破壞をして出てしまふのです。その結果、いつも同じやうに、苦しむことがよく分つてゐるのですが、いつまでも一處に、落付いてゐることができないのです。自分で、不思議なことに思つてゐます」と、Bは、つゞけて言つた。

「それは、何ういふんだらう？」

Kは、このBの心持に同情されないことはなかつた。しかし、苦しむといふことが、そんなに明かに分りきつてゐるなら、彼がたゞその惡 癖を自から知つてゐるなら、制し切れないといふのは何うしてであらうと疑はれた。

「私が飽きつぽい性質ばかりでなく、これは身に附き纏つた運命なんですね」と、Bは、さびしく笑つた。

Bは、おとなしい男であるが、それでゐて反抗家であつた。彼の頭は、理性的に動 半面に一種の妙な運命觀といふ

やうなものを持つてゐて、それにこだわることが多かつた。執着性の強いのは、それが原因をしてゐるのかも知れない。
「では、君は、宿命的に苦しむ譯になるのですね」と、Kは、言つた。
「さうです。苦しむやうに、この世の中に生れて來たのです」
「それはいゝが、體は、惡くないんですか？」と、Kは一たび、彼に對してゐる間にも、その姿に、甚しい窶れを感じたので言つた。
「この頃は、やはり生活のことなどを考へるからでせうか、神經衰弱に罹つてゐるんです」と、Bは、答へた。
「僕も、一つせい〴〵口を探して見ませう。しかし、この節のことだから、まあすぐには無いと思つてゐて下さい」
「それはありませんとも、私も、よく知つてゐます。ときに、こんど私は、轉居いたしました」と、Bは言つた。
「どこへ？　やはり、いまゝでの近くですか？」
「五六町隔つた近くです。すぐ被服廠の脇なんです……」
Bは、懐から、名刺と鉛筆を出して、新しい宿所を書いて、Kに渡した。
「まだ、あのあたりを僕は、よく知らないのですが」
「どうか、涼しくなりましたら、ぜひ一度ゐらして下さい。私が、またお迎へに上ります」と、Bは、顔をあげて、かすれた聲で言ひながら、さびしく笑つた。
それから、しばらくして歸つて行つた。
其夜は、何となく颱風の來さうな模樣らしかつた。すでに夜中過ぎには、木の枝に撓はむ風の音が凄まじくきかれた。
Kは、臺の上に乘つてゐる幾つかの植木鉢が吹き飛ばされはしないかと、ふと、風の音に驚いて、眼を醒ました時に思

つた。

翌日の朝は、非常な雨と、風であつた。しかし、晝前に、その雨と風は止んで、空は、どことなく落着がなく、日の光りが鈍く、雲切れがしたのであつた。

その時までは、まだ、みんなの生活は、變りがなかつた。ある者は、充分に眠りを取つて床の中から起きたばかりであつた。ある者は昨夜の快樂の跡をたどつて、なほ陶醉から醒めなかつた。また、ある家庭では、贅澤な晝の食事の仕度に忙しかつた。そして、宏壯な建物も、立派な裝飾も、嚴重な金庫の置き場所も、何もかも平常と變りがなかつた。言ひ換へれば、大都會の文明は、その前日のまゝであつた。工場は、生産に忙殺されてゐた。汽罐はうなつて、機械は廻轉してゐた。すべては。昨日の通りに、今日も繰り返へされるのであつた。搾取する者と搾取される者との關係にも何の變化のあらう理がなかつた。しかし、其等は、眞にその刹那以前であつたといふことができた。

稀有の大地震が、都會を顚覆したのだ。刹那の以後には、いまゝでの關係は、悉く轉倒し、若しくは、破壞されてしまつたのだ。

それから後、數日間といふものは、誰の頭からも秩序といふものが失はれ、生活の樣式が混亂した。

Kは、そんなことを感じながら、前に立つてゐる男の顏を、恐怖心なしで見ることができなかつた。もし、この男の言ふことに逆ふものなら、そのときは殺されるかも知れないといふやうな豫感が、血走つた、その男の眼の中に感じられたからだ。それで、たゞ默つて、その男の言ふことを聞いてゐた。

「人間があまりいゝ氣になり過ぎてゐたんですよ。自然を馬鹿にし過ぎてゐた。天に對して畏れといふことを感じなくなつてましつてゐた。罰です。天罰です。いゝ見せしめですよ。小田原、熱海間は、もつとひどいといふぢやありませ

んか？」と、その男は、かう言つた。

「あのあたりも大變ださうです」と、Kの傍にゐる他の男が、答へた。

眼の血走つた、脊の高い男は、カラ〳〵と笑つた。このヒステリックな笑ひ聲は、をかしみな氣分がなく、狂的なために、却つて氣味惡さを聞いてゐる者に感じさせた。

「僕は、金が無くなつて、東京へ出て來る時です。腹が空いて仕樣がなかつた。小田原へ出て、國府津まで歩いた、その時分です。もう三月の末になるので、熱海から歸る避寒客が、いつぱい汽車に乘らうとしてゐる。若い、贅澤な風をした女が、何か鳥の羽子か、それとも絹絲で織つたものか知らないが、暖かさうなものを頸に卷いて、白粉を塗つて口紅や、頰紅を付けた顏をその中へ埋めて、男と肩を並べて歩いてゐるのを見た時に、僕は、これまで感じなかつた程の憎惡を感じたのです。あの時、感じた憎惡を、いまだに忘れません。しかし、痛快です。そんな、夫人や、令孃がいまは身に着るものもない素寒貧になつたのですからな」

「いつたい、さういふ人は、何うするでせうか？」

眼の血走つた、脊の高い男は、身を反り加減にして、叫ぶやうに、

「まだ屍のくすぶつてゐる燒跡の上で、淫賣婦にでもなるより仕方がありますまい」と、言つた。そして、ヒステリックの笑ひをつゞけたのである。

「人間が傲りすぎたのだ」

脊の高い、眼の血走つた男が去つた時に、Kは、その男の口眞似をするやうに、自分もさう感じたのであつた。

彼は、蠶蟲や、青蟲が、無心に、木の皮や、葉を食つてゐるのを、自分が花鋏で眞二つに、胴から切り離つたことを

黒ひ出した。青蟲の口先が、まだ動いてゐるのに、まだ、食べた葉が腹の中へはいりきらないのに、腸が露出して、體が二つに別れた、慘ましい光景が目に見えたのであつた。

彼は、自分のした行爲を、誰も惡いと言つて咎めるものはないが、傲り過ぎた仕方だと思つた。咎めないからといつて、なんで殘忍な行爲でないと言へよう? 同じ生命あるものゝ虐殺だと考へると、彼は、言ひ知れぬ恐怖を催うした。

こんどの場合は、人間以上の力を持つてゐる自然が、人間を虐殺したんだ。

火は、流れるやうに街を燒き盡した。その赤い焰は、空を焦がした。みんなは、焰を振向きながら、安全な地を求めて逃げ走つた。彼は、やはり家を捨てこの郊外まで來たのであつた。ぶなの木も、書齋にかけてあるセザンヌの版畫も、毎日それに向つてゐた机も、あの家と共に、いまは、あちらに殘つてゐた。Kは、自から捨て來た家のことやその周圍を何うなつたらうと思つてゐたのであつた。

「K君、何を考へてゐるんですか。あちらへ行きませう。僕が、曾て、母性愛の神祕について書いたことがあつた時に一部の人々はセンチメンタリズムだといつて冷笑しましたが、そして、母親の愛も、畢竟功利的のものであり、物質的のものであるといふやうに、言つたものがありましたが、しかし、今度、燒け死んだ人達を見て來たものゝ、話に、母親が、死ぬ最後まで、どんなに、抱いてゐる子供をば助けようとして悶えたか、ある女の如きは、自分の乳房を嚙み切つて、流れ出る血潮の下に、子供の頭を付けて、火を子供の體にかけまいと、俯向いて、自分の體で護つて死んでゐたものがあるといひます。また、女の着物は燒け、髮の毛は焦げてしまつたのに、腰卷で赤ん坊を卷いて、自分の胸の下に隱して死んでゐたものもあるといひます。

「K君、これを聞いたゞけでも、いかに、母親の愛が犧牲的のものであり、神祕的のものであるかといふことが分るや

ぢやありませんか。僕は、いまゝで人間が、貴い魂の所有者であるといふ、一番大事なことを忘れてゐた。それが、こんどのことによつて氣付かされはしないかと思ふのです。それは、多くの中に子供を捨てゝ逃げた男も、女もありましたけれど………」と、Yが、言つたのであつた。

Yは、前から、この郊外に住んでゐた。街の中に日を送つてゐたKは、こんどの騒ぎに、靜かな、林と野原が周圍にあるYの宿に、逃げて來た。

「K君、今日は、晩方から、徹夜で、見張りをするのださうです。なんでも、この村を燒拂ふといふ風説があるもんですから」と、Yが、それをば信ずるらしく言つた。

詩を作つたり、飜譯などもしてゐる、日頃からおとなしいYが、胸をどき〳〵させてゐるらしく、その言葉付きは、慌ててゐるやうな調子であつた。

「それは、本當ですか？」

Kは、何となく信じ兼ねるやうに、聞き返へした。どうして、落着きのあるYのやうな男が、それをば本當にするのだらう？　寧ろ不思議に感ずるやうな氣持であつた。

「さういふ噂があるのです」

Yは、眼を圓くして、かう答へた。

其の日の暮方から、YとKの二人は、村端れに立つて、あちらの廣々とした野原の方を望みながら見張りをしたのであつた。

初秋の日は、靜かに、暮れかゝつた。人間を酷たらしく殺した自然は、もうそんなことを忘れたやうな顔付をしてゐる

る。そして、すべてのものゝ上に、柔和な微笑みと、靜さとを投げてゐた。小鳥の群が、野面を掠めて飛んで行つた。

「何にも、まるでなかつたさうですね」

Kは、思はず、こちらを眺めて、かう言つた。

「レンブランドの田舎を描いた、エッチングを思ひ出しますね。何となく、かう悠久な平和といふやうな感じがするぢやありませんか」と、Yは、答へた。

Kは、眼を細くして、前に開けた自然から、Yの言つた意味を、はつきりと味識するやうに、眺めたのであつた。

「それだのに、僕達は、見張りをしなければならないのでせうか？」

Kは、そのことに對して、皮肉を感ずるらしく語つた。

Yは、また、眼を圓くした。彼が、何か驚いたり、呆れたりする時に、かうするのが癖であつた。

「昨夜は、線路を傳つて、怪しい奴がやつて來たのを捕まへたといふことです。其奴は、小さな何か液體のはいつてる罎と、短刀を懷中に持つてゐたといふことです。だから、油斷はならないのです」と、Yが、言つた。

「何のために、そんなことをするんです？　それが、主義々だとでも言ふのですか？」

「それは、分りません。人心を攪亂して、何かしようといふのでせう」と、Yは、それを信ずるらしかつた。

「泥棒にしても。こんな時、やつて來はしないでせう」

Kは、理性がある者の到底考へ得られないやうな事件が、どうして、かう一時に持ち上つたのだらうと、却つて、この事實そのものについて不思議を感じたのであつた。

「Y君、先刻の脊の高い人は、ご存知なんですか」と、彼は、眼の中の血走つた男を思ひ出したので、たづねた。

「あれは、この近所に住んでゐる彫刻家です。平常は、無口な、實におとなしい人なんです。それが、このたびの事件以來、非常に亢奮してゐるんですから、私も、人間といふものは平常を見たゞけでは、分らないものだと思つてゐるのです」と、Yは、笑ひながら、答へた。

「彫刻家なんですか？」と、Kは、藝術家にもいろ〳〵なタイプがあるものだと、感ずるらしかつた。

彼は、心の中で思つた。「Yだつて、そんなことを言ふけれど、どれ程、反動的になつてゐるか知れない。人類の血管の内に流れてゐる狂暴の本能を、理性の力では、制し切れぬものかも知れない」

「かういふ時には、人間が變るものです」と、Kが、しばらくしてから言つた。

「どうしてゞせう」

Yは、Kの顏を覗ふやうに見た。

「やはり、互に爭ふやうに、人間はできてゐるんでせう」と、Kは、前方を、さながら自失したやうに見ながら答へた。

「悲しいことですね」

日は、沈んでしまつて、野面は暗くなつた。夜に入ると、空氣は頓に冷たくなつた。どこともも知らず靄がわいて、いつしか白く一帶に懸つてしまつた。しかし、それは濃く物の影が分らないといふ程ではなかつた。木立や、家や、林は、くつきりと黑く浮き出て見えたけれども、奧まつた窪んだ空間には、溜つたやうに、ここだけがほんやりとなつて、何となく、際涯もない遠方まで、この野原がつゞくやうに見られたのであつた。けれど、線路を越すと、隣村は近かつた。人家の火が、時々、靄の裡に消えたり、見えたりした。そして、すべての景色が、繪のやうであつた。

「K君！　呼子が聞えますよ」と、Yが、あはたゞしげに言つた。

Yは、耳を傾けた。たしかに、稍隔つたところで呼子が頻りに吹かれてゐた。つゞいて、鬨の聲が、星空の下で起つたのであつた。

「ここでせうか？」

かう言つて、Kは、刹那に、すべての空想が破られて、怖しい現實を見なければならぬといふ衝撃を感じた。

そのうちに、呼子の聲は、高くなつて、鬨の聲は、手に取るやうに聞えだした。彼等は田圃といはず、野原といはず、道といはず、なんだか多勢の同志が叫び合つて、侵入者の跡を追つて來るやうな氣はひであつた。

Yは、太い棒の先に、尖つた鐵の付いてゐる武器を取り上げた。そこで、聲のする方に走り出した　彼は、當然、仲間に加はらなければならぬと自覺してゐたからだ。其間、Kは何うしようかと惑つた。

しかし、その鬨の聲は、すぐ近くなつた。そして、人間の一列が黑くなつて、野を遮ぎつて、あちらに驅けて行くのが見られた。すると、彼は、いつしよになつて、自分も其方に驅け出した。

みんなは、驅け出して行つて野原の中にあつた小舍を取り卷いてしまつた。小舍は、杉や、常盤木の生垣で廻はされてゐた。

「たしかに、こゝへ入つた！」と、多勢の中の一人が、叫んだ。

「ほんたうか？」と、念を押したぞがあつた。

「なんども、こちらに逃げて來た。そして、見えなくなつたんだ」と、前に言つた者が、はつきり答へた。

「Yさん、あなたは、あちらに見張りをしてゐたんでせう。誰か、來ませんでしたか」と、Yに、たづねた者があつた。

その男は脊が高かつた。たゞ、その男の着てゐるワイシャツの白い色だけが、ぼんやりと暗い中に浮いて見えた。
「さあ、氣付ませんでした」と、Yは、言つた。
「そんな筈がない。たしかに、いま、こちらへ逃げて來たのだ」
「何か、怪しな者が來たんですか？」と、こんどは、Yが聞き返へしてゐた。
「來たんですとも、僕が、誰だ！　と呼びかけると、其奴は、すぐに逃げ出したんです。足袋跣で、土方風の男でした」
　Yは、Kが、みんなから少し離れて立つてゐると前にやつて來た。
「K君、何も怪しい者を僕等は、見ませんでしたね」と、Yは、もう一層自分の言つたことをたしかめるやうに言つた。
「何も見なかつたやうです」
　Kが、かう答へると、同時に、それを、打消すやうに、
「たしかに、こちらへ逃げて來たんです」
「僕も、見ました」と、新に言つた者があつた。
「君も、見たのか？　そんなら、たしかに逃げて來たのだらう。よく探がして見よう」と、白いワイシャツの男が言つた。
みんなは、生垣の隙間から、方々を覗いて探し歩いた。
「あ、ゐた！　ゐた！」と、一人が、急に叫んだ。
「ゐた？　そら刺し殺せ！」

「叩き殺せ！」

「オイ、どこだ？　どこだ？」

半分は垣根の外に見張つてゐた。そして、半分は、入口から、手に、手に、武器を振つて門から内へ躍り込んだ。しかし、また彼等は、其奴の姿を見失つたやうだ。

「どこへ行つた？」

「どこへ隠れたらう？　オイ、みんな氣を付けろ！　きつと短刀か、ピストルを持つてゐるから」と、相手の姿が見えないために、却つて恐怖を感ずる者があつた。

「ゐない筈がないのだ」

「木に登つたのだらう」

「縁の下を探がして見れ！」

Ｋは、いま、悲鳴が、そこから起りはしないかと、びく／＼して、酷たらしい光景を想像しながら門の外に立つてゐた。

しばらくすると、ワイシャツの男を先頭にみんながぞろ／＼と門から外へ出て來た。どうしても、隠れた怪漢の所在が分らなかつたのだ。

Ｋは、一人の男がピストルを持つてゐるのを見た。また、ある男が竹槍を持つてゐるのを見た。

「どこか藪の中にでも隠れたのでないか？」

竹槍を持つた男は、垣根の繁みをところ嫌はず突いて歩き廻はつた。

「何うしても、一つ頸を刎ねなくちや……」と、脊の高いワイシャツを着た男は、片手に携げてゐた、日本刀の黒塗の鞘を拂つた。すると水の滴りさうな白刃が夜目にも氣味惡く光るのであつた。彼は二三度髀肉の歎に堪へない如く、振り上げて威容を切つて、それから、それをもとの鞘に收めた。

「先刻の彫刻家ぢやないか？」

Kは、今更驚いたやうに、よく顔の分らない其の男を凝視した。晝間見た時の血走つた眼付が、ちら〳〵と思ひ出されたのであつた。

Kは、Yを密かに呼んで、

「あの白いワイシャツを着た男は、彫刻家ぢやありませんか？」と、言つて、聞いた。

「えゝ、彫刻家です」とYは、直に、Kの意中を察した如く、闇の中で肯いて、笑つて見せた。

藝術家にも、いろ〳〵な人が出ることが考へられた。いかなる思想を抱くこともその人の自由であれば、また、どういふ目的をもつて、藝術に、たづさはるかといふことも自由ではあつた。しかし人間の行爲として、それが許されるか、許されないかといふことだけは、言ひ得られるのである。

火焔が鎮まつてから、Kは、二たび街に歸つた。乾からびた、ぶたの木の鉢に、彼は水を思ひきり澤山やることを忘れなかつた。

その時、彼は、地震の前日、こゝで害蟲を殺し、蠧蟲の體を切り離つたりした、その暴虐であつた自分の行爲を回想した。しかし、それ以後に、自然は、もつと大きな暴虐を人間の上に行つたのであつた。

彼は、Bのことを思ひ出した。

「まだ、あれからたよりがないが、被服廠へ逃げたんではないか？」
かう考へると、急に、心の中が暗くなつた。僅かな間に、もう其の人間が、存在しないといふことは、怖しい事實だ。
「被服廠へ逃げた者は、みんな死んだ」と、いふ噂が、立つてゐた。
「こんどの宿は、ぢき被服廠の脇なんです。どうぞ、お遊びにゐらして下さい」と、Bが言つた、そのかすれた低い聲が、まだ耳に殘つてゐる。
彼は、ぼんやり、空を仰いで、こんなことを考へてゐると、いつになく窶れて見えた。あの時のBの姿が、あり〱と眼に浮んで來た。
災害のために、一時は、全滅した新聞が、やうやく復活しはじめた。どの廣告欄も、尋ね人の件で滿されてゐた。Kは、最も、廣く讀まれさうな、新聞の一つに、
「B君、至急居所を知らせ。N、K」と、自分の姓名の傍には、住所をも明記して、廣告を出したのであつた。
この廣告は、すでに新聞に掲載された。そして多くの人の目に觸れたやうに見はれた。また、Bが生きてゐたなら、恐らくそれを見るであらう。たとへ自からは見なくても、これを傳へ聞いたであらう。
しかし、その翌日も空しく過ぎた。また、次の日も、Bからのたよりはなかつた。生きてゐたなら、彼は、きつとやつて來るであらうと思はれたのに。
「あなたが、お尋ねの人は、分りましたか？」と、言つて、彼は、却つて遇ふ人々から、問はれたのであつた。
空しく四五日は過ぎてからであつた。その日は、朝から空は曇つて、濕つぽい風が、うす寒く吹いてゐた。
Kは、二階の室に、獨り立つたり、坐つたりしてゐた。仕事をする氣にもなれなければ、また、書物を讀む氣にもなれ

なかつた。

地震以後、頭の中まで破壊されてしまつたやうに、容易に、落着いた氣持にはなれなかつた。

この時、どこからともなく、魚を焦がしたやうな臭氣がした。はじめは、近所で、晝飯の仕度をしてゐるのであらうと思つたが、その臭氣は食慾をそゝるやうなものでなく、胸に悶へて嘔吐を催うさせるのであつた。

彼は、立ち上つて、北向きの窓を開けて見た。やはり、その臭ひはした。彼は、硝子戸をぴしりと閉めて、こんどは東の窓を開けて顔を出した。一層、その臭氣は強かつた。彼は、其方の窓も隙間のないやうに、固く閉めた。最後に、彼は、南の縁側に立つて、硝子戸を開けて、あちらの空の方を見やつた。

雲の行くのが速かつた。そして、空一面にうすい煙が、かゝつてゐるやうな氣がした。人間の屍を燒く煙が、重くてこの曇つた日の空に、高く立ち上らぬのであらう。そして、地の上を低く這つて、あちらから、風に送られて、このあたりにまで漂つて來るのだと思はれた。

彼は、眼前に、目渡す限り、焦土となつた街を思ひ出した。廢墟のやうに、倉庫が、燒け殘つて、しかもそれが半分潰れてゐた。そこには、壞れた、赤い煉瓦の缺片が堆高く積んで、尙ほ煙が燒け落ちた建物の隙間から上つてゐた。そして、屍の焦げる臭氣が燒跡を掩うて一面に漂つてゐた。

「このビルデイングの崩れた下には、幾人か死んでゐるといふことだ」

かう言つて、通りすがる人々が言つてゐるのを彼は、聞いたのであつた。

ある橋の欄干は、燒け殘つてゐた。それに凭りかゝつて、下の川面を見落すと、火を浴びた船が黑く浮いてゐた。何の品か見分けの付かないのが、一固まりになつて、それ等は、岸に着いたり、また離れたりしてゐた。材木が、轉がし

でもしたやうに橋下の桁に引懸つて幾本となく重なり合つてゐた。その間を、黒い可なりの大きさのものが、ぶく／＼と浮いてゐた。その氣味惡いものは、潮の差引の加減で、緩漫に右に廻はつたり、左に廻はつたりしてゐた。

「あすこに、男の死骸が浮いてゐる」

橋の欄干から、恐怖に戰いた、生きた人間の瞳が幾つとなく下を向いて、その上を凝視してゐたのであつた。

Ｋは、そんな光景をも思ひ出した。

―かうして日は、經つて行くであらう。自然は、物質を破壞し、人心を惑亂しながら、また自から、鎭靜し、慰撫するために、雨で、一切のものを洗はうとしてゐる如く見えた。

まだ、電氣も破壞されたまゝで來ない、暗い室の裡に坐つて、彼は、空想に耽つてゐた。

「ご免下さい」

この時、下で女の聲がしたのであつた。

彼は、二階から降りた。そして、玄關のうす暗がりの裡に立つてゐる、若い女を見た。女は、よくＫを知つてゐるやうに、彼を見ると、すぐに笑聲を立てたけれど、Ｋは、その女をうす暗がりの中で見たのでは、思ひ出すことができなかつた。

「どなたでしたか………」と、彼は、過去に於て、こんな若い女を自分は知つてゐたらうかと、少なからず疑ひながら言つた。

「ほんたうに、ご無沙汰いたしましてすみません。妾、あの、Ｓ子です………」と、暗の中の女は、答へた。

Ｓ子！　彼は、急に、彼女を………そして、すべてを記憶から呼び返へした。

「あ、S子さんですか？　さあ、お上り下さい」と、Kは、言つて、何となく避難者らしい様子をした、彼女の姿を見まもつた。

彼女は、着物の埃を拂ひ、足袋を脱いだりした。この間に、Kは、蠟燭に火を點して、それを二階に持つて上つた。

「どうぞ、こちらへ」

彼は、二階から、暗い下の方を覗くやうにして言つた。

「どうして、思ひ出したやうに、訪ねて來たらう？」

彼は、S子が二階に上つて來て、自分に對ひ合つて坐る間に、かう思つた。

「ほんたうに、不意に上つてすみません。新聞で、おところが分りますと、もうたまらなくなつて飛んでまゐりましたの」と、彼女は、言つた。

蠟燭の火は、彼女の顔を照らした。五年前の若かつた日の面影はなかつたけれど、幾分か痩せて、そこには清楚の美しさが、こんな慌しい際にもほどこされた化粧に包まれて、漂つてゐるやうであつた。

彼は、いつにない、そのうるんだ黒味勝ちの眼と、笑ふたびに露れて、蠟燭の火で光つて見えた金歯に見とれながら、彼女の語るのに耳を澄ましたのであつた。

「妾は、忘れはしませんわ。よく覺えてゐてよ。あの時、あなたは、經濟に關した飜譯をなさつてゐました。妾が、あしたから、お手傳をしてあげると言つて、歸つた、それぎり何にせずに、あちらへ行つてしまひましたのね。ほんたうにそれぎりですわ。あの時だつて、妾、ちつとも、あの人を愛してゐたのではありませんでした。たゞ、あの人が氣の毒でならなかつたの、もし、妾が、あの人のところに行かなかつたら、あの人は、きつと自殺でもして死んでしまふと思

ひましたばかりに、行きましたの……あなたに、すまないと思ひながら」

「いや、もう、あの時分のことは、お互に言ひますまい」と、Kは、それに觸れることは、嫌惡より、他に何も得ないやうな氣がして、言つた。

彼女は、たゞ、あの時約束を破つたまでだ。たゞそれだけであつた。何も、まだそんな深い間柄でなかつた。それがために、自分は、一時は寂寥を感じたであらうけれど、何うなつたといふ譯ではなかつた。

Kは、だん／＼暗くなつて行つた、外の方に顔を向けた。木立の黑い影と、灰色の地平線とが、なほ空に殘つてゐる明るみで、墨繪のやうに見えたのであつた。しかし、今は全く秋である。そして、あの頃は、二人が最後に別れた時は、木々が鬱蒼として、圃には、眞赤なチユリツプや、薔薇などが咲いてゐる五月であつたのだ。

「あの時分には、よく、太陽が綠色だとか、黑色だとか、二人は、言つたもんでしたね」と、Kは、つひ、その頃の生活を回想しながら言つた。

「さう、いへば、大地震の日の太陽の光りはご覽になつて?」

「いえ、見たらうけれど覺えてゐません。たゞ、厭な雲を、あの牛乳をこぼしたやうな、眞白な、雲が氣味惡かつたのが目に殘つてゐます」

二人は、默つて、しばらく蠟燭の火を見つめてゐた。

「それで、あなたは、どうなさつたのですか?」と、Kは、顔を上げて言つた。

「いろ／＼聞いていたゞきたいと思つて、上りましたのです」

彼女の言葉は、この時、改まつた。

「こんど、横濱にゐて、家が潰れたんです」

「え？ お怪我がありませんでしたか」

「主人が、死にました」

S子は、急に、兩手で顏を掩うて、疊の上へ俯向してしまつた。

「あ——」と、Kは、その言葉を聞いたゞけで、別に、その人を知つてゐる譯ではないが、無慘な光景を想像して、歎息を洩らさずにゐられなかつた。

S子は、顏を上げた。そして、冷靜な言葉付で言つた。

「妾は、緣側から、すぐに飛び出したんですが、主人は居間にゐまして、逃げる隙がなかつたのです。體から、半分下を梁に挾まれてしまひました。どなたか男の方が、妾が叫んだもんで、すぐに驅け付けて下さいまして、家根を破つて、二人で引出さうとしましたけれど、どうしても體が拔けない。そのうちに、もう火が廻はつて來ました。

「主人は、どうか、私をかまはないで逃げて下さい。私は、神のお側に行くのですから、どうか、早く逃げるやうに、そして、最後の握手をして下さい……と、手を出しました。

「主人は、また妾に、どうか幸福に生きてくれと言ひました。信ずる人に、導いてもらへと言ひました。妾は、主人の生きながら燒けるのを見るのが怖しかつたのです。妾は、熱い風が、どつと顏へ吹き付けました時に、前後を忘れて逃げ出しました。そして、もう振向いた時分には、我が家は焔に包まれてゐました。それから、妾は、三日間、野宿をしました。東京へ來て、お友達のところへ賴りました。新聞を見て、あなたのお所が分りますと、たまらなくなつて、飛んでまゐつたのでございます。どうぞ、あの時のことは許して、また可愛がつて下さいまし」

彼女は、言ひ終ると、兩方の手で顏を掩うた。

Kは、このことを聞いて、自分は、何うしていゝか分らなかつた。漠然ながら、頭の中に、こんどの地震は、人間の常規を破壞してしまつた。そして、いまゝでになかつた程、精神的にも、獸的にも、みんなが、盲目的で、刹那的であるやうにさへ考へられたのであつた。

「S子さん、あなたは、もつと理性的でなければいけませんね。あなたのご主人の死は、もつとあなたが生きる上に、深い意義を與へた筈なのです」とKは、自から、胸を締め付けられるやうに、嚴肅な氣持を感じて言つた。

「Kさん、妾は、これから、どうしたらいゝでせう」

彼女は、つひに、聲を立てゝ泣き出した。思ひなしか、傍に、明滅する蠟燭の光りが、この二人を意味ありげに照らしてゐる如くにも見られた。

あたりは、靜かであつた。そして、庭さきには、次第〳〵蟲の鳴く聲が增して行つた。

Kは、ふと、廣々とした野原を前に眺めながら、Yと二人で見張りをしてゐた時のことを思ひ出した。すると、今夜も、白のワイシャツを着た、脊の高い彫刻家が、彼等を激勵しながら歩いてゐる姿が浮んだ。

濕つぽい風が、開けてある窓からはいつて來た。夜になつても、屍を燒いてゐる臭が鼻について取れなかつた。

「人間を燒いてゐる臭かしませんか？」

彼は、不意に、言葉の調子を變へて、かう言つた。

S子は、それには答へずに、何をか考へ込んでゐたが、やゝしばらくしてから、

「Kさん、妾、お暇をします」と、言つて、彼女は、起ち上つた。

「歸へるんですか?」

彼は、今更驚きを顔に見せたのであつた。暗い、夜の街を彼女は何處まで行くのだらう。Kは、かう心に思つたが、そのまゝ、冷靜に、默つて、次の瞬間に、彼女の立つて二階を降りる姿を見送つたのであつた。

―(一九二三、十作)―



或る男（終）

武者小路實篤

二〇六

彼は始め自分の二十歳位から憧れてゐた世界を書かうとした。そしてたゞ同じ憧がれをもつ人に、同感を起させればいゝと思つてゐた。しかし書いてゆくに從つて彼は段々その方に深入りしないではをさまらなかつた。そして彼はその世界をつくることは決して不可能ではない。誰でも本氣になつて根氣よく求めればその世界はつくれるものだと云ふ確信を得てしまつた。誰でもつくることが出來るならば、自分でも出來ないはづはない。

彼は今やあまり力こぶを入れる必要はなかつた。時は熟したのである。門は開いたのである。たゞ彼はよろこび勇んでその内に入ればよかつた。彼は不安を感じる餘地はなかつた。しかしそれは彼一人の力ではないことは云ふ迄もない。第一時の力である。彼に云はすと人類が生長して來たためである。第二は集つた兄弟姉妹の力である。第三は妻が反對しなかつたことである。家庭を破ることなしに彼は家ごとその仕事の内に入れると思つた。

彼は金持ではなかつた。財産と云ふものはまるでもつてゐなかつた。我孫子の家だけであつた。捨てるに惜しい程のものは何にもなかつた。又彼には一人の養女があつたが、本當の子供がなかつた。だから生活をかへるのに自慢する程の犠牲を拂ふ必要はなかつた。

又彼は一たんきめた以上は誰が反對しても聞く質じはなかつた。そのかはりきめるまでは臆病ものであり、あらゆる方面から考へて見るたちであつた。そのかはりきめた以上は誰が反對しようが、忠告しようが、そんなことは百も承知の上できめたのだ。誰が自分より考へのない男の云ふことをきくものかと彼は思ふ男だ。そして一たんきめたことを反對するものがあつたら、彼は母であつても、敵にすることを恐れない。母が死ぬと云へば死んでくれと云ひ兼ねない男である。其處へゆくと少し狂印である。しかし彼は男と云ふものはさう云ふ風につくられてゐるので面白いのだと思つてゐる。

自分の確信の道を歩くより他に男子に本職があるか、その他のことはお景物にすぎない。

彼は大阪毎日に感想を出しただけではをさまらずに、白樺にそのつゞきを出した。そして同志の人を求めた。木村莊太君が最初の同感者であつた。世間では濱松、松本長十郎君と竹村啓介君が最初の同感者であつた。そしてつゞいて方方から同志の人が出、そして新しき社會、彼は逆[illegible]し新しき村と云つた。を建てるために働きたいと云つて來た。それ等の手紙は彼夫婦をよろこばした。力を與へた。

二〇七

彼等は東京の同志の人と集る ために月一回あつまりをした。その集り、最初は七八人だつたが、一回々々集る人は多くなつた。そして東京に一軒家をかりて、其處に兄弟が三四人一緒に住んで、新しき村本部をつくつた。それは隨分

粗末な家だつた、そして其處に自炊してゐた。それが反つて、よろこびであつた。今迄まるで知らなかつた人々が集つて、段々親しくしてゆく、そしてお互に助けあつて生てゆく、それはよろこびであつた。

七月から「新しき村」と云ふ雜誌を出すやうになつた。そして、いよ〳〵土地をさがして、小さくつてもいゝから、仕事を始めようと云ふことになつた。

土地は何處がいゝか、それが最初問題になつた。最初彼は東京から日歸りの出來る土地をのぞんだ。彼は一方思想的にも働くには東京の近所が何かと便利のやうに思つたから。

そして彼はよき土地があつたら知りたいと雜誌にかいた時、彼は三四ヶ所の報告をうけとつたが、彼はどうも乘氣になれなかつた。理由もなしに氣が滅入つた。

柳は日光の近くにいゝ處があるやうに云つたが、水の都合がわるいらしかつた。

急ぐ必要はなかつたのだが、勢ひは早くぶつかるべき處にぶつかりたかつた。

そして燃え上るべき所に燃え上りたかつた。しかし何處に燃え上つていゝかわからなかつた。そして新しい仲間は日日加はつて來た。

彼はその仲間を二つにわけて、第一種會員と第二種會員に分けた。彼はそれについてかうかいてゐる。

「新しき村には二種の會員が必要だ。第一種會員は自ら村にすみ、そして働く人間だ。第二種會員はいろ〳〵の事情でその村で働くことの出來ない人たちだが、さう云ふ村の出來ることに對する熱心は第一種の人にまけない位の人だ。第一種會員には人數の制限がある。それも始めは少數の人切りなることが出來ない。しかし第二種の會員は誰でもなれ、又いくら多くつても多ければ多い程いゝ。その會員は第一種の會員の仕事を間接にたすけたり、慰めたり、鼓舞したり

する。又いろくの方面で補助する」

この二つの會員をあつめるこ、三四ヶ月の内に三四百人は出來た。そして熱心な手紙は彼をよろこばした。東京では石川君、長島君、名をあげては切りがない。そして土地を買つたり、なんかするために寄附金なぞもあつまりだした。長島豐太郎君の手紙は殊に彼夫婦や、その時に彼の處にゐた川島や、我孫子に引越して來てゐた木村莊太君をよろこばし、すぐ豐太郎君に村の會計になつてもらふことにした。

大阪の茶谷君から或時普通の書留が來た。その前から彼は或る不幸な人のために、茶谷君から毎月五圓づゝ送つてもらつてゐた。彼は何の氣なくあけたら中から千圓の小切手が出た。彼達はおどろき、よろこんだ。

或る日彼の所に一人の四十位の人がたづねて來た。村の話から、土地の話になつた。その人がその時、日向はいゝ所ださうですが、遠いので行かないかとすゝめられたがやめましたと云つた。彼はそれを聞いて、矢張り日向は遠すぎるこ思つた。別にその時は氣にしなかつた。しかしその夜、不圖目がさめるこ、彼は急に日向はいゝかも知れないこ思つた。そして日向のことを考へてゐる內、何となく今迄になく明るい感じがした。今迄いろくの土地の話を聞いても、いくら明るく考へようこ思つても駄目だつたのに、今日向のことを考へてゐるこ、今迄望んで得られなかつた明るい氣持が、希望が次ぎ次ぎこ頭をもたげて來た。それは何にもしつかりした原因があるのではなかつた。日向は建國の地だこか、日に向ふこか、土地が安いこか、何か事が起るためにとつておかれた所だこか、そんな夢のやうな理由よりなかつたが、心のよろこびはまぎらすことの出來ない事實であつた。

彼は自分が運命に守護されてゐることを何となく迷信しすぎてゐる男である、そして彼の心のよろこびは、彼を守護するものから送られたやうに感じる男である。

彼はその時、目がさめた妻と話しあつた、妻もよろこんだ。彼は翌朝起きる時には日向にきめてしまつてゐた。

二〇八

その内に新しき村を彼がやることが新聞に出た。

例によつてあることないことかいてあつた。日光に土地を買つたとか、白樺の同人がその内に澤山ゐるやうな調子に書いてあつた。

自分は始め新聞に出るのをよろこばなかつた。もつとそつとつくつておいてから、問題になるなら問題にされたかつた。自分は世間から注意され出すまでにはある處までものにしておきたかつた。始めつから注意されるのは面白くないやうに思つてゐた。

しかし新聞に出てしまつたら、自分は例によつて、それをいゝだらうと云ふ氣になつた。出なければ出ない方がいゝ、しかし出てしまつた以上又それもいゝ。そつとつくる方にいゝこともある。だが世間に注意されて始めるのも、便利なこともある。

新聞に出てしまつた以上、出たことを生かすより仕方がない。ごつちにころんだつて、それでへこたれはしない。世間でいろ〳〵村のことを批評し出したが、自分は例によつて、今に見てろと思つた。

自分はおだてられることにも、輕蔑されることにも、沈默されることにも、修業がつみすぎてゐる。自分はごつちでもいゝと云ふ主義だ。與へられた運命を生かすより仕方がない。與へられなかつた方に未練はない。與へられた方で進めるだけ進んで見る。

すべての人は村のやうな仕事は必ず失敗すると云つた。しかし過去においていくら失敗した事實があつたにしろ、今

後失敗することは限つてゐない。人類の歴史は、過去に失敗したことを押しつよく何度も何度も、やつて見ることで人類が生長して來たことを語つてゐる。昔一度失敗したことは未來において必ず失敗するなぞと考へてゐたら、人類には進歩はないわけだ。百度失敗したことでも、百一度目にものにならないとは限らない。そんなことがわかつてたまるものか。

彼等の多くは既成社會を非常に强いものと思つてゐる。そして破壞しなければ新しい社會の生れる餘地はないと思つてゐる。彼等は政治と云ふものにあまりに重きをおいてゐる。どんな政體が出て來ても、人間の内に動かぬ力があることを知らない。あまりに彼等は政治運動に中毒されてゐる。他人を支配すること、他人に支配されることに馴れすぎてゐる。他人に支配されない生き方があることを彼等は知らない。他人を支配せず、他人に支配されずに生る道を見出しそして自分も生き、他人も生る道が見出せたら、どんな政體が出て來てもおどろかない。どんな政體が出て來ても同じく良民であり、同じく獨立獨歩の人間であり得る生き方、その生き方を彼は見出したと信じてゐる。又その生き方のみ何ものも恐れない唯一の生き方である。

政治運動や、暴力やで、どつちにしろ勝たない以上は、自分の意志が生きないでは困る。

彼はそんなものを超越した。何が來ても平氣な世界がつくれることを信じてゐるのだ。

だからどんな政體も彼等の運動を恐れる必要はない。彼等の方でも恐れない。

「なすべきことはなす
自分のことは自分に任せてくれ。」

それが彼等の見出した道であり、又人類が眞に自覺して見出した道であることを彼は信じる。犧牲者を要しない社會、

誰とも兄弟姉妹である社會。

それが彼の求める社會であるから、彼は自分達の村が生長すればする程、同志でない人々にもよろこばれることを信じてゐる。

だから彼等は資本主義では勿論ないが、社會主義者でもない。彼等は第三のものである。人間主義者である。世界同胞主義者である。誰もすてない主義である。他人を不幸にするものだけが、反省をうながせられる。

二〇九

自分のなすべきことをなすと云ふことが唯一の問題になる。之が出來た人は獨立獨歩の人になる。しかし自分のなすべきことだけして一生を費やせば人間は滿足出來るものか、彼はさうは思はない。彼は自分のなすべきことをなす以上、自分の生命を生かすことを求めることは人間として至當のことゝ思つてゐる。人間のなすべきことを出來るだけ容易に又出來るだけ短い時間で果して、あと自由をたのしみ、又生かさうと云ふ所に彼の仕事の困難な所がある。自分のしたい仕事をして立派に自分のなすべきことを同時にする事の出來る人は仕合せだ。他の人はどうしたらいゝか。このことは今の彼にもまだはつ切りしてゐない。當時の彼にはなほはつ切りしてゐない。當時の彼はかうかいてゐる。

「人間として義務を果したら自分達はさぞ安心するであらう。今の農夫や、勞働者は本道を知らずに迷路をたゞ歩かせられてゐる。いくら働いても、つくべき處につかない。もう荷をおろして汗をふいていゝのだと云ふ處に達することは出來ない。自分は荷をおろして汗をふいて一息して、自分勝手が許される處をたしかに見出したと思つてゐる。それで其處へゆくのだ。そして先づ皆と協力して額に汗することから始めようとするのだ。それは又新しい罪を清める十字架でもある。今の多くの人の勞働は罪を清めない十字架だ。磔刑されたる奴隷だ。自分は罪を清めるこのアダムとイブの

うけた呪ひを消す新しい路に旅ゝたうと云ふのだ。しかもその道はさうけはしくはない。それはホイットマンや、ロダンや、ドストエフスキーの見た道だ。それは平和な道だ。よろこびをもつて進める道だ。よしその勞働は樂しみでないにしろ、十字架に比しては勿體ない程樂すぎる。

それを信じられるものはよろこんで手をたづさへてゆける處まで行つて見よう。くたばつた人は休むのもいゝだらう。少くもこのふるすに歸るのも惡くはあるまい。しかしゆけるものはゆける處まで行つて見よう。希望は見えてゐる。まちがひのない道だ」

之をよんで今の彼は恥かしくないか。一面たしかに今の彼は之をよみなほして恥ぢるべきである。彼は今、筆の仕事の方に逃げ込みかけてゐる。そしてまだ目的の地からあまりにはなれてゐる。だが今の彼は當時の彼と又ちがふ道で目的を見つめてゐる。そして一歩づゝ村を餘儀がおそくはあるが目的に近づきつゝあることは事實である。

だがアダムとイブのうけた呪ひに打ち克つのはまだいつのことかわからない。目標は見うしなはない、ふりかへるとよく來たとも思ふ。前を見たり、山をのぼり出した時の決心を思ふと彼は恥ぢて何かの前に跪づきたい。だが彼は、自分が途中でくたばり切らないことを知つてゐる。

だがそのことについてはあとで書かう。

二一〇

九月十四日に彼達は始めて新しき村の演說會を本鄕追分の基督靑年會館でやつた。仲間の若い人達が元氣で饒舌つてゐるのを聞くと彼はうれしかつた。當時彼は仕事を始める人の强い決心を內に感じてゐた。入れかはりたちかはり七八人の人がしやべつた。彼は最後に出て三十分間許りしやべつた。

「この仕事が失敗すれば自分達の恥だ」

と彼は云ひ切つた。

二一一

翌日、彼の我孫子の家には大勢の人が集つて來た。彼が日向に土地をさがしにゆくのでお別れの集りだつた。志賀が病氣で來れなかつたのは心のこりだつたが、その他は大概あつまつて來てくれた。白樺の人や、村の會員の人や、濱松や、信州の人達も來てくれた。

角力をやつた時、會員の横井國三郎が出て、一人の人と角力して勝つたあと、矢張り會員の齋藤の兄さんが出て、角力をとつた時、一度齋藤の兄さんが勝つたが、その次ぎの勝負に重なりあつて倒れたと思つたら、齋藤の兄さんの腕の骨が折れた。皆大さわぎしたが、齋藤の兄さんはよく痛さを耐へた。一時座が白けたが、又まもなく皆元氣になり出した。

殊に夕日は美しかつた。夕日が雲に反射して、それが手賀沼を金色に染めた。あんな靜かな、あんな美しさは、彼が二年近く住んでゐても、見たことがない程であつた。人々はその美におどろき、又亢奮した。

彼はその珍らしい美しさをその日の夕特に惠ぐまれたのを感謝した。

二一二

九月二十日に彼達は我孫子の家を引き上げた。その日の朝、彼は荷物をつくつてゐるさわがしい内を、二十枚許り原稿をかいて或る脚本家(一名、二人の彼)をかき上げた。

その時彼の家族は彼と妻と喜久子と、ディオとチビであつた。チビは彼の所に働いてゐたよき女中べんの家にやるこ

とにした。ディオを彼達はのこしておくのを氣の毒に思つた。しかしつれて出るわけにはゆかなかつた。土地でもきまつたらつれて來ることにしようと話してゐた。その時分からディオは元氣がなかつた。

かの（尾崎にもらつた猫）は彼達が或る日東京へ行つて歸つて來たら彼の座蒲團の上で死んでゐた。それでその時はもうゐなかつた。

川島はまだ彼の家にゐた。村へもくることになつた。我孫子をたつ時、一緒に東京に來た。その晩、彼達は隅田川のわきの鰻屋で、白樺の人達から送別會をされた。そして翌日彼達は東京を立つた。

そして雨のどしやぶりのなかで、濱松で演說會をした。濱松の會員の人達に逢つて、いゝ人達なのをよろこんだ。松本長十郎と、竹村啓介君とは千駄ケ谷に住んでゐる時からの知りあひだつた。今彼の書齋に骨の一部が祭られてゐる山本貞次郎君ともその時始めてあつた。

濱松をすませて、彼達は福井の妻の實家にゆき、其處へ喜久子をあづけて北陸線で信州へ廻つて、長野と松本で饒舌つた。信州で彼達は活氣のある人々に逢へてうれしかつた。それから中村亮平君と一緒になつて、京都へ向つた、名古屋で木村莊太君や、松本長十郎君と一緒になつて京都に出て、其處で又演說會をした。

京都の會員はその時まだ村田君他一人で、若かつた。演說會場で、大阪から大阪の支部をやつてゐる後藤君と茶谷君が來てくれた。後藤君には我孫子で一度あつて厚意をもつてゐたが、茶谷君にはその時始めてあつて、たのもしく思つた。

京都の演說會も無事にすんで、大阪でやつた。之も首尾よくすんで、神戸でやつた。この時、松本の演說を冷やかした人があつた。それと同時にそれを又怒る人があつて、一時ちよつとやかましかつた。松本は怒つてやめた、今度、後藤

が、又亢奮して出て矢張り怒つてやめた。中村、木村は無事にやつて、又松本が出たら野次られた。其處で彼が出かけて演壇のうしろの腰かけにすわつた。そしてまだ野次る人があつたので、彼は松本にやめた方がいゝだらうと云つて自分が出た。

彼は彌次る人よりも、彌次る人を怒つた人達の愛を強く感じてゐた。彼は、會場の何處からか彼に愛が送られてゐることを感じた。

彼の演說を彌次つたら承知しないと云ふ勢が何處かに感じられて、彌次つた人達は無言でひきあげていつた。

二一三

彼は村の會員の人達に逢ふのをよろこんだ。殊に京都大阪の會員は殆んど全部神戸に來てくれた。そして神戸の近所に木下利玄夫婦がその時分來てゐた。それ等の人が皆、聞きに來てゐた。その他、何處かに彼の仕事を見守るものを感じたのだ。彼は自分の息を全部出し切つたやうな疲れた氣持で演壇を下りた。

彼の妻は、いつも彼の演說をきくとくるしくなるといつていやがつた。

彼の演說は實に出來、不出來がひどい、草稿をつくつて饒舌ると彼は熱が何處かへ行つてしまふやうな氣がする。だから彼は草稿をつくらずに饒舌る、だから出來損なう時は慘めである。

彼はその時の演說では東京と大阪と神戸が比較的に出來がよかつた。濱松では出來そこなつて氣がめいつた。神戸で妻と別れる時は淋しかつた。それから會員の人と別れるのもいやだつたが、しかし彼をひきつけるものは強かつた。

日向、早く日向の土をふみたい、それが彼及び、一緒に行つた木村、中村の強い願ひだつた。

少しでも日向に近づく、そのことはよろこびだつた。

二一四

彼達は廣島で一寸おりて其處で呉から來た會員福岡君に逢ひ、一緒に下松へ行つて、其處で會員の福永の家をたづねた。福永は今、川島、上田と一緒に村の入村掛りの一人になつてゐる。

其處に一時間程ゐて次ぎの列車で下關へ向つた。福岡君と福永君にわかれて。

下關から九州にわたつた時を、日向に近づく故にうれしかつた。それから福岡で演說會をした。こゝで二三四人の新しい會員を得た。

そして福岡で一泊した。その時、一人の人が新聞で知つて彼の處へ訪ねて來た。その人は四國の人で、自分の土地を賣つて千何百圓かの金をつくつて日向へ行つて方々いゝ所をさがして見たが、思ふやうにいゝ土質の所がなく、それから又方々さがして、五島にいゝ所を見つけたが、その時分には金がなくつて土地を買ふことが出來なくなつた。それで彼の村の小作人にしてくれと云ふのだつた。

村のことは何にもわかつてゐないので村では小作人はつかはないのですと云つた時、不平さうな顏して歸つて行つた。しかし彼にはこの九州へ入つた最初の晩、土地をきめる決心のこづいために、土地を見つけた時には、もう土地が買へなかつた話をきいたことを、何かの警めとして受けとつた。自分達は、あまり土地の選り好みせず、得た土地をよく生かさうとする方がいゝと云ふ決心をした。

いひおこしたが、彼は千圓の寄附の他には千四五百圓の金きりもつてゐなかつた。兄が千圓あまりくれた。兄は彼の仕事に反對はしなかつた。しかし齢とつた母のために日がへりの出來る所に村をたてることをのぞんだ。しかし彼は斷

つた。金がないからこは云はなかつた。金がほしさうな話をするのはいやだつたから。それに日向にきめたよろこびは他の土地こ今更にかへる氣もなかつたから。母のことは氣にはなつた。彼の兄は外交官で、いつ外國にやらされるか、わからなかつたから。しかし彼は自分の決心をかへる氣にはならなかつた。このことがよかつたか、わるかつたか、それはまだわからない。今にわかる時があるであらう。

二一五

福岡から別府の方へ廻つた。其處に彼等に逢ひたいこ云ふ會員がゐたのこ、佐伯に彼等こ一緒に土地さがしの仲間に入りたいこ云ふ、加藤勘助君が居たから。若松の會員の三好君が佐伯まで一緒にゆくこついて來た。

別府でおりたが會員の人は八幡へ行つたあこだつた。それで豫定通りすぐつぎの汽車で佐伯の方へ行つた。大分で中學校の畫の先生をしてゐる山下君が友達の農園で出來た梨だこ云つて梨をくれた、それが馬鹿に甘かつた。こんな甘い梨は始めてだこ思つた。村にもこんな梨をつくりたいこ彼は食べながら思つた。あこで村で梨の苗を買ふことになつた時たづねて見たら「二十世紀」だつたこ思ふ。

加藤君は途中の驛まで迎ひに來てくれた。一緒に話しながら佐伯に行つて加藤君の處へ行つた。加藤君はその時分土地さがしを一緒にしようこ云ふ時分だから目が見えた。黑い目がねはかけてゐたが。その後一年程へてすつかり見えなくなり今、村に居る。信仰第一で、村の一本の柱である、會計の顧問をしてゐる。

加藤君の所でつかれ切つてねてゐた時、一時頃だつたらう。宇佐から會員の小學校の先生の光門君が彼のあこをおつて來てくれたが、彼は眠いので精も根もなかつた、十分位何か話して、又眠て翌日起きたらもう一番で光門君は歸つたあこだつた。すまぬことをしたこ思つた。そしてそれだけなほ印象が强かつた。この人はその後村に遊びに來てくれた、

その時もう肺がわるかつたのに、皆がとめてもきかずに働いて歸つて一年程たつて死んだ。知つてゐる人は皆惜しがつた。實にいゝ人だつた。

佐伯から汽船で土々呂に渡つた。彼は舟によわいので三等の下の段にねてゐた。誰かゞまちがへて、彼をよびに來て船員の飯を食ひに四人で出かけて怒られたと云ふ失策なぞもあつて、土々呂についた。はしけがゆれて彼は少しよひかけた。しかし愈々日向の地がふめるのだと思つた。

土々呂に上ると其處に白樺をもつて立つてゐる人があつた。彼はそれを見ると米良君だなと思つた。米良君に就ては彼は今は厚意許りは持つてゐないが、その時はうれしかつた。そしてすぐ延岡に五人づれで出かけた。雨が降つてゐた。

その晩、米良君から小林方面の話をきいてすぐのり氣になつて、他を見ずにいきなり小林の方へゆくことにした。今汽車があるがその時分は汽車はなかつた。翌日、彼達は一臺切りない自動車にのつて福島驛（今はもうないが）にゆき、其處から小林まで汽車にのるつもりだつた。所が晝頃、自動車を待ちあはせてゐる所で晝飯を食ひ終ると同時に、自動車が故障が出來て駄目だと云ふことがわかた。

それから馬車に乘らうとしたが、一度自動車に乘らうとしたものは馬車にはのせないと云ふ馬車屋の不文律に出くわして歩くより仕方がなかつた。雨はざあ〳〵降つてくる。荷はかつがなければならない、人力を一臺やとはうとしたがそれも駄目で、荷をもつて皆が歩き出した。彼の荷は一番輕かつた。木村は大黑さんのやうな大きな袋を背負つてよちよち歩いてゐた。中々ミゼラブルである。しかし意氣だけは盛んであつた。日向へ來てすぐ自分達が、荷をもつて大雨のなかを歩かされるのは何かの試練のやうな氣もした。そして日向の仲夫達の金を取ることよりも樂をすることを考へ

てゐることに一方興味も感じた。

日向の俥夫のことはり方は明日佐伯の方へゆかなければならないから、今日は休まなければならない。雨がひどくつて遠いからいやだと云ふのにきまつてゐた。それから三里位雨のなかを歩いて、やつと一人の俥夫を米良君が無理にたのんで承知させることに成功した。其處で、荷物の御景物に彼がのることになつた。雨はます〱ひどく日がくれてくる。

道は馬車や自動車のわだちがある上にぬかるみがひどいので、俥は何度も倒れかける。一度は荷物がころげおちた。俥夫はもう先にゆけません、どうかおりて下さいと云ふ。

しかし知らない眞暗な所へ澤山の荷物と一緒におきざりにされては大へんだから、たのんで先へ行つてもらふ。その內に道も少しよくなり光りも見えてくる。その內、他の人達も追ひついて來た。

美々津へやつとついたので、一番いゝ宿屋へ行つたら斷られて、次ぎの所でやつととめてもらつて、ほつと安心した。皆で苦心談をやつた。翌日は無事に馬車にのせてもらつて安心した。今迄街道筋は美しく耕やかされてゐて、自分達が求めてゐるやうな原野は一つも目に入らなかつたが、高鍋附近に軍馬補充地の廣い原野を見た時はうれしかつた。

それから福島につき小林まで汽車にのつた。汽車にのつて少しして自分は馬車に自分の風呂敷包みを忘れたのを思ひ出した。

別に大事なものも入つてゐなかつた。小林の驛につくと、出迎へに四五人が來てゐた。どうして知つたのか、今でもはつ切りしたことは知らない。そして宿屋に泊つたら、米良君から蚊が一疋も居ないと聞いた小林にも、蚊が中々ゐることを發見した。翌日役場へ行つて賣つてもらへさうな土地を調べてもらひ、案内してもらふことにした。

その後三四日方々歩きまはつた。隨分山のなかにも入つたが、必ず水のある所に田があり、その田に比例して人間が住んでゐた。

賣りたいと云ふ所は大概買ひたい氣の出ない所だつた。水がわるい所が一番多かつた。

夢は現實にあつてはこはれるもので、又どんな家でも、彼は借家さがしでよく知つてゐたが、住む人がきまるまではおちつきのわるいものである。住む人がきまるとその人らしい家になる。土地もさう云ふものだらうと思つた。しかし何しろ金もないし、水のわるい處は困ると思つた。土地の値も米良君の手紙で知らしてもらつたのより二倍以上所によつては四倍以上たかかつた。それは新聞でかきたてたので彼等を金持のやうに思つたからでもあつたらう。ともかく自分達は毎日、今日こそはと思つて出かけるが、夕方は疲れもし、がつかりもして歸つて來た。殊に、村長さんや小林區の役人にあふと氣が滅入つた。人間らしい人間と話してゐるやうな氣がせず、何か用心してゐるかけひき許りしてゐる人間の根性と逢つてゐるやうで、こつちまで相手を利用したがつてゐることがはつ切りして情けない氣がした。

彼は自分が賤しい人間のやうな氣がして來た。之も村のためと思はふとするが、自分の尊敬出來ない人を利用する事になるのは、氣持よくなかつた。それにこゝならと云ふ所が見つからないやうな氣さへして來た。

何處かに自分達に見出されるのを待つてゐる土地があるやうに思つたり、そんなことを思ふ愚かさから罰をうけさうな氣もした。

一週間位近所を歩きまはつて、やつと一ヶ所候補地を見出したが、それも非常に氣に入つたわけではなかつた。ただその土地に一人彼の村が自分の所に出來ることを望んでくれた有力家があつた。そして彼達は始めて同情者を得たやうな氣がしてうれしかつた。その人は役人の人のやうに、たゞおつとめで土地を案内するのではなく、どうかして彼等に

氣に入る土地があるといゝと思つて案内してくれるだけでも氣持がよかつた。彼等は何處でも敬遠主義をとられてゐたがその人だけは彼等を自分達の土地にすませ、そして、協力して、その村に水路をつくりたがつてゐた。このことは彼をよろこばした。彼は新しき村が出來たことが、その土地の人のよろこびであることを望んでゐたから。しかしその人の骨折りで、彼等に氣に入つた一ヶ處も、其所の村長さんがわざ／＼小林の彼の所に來て、其處を買はふとしないやうにたのみに來た。それは實は、その土地はその村の放牧地なので、その村はよき馬を出すのを唯一の誇りにしてゐた。水がないので田はつくれず、人手がたりないので畑は荒れ放だい荒れてゐた。しかし馬だけはいゝ馬を出して、その年もその村の馬が一等賞をとつたとか云ふ話だつた。そして村に二つの意見があつて、放牧地をうるとなると、賣つた方がいゝ賣つてはいけないと云ふ議論が行はれて、村の平和を害することになるから、放牧地を買ひたいと云はないでくれと云ふのだつた。

彼達は村の爭ひのもとになるのをよろこばなかつたから、その土地は斷念した。

二一六

彼達は土地さがしをして、疲れて、がつかりして宿に歸る時、彼等を慰め、勇氣づけたのは方々の兄弟からくる手紙であつた。それには彼は感謝した。そしてなほ早くいゝ土地を見つけて皆によろこんでもらひたいと思つた。

その時、一つの手紙が彼を淋しくさせた。

それは我孫子にのこして來たディオの死の報告であつた。彼はディオに同情してかう云ふ詩をかいた。

「ディオ

お前は死んだのか

さぞ俺達に逢ひたかつたらう
今にきつと歸つて來て下さる
さう思つてゐたらう。
お前の淋しさは
俺にはよくわかつてゐた。
一度お前にあつて
お前を本當によろこばしたいと
思つてゐた。
お前には俺達のゐなくなつた理由がわからないのだから。
毎日、毎日、
毎時、毎時、
毎秒、毎秒、
俺達の歸つてくるのを待つてゐたらう。
そして俺達の顏を見て
安心したかつたらう、
心からよろこびたかつたらう、
尻尾をふれるだけふりたかつたらう、

それなのに俺達は歸つて來ない、
朝が來ても晝が來ても
夕が來ても夜が來ても
くる人があつても
それは俺達ではない。
お前はさぞ淋しかつたらう
ディオ、お前の氣持はよくわかる
ディオ、許してくれ
俺はお前を喜ばしたかつた
今でも俺はまだお前をよろこばしたい。
ディオ、死んだディオ
俺達の歸りを待ちつかれた
死んだディオ
幸福であれ
幸福であれ
死んでからも
死んでからも

それを俺達は望んでゐる

デイオ!」

そして彼はデイオが雨の降つてゐるなかにすてゝれてゐて、彼のあとをついて來て川におちた時のこと、それをひろつて歸つて來た時のことから、ゐなくなつて妻と喜久子と三人で心配した時のことなどきれ〴〵に思ひ出した。

二一七

當時、雨が降つても毎日土地捜しに出かけた、六里位から十里以上歩いた。彼は自分の足の丈夫になつたことを感じた。その時分はいやに倹約した。十里歩いた時なぞは歸り道に食ひものゝことゝ許り考へてゐた。饅頭が食ひたかつたが、お互にそんなことを云ふのを耻ぢた。

その内に用があつて加藤君は歸ることになり、中村君も學校がはじまるので、小學校の先生なので、信州へ歸ることになつた。そのかはり守山と、後藤がやつて來た。

その時茶臼原の孤兒院で彼等のくるのを待つてゐることを聞いた。そしてその近處には原野が多いと聞いた。それで小林方面を切りあげて妻方面を捜すことにした。

小林をたゝうとした時、彼は母から手紙をうけとつた。いそいで見ると目が段々わるくなつたとかいてあつた。それを見たら彼は今度母に逢ふ時に母が盲目になつてゐることを思つた。すると急に悲しくなつて、皆に氣まりがわるい程しやくり泣いてしまつた。いくら耐へようと思つても耐えられなかつた。

小林の宿屋をたつ時、彼が少し持つて來た金ではたりなかつた。二千圓は東京へあづけてあつた。後藤が運よく二百圓程貯金を持つてゐたので、それで樂に拂へた。小林から宮崎まで汽車にのり、其處で小林にゐた時手紙をよこした松

本(廣吉)に逢ひに寫眞屋に行つた。松本は不意だつたので、なほよろこんでくれた。

この松本は川島と一緒に今では村の最も古い住人である。

二一八

宮崎に一晩とまつて妻に行つた。其處で驛長さんや、杉田さんに迎へられた。所が、あはてものゝ彼はこゝで又切符が中々見つからなくつて閉口した。驛長さんが氣の毒がつて見つかつた時とゞけて下さればよろしいと云はれたので助かつた。切符はそれから二日あと彼の帽子のなかゝら出て來た。

前の荷物も、中に彼へあてゝの手紙が入つてゐたので彼の手許へ送りとゞけられた。新聞記者がその荷物で彼の小林へ行つたことを知つたのだつた。延岡から新聞記者は彼達の姿を見失なつてさがしてゐた時、彼の忘れた荷物から彼のあとを見出したのだつた。

新聞にかきたてられたので、彼は土地捜しにはいろ〱便利を得た。同時に共產主義だと云ふので敬遠主義もとられたが。

杉田さんから彼は孤兒院の話を聞き、其處に松本と云ふ立派な農學士の人や、津江さんと云ふ立派な人のゐることを知つた。

しかしともかくその翌日、二組に別れて土地捜しに出た。彼は守山と一緒だつた。瓊瓊杵尊の御陵參考地の方へ出かけた。彼はそのことを「土地」と云ふ小說の內にかうかいてゐる。

「自分達は參考地を通り越して偶然ある崖の上に出た。そして不意に眼界の開けたのにおどろいた。しかもその景色はこの世のものとは思へなかつた。谷間々々に霞がこめてゐた。其處に無數の山が夢の島のやうに浮いてゐた。その山が

皆鋭い輪廓をしてゐて高さは殆んど同じだつた。それはいかにも天孫が降臨しさうに思へた。さう云ふ傳說でも生み出したい處に思へた。天人が舞ひのぼつたり、天下つたりしさうな處に思へた。之でこそ日向だ。始めて日向にぶつかつたと云ふ氣がした。之は霞の具合が實によかつたせいであらう。自分達は狂喜した。運がいゝぞと思つた。小林方面は何處も新開地らしく、何となくおちつきがわるかつた。こゝに來て日向は矢張り日向だと思つた。この美は他にはない。小林方面の美しさは北信州の高原に似て稍々劣つてゐる。しかしこの美しさ、天孫の降臨しさうな美しさは他にはない」

（原文を少しおぎなつた處もある）

彼達はこの景色を見てからすつかり元氣になつた。其處には買へさうな土地はなかつたが、しかし運が向いて來たこと、自分達を守護したゐるものゝ祝福を感じた。それこそ彼がのぞんでゐるものであつた。

この景色はその後彼は志賀を案內して見せがてらに自分も見に行つたが、この時得たおどろきを二度感じることは出來なかつた。その時の霞の具合のよさは千載の一遇と云ひたい處である。

彼と守山はすつかり元氣に歸つて來た。新田原（にゅうたばる）の方面へ出かけた木村と後藤はまもなくがつかりして歸つて來た。そして二人の話を聞いて元氣になつた。

二一九

翌日、四人は杉田さんに案內されて茶臼原の孤兒院に行つた。途中の一之瀨川の渡しを渡る時水の清いのに感心した。彼は清い流れを愛してゐた。そしてその流れに小さい魚のおよいでゐるのを見た。この川は彼をよろこばした。孤兒院へゆく道は高臺で、兩側に軍馬補充地で見渡す限り原野なのも彼達に希望を與へた。

孤兒院へ行つて石井未亡人にお逢ひし、又松本氏にもお逢ひし、又小野田氏にもお逢ひした。皆いゝ方で、親切にも

てなして戴いたので彼等は日向に來て役人の人達から得られない溫かさを得た。そして二十何年の苦心によつて、築きあげられたいろ〳〵の苦心談を未亡人や小野田氏から伺ひ、そして石井氏の墓にお參りした。

その土地の廣いのと、多くの人が住んでゐるのに感心し、殊に小學校や、農學校があるのを羨やましく思つた。その建物の至つて簡單なのもうれしかつた。其處で晝飯をよばれて出かけようとした時、小野田氏から、高鍋のある人が彼のくわだてに厚意を持つて、自分の持つてゐる土地を提供してもいゝと云ふ話を聞いた。彼達は半信半疑ではあつたが蟲のいゝ考がつい出て來てうれしかつた。そして出かけようとした時、津江さんに案內して戴くといゝと云ふことになつて、孤兒の人が津江さんをさがしに出かけたが、津江さんはお歸りになつたらしいと云つて歸つて來た。彼は內心がつかりした。今日は萬事いゝぞと思つてゐた處に、不意に幸運の鼻端を折られた氣がした。しかしやむを得ない、こんなことがあつても、彼は希望を失なはない男である。其處へ不意に津江さんが一人でやつて來た。彼達はよろこばないわけにはゆかなかつた。それから津江さんに案內して戴いて、川原と云ふ所の、提供してもいゝと云ふ土地を見に行つた。

途中近か道を通つて、隨分細い道を通つて、一里あまり行つて、又川へ出た。その川も美しかつた。川の名をきくと小丸川であつた。其處に一艘の小さい渡し舟があり、はり金が渡してあつた。津江ささが聲をかけると十一二の子供が裸で、十月半だつたが、出て來た。そしてこちよ〳〵と舟にのつて、皆がのるとはり金を引ぱつて舟を向ふへわたした。それが猿のやうな感じを與へた。それで皆でその渡しといつのまにか呼ぶことになつてゐた。

それから川に從つてのぼつた。川の水の淸さ、美しさ、兩岸が青々した松の內に紅葉がまぢりそれが水を染めてゐた。彼達はそれを見ると元氣になつた。

求めてゐる日向にとう〳〵入つたと云ふ氣がした。

都會人の彼等には半開地は何となく親しめなかつた。そしてとう〳〵文明と緣の切れたやうな美に心を惹かれた。このことはいゝことだつたか、どうか知らない。だが皆、よろこび、勇み、希望が燃えた。

提供すると云ふ土地は山だつたが、大きな立派な赤松が處々にはえ、そして相當に大きい一軒の家があり、淸水がわいてゐる、そして畑に出來さうな所は多く、そして三十町歩位ゐの廣さがあつた。殊に見はらしは大きかつた。下の方に小丸川の流れがあつて、その向ふに高地があつたが、それを越えて遠くの山が見え、一方は海さへ見えた。

四人とも大よろこびで木へ登つて見たり、腰以上も深い路のない所に飛び込んだりした。しかしよろこびの內に、何んだか氣が滅入つて來た。小野田君の話では津江さんがよく知つてゐると云つたが、津江さんは提供については何にも云はなかつた。そして買ふのだつたら、彼の金では買へないことはわかつてゐた。ともかく皆、元氣に其處を出て、日がくれる時分、高城の深水さん(桑一)のやつてゐた宿屋に泊つた。その宿屋は一家だけでやつてゐて、女中は一人もゐなかつた。それが非常に氣持がよかつた。翌朝起きて見ると、其處も小丸川にのぞんだ處で、橋がかゝつてゐた。その景色が平和で美しかつた。川へうがひをつかひにゆくと、小魚の他に鮎がいそがしさうに泳いでゐるのが見えた。その水の美しさは彼等をよろこばし、其處でうがひをつかふ氣持は實によかつた。

津江さんは又朝早くさそひに來て下さつた。そして先づ十文字原と云ふ方を案內して下さつた。彼は汽車のなかで偶然其處が賣れた話をしてゐるのを聞いたので、津江さんにその話をしたら、津江さんはそんなことはないでせうと云つた。其處は廣々したいゝ所で、水の具合はよくないかも知れないが、村などつくるには隨分いゝらしかつた。しかし高すぎて、とても彼等の手にはあはないことはわかつてゐた。津江さんは、其處で知つてゐる人から賣れたことを氣の毒

さうにさう云はれたが、彼は内心安心した。いくら我孫子の家を賣つても買へないことはわかつてゐたから、何萬圓とかで賣れたのだが、この農場の持主はその後も何度もかはつたと聞いた。今も失敗したまゝになつてゐる。

津江さんは其處で少し考へてから、彼に少しせまい所ですが、川に三方かこまれた、昔城のあつたと云ふ土地がありますが、見ませんかと云はれた。彼はせまければ大丈夫買へると思つた。彼は益々日向の土地が思つたよりずつと高いのでおごろいてゐた。そしてその時分、土地はまだ高くなり切つてはゐなかつたが、その氣はいは見せてゐた。

それでともかく其處を案内してもらうことにした。山にそつて道が何度も何度もまがるのに、中々目的地につかない。段々足はつかれてくる。「隨分山のなかですね、猪はゐませんか」

「ゐます、猪狩りの名所です」

そんなことも彼達をよろこばした。そしてつかれた足で、まだか、まだかと思ひながら、人家のない道のわるい道を歩く。今は荷馬車も通るが、その時分は道は雨でこはれたまゝになつてゐた。小さい橋におちて眞中に一本丸太が殘つてゐる所なぞあつた。

何度もまだかまだかと思ひながら、いつも變らないやうな山のわきを通つて、とう〳〵人家が二三軒見える所に出、それから又可なり行つて人家が二三軒ある所を通り、それから又八九町行つて凡そひどい人家の二軒ならんでゐる所を通つて、三四町來てやつと、下り口になつた。その下り口も、何度もまがつて、もう下が見えさうだと思つても中々見えない。やつと、眼界が開けて、其處に二三十軒家が見える。それが石河内だ。それから村の方も見えるが、それはあとの話である。彼等は、やがて近道の方へ折れて五六間行つた時、彼等は歡聲をあげだ。彼等は其處に川に三方かこまれた土地を見出した。

「あの土地です。」津江さんは云ふ。

「あれですか」

四人、ぶつかる所にぶつかつたやうな氣がした。

一二〇

其處をおり切つて石河内へ行き、橋本さんの所で飯を食ひ、そして橋本さんに案内してもらひ、川をわたつて城と云はれてゐる處にわたつた。この川の水の美しさは特別だつた。それは深さからくる。二三丈もありさうに思つた。水はすみ切つてゐるのだが底は見えなかつた。その土地は何處も氣に入つた。水のわく所も案内してもらつた。

此處は畑になつゐる處もあつたが、彼等が買へば、又他に畑をつくるやうに云つてゐた。そして肥料をやらずにつくつてゐると云つてゐた。荒れた所は、胸位ゐまでの草がはえ、又さゝが生えてゐた

「一段どの位ゐで買へるでせう」と云つた時、橋本さんは、「三十圓位ゐなら大丈夫でせう」と云つた。土地の廣さは民有地は、三町はないと云つた。三三が九、九百圓で買へるなら少し高くなつても大丈夫と思つた。

昨日の所が駄目でもこゝなら買へる。

四人は腹の底からうれしくなつた。歸り、うれしかつたので、木村は川へとび込んで泳いだ。皆もすつかり元氣になつた。

一二一

しかし買ふことになつた時、段七十圓でなければ賣れないと云はれた。川原の土地を所有してゐる人は東京にゐたので、木村莊五君に行つて聞いてもらつたら、五萬圓ならお賣りしてもいゝと云ふやうな返事だつたのでその方は勿論、

問題にならなかつた。城の方も七十圓では話がちがひすぎた。彼達は又他の土地をさがし出した。しかし城に優る所は見出せなかつた。

東京に殘つてゐる連中は待ち兼ねて、會社をやめて今か今かと土地のきまる報告を待つてゐた。彼達は始め、開墾をやるつもりだつた。それで第一種會員の内で一番勞働に耐へる身體のいゝ人を撰んで先發隊と稱してゐた。

その人達は待ち切れなかつた。

その前に、彼の妻と、キク子がやつて來た。一緒に木村の細君になることにきまつた元さんが來た。彼達は小林まで迎へに行つた。まもなく先發隊の辻君、荻原などが來た。皆深水に泊つてゐたが、室もなし、不經濟でもあるので一軒家をかりた。彼夫婦とキク子は深水にとまつて　あと木村夫婦と他の四人は借りた家の二間に住んでゐた。皆、高城の町を歩きまはつたり、二組にわかれて土地さがしに出かけたりした。しかし矢張り城より外に氣に入つた所はなかつた。津江さんと深水さんが間にたつたが、七十圓から讓歩しなかつた。彼は五十圓にまけたら、少し高いらしいが、買はうと思つた。しかしいつ折れてくるかわからなかつた。そして十人の人がたゞ食つてゐては、元からない金が益々なくなつて、福岡で逢つた人の二の舞ひをすることになりさうだつた。其處で彼は後藤と相談して、今迄見のこした、南那珂郡の方を見て見ることにした。それで二人は急に又土地さがしに出かけた。

一二二

それには南那珂郡の市木村の村長さんから彼あてに手紙が來たのがあづかつて力があつた。何處の村長さんでも彼達を敬遠したが、市木村の村長さんだけが、彼にわざ〳〵手紙をよこして、自分達の處に面白い島のあることを知らせて來た。その島は青島にまけずに熱帶植物が生じ、猿が其處の守護神社の關係で澤山ゐるとかいて來た。

彼はそれでともかく一度市木村の村長さんに逢つて見ようと思つた。その時分丁度、スペイン風邪の流行してゐる最中だつた。

彼達は内海から舟で、油津へ行つた。その時、同船してゐた中年の紳士から話かけられた。その人によつて彼は大束村の方の有望なこと、飫肥の郡長をよく知つてるので、郡長に逢ふことをすゝめられた。

細島に汽船がついた時、彼も後藤も船によつて氣持がわるかつた。町を歩いてゐる内にやつとなほつた。それから飫肥まで汽車にのつた。その小さい珍らしく粗末な汽車で彼はこんな詩をかいた。

「人類よ、人類よ、我等に土地を與へよ。
我等は汝の意志を生かすもの
我等は汝によつて生き
汝は我等によつてのみ今の世に生きるを知れ」

飫肥で晝飯を食つて、郡長に逢ひに行つた。土地の係りの人は親切に話してくれ、大束の有望なことをくはしく話してくれた。しかし郡長と逢つた時、彼は氣が滅入つて何にも話す氣になれなかつた。處が其處に市木村の村長が來てゐることを聞いた。彼はすつかりよろこんだ。

その一時間程あとには彼達は市木の村長と同じ馬車へのつて、市木村へさして進んでゐた。向ふから一人の人が馬をとばせて來た。市木村の村長と會釋して話をした。彼はそれによつて、その人がこの土地の村長だと云ふことを知つた。二人は流行性感冒で死んだ人の話をあれからこれと話してゐた。まるでばた／＼人々がやられてゐるやうな感じをその話は與へた。「誰々はどうです。」「あれは死にました」「誰々さんは、」「あれもなくなりました。」そんな調子だつた。話が

おはると、又馬車は南へ南へと走つた。家の前でお經をあげてゐるやうな聲が聞える所があつた。あれは風邪の神を追ぱらうためですと村長さんは云つた。又病氣の入らないやうにおまぢなひのかいた紙が大がいの家にはつてあつた。彼は田舍だな――と思つた。村長さんは彼より若くつて、早稻田を出た人で、文學的趣味をいく分か持つてゐる人らしかつた。馬車は時々美しい海岸に沿つて走つた。日がくれて餘程して、市木村についた。案内された宿屋の粗末さで、餘程の寒村に來た氣がした。石河内でももう少しましな宿屋がある。

彼等は翌日もいろ〳〵案内された。村長さんはたしかに彼等に來てほしさうな樣子が見えた。そして官有地の拂ひさげに骨折つてくれさうな樣子だつた。官有地の原野だつたら段十圓位ゐで買へさうな話だつた。其處は暖かくつて砂糖きびなぞは實によく出來てゐた。又蜜柑なぞをやるには十分適してゐるやうに見えた。後藤は隨分乘氣に見えた。彼は前から後藤には厚意をもつてゐたが、この土地搜しの時の、熱心さと、その注意の周密なのに彼は感心した。二人の足はよく鍛へられてゐた。そしてかや許りの大きな海岸の山や、果樹園なぞを見て廻つた。その晩、村長さんが來ると云ふので、彼等はいろ〳〵聞いたり話したりするのをたのしみにして待つてゐた。しかしいくら待つても來なかつた。彼達はいろ〳〵話したり聞いたりしたいことがあるだけになほいら〳〵した。とう〳〵來なかつた。翌朝も彼等が立つのがわかつてゐるのに來なかつた。彼等の方から村役場へあいさつに出かけたら、義理一ぺんのあいさつだけで、昨日の午後までの親しさは何處にも見えなかつた。

警察の注意があつたのではないかと彼達は話しあつた。前の日の午後警官らしい男が、私服で市木村の方へくるのに彼等は出逢つたから。

彼等はもう市木村に住む氣にはなれなかつた。そして唯一の希望を大東村に向けた。そして道案内の人に案内しても

らつて、細い山道をぬけて何里も歩いた。ある處は道が枝におほはれ、或處は橋なき小川を歩いて渡つた。大東村の見える山の上に出た時、彼等は萬事よくゆくことを心に祈らないわけにゆかなかつた。大東村は話で想像したよりも、なほ彼等に氣に入つた。

彼等は先づ福島の宿屋に休んで荷をあづけ、飯をすませ、それから大東村に行つた。荒地が多く、開墾の餘地がいくらでもあるやうに見えた。南の方二里程で有明灣が見え、それまでずつと平原つゞきで、北の方に山がかさなつてゐる明るい感じも氣に入つた。彼等は元氣になつた。方々歩きまはつて大東村の役場に村長さんに逢ひに行つた。

村長さんに病氣で休んでゐたので家を聞いて出かけた。質素な家で老母と家にゐて、彼達が行つたらすぐ上げてくれた。彼は村長んの顏を見て、信實な感じを受けた。彼は來意をつげた。そして土地の世話をしてほしいやうに云つた。始め村長さんは無愛想であつたが、彼等が市木村からその日歩いて來たことを聞くと、急に態度がかはつて、厚意を持ち出したやうに見えた。そして彼達が自分で來て働くのだと云つた時、村長さんは彼達の熱心に動かされて、男らしい一諾を與へた。

「よろしい、承諾しました」

彼達は思はず手をついて丁寧にお辭儀した。

「どうぞよろしく願ひます」

彼達はすつかり元氣になつてその家を出た。

そして二人でいろ〳〵希望のある話をした。後藤は石河内よりも、こゝの方が氣に入り、そして蜜柑や、オリーブを植ゑたがつてゐた。巾廣い平な道を道を通つて夕方は元氣よく宿に歸つた。

二二三

その夜、彼は興奮して眠れなかつた。例によつて彼の考は四方八方に走つた。石河内の土地がまけなかつたら、全部でこゝに來やう。石河内の土地をまけたら石河内と、こゝと二つに村をつくらう。その時分既に村には二つの空氣が出來かけてゐた。それは秋原が來たためであつた。秋原は腕力自慢で溫和しいものをおどすことがすきだつた。それで溫和しい組を大束の方へよこして、後藤に萬事任せればいゝなどと考へた。この時、へんに戰爭のことが氣になつた。彼はこの時、「或る青年の夢」に一つの場面をおこしたことに氣がついた。それは自分達の苦心した農園なり、寺院なりを破壞されることから起る悲劇である。彼は石河内の方さへ得ておけば、こゝにゐる人達は石河内に逃げ込めばいゝ、そんなことまで考へた。又もう一つ、この土地には一人大地主がゐて、その人の勢力が强すぎはしないかを恐れた。大がいいゝ土地はその人の持つてゐる所だつた。

石河内にはそんな心配ない。しかし彼は考へるだけ考へてしまうと、どつちでもいゝ、なるやうになれ、其處で俺達の力を生かして見せると思つた。

翌朝、彼は福島の郵便局の前を馬車で通つた時、馬車をとめてもらつて、郵便局によつた。其處に房子からの電報が來てゐて「五〇エンニヤケタ」とかいてあつた。

彼等は大よろこびした。馬車は興奮してゐる彼等をのせて、志布志の方へと走つてゆく。有明灣は實に美しかつた。矢張り海は大きく美しいと思つた。水は實に淸く、その靑色は美しかつた。彼はこゝにも、村の家が一軒位ゐあつてもいゝなと思つた。そして彼は海の利用方について空想を走らしてゐた。

二二四

彼等は長い間馬車にゆられてすつかり閉口して夕方都の城についた。そして其處で小さい店ですしを食つて、その夜の終列車で宮崎に行つた。そして宮崎寫眞屋にゐた松本(廣吉)をたづねて、ねてゐるのを起して、大いに喜びをわかつた。その時、松本は明日高城へ行かうと思つてゐたのですと云つた。それで彼は遊びにくるのだと思つて話してゐたら、それからずつと村に入るのだと云つた。彼は一寸びつくりしたが、それも面白いと思つた。松本廣吉の話だと、その前僕が逢つた時、この十一月の十四日はロダンの誕生日だから、その日村の土地はきまるのだと云つたさうだ。それで、それを信じ切つた松本は、明日から彼等の仲間に入るつもりでゐた。その時松本は十八九であつた。

翌朝彼等三人は妻まで汽車にのり、それから高城に行つた。川島夫婦と横井が來てゐた。彼等はよろこんだ。皆に大東村の話をしたら、皆よろこんでゐた。

石河内の話は、また反對者なぞが出來て、五十圓にまけた話はお流れになつたゐた。それで彼は腹を立てた。それなら皆で大東に行くだけだと腹をきめた。

彼はこの時、ふと氣がついたことがあつた。それは郵便局の人が、彼等がいかに石河内を買ひたがつてゐるかと云ふことを知つて、そのことを石河内の人に話してゐるのではないかと思つた。それはありさうなことに思へた。彼等は始終ハガキでいろ／＼のことを會員にかいてやつてゐた。又その度に東京や大阪の會員から返事が來て、土地のことをよろこんだり心配したりして來た。

彼は之を逆につかつてやらうと思つた。嘘ではなかつたが、彼はすぐ、三四人の會員にハガキで石河内の人達が負けない馬鹿に腹を立てたので大東村に皆でゆくことにきめるつもりだと書いて出した。そして木村と横井に大東村へ行つてもらうことにし、彼は津江さんの處へ行つて、明日十四日の内に返事がなかたつら、大東村の方に行くつもりです。

そして斷つていたゞいても反つてその方が都合がいゝ位ゐなのですから、はつ切りした返事を聞いて來て下さいと云つた。翌日、津江さんと深水さんが出かけた。そして夕方、いよ〳〵承知したと云ふ返事があつた。皆のよろこびは大したものだつた。そして東京の本部や大阪の支部や大東村に行つた木村にすぐ電報を打つた。

東京の支部にゐたある會員はそれをうけとつてよろこんでとび上つて鴨居に頭をぶつつけた。

翌日は皆、辻君は病氣でだめだつたが、それからキク子と川島の細君は子供があるので駄目だつたがあとは全部、新しき村の土地を見に行つた。皆、今更に、その場所や、川の美しさをたゝへた。

二日たつて大東村へ行つた二人は歸つて來た、土地の勢力家の反對があつたらしく、大東の村長の態度はすつかりかはつてゐたさうだ。

「反つてその方がいゝ」

彼は例によつてさう思つた。

彼は又、例によつてかう云ふ詩をつくつた。

「私達の祈りはきかれて
土地は與へられた。あなたから。
ありがたう。
あなたの守護なしには土地は得られなかた。
あなたの守護なしには土地は生かせない。
私達はあなたの光榮の爲に働くものだ。

「どうかいつ迄も守護して下さい。」

二二五

間もなく、村の第一種會員は十數名になつた。そしてその人達は城には一軒の家もないので城の川向ふの石河内に一軒家を借りて其處に住んだ。そして彼一家三人は土地の登記のすむまで深水にゐた。

石河内から時々人が來た。そして皆あまり働かない、働く人は四五人切りで、あとはぶらぶらしてゐると心配さうに話した。それで彼が出かけて、皆で相談會をした。そして朝城に出かけたら、夕方まで石河内の方へは歸らないことにぎめ、晝飯と、お八つを石河内から運ぶことにきめた。

その晩、彼は皆と一緒に寢た、八疊に、八人位ゐねた。ともかくぎつしり寢た。夜半に彼は誰かに頭をぶたれた。目がさめると彼の頭と松本廣吉の頭とが向ひあつてゐたが、松本が寢ながら手をのばす度に彼の頭は打たれた。いくらよけようと思つても兩手でやつてくるのでよける餘地がなかつた。彼は知らずにやつてゐることがわかつたので腹は立たなかつた。何度も打たれたので一寸閉口したが、その日の晝、城に渡る時、後藤に舟をあやつつてゐる竹で頭を打たれたことなぞ思ひ出して、何かに讒みを要求されてゐるやうな氣がした。

翌日その話をしたら、皆大わらひで、松本は閉口してゐた。そしてその翌日から半年の間、皆、實によく働き出した。

二二六

彼は今でも村が決心が少しでもゆるみ出せば、すぐ又決心がかたまり、皆しつかりすることを知りすぎてゐる。それで彼はどんな時も安心してゐる、

その後まもなく土地の登記もすみ、彼達一家は三間の家をかりて引越した。そして彼達は下の一間に生活し、木村夫

婦が二階の一間を占領し、玄關の一間はくらくつて住めないので物置きのかはりにした。

時々病人が出來たが、皆朝くらい內に起き働き、そして夕になると勞働もおへてまきをてん〴〵にかついで歸つて來た。

土地の人は皆の働くのにおどろいた、冬こんなに働くのだから、夏はどんなに働くだらうと思つた。

二二七

その後のことは今くはしく書かうとは思はない。半年後に今迄の村にとつての最初の最大のごた〱が起り、木村夫婦や西島、後藤達五人程出た。西島はその後一度村に歸つて一年あまり勞働がゝりをしてゐたが、今は又東京にゐる。後藤は今でも村のためを實に思つてゐる。木村と彼とは友情をすつかりとりもどしてゐる。

しかしその後は大したことは起らずにすんだ。その最大のごた〱も大したことではなかつた。金の方ではそれから一年程あとに一番心配な時が來たが、大阪の茶谷君、久米君、京都の內藤君、神戸の金子君、直木君達がゐたので無事にすぎた。その後は村木さんと云ふいゝ會計が出來て無事に來た。村を出た人々はいろ〱のことを云ふ人もゐるが、そんなに多くの又大きい缺點や、病所をいれても、なほ悠々と生長してゐる村は大木に比してもいゝであらう。小さい木だつたらすぐ枯れるはずの、蟲がたかり、缺點があるにしろ、村の次第に生長してゐる事實は否定は出來ない。

村をつぶしたがつてゐるものがあるが、その男の話が本當なら村はほつておいてもつぶれるはずではないか。處がつぶすために骨折らうとしてゐる熱心さを見ると、さすがに村は中々つぶれないと云ふ事實を內心知つてゐるのであらう。

村のわる口ならいくらでも云へるかも知れない。だが村のいゝ處が、その人達に本當にわかつてゐるのかね。わるい所だけ切り見えないのではないかね。

又彼の惡口を現在的に云はうと思へばいくらでもあるかも知れない。だが彼のもついゝ所は本當にわかつてゐるのかね。

そんなものはないと其の男は云ふであらう。自分は今それについて何事も云ひたくない。今迄かいた所で彼がどんな人間か大體わかつたらうと思ふ。

彼は實に仕合せな男である。彼は實によき友達を澤山もつてゐる。又多くの人から心から信じられ又愛されてゐる。彼はそのことを自分に値ひしないと思ふだけな程感謝してゐる。勿論彼にも敵はあり、憎んでゐるものはあらう。彼はその點で自分もいつのまにか、大きな人間になつたものだな――と思はないわけにゆかない。人間の大きさはその敵によつてわかる。しかし彼はまだあまりに小さい、低腦者の敵切りもたないことを恥ぢねばならないかも知れない。

彼の特色は一番何處に生てゐるか。それは彼が運命から與へられたものを生かす生かし方にある。彼はキヤケゴールドのやうに「あれか、これか」の主義者でもなく、イプセンのブランドのやうに「すべてか皆無か」と云ふ主義者でもない。彼は運命から與へられたものは、出來るだけとり入れようと云ふ主義だ。「どつちでもいゝ」。「それもいゝ」。「何でも御座れ」と云ふ主義である。この主義は危險であり、平凡であるやうに見えるかも知れない。しかし之が彼に云はすと人類の主義である。支那人の所謂、大山、大河の主義である。何ものゝ內にでも役に立つものはとらうと云ふ主義だ。どつちへころんでも損はしないと云ふ主義である。運命から與へられたものはすべて歡迎し、そしてそれを自己の精神によつて生かさうと云ふ主義である。たゞ彼は他人の運命と、意志と、生命を尊敬する。そして自分の心の內にあふ

れてくる生命力をしなびさすものを恐れる。しかし他人を不幸にせず、自己の生命を豊富にしてくれるもの、人間の心を豐かにするものはすべて歡迎する。

彼は他の人と協力することをよろこぶが、そのために自分の生命、仕事、感じ、意志を曲げやうとは思はない。

彼は自己の獨立性を傷つけるものをよろこばない。それだけ他人の獨立性を傷つけることを恐れる。獨立した同志として愛しあひ、又助けあふことはよろこぶ。だが他人を自己の意志通りにまけようとするもの、又人間の生命をある主義のなかに押し込まうとするものをよろこばない。

彼は近頃、日記にこんなことをかいてゐる。

『俺は聖人君子では元よりない。
精神上の醫者でもない、
又醫者にならうとも思はない
俺は一個の人間
他人を不幸にせずにすべての人が自己の生命を本當に生かせることを望む人間。
自分の生命を何處までも生かしたく思ふ故に、
他人の生命も何處までも生かしたく思ふ人間。
個人々々に托された生命がすべて生きられ。
部分も全部も生きられることを望む人間。
たゞそれだけである。自分の力は弱いことは恥づべきことであるが。

自分の望みはまちがひはない。
そして自分のその望みに向ふ道も亦
まちがひでないことを確く信じる
一個の人間である」

「あの人を見よ
何んでも自分に與へられたものは
すべて生かせると思つてゐる
あの人を見よ。

生かし損ふか、
うまく生かしおほせるか
それをたのしみに
あの人を見よ。

あの人は
倒れかけても

起きることが名人と自稱してゐる。
あの人を見よ。

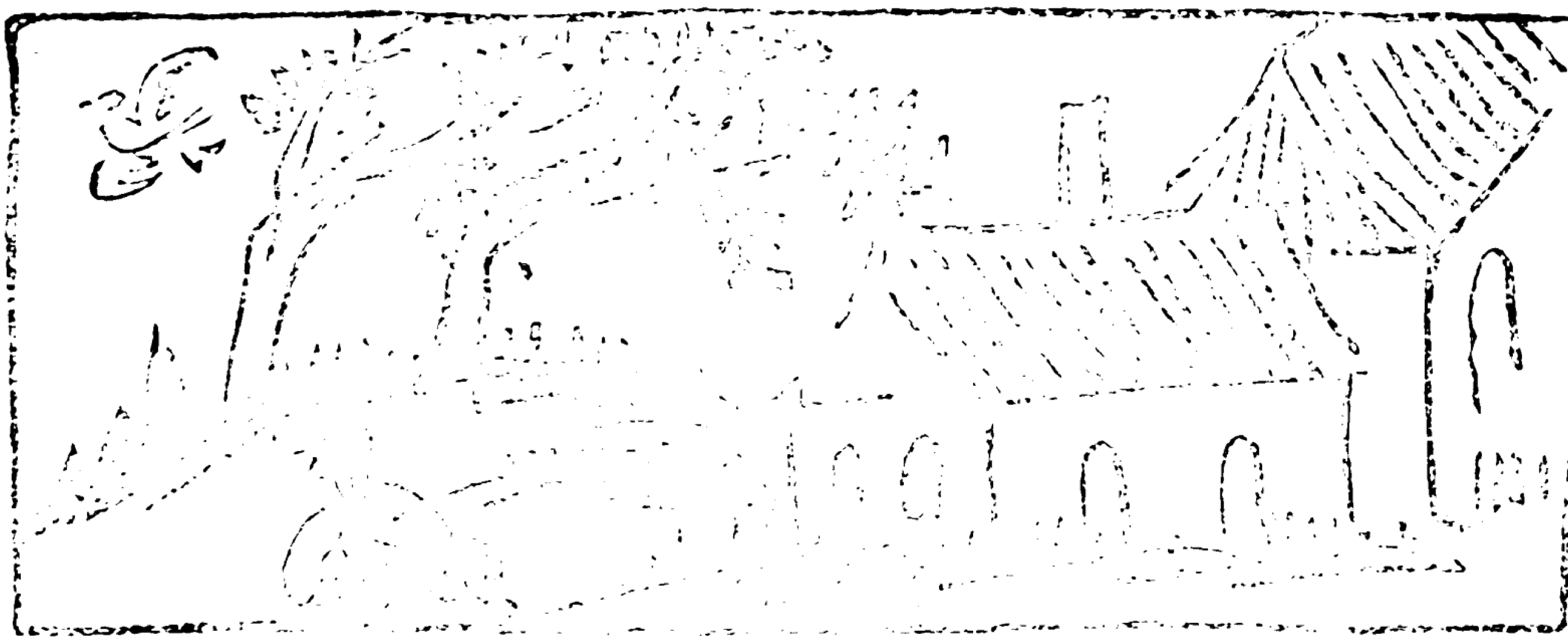
倒れたら笑つてやれ。
起きたら感心してやれ。
何處までゆけるか
あの人を見よ」

二二八

彼はつくられたまゝにすなほに生きたがつてゐる。又自分が運命に守護されてゐると思つてゐる。

彼は小高き所に立ちどまつてあとからくる若者達に挨拶をする。

遠大な志をもち
思慮ぶかくして
鐵の如き意志を有し
しかも快活に、ほがらかな心をもつ
新しく生れた種族よ。
自分は君達のくるのを待つてゐた。
祝福をおくる」　　(丁)(二三、八、三一)



椿

里見弴

三十を越した独身の女が、洋紅の覆ひを深々とかぶつた電燈のもとで、床の間の方を枕にして、左下に、ねながら講談雑誌を読んでゐた。まるで風のない寒い晩だつた。まだ十二時は打つまいと思はれるのに、いつの間にかすつかり人通りが杜絶へて了つて、もの音のなくなつたことが、鋭く耳につきだした。頁をめくる序に、ちよいと目をやると、五寸ほど離して並べてとつた寝床には、姪にあたる二十歳の娘が、これは右を下に、つまり向ひ合せに寝かた眼鼻の顔から上だけくつきりと友禅縮緬の掛襟をぬいて、大へんな美人に見える。珍しさうに、枕はちツと嵌めてゐた。

「まずまえしねえ」

と独語つて、一緒に笑ひだしたい気持だつたが。娘はまるで造りもの〻やうに、寝息さへ聞かせなかつた。ひとりで、聲を立てずに笑つて、ほんのちよいと身動きをすると、引越のとき表装をさせたばかりの襖紙が微に鳴つて、夜着の下からふわりとあつたかい風が、頸や頬へ流れかゝつた。

それからまた暫くは、小説の筋をたどるよりほか、なんにも思はなかつた。生憎、ちつと

も眠くなつて來なかつた。

ブウー、と短く、どこか遠くで汽笛が鳴つた。それで、あんまり靜なのがちよいと氣になつた。今夜だけに限られた靜さのやうな氣がしだした。女中を起して、寢床をもつてあがらせ、今夜はうちぢうみんな揃つて、二階にねようかしら、とも思つてみたが、起きて行くのが面倒なので、そのまゝ讀みつゞけた。そのうち、男女關係のかなりきはどいことを書いたところへ來たけれども、なんともなかつた。引き續きに思ひ出されるやうな男などもなかつた。なんにも思はずに讀み耽つた……。

バサツ。

すぐ枕もとだつた。あともさきもなしに、たゞそのもの音ひとつきりだつた。枕の上に何か落ちたのに違ひないが、何であるか、顏をあけて見る氣にはなれなかつた。左の片手に持つてゐた雜誌を、そうツと布團の上へ置き、手先を引つ込めて、胸のところで握り合せた。左の冷たさが、右の掌へ滲みた……。

見ると、姪が、薄ウく眼をあいて、ぢツとこちへ瞳を据えてゐる……。

ギヨツとした。

「なによ!」

跳ね起きて、「なによ、節ちやん!」

「いやアー!」

夜着ごと飛びついて來て、膝へ面をふせた。

「なんですつたら!」

「なんなの？」

そうツと顔をあけかけた。

「知らないわ！」

膝の重みをはね返して置いて、躊躇はず枕もとを見た。感じられたよりは一二尺遠く、床の備後表の上に、眞ッ赤な大きな椿が一輪お椀の盃でもふせたやうに、ぽつくりと散つてゐた。前にゐた家の庭に、眞盛りを見殘して來るのが惜まれて、差配に頼んで、澤山剪つて貰つて來たのを、青磁の瓶に生けて飾つた、――それがもう四日あとのことになる……。

「いやだわ、節ちやん」

それが、まあよかつた、と云ふ調子に落ついてゐたので、姪の娘も起き返つた。

「なアに？」

「なによ、あんたこそ！」

「だつて姉さんが……」

「あたしどうもしやしないわ」

「あら、きやツて云つたぢアないの！」

「だつてあんたが薄目なんぞつかつてこつちを見てるからさ」

「あら、それより前きに姉さんが、可怕さうな顔をして、本讀むのよして、布團のなかに手を引つ込めたぢアないの

「まア、見てたの？」

「あたし、泥棒でもはいつてるのかと思つたのよ」
「馬鹿ねえ、どうして目を覺したの？」
「姉さんが呼んだんぢアないの？」
「いやよ、呼ぶもんですかね」
「あら、ほんとに呼ばない？」
「知らないことよ！」
「あらア？　ぢアあたし寢惚たのかしら」
「いゝえ、椿が散つたのよ」
「いやア？」
と、いきなりしがみついて、「いやよ〳〵、おどかしちアいやよ！」
「あら、びつくりするわよ！」
「だつて姉さんがそんなことを云つて……」
「おどかすんぢアないわ。見てごらんなさいな、そこに……」
「いや〳〵いや！　いやよ！」
「馬鹿ねえ、床の間に生けといた椿の花が散つたのよ。その音であんたが目を覺したんぢアないの！」
「あら、さうウ？」
やうやく顏をはなして、可怕々々叔母の肩ごしに、床の間の方を窺き込んだ。「まア、いやだわ、眞ッ赤なのね……」

「そんなこと知らないわ、赤いんだつて白いんだつて、散る時が來れア散るんでせうさ。眞ツ赤ならどうだつて云ふのよ」

「なんだか、氣味が惡いわ」

「ぢア、持つてつて、捨てていらつしやいな」

「いやよ、姉さん捨て來て頂戴よ」

「構はないわ、ほつときませうよ」

「でも、なんだか血がたれてるやうで……」

「およしなさいつてば！」

と美しい眉根に八の字をよせて、本氣になつて窘めたが、「知らない、もうわたしねちまうわ」

いつかこちらの布團の上へ來てゐた姪を突きのけて、ころりと横になり、すばやく夜着を額の上までひつかぶつて了つた。

「あら、姉さんづるいわ！」

「突き飛ばされた力をそのまゝ、これも布團へ轉げ込んで、頭から夜着にくるまつて、ぢッと息を殺し、耳をすましてゐた。

しいんとした。

暫くさうしてゐたが、息苦しつくつて耐らなくなつて來て、姪が、そうつと顔を出して見ると、いつの間にか叔母は普段のとほり肩をしつかりと包んで、こちら向きに、靜にねてゐた。(まアいやな姉さん！)と思ひながら、左下に寢返

つた。と、部屋の隅の暗さに、電燈の覆ひの紅が滲んで、藤紫の隈となつて、しじゆう見馴れた清方の元祿美人が、屛風のなかで死相を現はしてゐる……。

「あらいやだ」

思はず呟いて、すぐまたくるりと向き返へる鼻のさきで、だしぬけに叔母が、もうとても耐らない、と云ふ風に、ぷツと噴飯すと、いつも中々笑はない人に似げなく、華美な友染の夜着を鼻の上まで急いで引き上げ、肩から腰へかけて大波を搖らせながら、目をつぶつて、大笑ひに笑ひぬく、——ちよいと始の瞬間こそ面喰つたが、すぐにその可笑しい心持が、鏡にものゝ映るが如くに、姪の胸へもぴたりと來た。で、これも、ひとたまりもなく笑ひだした。笑ふ、笑ふなんにも云はずに、たゞもうくツくと笑ひ轉げる……。それが、しんかんと靜つた眞夜中だけに、——從つて大聲がたてられないだけに、なほのこと可笑かつた。可笑しくつて、可笑しくつて、思へば〳〵可笑しくつて、どうにもならなく可笑しかつた。……。

改造に當面しつつ

○

政党内閣で斷行出來なかつた普選が軍閥の巨頭を首相とする内閣で斷行さるるとは皮肉の骨頂だ。しかしそれは善いことだ、國民は擧つて普選の遂行に全力を傾注すべきだ。政治的色盲を總裁と仰ぐ政友會も自滅の日が迫まつて來たやうだ。特權階級の政治より一般民衆への第一階段たる普選案の爲めには議會の解散も辭すべきではなかろう。

○

災害のあまりに巨大であつたのには胸がつまるが、無辜の人々の殺害されしもの頻々續出するには息がつまる思ひがする。純卒なる日本人が深省一番する處だ。

○

賀川豊彦氏は新に本所の燒跡にバラツクを構へて罹災民諸君と帝都の恢興に當ることになつた。末弘嚴太郎氏も本所方面に活躍するそうだからなか〳〵面白い場面を見せることだろう。我々は此際兩君及鈴木文治君の健闘を祈るものだ。

○

ます。規模の雄大、調査の的確、記事の權威は類書に一頭地を拔いて眞に千古への好記念です地震國を象徴し、一大天災を記念し、併せる將來の災厄を未前に防止する意味で一本を備へ付けらるることを切望します。

○

アインスタイン全集四卷は必ず十一月中に配本のつもりです。譯者の關係で三卷と發行の位置を轉倒しましたが、三卷も不日譯者の手を離れて印刷へ廻らうとしてゐます。どうか石原博士その他の苦衷を御同情あつて遲延した罪をお許し下さい。博士が譯文の精確を期する爲にどれ丈け苦心されてゐるかは全く意料も及ばぬほどであります。

○

一般雜誌は震害の爲めに大抵十二月號を休刊といたしますが本誌は斷じて休刊しませぬ。政治的にも、社會的にも此場合一ヶ月休刊するに忍びませぬ。總ての點に尤も緊張味を見せて讀者にお目にかかります。大震災號は發賣當日賣切れとなりましたが、更らに數萬の再版を發行して讀者の願望に酬ひました。本社は十月十五日舊社の跡にバラツクを構へて引越しました。

阿部次郎氏は十月二十一日世界の旅を了へて歸朝。これで靑葉山下にも一つの文學世界が新

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	増大號共郵稅不要
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	増大號共郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は壹部につき郵稅金拾錢を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割増の事

▲御拂込は振替によらるゝが最も便利とす

大正拾貳年十月廿日印刷納本
大正拾貳年拾一月一日發行
(定價壹圓)
編輯兼發行人 印刷人　東京芝區愛宕下町一ノ一　平田貫一郎
印刷所　東京牛込區市谷加賀町一ノ一　秀英社
發行所　東京芝區愛宕下一ノ一　改造社
振替長野三二八〇
電話高輪二九七一

文學博士 松本亦太郎著

心理學講話

定價四圓五十錢
送料二十三錢

第十五

社會學、倫理學、美學、[illegible]其他の精神[illegible]の[illegible]を學ばんとする者は心理
學を基礎とす。本書は[illegible]ならずして人間精神の學理的[illegible]、[illegible]
會心理を知ることも出來ない。[illegible]
氏が、新らしき形式の下に[illegible]
興味ある[illegible]、[illegible]になつて[illegible]、本書
は初學者にも。了解出來る[illegible]
價値がある。

東京[illegible]

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正十[illegible]


眉目清秀
クラブタルカン
クラブゼリー
クラブ洗粉
カテイ石鹸
クラブ石鹸
紳士の髭剃に
最新の科學
優秀の技術
齒の爲に一番よい
チューブ入
クラブ煉齒磨
朝と食后に
品質優良のクラブ齒磨をお用るになれば齒は強く美しく齒痛を未發に防ぐことが出來ます

一番書きよい萬年筆

プラトン萬年筆

現代の文化生活から取離すことの出來ぬプラトン萬年筆

色澤鮮美の

プラトンインキ



PLATON INK

萬年筆用
學生用
事務室用

プラトン文具製造株式會社特製　クラブ齒磨本店發賣